ポケモンハンタージュンの冒険

アブソル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモンハンタージュンの冒険

【Ｎコード】
Ｎ００６９Ｈ

【作者名】
アブソル

【あらすじ】
主人公、ジュンは優秀なポケモンハンターである。ジュンは毎日の任務に充実感を感じている。だが、ある任務の最中に事件が起こり・・・？

プロローグ　ポケモンハンター、ジュン登場

プロローグ　ポケモンハンター、ジュン登場
暗い洞窟の中、少年はシャワーズを引き連れて立っていた。壁のそばではヒポポタスがおびえている。
「シャワーズ、ハイドロポンプ」少年がそういうとシャワーズは激流をヒポポタスに飛ばした。
「ヒポポ・・」ヒポポタスはふらふらとよろけるとバタッと倒れてしまった。
「少しやり過ぎちゃったかな・・・まあいいや。回復してから、依頼者に届ければいいことだし」少年はそう呟くとポケモンハンターだけが持つハンターボールを投げた。このボールは通常のモンスターボールより捕まえやすく、ボールに入ったポケモンを自動回復してくれるのだ。依頼者に渡す時に商品に傷が付いていると困るからである。
「さあ、ターゲットの捕獲も終わったことだし・・・ボスに連絡しなくちゃね」

プルルルル・・・電話音が響きわたる。
「ボス。ターゲットの捕獲に成功しました。今から帰還します」
「よくやってくれた。ジュン。色違いのヒポポタス捕獲成功の知らせはこちらから依頼者に連絡しておく」
「ありがとうございます。ボス」
「それはそうと、お前が今いるのは２１４番道路の近くだったな」
「え、ええ。そうです」
「そうか・・・。ジュン、帰還する前に追加命令だ。２１４番道路の近くで、私たちの組織のメンバー登録をしているポケモンハンターＮＯ．１５と、国際警察と思われるトレーナーが交戦中だ。ポケモンハンターＮＯ．１５と協力して国際警察のトレーナーを倒せ。

そのトレーナーが珍しいもしくは強力なポケモンを持っていた場合はそれを捕獲せよ」

『国際警察か・・・めんどうだな』と本心では思ったがボスの命令なら仕方ない。

「わかりました」

２１４道路。近くでヒポポタスが出現することを除いては何の変哲もない普通の道。

だが、道の横の林の中では壮絶なバトルが繰り広げられていた。

「ムクホーク。ブレイブバード！」と少年が叫んだ。胸には国際警察の証である、星印の付いたバッジが輝いている。

「ライチュウ。十万ボルトで迎撃するんだ」こちらの少年も大声で叫んだ。顔を半分以上覆う特殊ゴーグルをつけている、ポケモンハンターだ。タイプ的にはライチュウが有利だが、なぜかムクホークのほうが押している。

「まったく。ユウタは何やってるんだよ。・・・ボスの命令だし、ここは僕が行くしかないな。それにしてもあのムクバード強いな・・。チャンスがあったら捕獲しよう」

ホントはトレーナーからポケモンを奪うのはあまり好きじゃないんだけど・・・ボスの命令だしね。まあできればでいいかな。

ジュンはモンスターボールを取り出すと林の中に入って行った・・・。

第一話　ジュン&ユウタVS国際警察（前書き）

第一話です。短いのは御愛嬌。次からは長いのを書きます（たぶん）

第一話　ジュン&ユウタVS国際警察

第一話　ジュン&ユウタVS国際警察　前編

「ユウタ！」とジュンは呼んでみた。

ユウタと呼ばれた少年はビックリして振り向いた。

「ジュンじゃねえか。どうしたんだよ」

「キミを助けるようにとのボスからの命令でね。ユウタ、僕も協力するよ」

「はっ。お前の助けなんかいらねえよ。この国際警察は俺の獲物だ。邪魔すんな」

「その割には・・・キミのライチュウやられてるよ」

「な・・・これはだな・・」

「キミのポケモンハンターとしてのランキングは下の方だからね・・。当然かも」

「そ・・それを言うなぁー！」

「おいジュンって言ったな。お前もポケモンハンターか」国際警察の少年が尋ねた。

「そうだよ」

「なら・・・お前も逮捕する。いけっ！ガブリアス」

ガブリアスか・・ただでさえやられてるライチュウにガブリアスは最悪だな。

ならば・・・。

ジュンは腰のボールホルダーに手に持っていたシャワーズのボールをなおし、ほかのボールを取り出した。

「いけっ！グレイシア」

これならムクホークとガブリアスの二匹に大ダメージを与えられる

「くそ・・氷タイプか。だが攻撃あるのみだ！ガブリアスはグレイシアに炎の牙を、ムクホークはライチュウにトンボ返りだ！」

「グレイシア、守るを使うんだ！」グレイシアは守るを使って炎の

牙を防御した。
「読んでいたさ。ガブリアス、そのままストーンエッジだ」
まずい・・・岩タイプの高威力技だ。
「グレイシア！避けるんだ！」しかし、ガブリアスのストーンエッジはグレイシアに直撃した。
「グレイシア！」
ガブリアスがグレイシアに大ダメージを与えたちょうどその時、ライチュウの雷がムクホークに直撃した。トンボ返りを受ける前にユウタがライチュウに素早く指示を出していたのだ。
ムクホークは倒れてしまった。
「よくやってくれた。戻れ。ムクホーク」少年はムクホークを素早く戻すと他のボールを取り出した。
「いけっ！ルカリオ」

第二話　ジュン&

第二話　ジュン&ユウタVS国際警察　後編

第ニ話　ジュン&ユウタVS国際警察　後編
「ルカリオ、グレイシアに向かって波動弾！ガブリアスはライチュウにドラゴンクロー！」
「グレイシア、守る！」ルカリオの波動弾は守る体制に入ったグレイシアに防がれた。
しかし、ガブリアスのドラゴンクローがライチュウに迫る！
「今だ！ライチュウ、めざめるパワー氷！」
え・・めざめるパワー？あれはポケモンによって威力と技の種類が異なる技・・・。
ユウタ、キミはそんな切り札を隠し持っていたのか。
ライチュウのめざめるパワー氷はガブリアスに直撃した。効果は抜群だ。
「やったか？」
「残念だったな。俺のガブリアスは頑丈なんだよ」
めざめるパワー氷の直撃を受けたにも関わらず、ガブリアスは平然と立っている。
「くそ・・あのガブリアス、化け物かよ」ユウタが悔しそうに呟く。
「でも、ガブリアスに氷タイプの技が有効な事実に変わりはない」
だけど、普通に攻撃するだけじゃルカリオの波動弾を避けきれない。
しかも、グレイシアはさっき受けたストーンエッジで大幅なダメージを受けている。ならば・・・・。
「ユウタ、これからはキミのライチュウにもダメージが蓄積することを計算に入れて戦ってね」
「ジュン・・何するつもりだ？」
「天候を変えるのさ。グレイシアには晴天は似合わない・・・。雪景色こそふさわしい。グレイシア、霰を使うんだ」
ジュンがそう指示した瞬間、霰が降り始めた。

「くそ、霰か、まずいな。ガブリアス！ルカリオ！さっさとケリをつけるぞ」
「霰発動中のグレイシアの強さをなめないでね。グレイシア！ガブリアスに吹雪！」
グレイシアの吹雪がガブリアスを襲う！
「く、ガブリアス空へ逃げろ」ガブリアスは空へ逃げた・・が、吹雪はガブリアスを追ってくる。
「天候が霰の時、吹雪は絶対に当たる攻撃になるのさ」
「やばい・・・。このままじゃガブリアスがやられちまう。ルカリオ、グレイシアに攻撃だ。波動弾！」ルカリオは波動弾を放った。
「させるかよ。ライチュウ！十万ボルトで波動弾を迎撃だ」
波動弾は十万ボルトにより相殺された。
そして・・・。
「ガブリアス！」ガブリアスは追ってくる吹雪から逃れることができず攻撃を受け、地面に落ちた。完全に気を失っている。
「さて、どうする。キミのムクバードとガブリアスは倒れた。見た所、キミの手持ちのポケモンは三匹のみ。ルカリオ一体で霰により強化されたグレイシアとユウタのライチュウに勝てるかな？」
「・・・お前たちは俺が絶対に捕まえてやる。必ずだ！戻れ、ルカリオ」少年はルカリオをモンスターボールにしまうと、林から急いで出て行った。

第二話　ジュン&

第三話　新たな任務（前書き）

ユウタ：今回は俺がいっぱい喋るぜ！

第三話　新たな任務

第三話　新たな任務
「おい、ジュン」ユウタが電車の窓の縁に肘を乗せ、外を見ながら聞いた。
「何？」
「あの国際警察の奴のポケモン、強かっただろ？なんで捕獲しなかったんだよ。ボスの命令だろ」
「まあね。確かに強かったし、よく育てられてたよ。商品としての価値は十分だった・・けど、僕は人のポケモンを奪うのはあまり好きじゃないんだ」
「まあ、それは言えるな」
今、僕たちは組織の本拠地に帰ってる所。あ、ポケモンハンター専用の特殊ゴーグルとか付けてないからご安心を。あんなの付けてたら一発で通報されちゃうからね。
「ほーら。ライチュウ、オボンの実だぞ。しっかり食えよ」ユウタは優しい笑顔でライチュウにオボンの実を食べさせていた。
「うまいか？」
『ライライ』
「そーか。そりゃ良かった。もっと欲しかったら言えよ。まだまだいっぱいあるからな」
「所でさ。さっきの話なんだが」ユウタがライチュウの頭をなでながら聞いてきた。
「何、ユウタ」
「いや・・・奪われる側に立って考えてみるとさ、俺もライチュウを盗られたらやっぱ悲しいし、腹立つよな・・・。お前はどうだ？」
「そりゃ、僕だって悲しいさ」
「だろ？でも考えてみれば俺たちのやってることってそういう事だろ。珍しいポケモンを見つけ出しては、捕獲し、売り飛ばす。それ

がたとえ他人のポケモンであってもだ。まあ、俺は他人から直接奪ったことはないが・・・」ユウタの言葉は歯切れが悪い。
「ユウタ・・・あの国際警察から何か言われたの？」
「言われたって言うか・・・話したんだよ。バトルしながらだったが・・・。それで、どんなふうに俺たちポケモンハンターが世間で思われているかって事実を突き付けられたって感じでさ」
「でも、それを覚悟の上でこの職に就いたんでしょ」
「俺は単に金が稼げるって理由だけだからな・・・覚悟とかは別にしてなかったな」
「まあ、ユウタ。あまり気にしないことだよ。気にしだしたらポケモンハンターなんてやってられないよ」
「そうなんだけどな」
その時、車内放送が流れた。どうやらもうすぐ着くようだ。
「ユウタ、荷物をまとめて。もうすぐ着くから」
「分かってる」ユウタはそう言うとライチュウをモンスターボールに戻した。
組織の本拠地は今降りた駅から、歩いて３０分のところにある。
僕たちの組織は表向きはポケモン専用の薬品を研究・開発し、それを販売している。
高品質なポケモン専用の傷薬や能力増強剤で有名だ。
「着いたようだね」
「ああ」
僕たちの目の前にそびえる巨大な建物。看板には大きな字でこう書いてある。
Ｐ・Ｈ・Ｃと。
Ｐ・Ｈ・Ｃは何の略か。そう聞くと普通の人はこう言う反応をするだろう。「え？Ｐ・Ｈ・Ｃ？もちろんポケモン・ヒーリング・カンパニーって言う大企業の略でしょう」
しかし、それは仮の名前。本当の名は・・・。
『ポケモン・ハンターズ・カンパニー』

ダサい？まあ、確かに僕だってそう思ったさ。第一安易すぎる。ボスのネーミングセンスを疑ったよ。
でも、ロケット団よりはましだと思わない？ロケット団って（笑）。間違えてロケット弾と書きそうじゃないか。まあ、アクア団やマグマ団もどうかと思うけど、この間十代の子供に壊滅に追い込まれたギンガ団もかなりダサいね。
それに比べれば、ポケモン・ハンターズ・カンパニーは結構まともだね。やってることはまともじゃないけど。
「ジュン、行くぞ。ボスが待ってる」僕がくだらないことを考えているうちにユウタはせかせかと歩きだしていた。
『ポケモン・ヒーリング・カンパニー』もとい『ポケモン・ハンターズ・カンパニー』には当然多くの来客が来る。
だから、建物の中を見ただけではポケモン・ハンター達の会社なんて１００％分からない造りになっている。
この組織の本当の姿を見られるのはポケモン・ハンターとその関係者だけ。
僕たちは建物に入り、目の前の受付コーナーに行った。
「こんにちは。どのような御用件でしょう？」受付係のお姉さんが笑顔で言ってくる。
「ＮＯ．４です」これは僕だ。
「ＮＯ．１５だ。」
「分かりました。ボスがお待ちです。念のためにＩＤコード番号をそこにある入力装置にご入力ください」
僕たちは自分たちが『ポケモン・ハンターズ・カンパニー』公認のハンターである証のＩＤコードを入力した。
受付コーナーを去り、エレベーターでボスのいる階へ向かう。
「ボスの特に行くとき、結構緊張するよな」ユウタがエレベーター内で話しかけてきた。
「まあね」適当に答えておく。
ポーンと音がした。エレベーターが目的の階に着いたのだ。

「じゃ、行きますか。我らがボスのところにさ」ユウタがニヤッと笑いながら言った。
ボスの部屋の中に入る。
「ＮＯ．４とＮＯ．１５。ただいま帰還しました」
「ご苦労だったな。さっそくで悪いんだが商品を見せて欲しい」
僕はボールからヒポポタスを出した。
「なるほど・・・これなら依頼者も満足するだろう。ＮＯ．１５、そちらの商品も見せてくれ」
ユウタはハンターボールからラプラスを出した。
「こちらも高品質だな。分かった。ＮＯ．４、ＮＯ．１５ポケモンを戻してくれ」
僕達はポケモンを戻した。
「よし、それらの商品はこちらで預からせてもらう。そこにボールを置いてくれ。それと・・・ＮＯ．１５席をはずしてくれないか？」
「分かりました」ユウタはそう言うと、ラプラスの入ったハンターボールを机に置いて部屋から出て行った。
「さて、ＮＯ．４。ＮＯ．１５に席をはずしてもらったのは言うまでもない。キミにＳランク任務だ。それも極秘のな」
「それで、任務内容は？」
「幻のポケモン、ミュウの捕獲だ」
「ミュウ、ですか！」ちょっと無茶言わないでよ・・。
「ああ」
「しかし・・。あのポケモンは今どこにいるのかも分からないんですよ。姿を見たって言う報告もごくわずかですし・・・。その任務、僕には無理です」
「まあ、待ちたまえ。情報が入っているんだ。満月島は知っているね」
「ええ、クレセリアがいたところですね」
「そうだ。そこにミュウがいるらしい。どうやらクレセリアが居なくなったのでミュウがあの島を守っているようなんだ」

「では僕一人ではなく大勢のハンターを集める必要がありますね」
「いや、大勢で捕獲に行っても気づかれるだけだ。ＮＯ．４、君一人で行くんだ。キミ以上のランクのポケモン・ハンターは出払っているからね」
「分かりました。できる限りやってみます」
「期待しているよ」
この時、ジュンはこの任務があの事件を引き起こし、あんな経験をすることになるとは考えてもみなかった。

第三話　新たな任務（後書き）

ジュン：ねえ、作者。何この思わせぶりな展開
作者：ふふ。自分の身に何が起こるか気になってるね
ジュン：もちろん。教えてよ
作者：その時になったら分かるよ
ジュン：ケチ！

第四話　満月島へ（前書き）

ジュン：今回は僕がポケモンハンターらしい活躍をするよ！応援よろしく
ユウタ：俺は？
ジュン：あ、ユウタは出てこないよ。
ユウタ：何ィ～

第四話　満月島へ

第４話　満月島へ

ミュウ。古くからその存在は知られているものの、人がそのポケモンを見かけることはまれである。

ある説によるとミュウはこの世に存在するほぼあらゆる技を習得できるらしいが定かではない。

ミュウについての情報で確かなのはエスパータイプであること、そして、ミュウの遺伝子を利用して造られたミュウツーと言うポケモンが存在する、ということのみである。

「ふー」僕は読んでいる本、『幻のポケモンについて』を閉じた。

ここは組織の建物の近くにある図書館。ここは本の種類が多く、任務につく前に下調べをする僕にとってはかなりありがたいところだ。

僕が調べていたのはミュウと満月島について。調べた結果分かったことは、ミュウはエスパータイプであるということ（常識）そして、ミュウツーという兄弟みたいなポケモンが存在すること（これも常識）だけだった。

満月島については、島の付近には気性の荒い野生のポケモンがごろごろいるため波乗りや船では近づけないことが分かった。

「海からいけないなら空から行くまでさ」僕は図書館の外に出ると、腰からモンスターボールを取り出した。

「いけッ、ボーマンダ！」

ボールから出てきたのは大きなドラゴンタイプのポケモン、ボーマンダである。

「ボーマンダ。満月島まで頼むよ。ここからかなり遠いけど・・・」

僕はボーマンダに飛び乗ると満月島までの道のりを大まかに教えた。

「いけるかい？」

ボーマンダはコクリとうなずくとジュンを乗せて飛び立った。

見えてきた。あれが満月島か・・・。結構小さいな。
「ボーマンダ。少し低空飛行してくれる？」
あまり高く飛ぶとミュウに気づかれるからね。
ボーマンダは少し高度を落とした。
そして・・・。
「やっと着いたね。満月島に。ありがとう、ボーマンダ。この任務が終わったらたらふくごちそうするよ」
僕はそう言うとボーマンダから降りて、モンスターボールに戻した。
「さてと、ミュウ捕獲を始めますか」
木々がうっそうと茂っている。そこをかき分けて進んでいくと、島の中心部に着いた。
ジュンははっと息をのんだ。
そこにはピンク色のポケモンがこちらに背を向けて浮かんでいたからだ。
あれが、ミュウ。その存在こそ太古の昔から知られ、知らない者はいないといわれるほどの知名度をほこりながら、決して人間に捕獲されたことのないポケモンであり、幻の存在。
僕はいま大変な光景を目にしているんじゃないだろうか・・・こんな近くでミュウを目視したのは僕が初めてなんじゃ・・・。
いや、感心している場合じゃない。ジュンは手に付けたポケモン捕獲用石化ビーム装置を見つめた。これはミュウ捕獲に出かける直前、組織から支給された機械。なんでもここから発射されるビームを浴びせると、対象物を一時的に石化できるらしい。
ジュンはビーム発射口をミュウに向けた。
ミュウ。キミを捕獲させてもらうよ、と心の中で思いながら。
そして、トリガーを引いた。
バシュ！
一筋のビームがミュウに向かって放たれ、ミュウに当たった。
石像と化してゴロンと地面に転がるミュウ。

「やった。今まで誰も成しえなかったことを僕はしたんだ・・・」
ジュンはハンターボールを取り出した。
これで、ミッション完了。意外と簡単だったね。そう思い、ボールを石化しているミュウに投げた。
パキン。と何かが割れる音がした。
何だろ、今の音。
そして、ポトリとジュンの足元に何かが落ちた。
ジュンはいぶかしんで下を見た。
そこにあったのは、真っ二つに割れたハンターボールだった。
「な・・・」
え、どういうこと?ハンターボールが真っ二つに・・。なぜ?Why?
はは・・。きっとハンターボールが劣化していたんだ。そんな話聞いたことないけど・・・。
いや、そうに違いない!あれは不良品だったんだ!
ジュンは試しにもう一度ハンターボールを投げてみた。
うん。今度のは大丈夫。だって、昨日組織から支給された奴なんだから。
ハンターボールは石化したミュウに接近し―パキンと割れた。空中で。
あれぇ・・・。ちょ、何で?え・・何か空中で割れたんですけど。
当たってすらいないんだけど!
『少年よ。いくら投げても無駄です』
・・・今の声は一体?空耳だ。そうに違いない。だってこの満月島にいる人間は僕だけなんだから。いや、もしかするとお化け?
ジュンは急に怖くなった。
お化けだなんて・・・そんなもの僕は信じないぞ!そりゃ、確かにゴーストタイプのポケモンはいるけど、あれは生きてるし、お化けではないから除外。
やっぱり、空耳だ。絶対!

「はは・・僕、疲れているのかな。空耳を聞くなんて」
『空耳ではありません』
ええー。また聞こえた！
「げ・・幻聴だよ、これは。そうに違いない」
『もう一度言いますが・・・空耳でも幻聴でもありません』
やっぱり・・・お化け？
「あの、声だけじゃ怖いから・・・姿を現してもらえますか」
『私はさっきから君の目の前にいますよ』
まさか・・。僕は前を見た。そこには石化状態にあるミュウがいる・・・はずだった。
「あれ、いない」
『まったく、私が考え事をしているといきなり背後からビームを浴びせられて、石にさせれらたんですよ。不愉快です』とジュンの目の前で浮遊しているミュウが実に不機嫌に言った。
「な、ミュウが喋ってる」
『当たり前です。私はミュウなんですよ。能力よし、ルックスよしの幻のポケモンなんですよ。それぐらい簡単です』
「僕はキミを石化状態にしたのに・・・なぜ動けてる？」
『・・私がビームに当たる直前、自分の体をサイコキネシスでコーティングしました。直接当たらないように体を保護したんです。まあ、石になったふりはしましたが。君がどんな行動に出るか見たかったもので』
「ハンターボールを二つも破壊したのも・・・ミュウ、キミだね」
『ええ、ボールの隙間にサイコキネシスのエネルギーを流し込み、内側からこじ開けました』
「そうか・・」
『ところで君、名前は？』
「僕？名前はジュンだよ」
『そうですか・・・じゃあ、ジュン君。君はこの満月島に何しに来たのですか？まあ、予想はつきますが』

「もちろん、キミの捕獲さ」
『なるほど・・一見したところ君は普通のトレーナーではありませんね。もしや、ポケモンハンターですか？』
「だったら何？」
『・・私と戦いましょう。自身を賭けて』
「は？」意味が分からない。僕はミュウをまじまじと見つめる。
『もし、君が勝てば、私はおとなしく捕まってあげます。しかし、ジュン、君が負ければ―』
そこで止めないでよ。じれったいじゃないか！
『いや、言わないでおきましょう。その時のお楽しみということで』
「言ってよ」
『いやです』何かムカつくんだけどこのポケモン（怒）
『まあ、ヒントぐらいは出してあげましょう』
ミュウはめちゃくちゃ上から目線で言った。
「ヒント？」
『ええ、君はかつて味わったことのない経験をすることになるでしょう』そう言うとミュウは茶目っけたっぷりにウインクした。

第四話　満月島へ（後書き）

作者：第四話完成です。
ミュウ：少し遅いのではないですか？
作者：だって、執筆する時間がないんだもん
ミュウ：ま、許してあげましょう
作者：君さ、なんかエラソーだよね。態度が。
ミュウ：「偉そう」ではなく「偉い」のです。
だって私はミュウなのですから。ポケモンの代表みたいなもんです。
いや、もはやポケモン＝ミュウの図式が出来上がってると言っても過言ではありません。
作者：どっちかと言うと、世間ではポケモン＝ピカチュウなんじゃ・・。
ミュウ：なんですって？ばかな、この私を超す名声の持ち主がいたなんて（驚）
作者：だって、ピカチュウはアニメの主人公の手持ちの中の最高レギュラーポケモンだもん。
ミュウ：く・・こうなれば、アニメの主人公ともどもピカチュウをこの世から消し去ってくれる！
作者：おいおい・・。

第五話　ジュンＶＳミュウ　前編（前書き）

ミュウ「今回は私、ミュウが大活躍です。さあ、読者のみなさんをめくるめくミュウワールドにご案内～！」
作者「君は本当に自己主張が激しいなぁ」

第五話　ジュンＶＳミュウ　前編

第五話　ジュンＶＳミュウ　前編
『さあ、かかってきなさい』ミュウが自信ありげに言った。
ミュウはエスパータイプ・・・ならば。
「いけっアブソル！」

『アブソルですか。セオリー通りですね』

「アブソル、悪の波動！」

アブソルは黒い波動をミュウに放った。

『守る』
ミュウが手をかざすと透き通った壁のようなものが現れ、ミュウを覆った。
悪の波動は透明な壁に防がれてしまった。

「守る、か。厄介だな。アブソル、影分身だ」

『く、どれが本体ですかね・・』ミュウの周りをアブソルと幻影たちが取り囲む。

「今だ。辻斬り！」アブソル達は一斉に飛びかかった。

『守る！』
再びミュウは守るを使い、飛びかかってくるアブソル達の中の一体からの攻撃を防御した。だが・・・。
どうやら先ほど防いだのは幻影からの攻撃だったようだ。アブソル

の辻斬りが決まり、地面に落ちるミュウ。

「やったかな？」

悪タイプの攻撃だから、効果は抜群だ。

しかし・・。

『ふぅ。今のはちょっと痛かったですよ』

ミュウは何事もなかったように立ちあがった。

馬鹿な。物理攻撃が得意なアブソルの辻斬りは相当な威力のはず、ましてエスパータイプのミュウが悪タイプの技を受けたんだよ・・なぜ立てる？

『ふふ、私が立てるのが不思議に思っていますね。まあ、無理ないでしょう。普通に考えるとあり得ないことですから』

『でも、答えは簡単です。私が立てる理由。それは、私が強いからです。そこには、「私が強い」以外のいかなる理屈も存在しません』

「僕のアブソルは、組織内でも屈指の実力をほこるポケモン。そのアブソルの攻撃を受けても平気なんて・・・どれだけ強いんだよ、キミは」

『私の強さをようやく認識したようですね。さて、今度は私から行かせてもらいます』

ミュウはそう言うと、手をアブソルに向けた。

『波動弾！』

ミュウの手からエネルギーが集まり、発射された。
まずい、格闘タイプの高威力技だ。
「アブソル、見切りで回避だ」
アブソルは波動弾を見切って回避した。よし、ここから、悪の波動に繋げれば、ミュウといえども耐えきれないだろう。
「アブソル、悪の波動」
『波動弾！』
アブソルが悪の波動を撃ったのと、ミュウが二発目の波動弾を放ったのは同時だった。
アブソルには波動弾が、ミュウには悪の波動が迫る！
「アブソル、見切り！」アブソルは攻撃を回避しようとしたが、当たってしまった。どうやら、見切りを使うのに失敗したらしい。
「よくやってくれた。戻れ、アブソル」
僕は目を回しているアブソルをボールに戻した。
『今のは、ちょっと危なかったですね』
あの一瞬で守るを発動するとは・・・さすがミュウと言ったところかな
でも、ミュウはアブソルとのバトルで体力を消耗しているはず。後、攻撃が何回か決まれば倒

れてくれる。ここは、ミュウに効率的にダメージを与えれるポケモンを出したほうが得策だな。

『次のポケモンは決まりましたか』

ミュウがオボンの実を食べながら僕に話しかけてきた。

「キミ、何食べてんの？」

『何って・・。オボンの実ですよ』

「そういうことじゃない！なんで、バトル中に回復系の木の実を食べてるんだい！そんなこと、野生ポケモンがするなんて聞いたことない！」

だあー。作戦狂っちゃったじゃないか！ミュウの馬鹿！

『先入観を持つのはいけませんよ。かの有名な哲学者のデカルト先生も言っていたではありませんか「先入観を徹底して疑う事が、より深い認識を得る上で不可欠」と。君は野生ポケモンが体力回復する木の実を食べないという考えに縛られていたのです。そんなことでは私には勝てません』

「知識をひけらかされるのと、お説教されるのは僕が最も嫌いなことなんだけど（怒）」

さて、どうする。ここは切り札のボーマンダで一気に攻めるか・・。いや、まだミュウは波動弾と守るしか使っていない。ここは様子を見る必要がある。でも、グレイシアとミュウの波動弾との相性は最悪・・。シャワーズで行くか。

「いけっシャワーズ！」

第五話　ジュンＶＳミュウ　前編（後書き）

ジュン「アブソルやられちゃった」

作者「だって、あれで決着ついたらおもしろくないもん」

ジュン「でも、次は負けないよ。絶対、ミュウ捕獲を成功させてやる！」

作者「できるかな。君に」

ジュン「何その意味深な言い方」

作者「なんでもないよ」

第六話ジュンVSミュウ　後編　そして、すべての始まり　（前書き）

ジュン「なに、この物々しいタイトル」

作者「いいでしょ。ちょっと気に入ってるんだ」

ジュン「へえ・・」

第六話ジュンVSミュウ　後編　そして、すべての始まり

ジュンVSミュウ　後編　そして、すべての始まり
『シャワーズですか・・・』

「シャワーズ。ハイドロポンプ！」

僕が指示した瞬間、シャワーズがミュウに激流を飛ばした。

『高威力技の力押しでは私には勝てません。守る』

ミュウは守るで攻撃を防いだ。ならば。

「シャワーズ、シグナルビーム」

『弱点を突く戦術に切り替えですか。しかし、私には効きません。守る！』

シグナルビームは守るによって防がれた。

でもね、僕の狙いは単に攻撃を当てるだけじゃない。

僕の狙い。それは―。

「シャワーズ。もう一度シグナルビーム！」

「何度やっても、同じです。守る」

しかし、透明の壁はミュウの前に現れなかった。

『しまった』

キミに守るを連発させて、大事な局面で守るを失敗させることさ！

シグナルビームはミュウに直撃した。効果は抜群だ。

『くぅ』

ミュウが苦しそうにうめく。

くそ、まだ倒れないのか。でも、今のダメージはミュウにってかなりの痛手のはずだ。

「シャワーズ。よくやった。あと少しだ」

『どうやら私は君達を少々見くびっていたようですね・・・』

ミュウが静かに言う。よほどシグナルビームが効いたのだろう。少しふらついている。

『これからは全力で行かせてもらいます！』

ミュウがそういった瞬間、周りの空気が張り詰めた。

ミュウの雰囲気が変わった。下を見ると、ジャワーズが後ずさりしている。

なるほど・・。これが幻のポケモン、ミュウの新の力・・。戦う前から分かる。

この緊張感、さっきとは大違いだ。

妙な静けさの中、最初に行動を起こしたのはジュンだった。

「シャワーズ！シグナルビーム」

『波動弾！』

シグナルビームと波動弾はお互いにぶつかりあい、消滅した。

『サイコキネシス』

ミュウが手をかざすと、突然シャワーズの体が浮いた。

「シャワーズ。なんとかして逃げるんだ」

『無駄です。私のサイコキネシスからは逃げられません』

ミュウはそう言うと、シャワーズを地面にたたきつけた。

『波動弾！』

ミュウは倒れているシャワーズに向かって、波動弾を放った。

僕が指示する暇もなく、シャワーズは波動弾をくらい気を失った。

まさか・・シャワーズまでやられるなんてね。

ミュウの強さは理解していたつもりだったけど、どうやら僕の想像のはるか上を行くらしい。

でも、いくらミュウと言えどもアブソル、シャワーズとの連戦でだいぶ疲れているはず。

あと残ってる僕の手持ちはボーマンダとグレイシア。ミュウが使う技で判明しているのは、守る、サイコキネシス、波動弾。後の一つは不明。ここは、ミュウのメイン技の一つの波動弾のダメージを軽減できるボーマンダで行こう。

なにより、ボーマンダは僕の切り札。これで決める！

「いけっボーマンダ！」

『そのボーマンダ。君の手持ちで一番強いですね。オーラでわかります』

「御名答。このボーマンダは負けたことないんだ」

『ではその無敗記録を私がこの手で破壊させていただきます』

「できるかな・・。ボーマンダ、空を飛ぶ！」

ボーマンダは空高く飛び上がった。

『く、太陽の光がまぶしくて見えませんね』

ミュウは目を細めて、空を見上げている。

「一気に降下してシャドークロー！」

ボーマンダはミュウめがけて一気に突撃した。

『守る』

ミュウはシャドークローを防いだ。

「今だ。噛み砕く！」

ボーマンダはミュウにかみつこうとする。

『サイコキネシス』

しかし、近づいたボーマンダをミュウはサイコキネシスで縛る。

『わざわざ、サイコキネシスの射程距離に入ってくるとは。勝ちを急ぎすぎましたねジュン君！』

「そうでもないさ。ボーマンダ、サイコキネシスを振り切れ」

『無駄です。私のサイコキネシスから逃れられれは―』

だが、ミュウの予想に反してボーマンダはサイコキネシスを振り切った。

『な・・・』

ミュウが唖然としている。

「今だ！ボーマンダ、最大出力で流星群！」

ボーマンダが放った無数のエネルギーがミュウに降り注ぐ。

流星群はドラゴンタイプ最強の技。これを至近距離で受ければさすがのミュウもやられてくれるだろう。

煙が立ち上るなか、ジュンは勝利を確信していた。

しかし・・。

『やってくれましたね』

ミュウは肩で息をしながら立ちあがった。

「そんな・・・」

信じられない。ボーマンダの流星群を受けてもなお立ちあがれるなんて・・。

『守るを発動したんですが、防ぎきれませんでしたね。さすが君の切り札、と言ったところでしょうか』

『しかし、これでフィニッシュです。冷凍ビーム！』

まずい、ボーマンダには効果は絶大だ。

「空に飛んで回避するんだ」

ボーマンダは空に飛び、ぎりぎりのところで冷凍ビームを回避した。
良かった。僕がそう思った瞬間。ボーマンダが空から落ちてきた。
完全に気を失っている。

「え・・」

何が起こったんだ・・。ボーマンダは冷凍ビームを回避したはず。
それなのになぜ・・。

『君のボーマンダが空に飛んだ瞬間、もう一度冷凍ビームを放ちました』

僕の疑問に答えるようにミュウが言う。

「そんな。空に飛んだ瞬間を狙ったって・・並みのポケモンの技を出すスピードをはるかに凌駕していないとできないことなんだよ！」

『私は並みのポケモンじゃありませんから』

『さあ、どうします？まだ戦いますか？』

ミュウが僕の顔を覗き込んでくる。

戦えるわけがない・・。確かにあとグレイシアが残ってはいる。でも、ミュウには勝てない。

僕の切り札が敗れれた今、あと何体ポケモンを出しても同じ。

僕は無駄な事をするのは嫌いだ。負けると決まっているバトルをわ

ざわざやる必要はどこにも
無いし、ね。

「分かったよ。ミュウ。僕の負けだ」

『君の最後の手持ちポケモンは使わないのですか？』

「ああ。キミのレベルが僕のポケモンと違いすぎる。三連敗した段階でいやというほど分かったよ」

『ならば・・・君に賭けの代償を払ってもらいますよ』

そう言えば・このバトルに負けたら僕が代償を払うんだったね。でも、何を払うんだろう？

「何を払えばいいのかな・・お金？それともクレジットカード？」

『そんなものはいりません。私はあなたから何も奪いません』

「？」

『私は君にあげるのですよ』

「何言ってるの・・？」

スッとミュウが僕に近づいてきた。

思わず身構える僕。

ミュウはジュンの額に手を当てた。

『今から君は私が上げる“変化”によって幾多の経験をすることでしょう。それを生かすかどうかはジュン君、君次第ですけどね。今度会う時までに、私が与えた“変化”に対する答えとその意味を見つけ出してください。さあ、冒険の始まりです！』

なんだ・・・急に眠くなってきた。

ミュウが僕にくれる“変化”？なんだよ、それ。

僕は強烈な眠気の中でなんとか聞いた。

「一体、キミは僕をどうするんだい・・」

『どうもしませんよ。ただ、“変化”を与えるだけです』

「意味分かんないよ・・」

そう言うと、ジュンはパタリと地面に倒れた。

僕は意識がなくなる直前ミュウのつぶやきをはっきりと聞いた。

『何に変えましょうか・・』

第六話ジュンVSミュウ　後編　そして、すべての始まり　（後書き）

作者「やっと書き終わったよ」

ジュン「結構遅かったね」

作者「ま、ストーリー展開に凝ったからねぇ。それにさぼらず頑張ったし」

ジュン「・・・その割には、バク●ーンの冒険とか、タ●ミストーリーのコメントを考えてる時間が長かったね」

作者「そ・・それは」

ジュン「結局のところ、気分転換ばっかりしていたってことだよね？」

作者「仰せのとおりです」

ジュン「他作品にコメントしてる暇があったら、この小説に対するコメントが増えるようなストーリーを考えるべきじゃないのかい！まったくそんなことしてるからいつまでたっても感想が増えないんだよ！」

作者「すみません」

ジュン「分かったら、とっとと次の話の執筆に移る！」

作者「（ジュン怖ッ）」

第七話　変化（前書き）

ジュン「ずいぶん遅かったね」

作者「だって、学園祭があったし・・」

ジュン「へえ、学園祭・・。何やったの？」

作者「３３分探偵のパロディの劇」

ジュン「で、結果は？」

作者「あんまり、受けなかったみたいで他のクラスに賞を持って行かれちゃった」

ジュン「まあ、あんなカオスな台本ではね・・当然の結果かも」

作者「・・なんで知ってるのさ」

ジュン「さっき、読ませてもらったっから」

作者「いつの間に！」

第七話　変化

第七話　変化

『ジュ・・ン』

誰かの声が聞こえる。聞いた事のない声。しかもよく聞こえない。

『・・ュン。目を・・・してよ』

でも、懐かしい感じだ。

『ジュン。目をさましてよ』

今度ははっきりと聞こえた。

僕はゆっくりと瞼を開けた。

なんだ・・ずいぶん体がだるい。

『あ、ジュンが目を覚ました。良かった～』

僕は声のした方を振り向こうとした。しかし、振り向く前にある違和感を覚えた。

なんだか・・目線の高さが異様に低いような・・。

『ジュン。大丈夫?』とジャワーズが僕を覗き込んできた。

え・・今シャワーズが喋ったような。はは・・気のせい気のせい。
だって、ポケモンが喋れるわけ・・『ジュン。立てる?』ってええー!

ポケモンが喋ってる!

僕はびっくりして飛び上がった。・・比喩じゃなく本当に。

僕の体がふわふわと浮いている。

な、これは一体・・?

僕は自分の体を見渡してみた。灰色の小さい体に長い二本の尾。尻尾の先と額には赤い宝石のようなものが付いている。頭は青い兜のようだ。

確か本で読んだことがある・・この姿は幻のポケモンのアグノムだ。

そんな、馬鹿な。僕がアグノムに・・?しかも、なぜシャワーズが喋っている?

訳がわかんない。

困惑する僕とは対照的にシャワーズが純粋な笑顔を見せる。

『ジュン。オボンの実、食べる?』

『シャワーズ、気遣いありがとう。でも・・オボンの実は良いから、なんでこんな状況になってるか説明してくれるかな?』

『あ、そうだね。まずはこの状況を説明しないとね。ジュン、君はミュウの力でアグノムに変えられたんだよ。君がぼくと喋れてるのも同じ理由さ』

『つまり・・・僕がポケモンになったから？』

『そうだよ』

そんな・・僕がポケモンに・・・。そうか、ミュウが言ってた“変化”とはこのことだったのか。

・・・・困るんだけど！

『どうしよう。こんな姿でポケモンハンター続けられるかな・・』

僕が不安そうにつぶやくと、シャワーズの笑みが消え、少し悲しそうな表情になった。

『まだ続けるの・・？』

『ああ、続けるつもりだよ』

『そう・・』

その時、向こうの方から声がした。張りのあるいい声だ。

『ねえ。シャワーズ。ジュンは起きたぁ～？』

僕が声のした方を振り返るとそこにはグレイシアの姿があった。

『よかった。元気みたいね』

グレイシアはにこにこしながら僕に近づいてきた。

『グレイシア・・それは？』

僕はグレイシアがくわえている大量の木の実を指差した。

『あ、これはオレンの実よ。少しだけだけど体力を回復してくれるの』

はい、と言ってグレイシアは僕の前にオレンの実を差し出した。

『僕はいいから、シャワーズとか他のみんなに食べさせてあげてよ。ミュウとのバトルで疲れているはずだから』

『まあ、ジュンって優しいのね。そう言うところが私、好きよ。それじゃ、シャワーズ、食べなさい』

僕に話しかけるときとは打って変わって突然命令口調になりだすグレイシア。

『え～その実、甘くないし、固いからぼく苦手なんだけど』

『あら、ジュンの好意を無駄にするの？いいから、食べなさい』

笑顔で言うグレイシア。しかし、その笑顔は限りなく怖い。

シャワーズ、早く食べたほうがいいって、なんかやばいって。
僕は口に出してシャワーズに忠告したかったが怖いのでやめた。
そんな、僕の気持ちを知る由もなく、シャワーズが空気を読まずにまずいことを言う。
『いらないよ。ボーマンダ先輩に上げたら？先輩、固いもの好きじゃない』
『ごちゃごちゃ言わずにさっさと食いやがれ！馬鹿野郎！！』
『～～～！』
グレイシアはそう怒鳴るとシャワーズの口にオレンの実押し込んだ。
『どうだ。美味いか？』
そう聞くグレイシア。しかし、彼女の発するオーラや威圧感で、彼女が「美味い」以外の答えを許さないのは明白である。
シャワーズは涙目で必死にコクコクと何度もうなずいた。
『おいおい。あまりシャワーズをいじめてやるな』
『ボーマンダ！』
『よっジュン。どうだポケモンになった気分は？』
ボーマンダがニヤニヤしながら聞いてきた。

『まあ、なったばっかりだからなんとも言えないよ』

『そっか。分かんねえことがあればオレや他の奴らに聞けよな。全力でサポートしてやるからさ』

気さくに言うボーマンダ。

『おっうまそうなオレンの実だな』

ボーマンダが大量の実の中から一つを選び、食べる。

『先輩。それ、ジュンのためのなんですけど』

実に湿っぽい声でグレイシアが言う。

『うう。しまった。ついうっかり』

ボーマンダが気まずそうに顔を赤らめる。

『いいんだよ。ボーマンダ。ミュウとのバトルで疲れた君達が食べるべきものだから、僕はいらないよ』

『もう～先輩。空気を読んでくださいよね。そんなんじゃ女の子にもてませんよ』

『フライゴンのフライちゃんとの破局も先輩の無神経が原因だったんですかね、やっぱり』

さっきまで七転八倒していたシャワーズがずけずけと言った。

『・・・おい、シャワーズちょっとこっち来い』

ボーマンダが恐ろしい笑顔でシャワーズ呼んだ。

これには、さすがのシャワーズもマズイと思ったのだろう。

恐る恐る、ボーマンダに尋ねる。

『あの、ボーマンダ先輩。もしかして怒ってます?』

『当然だ』

笑顔を崩さず答えるボーマンダ。

『・・・ジュン、ぼくをモンスターボールにもどして!今すぐ!お願いだから!』

シャワーズの必死の懇願にぼくはボールを手に取った。

しかし、ボールに入って難を凌ごうというシャワーズのせこい作戦は、僕が彼をボールに戻す前にボーマンダがシャワーズを林の中に引きずって行ったことによりあっさり失敗した。

『ぎゃあああぁぁ〜』

次の瞬間、林の中から叫び声が聞こえた。

いったい、どんなお仕置きをされたのだろう?

そして、ボーマンダが林の中から出てきた。

『あれっボーマンダ、シャワーズは?』

僕が尋ねるとボーマンダはなんでもない風に言った。

『林の中に置いてきた。そのうち目が覚めるだろ』

『シャワーズ、大丈夫かな』

『心配ない。いつものことだ』

不意に後ろから声がした。

『アブソル!』

『ジュン。モモンの実だ。体力回復効果はないが、無いよりはましだ』

アブソルが口にくわえていたモモンの実を何個か僕のそばに置く。

『ありがとう。ありがたく食べさせてもらうよ』

僕は一旦地面に降りた。アグノムの特性は浮遊らしく、力を抜いているとふわふわと浮いてしまうため地面に降りるときは意識しないといけないようだ。

『へぇなかなかおいしいね』

『ぼくにもわけてぇ』

シャワーズが弱弱しく僕の後ろから言った。お仕置きが相当効いたらしく、ふらふらしている。

『いいよ。はい』

僕がシャワーズにモモンの実を渡すと、実にうれしそうに食べた。

モモンの実を食べたことで、一旦落ち着いた僕はこれからの事について考え始めた。

さて、これからどうするかな。まずは、本部にミュウ捕獲失敗の連絡をしないと。

そして、長期休暇を取ってミュウを探し出して、元の体に戻らなくちゃ。

僕は地面にある鞄に手を入れると、携帯電話を探した。

あれっ・・ない・・え、うそでしょ。

僕はバッグをひっくり返してみた。

ハンターボールと地図と鍵、回復薬が少々、財布はあったが、携帯電話は無かった。

ええー、こんなときにどうして携帯電話を忘れるかな、僕は！

『どうした、ジュン』

焦る僕にアブソルが話しかけてきた。

『携帯電話、忘れちゃった！どうしよう』

アブソルが不思議そうな顔をする。

『取りに帰ればいいじゃないか？』

『アブソル、忘れたわけじゃないよね。僕の住んでる寮はどこにある？』

『・・・ああそうか。たしか、組織の建物の中だったな』

そう、僕は組織の寮に住んでいるんだ。そして、今の僕の姿は幻のポケモンであるアグノム。

そんな、姿で組織の建物に中に入るなんて、自ら捕獲されに行くようなもの。

まさに飛んで火に入る夏の虫・・いや、夏のポケモンだ。

『じゃ、ユウタに頼めば。彼なら、事情を話せば力になってくれるわよ。たしか、トバリシティの近くに一人暮らししていたわよね』

グレイシアの言う通りだ。確かにユウタなら助けてくれるかも。

『よし、ボーマンダ。ユウタのところまで行こうか。・・・あ！』

『どうしたんだよ』

ボーマンダが尋ねてくる。

『僕、人間の言葉喋れるかな・・・？』

重ねて言うけど、今の姿はアグノム、つまりポケモンだ。

普通に喋ると当然のことながらポケモンの言葉になるんだよね。

『人間の言葉がつかえなきゃユウタとの会話が出来ねえな』

ボーマンダが僕の不安を煽る。

『ねえ、僕は今、ポケモンの言葉を喋ってる？』

『ああ』

『じゃ、これから人間の言葉を喋るから、聞いといてね』

・・・人間の言葉ってどうやって喋ったっけ。え～と・・。

「ボーマンダ。これは人間の言葉？」

『すげえ。ポケモンが人間の言葉を喋ったのって初めて見たぜ』

軽く興奮するボーマンダ。って言うか僕、もともと人間なんですけど。

『人間の言葉も喋れたし・・・ユウタのところに行こうか』

僕はポケモンの言葉に切り替え、モンスターボールをシャワーズ達に向けた。

『ジュン・・・明日の朝行ったらどうだ?』

『なんでさアブソル?』

『今の時間帯はトバリシィティに限らずあらゆるところで、人間たちが活動している。今は人目に付きすぎる。かといって、夜中行くのはさすがにマナー違反だ。だから、俺はあすの早朝に出発することをお勧めする』

う~ん。一部の隙もない完璧な意見。

『わかったよ。じゃ、今日は満月島に泊まろうか』

僕はモンスターボールを取り出した。

『ジュン、俺たちはなるべく外にいたいんだが』

アブソルが言った。

『え・・・モンスターボールの中、嫌い?』

『嫌いって言うか・・狭いしよ、外にいる方が落ち着くんだよな』

ボーマンダが苦笑いをしながら、会話に入ってきた。

『まあ、普段はボールの中でいいとしても・・今日ぐらい外にいたら駄目かな?』

シャワーズが恐る恐る聞いてきた。

『・・分かったよ』

僕はボールをしまった。

『じゃ、明日早いから僕、寝るね。キミ達も早く寝なよ』

僕はそう言って、草に寝転がった。

そうして、うとうとしながら、僕は考え事をしていた。

・・・皆、外にいたいんだね。知らなかった。ポケモンの言葉なんて、分からないもの。

でも、これからは・・できるだけ・・外・・に出して・・おこう・・。

僕はそうして眠りに落ちた。

第七話　変化（後書き）

シャワーズ「やっと書き終わったね」

作者「ちょっと遅くなっちゃった」

シャワーズ「ま、良いじゃない」

作者「まあねえ」

シャワーズ「でさぁ。次回はぼく視点にしてくれるってホント？」

作者「どうだろ・・気分次第かな。読者の反応にもよるかもね」

シャワーズ「読者さん！次のぼく視点案をぜひ支持してください！」

作者「キミも結構、目立ちたがりだね（笑）」

第八話　気持ち（前書き）

作者「今回は前回のフラグ通りにシャワーズ視点だよ」

シャワーズ「やった！」

作者「では、お楽しみください！」

第八話　気持ち

第八話　気持ち

すーすーと安らかな寝息をたててジュンは眠っている。

ぼくはジュンにそっと触った。

『う・・ん』

ジュンはくるりと横になった。

『よく眠ってるみたいね』

グレイシアがぼくの横から覗き込んできた。

『そうだね』

『モモンの実の蒸し焼きできたわよ』

『今行くよ』

ぼくはそう言って、焚火の前に向かった。

ぼくが座ると、グレイシアがモモンの実の蒸し焼きを一つ焚火から取って、ぼくの前に出した。

ぼくが包みを開けていると、草むらからボーマンダ先輩が出てきた。

『木はこれくらいで足りるな』

そう言って、先輩は木を火の中に放り込んだ。

『ふう、今日は疲れたぜ』

ボーマンダ先輩が伸びをする。

『この蒸し焼きなかなかいけるね』

ぼくは二つ目を口の中に放り込んだ。

『昔から、グレイシアの作るものは美味いからな』

アブソル先輩が蒸し焼きを切り分けながら言う。

『そうだよな・・それに比べて、ジュンの作るポフィンは・・・』

ボーマンダ先輩はいやな事を思い出したように、顔色をなくす。

ぼくはふと気になって尋ねる。

『ボーマンダ先輩、ジュンの作ったポフィンってそんなに不味いんですか?』

『そうか、シャワーズは食べたことなんだったな、ジュンのポフィン』

『あれはすでに料理じゃないな。劇薬だ』

アブソル先輩が静かに言う。

『へえ、ちょっと食べてみたいな』

『・・・シャワーズ、何なら食わせてやるぞ』

ボーマンダ先輩がニヤリと笑った。まずい、不用意なこと言っちゃったかも。

ぼくがひやひやしていると、ボーマンダ先輩はジュンのリュック中をガサガサと探り出した。

『えーと、確かここらへんに・・・あった。これだ』

ぼくは半透明のパックに入った、ポフィンを見たとき、ビックリした。

え・・・何あれ?なんか、すごい色してるんだけど。うぇ・・体に悪そう・・。

『ジュンの手作りポフィンだ。ここに張ってあるラベルによると・・・デラックスバージョンらしいぜ』

ボーマンダ先輩はそう言って、ぼくの前にポフィンを出した。

『い、いりません』

ぼくがビビってのけぞると、ボーマンダ先輩はにっこり笑った。

『お前、食べたいって言ったじゃねえか。遠慮せずに食えよ』

『ぼく、遠慮なんか・・・』

『オレらの中で、これ食ってないのお前だけなんだ。一人だけ地獄を見ないなんておかしいぜ』

食べるまで許してくれない、そう直感が働いたぼくは、ポフィンの端をちぎった。

そして、それを一気に口に放り込む。

・・・うぁぁぁぁ!!

く、口が焼けるっ!苦いっていうか辛い!

こんなもの今ままで食べたことない!いや、まず食べものなのこれ!

ぼくは目に涙を浮かべながら、なんとかのみこんだ。

『シャワーズ、どうだ?』

ボーマンダ先輩が聞いてくる。

『どうって・・・とても食べられたものじゃありませんよ。うあ、まだ口の中がピリピリする・・・』

『う〜ん。キミ達まだ起きてたんだ』

不意に後ろから眠そうな声が聞こえた。

振り向くと、ジュンが目をゴシゴシ擦りながらこちらを向いている。

『あっすまないな。起しちまったか』

ボーマンダ先輩は気まずそうだ。

『いや、別に良いんだけどね・・・君達眠れないの？』

ジュンが不思議そうに尋ねる。

『眠れないってわけじゃなんだけどね・・・』

ぼくが口ごもると、ジュンはぼくの側に寄って来た。

『あれ、僕の作ったポフィンだ』

そう言って、ジュンは激マズポフィンを指差す。

『ああ、それ・・』

『ねえ、どうだった。味』

ジュンがいきなり聞いてきた。

『えーと・・・なんか、すごい味だったよ』

ぼくが曖昧に答えると、ジュンはにっこりした。

『味なんてどうでもいいじゃない。でも、栄養価の計算はしたんだよ。いろんな薬品を混ぜ合わせて作ったポフィンだからね、色はそ

んなに良くないけど。ま、食事は養分摂取ができれば、味とか色は関係ないからそれでいいよね』

ぼくはそれを聞いて、少しカチンときた。

味はどうでもいいだって・・・ただの料理おんちなら仕方無いけど、食べるポケモンの気持ちを考えずに作ったって言うの？

ぼくの中に少し意地悪な心が芽生えた。

『ジュン。じゃあ食べてみてよ』

『え、僕が？』

ぼくのこの提案をみんなは黙って聞いているけど、どうも賛成してくれているらしい。

普段、ジュンの味方のグレイシアさえ、ジュンにも食べてもらわないとねぇ～と思っているのが顔に書いてある。

『・・・分かったよ』

ジュンはそう言うと、ポフィンを手に取った。

そして、それを全部口に放り込む。

あ～あ。あんなにたくさん、一気に食べちゃって・・・。

ジュンは少しの間もぐもぐと口を動かしていたが、すぐに顔が真っ青になった。

『～～～～～～～！！』

ジュンは目に涙を浮かべている。今すぐにでも吐き出したいと考えているのが火を見るより明らかだ。しかし、ポケモン達の手前吐き出すわけにいかず、苦しんでいる。

『ゼェ・・ゼェ』

やっとのことでポフィンを飲み込んだジュンは肩で息をしている。

『どうだった？』

『・・・一瞬三途の河が見えた』

あれま、相当効いたみたいだね。でも、ジュンもこれで分かってくれたかも。

『・・・・ごめん』

ジュンがぼそりと言った。

『いままで、ポケモン達にポフィンを作る時、栄養摂取ができれば後はどうでもいいとか心の奥で考えていたんだよね、僕。でも・・・違ってたみたいだ』

『キミ達、ポケモンにとっては大切な食事だったんだよね。栄養だけじゃ駄目、味も見た目も重要だってことは人間と同じなのに・・・そこまで考えが至らなかった・・僕のミスだ』

ジュン・・・ぼくは君のそう言うところが好きだよ。

『いいんだよ、ジュン。ぼく達の気持ちを知ってほしかっただけなんだ』

それを聞くと、ジュンは少し笑った。

ぼく達はその後グレイシアが追加で作ってくれた、モモンの実の蒸し焼きを食べつつ、いろんな会話に花を咲かせた。

そして・・。

『うあ、相当遅くなっちゃたね。そろそろ寝ないと、明日起きられないね・・・じゃ、お休み』

ジュンはそう言うと、さっさと眠ってしまった。

『さて、私たちも寝ましょ。シャワーズ、火を消しておいてね』

グレイシアはそう言うと、寝転がった。

ボーマンダ先輩とアブソル先輩はすでに寝息を立てている。

ぼくも寝なきゃ。

ぼくはハイドロポンプを浴びせて、火を消した。

そして、体を丸める。

今日・・・ジュンとぼく達ポケモンが少し、理解し合った・・・た

がだかポフィンのことだけど、この一歩は大きいと思うんだ・・・。

もちろんジュンがポケモンのことを全然理解していないわけじゃない・・・でも、異種族の壁はなかなか越えられない・・・そう思う事が・・人間と付き合っていると・・時々だけどあるんだ・・。

でも、ジュンは分かってくれた。それが、ぼくにとってはうれしい。

後は・・ポケモンハンターをやめてくれると・・もっと・・うれしいな・・。

そして、ぼくは眠った。

第八話　気持ち（後書き）

シャワーズ「ねえ、次回からは誰の視点なの？」

作者「それはね・・」

ボーマンダ「オレだろ！」

作者「違うよ」

グレイシア「じゃ、私ね！」

作者「残念。はずれ」

ミュウ「私・・」

作者「君は当分出てきません（汗）」

ユウタ「ここはこのところ出番のない俺だろ」

作者「君は次の話で出てくるよ・・・サブでね」

アブソル「・・・俺か？まさかな・・」

作者「ごめん。君でもないよ」

ボーマンダ「じゃあ誰なんだよ！さっさと言いやがれ！」

作者「実は、ジュンなのでした～」

ボーマンダ「元に戻っただけじゃねえか！」

作者「まあまあ」

第九話　出発の朝（前書き）

ジュン「今回は最新まあまあ早かったね」

作者「がんばったからね」

ジュン「どっちかっていうとテスト期間中なんだから勉強を頑張った方がいいんじゃないのかな」

作者「勉強も頑張ってるよ。数学と理科を中心にやってるし・・・・」

ジュン「古典をさぼってるでしょうが！」

作者「では、ポケモンハンタージュンの冒険、お楽しみください～」

ジュン「話をそらすなよ！」

第九話　出発の朝

第九話　出発の朝

ふあ～

もう朝か。でもあたりはまだまだ暗い。

よく眠れた。僕は大きく伸びをすると、地面からふわりと浮いた。

そして、ポケモン達の方を何気なく見る。

まだ、みんなぐっすり眠ってる。シャワーズなんか、口からよだれが垂れてる（笑）

『今何時ころかな』

僕は鞄のポケットから、腕時計を取り出した。

まだ、４時か・・・ユウタのところに行くには早すぎるな。

僕は少し散歩に出かけることにした。

ここは、満月島の砂浜。

白い砂が綺麗だ。

僕はふわふわと浮きながら、皆が起きるまでの時間何をやろうか考えていた。

・・・そうだ。せっかくポケモンになったんだから、技の一つでも使ってもようかな。

アグノムって何使えるのかな・・念力？いやいや、もっと凄い技が使えるはず・・。

まあ、実際にやってみるしかないね。

僕は海の方に手を向けた。そして、掌にエネルギーをためるように集中する。

『えいっ』

しかし、僕の放ったエネルギーは、放たれるや否や、拡散し消えてしまった。

あれ、おかしいな。もう一度。

しかし、何回やっても、結果は同じだった。

『ジュン。力みすぎだ。もう少し力を抜いたほうがいい』

後ろから声がしたので、振り返ってみると、アブソルが立っていた。

『あれ・・・アブソル、起きたの？』

『強いエネルギーの波動を感じたんでな・・・』

『それより、技の練習か？』

アブソルが聞いてきた。

『うん。何の技か知らないけど・・・』

『それは、神通力というエスパータイプの高威力技だ』

『へえ、そうなんだ』

僕がそう答えると、アブソルは黙って、僕の真正面に移動した。

『ジュン・・・俺に神通力を当ててみろ』

僕はその言葉を聞いて驚いた。

『えっアブソル、何を・・・』

『ジュン、技を当てるための目標物なしに練習するのは難しいから、俺が的になってやる』

『でもそれなら木とかでもいいんじゃ』

『確かにそれでもいい。だが、なるべく実戦に近い練習の方が、実力が付きやすい』

『でも、当たったら・・・』

『俺はそんなヘマはしない。ジュン、心配せずに来い』

さあ、とアブソルが催促するので僕は手をアブソルに向ける。

そして、ゆっくりと掌にエネルギーを貯め―

一気に放つ！

しかし、エネルギーはまたもや霧散してしまった。

『ジュン、掌にエネルギーを集めるまではいい・・だが、もっと凝縮させる必要がある』

『・・なかなか難しいね』

『まあな。特殊攻撃系の技をうまく使うにはコツが必要だ。見ていろ』

アブソルはそう言うと、横を向いた。

そして、顔のそばに黒いエネルギーを集める。

『悪の波動！』

アブソルが放った悪の波動は、近くにあった岩にぶつかり、それを砕いた。

『すごい』

僕が感嘆していると、アブソルがこちらを向いた。

『対象物の方を見て、集中し、放つ。特殊攻撃は精神面に威力や命中率が左右されやすい・・・絶対に当てるという、気概が必要だ』

『知らなかったな・・』

『では、もう一回だ』

掌に、エネルギーを集め、凝縮する。当てるんだ・・絶対に！

『神通力！』

その瞬間、僕の手から、一気にエネルギー弾が放たれた。

やった、ついに使えた！・・・でも、アブソルに当たる・・。

『アブソル、避けて！』

『心配するなと言っただろ、ジュン』

アブソルは微かに笑った。

『悪の波動！』

悪の波動と、神通力は相殺された。

僕がアブソルの見事なテクニックに感心していると、不意に後ろから声がした。

『やっと使えるようになったな、オレちょっと感動したぜ』

僕がビックリして振り返ると、そこにはボーマンダとグレイシアが立っていた。

『あれ、キミ達まで・・起きたんだ』

『ま、あんなに大技を連発したんだ。こっちま技のエネルギーが伝わってきやがるからな。いやでも起きるぜ』

『シャワーズはまだ眠ってるけどね』

グレイシアが苦笑いしながら言う。

『・・・ジュン、どうだ、技が使えた気分は?』

アブソルが僕によって来た。

『いや、何か言葉にできない感じ・・でも悪い気分じゃないね』

『・・・そうか、それは良かった』

『練習に付き合ってくれてありがとう』

僕がお礼を言うと、アブソルは少し照れた。

僕たちは砂浜から元々いたところに戻った。

グレイシアの言った通り、シャワーズはスヤスヤと気持ち良さそうに眠っている。

僕はシャワーズを起こさないようにそっと、鞄のそばに近寄った。

そして、腕時計を取り出す。

あ、もう5時前か・・・今日はユウタの非番の日だから、まだ寝てるかな?いや、ユウタは早起きだからもう起きてるかも・・でももうちょっとしてからの方が・・・。

そんな僕の悩みを見透かすように、グレイシアが言った。

『ユウタなら起きてるわよ、ジュン。だって今日は彼の大好きな朝5時からやってる・・・なんて言うんだったかしら、あの番組・・』

『オーキド博士のポケモン講座、だ』

アブソルがグレイシアの言葉を受け継いで答えた。

『あっそうそう、それよ。あれを見るために彼、5時に起きてるはず』

『でもさ、録画してるかもしれないよ』

僕がそう言うと、横で聞いていたボーマンダが言った。

『ジュン、忘れたか?ユウタが前嘆いてただろ。ハードディスクがどうのこうのって。俺は絶対これから5時に起きるぞって宣言してたじゃねえか』

ああ、思い出した。前、ユウタが任務でテレビのないとこに行くから仕方なく、録画予約をして出かけたは良いんだけど、どうやらそ

の時点でハードディスクの容量が一杯だったらしく・・・結局、見逃してしまったんだったね。

あの時のユウタの落胆ぶりはすごかった。しかも、どうも一番楽しみにしていた回だったらしいし・・。

それ以来、ユウタは番組がある日は絶対に5時に起きて、見るようになったんだったね。

『じゃあ、今からユウタの家に今から行こうか』

『待って、ジュン。その前にシャワーズを起こさなくちゃ』

グレイシアはそう言うと、丸くなって寝ているシャワーズに近寄った。

そして、大きくゆする。

『シャワーズ。起きなさいよ』

『う～ん。もう食べられないよ・・・ＺＺＺ』

『ユウタの家に行くわよ。さっさと起きなさい』

『う～～ん』

なかなか起きないシャワーズに苛立ってきたのか、グレイシアの声がどんどん怖くなる。

このままじゃグレイシアが爆発すると感じた僕は一つの提案をした。

『グレイシア、シャワーズは眠ってるままモンスターボールに入れるから起こさなくていいよ』

『あら、そう。じゃあよろしく頼むわ』

グレイシアからイラついた表情が消えた。どうやら僕の判断は正しかったらしい。

僕はグレイシア、アブソルそして、眠っているシャワーズをモンスターボールに戻した。

そして、リュックを背負ってボーマンダに乗る。

特性の浮遊で飛ぶこともできたけど・・・リュックを背負ったアグノムが飛んでたら、いくら

人目が少ないと言ってもやっぱり目立つ・・・でもボーマンダに乗ってたら下からじゃ僕の姿

は見えないし、見た人も、おっボーマンダが飛んでるな、と思うだけだろうからこっちの方が

いいと思うんだ。

『ボーマンダ、ユウタの家まで頼むよ』

『任せとけって、ジュン』

ボーマンダはそう言うと僕を乗せて大空に飛び立った。

第九話　出発の朝（後書き）

ユウタ「おい、作者」

作者「何？」

ユウタ「俺、出てきて無いんだけど・・・前の後書きで出てくるって言ってたよな」

作者「ああ、それね。本当は今回で出てくるはずだってけど、ジュンの練習を書いてたら、なんか話、終わっちゃった」

ユウタ「次こそは出てくるんだろうな、俺」

作者「うん」

ユウタ「もし、出番がなかったら・・・分かってるよな」

作者「分かってます（汗）」

第十話　頼れる友（前書き）

ジュン「最新遅かったね」

作者「だって急がしかったんだもん」

ジュン「言い訳はなしだよ」

第十話　頼れる友

第十話　頼れる友

『ねえ、ボーマンダ。もうそろそろ着くんじゃない』

僕はボーマンダに話しかけた。

『ああ、もう着くころだな・・・あっあれじゃねえか？』

ボーマンダが指差した先にはユウタの住んでるアパートの屋根が。

良かった、まだ人は少ない。

『ボーマンダ、あの草むらに降りて』

『分かった』

ボーマンダは頷くと、草むらにそっと降りた。

『ここからは僕だけで行くよ。アグノムの大きさなら草むらに隠れながら進むのは簡単だしね』

『がんばれよ、ジュン』

『うん。ここまで運んでくれてありがとう、ボーマンダ。ゆっくり休んでいてね』

僕はそう言うと、ボーマンダをボールに戻した。

そして、ゆっくりと草をかき分け進んでいく。

『やっと着いた』

何度もここには遊びきたけど・・・今は少し緊張する。

ユウタは分かってくれるだろうか・・・それとも僕を捕まえて売り飛ばそうとするのか。

僕は思い切ってチャイムを押した。

しばらくすると、インターホンからユウタの声が聞こえた。

「はい。どちらさまですか」

僕は人間の言葉で喋った。

「あの、僕だけど・・」

「ああ、ジュンか。どうしたよ、こんな朝早くに訪ねてくるなんてさ?」

「ちょっと相談が」

「分かった。今あけるからな」

そして、少しするとドアノブが動いた。

「ジュン、まあ入れよ。今ちょうど、朝ごはん作ったとこなんだ。

一緒に・・・・」

僕の姿を見た瞬間、ユウタの言葉が途切れた。

バサッと手に持っていた本、オーキド博士のポケモン飼育論～技の有効活用編～が落ちた音がした。

「な・・・アグ・・ノムがいる・・・幻のポケモン・・なんで・・・」

「ユウタ、僕だよ」

「アグノムが喋った！しかもジュンの声じゃねえか？意味分かんねぇ！」

不味い・・ユウタがパニックを起こしかけてる。なんとかしないと。

「僕はジュンだよ」

「そんなわけあるか！ジュンは人間だぞ」

僕はその時あることを思いついた。

そうだ！僕とユウタしか知らないはずのことを言えば、ユウタも分かってくれるかも。

「ユウタ、とりあえず落ち着いて。今僕がジュンである証拠を見せるからさ」

「証拠・・・だと」

「ユウタ・・・君は小さい時、サーナイトに恋をしたことがあるよね？」

それを聞いた瞬間、ユウタの顔が赤くなる。

「なんで・・それを」

「そして、告白したは良いけど結局振られたんだったね」

「それを知ってるのは俺のほかにはジュンだけだぞ」

「他にもあるよ。君の秘密。そうだね、たとえば・・・」

「分かった！分かったから！頼むからそれ以上言わないでくれ」

ユウタが僕の口を押さえた。

良かった・・・分かってくれて。

僕が内心ほっとしていると、ユウタが扉を閉めた。

「ジュン・・・なんでアグノムの姿になったか説明してくれるか」

僕はミュウに姿を変えられたことや寮に携帯を置いてきて、今の姿じゃ取りに行けず困っているという事を話した。

「なるほどな。とりあえず、組織に連絡を取るのが最優先だな。携帯貸してやるよ」

ユウタはそう言うと、携帯を僕に貸してくれた。

「ありがとう」

礼を言ってから、組織に電話をかけた。

プルルルル・・・・・。

「はい、こちらはポケモン・ヒーリング・カンパニー、受付係でございます」

「ＮＯ．４です、任務の報告をしたいので、ボスに代わってください」

「かしこまりました」

電話の音からメロディーが流れ始めた。

しばらくすると、メロディーが途切れ、ボスの声がした。

「ＮＯ．４か」

「はい。ボス、ミュウ捕獲任務の件なんですけど・・・」

「そのことなんだが。今こちらから連絡しようと思っていたところだ」

「と、申しますと？」

「実はな・・大変言いにくいんだが・・依頼人が依頼を取り下げたのだよ」

え・・まさか、そんなぁ。ミュウ捕獲に失敗した揚句、アグノムにさせられた僕にそれはないでしょ・・。

「・・・なぜ、取り下げたのですか」

僕は気を取り直して、ボスに訪ねる。

「依頼人が警察に睨まれ始めてヘタな動きができない状態になってしまったのだ」

「そうですか」

「ではＮＯ．４、帰還してくれ」

「あの、ボス。そのことでお話が」

「なんだ？」

「長期休暇を取りたいのですが」

「分かった。ＮＯ．４。お前の休暇中、依頼リストから外しておく」

普通の組織なら理由の一つも聞きそうなものだけど、僕達の組織はそんなことはしない。

ポケモンハンターをやる人には話せないような理由を持つ人が少なくなく、一々聞きだすのにとても時間がかかる。

そのため、理由不明の長期休暇の申請であろうともすんなり通るん

だよね。

僕がボスの会話を終えると、ユウタが近寄って来た。

「ジュン、せっかくだから、俺のポケモンたちとも面会しとくか？」

「ああ、そうするよ」

「よし、出てこい！ライチュウ、レントラー、デンリュウ！」

「みんな出てきて！ボーマンダ、アブソル、グレイシアにシャワーズ」

僕とユウタはポケモンを出し合った。

『あら、ユウタの部屋ね』

グレイシアが部屋を見まわす。

『う～ん。よく寝たなぁ。あれ、ここどこ？』

『ユウタの家よ』

『あれぇ。ぼくさっきまで満月島にいたような』

シャワーズが惚けた言う。

『いつまで寝ぼけてんのよ！』

グレイシアがシャワーズを平手打ちする。

『い、いきなり何するのさ！』シャワーズが抗議の声を上げる。

『あんたが馬鹿のこと言うの悪いんでしょうが』

『おいおい、やめろって。ユウタの家まで来て喧嘩するのは』

ボーマンダが仲裁に入る。

『変わんねえな。お前ら』

横にいたレントラーが苦笑いしながら言った。

へえ、これがユウタのレントラー、見ただけで分かる・・良く育てられてるね。デンリュウとライチュウも良い毛並みだ。

『お～！愛しのグレイシアちゃん。いつ見てもかわいいなあ』

レントラーの横の横にいたライチュウがオーバーな身振りでグレイシアに近づく

『ライチュウ・・・その軽薄な言動はちっとも変わらないわね』

毒のあるグレイシアの言葉

『その辛辣な一言も効くなぁ。まさに美しい薔薇には棘がある、だな。でもそう言うところも俺は好きだぜ』

『なにふざけたこと言ってんのよ。私はそんな言葉に乗せられる程馬鹿じゃないわ』

『固いこと言うなよぉ。なあ、せっかく久しぶりの再会を果たしたんだ。今夜、俺と一緒にデートでもしないか？』

ライチュウがグレイシアの肩に手を回す。

『俺がいい夢見させてやるぜ』歯の浮くようなセリフを言った後、ライチュウはウインクした。

『私ね・・・』

『ん？何』

『アンタのそういうところが・・』

『大好きだってか？いや～参っちゃうな』

『大嫌いなのよ！！』

グレイシアがライチュウの腹に強烈なパンチをぶち込む。

『ぐえっ！』

ライチュウはふらりとよろけると、その場に倒れた。完全に気を失っている。

『ライチュウ、懲りないんだから～』

横で見ていた、デンリュウがクスクス笑う。

『デンリュウ、元気そうで何よりだ』

『アブソルこそ～』

『そう言えば・・ジュンはどこだ？』

レントラーが思い出したように言う。

『そうだよね～僕もそれが気になってたんだ～』

デンリュウがキョロキョロと辺りを見回す。

そして、ボーマンダの後ろの方にいた僕に気がついた。

『あれ～君、ジュンの新しいポケモンかな～？』

『見た事ねえポケモンだな』

『新入り？』

レントラーとデンリュウ、そしていつの間にか復活したライチュウがこっちを見る。

うぁ、何か緊張するな。

『何言ってんのよ、アンタ達。これ、ジュンよ』

僕が何も言えないでいると、グレイシアがこれまでのことを説明しだした。

『そうか～ジュンがアグノムに、ねえ』

『まさに、ミイラ取りがミイラになるだな』

『こら、ライチュウ。茶化すな』

レントラーがライチュウに注意する。

『すまんすまん』

「朝ごはん持って来たぞ」

ユウタが僕たちの前に焼いた木の実を持ってきた。すごくおいしそう・・・。

「ユウタ、迷惑かけて悪いね」

「良いんだって。いざという時に助け合うのが友達だろ」

ユウタはそう言うとにっこり笑った。

その日、僕達はとても充実して過ごした。

しかし、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。

『もう夕方か』

時間がたつのは早いなぁ・・・。

「ただいま。暑い暑い」

さっきまで買い物に出かけていたユウタが帰って来た。

って言うか、めちゃくちゃ荷物が多いね（汗）

「いや～。タイムセールスやっててさ。いろいろ買い込んじまったぜ」

「ずいぶん買ったね」

「もう汗でびしょびしょだ」

確かに、服がかなり濡れてるね。

「お風呂沸いてるよ」

「沸かしといてくれたのか、サンキュ」

そして何を思ったか、ユウタが僕を抱き上げた。

「ちょ、何するの？」

「一緒に風呂入ろうぜ」

「え・・・」

僕を抱きかかえたまま、ユウタは服を脱ぎ風呂場に入った。

「ジュン、結構汚れてるな」

ユウタが僕の体をゴシゴシ洗う。

「まあ、昨日野宿したからね」

しばらくユウタは黙っていたが急に真剣な口調で話しかけてきた。

「・・・いつ出るんだ」

「え、何？」

「ミュウを探す旅に、さ」

「明日にはここを出るよ。ユウタが迷惑でなければ一日泊めてもらいたいな」

「いや、泊めるのは構わないけど・・。俺、心配でさ。お前の体は幻のポケモン、アグノム何だぜ。ハンターやトレーナーに見つかりでもしたら・・・」

「大丈夫だよ」

ユウタはしばらく心配そうにしていたが、やがて口を開いた。

「よし、今夜は俺が御馳走作ってやるよ」

僕はこの時ほどユウタがいてくれてことに感謝したことはなかった。

第十話　頼れる友（後書き）

ジュン「何この変な終わり方。すごくグダグダしてるし」

作者「大丈夫。次の話からは急展開だよ」

ジュン「ホントかな～」

第十一話　森の中で（前書き）

ジュン「最新早っ」

作者「前から書いてた話しをコピー&ペーストしただけだからね」

ジュン「なるほど・・・」

作者「では、お楽しみください！」

第十一話　森の中で

第十一話　森の中で

ミュウ探しの旅に出てから早一週間。いろんなポケモンにミュウの事を聞いたけど成果は上がらず、正直ぼくは疲れていた。

ああ、ユウタの料理が食べたいなぁ。一週間も前なのにあの味は今でもよみがえる。

「何でミュウは見つからないんだよ。こんなに探しているのに！」

ジュンはかなり苛立っている。

『ジュン、もうそろそろ休まない？』

って言うかぼく達が休みたい。ぼくの提案にジュンは少し落ち着いた様子になる。

『・・・そうだね。疲れたし』

ジュンは特性浮遊で歩いてないから疲れてないでしょうが！とぼくは一瞬思ったがジュンの顔を見て口にはしなかった。

ジュンの疲れは、肉体的な疲れじゃなくて精神的な疲れ。元に戻れるかという不安であることが分かったからね。

突然、空から風が吹いてきた。あ、ボーマンダ先輩が帰ってきたかも。

『ジュン、空から探してみたがいねえぜ』

ボーマンダ先輩が地面に着地する。

『ありがとう、ボーマンダ。ちょっと休もうか』

ぼくとジュンとは別のところで情報収集をしていたグレイシアとアブソル先輩が帰って来た。

『出会ったポケモンすべてに聞いてみたけど、駄目だったわ～』

『こちらも成果なしだ。噂すら聞かなかったな』

『キミ達も休んだらいいよ。僕のリュックに確か、オレンの実が何個かあったはず・・』

良かったこれで体力回復できるよ。

しかしそう思ったのもつかの間。ジュンはこっちに背中を向けてリュックを探していたけどしばらくしてこっちを向いた。

どうやら無かったみたいだ。

ジュンの気まずそうな顔を見たグレイシアがいきなりぼくの方を見る。

『さ、シャワーズ。森に行って、木の実を取ってきなさい』

ぼくは当然反論した。

『なんでぼくなの？しかも一人だけ取りに行くなんて不公平だよ』

『シャワーズが行く代わりに僕が行くよ』

『あら、ジュンは疲れているからあんまり動いちゃだめよ。これは結構体力あるから木の実ぐらいすぐに取ってこれるわ。だから気遣いは無用よ』

ちょっと・・今これって言わなかった？なにその扱い。

ぼくは少しムっとした。

そんなぼくの顔をみてグレイシアがため息をつく。

『もう、わがままね。しょうがないわ。私も付いていってあげる』

・・・わがままはどっちだよ！

ぼくは文句を言おうとしたけど、ボーマンダ先輩とアブソル先輩が首を横に振って、反抗するなと無言のメッセージを伝えてきたから止めた。

『見つからないわね。木の実』

グレイシアの（わがままで勝手な）提案によって森の中で木の実を探しているぼく達。

しかし、本当に見つからないなぁ。

『あれ、何？』

木の実でも見つけたのかな、そう思ってグレイシアの指差す方向を見たぼくはびっくりした。

一匹のイーブイがラッタ達に攻撃されている。

イーブイは傷だらけだ・・・何て酷いことを。

『何ボケっとしてるのよ！助けるわよ』

グレイシアはそう言うと、一匹のラッタめがけて吹雪を使う。

よし、ぼくも。

『ハイドロポンプ！』

ぼくが放った激流はラッタ達をなぎ倒した。

よし、全員倒せたね。

『なんか呆気なかったわ』

グレイシアは少しつまらなさそうだ。

ぼく達は倒れているイーブイに近づく。

『大丈夫?』

ぼくが声をかけると、イーブイはびくっとした。

『酷い傷ね。回復薬か木の実が必要だわ』

『あの・・・ラッタ達は?』

『私達が倒したから心配しなくていいわよ』

『それ、葬ったって意味ですか?』

グレイシアが驚いた顔をする。

『え、単に気絶させただけだよ』

『駄目です!そんなの、破棄しなきゃ・・・・あっ危ない!』

僕が後ろを振り返ると、ラッタが捨て身タックルをしかけてきた。

ぼくは避けることができず、近くにあった木に叩きつかられた。

くっ、かなり効くね・・・。

『不意打ちなんて卑怯よ。吹雪!』

グレイシアの放った吹雪は攻撃を仕掛けてきたラッタに直撃した。

『敵・・・倒す。火炎車・・・』

眼を覚ました他のラッタ達が一斉に火炎車を発動し、グレイシアを襲う。

『ハイドロポンプ！』

ジュゥゥと音をたて火炎車の威力が弱まる。

その直後、グレイシアの吹雪が火炎車を完全に無力化した。

『アンタ達の力じゃ私達を倒すことは不可能よ。さっさと去りなさい』

グレイシアが言い放った言葉も、ラッタ達には届いてないようだ。

それにしても、あのラッタ達様子が変だね。

なんか無機質と言うか、機械みたいというか・・・。

『敵・・排除を実行する』

『しつこいわね・・・シャワーズ一気に片を付けるわよ』

『分かった』

『吹雪！』

『ハイドロポンプ！』

ラッタ達は逃げる暇もなくぼく達の攻撃をまともに受けた。

ちょっと、やりすぎちゃったかな。ま、これで倒せたでしょ

しかし、ラッタ達は立ちあがった。傷がすごい勢いで回復していく。

『嘘・・・でしょ』

グレイシアが絶句している。

『再生完了・・・第一形態を解除し、第二形態に移る・・・』

しかし、ラッタ達が急にそわそわしだした。

『この臭いは・・・・』

そうラッタの一体が呟くと、ラッタ達は皆いちもくさんに逃げ出した。

何だったんだろう・・一体？

ぼくが不思議に思っていると、後ろからジュンの声がした。

『こんなところにいたんだね。なかなか帰ってこないから心配しちゃったよ』

ジュンはそう言って、僕のそばに寄って来た。

『あれ、このイーブイは？』

ジュンが傷だらけのイーブイを指差す。

『姿がポケモンなのに・・・人間の臭いがする』

イーブイが鼻をひくひくさせる。

『まあ、それには理由があるんだけどね・・・それよりこの状況は一体？』

ぼくはこれまで起こったことを事細かく説明した。

『なるほど、このイーブイを襲ってたラッタ達の様子が変だったんだね。確かに気になるな』

ジュンは考え込んでいる。

『なあ、お前はワケを知ってるのか？』

ボーマンダ先輩がイーブイに訪ねた。

『いや、俺も知りません・・・それよりまだお礼を言ってなかったですね』

イーブイはそう言うと、ペコッと頭を下げた。

『助けてもらって本当に感謝しています。ありがとうございました』

『僕達も自己紹介をしなきゃね。僕はジュン、よろしくね』

ジュンはボーマンダ先輩、アブソル先輩そしてグレイシアとぼくを簡単に紹介した。

紹介が終わった後、イーブイが自己紹介をした。

『俺はイーブイのプロト０です』

え、プロト０・・なんか変わった名前。

『変でしょ。でも人間達は俺のことをそう呼んでいました。意味は分からないんですけどね』

『キミさ・・・一体どこからここに来たの？』

ジュンの突然の質問にプロト０は戸惑った様子になる。

『プロトの意味は原型とか試作品と言った感じだよ。普通のトレーナーがそんな名前つけるはずないから、キミはもしかしてどこかの研究機関から逃げて来たんじゃないのかな』

『・・・当たりです。俺は、研究所と人間達が呼ぶところから逃げてきました。そしたらあのラッタ達に襲われて・・・』

『なるほど、ねえプロト０・・・今からその研究所に案内してくれるかな。シャワーズの言ってた奇妙なラッタ達のことも何か関係してるかも知れないしね』

『・・・分かりました。俺についてきてください』

ぼくはこの時、直感的にプロト０が何かを隠しているかもと思っていた。

『なんかいやな予感がする』

ぼくの呟きは誰にも聞こえず、自分の耳の中に入って行った。

第十一話　森の中で（後書き）

プロト０「読者のみなさん、初めまして。俺、プロト０って言います。名前の読み方は、プロト・ゼロです。よろしくお願いします」

作者「いや～、なんか変な名前だね」

プロト０「人間達が勝手に付けたんですよ」

作者「ねえ、気に何か隠し事してるでしょ？」

プロト０「そんなこと無いです・・・」

作者「怪しい～」

プロト０「まあ、次の話で分かりますよ。きっと」

作者「そうだね」

第十二話　研究所へ（前書き）

ジュン「今回プロト０の秘密が明らかに！」

作者「いや、まだだよ」

ジュン「早くしてよ～気になるじゃないか！」

作者「そう言いなさんな」

第十二話　研究所へ

第十二話　研究所へ

『ここです』

プロトＯに導かれて歩くこと、１５分。ようやく着いたみたい。

そこには人の気配がまるでない研究所があった。

『へえ、ここが・・・。あれ、これは！』

ジュンが研究所の近くにある壁にくっつけられているプレートを指差す。

なにか人間の言葉で書いてあるようだけど、ぼくには読めない。

ジュンが驚いた顔をする。

『そんな・・・ここはポケモン・ヒーリング・カンパニーの研究所だ』

ポケモン・ヒーリング・カンパニー、ぼくも聞きおぼえがある。たしかジュンを雇っている組織の表向きの名前だったね。ポケモンの回復薬を作っている会社だったような・・・。

『あの・・本当に行くんですか？』

ぼく達が研究所の扉を開こうするのを見て、プロトＯは不安そうに

つぶやいた。

『ここまでの案内ありがとう・・・でも一緒に来たくないなら無理しないでいいよ』

ジュンがそう言うと、プロト0はぶんぶんと首を横に振った。

『一緒に行きたくないわけじゃありません。ただ・・・』

『言いたくないことは言わなくていいよ。自分が本当に言いたくなるその時まではね』

ジュンが研究所のドアをそっと開ける。

うわぁ、広いなぁ・・・。

研究所の中は思ったより広かった。これは調べるのが大変そうだなぁ。

『よし、二手に分かれよう。ボーマンダ、グレイシアと僕はこっち側。アブソルとシャワーズ、そしてプロト0君は向こうの通路から当たってちょうだい』

ぼく達はジュンの指示に従って二手に分かれた。

ぼく達は薄暗い廊下を歩いている。なんだか怖い（汗）

ぼくは薄気味悪さを紛らわせるためにアブソル先輩に話しかけた。

『アブソル先輩・・・なんか・・今日はいい天気ですね』

我ながら意味不明だなぁ・・。

そんなぼくをアブソル先輩はちらっと見た。

『シャワーズ、怖いなら無理せず外にいても良いんだぞ』

『怖いだなんて・・・そんなのないですよ』

『そうか・・ならいいんだがな』

なんか、アブソル先輩とは会話が会話が続かないんですけど。

ぼくはプロト0君の様子を見る。

プロト0君はビクビク震えて、顔面が蒼白だ。

なんか、変だね。怖がりがたが異常だ。

その時、ガタッと後ろで音がした。

振り向いてみると、そこにはバクフーンがいた。

なんだ、ここに住み着いてる野生のポケモンか・・・。

ぼくは近くに歩み寄る。

『ごめんね、勝手に入ってきちゃって。でもぼく達ここにちょっと用があるから・・・』

しかし、返事は返ってこず。バクフーンは虚ろな目をこちらに向けた。

その目を見た瞬間、やばいと直感した。

『逃げてください！シャワーズさん！そいつは危険です！！』

プロト0がそう言うや否や、バクフーンは僕に火炎放射を浴びせかけてきた。

間一髪で避けるぼく。

『敵発見。・・・人間の指示が無い。自律行動を実行する。』

何言ってるんだ・・・。

再び、バクフーンは僕に火炎放射を使って来た。

『悪の波動！』

アブソル先輩がぼくの後ろから悪の波動を放ち、火炎放射を相殺する。

『ハイドロポンプ！』

ぼくはバクフーンにできた一瞬のすきをついて激流を浴びせかけた。

ふらりと倒れるバクフーン。

『そいつも変な様子だったな』

アブソル先輩が呟く。

しかし次の瞬間驚くべきことが起こった。

水タイプの高威力技を受けたにもかかわらず、バクフーンが起きたのだ。

『そんな・・・馬鹿なことが』

アブソル先輩がとても吃驚している。

バクフーンはぼくに目を向けた。

『敵・・水タイプ技を保持。第一形態を解除し、第二形態へと移る』

そしてバクフーンの体が変化し始めた。

爪鋭利に伸び、背中から二本の大きな突起が生えてきた。

背中の突起がバチバチと音をたてる。

眼には凶暴性が見え隠れしている。

『第二形態への移行を完了。これより排除を実行する』

『く、ハイドロポンプ』

『十万ボルト・・・』

そんな・・・バクフーンは十万ボルトは使えないはず。

ハイドロポンプと十万ボルトはぶつかりあい消滅した。

『シャワーズさん。気をつけて！そいつにはいかなる常識も通用しません！』

後ろでプロト０が叫ぶ

『シャワーズ。援護するぞ。悪の波動！』

『・・・守る』

バクフーンの周りに発生した障壁が先輩の悪の波動を防いだ。

『・・・電光石火』

『く・・早い！』

バクフーンがアブソル先輩の後ろに回り込む。

『クロスチョップ』

そんな、また覚えられるはずのない技を使った・・・。

『ぐっ』

アブソル先輩が壁にたたきつけられる。

『これ以上はやらせない！』

プロト０がバクフーンの前に立つ。

『待って、君じゃそいつを倒せないよ』

その時、ぼくは振り向いたプロト０の顔を見た。とても悲しそうだ。

『シャワーズさん、俺実は―』

プロト０が何か言おうとしたまさにその時、後ろから声がした。

『どうしたの。さっき大きな音がしたけど?』

ジュン達が駆けつけてきたんだ。良かった・・・。

『人間の臭い・・・記憶・・怖い』

バクフーンは何かを呟いたかと思うと、突然体をかきむしり始めた。

バクフーンがかきむしることで自身の爪でできた傷は、瞬時にふさがっていく。

・・・見てられない。ぼくが目をそむけているとバクフーンが何やらぶつぶつと呟きだした。

『敵は排除しなければならない・・・人間やその仲間のポケモンを

攻撃してはならない・・・矛盾が生じている。行動不可能』

バクフーンはそう言うと、廊下を走って行ってしまった。

何だったんだ・・。

『さあ、あいつが戻って来ないうちに先に進もう』

ジュンがそう言うと、皆が頷いた。

しばらく行くと廊下の突き当たりに部屋があった。

『どうやら研究室みたいだね』

ジュンがそっとドアを開ける。

部屋の中には色々な機械が置いてあった。

床には本が何冊か落ちていた。

僕がふと一冊の表紙に目をやると、ポケモンの姿が書いてあった。

ポケモン関係の本かな・・・。

『これは・・・！』

その時ジュンが声をあげた。

ぼくが見てみると、ジュンは机の上にあった本のページを必死にめくっている。

『どうしたのよ?顔色が悪いわ』

グレイシアが心配そうにしている。

『・・・・日記を見ちゃったんだ』

『え?』

グレイシアの顔が戸惑いの色を帯びる。

ジュンはぼく達の方を向く。とても動揺している。

『・・・今からこの研究日記を読むよ。どうか静かに聞いて。・・・人間の罪を』

第十二話　研究所へ（後書き）

ジュン「ねえ今回の話、暗くない？」

作者「うん、暗いね。でも次はもっと暗くなるよ。それに・・」

ジュン「何？」

作者「残酷にもなるんだよね」

ジュン「痛い？」

作者「痛かったりはしないけど・・・人間の罪が明らかになるだけ」

ジュン「ちょっと止めてよ」

作者「では次話をお楽しみに」

第十三話　禁断の研究―キメラ―（前書き）

作者「今回はプロト０やバクフーンの謎が解けます」

ジュン「待ってました～」

作者「それに新キャラが登場するし」

ジュン「えっホント？」

作者「ホントだよ。では、お楽しみください」

第十三話　禁断の研究―キメラ―

第十三話　禁断の研究―キメラ―

所々、ページが破損しているところがあったが、僕はその研究日記を声に上げて読んだ。

―月―日。

今日から組織のプロジェクトが始動する。

午後、試験体のポケモンが送られてくる。

この試験体を明日にでも実験に使用する。

―月―日。

試験体一号であるケムッソに他のポケモンの体の一部を培養したものを手術により、取り付ける。

さらに超再生能力を付加する薬品を投与。

このケムッソのコードネームはキメラポケモン―プロトタイプ1―とする。

キメラポケモンとは別個体のポケモンまたはその遺伝子を、付加または組み込まれた人工ポケモンの事と定義する。

―月―日

プロト１の第一形態および第二形態（ここからはキメラ形態とする）のテストが無事終わる。

―月―日

プロト１が暴走、機材の一部を破壊する。

精神的崩壊の兆候が見られる。

精神安定剤の投与で静かになるが油断できない状況。

―月―日

プロト１の精神がほぼ完全に崩壊。

また人間を極度に恐れ、寄りつかなくなる。

薬品投与も意味をなさず、返って症状が悪化。

今回の実験の失敗点は―

―月―日。

プロト１の利用価値が無くなり、このキメラを廃棄することが決定。

しかし、毒薬注射直前にプロト１が逃走。以後姿を見せない。

人間に危害を加えることは無いので放置することにする。

―月―日

プロト1以後、何体かのキメラを開発するも、すべて失敗。

実験が難航してくる。

プロト9以後から、培養パーツ付加型キメラから遺伝子組み込み型のキメラに開発路線を変更する。

―月―日

プロト11のキメラ・バクフーン―エレキッド型―が他のキメラとは違い、私だけに従うようになる。

ただし他のキメラポケモン同様の人間恐怖症は克服できておらず、さらなる改良が必要。

―月―日

キメラ製造技術が確立してきた。後はキメラポケモンの原因不明の精神崩壊現象をどう抑えるかが今後の研究のカギとなる。

―月―日

超再生能力付加薬と他ポケモンの遺伝子の力がキメラの精神に大きな負担をかけていた事が分かった。

しかし組織にこのことを報告するも、超再生能力が無いキメラは認めないと、譲らない。

仕方なく、プロト１９にも同じ薬を投与する。

―月―日

プロト２１の製造が失敗した段階で、組織が超再生能力なしのキメラを認めることを決定した。

―月―日

ようやくキメラ技術が完成した。超再生能力付加薬を投与しないことで、精神崩壊を起こす要因は他のポケモンの遺伝子だけとなったがそれを抑える薬も開発が成功しかけている。

―月―日

キメラ技術が本当に完成したのかを確かめるために、そして私のポケモンを強化するために、

私は自分の手持ちのイーブイを最後のプロトタイプになる試験体に選んだ。

ただし、組織には秘密にしている。キメラポケモンは利用価値が無くなったものを除いて、

最終的には組織に回収されてしまうからだ。

―月―日。

イーブイは素晴らしい成果を上げている。

遺伝子の力についてだが、ある薬品を投与することでイーブイは完全にそれを制御できるようになった。

さすが私のポケモンだ。

私はこのキメラ・イーブイにプロト０のコード・ネームをつけた。

『ひどい・・・・』

シャワーズが呟いた。

『ジュン、読むのをやめてくれないか』

普段落ち着いているアブソルが悲しそうに言う。

しかし、他のポケモン達の言葉を聞く余裕は僕には無かった。

・・・僕はずっとハンターをやって来たけど、こんな実験をしていたなんて聞いたことが無い！

・・・・！突然、僕は組織がやってきた事を理解した。

そうか、組織はポケモンハンターを使ってキメラにするためのポケモンと言う材料集めをしていたんだ！

そして、その非道な研究の隠れ蓑はポケモン回復薬の製造。

まさか依頼人なんて最初からいなかったのか・・・・いや違う。そうじゃない。

本当に依頼はあったはずだ・・・。多分、十件中、三~四件ぐらいは本当の依頼だっただろうね。

ハンターたちが怪しまないように、嘘の依頼の中に本当の依頼を織り交ぜてたって事か・・。

僕が今まで、組織の裏の姿はポケモンハンター業をやっていることだと思っていたけど、どうやら思い込みだったようだね。

ポケモンの回復薬とポケモンハンター業によってもたらさせる莫大な利益がまさかこんな所で使われているなんて・・。

そして僕達ポケモンハンターは知らなかったとはいえ、キメラ研究に加担していたのか。

『ねぇ、プロト0もしかしてアンタも・・・』

僕が思い悩んでいると、グレイシアがプロト0に声をかけた。

『・・・そうです。俺は・・・キメラポケモン、なんです』

『どうして今まで隠していたの?』

グレイシアの言葉に、プロト0は静かに答えた。

『俺、あなた達と一緒にいると、とても楽しかったんです。でも、俺がキメラであることを知ったら・・・俺のこと避けるんじゃないかと思って』

『関係ねぇよ・・』

ずっと黙っていたボーマンダが喋りだした。

『普通だろうが、キメラだろうがお前はお前だ。そんな事でオレらがお前を避けるような馬鹿だと思っていたのか?』

『でも、俺はプロト0。不完全な存在なんです。そんな俺に仲間ができるわけ・・・』

僕はその言葉を聞いた時、心が痛んだ。

そうか、いくら完成された技術で改造されたキメラとは言っても、プロトタイプ。

彼はその名前に縛られているんだ。自分は試験体、自分は不完全、自分はプロトタイプ、そんな自分に仲間や友達ができるわけがない・・と彼はずっと自身を追い詰めていたのか・・。

『どうやらプロトの名はお前を苦しめる名前のようだな・・・じゃあ今日からお前はゼロだ』

その言葉には不器用だけど、優しさが込められていた。

『えっ』

『お前は今この瞬間からプロトタイプなんかじゃねえ。お前はゼロと言う名のイーブイだ。そしてオレ達の大切な仲間だ。皆、良いよな？』

『先輩もたまには気のきいたこと言うんですね。ふふ、よろしくね。ゼロ』

グレイシアがにっこりする。

『ぼく達と君は仲間だよ』

シャワーズの純粋な言葉。

『よろしくな』

アブソルのクールだけど、温かいセリフ。

『ゼロ・・・僕は、キミの純粋なところが好きだよ。これからよろしくね』

プロト０改めゼロは目に涙を浮かべた。

『俺はずっと認めてほしかったんです。・・・ありがとうございます、認めてくれて』

ゼロは涙を拭うと、キリッとした顔を僕達に向けた。

『改めて自己紹介をさせていただきます。俺はイーブイのゼロ。これからお世話になります』

『そう言えばさ・・』

僕達が和んでいると、シャワーズが突然口を開いた。

『ゼロはその研究日記を書いた人のポケモンだったんでしょ。何故ここにいるの?まさか捨てられたんじゃ・・・それにここのいるキメラ達が組織に回収されてなく、放置されているのも気になるんだけど』

『俺は逃げてきたんです。俺のトレーナーがやってることがどうしても許せなくて・・・そしてキメラになってしまった自分に困惑してしまって・・それで逃げたは良いけど、行くあてもなく研究所の周りをうろうろしていたら・・・』

『ラッタに襲われた、と』

アブソルが言葉を継ぎ足す。

『はい。キメラ状態の実験を行わされたばかりで体力を消耗していたので戦えませんでした』

『それで、ですね。シャワーズさんの二番目の疑問は俺もよくは知らないんですが・・・どうもキメラ達をここに放置しておくことでお互いに戦わせるよう仕向けたらしいです。で、十分経験を積ませたら回収しにくるつもりだと思います』

『でも、キメラは人間の仲間のポケモンを襲わないんでしょ?』

グレイシアの言葉に、ゼロは悲しそうに首を横に振る。

『ここに存在するキメラは戦闘経験を積ませるために人間以外の生物を襲うように仕向ける薬品を投与されています。研究員とか呼ばれる人間達が話してました。たまに人間の仲間のポケモンを襲ってはならないという気持ちが復活するらしいですけどね』

ああ、だからあのバクフーンは僕を攻撃できなかったのか。敵を排除しなければならいないと

いう気持ちと、人間の仲間のポケモンを襲ってはならないという命令がせめぎ合っていたわけか・・・。

僕は元人間だから人間の臭いのする僕と僕の周りにいるポケモンは人間の仲間だと思ったんだろうね。

『まぁ、ゼロも仲間になったことだし、こんなとこさっさと出ようぜ』

そうボーマンダが言った瞬間の出来事だった。

ガタンと扉が開いた。

僕達が吃驚して振り返ると、そこにはバクフーンと知らない女の子が立っていた。

年齢は僕と同じぐらいで結構かわいい。でも、目は氷のようだった。

「あら、こんなところにいたのね。プロト0。探したわよ」

『誰なんだあの女子？』

ボーマンダがゼロに尋ねる。

『・・・俺のトレーナーであり、キメラポケモンを中心になって作った人です』

『何だって！』

「さ、プロト０。私の元に戻ってきてくれるかしら」

『エリカ、俺は君の元には戻りません』

そんなゼロの顔を見たエリカは冷たく笑った。

「戻る気無しのようね。なら、強硬手段に出させてもらうわ。あなたは私が初めてゲットしたポケモン。あなたは私のものよ」

『俺は君を許すわけにはいかないんです！』

ゼロが勇ましく言い放つ。

「・・・プロト１１。プロト０を捕まえなさい！」

バクフーンはゼロの前に立つ。

『エリカの指示・・・最優先。ターゲット、プロト０。・・・捕獲を開始する』

『このバトル、勝ちます。絶対に！』

そして、キメラポケモン同士のバトルが始まった。

第十三話　禁断の研究―キメラ―（後書き）

ジュン「今回、ヤバそうな敵が出てきたね」

エリカ「呼んだかしら」

ジュン「うわっ」

エリカ「あなたもキメラにして上げましょうか？」

ジュン「って言うか、ポケモンを道具みたいに使って、なんか酷くない？」

エリカ「あら、実際ポケモンは道具じゃない。人類はこれまでいろんな道具を進化させてきたわ。石包丁は、金属製に。筆記用具は炭や血から鉛筆、ボールペンと言った具合にね。私はただポケモンと言う道具を一ランク上の道具に進化させようとしてるだけよ」

ジュン「この人・・・怖いな（汗）」

第十四話　ゼロＶＳプロト１１！キメラ同士の戦い　前編（前書き）

エリカ「今回はキメラ同士の戦い。いいデータが取れそうね」

作者「君にとっては嬉しい出来事でしょ」

エリカ「まあね。これでプロト０が帰ってきてくれたらもっと嬉しいわ」

作者「それは難しいかも・・・」

第十四話　ゼロＶＳプロト１１！キメラ同士の戦い　前編

「プロト１３、１４、１５、そのアグノム達を包囲して。手出しができないようにね」

エリカがそう言うと、さっきゼロを集団で襲ってたラッタ達が僕らを取り囲んだ。

「言い忘れていたけど、そのラッタ達には時間がたつほど肉体が強化される薬品が打ってあるのよ。まあ、投与した直後は身体能力が３０パーセントダウンしちゃうけど」

エリカはバクフーンの横に立った。

「プロト１１。最初からキメラ形態で行きなさい」

エリカがそう指示すると、プロト１１と呼ばれたバクフーンはキメラ状態に体を変化させた。

『・・・・十万ボルト』

背中の二本の突起から電撃が放たれる。

『ボディチェンジ！タイプ、サンダース』

ゼロがそう言った瞬間、彼の体が瞬時に変化していく。

ゼロが・・サンダースになった・・。

十万ボルトはサンダースとなったゼロには何の効力も無かった。むしろ特性、蓄電でゼロの体力を回復させる結果になった。

『・・・電気技は効果なし。・・・・火炎放射』

バクフーンは口から炎を放とうとする。

『無駄です。ボディチェンジ！タイプ、ブースター』

ゼロの体がサンダースからブースターに変わった！・・・信じられない。

火炎放射はブースターの特性貰い火によってゼロを強化してしまった。

『火炎放射！』

ゼロが放った火炎がバクフーンに襲いかかる。

バクフーンは炎タイプだからダメージは減少してるけど、貰い火によって強化された火炎放射は確実にダメージを与えてる・・。

『・・・電光石火』

バクフーンが一瞬でゼロの後ろに回り込む。

『・・・クロスチョップ』

『読んでましたよ。ボディチェンジ。タイプ、エーフィ！』

エスパータイプのエーフィは格闘タイプの技を半減できる。正しい判断だね。

『今度はこっちから行かせてもらいます。サイコキネシス！』

ゼロの念動力がバクフーンを縛る。

『・・・行動不可能』

そのまま、バクフーンを壁にたたきつけるゼロ。

しかしできた傷は瞬時にふさがっていく。日記に書いてあった超再生能力と言うやつか。

『ボディチェンジ。タイプ、ブラッキー！』

今度はブラッキーに変化した。

しかし、妙だな。なんでシャワーズにならないんだろう？

僕がそう疑問を抱いているとエリカが氷の笑みを浮かべながら言った。

「プロト0、あなたがそこまでキメラの力を使いこなせてるなんて驚きだわ。でも、イーブイ進化系統のシャワーズとグレイシアと遺伝子を私が投入しなかったのはあなたにとってマイナスになったわね」

『エリカ・・・そう言うのならポケモンをキメラにした事自体が、

ポケモンにとっても・・・そして君にとってもマイナスなんです』

「なにか言いたげな顔ね。まあいいわ。プロト１１、引き続き捕獲作戦を実行して」

何故なんだ・・・もう勝負はついたも同然じゃないか。ゼロにはバクフーンの主力技が二つも効かない段階でかなり不利なのに・・。

僕が注意深く見ていると、ゼロの異変に気付いた。

大したダメージを受けてもいないのに息が上がってる・・・？

「ふふ、やっぱり。遺伝子の力を使いこなすには相当の体力がいるのよ。そんなに姿を変えまくったら持たないわ」

『・・・そんなことはエリカ、君に言われなくても分かっています。ブラッキーの姿に変わったには理由があるんです。怪しい光！』

ゼロの目から光が放たれた瞬間、バクフーンが混乱状態になった。

「プロト０・・・プロト１１には超再生能力があるのよ？混乱状態にして自分を攻撃させて自滅を狙うのは無謀だわ」

『・・・俺がそんな楽天家だと思いますか？これは回復のための時間稼ぎです。月の光！』

ゼロの体が淡い光に包まれた。怪しい光から月の光へと繋げるためにブラッキーになったのか・・。

ボディチェンジで失った体力を一気に取り戻す作戦のようだね。

バクフーンはゼロには目もくれずに自分を攻撃している。

『さあ、一気に行かせてもらいます！超再生能力と言っても無限に使えるわけじゃない。必ず綻びが生まれる！ボディチェンジ、タイプエーフィ！』

ブラッキーより特殊攻撃に優れてるエーフィに変わって一気に勝負をつける気だ。

『サイコキネシス！』

混乱状態のバクフーンの動きを縛るゼロ。

『俺のキメラ能力は、ボディチェンジだけじゃないんです』

ゼロはサイコキネシスでバクフーンを縛りながら、なんとサンダースになった！

なるほど、サイコキネシスの効力はボディチェンジで他の姿になっても持続するのか・・。

『雷！』

あれ、ゼロが四種類以上技を覚えている・・・？

『俺の他のキメラには無い特徴は組み込まれている遺伝子の種類の数×四種類の技が覚えらる事・・・俺の中にはシャワーズとグレイシアを除くイーブイ進化系統のすべてのポケモンの遺伝子が存在します。よって覚えられる技の許容量は二十種類！』

二十種類だって！・・・これがキメラ技術の力・・。

バクフーンはサイコキネシスで縛られ雷を避ける事は出来なかった。

その場に崩れ落ちるバクフーン。傷がふさがっていない。どうやら超再生能力が使えないまでのダメージを受けたらしい。

『ゼロってこんなに強かったのね・・・』

僕の横で感嘆するグレイシア。

その言葉にゼロは首を横に振る。

『この強さはキメラとしての借り物の力です。褒められる力ではありません』

ゼロはそう言うと、エリカの方を向いた。

『エリカ、バクフーンは倒れました。このラッタ達もジュンさん達の力をもってすれば倒せます。もう、退いてください』

エリカはまるでゼロの言葉を理解したように、ほほ笑んだ。

「あら、プロト１１はまだ戦えるわ」

『無理です。彼は立ち上がれないほどのダメージを受けています。その証拠に超再生能力も発動していない』

「・・・戦えるわよ。プロト１１にこの薬品を投与すればね！」

エリカが白衣のポケットから注射器を取り出した。中には透明な液体が入っている。

「これは先日開発したばかりの薬、Ｐ－０８。これはポケモンの体力を回復させ、一定時間、運動能力と技の威力を飛躍的に増加させる・・・それこそ特性で無効化しきれないほどにね。まあ副作用で死んじゃうかもしれないけど」

そんな・・・そこまでの副作用をもつ薬品を投与する気か！

『この野郎っー！とっ捕まえてやる！』

僕の横でボーマンダがついに切れた。エリカの向かって飛ぼうとする。

「プロト１３、そいつを捕まえなさい」

『くそっ！動けねぇ』

さっきエリカが言った通り、プロト１３と呼ばれたラッタの一体が尋常じゃない速さでボーマンダを掴み、床にたたきつける。

『エリカ、もうそれ以上罪を重ねるのは止めてください！』

ゼロの叫びも虚しくエリカはバクフーンに近づき、注射を打った。

「この子には私の役に立ってもらうわよ・・・その肉体が滅ぶまで！」

第十四話　ゼロＶＳプロト１１！キメラ同士の戦い　前編（後書き）

ジュン「エリカの残虐さがますます増したね」

作者「言っとくけど、残虐さが増すのはエリカだけじゃないよ」

ジュン「もしかして、僕達の組織も・・・・？」

作者「うん」

ジュン「これ以上どんな非道なことを・・・」

作者「それはお楽しみってことで」

ジュン「楽しみにできないなぁ」

第十五話　ゼロＶＳプロト１１！　キメラ同士の戦い　後編（前書き）

ゼロ「今回は俺視点です」

作者「いよいよ、決着がつくんだね」

ゼロ「そうです。ではお楽しみください」

第十五話　ゼロＶＳプロト１１！　キメラ同士の戦い　後編

俺の目の前でバクフーンがゆっくりと立ち上がる。

傷が完全に治っている。

「さあ、プロト１１。作戦を続けなさい」

バクフーンは俺の方をゆっくりと見る。

大丈夫・・・Ｐ－０８を投与されたとはいえ俺のボディチェンジで火炎放射と十万ボルトは無効化できる。

この勝負、冷静に対処すれば勝てる！

バクフーンが動いた。来るか・・・・。

あれ、消えた・・・！？

その瞬間俺は背後に気配を感じた。

『ターゲット・・・・捕捉。クロスチョップ』

まずい！

俺はボディチェンジで姿を変えようとしたが、体が変化する前に技を喰らってしまった。

『がはっ』

俺は壁にたたきつけられた。

『火炎放射』

『ボディチェンジ！タイプ・・・』

俺がブースターに変わる余裕を与えず、火炎放射が俺を襲った。

やばい・・・やられる！

『十万ボルト！』

俺がとっさに使った十万ボルトは火炎放射を防いでくれた。

しかし、ボディチェンジ発動が間に合わないほどの高スピード・・・

さすがエリカの開発した薬ってところか。

こうなったらブラッキーに変化して怪しい光に繋げるか・・・。

『ボディチェンジ！タイプ、ブラッキー』

俺の体がブラッキーに変化する。

よし！これで怪しい光を使えれば・・・月の光で回復できる。

でも変だな・・・あのバクフーン、俺のボディチェンジに対して攻撃してこなかった・・。

俺はそのとき自分がとんでもない誤算をしてしまったことに気づいた。

しまった！あいつの狙いは俺が怪しい光で攻めること読んでいて、ワザとブラッキーへの変化を見過ごしたんだ。

早く他の姿にならないと・・・！

『・・・クロスチョップ』

俺がハッと振り返るとバクフーンがいつの間にか後ろにいた。

守る暇もなく、俺は床に叩きつけられた。

『ゼロ！』

ジュンさんの叫び声が聞こえる。

俺は何とかして立ち上がった。

『怪しい光！』

放った怪しい光はバクフーンに命中した。

よしこれで月の光につなげれば・・・。

「残念だったわね、プロト０。Ｐ－０８で強化されたポケモンは状態異常にならないのよ」

エリカの声が俺を深い絶望の底に叩き落す。

『・・・・クロスチョップ』

俺は二回目のクロスチョップを喰らってしまった。

駄目だ。もう立てない。

バクフーンが俺を掴む。

虚ろな目がこちらを覗き込む。

『・・・・・て』

あれ、今バクフーンが何かをしゃべったような・・？

バクフーンが何かをつぶやく。しかし、声が小さすぎてよく聞こえない。

『た・・・け・・・て』

一度バクフーンは言葉を切ると、もう一度ゆっくりと言った。

『た・・すけ・・・て』

俺はビックリして彼の顔を見る。いま、助けてって言わなかったか？

『助けて・・・・下さい』

さっきまでの虚ろな目とは違い、その瞳にはハッキリとした意志があった。

どうやら、このプロト１１と呼ばれているバクフーンの精神は完全に崩壊してはいないようだ。

『もう嫌なんです・・・』

バクフーンの声には深い悲しみがにじみ出ている。

『・・・助け・・うぁぁぁ！』

急にバクフーンの様子が変になった。精神的に安定していないんだな。

『・・・ターゲット捕獲・・エリカの指示通り・・・・苦しい・・助けて・・・』

今、彼の精神はキメラの力にかなり蝕まれている。

『待っていて下さい。今楽にします』

俺の言葉にバクフーンが少し微笑む。

『ボディチェンジ！タイプ、サンダース』

俺は捕まれた状態でボディチェンジを行った。

『・・・十万ボルト』

どうやらキメラの力に精神を再び飲まれてしまったバクフーンが俺に攻撃を仕掛ける。

こ・・これは！ぐっ・・・特性蓄電を持っているはずの俺に何故、ダメージが・・。

そうか、これがＰ－０８の力・・・特性でも防ぎきれないほどの攻撃ってやつか。

助かった・・・ダメージを受けたとはいえ蓄電でかなり軽減できている。彼は火炎放射もクロスチョップも使えたはず・・・。

どうやら、精神的異常をきたしながらも、今のサンダースの姿ではダメージを受けにくい技を選択してくれたらしい。

『行かせてもらいます！雷』

電気タイプの高威力技だ。

バクフーンは俺の攻撃を防がず、ただ耐えている。必死で攻撃しようとする自分を抑えている様子が一目でわかる。

『もう一回、雷！』

今度の攻撃でかなりふらついている。

そんなバクフーンをみて、エリカが言った。

「プロト１１。なにしてるの？さっさと攻撃しなさい。超再生能力は無限に使えるわけじゃないんだからね」

それでも、攻撃しないバクフーン。エリカに逆らうには相当の精神力が要るだろうに・・・。

エリカの指示に無言の抵抗を示すバクフーンにエリカはため息をついた。

「役に立たない道具はこれだから嫌なのよね。まあ、いいわ。プロト１１の様子を見る限り、まだポケモンとしての理性が残ってるようだし、この分じゃ私の命令に逆らい続けるだろうから今日は一旦退かせてもらうわ。手持ちのポケモン、本部の研究所に置いてきちゃったことだしね」

そういうと、エリカはジュンさん達を囲んでいるラッタ達の方を向いた。

「あなた達にもう用はないわ。さっさと何処かにいきなさい」

エリカの言葉を聞くと、ラッタ達は廊下を走って行ってしまった。

再び俺のほうを向くエリカ。

「・・・じゃあね、プロト０」

そういうとエリカは白衣をたなびかせながら去って行ってしまった。

『・・・・火炎放射』

いきなりバクフーンが俺に攻撃を仕掛けてきた。間一髪でよける俺。

どうやらエリカが立ち去ったことで少し緊張感が緩み、攻撃的な精

神にのっとられてしまったらしい。

『待ってください。俺達にはもう戦う理由はありません！』

『敵を捕捉・・・ぐ、ぐあああああ！』

叫び声を上げ、その場に崩れ落ちる。

俺は慌てて、バクフーンのそばに近づき、脈を診る。

やばい・・・・。このまま放って置いたら確実に・・・・死んでしまう！

これがＰ－０８の副作用か。

『ゼロ、どうしたんだ？』

アブソルさんが覗き込んでくる。

『・・・このバクフーン・・・あの薬品の副作用で死にかけています』

『何だって！』

『ど、どうすればいいの？』

シャワーズさんがオロオロする。

『今から俺の言うことをよく聞いてください。この研究上は二階建てで、合計５０近くの部屋があります。その部屋のどこかに、ポケ

モン用回復薬とキメラの精神を落ち着ける精神安定剤があるはずです。それを取ってきてください。俺はここで、このバクフーンを他のキメラから守っています』

『じゃあ、一階は僕とシャワーズとグレイシア、二階はボーマンダとアブソルの二手に分かれてその二種類の薬品を探そう！』

『できるだけ急いでください』

『分かってる』

ジュンさん達が走って行くのを見送る俺。

頼む、間に合ってくれ。

そう願う俺の横で、バクフーンが苦しそうに息をしている。

今はただ、祈るしかない・・・。

第十五話　ゼロＶＳプロト１１！　キメラ同士の戦い　後編（後書き）

ジュン「あのバクフーン、死なないよね・・」

作者「さあ、どうかな？」

ジュン「って言うか、エリカが作品中でポケモンのこと道具呼ばわりしてなかった？」

作者「何をいまさら」

ジュン「そうなんだけどさ～エリカのせいであのバクフーン死にそうだし・・・」

作者「まあね。彼女、冷酷で非情かつ非道だから・・ポケモンの命を奪うことについて何のためらいもない人だしね」

ジュン「読者さん。エリカをどう思いますか？ちょっと酷すぎると思うんですけど・・・！」

作者「ほとんどの読者さんは、嫌いだと思うよ」

第十六話　エリカの協力者（前書き）

ジュン「バクフーン（プロト１１）は助かるのか！？」

作者「さあ、どうだろうね～」

ジュン「っていうか、何このタイトル？」

作者「気になる？」

ジュン「まあ・・ね」

第十六話　エリカの協力者

『・・・・見つからないね』

僕の横でシャワーズがため息をつく。

『シャワーズ！手を止めない！命がかかってるんだから、もっとテキパキ探しなさい！』

グレイシアがシャワーズに叱咤激励する。

『この部屋にはないようだね・・・』

僕のつぶやきにグレイシアがうなだれる。

『もう１０部屋も探してるのよ！一体どこにあるの！？』

僕達は次々と部屋に入り、薬を探していく・・・。

『ハアハア・・・ここで最後から5部屋めね』

部屋に入ると、そこには大量の薬品がずらりと並べられていた。ビンゴのようだね。

『なんだかここにありそうな雰囲気だなぁ』

シャワーズが感嘆の声を上げる。

『よし、探すわよ！』

『ところでさ・・・キミ達、人間の字、読めるの？』

僕は意気込んでいるグレイシアとシャワーズに質問する。

その瞬間、二人が固まった。

え、もしかして・・・読めない？そんなはずないよね・・・文字が分かんないならこれまでどうやって薬を探していたんだって話になるよ・・・？まあこれまでの部屋には薬品自体なかったんだけどさ

『・・・ごめん。ぼく読めないんだ』

『私もよ・・・』

『えっ！読めないの！？これからどうやって識別するつもりだったの？まあ、他の部屋には薬自体無かったから識別のしようが無かったけど・・』

『私達・・・薬を見つけたらジュンに見せて判断してもらおうと思って』

『なんで最初から言わなかったの？字は読めないって』

『だって・・・字が読めないのに手伝うぼく達が役立たずに思われ

るかもって思うと・・いえなかったんだ。黙っててごめんね』

『そんな・・・役立たずなんて思うわけ無いじゃないか』

『だって、ジュンがポケモンハンターやってるとき時々ポケモンを商品とか言って物扱いしてたこともあったしさ・・・』

僕がポケモンを物扱いしていた?まさか・・・いやハンターをやっている時は確かにあった。

捕獲したポケモンは商品として見ないとポケモンハンターは務まらないからね。

そうか、僕の言動がシャワーズたちを傷つけていたのか。ある意味では物扱いしていたかもしれないな。戦闘のための道具として見ていた面も否定できないね・・。

でも、それが悪いことだとは特に思わなかったし・・今も悪い事とは思っていない自分がどこかにいる。

『ねえ、シャワーズ。今は薬を探すのが先決じゃない。このことは後で話そうよ』

僕が話を変えるとシャワーズはうんと頷いた。

『ねえ！これなんかどうかしら』

グレイシアが僕の前に新たなビンを持ってくる。

僕はラベルを見た瞬間ビックリした。

ラベルにはポケモン廃棄用薬品と書かれていたんだ！未開封のようだからどうやら使われなかったらしいけど。

『グレイシア・・・それポケモンを殺すための薬だよ』

『えー！またはずれ！一体どこにあんのよ、その回復薬って言うのは！』

グレイシアはビンを乱暴に床に置くと他の棚に走っていった。

『ねえねえ、ジュン。これは？』

今度はシャワーズが手に持っていた薬を差し出す。

・・・また凄まじい効能を持った薬だな。説明するのがなんか嫌だ。しかもどうやら使用された痕跡があるし。

『ジュン？』

シャワーズがこちらを覗き込んでくる。

『その薬品はね・・。簡単に言うと、苦痛剤。人間に反抗するポケモンに投与することで・・・徹底的にポケモンを痛めつけるための薬さ。説明によるとポケモンの神経系に直接作用して全身に激しい

痛みを伴わせる効果を持ち、投与量しだいで痛みをコントロールできるようだね』

シャワーズがショックを受けている様子が人目で分かる。

あれ?ラベルの隅に名前が書いてある。これの持ち主の名前かな?

そこには、エリカと書いてあった!

彼女・・こんな残酷な薬まで使用していたんだね。

それからしばらく探していたがポケモンの回復薬は出てこなかった。

『ハァ、次の部屋に行くしかないわね』

『ここで当たりと思ったんだけどな』

僕とグレイシアが部屋から出ようとしたその時、シャワーズが声を上げた。

『ねえジュン!これは!?』

シャワーズが持ってきた薬にはポケモン回復用薬品と書いてあった。

『この部屋に在ったんだ・・。ありがとうシャワーズ。君のおかげ

で見つかったよ』

シャワーズは嬉しそうだ。

僕達は急いでゼロとバクフーンの元に向かった。

『あっ、ジュンさん！』

僕の姿を見るなりゼロが嬉しそうに言う。すでにボーマンダとアブソルがいた。

バクフーンの様子が落ち着いているのから察するに、精神安定剤があったのだろう。

『これでいいかな？』

僕が薬を手渡すと、ゼロの目が輝いた。

『ハイ！これです。見つけてきてくれてありがとうございます』

ゼロは薬を器用に取り出すと、バクフーンに飲ませた。

バクフーンの苦しそうな息使いが次第に収まっていく。

よかった・・・間に合ったみたい。

僕達は安堵の息をもらした。

そしてジュンたちが安堵しているちょうどそのころ。

エリカは車の後部座席に座り、ノートパソコンを開いていた。

前では少年が運転している。黒髪を少々雑に切り、色黒な少年だ。

年はエリカと同じ位に見える。

「ふふ・・キメラたちは素晴しい成果を上げているわ。見事な戦闘データよ」

エリカがそういうと、少年はちらりとエリカの方を見た。

「あんまポケモンに酷いことせんといてな。気分が悪うなる」

「あら、知ってるくせに・・・私がポケモンにしてることぐらい。ねえ、アキラ」

アキラと呼ばれた少年は顔を少し曇らせる。

「まあ、ええけどな・・」

それから少しの間、エリカがキーボードを満足げな顔をして叩く音しか聞こえなかった。

その沈黙を破ったのはアキラだった。

「ところで・・・プロジェクト・キメラはどこまで進んでるんや?」

「もうすこし少しデータが必要ね。最終段階まではまだまだよ。やっとキメラ技術が完成したところ」

「そうか。あと二時間ぐらいしたら本部で会議やろ？大変やな・・幹部さんは」

「今のところ、実験に組織の設備を使ってるんだから、それくらい我慢しないとね」

エリカはそう言うとメモリースティックをノートパソコンに差し込んだ。

「さてと・・・保存完了」

そしてノートパソコンを閉じる。

「エリカ・・・自分が何を考えているんか俺はしらへんけどな。あんまり暴走したらあかんで。ポケモンのことでもや」

「科学は暴走するときが一番発展するのよ。何かを得るには同等の犠牲が必要になるの・・・どんな時でもね」

それにね、とエリカは付け足す。

「私、ポケモンのことは好きよ。あれほど利用価値が高い道具はそうないでしょうね。それに・・・ポケモンが苦しむ姿は私に喜びを与えてくれるもの」

エリカはそう言うとアキラに笑いかけた。

第十六話　エリカの協力者（後書き）

ゼロ「誰ですか?あのアキラって言うのは?」

作者「エリカの協力者としか言えないなぁ」

シャワーズ「なんか変な計画があったんだけど・・・プロジェクト・キメラ?何あれ」

作者「それも後のお楽しみ」

???「おいっ!作者!また新キャラ出しやがって!」

作者「あ、国際警察の少年。どうしたの?」

???「どうしたのじゃねえよ!俺が出番ずっと待ってるのに・・・無視し続けやがって」

作者「大丈夫。君はそのうち出すから」

???「本当か?」

作者「本当だよ」

???「・・・信じてやるよ」

第十七話　ポケモンハンターとして（前書き）

ゼロ「今回はどういう話なんですか？」

作者「ふふ、ジュンがポケモンハンターであることを再確認させられる話さ」

ゼロ「へえ、なんだか気になりますね」

作者「では、第十七話をどうぞ！」

第十七話　ポケモンハンターとして

研究所にいたのはせいぜい一時間程度だったのに何年もいたような感覚がする。

たぶん、あそこの雰囲気が狂気に似たものだったからだろう。

プロト１１と呼ばれていたバクフーンは治療後、大量の精神安定剤を持って森の中に消えて行った。

研究所に戻るとまたあの雰囲気に蝕まれ、精神崩壊しそうだからいい判断だと思う。

さて、僕たちは昼下がりの森を再び歩いているのだけど―。

シャワーズ達が暗い、というか怒ってる。

まあ仕方の無いことだとは思うよ。ポケモンを使用した残酷な実験の記録やエリカの言動・・・それらをいっぺんに見せられたんだからね。

『ねえ・・』

『何？』

うあっ・・シャワーズ不機嫌だなぁ。

『あのさ・・・』

『ジュンは・・・どうするの?』いきなりシャワーズが真剣な顔をして聞いてきた。

『何が?』

『・・ポケモンハンターのこと。今、ぼくすごく腹が立ってるんだ』

『エリカに?』僕は恐る恐る聞き返してみる。

『そう。それとP・H・Cのことも・・・そしてポケモンハンターのこともね』

『シャワーズ、僕達ハンターは今回の件は知らなかったんだよ・・・』

僕は弱弱しく反論する。

『どっちでも同じさ!ポケモンにとっては知ってた、知らなかったの問題じゃないんだよ!現にあんな残酷なことが行われていたんだ!あの計画に関与した事実は変わらないんだ。エリカもそして・・・ジュンも!!』

僕が今まで見たことのないシャワーズの怒り。

シャワーズが怒った・・・。

僕は正直驚いていた。

『あの・・・ハンターってどう言うことですか?』

ゼロは話についていけていない。

『ジュンは元々人間だったのよ。そして、Ｐ・Ｈ・Ｃ公認のポケモンハンターでもあったの』

『ええっ！』

グレイシアの説明にゼロが驚いて僕の方を向く。

『・・・本当だよ。ゼロ』

『ジュンさん・・・』

『知らなかったとはいえ、キメラ製造に関っていたことは謝るよ。でも、ハンターはやめられない。僕には・・・それしかないから』

『ジュン・・・』さっきまで怒っていたシャワーズが僕に何かを言おうとする。

しかし、その時リュックの中からユウタに借りた携帯電話が鳴った。

僕は急いでリュックの中から携帯を取り出す。

「もしもし」

「ＮＯ．４か。私だ」

ボス！？

「あの、用件は何でしょうか？」

「ＮＯ．４。お前に依頼が来た」

おかしいな・・・ハンターリストから外してもらっているから依頼は来ないはずなんだけど。

「あの、いま休暇中なんですかど・・・それにハンターリストから外れていますし」

「そのことなんだがな。・・・かなり前からの顧客で、お前がお気に入りだからぜひ依頼を受けてほしいのだそうだ」

僕の顧客・・・・リーフさんか。

ポケモンコレクター、リーフ。闇ルートから非合法に珍しいポケモンを高額で買取し、それを観察することを至上の楽しみとする変わり者だ。

僕がＮＯ．４とハンターランキングが高いのも、彼が評価してくれたおかげ。

以前から僕のことがお気に入りだとは言っていたけど・・・・ここまでとは。

「・・・どうだ。断ることもできるぞ」

これは・・・・ほぼ１００パーセントキメラとは関係ない。彼はコレクションであるポケモンを傷つけたりはしない。まあ、自分がほしいポケモンだったら他人から奪い取ることも辞さない人だけど。

「分かりました。その依頼、受けます。それでですね、今回のターゲットは？」

「キッサキ神殿にいるレジギガスだ」

うあっ・・また超難関どころだな。それにこの姿では一人じゃ成功したとしても取引できないな。

「あの、一人だけでは捕獲できるかどうか不安なんですが。ＮＯ．１５と共に依頼をこなすというのはどうでしょうか？」

「それが無理なんだ。ＮＯ．１５は今、ラブカス捕獲の任務でいない。そうだな・・・別のハンターを送ろう。今、任務についていないい・・・ＮＯ．１がいいだろう」

ええ～マジですか。待ってよ！今はアグノムの姿だからユウタの人に（特にハンター）以外に見られるのは不味いかも。

「ＮＯ．１とは明日の午前六時、合流場所はキッサキシティのポケモンセンター裏口だ。お前はボーマンダを持っているから空を飛ぶでいけるだろう。Ｐ・Ｈ・Ｃのバッジを襟元につけているから分かると思うぞ。それでは健闘を祈る」

ボスはそう言うと、電話を切ってしまった。

どうしよう。困ったことになった。

この姿で他のポケモンハンターに会う。これは・・・ヤバイかも。

しかし、依頼を受けたからにはこなすのがハンターとしての務め。

やるしかない。

『ジュン・・・依頼受けたの?』

シャワーズが聞いてくる。

『受けたよ』

『なんでさ!』

『今回の依頼はリーフさんだ。彼のことは知ってるでしょ。ポケモンコレクターだからポケモンを傷つけることはしないよ。もちろんキメラにするなんてことは在りえない』

『でも・・』

シャワーズが口ごもる。

それまで黙って聞いていたボーマンダが口を開いた。

『やっぱり依頼は受けたんだな?理由をもっと具体的に話してくれないか』

『キメラの材料集めのためと思われる匿名の依頼は断るよ。でも、依頼した人物が誰だがわかっている場合は受けるのが筋だと思う。ハンターにとってはね』

僕がそう答えるとボーマンダは何かを言おうとするが、途中で止め

た。

『僕は明日の朝六時にキッサキシティのポケモンセンターの裏口に行かなきゃならない。明日はボーマンダには頑張ってもらわないと』

『オレは別に良いが・・・アグノムの姿で町に出るのか?』

『そうだよ。ユウタは明日任務でいないから・・・他のハンターと共に任務をこなす事になるけどね』

『その姿でか?!大丈夫かよ、作戦とかはねえの?』

『いざとなったら・・・ゼロにブラッキーに変化して、そのハンターに怪しい光を浴びせてもらって僕たちはその間に逃げる。そうすれば、人間の言葉を話すアグノムはブラッキーの見せた悪戯だったと思わせられるから。ボスには任務失敗の報告を出すさ。かわいそうだけど、わざわざ来てもらったハンターにはドタキャンすればいいし』

明日会うハンターってどんな人なんだろう。NO.1か・・・ハンターランキングのトップじゃないか。

僕はただそのことが気になっていた。

第十七話　ポケモンハンターとして（後書き）

シャワーズ「ジュンったら・・・キメラ製造に知らなかったとはいえ関っていたのにまだハンターとして働くなんて・・・」

作者「今回は彼の冷たい一面を出してみました」

シャワーズ「普通、依頼は断ると思うけどなぁ」

作者「ポケモンハンターは依頼は断らないものなんです」

シャワーズ「でもさ・・・ポケモンの気持ちを考えたら・・・止めると思うけど」

作者「ハンターは情に流されてはやっていけないからねえ。ジュンはどこか冷めてるんだよ」

シャワーズ「ぼくも同意（汗）」

第十八話　ＮＯ．１との接触（前書き）

作者「今回、アキラの正体が明らかに」

ジュン「早くない？前回出てきたばかりだよ？」

作者「いいんだよ。前から予定していたことだから」

ジュン「へえ・・・」

第十八話　ＮＯ．１との接触

僕はボーマンダの上に乗りながらＰ・Ｈ・Ｃの研究所にいたキメラのことについて考えていた。

一体Ｐ・Ｈ・Ｃは何のためキメラを作ったのだろう？

その目的が分からない。

ゼロといい、プロト１１といい・・・あれらの力は常軌を逸している。

自分の姿を変えたり、覚えられるはずのない技を覚えていたり・・。

僕にとっては怒りより先に驚きという感情が芽生えた。

そして・・・少しだけど・・あの力が完全に制御できれば、スゴイことだと思ってしまった。

ポケモンが犠牲になることで得られる力なんてスゴイはず無いのに。

たぶん、ハンターとしての癖・・・どこかポケモンを道具として見てしまう気持ちがこんな考えを生じさせるのだろう。

僕は・・・冷たい心の人間なのかもね。時々、ポケモンを仲間・・いや家族として扱う人たちがうらやましくなる。

僕もあんな真っ直ぐな目をして、ポケモンと付き合えたらいいなと思うことがよくある。

でも、ハンターなんてやってる僕には無理な話だね。

ポケモンと家族同然の関係を作るなんて。

僕がキメラの存在を知った後でさえ、ハンターを続けるのには理由がある。

一つはハンターを続けていれば、P・H・Cとの接点が保ち続けられると言うこと。

機会があれば、キメラのことについて何か調べられるかもしれないから。

もう一つの理由は、簡単だ。・・・ポケモンハンターを止めたくないから。

僕からハンターを取ったら・・・何が残るだろう？ハンターの仕事以外に僕が得意なことがあるだろうか。

僕は自身の保身のために非道なことをやっている、P・H・Cに従う。

ハハハ・・・最低だね、僕って。

『ジュンさん・・・どうしました？』

僕の後ろからゼロが話しかけてきた。

ゼロには入るためのモンスターボールが無いから、僕と一緒にボー

マンダの背中に乗っている。

『なんでもないよ』

適当に答えておく。

『でも・・・』

口ごもるゼロに僕は尻尾で交互に頭を叩いてやった。

『そんな顔しないで。何でもないから』

『そうですか・・』

『もうそろそろ到着するぜ』

ボーマンダが飛びながら言った。

『見えてきたね・・・』

僕の目の前には純白の町、キッサキシティが広がっていた。

『あの深い森の近くに下りてくれる?』

僕がそう言うと、ボーマンダは『あいよ』と短く返事をした。

木々には雪が降り積もっている。きれいだ。

ボーマンダをボールに戻し、降り立った（浮遊しているけど）僕は感動してしまった。

『素晴しい景色ですね』

横でゼロが感嘆する。

『いつまでも見とれていたいけど・・・行かなきゃね』

僕がそう言うと、ゼロはこっくりとうなずいた。

ここはポケモンセンター前。

僕たちはいま隠れながら裏口の前で待っているというハンターを探している。

『あっ、あの人じゃないですか?』

ゼロが指差した先には、一人の少年が扉の前に立っていた。

色黒の肌に、乱雑に切った髪。毛糸の白い帽子と手袋をかぶり、時々手に息を吹きかけている。

手袋していても寒いのだろう。そして・・・襟元には逆三角形の枠のなかにP・H・Cの文字があるバッジをしている。

間違いない・・・彼が僕と接触する予定のハンターだ。

僕は彼にそっと近づいた。そして、近くにあった看板の後ろに隠れる。

そして、しゃべり掛けてみる。緊張の一瞬だ。

そして、僕が口を開いたその時だった!

「なんで、そこに隠れてんのや?」

な・・・。僕たちのことに気がついている・・!?

「看板の後ろにいる自分が、俺と接触する予定のハンターやな?」

「はい」

「・・・姿隠す理由を説明してくれへんか?」

口で説明するより、見てもらった方が早いと思って僕は看板の後ろからでた。

その少年は一瞬驚いた表情をした。

「幻のポケモンアグノムやんか・・・しかもリュック背負ってるし・・」

僕はリュックからＰ・Ｈ・Ｃのバッジを見せる。

「僕はポケモンハンター、ＮＯ．４です」

「へえ、ポケモンがポケモンハンターかいな・・・」

「今はポケモン姿ですが・・元は人間です」

そう説明しつつ、僕はかなり緊張していた。もし、捕まえられたらどうしよう・・・。

「元人間・・・なあ。まあええわ。今この瞬間から俺らはパートナーや。俺はポケモンハンターのＮＯ．１。よろしゅうな。ついでに言うと仲間を捕獲して売るような男やないから緊張せんでもええで」

そう言うとＮＯ．１は気さくに笑った。

「それでですね、ＮＯ．１さん。キッサキ神殿のレジギガスの件ですが・・」

「まあ、それは待ちいや。今は人が多すぎる。夜まで待つのがええと思うで」

「しかし・・・」

「大任務の前はリラックスが必要やで。そうやな・・キッサキジムに挑戦するのなんて楽しそうやん♪」

「ＮＯ．１さん・・・面が割れますよ。そんなことしたら・・・」

「そう・・やなぁ。でも、夜まで何もせんで待つのはきついで」

落ち込むＮＯ．１。っていうかこの人本当にハンターなの？

「あの、ＮＯ．１さん・・」

「その言い方口ばったいから、もう本名で呼び合おうや。俺はアキラや。自分は？」

急に本名を名乗り出たＮＯ．１もといアキラ。

「僕はジュンです」

「いい名前やん」

「はあ、ありがとうございます」

「ところで・・・そっちの子は？」

アキラがゼロを指差す。

「このイーブイはゼロって言うんです」

ゼロはペコリと頭を下げた。

「へえ、変わった名前やな。まあええわ。それよりこれからどうするかや」

「そうですね・・・」

僕たちはしばらく考え込んでいたがアキラが何かを思いついたように顔が明るくなった。

「自分とバトルすればええやん」

「は?」

何言ってんのこの人・・・。

「自分もトレーナーやろ?だったらポケモンバトルせえへんか?」

「しかし、任務の前にポケモンを戦わすのは・・・戦力を削るようなものでは?」

「大丈夫や。ポケモンセンターが目の前にあんねんで」

「でも・・」

「さっここでバトルするとアグノムの自分が目立つから・・・あの林でやろうや」

アキラはそう言うと僕とゼロを抱いて林の方へ歩いていった。

第十八話　NO．1との接触（後書き）

ジュン「アキラさん、なんか変わってるな」

作者「まあねえ」

ジュン「ポケモンバトル好きそうだし、優しそうだし・・・なんでハンターになんかなったのかな？」

作者「それはおいおい明らかになるよ」

ジュン「またですか（汗）」

作者「それと・・・次の話は本編から脱線する予定だから」

ジュン「？」

作者「他の人の作品とのコラボをやるんだ」

ジュン「コラボ！？」

作者「イエス」

ジュン「キャラの使用許可取ったの？」

作者「いや～それが分からないんだよね。勝手に使っていいのかなぁ。それとも使いますって断るのが礼儀なのかな」

ジュン「誰かこの（馬鹿な）作者に教えてあげてください（汗）」

第十九話　異世界から来た「最強」（前書き）

ジュン「ようやくコラボが書き終わったようだね」

作者「今回は頑張って書いたよ」

ジュン「まあ、それが最低限の敬意だよね」

作者「ではお楽しみください」

第十九話　異世界から来た「最強」

林の中を二人の影が歩いていた。

「Ｂ－０６地点はここかしらね」

手に持っている小型の機械を見ながら少女―エリカはつぶやいた。

「エリカ様、やっと到着しましたね」

そうエリカに話しかけたのは二十代前半の若い女性だ。ポケモンハンター専用の対ポケモン感知用特殊ゴーグル、通称Ｐ‐ゴーグルをかけているので無表情に見える。

「本当もうくたくただわ」

エリカは愚痴をこぼしつつ手に持っている装置を弄る。

「・・・ここから力場を測定できる。間違いないわね」

「今回の任務は半径一キロに存在するポケモンたちを出来るだけ捕獲せよとのことでしたが・・・一体そんなに捕まえてエリカ様は何に使うのです?それに幹部であるエリカ様直々に現場にいらっしゃるのはすこし不自然かと・・」

「ハル・・・あなたがＮＯ．３という上級ハンターであっても幹部に対する越権行為は慎むべきよ?あなたには関係の無いこと・・」

エリカの凍る様な言葉にハルは少しゾッとした。

「でも少しぐらいは教えてあげるわ。私がここにいるのはあるポケモンの事を調べるため。そして今回の大量捕獲は秘密の計画に必要なポケモンをそろえるため。まあ、私がここにいるのとあなたのポケモン大量捕獲作戦には秘密のつながりがあるのだけれど・・・それは内緒よ」

エリカはそう言うとうっすらと笑った。

「さて・・・ハル、あなたにはこれからポケモンを捕まえまくってもらうわ」

エリカはそう言うとハルに機械―かつてジュンがミュウ捕獲のときに使った機械―を手渡した。

「これはP・H・C特製の瞬間石化ビーム発射装置よ。これを腕につけて指の近くにあるトリガーを引くと、石化ビームが発射されるわ。これを使って対象物を石化すればハンティングがかなり楽になるわね」

「石化はどうやって解くのですか?」

「この装置の裏側に小さな扉があるでしょ。ここに石化を解くための薬品が入ってるわ」

エリカの説明にハルはうなずく。

「分かりました。では、行ってまいります」

そう言うとハルは茂みの中に入って行った。

同じ頃・・・・・。

『リュウマ、もうそろそろお昼にしたいのさっ！』

白く翼の生えたポケモン―トゲキッス―が一人の青年に話しかける。

リュウマと呼ばれた青年はポケッチをちらりと見た。

「ああ、そうだな。・・・飯にするか。っても食べるモンあんまねーぞ」

『僕様がとってきてあげるのさっ！』

「そうか、サンキューなハク」

ハクと呼ばれたトゲキッスは森の中に消えていった。

リュウマは近くにあった岩にドッカと座り込む、

「他の奴らも出してやらねーとな。出て来い！シロガネ、リョク、ソウ、クレナイ、クロ！」

リュウマの周りにジバコイル、リーフィア、ミロカロス、ギャロップそして漆黒のバンギラスが出てきた。

『やはり、外は良いものなのです』

『リョクの言うとおりだな』

黒いバンギラスが言う。

リョクととばれたリーフィアが伸びをする。

『・・・少し暑いですね。私の技で涼しくしましょうか？』

「いや、止めてくれ。ソウの高レベルな技をぶちまけたら山の土が全部流されちまう」

リュウマのオーバーな表現にミロカロスのソウはふふと笑った。

『しかし・・・クレナイがいると暑さが十倍ぐらいに感じられるな』

『私は炎タイプゆえ仕方の無いことなのだ。クロよ』

ギャロップのクレナイが静かに言う。

黒いバンギラス―クロは地面に転がった。

『やっぱ土の上は涼しいな』

満足そうにうなずくクロ。

『クロ・・・食事ヲスル前ニ地面ノ上ニネルノハドウカト思イマス』

『お前はいちいち細かいんだよ。シロガネ』

『アナタガ雑ナダケデス』

「いい争いはそこまで。もうそろそろハクが食い物をとって来てくれるからそれまで心静かにいようぜ」

リュウマが仲裁に入る。

『リュウマの言うとおりなのです。お昼を食べたら寒いキッサキシティに行くのですから我慢するのです』

リュウマ達はある組織の噂を聞き、キッサキシティに向かっているところなのだ。

リョクの言葉にソウがうなずく。

『白銀の町、キッサキシティ。そこに例の組織の噂を聞くからこそここまできたのですから・・』

『ああ、ソウの言うとおりだな』

クロが同意する。

と、そこへハクが帰ってきた。なにやら顔が蒼白（元々白いが）だ。

「ん？どうしたハク？」

『すごいもの見ちゃったさ・・・リュウマたちも僕様と一緒に来てほしいさ！』

ハクの言われるままリュウマ達がついていくとそこには想像以上の光景が広がっていた。

「これは・・・！？」

絶句してしまうリュウマ。

『みんな・・・石になってやがる』

クロが近くにあったムックルを触ってみる。

『一体ナンナノデスカネ・・・コレハ』

その時、向こうから悲鳴がした。

リュウマ達が悲鳴のした方に駆けつけてみると、一匹のヒメグマと女性ポケモンハンター、ハルそして、ビークインがいた。

ハルが放つ石化ビームを必死によけるヒメグマ。

しかし、ヒメグマが急に倒れた。

「私のビークインのどくどくは効くでしょ」

そうハルは言うと倒れているヒメグマに発射口を向けた。

次の瞬間ビームがヒメグマを襲う！

『させないさ！エアスラッシュ！』

ハクが放った空気の刃がビームをはじいた。

ビームは近くにあった木に当たり、枝を石化させた。

『どうやら、あのビームに当たると石になっちまうみてえだな』

クロの言葉にリュウマがうなずく。

『今のうちさ！』

ハクが倒れているヒメグマを持ち、ハルから遠ざける。

「そのようだな・・・それはそうと」

リュウマはハルの方を向く。

「ねえちゃん、何モンだ？何でこんなことをしやがる？」

「私はポケモンハンター、ＮＯ．３。いえ、ハルでいいです。任務の邪魔をしないでください」

「へえ、ハンターね。俺はリュウマだ・・・ハルとか言ったな。悪いが邪魔させてもらうぜ」

「・・・貴方には関係の無いことです。それに、私と戦ったからといって貴方には何の利益にもならない。そのヒメグマは大切な商品です。こちらに渡しなさい」

「いーや、関係ならあるぜ。俺はアンタみたいにポケモンを扱う奴が嫌いでね。俺がここで倒してやるよ」

リュウマの挑戦的な言葉にハルは顔をしかめる。

「仕方が無いですね。・・・・行きなさい、ビークイン！」

『潰して上げるわ』

「ハク！出番だ！」

『あいあいなのさっ！』

ハクとビークインが対峙する。

「ビークイン！メロメロよ」

ビークインがトゲキッスにウインクした。

その瞬間、トゲキッスの頬が赤くなる。

『そ・・・そんなに見つめられても僕様困っちゃうさっ』

「ハク、騙されるな！それは罠だ！」

リュウマの声が届くはずも無く、ビークインの前でモジモジするハク。

『ねえ、私の言うこと聞いてくれる？』

ビークインがハクに囁きかける。

『な・・・なんなのさ～』

『いいもの上げるからこっち来てくれる？』

ハクはフラフラとビークインに近づく。

「今よビークイン！どくどく！」

ビークインがどくどくをハクに放つ！

『・・・いいプレゼントありがとうなのさっ』

「くそっ・・・完全に魅入られてやがる。仕方がねぇ・・・戻れハク！」

リュウマはどくどくがハクに当たる前にハクをモンスターボールに戻す。

「私のビークインのメロメロは普通のメロメロじゃない・・・相手の心を完全に捉えるのよ！」

『メロメロか厄介だな・・・』

クロが呟く。

『ココハ私ニオマカセクダサイ』

「頼んだぞ、シロガネ」

「・・・ジバコイル、ね。毒タイプを無効化そして虫タイプの技が半減・・」

「ついでに言うとメロメロも効かないんだよな、これが」

次の瞬間、ハルがいきなりシロガネめがけて石化ビームを放ってきた！

『オット・・・ミラーショット、デス！』

石化ビームはジバコイルのミラーショットと相殺された。

「おいおい、姉ちゃんよぉ・・・不利だからってそれはねえんじゃねえか？」

「・・・私にとっては任務の遂行が最優先事項。どんな手でも使わせてもらうわよ」

再び石化ビームの発射口をリュウマ達に向けるハル。

「俺は・・・卑怯な手は許せないんだ。シロガネ、ミラーショットをあの装置に放て！」

『分カッテイマス。ミラーショット！』

「ビークイン、攻撃指令でミラーショットを相殺させなさい」

ビークインが蜂の大群を放つ。

しかしミラーショットは攻撃指令を打ち破り、ハルの腕の装置に当たった。

バチバチッと音がする。

『どうやらあの装置壊れたようね。これで彼女の戦力にダメージを与えられたはず・・・』

『ソウよ・・・元々ハルと言うハンターが主様が誇る私達に勝てるはずがないのだ。すでに実力さは一目瞭然だ』

「ハルさんよぉ・・・これでセコイ手を使えなくなったぜ」

ハルは黙って装置を腕から外し、地面に投げ捨てる。

「ああ、エリカ様に何を言われるか・・・これ高いんですよ。貴方たちに弁償してもらわなくてはね」

「俺たちをアンタが倒せたら考えてやるよ」

「・・・ビークイン、攻撃指令！」

「シロガネ、十万ボルト」

シロガネの十万ボルトは攻撃指令を打ち破りビークインに命中した。

『くっ・・・ハル、あのジバコイルかなり強い！』

「回復指令よ！」

ビークインの周りに蜂たちが集まる。

「なるほど・・・シロガネ、長期戦に持ち込まれたらウザイからコレで決めるぞ！ロックオンだ」

『了解デス』

ソロガネのロックオンがビークインを捕らえる。

「ロックオン・・・まさか！」

『電磁砲！』

ビークインは空へ逃げるが電磁砲は追尾してくる。

そして―

『きゃあああ』

ビークインが悲鳴を上げ、地面に落ちる。

『撃破デスネ』

『・・・・シロガネって言ったけ。あなた・・強いのね』

『私ダケデハアリマセン。リュウマノ仲間ハ皆強イノデス。ツイデニイイマスト私ノ実力ハ上カラ四番目デス』

『あなたで四番目？・・・・ビックリ・・ね、ホント。ハル、どうやら・・私たちは運が悪い・・・よう・・ね』

ビークインはそう言うと、力なく気絶した。

「よくやってくれたわ。休んでいてね」

ハルはそう言うと、ビークインをボールに戻した。
ハルは腰のホルダーからダークボールを取り出す。
「迷いしものを敗北へと導け！出てきなさい、アリアドス！」
『あのアリアドス強そうなのです。見ただけで分かるのです』
リョクが感心した風に言う。
『シロガネ、気を抜かずに行けよ』
クロの言葉にシロガネはコクリとうなずく。
「アリアドス、糸を吐く！」
「シロガネ、ミラーショットではじき返せ」
糸を吐くはミラーショットにあたり、消滅した。
「・・・やはり彼自体を捕まえるのは不可能ね。アリアドス、アレをやるわよ」
『へえ、ハルがアレを使うように言うとはな・・・・』
「回転しながら糸を吐く！」
ハルがそう言うとアリアドスは高速で回転しながら糸を吐いた。

周りの木や岩に大量の糸が付着する。

まるで糸のレーザー網だ。

「・・・気をつけろよ、シロガネ。罠の匂いがするぜ」

『ワカッテイマス』

「アリアドス、ミサイル針！」

アリアドスが大量の針を放ってくる。

「避けろ、シロガネ！」

シロガネはミサイル針を回避したが、アリアドスの糸の何本かに体が触れてしまった。

その瞬間、シロガネが少しだがクラリとする。

「どうした？」

リュウマが少し驚く。

『コノ糸ニハ・・・ドウヤラサイコキネシスガ流レテイルヨウデス』

『ハハッ当たりだぜ！俺は紡いだ糸に俺の特殊技を流せる特技を持っているんだよ。その糸触れたら俺以外の奴はダメージを受けるってことだ。ハルはこの罠をトラップ・ウェブと呼んでいるぜ』

アリアドスがにやりと笑う。

「ったく、うざい技使いやがって。だが、壊しちまえば関係ねぇ。シロガネ、十万ボルト！」

シロガネから放たれた電流は糸に直撃する。

しかし、糸はまったくの無傷だった。

『ホウ、私ノ十万ボルトヲ受ケテモ無傷トハ・・・』

「サイコキネシスがあの糸を守ってやがる」

「どうかしら、私のアリアドスが紡ぐトラップ・ウェブは？サイコキネシスは触れた相手にダメージを与えると共に糸の保護にも役立つのよ」

『加えて言うと、相手の動きを規制するのにも使えるんだぜ』

アリアドスが補足説明をする。

「なるほどねぇ。確かにアンタのアリアドスは強いな。シロガネ、クレナイと交代だ」

シロガネが後ろに下がりクレナイがアリアドスの糸に触れないように前に出る。

『主様、長期戦に持ち込まれると厄介です。一気にかたをつけましょう』

「ああ、そのつもりだ」

「アリアドス、ミサイル針！」

『そんな攻撃では私には当てられん』

ギャロップは素早く攻撃を避ける。

「クレナイ、高速移動だ！」

『御意』

「く・・・なんていうスピード。ほとんど見えないなんて・・！？」

『焦るな、ハル。アイツは確かに早い・・尋常じゃねえ。だがトラップ・ウェブ内ではその抜群のスピードを制限できる』

「今だ、大文字！」

クレナイが放った大文字がアリアドスを襲う。

『おっと、サイコキネシス』

アリアドスはサイコキネシスで炎の軌道をずらした。

「アリアドス、ミサイル針！」

『何度やっても無駄だ』

クレナイは身軽にミサイル針を回避し―

『しまった！』

糸を踏んでしまった。

「くそっ・・・クレナイの身軽さを逆手に取るとは」

クレナイにサイコキネシスのエネルギーが流れ込む。

『主様・・・糸を流れているサイコキネシス、なかなか強力です・・・こ、これは！？』

「クレナイ、どうした？」

『どうやらサイコキネシスの他にもあの糸には何か技が絡めてあるようです。・・・たぶんどくどくでしょう』

『言い忘れていたが、その糸にはサイコキネシスのほかにどくどくも仕込んであるんだぜ。まあ、さっきの奴が毒タイプの技が効いていたらそれに気づけただろうに・・・残念だったな』

「これでそのギャロップは猛毒状態ね。下手に動けばサイコキネシスのダメージを受け、動かずともどくどくの時間がたつごとに増えていくダメージが襲う。コレこそ、トラップ・ウェブの真骨頂よ」

『主様・・・』

「ああ、クレナイ。本気でいけ」

「・・・どういうこと？まさか貴方今まで本気じゃなかったの？」

「俺は元チャンピオンだぜ。こんなもんじゃねえよ。そう言えば・・アンタさっきからミサイル針ばかり指示してるよな？・・・もしかするとトラップ・ウェブに使っている状態で同じ技は使用できないんじゃねえか？」

「ばれていたのね・・」

「サイコキネシスやどくどくを糸に流している間はアリアドス自身はそれらを使えねえ。いわば無防備状態だ。まあ、さっきクレナイの大文字を防いだときは一瞬だけ糸にサイコキネシスを流すのを止めて防御に使ったんだろうがな。その判断力の速さ、さすがと言っておこうか」

「・・・仕掛けが分かったからといってこの罠から逃れられるわけじゃない」

「それはどうかな？タネが分かっちまった手品は案外脆いぜ。クレナイ、大文字を二発連続で放て！」

「技を同時使用？そんなことできる訳・・・・」

ハルの予想はすぐに裏切られた。

クレナイは二つの大文字を放った。一つはアリアドスの糸。そしてもう一つはアリアドス本体に向けてである。

「アリアドス、糸に流すのを止めて自分をサイコキネシスで守りなさい！」

アリアドスは自身の周りにサイコキネシスを集め大文字を防御した。
しかし、サイコキネシスの守りを失った糸が大文字に耐えられるはずも無く燃え盛る。
そしてその火はどんどん他の糸に飛び火していき、最終的には周りが火に囲まれた。
「私のトラップ・ウェブが看破された?!」
「よしクレナイ、火の海に飛び込め」
クレナイは燃え盛る火に飛び込む。まるで水浴びをしているようだ。
『なにしてんだ、あいつ?』
アリアドスが首を傾げる。
「ギャロップの特性は逃げ足か・・・・貰い火!」
「正解だぜ。クレナイ、フレアドライブ!」
火の中からクレナイが全身に火をまとい飛び出す。
「く、サイコキネシスよ!」
アリアドスはサイコキネシスで反撃をする。
だが貰い火で強化されたフレアドライブに勝てるはずも無く、一瞬

で看破される。

『私とリュウマに本気を出させたは褒めてやろう。だが、これで終わりだ』

フレアドライブがアリアドスを襲った。

アリアドスはハルのほうへ吹き飛び、ハルにぶつかった。

「くっ・・・！」

衝撃でＰ－ゴーグルが外れて地面に落ちる。

後ろの木に体を打ちつけるハル。

ハルはそのままぐったりと倒れた。どうやら気を失ってしまったらしい。

『やったのです！』

リョクが喜ぶ。

『あいつらもよく頑張ったほうだが・・・俺が出るまでも無かったな』

クロが倒れているハルたちを見ながら言う。

「もう少し手ごたえが欲しかったな。・・・クロ、気づいているか？」

『もちろんだ』

「いつまで見物している気だ？そこにいるんだろ？」

リュウマが近くの木に目を向けた。

木の陰から一人の少女が白衣のポケットに手を入れながら出てきた。

「へえ、いつから分かっていたのかしら」

「そこに倒れてる姉ちゃんとの戦いがちょうど佳境に入ったころからだよ」

「すごい探知能力ね。それにハルを倒してしまうなんて。言っとくけど、彼女上級ハンターなのよ？」

「ああそうだろうな。・・・見たところアンタはそいつの上司ってとこか。何モンだ？」

「私はエリカ。ある組織の研究開発部門の上級研究員、そして幹部よ。あなたこそ何者かしら？」

「俺はリュウマ、ただのトレーナーさ」

エリカはリュウマのほうに改めて向き直る。

「・・・そのバンギラス、珍しいわね。それにあなたもポケモンと話す能力を持っているようだし。そうね・・・」

エリカは手を白衣のポケットから出した。手には小型の装置が握ら

れている。

そして装置のボタンを押す。

「データ解析中、しばらくお待ちください。・・・・スキャン実行率は現在３０％です」

その装置から発せられた合成音声が告げる。

「何だよ、それ」

リュウマは訝しげだ。

「こっちの話よ。それはそうと・・・あなたのその黒いバンギラス、気に入ったわ。ぜひデータに加えたいわね・・」

エリカはそう言うと、モンスターボールを取り出した。

「スキャン完了まで遊んで上げるわ」

「どうやらアンタはハンターを雇っている側らしいな・・・アンタも倒させてもらうぜ」

エリカとリュウマの両方は不敵な笑いを浮かべている。

バトルが始まる前の静けさがその場にはあった。

第十九話　異世界から来た「最強」（後書き）

ジュン「うあぁぁ！出会ってはいけない二人が出会ってしまったぁぁ！！」

シャワーズ「おおお落ちていてよ。ジュン」

作者「と言うことでポケットモンスターＸ（クロス）～Ｄｅｓｔｉｎｙ～からリュウマ君達に来てもらいました」

ジュン「なんでそんなに冷静なのさ!?あの二人って・・・最悪の組み合わせじゃないか！」

シャワーズ「混ぜるな危険って書いてあるじゃないですか！」

作者「まあまあ落ちていて二人とも。実を言うと前からリュウマとエリカを出会わせてみたかったんだよね」

ジュン「悪趣味な・・・」

作者「ま、赤神先生とリュウマ君にはもう一回付き合ってもらいます。よろしくお願いします」

第二十話　激突　リュウマＶＳエリカ　前編（前書き）

ジュン「今回、リュウマさんとエリカが対決するね」

作者「そうだよ。ついにエリカのポケモンが明らかに！」

ジュン「どんな戦い方するのかな？」

作者「それは読んでのお楽しみ」

第二十話　激突　リュウマＶＳエリカ　前編

エリカは鞄から特製のノートパソコンを取り出すと近くにあった切り株に置いた。

そしてパソコンの横についているカメラのような装置のダイヤルを回し、リュウマ達にカメラを向ける。

「ロー、今から始まるバトルのデータ採取をしてちょうだい」

「・・・誰に話しかけてんだ？」

「ふふ・・・。このパソコンと手にある小型装置には私たちの組織の人工頭脳［Ｌａｗ］通称ローのシステムの一部が組み込まれているの。まあ、母体システムのコピーに過ぎないけど」

そのときコンピューターから機械音がした。先ほどエリカの小型機械から発せられたのと同じ合成音声だ。

「了解しました。エリカ様。データ採取システム起動。これよりお二人のバトルを記録します」

「これで準備完了。さあ、あなたに悪夢を見せて上げるわ」

「悪いがお前には負けないぜ。出て来い、ハク！」

『ピューンと僕様登場なのさっ』

「ヨノワール、痛めつけてあげなさい」

『ほう、貴様らが私の相手か』

二人のポケモンが対峙する。

「ハク、シャドーボール！」

ハクは黒いエネルギーの球体をヨノワールに飛ばした。

「ヨノワール、こちらもシャドーボールよ」

シャドーボール同士はぶつかり合い消滅した。

「なかなかやるな・・・ハク、エアスラッシュ！」

『速攻こそ僕様の命なのさっ！エアスラッシュをくらえなのさっ』」

ハクが空気の刃を放つ。

「なるほどエアスラッシュね・・・シャドーボール！」

ヨノワールが再び放ったシャドーボールはエアスラッシュを相殺するかに見えたが・・。

シャドーボールを切り裂きエアスラッシュがヨノワールを襲う。

「へえ・・・ヨノワール、守る」

バリアが空気の刃からヨノワールを守る。

『さっきから守ってばっかりでムカつくのさっ！！』

「落ち着け、ハク。だがお前の言う通りだな。一気に決めるぞ！」

『あいあいなのさっ』

「波動弾は効かねぇから・・・ハク、あれで行くぞ！」

『僕様の必殺技を使うのさっ！？』

「そうだ。・・・ハク、ゴッドバード！」

ハクの体が輝き始める。飛行タイプ最強の技ゴッドバードだ。

「ゴッドバードね。エネルギーチャージには時間がかかるはず。ヨノワール、シャドーボール」

シャドーボールがハクに向かって放たれる。

「確かに普通のポケモンなら時間がかかる。だが、ハクは・・・ゴッドバード発動にかかる時間はかなり短いんだぜ。いまだ、行け！」

『僕様の攻撃を受けてみろなのさっ』

ハクがシャドーボールを難なく突破しヨノワールに向かって突撃する。

「ヨノワール、守る」

ヨノワールは守るを発動したが・・・。

『く・・馬鹿な』

ヨノワールがつらそうに呻く。

どうやらゴッドバードを防ぎきれなかったようだ。

『技が当たる直前に守るを発動されて、ダメージが半減しちゃったさ・・』

ハクは悔しそうだ。

「気にすんなって。奴にかなりのダメージを与えられた。お前のおかげだ」

リュウマはそう言うと、エリカに向き直った。

「・・・もういいわ。あのトゲキッスが使う技は分かったし防戦はおしまい」

「何言ってんだ・・・おまえ」

エリカがニコリと微笑む。

「ヨノワール、金縛り」

その瞬間ハクが一瞬ビクッと震えた。

『リュウマ・・・なんか変な感じがするのさ。力が抜けるような感

じなのさ・・』

「金縛り・・たしか相手が直前に使った技を一定時間封じる技。くそっウザイ技使いやがって。だが俺の経験では金縛りの効力が続く時間は5分ほどだ」

「そうね・・一般的にはそれぐらいね。でも、私のヨノワールの金縛りは４０分は続くわよ」

「なんだって・・・！？」

リュウマが驚きの声を上げる。

『ここは一旦引いた方がいいのさっ』

「そうだな。戻・・」

「させないわ。ヨノワール、黒い眼差し！」

黒い眼差しは相手を逃げられなくする技だ。これでハクは引けなくなった。

「く・・・こうなったら攻めるしかねぇ。ハク、エアスラッシュ！」

（エアスラッシュは相手をひるませることがある。そしてハクの特性は天の恵み・・・技の追加効果の出やすさが二倍になる。これでヨノワールをひるませ続ければ・・・）

「ヨノワール、天の恵みとエアスラッシュの追加効果のコンボは厄介だからここは守りに徹しなさい」

『守る！』

ヨノワールのバリアがエアスラッシュを防ぐ。

「まだだ！ハク、連打でエアスラッシュ！」

『僕様の連続攻撃を受けてみろなのさっ！』

ハクがエアスラッシュを連射する。

『く・・防ぎきれん』

そしてバリアが壊れたと同時にヨノワールにエアスラッシュの連打が襲い掛かる。

エアスラッシュの追加効果でひるんでいるのでヨノワールは反撃できない。

巻き上げられる砂埃。

「やったか？」

『僕様の攻撃を受けて立ち上がれる奴なんていないさっ』

リュウマ達が目を凝らしているとヨノワールが出てきた。

『そんな・・・僕様の攻撃で倒れないなんてありえないのさ・・・』

エリカが微笑んだ。氷の笑みだ。

「ヨノワール、金縛り」

『く・・またなのさ。リュウマ、僕様の技でヨノワールに効くのは後シャドーボールだけなのさ』

「ハク、あいつは今の攻撃で相当のダメージを受けている。シャドーボールが最後の頼みの綱だ。一気に押し切るぞ」

『シャドーボール連弾！』

ハクが一気に数個のシャドーボールを放つ。

「ヨノワール、特大シャドーボールを放ちなさい」

エリカが指示するとヨノワールは両手いっぱいに特大サイズのシャドーボールを作り、それを放った。

「嘘だろ・・・！どこにそんな力が！？」

ハクのシャドーボールの連弾とヨノワールのシャドーボールはお互いに消滅した。

「今よ。ヨノワール、金縛り」

ハクは体を震わせた。もう彼には使える技が波動弾しかない。しかしゴーストタイプのヨノワールには格闘タイプの波動弾が効かない。

リュウマには分かっていた。金縛りの効果が切れるのはあと３６分

程度。その時間を凌ぎハクが勝つのは不可能だと言うことを。

「これでそのトゲキッスは完全に無力化された」

『せめてもの慈悲だ。一気に倒してやるぞ』

ヨノワールは再び特大のシャドーボール作ろうと手を上げた。

しかし―

「ヨノワール、あなたもしかして一気に勝負を決めようとか考えてないでしょうね？駄目よ」

『しかし・・・もう彼の技はすべて封じました。一気に勝負を決めやらないと苦しみが続くだけかと・・』

そういいながらエリカの方を向いたヨノワールは一瞬ビクッとした。

エリカはこれまでにないほど残酷な笑みを浮かべていたからだ。

「一気に勝負をつけたら面白くないわ。もっと苦しませるのよ。徹底的に叩き潰すの。そうね・・ヨノワール、鬼火」

『はい・・』

ヨノワールは手から鬼火を放った。

『リュウマ・・・なんか体が熱いのさ』

ハクは不安そうに言う。それもそのはず鬼火は相手を焼けど状態に

する技。

エリカは徹底的にハクを弄ぶつもりだ。

「てめえっ！もう勝負はついただろうが！なんで・・・！」

怒鳴るリュウマにエリカはなんでもない風に答える。

「私が楽しいからよ」

「な・・・！？」

「私はポケモンが傷ついたり苦しんだりするのを見るのが大好きでね・・・。だから私はバトルが好きなのよ。合法的にポケモンを苦しませることも・・・時には殺すことも出来るのだから」

「エリカ・・・てめえだけは許せねぇ！」

リュウマの怒る姿を見ても楽しんでいる様子を崩さないエリカ。

「・・・ヨノワール、後は何もしなくても良いわよ。後はそのトゲキッスが苦しむ姿を観賞するとしましょう♪」

『あのエリカという少女なんて酷い奴なのでしょう・・・』

リュウマとエリカのバトルを見ていたソウがつぶやく。

『ソウ、大丈夫だ。リュウマもハクも悪に屈したりはしない』

クレナイが毒消しのスプレーを器用に自分とヒメグマにかけながら

言う。

しかしその表情は心配そうだ。

「ハク・・・」

リュウマがハクの方を見る。

ハクは辛そうにだが心の火が灯った目でリュウマを見返す。

「行けるか？」

『・・・努力してみるのさ』

『私の金縛りを破る気か？止めておけ、体力を消耗するだけだ』

『そんなことやってみないと分からないさっ！！』

「エリカ様。あのトゲキッスのエネルギーが３２％増加しています」

ローが無機質に告げる。

「へえ・・」

エリカがそう呟いた瞬間、ハクの体が輝き始めた。ゴッドバードだ。

『馬鹿な・・・私の金縛りが！？』

「今だ！ゴッドバード！」

ハクはヨノワールに突っ込んでいく。
そして・・・。
「戦闘不能ね。相打ちとはいえ私のヨノワールを倒すとはちょっと驚きよ」
ハクとヨノワールは気を失っていた。
「ハク、よくやってくれた。戻ってくれ」
「ヨノワール、戻りなさい」
二人はポケモンをボールに戻した。
『リュウマ。次は私が行くのです。ハクを弄んだ彼女は許せないのです！』
リョクが怒りの眼差しをエリカに向ける。
「出てきなさい。ジュペッタ」
人形のようなゴーストタイプのポケモンが出て来た。
「リョク、影分身！」
リョクの姿が無数に増える。
「ジュペッタ、恨み」

恨みは相手の技の使用回数を減らす技だ。

「くそ。また胸くそ悪い技使いやがって・・」

リュウマがはき捨てるように言う。

「ジュペッタ、シャドークロー」

『ケケッ。俺の攻撃を受けてみな』

ジュペッタの手に大きな黒い爪が現れた。

『おらっ！シャドークロー』

「リョク」

『分かっているのです』

ジュペッタのシャドークローがリョクの一体を襲ったが・・・。

その瞬間リョクの体が消えた。

『あり？影分身の一体だったか？』

間の抜けた声を出すジュペッタ。

「今だ、リョク」

『リーフブレードなのです』

リョク達が一気にリーフブレードを飛ばす

「守る、よ」

『ケケッ了解♪』

ジュペッタは守るのバリアーでリーフブレードを防いだ。

「ジュペッタ、恨み」

『またなのです！？正々堂々戦ったらどうなのです！』

『リョクっつたっけ。残念ながら、そういうの俺もエリカも好きじゃないんだよな♪』

ジュペッタがおどけて言う。

「トレーナーの性格の悪さがポケモンにも反映されてるいい例だな」

リュウマが皮肉る。

「リョク、リーフ・・・」

「今よ、ジュペッタ、不意打ち」

不意打ちは相手が攻撃技を選んでいたら先制攻撃できる技だ。

『く・・・けっこう効くのです』

「リョク、穴を掘る」

リョクは穴を掘るで地中に潜った。

「ジュペッタ、シャドークローを用意しておきなさい」

『あいよ。出てきたとこを攻撃してやるぜ』

ジュペッタの手に黒い爪が現れる。

そのときリョクが地面から出てきた。

『もらったぜ。シャドークロー』

ジュペッタが爪でリョクを切りつける。

「残念だったな」

リュウマがにやりと笑う。

切りつけられたリョクの姿がふわりと消えた。

そして、先ほどとは別のところからリョクが姿を表す。

『あなたが出てきた私を狙うことぐらい分かっていたのです。だから身代わりを地中で発動させ身代わりに攻撃させたのです。そして、あなたは攻撃を行った後少し隙が出来るのです・・・リーフブレード！』

葉の刃がジュペッタを襲う。

『イテテテテ』

ジュペッタがその場に倒れる。

『やったのです?』

『残念でしたぁ～♪』

ジュペッタが立ち上がる。

『そんな・・・私のリーフブレードが』

「く・・・あのジュペッタ化け物か?さっきの姉ちゃんとは比べ物にならないぐらい強ぇな」

リュウマの額に冷や汗が流れた。

「当然よ・・・。ジュペッタ、恨み」

ジュペッタが目を細め、怨念を送る。

『く・・・次で決めてやるのです。リーフブレード・・・!?』

リョクが驚いた表情をする。

『リーフブレードが使えない・・・のです』

「リョクのメイン技が封じられたか・・・ソウ、リョクと交代だ」

『ケケッ・・敵前逃亡ってか』

ジュペッタがくすくす笑う。

『何を・・・！』

リョクが飛び掛ろうとするのをソウが制する。

『ここは私に任せて・・・』

ソウは静かな目でジュペッタとエリカを見る。

『あなた達の戦い方は目に余るものがあります・・・。技を封じ込め徹底的にいたぶる・・・残酷な戦い方ね・・・。』

「ソウ、どくどく！」

どくどくを浴びたジュペッタがクラリとする。

『うえ・・・セコイ技使いやがって』

『あなたほどじゃないわ・・・』

「ジュペッタ、シャドークロー」

『ケケッ切り裂いてやるよ。そらよっ』

ジュペッタがシャドークローでソウを攻撃する。

『なるほど・・結構利くわね・・』

「ソウ、アクアリングだ」

ソウの周りに水の輪が浮遊する。

「あれは少しずつ体力を回復させる技・・」

「そうだ。ついでにアクアリングは残り続ける技だから・・・恨みはきかねえぜ」

「ジュペッタ、もう一回シャドークロー」

ジュペッタがもう一度攻撃する。

「ソウ、自己再生だ」

『ええ・・』

ソウの体が輝き始める。

『くそっ・・なあソウって言ったよな。何で攻撃してねぇんだ。補助技ばっか使いやがって』

ソウはジュペッタの目を真っ直ぐ見る。

『私は元々回復技を多用し長期戦に持ち込むバトルスタイルなの・・・どくどくで相手を弱らせてから一気に決めるのよ・・・相手からの攻撃を待ち、封じる受身の戦い方をするあなたと私の相性は最悪ってことよ・・・』

『なるほど、じゃあその補助技を封じれ・・ば・・あれ?なんか目

が回るぞ・・？』

「どくどくが利いてきたようだな。もうそろそろ終わりにするぞ。ソウ、ハイドロポンプ！」

『ちょ・・これってなんだか酷くね？』

『あなたの戦術の方がもっとひどいわよ・・・』

うろたえるジュペッタにソウは技を使う。

ソウの放ったハイドロポンプはジュペッタに直撃する。

ジュペッタは後ろの木に体を打ちつけられ気絶した。

「あら、ジュペッタまでやっつけちゃうなんてさすが・・と言っておきましょうか」

ジュペッタが倒させてもなお冷静な態度のエリカ。

「見たところ・・・あんたの手持ちは後一体だけだな」

「そうよ。まさかこの子を使うことになるとはね・・・ロー、バリアシステム起動させておきなさい。巻き込んじゃうかもしれないから」

「了解です。バリアシステム起動。エネルギーフィールド展開」

パソコンの周りに薄い膜が包み込むように現れる。

「さて・・・出てきなさいダークライ！」

エリカがダークボールを投げる。

黒い光に包まれ人型のポケモンが出てきた。

『な・・・ダークライ！馬鹿な・・・あれは伝説のポケモンのはず・・・』

クレナイが驚きの声を上げる。

「ソウ・・クロと代わってくれ」

『了解です・・・』

「クロ、気をつけていけよ」

『ああ』

クロが短く返事をする。

「ダークライ、あのバンギラスを痛めつけてやりましょう」

『俺が出ることになるとは・・・久々のバトルだな』

お互いの最強のポケモン同士が対峙する。

そしてバトルは始まろうとしていた。

第二十話　激突　リュウマＶＳエリカ　前編（後書き）

ジュン「あれ・・クロが出てくるの次なの？」

作者「いや～リュウマの手持ちをみんな出そうとしたら長くなちゃって・・・」

ジュン「リュウマさん＆赤神先生には次も協力してもらうってことだね」

作者「そういうこと。赤神先生、ヨロシクお願いします」

第二十一話　激突　リュウマＶＳエリカ　後編　ダークライの罠！（前書き）

ジュン「ということでリュウマさんとエリカの戦いもいよいよクライマックス！」

グレイシア「どっちが勝つのかしら？」

ジュン「わくわくするね」

作者「では、お楽しみください！」

第二十一話　激突　リュウマＶＳエリカ　後編　ダークライの罠！

『これでもくらいやがれ！』

クロが拳を振るう。

「ダークライ、避けなさい」

『ふっ・・・俺に技を使わないとは愚かな』

ダークライがあっさりとクロのパンチをかわす。

「ダークライ、ナイトヘッド！」

『く・・・』

ナイトヘッドは相手に恐ろしい幻を見せ精神的なダメージを与える技だ。

クロは一瞬つらそうな表情をしたがすぐに体勢を立て直した。

「あら、ダークライのナイトヘッドを持ちこたえるとは・・・なかなかやるわね」

「当然だ。クロ、破壊光線！」

クロが巨大なエネルギーを持った光線を放つ。

「ダークライ、悪の波動！」

ダークライは黒いオーラの波動を破壊光線に当て相殺しようとする。
しかし破壊光線は悪の波動を突破しダークライに迫る！
『く・・・』
破壊光線をギリギリ避けたダークライ。
だが少し辛そうにしている。どうやらかすったらしい。
『かすっただけでこのダメージ・・・あのクロと言うバンギラス・・・強いな』
「今ごろ気づいたか。クロは俺の最強のパートナー。てめーらには負けねぇぜ」
「・・・ダークライ、アレを使うわよ」
エリカが微笑をたたえながら言った。
『ああ・・・そのつもりだ』
「ダークホールよ！」
エリカがそう言った瞬間、クロの足元に漆黒のサークルが現れた。
『なんだんだ・・これ？』
クロが不思議そうに呟く。

段々とクロの体がサークルに飲み込まれていく。

『くそっ何だよ』

クロが手足をばたつかせるがダークホールからは逃れられない。

「クロ・・・！」

リュウマ達の目の前でクロは完全に吸い込まれてしまった。

「エリカ・・・アンタ、クロに何やりやがった」

「あら、ダークホールって技知らないの？これはね・・・・相手を眠り状態にする技よ。催眠術より命中率が高い上にダブルバトルでは相手二体に影響がある優れモノなの♪」

『また厄介な技を・・・』

クレナイが舌打ちする。

「そろそろ出てくるわね。暗黒世界からの生還よ」

クロがサークルから姿を現す。

漆黒の体を横たえ苦しそうにうなされている。

「ダークライの特性はナイトメア・・・眠っている相手に少しずつダメージを与える。・・・さらに行くわよ！ダークライ、悪夢！」

ダークライが眠っているバンギラスに手を振りかざす。
クロの表情が更に辛そうになる。
「そのバンギラスは今、悪夢の世界・・・ナイトメア・ワールドにいる。決して逃れられはしない・・・」
「く・・・このままじゃやられる。戻れ、クロ」
リュウマがモンスターボールにクロを戻そうとするが・・・・。
「何っ!戻らないだと・・・・・」
「残念だったわね。ダークライの悪夢の世界に囚われているポケモンはモンスターボールでは戻せないのよ」
リュウマ達にはただクロが自身の力で起きるしかないことを悟った。
ところ変わってダークライの悪夢の世界。
クロが周りを見回しながら歩いていた。
彼はダークライに悪夢を見させられていることに気づいていない。
ダークライが彼の前後の記憶を消し気づかれないようにしているからだ。
『くそ・・どこだよここ?リュウマ達もいねえし・・・』
しばらく歩くと古い洋館があった。

『また不気味なところだな・・・まあ入ってみるか』

クロが扉を開ける。

『今にもなにかだそうだな（汗）』

「来ましたね・・・迷える子羊さん」

クロが洋館の廊下を歩いていると不意に後ろから少女の声がした。

振り向くとそのこにはエリカがいた。黒いフードを被り、手にはランタンを持つ姿は賢者のようだ。

『誰だアンタ・・・』

悪夢の世界ではクロのエリカに対する一切の記憶が無いため、分からない様子だ。

「私はこの世界に迷い込んだ者を導く先導者ウィル。古くから夢には予見の意味があります・・・あなたに未来を見せて上げましょう」

エリカの姿をした先導者、ウィルが手招きする。

クロは怪しいと思いながらもウィルについていく。

しばらくウィルの後ろについて歩いていたクロだったがウィルが急に立ち止まってビックリした。

『どうしたんだよ・・・』

クロが覗き込むとウィルは寂れた扉の前に立っていた。

「ここは予見の部屋。あなたの運命がここにあります・・・・」

ギィイイイと錆びた音がする。

クロは慎重に部屋に入る。

そこは暗黒だった。何も無いただの暗闇。

『おいウィル！何なんだよここは！』

クロが後ろを振り向くがウィルは消え、扉も消滅していた。

『クロ・・・』

クロの目の前に傷ついたリョクが現れる。

『リョクか！・・・おい、その傷はどうした？』

『私たちは敗北してしまったのです・・・・・B・Bに』

『馬鹿な！そんなことがあってたまるか！リュウマ達はどこだよ！すぐに合流しないと・・・』

リョクは悲しそうに首を横に振る。

『リュウマ達は全員、私とクロを除いて・・・・やられたのです。私たちにはもう希望は残っていないのです』

『そんな・・・』

クロは絶望感に打ちひしがれた。

普通ならクロは絶望することなど無かっただろう。リュウマ達がやられるハズが無いと信じ、希望を紡ぐことが出来ただろう。

しかしここは闇の空間。悲哀と絶望を生み出す魔の空間だった。

ここでは希望を持つことは非常に困難だ。

クロは座り込んだ。

『リョク・・・これからどうする?』

『私に聞かないでください。私はここで終わりなのです・・・』

『何言ってるんだよ・・・お前が終わり?馬鹿なこと・・・』

クロの台詞も虚しくリョクは力なく倒れこんだ。

『おい・・リョク!返事をしろ!おいっ』

クロがリョクを抱き上げるが既にリョクの心臓は鼓動を止めていた。

リョクの体から出ている血がクロの手を真紅に染め上げる。

『これが俺らの未来だと!こんなことがあってたまるか!』

クロが悲しみの咆哮を上げ、その場に崩れる。目には既に力は無い。

一方予見の部屋の外ではウィルがその場に立っていた。

「彼の精神は私たちの手に落ちた・・・・・」

ウィルの周りに黒いオーラが出る。彼女の姿が一瞬隠れた。

そしてオーラが引いたときそこにいたのはダークライだった。

『これで・・・あのバンギラスは俺の手駒だ。いつまでも絶望感に飲み込まれていろ。・・・現実世界で存分に暴れさせてやる・・・・同士討ちとしてな』

ダークライが手に持っている青い本をぱらぱらとめくる。そこにはクロが使える技が記されていた。この本にはダークライの術中に落ちたポケモンの使用できる技が記されているのだ。

『今回はなかなか強力な奴を操れそうだな・・・』

ダークライの呟きは誰にも聞かれること無く暗い廊下に消えていった。

同じく現実世界では・・・。

リュウマ達の目の前でクロがゆっくりと起き上がる。

「クロ・・・起きたか！あのダークホールって技、厄介だぞ」

クロが眠り状態からさめたことでリュウマの顔に希望が戻ったが・・

・すぐにクロの異変に気づく。

「クロ・・・どうしたんだ?」

クロは虚ろな視線をリュウマ達に投げかけた。

「ダークライ、後はあなたに任せるわ」

『ああ。クロ、破壊光線!』

ダークライの指示に従いクロがリュウマ目掛けて破壊光線を放つ。

『ハイドロポンプ!』

ソウがとっさにハイドロポンプを使い、破壊光線を相殺する。

「クロ・・・なんで俺を?」

『どうしたと言うの・・・・?なぜ、リュウマを?』

リュウマ達の疑問にダークライが答える。

『簡単なことだ。俺が奴を精神を操っているだけのこと・・・』

『そんなことありえないのです!あなたは単にダークホールでクロを眠らせ、特性ナイトメアと悪夢でダメージを与えていただけなのです!』

リョクの強い口調にもダークライは動じない。

『そう・・・お前が言ったように俺は奴に悪夢を見せた。・・・・仲間が目の前で倒れていくというものを・・・・俺の悪夢の世界で絶望したものや悲しみに暮れた者は俺の手駒となるのさ！』

ダークライの言葉にリョクが震える。

『貴様・・・なんと卑劣な手を使うのだ！』

クレナイが怒鳴る。

クレナイの言葉を無視してダークライが続ける。

『奴の精神は俺が相当追い詰めておいた。もう体を動かそうとする・・・いや、生きようとする気持ちさえ起こらない。お前らとはこれから仲間同士で戦ってもらう・・・』

「テメエら！いい加減にしやがれ！ポケモンの気持ちや精神はお前らの道具じゃねえ！」

リュウマが激昂する。

『ふっ・・・すべてはエリカのためなのだ。悪く思うな。クロ、ドラゴンクロー』

クロが虚ろな目をしながら爪にエネルギーをため、ソウに突進していく。

『く・・・どくどく』

ソウがどくどくを放とうとするがその前にクロがソウにドラゴンク

ローを決める。

『かなりキツイですね・・・さすがリュウマの最強のパートナーです・・・』

ソウは回復技で長期戦を狙うタイプ。しかしクロの圧倒的な攻撃力の前では回復が追いつかない、そう判断したリュウマはソウを下がらせる。

「ソウ、戻っててくれ・・・・・クレナイ、いけるか？」

『もちろんです、主様』

クレナイが毅然とした態度でクロの前に出る。

「クレナイ、クロの攻撃を避けながらダークライに攻撃できるのは並外れたスピードを持つお前だけだ・・・高速移動！」

クレナイが超高速で移動する。クロを操っているダークライを叩く作戦だ。

エリカはそんなリュウマたちを見て言った。

「あのスピードじゃバンギラスの攻撃を当てるのは無理ね・・・・ダークライ、バンギラスを引き寄せて。それから悪の波動発動準備」

『・・・クロ、こっちに来い』

ダークライがクロを引き寄せる。そしてクロの首元に手を当て悪の波動を放つ直前で止める。

『この距離から俺のフルパワーの技を食らうとどうなるか・・・』

「く・・・クレナイ、高速移動を止めろ」

リュウマがクレナイに言う。

クレナイは激怒の感情をどうにか押し殺して止まった。

『貴様達・・・どこまで卑劣なんだ。私たちの仲間を人質にして・・・許さんぞ!』

「・・・ダークライ、そろそろ終わりにしましょう。そのおもちゃで同士討ちさせるの・・・最高の喜劇ね。・・・・ハハハハハハッ!」

冷静だったエリカが突然狂ったように笑い出す。

「さあ早く、ダークライを攻撃してみなさいよ!あなた達の攻撃はすべてこのバンギラスが受けるのだから!・・・・出来る?出来ないわよねぇ・・・あなた達は大切な仲間とやらに倒させるのよ!絶望と共に・・・ハハハハッ!!さあ、私に同士討ちの喜劇を見せて頂戴!絶望に染まった目で最後に見るのは闇だけよ!」

「俺たちは闇には屈しねぇ。屈するものか!・・・クロ、起きてくれ!」

『クロ、目を覚ませ!主様との絆はそんなものではないはずだ!』

『あなたは私たちの仲間です・・・正気に戻って・・・』

『クロ・・・ドウカ正気ニナッテクダサイ』

『そんな奴の支配なんか断ち切るのです！ファイトなのです！』

『僕様の声がとどいたら・・・目を覚ましてなのさっ！』

皆が・・・傷を負ったハクでさえボールから出てきてクロに呼びかける。

『無駄だ・・・・クロ、破壊光線』

ダークライの指示通りクロが破壊光線をクレナイに向かって放つ。

「クレナイ、大文字で迎撃だ」

『了解です、主様！』

クレナイが大文字を使い、破壊光線を防ごうとするが・・・。

破壊光線はクレナイの炎を突き破ってしまった。

『く・・・やはりクロの破壊光線はキツイな』

クレナイの足取りがよろける。

だがリュウマは気づいていた。

クロが放った破壊光線の威力がダークライの支配に落ちるまえのとでは二割ほど弱いと言うことに。

（さっきのドラゴンクローの威力は明らかに本気のクロのそれと一緒だった・・・だが、今の破壊光線の威力は弱まってる。・・・・俺たちの呼びかけがクロの無意識の領域に作用して攻撃の手を弱めさせたとしか考えられねぇ・・）

リュウマ達が手を出せないのをいいことにダークライがクロにさらに指示をする。

『クロ、ストーンエッジ！』

クロが岩の連弾をクレナイに放つ。

「クレナイ、避けろ！」

『御意』

クレナイが空中に跳び、身軽にストーンエッジを避ける。

「今よ、ダークライ、悪の波動！」

ダークライが空中にいるクレナイに悪の波動をぶつける。

「く・・大文字で迎え撃て」

リュウマの素早い指示に大文字を放つクレナイ。大文字と悪の波動はお互いにぶつかり合い消滅した。

「エリカ・・・これじゃ二対一じゃねえか・・・」

「馬鹿ね・・・誰が一対一だと言ったの？」

「・・・シロガネ、出番だ。出来るだけ時間を稼いでくれ。俺に考えがある」

『了解デス・・・彼ラハ絶対私ガ倒シテヤリマス』

「ソロガネ、ミラーショットをダークライに。クレナイもフレアドライブで加勢だ」

二体のポケモンが同時にダークライを攻撃する。

『クロ、ストーンエッジでクレイナイを攻撃だ』

クロが再びストーンエッジを放つ。

クレナイはストーンエッジに直撃しながらもなおダークライに突っ込む。

さらにダークライにはミラーショットも襲いかかる。

砂煙が舞い上がる。

『やったか？』

『アレダケノ攻撃ヲ受ケテ無事デアルハズハ・・・・』

しかしクレナイとシロガネの期待は裏切られた。

ダークライがクロを盾にとって全ての攻撃を防いでいたのだ。

『き・・貴様ぁぁ！』

普段冷静なクレナイが激昂する。

『ナ・・ナント言ウ事ヲ・・・！』

『残念だったな。俺にとってはこれはただの駒だ。身代わりに攻撃を受けさせることに対しては何の抵抗もない』

ダークライはなんでもないことだと言わんばかりの態度をとる。

「そうか。・・・だが、クロを完全に手駒にするのは失敗したらしいな」

『いつの間に！』

近くからの声にダークライが驚く。

リュウマがいつの間にかクロに近づいていたのだ。

リュウマはクロに触れる。

「遠くからの俺たちの声にクロの無意識が反応した。ならばゼロ距離からの呼びかけにはもっと反応を示すはずだ・・・。クロ、目を覚ましてくれ。そして思い出せ。俺たちの絆を・・」

リュウマが静かにクロに語りかける。

「ダークライ、そいつを追い払いなさい」

エリカの素早い指示にダークライがくコクリとうなずく。

『クロ、その人間をなぎ払え』

しかしクロは石のように動かない。

「どうしたの、ダークライ?」

エリカが腕を組みながらダークライに聞く。

『そんな馬鹿な・・・俺の支配が弱まっている!?』

「皆!俺がクロに語りかけるからその間ダークライを止めててくれ!少しずつだが心が開いていくのを感じる・・・!」

「ダークライ、クロの支配をとかれる前にリュウマを排除しなさい」

『俺の精神奪取を揺るがすとは褒めてやる。だが、これで終わりだ!』

ダークライが悪の波動をリュウ目掛けて放つ。

『やらせないさっ!シャドーボール!』

ハクがシャドーボールで悪の波動を打ち消す。

『邪魔をするな!』

『それはこちらの台詞だ。ダークライ、貴様にリュウマの邪魔はさ

せん！』

チッと舌打ちをして、ダークライは横目でクロに語りかけているリュウマを見る。

そのころダークライの悪夢の世界では・・・・・。

クロは暗黒の空間に力なく座り込んでいた。

よこではウィルがたたずんでいる。

そこに聞こえる青年の声。

「ク・・・ロ。目を・・・・せ。そ・・は悪夢・・・・世界・・」

『何か聞こえる・・・？』

クロが首を上げる。

「クロ、幻聴よ。あなたに喋りかける仲間はもういなくなった・・・・私以外はね」

ウィルがクロの頬をそっと撫でる。

クロはその微笑に危うく飲み込まれそうになった。

しかしその瞬間聞こえた一言がクロを救った。

「クロ、目を覚ませ！悪夢になんか飲み込まれるんじゃねえ！」

その声を聞いたときクロは全てを思い出した。

自分はダークライと戦っていたこと。そしてダークホールに飲み込まれ眠いってしまったこと。・・・・・ダークライが自分を操り仲間を傷つけたこと。

『ウィル、いやダークライ・・・アンタ俺を罠にかけたな?』

クロがちらりとウィルを見る。

「なるほど・・・俺の支配から逃れるとはさすが元チャンピオンに最強のポケモンだな・・」

ウィルの姿―つまりはエリカの姿―のまま声だけがダークライの状態だ。

『こんなところすぐに出てやるよ』

クロが口から破壊光線を放つ。

しかし闇の空間は何の効果も無かった。

「ははは・・・無駄だ。ここは俺の支配下にある。お前が自我を取りもどしたのは驚いたが・・・ここから出られないのには変わりはない」

『それはどうかな?夢を支配しているのがテメエだとしても・・この夢を見ているのはこの俺だ。つまりは元々俺の領域ってことになるぜ』

「だからどうした？」

クロはウィルの姿をしたダークライの目に一瞬同様が走るのを見逃さなかった。

『お前が一番よく分かってるはずだぜ・・・テメエを俺の夢から追い出すのが可能ってことをな』

「そんなことは不可能だ！」

『・・・いや可能だ。今お前を追い出してる最中なんだからな』

ダークライは上からの光を感じてハッと見る。

暗黒の空間から光が差し込んでいた。

『これは絆の光！』

そして左右からも光が差し込む。

『これは・・・愛情の光！』

「く・・・させるか！」

ダークライが元の姿に戻る。

『お前を倒して俺が再び夢の世界を支配する！悪の波動！』

ダークライはクロを攻撃する。

しかし悪の波動は飛んでいる途中で掻き消えてしまった。

『お前の悪夢は俺たちの絆に負けたんだ』

「クロ、俺たちは仲間だ！そして俺たちの絆はこんなもんで壊れるほど脆くはねえ！」

リュウマの声が暗黒空間に響く。

『そして・・・最後。これが希望の光だ！』

クロがそういった瞬間、輝くような光がダークライの正面から暗黒空間を照らし出す。

その光に当たった瞬間暗黒の空間と共にダークライの体が消滅していく。

『俺の支配から逃れただけでなく・・・・・夢から追い出すと・・・・は』

ダークライは古い洋館ごと消え去った。

そして現実世界では・・・・。

「クロ！目が覚めたんだな！」

リュウマが目を覚ましたクロをみて喜ぶ。

『ああ。リュウマや皆のおかげだ。絆が俺を救ってくれた』

そんなリュウマとクロを見てクレナイ達も安堵した。

「へえ、ダークライの支配を破ったのはあなた達が初めてよ」

エリカが木の幹に座りながら感心したように言う。

「・・・エリカ、アンタを倒させてもらうぜ。俺の仲間を弄んだアンタを許すわけにはいかねぇ！」

先ほどの表情から一変して怒りをあらわにするリュウマ。

「ダークライ、悪の波動！」

「クロ、ストーンエッジ」

ダークライとクロの技がぶつかり合う。

しかしダークライの悪の波動は明らかにパワーダウンしており、ストーンエッジが波動を突き破りダークライに当たった。

『く・・・・』

『なるほど・・・どうやらお前にとっても他のポケモンを操る術はかなりの体力を消耗するらしいな・・・まあ当然か。現実でポケモンを操りながら同時に夢の世界でそのポケモンを支配し続けなくちゃならねえんだからな』

『ふ・・そう言うお前も辛そうだぞ？』

クロが拳を固める。クロには分かっていた。時分の体力は限界でも

はや技を出すことすらかなわない状態になっていることに。

（あと一発あいつの技を喰らうと・・・やばいな）

「クロ・・・もう限界だろ?他の奴と交代するか?」

リュウマの言葉に首を横に振るクロ。

『あいつは俺がぶっ飛ばしてやりたい・・この俺の手で、な』

「そうか・・・。それじゃ、奴に一発キツイのをぶち込んで来い！」

『行くぞ、ダークライ！』

クロが走り出す。

『突っ込んでくるとは・・・最後の最後で血迷ったか！この勝負、俺の勝ちだ！悪の波動！』

ダークライが特大の悪の波動を放つ。

『無駄だ！』

クロは腕を振り上げ、なんと悪の波動を打ち砕いた！

『馬鹿な・・・技も使わずに俺の技を・・・！』

『終わりだ、ダークライ』

クロはダークライの懐に入り込み、パンチを叩き込んだ。

ダークライの体にクロの拳がのめり込む。

『く・・・』

ダークライは横目でクロをチラリと見るとそのまま倒れた。

「よく頑張ったな。ゆっくり休んでいてくれ」

『クロ・・・さすがだ』

『とうとう勝ったわね・・・・』

『ヨカッタデス。心配シタンデスヨ』

『やったのです！すごいのです！』

『僕様感動なのさっ！』

リュウマ達が喜びに湧き上がる中、エリカは静かにダークライをボールに戻した。

「さてと・・・エリカ、お前には俺たちと一緒に警察まで来てもらうぜ。ハルとか言う姉ちゃんと一緒にな」

リュウマがエリカの方を向く。

しかし切り札のダークライを倒されてもなお冷静なエリカ。

そこにいきなり合成音がした。

「エリカ様。スキャンが完了しました。これよりデータの保存をします」

エリカがパソコンに近寄ろうとする。

リュウマがエリカの腕をつかみ、彼のほうに引っ張る。

「おっと変な行動を起こしてもらうと困るんだよな」

エリカはリュウマを見上げる。

その目には動揺や焦りの欠片も感じられない。

（かわいい顔して・・・目が氷のようだな。超低温の効率主義者ってとこか・・・）

エリカを見ながらリュウマがふと思う。

しかし、当然後ろから声がした。

「アリアドス、糸を吐く！」

糸がリュウマ達をぐるぐる巻きにする。唯一糸に囚われなかったエリカはリュウマ達の正面に立つ。

「ハル・・・ナイスフォローよ」

「そうか・・その姉ちゃんが気がついていたのを知ってたから冷静だったんだな」

「そう。あなた達の実力には私は及ばないことはうすうす分かっていた。だからこそハルが気がついたことを悟られてはならなかった」

「ダークライのクロ操作もそのための布石だったてのか・・・」

「まあね。あなた達にはバトルに熱中してもらう必要があったからね・・・ハル、行くわよ」

エリカがパソコンを回収し立ち去ろうとする。

「エリカ様、石化したポケモン達はどうします?」

ハルの問いにエリカが淡々と答える。

「捨てておきなさい。例のポケモンのデータは採取できたし・・・もういいわ。ハル、あなたの任務失敗はボスには報告しないであげる」

ハルも頷きエリカに続く。

そしてハルがリュウマの肩越しに小さい声で囁く。

「リュウマさん・・・あの石化は私が捨てた石化ビーム装置の裏側の隠し収納スペースにある薬品を使えば解除できます」

「アンタ、なんで俺に教える?」

「なんとなくですよ・・・じゃあ」

ハルはそう言うとエリカと共に去っていってしまった。

その後、やっと糸を解いたリュウマたちだったがそのときには既にエリカとハルはいなかった。

『やつら、一体何者だったんだ?』

クロが回復薬スプレーを自分にかけながら首を傾げる。

「さあな・・・それより、これすごいぜ」

リュウマが落ちていたP-ゴーグルをかける。

「サーモグラフィーモードもあるみたいだな・・・これでポケモンを探すわけか」

『リュウマは何をやっているのです。早くポケモンの石化を解くべきなのです』

リョクの言葉には怒りが感じられる。

リュウマが笑う。

「リョク、俺が怒ってないとでも思ってるのか?俺は今かなり腸が煮えくりかえってるんだぜ。だがよ・・・あいつらはもう遠くにだろうし、怒ってもしかたねぇ。それにこのゴーグルで石化したポケモン全員を探し出せるかやってみているとこなんだ」

リュウマの言葉にリョクが落ち着く。

リュウマが石化装置から取り出した青色の液体の入った容器を取り出す。

「みんな疲れているとは思うが、石化したポケモンたちを探そう・・・早く元にもどしてやらないと」

リュウマはそう言うと薬品を握り締めた。

第二十一話　激突　リュウマＶＳエリカ　後編　ダークライの罠！（後書き）

ジュン「リュウマさん勝てたね」

ユウタ「でもエリカには逃げられたな」

ジュン「まあ、そう簡単には捕まらないでしょ」

ユウタ「なんたってエリカだもんなぁ」

ジュン「そう言えば、次話ではついにあの人が出るんだって！」

ユウタ「もしかして・・・」

ジュン「久々の登場らしいよ。もはや忘れ去られた存在かもしれないけど・・・」

ユウタ「へえ・・・なんか楽しみだな」

第二十二話　久々の登場　国際警察コウキ！（前書き）

ジュン「ついに国際警察の少年が再登場だね」

作者「うん」

ジュン「長くなかった？再登場まで」

作者「だってエリカとかアキラとかいろいろ出してたから・・・」

ジュン「要するに忘れてたんでしょ？」

作者「うん♪」

ジュン「やっぱりね・・・・」

第二十二話　久々の登場　国際警察コウキ！

「やっと見つけたぞ！ポケモンハンター！」

青空の下、気の強そうな栗色の髪をした背が比較的低い少年が黒いバンギラスをつれた青年―リュウマに向かって叫ぶ。

「・・・誰がだよ。つーかアンタ誰？」

リュウマが訝しげな顔をするが少年は構わず続ける。

「俺は国際警察ポケモンハンター対策本部のコウキだ」

コウキは警察手帳をリュウマに見せつける。

「俺がポケモンハンター？馬鹿いうな」

「へへ・・・お縄にかかりな！」

コウキはリュウマの言うことをまったく聞かず、テンパッた目でしゃべる。

「おい・・・お前、目が血走ってるぞ？」

リュウマの指摘にコウキが怒る。

「誰のせいだと思ってやがる！俺はテメエらハンターの捜査のせいでな・・・３０時間寝てないんだよ！」

「だから俺はハンターじゃねえって・・・」

「ハッ、そういうのは証拠を隠してから言うんだな。お前がかけているゴーグル・・・それはＰ‐ゴーグルといってハンターの専用品なんだよ。それにそこに落ちてるあれ」

といってコウキが地面に落ちているポケモン石化ビーム発射装置を指差す。

「あれについての情報はまだ入ってきてないが・・・どうやら周りで石化しているポケモンと関係ありそうだな。まあそういうことでポケモン保護法違法で現行犯逮捕だ」

「おい待て！現行犯って・・・お前は俺がやってると見たわけじゃねえだろ！しかもハンターじゃねえし！」

「うるせえ！刑訴法２１２条２項。準現行犯人に書いてあるんだよ、罪を行い終わってから間がないと明らかに認められるときは、これを現行犯人とみなすってな。そして準現行犯人の条件の一つに贓物（ぞうぶつ。盗品等）又は明らかに犯罪の用に供したと思われる兇器その他の物を所持しているときってあるんだ。つまり・・・そのＰ－ゴーグルを持ってるお前を俺は逮捕できるってわけだ」

コウキはいい終わるとリュウマに近づく。

「テメエらポケモンハンターを逮捕できる日を待ちわびたぜぇ・・・年貢のおｓ・・」

コウキは最後まで言えずに木の根っこにつまずいて顔から地面に突っ込んだ。

『大丈夫か、そいつ？』

クロが笑いを堪えながら言った。

「・・・俺としたことが迂闊だった。こんな罠が仕掛けてあるとは・・・」

コウキが涙目になり鼻を押さえながらうめく。

「いやお前が勝手にこけただけだろ」

リュウマが突っ込む。

「・・・こうなったら最後の手段だ」

最後も何もまだ何もやってないはずだがコウキが自信満々で言う。

「出て来い、ルカリオ！ムクホーク！ガブリアス！」

「はあ・・・言ってもわかってもらえないようだな・・・こうなりゃ実力行使だ」

～十分後～

コウキの目の前にはルカリオ、ムクホーク、ガブリアスが倒れていた。

コウキ自身木にぐるぐる巻きにまかれていた。

「お前弱いな。さっきのハンターの姉ちゃんより手ごたえ無いぜ」

リュウマがコウキを見ながら言う。

「ちょ・・・お前強すぎだろ！しかも国際警察官に何やってんだ、警官に対する暴力は国家権力に歯向かうことになるんだぞ！」

コウキは涙目である。

「はいはい分かったから。それでよ、俺に説明させてくれないか？」

「へっポケモンハンターが何言ってんだか・・・」

「だからハンターじゃねえって言ってんだろ、ボケェ！」

ゴチンと音がする。リュウマの鉄拳がコウキの頭に落ちたのだ。

「それで聞いてくれるか？」

「でも・・・」

「聞いてくれるよな！」

「はい・・・」

リュウマはハルやエリカのことを説明した。

しばらくコウキは黙って聞いていたが、急に口を開いた。

「まあ実は俺もそう考えていたんだけどな！」

見栄を張っているのが見え見えである。

『また分かりやすい嘘を言うな、こいつ』

クロが少々あきれた口調で言う。

「さて、そうとわかりゃ早速そいつ等を追ったほうがいいな。どこに行ったのか・・・・そう言えばこの近くにはキッサキシティがあったな。そこでも情報収集しとくか。なあ、俺行かなきゃならないからこれほどいてくれ」

「その前に謝罪の言葉が欲しいな」

「分かったよ。間違えてすいません」

リュウマがコウキの縄をほどきながら付け加える。

「それと貴重な情報を教えたんだから謝礼金よこせ」

「おい・・・そっちから催促するのってどうかと思うぜ」

コウキの反論にリュウマが怒鳴る。

「うるせえ!俺たちはエリカとか言う奴に逃げられてイライラしてるんだよ!分かったらさっさと金よこせ、それとも俺たちの鬱憤を晴らす的になるか!?」

コウキは賢明にも口答えしないほうが得策と思い、しぶしぶ財布の中をのぞく。

「くそ、自費かよ・・・あ～今俺金ねぇな」

「じゃあ金目のモンでもいいぜ」

コウキは鞄の中に手を突っ込み、ガサガサと探す。

「何かないか・・・あっこれなんかどうだ?」

と言って取り出したのはルカリオの人形だった。

「いらねえよ、そんなモン!」

「チッ・・・じゃあこれをやるよ」

そういってコウキは背伸びをして（リュウマのほうが背が高いため）リュウマにこだわりメガネをかけた。

間抜けなメガネとリュウマのコラボにコウキが吹き出す。

「・・・なかなか似合ってるぜ。・・・ハハ、アーハハッハ」

「死刑決定だな・・・・」

その言葉にコウキの笑いが止まる。

リュウマがニッコリと笑いながらコウキを見る。

その微笑をみてコウキの顔が青ざめる。

「おい、ちょ・・待ってくれ。俺が悪か・・・・ギャアアァァ・・・」

コウキの断末魔が森の中に響き渡った。

コウキが天国に昇天しそうになっているとき・・・・。

（ここからジュン視点になります。ご了承ください）

「ジュン、残念やったな」

僕の横でアキラさんが言う。本当に残念そうだ。

「仕方ないですよ・・・バトルフィールドが工事中じゃ」

僕はアキラさんの提案でポケモンバトルすることになっていたんだけど・・・バトルフィールドが使えなかったんだよね。

「まあええわ。こういうときのためにホテルをとってあるんや♪」

アキラさんが目の前の大きな（と言っても林から見える景色だけど）を指差した。

キッサキロイヤルホテルだ。

「アキラさん・・・あのホテル高いんですよ?」

僕は任務につく前に事前にキッサキシティの観光スポットなどを調べておいたので（もちろん任務が終わってから観光を堪能するため）キッサキロイヤルホテルの料金ぐらいは知っている。

「俺たち上級ハンターの収入からすればどうってことないで」

確かにポケモンハンターは高給取りだけど・・・僕は旅行とか料理に高いお金がかかるのは嫌いなんだけどなぁ。

僕が黙っているとアキラさんがいきなり僕をつかんだ。

「ちょ・・・アキラさん!?」

「ホテルに自分をこのまま連れて行くわけにはいかんやろ?せやから鞄の中にちょっといててや」

アキラさんはそう言うと鞄の中に僕を突っ込んだ。

う・・・暗いし何も見えない。でも鞄のチャックは開いてるようだから、上を向けば何か見えるかも・・・。

僕の目に映ったのはアキラさんがゼロを頭の上に乗せているところだった。

「前からこういうちっちゃいポケモンを頭の上に乗せてみたかったんや♪」

アキラさんはそう言うと鞄のチャックを閉めた。

暗闇の中、ホテルの受付係の人の声やエレベーターの音ぐらいしか聞こえなかったが、

急に視界が明るくなった。

僕が鞄から出て見るとそこにはきれいな部屋があった。

かなり豪華だ。さすがキッサキロイヤルホテル・・・。

ゼロがアキラさんの頭からベッドに飛び降りる。

『すごいです。とってもふかふかしてますよ！』

ゼロがベッドの上で飛び跳ねる。

「皆を出してあげようかな・・・シャワーズ、アブソル、グレイシア、ボーマンダ、出てきて！」

『あれ、ここどこ？』

『ずいぶん豪華な部屋ね』

『それに知らない人間がいるぞ』

『どうせハンター仲間だろ？アブソル、身構えなくてもいいと思うぜ』

「へえ、自分達がジュンの手持ちポケモンやな？俺はアキラっちゅうんや。よろしゅうな」

アキラの気さくな笑みにシャワーズたちが落ち着く。

「さてと・・・俺も出すとするか。出てくるんや、エアームド、フライゴン・・・ルギア！」

え・・聞き間違いかな？いま、ルギアって聞こえたような。

部屋に鎧のような体のエアームド。精霊ポケモンのフライゴン。そして部屋いっぱいにルギアの体が現れた。大きい体のため部屋の空間が急に圧迫した雰囲気になった。

『嘘でしょ・・・伝説のポケモンが・・・』

『信じられないわ』

『ルギアとは・・・これは驚きだな』

『おいおいマジですか（汗）』

シャワーズたちが口々に驚きの言葉を言う。

『ふ・・俺って有名なんだな』

ルギアが満足そうに頷く。

『そんなことはどうでもいいだ。それより、アンタこの部屋にはでか過ぎる。アタシたちのスパースが取られまくってるんだよ！』

エアームドが怒鳴る。

『まあ落ち着いて・・・エアームド。体が大きいのは生まれつきなんだし。僕達だって結構スペースとってるんだから』

フライゴンの言葉にエアームドが落ち着く。

「さて・・・ルギア、自分はでかすぎるからボールに戻っといてや」

『アキラ、俺だけってなんか酷くないか？』

抗議も虚しくさっさとボールに戻されてしまうルギア。

「俺、ちょっと出かけてくるから。ここで待っといてや」

そう言うと、アキラさんルギアの入れたボールを持って部屋から出て行ってしまった。

『ねえ、君達アキラの友達？』

フライゴンが僕たちを見る。

『そんなわけないでしょ！たぶんポケモンハンター仲間よ。そうよね？』

エアームドが間違いないといわんばかりの態度で聞いてくる。

『エアームド・・・彼らにはトレーナーがいないよ』

フライゴンの反論に詰まってしまうエアームド。

『あの僕、アキラさんと同じポケモンハンターです』

僕がおずおずと言うとエアームドが目を丸くした。

『え・・・でもアンタ、アグノムじゃない！？』

エアームドが僕に近づき羽でつんつんと体を触ってくる。

『くすぐったいですよ・・・』

『へえ、ポケモンがポケモンハンターねえ・・すごいなぁ』

フライゴンも感心しているようだ。

『フライゴン、ポケモンを商品にする仕事のどこがすごいのよ！』

エアームドのいきなりの正論にフライゴンのみならず僕たちもびっくりする。

空気が静まり返る中エアームドが気まずそうに口を開く。

『ごめんなさい・・・いきなり怒鳴ったりして』

エアームドの今の言葉・・・たぶん彼女の・・いやポケモンたちの心の奥底の本音だろう。

ただ・・トレーナーがやっていることに悪口を言うことははばかられるから言わなかっただけ。

『あの・・・テレビでも見ましょう』

ゼロが気まずい雰囲気を打破すべくテレビをつけた。

テレビではＣＭをやっていた。

「私たちはポケモンのために回復薬を作っています」

CMには清潔そうな実験室が映し出され、いろんな人たちが真剣に実験している姿があった。

「ポケモンたちが喜ぶ笑顔が私たちの原動力です」

にこやかに試験管を持ちながら男の人が言う。

そして、最後ナレーターが会社名を言った。

「P・H・C」と・・・・。

『白々しい・・・よく言うぜ』

ボーマンダがはき捨てるように言う。キメラやハンターのことを知ってるから当然の発言だろう。

『まったくだ・・・ポケモン達の喜ぶ笑顔が原動力だと・・・信じられんな』

アブソルも静かに頷く。

再び場が静まりかえってしまった。

その静寂を打ち破ったのは帰ってきたアキラさんだった。

「ただいま。いや～外は寒いで」

「アキラさんどこ行ってたんですか？」

僕の問いにニッコリと笑うアキラさん。

「下見や・・・侵入通路の、な」

「ではキッサキ神殿の！」

「まあな、プロとして当然やろ」

この時やっぱりアキラさんはポケモンハンターだなぁと僕は思った。

第二十二話　久々の登場　国際警察コウキ！（後書き）

コウキ「あれ、俺登場してそうそう死にそうになってるきがする・・・」

作者「このまま昇天しちゃいなよ」

コウキ「ふざけんな！一体再登場まで何話待ったと思ってんだ！」

作者「冗談だよ♪」

コウキ「・・・・まあ許してやるよ」

第二十三話　ジュンのレジギガス捕獲作戦開始！　前編（前書き）

作者「今回からは君が最もポケモンハンターらしいくだりに入るよ」

ジュン「へえ、楽しみだね」

作者「ではどうぞ！」

第二十三話　ジュンのレジギガス捕獲作戦開始！　前編

アキラさんが部屋で地図を広げる。

「キッサキ神殿は伝説のポケモン、レジギガスがおることで有名や。当然守備も堅いで・・・」

「どうします?石化ビームを使って門番を固まらせて正面から突破しますか?」

僕の言葉にアキラさんが首を横に振る。

「駄目や。その方法やと突破は出来てもレジギガスを石化するためのビームのエネルギーが足りんようになる・・・いくら石化させるってちゅうても相手はデカイ体のレジギガス・・・一発や二発で石化しきれるとは思えへん」

「では・・・どうします?」

僕の問いにアキラさんが答える。

「・・・そうやなぁ。下見の行ったときどうも入り口はあそこだけやし・・そうや!」

アキラさんの顔が明るくなる。

「警備員の服を調達して見張りに気づかれないようにすればええやん」

「・・・・アキラさん、あそこの警備員は全員顔見知りです。成り代わることは不可能ですよ」

「なんやぁ・・・・マジでどないしよ」

その時、僕はある作戦を思いついた。

これなら・・・いけるかも。

「アキラさん、陽動作戦なんてどうです?」

「陽動?どうするんや」

「騒動を起こすんですよ」

「自分・・・何する気や」

アキラさんが訝しげな顔する。

「町に火を放つなんてどうでしょう?」

僕の言葉にアキラさんやシャワーズたちがビックリする。

もちろん今の言葉は冗談だ。そんなこと出来るわけない。

「冗談ですよ」

「なんや・・・めっちゃ驚いたで」

『嘘なんだ・・良かったぁ』

『ビックリさせないでよ』

『真面目な顔してそういうことを言わないでくれ』

『心臓が止まるかと思ったぜ』

シャワーズ達が安どの表情を浮かべる。

って言うか・・・なんでそんなに驚いているのさ！

「キミ達まさか僕がそんなことをやるとでも思ってるわけ？」

僕が手を腰に当て睨むとシャワーズたちが口々に言った。

『いや・・だってジュン任務のことになると結構酷いことやるし・・・ねえ、グレイシア』

『ちょっとシャワーズ、私に振らないでよ。・・・でもまあ、ジュンならもしかするとやりかねないかなぁ・・とか思っちゃったのよ、そうよねアブソル先輩』

『・・・・まあ、ジュンは任務のためなら・・放火ぐらいしかねないところがあるような気もする・・なあボーマンダ』

『いや、何もジュンが悪い奴だとかそういうことを言ってるんじゃないんだが・・・やっぱりハンターとしての経験がそういうことも出来る奴にしてるっていうか・・・お前もそう思うよなジャワーズ』

『先輩、ぼくに振らないでくださいよ・・・でも・・グレイシア、どう思う?』

『私の意見よりアブソル先輩の意見のほうがいいわよ・・先輩はどう思います?』

『ボーマンダ、お前はどう考えてるんだ?』

『オレよりシャワーズのほうが適任だろ・・・なあジャワーズ、意見を言えよ』

このまま放置しておくと永遠に続くので僕が会話に割って入った。

「キミ達が僕をどう思ってるのかがよく分かったよ」

『ジュン、怒ってる?』

シャワーズがおずおずと聞いてくる。

「全然!」

僕がニッコリと微笑むとシャワーズの顔が青ざめた。

「それはそうとして・・・どうやら自分には考えがあるようやな?聞かしてくれへんか?」

「はい。まずキッサキ神殿の管理室に爆弾が仕掛けられたとの通報をします。もちろん警察官を名乗って」

「なるほどなぁ・・続けてくれ」

「そしてここが重要なんですが・・・通報するとき他言しないように言うんです。キッサキシティ中がパニックになるからこのことは内密に、と。警察がメディアには公式的に知らせるんでこのことは黙っていてください、といいます。そして速やかに避難するように言うんです」

「自分賢いなぁ・・・やっぱ上級ハンターだけあるで」

「ありがとうございます。それでですね・・・ここまで言ったらもう分かるかと思いますが、
アキラさんは爆弾処理係のように振舞います。こうすることでキッサキ神殿の奥にいるレジギガスを安全に捕獲できます。何より怪しまれずに侵入できるところが利点です」

「よっしゃそうと決まれば早速作戦開始や。この作戦なら夜まで待つ必要ないで」

アキラさんが立ち上がる。

「っても腹減ったなぁ・・・なあ、任務開始はお昼食べてからにせえへん?このホテルのルームサービス美味しいので有名やねんで」

アキラさんはそう言うとテレビの下の収納スペースからメニューの表を取り出すと僕たちの前で広げた。

「ポケモン専用の料理もあるんですね・・・」

「俺、木の実チャーハンにしよ。自分は?」

「そうですね・・・僕は木の実混ぜ込みご飯、焼きオボンの実つきにします。ポケモン達には（僕もポケモンだけど）ポフィンデラックスセットがいいと思います。どう、シャワーズ？」

僕はシャワーズに聞いてみた。

『ぼくそれがいい。他の皆も同じだよ』

「決まりやな」

僕たちはこのあと楽しい食事をすませた。

そして、作戦実行の時は来た。

アキラさんが爆弾処係の人の役をやる訳だから、声が同じだとばれかねない。

そういうことで僕が電話することにした。

プルルル・・・・。

ガチャ。

「はい、こちらキッサキ神殿事務局です」

「警察のものですが」

「え・・何か御用ですか？」

「そちらの神殿に爆弾を仕掛けたと犯人から声明がありまして・・・」

「えー！」

電話口の男性はかなり驚いている。

「落ち着いてください。事務局に残っている人全てに速やかに退去するよう伝えておいてください。それから、このことは事務局の無関係者には他言しないように。キッサキシティ中がパニックになりますから。マスコミには警察のほうから公表しておきますからご安心を」

そう言うと僕は電話を切った。

これでオッケーだ。

「よっしゃ、じゃレジギガス捕獲に出発♪」

アキラさんシャワーズ達とエアームド達（ルギアは除外）達を素早くボールに戻すと、僕を鞄の中に入れ、ゼロを頭の上に乗せると部屋を出た。

第二十三話　ジュンのレジギガス捕獲作戦開始！　前編（後書き）

ジュン「なんか今回短くない？」

作者「いいの。次から怒涛の展開が始まるから」

ジュン「へえ」

作者「それより、君が詐欺師に見えてきた」

ジュン「僕はただ任務をこなしているだけさ」

第二十四話　ジュンのレジギガス捕獲作戦開始！後編（前書き）

ジュン「なんか・・・更新遅くない？」

作者「だって勉強が忙しいだもん」

ジュン「なんか今日変だよ」

作者「数学で疲れているんだよ。微分の応用と積分難しいよ～（涙）」

ジュン「そうですか（汗）」

第二十四話　ジュンのレジギガス捕獲作戦開始！後編

僕はアキラさんの鞄の中にいる。だから今僕がどこにいるのか分からない状況だ。

「警察のものですが・・・」

外からアキラさんの声が聞こえる（っていうか標準語しゃべれたのね・・・）

「あ、処理の方ですか？」

若い男の人の声が聞こえる。電話で会話した人だ。

「はい。全員の避難は完了しましたか？」

「ええ。ここにいるのは私だけです」

「では仕事に取り掛かりますのであなたも直ぐに逃げてください」

「お一人で大丈夫ですか？」

「心配には及びません。ポケモン達とともに仕事をしますので」

それからしばらくは足音しかしなかったが、急に視界が明るくなった。

「もう出てもいいで」

そう言うとアキラさんは僕をつかみ、外に出した。

頭の上ではゼロが器用に眠っている。

僕はアキラさんの頭と同じぐらいの高さで浮遊する。

「自分の作戦すごいな～めっちゃ順調やで」

アキラさんが感心する。

「そんなことないですよ・・・」

僕たちはキッサキ神殿の奥深くに入っていった。

ジュンたちがキッサキ神殿に侵入することに成功したちょうどその頃。

コウキはキッサキシティで聞き込みをしていた。

しかし収穫はなく、さすがのコウキもくたびれていた（リュウマにボコボコに負けたダメージも当然残っている）

「くそ・・・ちっとも情報が入んねえな。キッサキシティの近くでハンターがいたんだから次はレジギガスを狙うと思ったんだが・・・」

コウキはチッと舌打ちをする。

「俺の思い過ごしか・・・まあいいや、次の聞き込みで最後にしよう」

しばらく歩いていると、若い男に出会った。なぜか顔面が蒼白だ。

「あの・・・すいません。ちょっとお尋ねしたいことがありまして」

コウキが声をかけると若い男はびくっと震えた。

「なんでしょうか?」

「国際警察のものですが・・・このあたりで何かへんな奴らを見かけませんでしたか?それか事件みたいなものが起こっていないか聞きたいのですが」

「国際警察の方ですね?それなら言ってもいいのかな・・・」

「何かあったんですか?」

コウキの問いに若い男が声を潜めて答える。

「もう知っていると思いますが・・・あのキッサキ神殿に爆弾が仕掛けられたと国際警察の方から電話で聞きまして・・・もう心配で心配で・・」

爆弾!?そんな大事件があったら俺にも直ぐに連絡が来るはず・・・。

この瞬間、コウキの頭に一つの考えが閃いた。

若い男としばらく話をして別れた後直ぐ、コウキは電話を国際警察本部にした。

「もしもしこちら国際警察本部です」

電話口から少女の声がする。

「ああ、リサか。コウキだ」

「なんか収穫でもあったの？」

「まあな。これは俺の推測だが・・・ポケモンハンターはキッサキ神殿にいる」

「嘘！」

「キッサキシティの近くでポケモンハンターとハンターを雇っている組織の幹部が目撃されあるトレーナーがその二人を倒しかけるも逃げられた・・・そして国際警察を名乗った謎の人物からの爆弾を神殿に仕掛けたとの偽情報。何よりキッサキシティの神殿にはレアポケモンのレジギガスがいる・・・どう思う？」

「うーん。キッサキ神殿にハンターがいる可能性はあると思うけど・・・目撃され、戦闘を行ったハンターと神殿にいるハンターは別人じゃないかしら？」

「何でだよ」

「だってレジギガスはたしかに希少度が高いし欲しがるやつはいっぱいいると思うけど、戦闘によって疲弊した戦力で捕まえられるほど弱くはないのよ。もし同一人物なら一度体勢を立て直してから任

務に当たるはず・・・・戦闘を行った直前にレジギガス捕獲なんて考えられないわ」

「それもそうだな・・・」

「まあ、こっちで調べて見るけど」

「頼むぜ」

コウキは電話を切った。

「さてと・・・キッサキ神殿に行くか」

コウキがキッサキ神殿に向かっているちょうどその頃。

ジュンたちは神殿の奥に進むのに苦労していた。

「やはり・・・キッサキ神殿の野生ポケモンはレベルが高いですね」

『ぼくもう疲れたよ・・・』

シャワーズがため息をつく。

倒れているニューラを横目に僕は呟く。

「ホンマやな・・・面倒くさいわ」

僕たちが話しているとドータクンが飛び出してきた。

ドータクンが銀色の球体を放ってきた！ジャイロボールだ。

「シャワーズ、ハイドロポンプ」

シャワーズの激流とジャイロボールはぶつかり相殺された。

僕たちのバトルの音を聞きつけたのか、ドータクンとニューラがわらわらと出てきてしまった。

「シャワーズ、だいぶ疲れてるみたいやな・・・それにこの数、一体ずつ戦ってたらきりがないわ・・・一気に行くで！出てくるんや、ルギア！」

恐らくアキラさんの切り札であろうと思われるルギアが出て来た。

その巨体からは威厳すら感じられる。

「ルギア、エアロブラスト！」

ルギアが突風を放ち、なんと相手を全員吹き飛ばしてしまった。

あまりの事に僕とシャワーズとゼロ（さすがに起きていた）が言葉を失う。

「凄すぎる・・・ジムリーダー・・いや、四天王でさえもこうは行かないよ・・・アキラさん、一体アナタは何者なんです？」

「俺か？そやな・・・元タワータイクーンとでもいっとくわ」

何気ない風にアキラさんが呟く。

「タワータイクーン！？それって、バトルリーグのチャンピオンと

同等かそれ以上の力を持っていないとなれない地位ですよ！」

タワータイクーンとはバトルリーグで四天王とチャンピオンに勝った者やそれに準ずる功績を持ったトレーナーだけがいけるバトルリーグの頂点に立つトレーナーだ。

「別にそんな大層なもんちゃうで。バトルをやってたらいつの間にかタイクーンになってただけの話や」

アキラさんは謙虚に言ってるんじゃなくて本当にそう思ってるんだ・・・。

「でも・・タワータイクーンがなんでハンターを？」

僕の問いにアキラさんが少しうつむく。

「難しい問いやな・・・俺は・・・あいつを守れんかった。だからあいつのために・・・ハンターをやっとるんや。俺はあいつを守ると決めたんや。二度と傷つけんために」

それ以上聞くのはまずいと思ったので僕は話を少しそらす。

「・・ということはP・H・Cの幹部はアキラさんより強いってことですか？」

「いや、それはちゃうな。幹部は確かに強い。つーても俺よりは弱いやつが大半や。ただ一人だけやなこの組織で俺よりも強い奴は・・・」

「もしかしてボスですか？」

「正解や」

まあ、予想は出来たけどね（汗）

「もうそろそろレジギガスがいるとこにつくで。気引き締めていかんとな」

『アキラ・・強いオーラを感じる。近いぞ』

ルギアの言葉に僕も緊張する。

ジュンたちがレジギガスにたどり着きかけている丁度そのころ。

コウキはキッサキ神殿の内部を調べていた。

「やっぱり爆弾情報はガセだったか・・・それに何者かが侵入した形跡が微かだがある・・・どうやらポケモンハンターで間違いないな」

そのときコウキのポケットで携帯電話が震えた。

「もしもし」

「コウキ！調べて見たんだけど、分かったわよ！アンタの読みどおりポケモンハンターで間違いないわ！」

興奮しているリサにつられコウキの胸も高鳴る。

（これで・・やっと捕まえられるぜ。待ってろよ、ポケモンハンタ

ー！）

「それで上には連絡したのか？」

「ええ。そうしたらある組織への要請許可がおりたのよ」

「要請って・・・国際警察からの応援じゃ駄目なのか？」

「上は慎重に慎重を期すつもりなの。大勢だとハンターに感ずかれるから少数精鋭がベストだけど、うちのハンター対策部隊は出払ってるし、通常の警官には負かせて置けないって言ってたわ」

「なるほど。で、どんな奴らが支援に来てくれるんだ？」

コウキの問いにリサが静かに答える。

「軍のポケモン救助部隊よ」

「な・・なにぃ～！！」

コウキはただただ驚き、その場に立ち尽くした。

第二十五話　ポケモン部隊到着！そして・・・（前書き）

ジュン「今回はアキラさんの戦いが見られるね！」

作者「それに彼らも来るし・・・」

ジュン「大変な任務になりそう・・・」

第二十五話　ポケモン部隊到着！そして・・・

「アキラさん、あれがレジギガスですか・・・・・」

僕達の目の前には巨大なポケモン、レジギガスが鎮座していた。

「ああ・・・予想以上に壮観やわぁ」

アキラさんはなんだか興奮しているようだ。フロンティア・ブレーンの血が騒いでいるのかな？

『そなた達・・・我を捕まえに来たのだな？』

レジギガスがゆっくりとこちらを向く。

「なあ、レジギガス何言ってるん？」

「レジギガスは、自分を捕まえに来たのかって言ってます」

『ほう・・・そなたは人の言葉を喋れるのか。珍しい・・・アグノムだな』

『レジギガス・・・』

『分かっておる。そなた達はポケモンハンターとその一味であろう？横にいる青年のその独特の身なり・・・神殿の住む者達や外から来るポケモンが噂しておったわ』

「何言ってるんかさっぱりやけど・・・自分を捕獲させてもらうで」

アキラさんが素早く石化装置をレジギガスに向け、トリガーを引く。

『小賢しい機械だな。破壊光線！』

レジギガスが通常の二倍ぐらいある破壊光線を放つ。

「やば・・・」

アキラさんがさっと避ける。破壊光線が当たったところには大きな穴が開いていた。

「もう一回・・・あれ？」

カチッカチッと音がするがビームが出てこない。

アキラさんがそっと石化装置の側面を見る。

「あちゃ～壊れてもうたで・・・」

「今度は僕がやります」

僕は鞄の中から石化装置を取り出し、レジギガスに向ける。

そしてそのままトリガーを引いた、が何も起こらなかった。

しまった！エネルギー切れだ。

僕は急いで鞄の中からエネルギー補充装置を取り出し、石化装置につなぐ。

「アキラさん、チャージにはまだまだ時間がかかるんですが・・どうします？」

「こうなったら正々堂々勝負するしか無いなぁ・・・それに頼るのは危険やで」

「では僕も手伝います。僕とアキラさんの手持ちで一斉に攻撃すればいけますよ」

僕の提案にアキラさんは首を横に振った。

「駄目や。それはいくらなんでもあかん。卑怯すぎる」

「アキラさん。僕たちハンターの第一目標はターゲットの捕獲です。手段は二の次なんですよ」

「俺は卑怯なことだけは嫌いなんや・・・ほんと言うとそんな機械も使いとうないんや・・・まあそれはいいとして、とにかくここは一体一で戦うべきや！これだけは譲れへん」

「アキラさんは甘いんです！どんな手段を講じても任務を成功させるのがプロでしょう！」

「だからってやっていいことと悪いことがあるやろ！とにかく大勢で一体を攻撃するのは酷すぎるから駄目や！」

『先ほどからそなた達の会話を聞いていると、どちらがハンターか分からないな』

レジギガスが苦笑する。

ジュンたちが神殿の奥で言い争っている丁度そのころ。

コウキはポケモン救助部隊の到着を待っていた。

「遅いな・・・」

「待たせたな」

コウキの前に二十代前半ぐらいの青年がバシャーモ、ルカリオ、サーナイト、チルタリス、ボーマンダ、シェイミそしてスイクンを引き連れていた。

青年の腰には右と左にそれぞれ銃のしまっているホルスターがある。

そしてバシャーモも銃器を身にまとっている。

その迫力にコウキが少し圧倒される。

「ポケモン救助部隊隊長、リュウだ。よろしく」

「俺は国際警察ポケモンハンター対策本部のコウキだ・・・それにしても」

コウキは一回言葉を切り、リュウたちをしげしげと見つめる。

「アンタ達装備が・・・多すぎないか？」

「そんなことないぜ。これが普通だ」

「しかしな・・・まさかとは思うが、その銃を撃ったりはしないよな？」

コウキの言葉にリュウ達が驚く。

『銃なんて撃たなかったら何の役にも立たないぞ』

バシャーモが呆れた風に言う。

『いいじゃねえか。この人間はそういうのには素人みたいだしさ』

ボーマンダが苦笑いしながら言う。

「もちろん撃つぜ」

「ちょっと待て！殺すのは駄目だぞ！死んじまったら責任問題になって面倒なことに・・・」

「大丈夫だ！ゴム弾を使ってるからな」

「・・・そうなのか」

「ああ。じゃ行こうぜ」

コウキとリュウ達は神殿の中に入っていった。

そしてその頃、ジュン達はまだ言い争っていた。

『そなた達が来ないのならこちらから行くぞ・・レジロック、レジ

スチル、レジアイス行くのだ！我はそなたらの戦いを拝見するとしよう』

レジギガスの周りにレジロック、レジスチル、レジアイスが出てきた。

「あ、なんや。レジギガス一体だけちゃうんか。それじゃ俺ら一緒に戦っても卑怯なことあらへんな・・・良かったわぁ」

アキラさんが笑う。

「アキラさん！なんでそんなにうれしそうなんですか！任務遂行に支障をきたすかも知れないんですよ！」

「自分は神経質すぎんねん。もっとポジィティブに行こうや」

「僕はただ真面目に任務を遂行しようとしているだけです」

「まあそう力まんでもええやん。・・・俺はあのレジアイスとレジスチルな。自分はレジロックをよろしく」

「いいんですけどね・・・それに・・」

僕は鞄の中からポケモンの価格表を取り出した。

「レジスチルは８００万、ロック８５０万、アイス７９０万・・・すごいです！絶対欲しがるやつがいますね」

「まあ・・な。それよりさっさとバトルと行こうか」

「エアームド、フライゴン出てくるんや！」

「シャワーズ、出番だ」

僕とアキラさんはお互いにポケモンを出し合った。

「エアームド、ラスターカノンをレジアイスに、フライゴンはレジスチルに大文字や！」

『相手・・・エアームド・・・チャージビーム発射！』

『破壊光線！』

レジアイスとレジスチルが放った技とエアームド達が放った技がぶつかり合う。

「エアームド、ラスターカノン三連発。フライゴンは地震」

エアームドがラスターカノンを連射する。レジアイスは飛びのくが二発当たってしまい、少しよろける。

フライゴンは一度地面の降り、足を踏み鳴らし地震を起こす。

レジスチルは破壊光線の反動で動けず、地震の直撃を受けた。

『ロックオン』

レジスチルが次の攻撃を必ず当てる技・・・ロックオンを使う。

『冷凍ビーム』

レジアイスがフライゴン目掛けて冷凍ビームを放った。レジスチルをカバーする気だ。

「フライゴン、大文字で相殺するんや」

フライゴンが大文字で冷凍ビームを防ぐ。

『電磁砲！』

「なるほどなぁ・・・ロックオンから電磁砲・・・そして仲間をカバーして冷凍ビームを放つ姿勢。すごいで、自分達！でも俺らも負けれへんねん・・・本気を見せたるわ！エアームド、ゴッドバードや」

エアームドが飛行タイプ最強の技ゴッドバードを貯めなしで使用する。

その瞬間エアームドの姿が消え、レジスチルが倒れていた。

『何が起こった・・・？』

レジアイスが驚嘆する。目にも留まらぬ速さのゴッドバード。エアームドはバトルタワー時代、鋼鉄の女帝と呼ばれておりその圧倒的な防御力と攻撃力で多くのチャレンジャーを沈めてきたのだ。

『冷凍ビーム！』

「フライゴン、一気に決めるで！最大出力で流星群！」

『僕の必殺技を見せて上げる！輝け、星たちの大群よ！』

フライゴンが大量のエネルギー弾を放つ。

流星群は冷凍ビームを押し切り、レジアイスに直撃した。

レジアイスが倒れたのを見て、フライゴンが降り立つ。

フライゴンもエアームドと同様に敬意と尊敬ゆえにつけられた別名があった。

疾風の精霊。その怒涛の攻撃ぶりは相手を圧倒する。

本気を出せば、風のように動き、嵐のように戦うのでこの名がついたのだ。

「終わったことやし・・・ジュンの戦いぶりでも観戦しよ」

その頃ジュンは・・・。

「シャワーズ、ハイドロポンプ！」

シャワーズが激流を飛ばし、レジロックを攻撃する。

『ストーンエッジ！』

レジロックのストーンエッジがシャワーズのハイドロポンプを阻害

する。

『ロックオン！』

「もう一回ハイドロポンプ！」

『電磁砲！』

シャワーズのハイドロポンプと電磁砲はぶつかりそうになったが・・・ビームは起動を変えるとシャワーズに直撃した。

『く・・・』

「シャワーズ！」

シャワーズはよろけると倒れてしまった。

「シャワーズ、休んでいて」

ジュンはボールにシャワーズを戻し、次の手を考える。

グレイシアとボーマンダはストーンエッジで弱点を突かれるしあのレジロックがアームハンマーえお使えたらアブソルもやられる・・・どうするかな。

『ジュンさん！俺が行きます！』

ゼロがレジロックの前に出る。

『分かったよ・僕が指示を出そうか？それとも自分の意思で戦う？』

『ぜひジュンさんの指示の元で戦いたいです！』

僕はゼロの使える技を知らないんだけど・・・まあいいや。

『電磁砲！』

レジロックが至近距離で電磁砲を放った！

「ゼロ、ボディチェンジ！タイプ、サンダース」

ゼロがアンダースの姿に変わり、電磁砲を無力化する。

「えっと確かレジロックには草タイプが良く効くはず・・・ゼロ、ボディチェンジ！タイプリーフィア！」

ゼロの姿が今度はリーフィアに変化する。ボディチェンジは連続して使うとゼロの体に負担をかけるからここらで決めたほうがいいかもね・・・。

「ゼロ、リーフブレード！」

ゼロが葉の刃を無数に飛ばす。

レジロックには効果抜群だ！

レジロックがよろける。もう一押しでいけるかも・・・。

「続けてアイアンテール！」

ゼロが鋼鉄並みに硬くなった尻尾でレジロックを攻撃する。

崩れ落ちるレジロック。

「やったね。ゼロ」

『的確な指示有難うございます！』

「どうやら終わったようやな～」

アキラさんが近寄ってくる。

「ええ」

『なるほど・・・そなたらはかなりのてだれとお見受けする。我が最後そなたらの相手になってやろう。我はこの神殿の守護者故そなたらを倒させてもらう』

ついにレジギガスが動き出した。

この任務・・・骨が折れるぞ。

だがこの時ジュンはまだ知らなかった。戦う相手はレジギガスだけではないことを・・・・。

第二十五話　ポケモン部隊到着！そして・・・（後書き）

作者「ということでキャットさんの作品からポケモン救助部隊の皆さんに来てもらいました！」

ジュン「なんか・・・大変そう」

作者「うん。なんたってプロだもの、彼らは」

ジュン「僕だってプロだよ！」

作者「次回はプロ同士の戦いだね～」

第二十六話　巨大な組織の片鱗（前書き）

ジュン「今回は新キャラが出てくるんだよね」

作者「そう。・・・今後の物語の展開に深く関ってくる重要な奴だよ」

ジュン「なんか緊張してきた・・・」

第二十六話　巨大な組織の片鱗

「俺が行くわ」

アキラさんがルギアと共に前に出る。

「アキラさん、僕も・・・」

「自分はいざというときのために戦力残しとき」

「・・・分かりました」

僕はアキラさんの後ろにある岩に座る。

いまから僕たちハンターのトップであり、元フロンティア・ブレーンの戦いが見られる・・・。

『我と向かい合って怯まぬとは・・・面白い。そなたがハンターであることが残念だ』

レジギガスが構える。

「ルギア、気を抜かずにいくんやで」

『ああ。分かっている』

『では・・行くぞ！破壊光線！』

「おっと危ないわ。ルギア、エアロブラスト！」

破壊光線がエアロブラストとぶつかる。しかし、破壊光線はエアロブラストを突き破ってしまった！

「ハイドロポンプ！」

『吹き飛べ！』

ルギアが使った技はシャワーズの得意技を同じ、ハイドロポンプだった。

でも・・・シャワーズのよりもかなり威力が上だ。

ハイドロポンプと破壊光線はぶつかり合い、相殺された。

「自分やるな～。なんだかワクワクしてきたで！」

『ああ、俺もだ・・・』

『そなたらの実力は本物のようだな。ではこれはどうだ・・・雷パンチ』

レジギガスはルギアに拳を振るう。

「おっと、避けるんや！」

雷パンチをギリギリ避けるルギア・・・が。

『甘い！冷凍パンチ！』

『ぐっ』

素早くもう一方の拳で冷凍パンチを繰り出すレジギガス。

ルギアにパンチが沈み込む。やばいね・・・レジギガスはルギアに効果抜群の技を現在判明しているのだけで二個も持ってる・・・。かなり不利だぞ、この戦い。

僕はチラリと横を見る、石化ビーム装置のエネルギー充填率はまだ４０パーセントだ。

でもまあ・・・いざというときはこれを使って・・・。

「自分は手を出さんといてな・・・。これは俺とルギアの戦いや」

「え・・！？」

アキラさんレジギガスを見ながら僕に言ったのか・・・！

なんで僕が考えてることが分かるんだ？

「自分の考えてることぐらい分かるわ。俺と自分は半日一緒に行動してたねんで・・・自分の性格ぐらい俺は理解しとる」

「でも・・」

「石化ビームはレジギガスと戦ってる最中は使用禁止や。もし手を出したら・・・・」

僕の背筋が一瞬寒くなる。さっきまでのアキラさんとは大違いだ。

バトルに対するアキラさんの姿勢には圧倒されるものがあるけど・・・まさかここまでとは。

「・・・分かりました。約束します」

僕の言葉にアキラさんは一瞬こちらを向く。顔は真剣な表情と笑いの表情が半々だった。

「ありがとな・・さて続きをやろうやないの！ルギア、行けるな！」

『当たり前だ』

「ゴッドバードや！」

ルギアの体が輝き始める！エアームドの使ったのと同じ、飛行タイプ最強の技・・・！

『では・・我の最強の技で迎え撃ってくれる！』

レジギガスが体にエネルギーをため始める。

『ゴッドバードに耐え切れるかな！』

ルギアはそう言うと神々しい光を纏い、レジギガスに突っ込む。

す・・すごい！さっきのエアームドの時のより見ただけで分かるほど威力が格段に上だ！

『ギガインパクト！』

レジギガスはエネルギーの塊となって、ルギアと正面からぶつかり合う。

煙が舞い上がり僕から視界を奪う。

バトルは・・・どうなったんだ!?

煙が消え、僕は飛び込んできた光景に息を呑む。

ルギアが辛そうに床に伏せ、レジギガスが立っている。

まさか・・・元フロンティア・ブレーンのアキラさんが負けたのか?

僕が驚いていると、レジギガスが静かに言った。

『ふ・・どうやら我の負け・・・のよう・・だ』

レジギガスは床に倒れてしまった。

『はぁ・・・何とか勝ったが、俺の体力は限界だ』

「ここまで追い詰められたのはいつ以来やったやろ・・・」

緊張の糸が切れたのか、アキラさんがルギアをボールに戻し地面に座り込む。

僕は充填中の石化装置を見る。

充填率８０パーセント・・・この機械の優れた特徴はエネルギー充填率１００パーセントで無くとも、６０パーセント以上であれば使

用できるところだ。

「・・・石化しておきますか？」

「そやな・・・俺はその石化っていうのがあんま好きちゃうねん。なんかポケモンに失礼な気がしてな・・・。まあええわ。やっといてくれ」

「はい」

短く答え、僕は石化装置をレジギガスに向ける。

この瞬間だ・・このターゲットを捕獲するこの瞬間が僕になんともいえない高揚感と罪悪感を与えてくれるんだ！

そしてトリガーを引く。

ビームは倒れているレジギガスに当たり、体の半分を石化させる。

さすが巨体のレジギガス。もう一発当てないと駄目みたいだね。

僕が二発目を当て、完全石化するのを見てアキラさんがハンターボールを取り出し、投げる。

ボールに収納されたレジギガスを見て、僕はホッとする。

これで任務終了。

「帰りますか。あ。どうせならキッサキシティの屋台にも寄ってみたらどうです？僕はこの姿では自由に出歩けませんが・・」

「ああ。そうやな・・帰るか・・待つんや」

「何ですか？」

「何か妙な気配がする・・・！危ない！」

アキラさんが急に僕とゼロを抱えて、飛びさすった。

その瞬間、バシンと音がする。

何なんだ！？一体何が・・・？

僕はただ困惑するばかり・・・。

そして入り口の物陰からバシャーモが銃を―スコープが付いた狙撃銃と言って方がいいか―で僕たちを狙っている。まるで暗殺者だ（汗）

ドン　ドンと銃声が神殿に響く。

「ケッタイなモン使うなぁ・・・おっと」

アキラさんに抱きかかえられた状態の僕の頬に銃弾が掠める。

ドン　ドン

バシャーモが連射するがアキラさんは全ての弾丸を身軽に避ける。

・・・ってアキラさんの運動能力が凄まじいんだけど（汗）

『チッ、ならこれでどうだ！』

その瞬間アキラさんの体に赤い点がうつる。

・・・赤い点？

見覚えがある・・・たしか石化ビームの予備機能についていた・・・レーザーポインターだ！

「アキラさん！狙われてます！」

ババババ

バシャーモがアサルトライフルを乱射する。

「お～怖いな」

アキラさんは僕とゼロを抱えたまま、岩陰に隠れた。

銃声が止む。僕たちが出てくるのを狙ってるんだ・・・。

ゼロなんか真っ青になって声も出せない様子だ。

「・・・どうします？」

「そうやな・・・まああれはどうやらゴム弾みたいやけど・・・当たったら失神間違いないわ。俺もさっき一発かニ発喰ろうたけど・・・きついで」

「・・・ポケモン達を使ってかく乱しましょうか？」

「いや・・・ポケモンに当たって失神されたら人質にされかねん。俺に考えがある・・・まず俺があの武器商人と化しとるバシャーモの気を引く。あのアサルトライフには３０発の弾丸そして銃身にこめてるかもしれん一発・・・合計３１発連射が限界や。リロードしてるときに他のポケモン達で一気に押し切るんや」

「・・・しかし、他の銃も持っているかも知れませんよ？」

「・・それもそうやな。そうや！自分、グレイシアを持ってたやろ？」

「ええ」

「グレイシアの氷タイプの技であいつの銃器を封じてしまうんや！」

「なるほど・・・」

「つーことで頼むわ」

アキラさんはそう言うと岩陰から飛び出した。

ババババ

アサルトライフルの発射音が響く。

ババババ・・カチッ　カチッ

フルオートで連射するから弾切れを起こしたらしい。

今だ！

「グレイシア、冷凍ビーム！」

僕は素早くグレイシアを繰り出し、岩陰から出た。

丁度バシャーモが新しい弾倉を装填しようとしていたところだった。

『そんなもの私が凍らせて上げるわ！』

グレイシアが放った冷凍ビームはアサルトライフルと狙撃銃を凍てつかせる。

『く・・俺の愛用をよくも・・』

バシャーモが腰のホルスターに手を伸ばしかけたが途中でやめる。

『俺一人での奇襲は失敗か・・』

バシャーモはそういい残すとさっさと立ち去ってしまった。

「はあ・・・どうやら切り抜けられたようですね」

「甘いで。あのバシャーモの重装備、あれは間違いなく軍の組織・・・ポケモン救助部隊の一員や」

「マジですか！なんで軍が動き出すような大事に・・・」

「恐らく、警察が申請したんや。国際警察は俺らを本気でしょっ引

く気やで」

そんな・・・そう言えばさっきバシャーモが「俺一人での」って言ってたな・・・ということは・・・・！

「もしかして僕たちは既にポケモン救助部隊に包囲されてるってことですか！？」

「間違いなく、な」

「どうします？」

「うーん。中央突破しかないわ。それしか思いつかれへん」

まあアキラさんらしい作戦（と言っていいのかどうか・・・）だね。

ジュン達がピンチに立たされていること、外ではコウキ達が待機していた。

そこにバシャーモが戻ってくる。

「どうだった？」

リュウが聞く。

『さすがに一人は駄目だったな。まあ奴らには相当のプレッシャーになっているだろ』

『ポケモンハンターがお縄にかかるのも時間の問題でしゅ！』

リュウの頭の上でシェイミが喜ぶ。

「ああ・・そうだな。奴らハンターがキッサキ神殿から出てきた瞬間総攻撃だ！バシャーモの奇襲は失敗したが・・・これでハンターが焦って冷静な判断を下せないようになれば・・・」

『私たちの任務は成功に終わる、だな』

リュウの言葉をスイクンが引き継ぐ。

「バシャーモ、Ｍ４（アサルトライフル）とＳＶＤ（狙撃銃）は見たところ使えねえな」

『大丈夫だ。ハンドガンのＭ１９１１Ａ１は無事だからな』

バシャーモがＭ１９１１Ａ１をホルスターから取り出す。

「よし！調べたところこのキッサキ神殿には裏口もねえし。奴らがこの正門以外から逃げ出す可能性も無い・・・皆気を入れていけよ」

リュウの仲間とコウキが頷く。ちなみにコウキのポケモンは今戦える状態ではないのでボールにしまっている。

不意にルカリオが後ろを見る。

彼には波動を感知する力があり、人やポケモンの位置を特定できるのだ。

『どうしたんだ？ルカリオ？』

ボーマンダが聞く。

『いや・・・なんでもありません』

しかしルカリオの気づきは正しかった。

リュウ達から少し離れた崖の上に、一人の少年が特殊な双眼鏡でリュウ達を見ていたのだ。

ルカリオの探査能力が効かなかったのは、その少年の被っている特殊な迷彩柄の布はポケモンの探査能力やレーダーなどから身を守ることが出来るのだ。

「・・・ポケモン救助部隊に国際警察か・・・本部の情報通りだな」

その少年は長い鞄からスナイパーライフルを取り出した。

「P・H・Cのトップハンターといえども・・・あの数を相手にするのは大変だな。いざというときはこれを使うしかないか・・・出来れば使いたくはないんだが」

少年はポケットから一枚の紙を出した。

そこにはこう記されていた。

中央情報局（ｃｅｎｔｒａｌ　ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　ｃｅｎｔｅｒ）本部から「イプシロン」へ。

情報によればキッサキ神殿に国際警察とポケモン救助部隊が派遣さ

れた。

彼らの目的は神殿で任務遂行中のＰ・Ｈ・Ｃ公認のハンター、Ｎｏ．１とＮｏ．４を捕まえることにある。

Ｐ・Ｈ・Ｃのハンターが国際警察に逮捕されればハンターの口から情報が漏れ、直ぐにでもＰ・Ｈ・Ｃに調査が入るだろう。

そうなれば巨額の投資をされてきた極秘計画プロジェクト・キメラの存在も明らかになり、Ｐ・Ｈ・Ｃと国のトップの取引も自明の元にさらされるだろう。

我々ＣＩＣがこの計画を成功させるために行ってきた工作も当然国際警察知られてしまう。

この最悪の事態を避けるためにはハンターを国際警察の手に渡してはならない。

「イプシロン」、君の任務はいかなる手段を用いてもハンターを国際警察の手から守り、情報の流出を防ぐことだ―

第二十六話　巨大な組織の片鱗（後書き）

ジュン「あのイプシロンって奴誰？」

作者「それはいえない」

ジュン「・・・だよね」

第二十七話　空中戦そして・・・！（前書き）

ジュン「ねえ・・あのイプシロンってやつライフル持ってたよね？なんで？」

作者「彼はスナイパーでもあるからね」

ジュン「・・・コラボのバシャーモと被ってるよ？」

作者「大丈夫。そのために彼のライフルを封じたから」

ジュン「・・・・・・（汗）」

第二十七話　空中戦そして・・・！

「この任務ではジュンに会わないようにしないとな・・・。それにさっさと終わらせてオーキド博士のポケモン講座を見たいぜ」

崖の上でスコープに目をつけている少年、イプシロンの呟きは誰にも聞かれることなく空気に

溶けていった。

そしてその頃ジュンたちは・・・。

「ええか。神殿の前には救助部隊の奴らが待ち構えとる・・・そこでや」

アキラさんが言葉を切る。

「俺はルギアを、自分はボーマンダを出しといて一気に空に逃げるんや」

「しかし・・ルギアはレジギガスとの戦いでかなり疲弊してますよ」

「大丈夫」

アキラさんが取り出したのは満タンの薬だった。

アキラさんはルギアをボールからだし体に満タンの薬をかける。

『あ～生き返る。マジで今回の戦いはきつかったからな・・・』

『ルギア、これからもっと活躍してもらうんだよ?』

僕の言葉にルギアがえ~と不満たらしく声を上げる。君は学生か!

「ルギア、頼むで」

アキラさんがルギアの体を優しく撫でる。

『ま、アキラのためなら仕方ないな・・・』

ため息をつくルギア。なんか普通の青年みたい・・・。

「ゼロはアキラさんの鞄の中に入っていてね・・危険だから」

『分かりました・・・気をつけてくださいね』

「ああ」

僕はゼロを鞄に入れる。そしてモンスターボールからボーマンダを出した。

『話は聞いていたが・・・大変なことになったな(汗)』

「仕方ないよ。国際警察は僕たちハンターを捕まえようと必死なんだから」

「じゃ・・行くで」

アキラさんが神殿の廊下の入り口に入る。

続いて僕とボーマンダも入る。

ルギアも・・・・あれ?

「ルギア、どないしたん?はやくついてきてや」

『アキラ・・そうしたいのは山々なんだがな』

「ルギア?」

アキラ、僕そしてボーマンダが振り返る。

ルギアの体が廊下につっかえていた(汗)

「何やってるん!遊んでる場合ちゃうで!」

『俺だってこんな情け無い姿にはなりたくねえよ!でも・・狭いし・・つーかアキラ助けてくれぇ』

「なあ・・ルギア何言ってるん?」

「えーと。簡単に言うとつっかえたから助けてくれ、と」

僕の翻訳にアキラさんが頷く。

「しょうが無いな・・・戻れルギア」

ボールを取り出しルギアをボールに戻すアキラさん。

「じゃ・・気を取り直していこうか」

しばらく歩いていると光が見えてきた。

出口だ。

「なあ・・やっぱり出口は大きいほうがええよな。ルギアが通れるぐらいあったほうが、な」

「？」

アキラさんがモンスターボールからフライゴンとエアームドを出す。

「・・・何する気ですか？」

「何、ちょっと出口の拡大工事や。エアームド、ラスターカノン！フライゴン、流星群！」

えええっ・・・何すんのこの人！

エアームドとフライゴンのダブルアタックで元々の大きさより二倍ほど広がった。

キッサキ神殿を壊しちゃ駄目でしょ・・・・。

僕はただ呆然とその光景を見ていたのだった・・・。

そして同じ頃。

「うわぁ」

コウキは突然の爆発にしりもちをついてしまった。

「お前は下がっていろ・・・爆弾を使ったのかもしれない」

リュウが右のホルスターから取り出し、デザートイーグルを構える。

バシャーモもリュウに続きＭ１９１１Ａ１（ここからはコルトガバメントと表記）でしっかりと狙いを定める。

その場に張り詰めた静寂は永遠に感じられる。

その時！

「ルギア、エアロブラスト！」

アキラの指示とともにルギアが突風で攻撃してきた！

思わず怯むバシャーモ。

しかしリュウは冷静にデザートイーグルをルギアに撃ち込む。

バン　バン　バン

「・・・効いたか？」

「そんなモンがルギアに効くわけ無いやん♪」

突然空が暗くなった・・・。

エアームド、フライゴンそしてルギアとボーマンダの飛翔と共にアキラとジュン（アグノム）の姿は消えていた。

「チッ！奴ら空に逃げやがった。ボーマンダ、俺を乗せて追ってくれ。チルタリスはバシャーモを乗せて俺の後ろからバシャーモが援護できるように飛んでくれないか。シェイミはスカイフォルムになって一緒に来てくれ。他の皆は地上から攻撃だ！」

リュウの素早い指示に皆が頷く。

『ああ、リュウしっかりつかまってろよ』

『バシャーモ、僕の上に乗って！』

ボーマンダとチルタリスそしてシェイミが飛び立つ。

コウキ達は下からリュウたちを追いかける。

同じ頃、イプシロンがその光景をみていた。

「空中戦をやるつもりか・・・俺の狙撃技術じゃ奴らをなるべく怪我させずに攻撃することは不可能だ・・・追いかけるしかねえか」

イプシロンはライフルを背負って密かにリュウたちを追った。

そしてジュンたちは・・・・。

「作戦うまいこといったなぁ」

アキラさんがうれしそうな顔をする。

「まだですよ。彼らが追ってくるはずですから」

『ジュン・・・どうやら「はず」じゃすまないようだぜ』

ボーマンダの言葉に僕は後ろを振り返る。

後ろには僕のと同じボーマンダが銃を向けた青年を、チルタリスがさっき僕たちを襲ったバシャーモを乗せていた。

「・・・どうやら下からも狙われてるようやな」

アキラさんの言葉通り、下には救助部隊と・・・・前に僕がユウタと組んで交戦した国際警察の少年がいた！

「どうします・・・アキラさん？」

「そやな・・・エアームド、やつら目掛けてラスターカノン！」

アキラの指示でエアームドが銀のエネルギー弾をリュウ達に発射する。

しかしあっさり避けられてしまう。

そのときドンと音がする。

『きゃあああ。熱い！』

エアームドの体が燃えている！

「エ・・エアームド！何が・・・ルギア、ハイドロポンプで火を消してやるんや！」

『分かってるさ！ハイドロポンプ』

ルギアの水の激流がエアームドにまとわり付いていた炎を消す。

しかし・・・エアームドは地上に落ちていった・・・。

「く・・戻れ、エアームド！」

モンスターボールのビームが何とかエアームドを捕獲し、ボールに収納する。

「今のは火炎弾ですね・・。たぶん彼らはグレネードランチャーを持っています」

しかしアキラはただ黙っていた。

「アキラさん？」

「・・・危険や、戻れフライゴン」

アキラさんがフライゴンを戻してしまった。

ポケモンのことを第一に考えての行動だろうけど・・・戦力が減ったことで僕たちにはますます不利な状況になったね・・・。

ジュンが冷や汗をかく。

「ルギア、後ろに向かってエアロブラスト連打や！」

『喰らえ！エアロブラスト！』

ルギアが突風をリュウたちに浴びせる。

エアロブラストはチルタリスを襲い、チルタリスはバシャーモごと地上に落下した。

「バシャーモ！チルタリス！」

リュウが叫び声をあげる。

『リュウ、俺たちは大丈夫だ！』

バシャーモとチルタリスは何とか近くになった木につかまり地上に叩き落されることは免れたようだった。

『僕は翼をやられて飛べない・・・あとは任せたよ』

チルタリスの言葉に頷くリュウ。

「・・・まだ追ってきますよ」

ジュンの言葉にアキラが苦い顔をする。

「しつこいなぁ・・・ルギア、もう一回エアロブラスト！」

しかし突風をあっさり交わしてしまうボーマンダ。あっちのボーマンダ・・・かなり良く育てられてるね・・・。

ジュンが後ろを見ていたその時、リュウがデザートイーグルをホルスターに戻し、Ｍ５００　カスタムを取り出した。

その光景を見て、ジュンはある嫌な予感を感じる。

あのデカイリボルバーは・・・まさか・・

「アキラさん！やばいですよ！すぐに旋回して逃げましょう！」

「なんやの一体・・・」

バン　バン　バン　と三発の銃声が僕の耳に木霊する。

そして・・・アキラさんは驚きと苦痛の表情のまま、下に落下していった・・・。

「ア・・アキラさん！ボーマンダ、助けてあげて！」

『無理だ！間にあわねえ！』

『くそっ！』

ルギアが一気に加速し、ギリギリのところでアキラを足でつかむ。

だが自身のスピードを制御できずそのままアキラを守るようにして地面にぶつかってしまう。

く・・・このままじゃアキラさんが捕まってしまう！

ジュンとボーマンダは地上に降り、アキラとルギアを救出しようとする。

「アキラさん！しっかりしてください」

『おい・・ルギア、大丈夫か！』

ボーマンダがルギアをゆする。

「く・・・」

アキラさんが身をよじる。相当痛いのだろう。

「アキラさん、逃げましょう・・・」

「そこまでだ」

僕の後ろのほうで声がする。

ジュンが振り向くとそこのはＭ５００を構えたリュウとコバルトガバメントを構えたバシャーモを筆頭にポケモン救助部隊とコウキがいた。

絶体絶命とはこのことだ・・・。

「ポケモンハンター。お前をポケモン保護法違反及び器物破損で逮捕する」

コウキが力なく倒れているアキラに近づく。

その時。

ヒュン　ヒュンと風を切る音がした。

そしてリュウとバシャーモの手からＭ５００とコルトガバメントが吹き飛ぶ。

その突然の出来事に一瞬場が静まり返る。

「な・・・サイレンサーつきの銃声？誰が・・」

リュウがデザートイーグルを構えようとホルスターから出すが、その瞬間デザートイーグルも吹き飛び、リュウの背中のグレネードランチャーも中を舞う

・・・今だ！

僕はアキラさんのボールを使い、倒れているルギアを戻し、ボーマンダにアキラさんを乗せる。

「く・・逃がすか！」

コウキがジュンたちを追おうとするが、またしてもヒュンと音がし、コウキの足元との土にライフルの弾がのめりこむ。

これは警告だった・・・いつでもお前達を撃てることが出来るぞ、という警告。

動くことの出来ないリュウ達を尻目にボーマンダがジュンとアキラを乗せ飛び立つ。

そしてジュン達の姿が見えなくなると、森の中から撃っていたイプシロンがさっさと去る。

「ハンターを国際警察の手から守るミッションは一応成功したが・・・だが奴らのことだ、もう少し監視を続けるか」

サイレンサーつきのライフルを背負って・・・。

第二十八話　イプシロンの策略（前書き）

ジュン「今回でコラボは三回目だね」

作者「うん。で、今回はイプシロンの作戦がリュウさん達を襲うよ！」

ジュン「何か怖いね・・・」

作者「ではお楽しみください」

第二十八話　イプシロンの策略

「ボーマンダ・・・ここで降りよう。キミは働きっぱなしだから・・少し休憩しようか」

僕の言葉にボーマンダが頷く。

背中にはアキラさんを背負っているので、重いのに頑張ってくれているボーマンダには感謝だ。

僕はアキラさんをそっとおろす。

「アキラさん・・・大丈夫ですか?」

「アグノムがしゃべっとる・・・ああジュンやったか」

アキラがジュンを力なく見る。

「アキラさん・・・今すぐにでも治療したほうがいいのですが・・ここじゃ彼らにまた見つかってしまうかもしれません。一旦キッサキロイヤルホテルに戻りましょう・・・歩けますか?」

「すまん・・・しばらく無理や」

まあゴム弾とはいえ高威力の銃の弾丸を三発の受けたんだから無理ないね・・。

僕はボーマンダの方を向く。

「ボーマンダ、しばらく休んでて」

『ああそうさせてもらうぜ』

ボーマンダが目を瞑る。

相当疲れていたみたいでそのまま眠ってしまう。

僕は木に寄りかかり考えを巡らせる。

僕たちの窮地に放たれた弾丸・・・・一体誰が？

ポケモン救助部隊は軍の特殊部隊・・・・それを押さえ込むなんて。

僕たちハンターを守ったのか？

もしかして・・・P・H・Cのハンターが・・・。

いやそれは無いな。ハンターはあんな見事な狙撃をするための訓練なんて受けていないし、第一サイレンサーつきのライフルなんて扱うことがありえない。

あれは明らかに僕たちを国際警察から逃がすための行動。

と・・すると僕たちを守ったのはP・H・Cと利害が一致している何者か・・・あるいは組織。

もしかしてキメラ技術と関係があるのか？

一体P・H・Cの裏には何が潜んでいるんだ―。

『ジュンそろそろ行こうぜ』

僕が考えているとボーマンダが声をかけてきた。

「ああ・・・そうだね。早くホテルに戻ったほうがいい」

僕とボーマンダはアキラさんを乗せる。まだ立てないみたいだ。

「アキラさん、ホテルに着くまでの辛抱ですからね・・」

そして同じ頃、コウキ達は・・・。

「くそ！取り逃がしたか！」

リュウが地面を蹴る。

『もうすこしだったのにね。今から追いかけられないのかしら？ルカリオの探知能力を使えば・・』

サーナイトの言葉にリュウが落ち着く。

「・・・サーナイトの言うとおりだな。ルカリオ、いけるか？」

『ちょっと待ってくださいね・・・駄目です。遠くすぎて探知できません。すいません・・僕があのとき狙撃手に気づけていれば・・』

「しょうがないさ。あのライフルで撃ってきた奴は波動の探知を防ぐ特殊なアイテムを使っていたんだろうし」

ルカリオを慰めるリュウの横でコウキが携帯電話をいじる。

「リサか？俺だ」

「コウキ！どうだった？」

「駄目だ。逃げられた・・・だが結構な収穫も得たぜ。まずは人語を喋りモンスターボールを持ってるアグノム・・そしてアキラと呼ばれるエアームド、フライゴン、ルギアを所有しているアキラと呼ばれるポケモンハンターだ」

「アキラ！ですって・・・」

「どうした？」

「ちょっとマジ情報よね？大変なことよ・・・そのハンター・・元タワータイクーンよ」

「フロンティアブレーンがなんでハンターなんかやってるんだよ！」

コウキの声にリュウたちも反応する。

「調べておくわ・・・闇ルートのバイヤーの動きもね」

「頼んだぜ」

コウキは電話を切るとリュウが詰め寄る。

「ホントか！フロンティアブレーンがハンターって」

「あ・・ああ」

『トレーナーの頂点に上り詰めた奴が何故・・・』

スイクンが不思議そうにする。

「まあとにかく、皆休もうぜ。奴らも襲われてからすぐに取引するできるわけは無いからな」

『だが・・追われていることが分かった時点で奴らは取引を急ぐはずだ』

バシャーモの言葉にリュウが同意する。

「そうなんだが・・今の俺らには何も出来ねえ。ルカリオの探知範囲を超えたところに奴らはいる。・・・ここは一旦休んで体勢を立て直しすべきだ。休んだら奴らの逃げた方向に俺らもいく・・・そうすればルカリオの探査範囲に引っかかってくれるかもしれねえからな」

リュウの言葉に皆納得する。

『じゃあ俺は氷漬けにされた相棒達のメンテナンスでもするか・・・あーあこんなんになっちまって・・・』

バシャーモがアサルトライフルと狙撃銃を取り出し、丁寧にメンテナンスし始めた。

「そう言えば・・・もうすぐ昼だな」

「それなら俺が弁当買ってきてやるよ」

「ああ、頼むぜ」

リュウがコウキにお金を渡す。

「ここらにコンビニにたいなモンあったかな～」

コウキが弁当を買いに歩いていると、一人の少年が茂みにいるのを見つけた。

その少年は縦長のバッグを背負い、双眼鏡で何かを見ている。

コウキには気づいていないようだ。

あいつ・・・どこかで見た事あったような・・・。

まあ・・早く弁当買いに行かなきゃならないし・・まあいいか。

コウキはさっさと無視して立ち去った。

もし彼が見た少年がイプシロンだと気づいていたら驚いただろう。

イプシロンの正体を見たのだから・・・・。コウキは忘れているようだが。

コウキが去った後、イプシロンが携帯電話を取り出す。

この電話もイプシロンの着ている服と同じく、探知防護素材を使っており、ルカリオに探知される心配は無い。

「Ｄｒエリカ、俺だ」

「あら・・・そっちから電話をかけてくるなんて珍しいわね」

「Ｎｏ．１の正体が国際警察にばれた」

イプシロンの言葉にエリカが黙る。

「・・・どうする？Ｐ・Ｈ・Ｃの幹部さんよ。俺たちＣＩＣ情報部員の指揮権はあんたらＰ・Ｈ・Ｃに預けられている・・・俺は単独行動できない」

「そうね・・・国際警察に潜伏させているＣＩＣエージェントに証拠を抹消させましょう」

「なるほどな」

「イプシロン、あなたには感謝するわ。ポケモンハンターとしてＰ・Ｈ・Ｃ内潜入しに裏切り者がいないか監視するのがあなたの任務よね。ここまでやってくれるとは・・・」

「まあ、俺の正体がＣＩＣエージェントだと知っているのはあんたら幹部だけだしな。俺は下級ハンターの地位にいることで、他の奴らに怪しまれずに監視の仕事が果たせる・・・これがＰ・Ｈ・Ｃから下された任務だ。だが・・・ＣＩＣ本部からの任務はそれだけじ

ゃない」

「分かっているわよ。秘密保持のためハンターを国際警察の手から守るんでしょ・・・プロジェクト・キメラの秘密の守り人さん」

「それは俺にじゃなくＣＩＣ本部に言ってくれ・・・俺はただ課せられた任務を遂行しているだけだ」

電話を切った後、コウキが戻ってこないうちに別の場所に移動し、再び双眼鏡をのぞくイプシロン。

リュウ達のお食事タイムをのぞき、イプシロンは朝から何も食べていなかったことに気づく。

ポケットからチョコレートを出し、かじる。

「・・・奴らの食事はなかなか美味そうだな。あれは確かキッサキシティの有名店、ホカホカ亭のデラックス弁当限定版か・・・」

情報部員はどんな情報であろうと頭に仕入れてから任務に当たる。

「俺も欲しいな・・・こんど買おう」

そんな呟きはもちろん誰にも聞かれなかった。

そしてその頃・・ジュンたちは何とかキッサキロイヤルホテルの部屋についていた。

ロビーやフロントを通るときはアキラさんが精神力だけで歩いていたけど・・・今はベッドに倒れこんでる。

僕が近寄ると、アキラさんは元気なく微笑んだ。

「俺をココまで運んでくれた自分らに感謝やな・・・」

「アキラさん、今治療薬を塗りますからね」

僕はアキラさんの服を脱がせて上げる。

引き締まった体には三箇所大きな赤く腫れている部分があった。

僕がそっと手で触ると、アキラさんの顔がゆがむ。

「どうやら・・・骨に当たったようですね。ひびが入ってるかもしれません」

僕はそっと薬を塗る。

「そうや・・取引はどうするん?奴らに見つからんうちにさっさとレジギガスを売ってしまったほうがええで」

「大丈夫です。先ほど連絡したら今日にでも取引したいらしいです。場所はキッサキシティの入り口にある大きな崖のそば・・時間はこちらの好きなときでいいと」

「それなら・・・そうやな。俺が回復できしだい直ぐに取引開始や」

「分かりました」

僕は横で心配そうにしているゼロを撫でる。

『大丈夫だよ・・・』

そう・・きっと大丈夫なはずだ。

ジュンがアキラの回復を待っている間、リュウ達は既に動き出していた。

ルカリオは意識を集中し、周りを探知している。

そしてリュウの後ろにはイプシロンが密かについて来ていた。

「奴らが動き出すのが早い・・・確かＮＯ．１たちがいるのはキッサキロイヤルホテル・・・このままじゃ見つかっちまう・・・何か手を打つ必要があるようだな」

そしてリュウ達は・・・・。

「どうだルカリオ、見つかったか?」

『いえ・・引っかかってきませんね』

『くそ・・・そんなに遠くには言ってないはずだが』

バシャーモが舌打ちする。

一行が歩いていると、突然煙があたりを覆った。

『何なんだ！』

「気をつけろ、罠かもしれねえ」

バシャーモがコルトガバメントを、リュウがデザートイーグルを構える。

「く・・ムクホーク、吹き飛ばし」

コウキがムクホークを繰り出す。

ムクホークの吹き飛ばしのよって煙が消え、視界が戻ってくる。

『何だったんだ・・・一体』

スイクンは訝しげだ。

「悪戯か・・・それにしちゃ大げさだな・・・あれ？サーナイトは？」

『俺たちの後ろのほうを歩いていたはずだが・・・。シェイミ、確かお前の横にいたよな』

ボーマンダが振り返る。

『ミーの横にいたでしゅよ・・・あ、そう言えばさっきの煙の中でサーナイトの気配が消えたでしゅ！』

「おいおい・・・まさかさらわれたんじゃ。ルカリオ、探査を頼む」

『今やっています！・・・そんな・・サーナイトの気配が完全に消えています・・・』

『まさか先ほど私たちを狙撃した奴の仕業・・・』

スイクンの言葉に皆が凍りつく。

「くそっ！ポケモン救助部隊の仲間がさらわれるなんて・・・俺がもっと気をつけていれば！どうやら笛の効果も届かない場所まで逃げられたらしいな・・・」

木を殴りつけるリュウにバシャーモが悔しそうに言う。

『リュウ・・・どうやら俺たちは先にサーナイトを拉致した奴をぶっ飛ばさなきゃならねえようだな』

「ちょっと待て・・・ポケモンハンターの追跡はどうするんだ！」

コウキがリュウたちに抗議する。

「仲間の救出が先だ・・・」

「だが・・・」

「ハンターは俺のＭ５００を三発も喰らってる・・・取引までは時間があるはず。サーナイトを救出してからハンターを追いかける・・・それでいいだろ」

「あ・・ああ」

コウキはリュウが激情を抑えていることに気づく。
そしてその頃。サーナイトは盗んだ車を運転しているイプシロンと一緒にいた。
どうやら軽い麻酔薬を嗅がされたらしく眠っている
『う・・ん。ここは・・』
「気がついたか」
運転するイプシロンの姿を見て、サーナイトが驚く。
『あなた一体何者?それにここは・・・』
「俺はイプシロン・・・ここは車の中だ。お前の身柄を拘束させてもらっている・・悪く思うなよ」
『あのときの煙はあなただったのね!それに・・・何故ポケモンの言葉が分かるの?』
「お前の腕に翻訳マシンを取り付けているからだ」
イプシロンはチョコレートをかじりながら応える。
『く・・リュウ達を攪乱するつもりでしょうけど・・そうはいかない。サイコ・・』
「妙なことはするな」

イプシロンがサーナイトの胸にサイレンサー付きの銃を押し付ける。

『・・・私をどうする気』

「心配するな。ちょっと人質になってもらうだけさ」

イプシロンがサーナイトの首に機械の首輪を素早くかける。

『これは一体・・・』

「おっと外そうとは思わないことだ。それはな・・・」

イプシロンがリモコンを取り出す。

「時限爆弾だ。このリモコンでスイッチをオン・オフできる」

『な・・私を拷問するつもり！』

「そんなことには使いはしない・・・そうだな。俺がこのスイッチを入れたら・・次に解除するのはポケモン救助部隊の奴らだ」

イプシロンの言葉にサーナイトは目の前が真っ暗になった。

（ああ・・私の無力がリュウ達に迷惑を・・・）

そう思うと悲しくなるサーナイトだった。

第二十八話　イプシロンの策略（後書き）

ジュン「イプシロン、酷いな～」

作者「大丈夫。きっと助かるさ・・・たぶん」

ジュン「ねえ・・コラボで借りてきたキャラをこんな風に扱って言いワケ」

作者「いいの。ちゃんと落ちは考えてあるから」

ジュン「ホントかな～」

作者「ホント。次回を読めば分かるよ」

ジュン「一応期待しておくよ・・・」

第二十九話　ジュンの師匠（前書き）

ジュン「今回は僕の師匠の存在が明らかに！」

ゼロ「誰なんですか？」

ジュン「それはよんでのお楽しみさ」

ゼロ「ああ、やっぱり・・・」

第二十九話　ジュンの師匠

拉致されたサーナイトを救うべく、リュウ達は必死で森の中を探索していた。

急がないとポケモンハンターが取引を始めてしまうので皆かなり焦っている。

とそこに電話音が軽快になった。

コウキの携帯電話だ。

「リサか？」

「ええ。コウキ、新しい情報が入ったわよ」

リサの言葉に、すこし安堵するコウキ。

「あのね・・・裏ルートの大物バイヤー、通称リーフが大金を銀行から下ろして、キッサキシティに向かったわ」

「奴が！？」

コウキもどうやらリーフのことを知っているらしく、驚いた口調になる。

「取引する時間までは分からないけど・・・彼の屋敷からだとヘリでも1時間ぐらいね。でもどうやら取引先のハンターが負傷したら

しくて、手間取ってるらしいわ」

「なるほどな・・それでアキラの方は？」

「それがね、国際警察のアキラに関する情報が消されたのよ・・・彼の活躍の記録から、不思議な点が多い早すぎる引退まで・・・全て。」

「何だって！おい、国際警察内に裏切り者でもいるんじゃねえだろうな！」

「その可能性は否定できないわ。彼に関する情報量は元々少なかったし・・・彼、犯罪者じゃないからね。一人で抹消でにない量じゃないでしょう」

「くそ」

コウキが舌打ちする。

「まあそういうことだから頑張ってね」

コウキが電話を切った後しばらく探索が続いたが、突然草むらからデリバードが出来てた。

『あの～ポケモン救助部隊の方々ですか？』

突然の登場に皆が驚くが、バシャーモが前に出た。

『ああ、そうだが。何か用か？』

『お届けモノで～す』

デリバードが封筒に入った写真をリュウ達に渡した。

中身を見たバシャーモが固まる。

「どうしたんだ？」

バシャーモの肩越しに覗き込んだリュウもまた固まる。

なぜなら・・・そのポロライドカメラで撮られた写真には首に時限爆弾をはめられたサーナイトの写真が写っていたからだ！

「どうしてこんなことが・・・できるんだ！」

リュウが拳を握りながら震える。

『なあ・・・こいつを俺たちに渡すのを頼んだ奴の人相や姿を教えてくれないか？』

バシャーモが怒りを抑えながら冷静にデリバードにたずねる。

『うんと・・・年は十六歳ぐらいの人間の男の子だったよ～でもって、そうそうイプシロンって名乗ってたよ。３０分ぐらい前だったような』

『リュウ！』

「ああ・・・間違いなくコードネームだな。おい、封筒の中に手紙が入ってるぞ」

その活字の手紙にはこう記されていた。

サーナイトの首の時限爆弾のスイッチを入れておいた。２時間にセットしてある。

解除したければリモコンを使うことだ。

それからポケモンの技は使うとためにならないぞ。爆弾には技感知センサーが付いている。

ポケモンが半径一メートル以内で技を使用すると直ちにセンサーが反応し爆発する仕組みになっている。

では健闘を祈る。

「く・・ふざけやがって！これをイプシロンとか言う奴が爆弾を起動させて、デリバードが俺たちに届けてから約３０分・・・あと１時間半しかねえ！急ぐぞ皆！」

リュウの呼びかけに皆が力強く頷いた。

「待ってろサーナイト。今助けてやるからな・・・・」

リュウは呟きを残して、仲間と共に森の中に入っていった。

リュウ達がサーナイト救出に向かったころ、ジュンはアキラのそばにいた。

だいぶ調子が良くなってきた様子を見て、ジュンはホッとしていた。

「だいぶ良くなってきたわ・・・」

「アキラさん、どうやらリーフさんは来るまで一時間ぐらいかかるらしいです」

「じゃあもうちょっとココに居れるな・・・なあ～」

アキラさんが急に甘えた声を出した。

「なんか・・喉渇いたわぁ」

僕は一応けが人のアキラさんのために備え付けの冷蔵庫の中にあったジュース（有料）を持ってきてあげた。

「サンキュー。あ、それと肩もこったわぁ。自分でもまれへんねん」

僕は怪我に便乗して我がままを言ってくるアキラさんの言うことを聞くことにした。

僕はアキラさんの背中に乗ると、肩もみをする。まあ・・・言われてみればこってるかもしれない・・・たぶん。

・・・でもアグノムの腕力じゃたいして力が入らない。

「もうちょっと力いれてや」

「分かりました」

僕は腫れているところをワザと強く押した。

「痛ぁぁぁあああああ！」

アキラさんが目に涙を浮かべて恨めしそうに僕を見る。

「自分がドSやとは知らんかったわ・・・」

「反応面白いですね。ではもう一回」

グイ。

「痛あああ！ちょ・・怒るで！」

「冗談ですよ」

僕はアキラさんの体の上からふわりと浮遊する。

「ったく・・・自分けっこう悪戯好きやろ？」

アキラさんがベッドから起き上がり、頭をかきながらいう。

「そうでもないですよ・・・それでですね、取引はいつしますか？」

「そやな・・ちょっと寝てからにしよ。俺疲れたし。その前にシャワーでも浴びるわ。汗だくや」

アキラさんは弾が当たったほうの足を引きずりながらシャワー室へ向かった。

『・・・アキラさん元気になったみたいですね』

ゼロが呟く。

「ああ、そうだね」

ジュンとゼロの間に静寂が満ちる。

聞こえてくるのは水の音だけ。

『ジュンさん・・・』

「何？」

『何故ハンターをやっているんですか？』

「・・・師匠に憧れてるんだろうね・・・僕は昔から強いものに惹かれるんだ」

その言葉を聞いたゼロは心の中で思いをめぐらせた。

（そうか・・ジュンさんがハンターをやってる理由が分かったような気がする。たぶん・・・不安なんだ。俺はジュンさんの過去とかは知らないけど・・ジュンさんは心に不安を抱えている。自分に自身がない・・・だからハンターをやっている。ジュンさんがポケモンを売って得ているのはお金じゃない・・・自信だ）

『ジュンさんの師匠ってどんな人なんですか？』

ゼロの問いにジュンが少し微笑む。

「そうだね・・・結構冷酷でドライな人だよ。でも・・部下からの信頼は厚いね。僕も惹かれるところがある。とにかく有名なんだ・・・本名は知らないけど・・・Ｊっていうコードネームで呼ばれているよ」

『ポケモンハンターＪさん・・・ですか』

「うん。フリーのハンターさ」

ジュンが不思議な表情を浮かべる。

『ジュンさんはいつからハンターを?』

「師匠の元で部下として働きつつポケモンの勉強をしていたのが４年。Ｐ・Ｈ・Ｃに入って、任務をこなしてきたのが２年だから、６年かな」

『キャリアが長いんですね・・・』

「まあね」

ジュンがふあああと欠伸をする。

「今日は疲れたね・・・アキラさんと一緒に少し休もう」

ジュンは目覚まし時計を横に置き、アキラが来るまでに眠りに落ちた。

ジュンが眠ってからしばらくたった後・・。

イプシロンは車から降りて、サーナイトの口を猿轡をして木に縛っていた。既に爆弾のスイッチは入っており、既に一時間をきっていた。

「これでよし」

睨むサーナイトを無視し、イプシロンが満足げに頷く。

「後はこのリモコンを別の場所に隠せば・・・やつらの攪乱に役立つはずだ」

イプシロンはそういい残すとその場を立ち去った。

第二十九話　ジュンの師匠（後書き）

作者「ということで第二十九話でした。そして・・・次話でコラボ第二段ついに完結・・・かも」

ジュン「かもってなにさ！」

作者「まあ伸びるかもしれなし・・・大丈夫書ききるよ」

ジュン「ホント？」

作者「ホント（笑）。次回サーナイト救出成功なるか！」

ジュン「そして僕たちの任務は果たして成功するのか！？」

作者「お楽しみに！」

第三十話　戦いの予兆（前書き）

作者「えっとですね・・・今回で終わらせるつもりでしたがどうやら次回になりそうです」

ジュン「うん。予想済み」

作者「う・・・・」

ジュン「ではお楽しみください！」

第三十話　戦いの予兆

『リュウ・・・あと三十分しか・・』

バシャーモは青い顔をしながらリュウに言う。

「大丈夫。今ルカリオが必死で探査している」

ルカリオが目を閉じつつ、少しずつ場所を変えて探査を続けている。

リュウ達はその後についていくしかなかった。

すると突然、ルカリオが目を開けた。

『サーナイトが見つかりました！ここから訳一キロ離れた場所に微かですが気配を感じます！』

「よし！ボーマンダと俺は先に行く。みんなは後からついて来てくれ。敵がどこかに潜んでるかもしれねえからな」

リュウはボーマンダの上に飛び乗る。

『リュウ・・・一気に行くぞ！』

ボーマンダがスピードを出し、一気に飛ぶ。

しばらく飛んでいると、大きな木下にポケモンの姿が見えた。

「サーナイトを発見した。ボーマンダ、旋回して降りてくれ」

ボーマンダに指示を出しつつ、デザートイーグルをホルスターから出すリュウ。

『俺は空中にいておくぜ。・・・敵がいたときには援護ができるようにな』

「ああ、頼むぜ」

リュウは身軽にボーマンダから飛び降りると慎重に森の中を進んで行った。

サーナイトは木に縛りつけられ、猿轡をはめられている。時限爆弾の時刻は丁度二十分に迫っていた。

「サーナイト」

リュウが声をかけると、サーナイトはハッと顔を上げる。

猿轡を外し、縛っている紐をナイフで切ってやるとサーナイトがいきなり抱きついてきた。

『リュウ～』

「大丈夫。落ち着け」

サーナイトの背中を撫でつつ、リュウは目でリモコンを探していた。

「サーナイト、お前を捕まえた奴はどんな姿をしていた?」

『グスッ・・・えっと十六歳ぐらいの男の子よ。それから・・イプ

シロンって名前で・・・』

「やはりな・・それで他には何かあるか?」

『爆弾の解除のためのリモコンを隠しておくって言ってたわ・・・。でも技を使うとこの爆弾が爆発するそうだし・・・』

「サーナイト、立てるか」

サーナイトはコクンと頷く。

しばらくリュウとサーナイトがリモコンを探す。上空でボーマンダも探してくれている。

後十分にタイムリミットが迫り、リュウが内心ヒヤヒヤしていると、サーナイトがアッと声を上げる。

『リュウ!あれ!』

サーナイトが指差す先にはリモコンが岩の上に置かれていた。

「よし・・これで!」

リュウはリモコンを手に取るとスイッチを押した・・・が。

『どうしたの?リュウ?』

「なんで・・・反応しないんだ?」

リュウはリモコンを裏返して調べてみる。

「くそっ！！」

突然の大声にサーナイトがビクッと肩を震わせる。

「電池が抜かれてやがる！あと六分しかねえのに！」

『そんな・・・』

『リュウ・・一体どうしたんだ？』

ボーマンダが地上に降りる。

「ボーマンダ、電池を持ってきてくれ！単三だ！早くしないと爆発する！」

『なっ・・・分かった！』

飛び立つボーマンダを見送るリュウにサーナイトが目に涙を浮かべ、すがる。

「大丈夫・・・絶対に間に合うさ。俺たちはこれまでどんな困難も乗り越えてきたじゃないか」

『リュウ・・もし間に合わなかったら・・・私を置いて逃げて』

「・・・そんな無意味な仮定は俺は好きじゃないんでね」

リュウがサーナイトを優しく抱く。

永遠とも思える数分。

そして・・・・・。

『リュウ！』

ボーマンダが急いで戻ってきた。手には単三電池が入った袋を持っている。

『コンビニから拝借してきた。泥棒行為だが緊急事態だ・・・受け取れー！』

ボーマンダが投げた袋をリュウがしっかりと受け取る。

リュウが急いでパッケージを開けているとサーナイトの首の爆弾が目にとまる。

あと十秒ー

「間に合え！」

リモコンの裏のふたを取ると単三電池を押し込む。しかし電池と接触するスプリングが邪魔でなかなか入ってくれない。

あと五秒ー。

そして・・・。

ピッと軽快な音がなる。

タイマーには残り一秒だけ残っていた。

「やった・・・解除成功だ」

その瞬間カチッという音がしてサーナイトの首から爆弾が外れた。
どうやらタイマーを止めると自動的に外れる仕組みだったらしい。

『リュウ～』

緊張の糸が切れたのかサーナイトが半泣き半笑いになる。

「言っただろ。大丈夫だって」

リュウがパンパンとサーナイトの背中を叩く。

「さてと・・・こいつを処理しなきゃな。サーナイト、俺の後ろに下がってろ」

リュウとサーナイトは時限爆弾を地面に置き、かなり後ろまでバックする。

「周りにポケモンはいないな・・・一メートルは越してるし・・サーナイト、サイコキネシスで防御を頼む」

『任せて・・・サイコキネシス！』

リュウとサーナイトは念力の壁に守られた。

リュウがリモコンのスイッチを押す。

ピピッという音の直後、中程度の（といっても首を吹き飛ばすには十分な威力だ）爆発が起こった。

『リュウ～サーナイト～！無事だったでしゅか！』

リュウとサーナイトのところにシェイミたち駆け寄ってくる。

「ああ・・・」

『皆・・・心配かけてごめんね』

『謝ることはない。サーナイトに非は無いのだからな』

スイクンが静かに言う。

「皆・・・サーナイトを捕まえた奴はやはりイプシロンと名乗る少年らしい・・今すぐにでもそいつを見つけてボコッてやりたいところだが・・・」

『任務が先決、だな』

バシャーモがリュウの言葉を継ぎ足す。

「ああ・・・ボーマンダ、俺とルカリオを乗せられるか？」

『任せとけ』

「よし。バシャーモはチルタリスに乗って、シェイミはスカイフォルムで俺についてきてくれ」

リュウ達が飛び立った後、残ったコウキ達も後を追いかけていった。
そしてその様子を双眼鏡で見ている少年が一人。イプシロンである。

「あいつら突破しやがった・・・・撹乱作戦は失敗だな」

腕時計を見てリュウ達がジュンの取引に間に合うかもしれないという考えがイプシロンの頭をよぎる。

素早く電話をかける。

プルルル・・・。

「イプシロンね」

「Ｄｒエリカ。至急ポケモンハンターを・・そうだな。二名ほどこっちによこしてくれないか？ハンターがこのままじゃ捕まる。応援が必要だ」

最もハンターを捕まえようとしてる奴らの元にハンターを増員するなど危険なのだが・・・いまは緊急事態だからな。

「・・・・いいわよ」

エリカは理由を聞かなかった。彼女にとって他人が何かを必要とすることへの理由など興味は無いからだ。

「さて・・俺も追いかけるか」

イプシロンはリュウ達が向かった方角へ進んでいった。

その頃・・ジュンたちはリーフから指定された場所にいた。
だいぶ腫れが引いてきたらしくアキラは何とか歩けている。
「アキラさん・・・先方来るのが遅いですね」
「まあなぁ・・・あ、来よったで」
ヘリのがこちらに向かってくるのが目視できる。
それにしても・・・すごい音だね。
「自分は隠れとき」
僕はアキラさんの背中に隠れる。
ヘリは森の中に消えていった。
しばらくすると・・・。
「ポケモンハンターだな」
僕と同じ年ぐらいの少年がボディーガードを引き連れて歩いてきた。
負けん気が強そうな表情と瞳を持つ闇のバイヤーでありポケモンコレクターである・・リーフだ。
「遅かったやないの」

「ふん。こっちにもいろいろ都合があるんだよ・・・NO．4はどうした？」

「ああ、あいつはちょっと急用があってな・・おれへんねん」

「そうか・・残念だ」

本当に残念そうにするリーフ。僕のことがよっぽど気に入ってくれてるんだね（汗）

「まあ・・・さっさと取引といこうや」

アキラさんがハンターボールから石化されたレジギガスを出す。

「なるほど・・こいつがレジギガス。素晴しいな・・・」

リーフがルーペで丹念に調べる。専門家の目つきで真剣だ。

「うん。非の打ち所がない素晴しい商品だ」

横で控えていたボディーガードの一人がアタッシュケースを静かに地面に置く。

カチリと音がし、ケースの中があらわになる。

そこには大量の札束がぎっしりと入っていた。

すごいな。こんな額を・・・さすが闇の大物バイヤー・・・。

ジュンがある意味感動しているとアキラが静かに言った。

「取引成立・・・やな」

「ああ。これからもよろしく頼むぜ。ハンターさんよ」

リーフがそう言い、ボディーガードを引き連れて帰ろうとしたとき、バン、バン、バンと銃声が響いた。

「ぐあ・・・」

リーフの横でボディーガードたちが呻き、倒れる。

「な・・・何者だ!」

リーフが後ろを振り向くと、そこにはバシャーモ達が銃を構えていた。

「そこまでだ。ハンターに裏ルートの非合法バイヤーさんよ。いや・・リーフと読んだほうがいいか?」

ガブリアスを横に従えながら警察手帳を見せる。

「な・・国際警察だと・・・アンタたちしくじってくれたな!」

リーフがアキラを睨む。

「すまんな・・・だが今は協力すべきときや。時期を・・見て、逃げる」

「くそっ」

「なあ・・・」

アキラさんが肩越しに僕に小声で話しかける。

「自分はココから離れるんや」

「え・・でも」

「俺らは捕まるかもしれへん。でも・・自分なら俺たちを救出できるかもしれん・・」

「分かりました。時期を見て・・・助けます」

僕はそっとアキラさんから離れ、木の影に隠れる。

ジュンがアキラたちが捕まりそうになっているのに焦りを感じている丁度同じ頃、イプシロンも動揺していた。

「まったく・・冗談じゃねえぜ。こうなったら・・・」

イプシロンはスナイパーライフルを構え、バシャーモの腕を狙う。

「腕・・頂かせてもらうぜ」

イプシロンが引き金を引こうとした丁度その時。

バン、バンとニ発の銃声がした。

「な・・・」

激痛のあまり声も出ないイプシロン。

「お前、イプシロンだろ」

聞き覚えの無い声に痛みを堪えて後ろを振り向くとそこには銃を構えた青年－リュウがいた。

「それ・・・が・・・どうした。しかも・・何故・・居場所・・を」

「尾行のときに音を立てすぎだ。アンタ・・・サーナイトを捉えて爆弾まで使った作戦が失敗して焦って行動してただろ。だから居場所が分かったんだよ。まあ・・俺たちはそれに気づいていない振りをしていたがな」

「く・・・」

イプシロンがサイレンサー付きの銃を内ポケットから出そうとするが、リュウにＭ５００を撃ち込まれかなわなかった。

「よくも俺の仲間を弄んでくれたな・・・」

黙るイプシロンを引っ張り無理やり立たせるリュウ。

「お前の目的と属している組織を吐いてもらうぜ・・・」

イプシロンがリュウに捕らえられた丁度その時。

ジュンはアキラ達救出の作戦を考え付いたところだった。

ジュンはこっそりとリーフが乗ってきたヘリを探していた。

「あった・・・あの青色のヘリコプターだ」

どうやらリュウ達には見つかっていないらしく、ジュンはホッとした。

ヘリに乗り込みエンジンをかける。

アグノムの姿では運転出来ないがジュンには秘策があった。

鞄の中を探ると技マシンが何個か出てきた。

以前バザーで購入し、イザというときのために取っておいたのだ。

「あった。技マシン・・・サイコキネシス」

技マシンを起動させ、サイコキネシスを覚えたジュン。

「サイコキネシスの念動力で・・・届かないレバーやスイッチを操れる」

ジュンが複雑な機械を起動させ、操るとヘリが命を吹き込まれたように飛び始めた。

「良かった・・・修行時代に訓練を受けておいて」

ババババとローターが爆音を立てて回転する。

ジュンがヘリを操縦して、アキラとリーフの救出に向かっているの

と同じとき。

「コウキ、君はこいつの監視を頼むぜ」

リュウが縄で縛りつけられているイプシロンを指差す。

「ああ。任せとけ」

その時、爆音が二人の耳を襲った。

「ヘリのエンジン音！何があったんだ！」

リュウは森から出て、バシャーモ達の下に向かう。

『リュウ！あれを見て！』

サーナイトが指差した先にはヘリを運転しているアグノム（ジュン）の姿があった。

「あれは色黒のハンターの隣にいたポケモン・・・助けに来たのか！」

横でバシャーモが銃を撃つが、ゴム弾ではヘリにはかなわない。

ヘリの扉が突然開いて、冷たい風と共に吹雪が放たれた！

リュウ達はギリギリ吹雪を避けることが出来た。

「くそ・・上から俺たちを攻撃するって寸法か。それにゴム弾じゃヘリを撃ちねけねえし・・・こうなったらポケモンの力を借りるし

かねえな」

第三十話　戦いの予兆（後書き）

作者「ジュン・・・君はヘリまで操縦できたワケ？」

ジュン「言ってなかった？」

作者「オールマイティーボーイ」

ジュン「そんな・・・照れるよ。まあ、それはそうと次回こそ決着がつくんだよね？」

作者「うん。今回は丁寧に書いてたら長くなちゃったけど・・・次回は大丈夫！」

ジュン「ま・・・一応信じておくよ」

第三十一話　レジギガス争奪戦、終結（前書き）

ジュン「今回ついに決着が！」

アキラ「なんや・・・どきどきするわぁ」

第三十一話　レジギガス争奪戦、終結

僕はヘリを操縦しながら、ヘリから外のポケモン救助部隊に攻撃をしているグレイシアに指示を与える。

ヘリの扉を空け、攻撃し、ゴム弾を喰らいそうになったらサイコキネシスで扉を素早く閉める。

彼らの使用弾がゴム弾だからこそ出来る業だ。

しかし・・・ヘリが無事でよかった。

ボーマンダだとリーフさんやアキラさん・・それに倒れているボディーガード二名を乗せるのは無理だし・・・第一ゴム弾を防ぐためのものが無いから僕がアキラさんの二の舞になっちゃう。

僕がコックピットから救助部隊を見ているとどうやらグレイシアの吹雪に逃げ惑っている・・。

と思っていたらいきなりバシャーモが銃を構えた。

「させないよ！」

僕はサイコキネシスで扉を閉める。

直後バンバンと金属にゴム弾がぶつかる音がした。

『ジュン、ありがとう』

「お礼なんていいよ・・・・それより、冷凍ビームの準備は出来た？」

『もちろんよ！』

僕はヘリで彼らに出来るだけ近づく。

アキラさん達を救出するためには、まず彼らを倒さないとね。

「グレイシア！冷凍ビーム！」

ドアが開いた直後、冷凍ビームがリュウ達を襲う！

しかし、冷凍ビームは当たらず虚しく地面を凍らせただけだった。

「彼らがいない・・・・どこだ？」

ジュンはヘリの正面をアキラたちに向ける。

言い忘れていたがアキラ達の周りはサーナイトとスイクンそしてルカリオが取り囲んでいる。

「このヘリには火器は無いみたいだし・・・・ここはグレイシアの冷凍ビームで攻撃しようかな？」

ジュンが考えていると後ろで大きな音がした。

後ろを振り返るとボーマンダに乗ったリュウとチルタリスに乗ったバシャーモが銃を構えていた。

「邪魔だなぁ」

ジュンは一気にヘリをリュウ達に近づける。

「ローターの回転に巻き込まれて痛々しい最後を迎えたくないならどいてくれる？」

そんなジュンの言葉もリュウ達には聞こえるはずが無く、銃をバンバン連射してくる。

「ははっ・・・無理だよ。実弾ならともかくゴム弾じゃヘリを打ち落とすなんて不可能さ。さて・・これで終わらせようか・・・サイコキネシス！」」

ジュンがサイコキネシスで扉を開ける。

「グレイシア、吹雪！」

グレイシアがまさに攻撃をしようとした時、何かがヘリの中に飛び込んできた！

「な・・・」

『リュウ達には手を出させはしないのです！エナジーボール』

スカイフォルムに変化したシェイミはエネルギー弾をジュン一正しくはヘリのコントロールパネルに撃った。

「サイコキネシス！」

ジュンはサイコキネシスでエナジーボールを押さえ込み、そのまま外に軌道をずらす。

『危ないじゃないか！電子機器に当たったらどうしてくれるんだ！ヘリは非常に高い乗り物なんだよ！』

『そんなことミーには関係ないのです！キノコのくせに！』

『キノコだって・・・』

ジュンはシェイミの言った言葉にふらりとよろける。結構自分の今の容姿は可愛い系かも、と思っていたジュンにとっては効果抜群の一言だった。

『エナジーボール！』

シェイミが再びエネルギー弾を放つ。

『キノコ・・・』

ジュンはエナジーボールが放たれたのに気づかずに呆然としている。どうやらシェイミの発言が相当ショックだったらしい。

『ジュン！危ない・・・冷凍ビーム！』

グレイシアがジュン（とヘリの電子機器）を庇うように冷凍ビームを放ち、エナジーボールを相殺する。

『何呆けてんのよ！・・・・ジュン？』

『・・・・捕まえてやる』

ジュンのオーラが変わる。実は普段冷静かつ比較的物腰柔らかな性格のジュンだが怒ると悪人モードに切り替わるのだ。

『グレイシア！吹雪！』

『えっ・・・ああ、分かったわ！』

グレイシアの吹雪がシェイミを襲う。スカイフォルムのシェイミには大ダメージだ。

『エアスラッシュです！』

『おっと！神通力！』

ヘリの運転しながらジュンの放った神通力がエアスラッシュとぶつかり合い消滅する。

そして吹雪はシェイミを直撃する。

『く・・・二対一とは・・・卑怯なのです・・・・』

シェイミが力なく倒れる。

『まったく・・・ヘリの中にまで乗り込んで来るとは・・それに電子機器に技がぶつかったら墜落しちゃうところだったよ？』

ジュンは薄く微笑む。長年のポケモンハンター歴ですっかり染み付いた悪人の笑みである。

『まあいいや。僕をキノコ呼ばわりした君には捕まってもらうよ・・・』

ジュンがハンターボールを取り出す。

しかし、何故かシェイミは落ち着いている。

『何か忘れてないですか？』

『仲間のことかい？はは・・・大丈夫、ゴム弾ではこのヘリを落とせやしないさ。それにドアは閉じてるしね』

『・・・弾を防ぐ壁があれば、ですね』

シェイミの言葉にジュンが振り向くと、ヘリの胴体に中程度の穴が開いていた。

『ミーの目的は小さな穴でもいいから・・・弾丸が通るような空間をヘリに空けることなのです・・・』

『まさか・・・さっきのエナジーボールは・・・』

『もう遅いです！リュウ、やっちゃえなのです！』

その瞬間、ジュンの目には穴から見える景色－リュウがバシャーモに乗りながら、Ｍ５００を構えている景色が写った。

そして・・・・。

バンという銃声と共に、ジュンの体に弾丸が沈み込む。

「く・・・」

ジュンは激痛のあまり運転を誤ってしまった。

ヘリが地上に墜落する。

どうやらヘリ自体は無事だったが、ジュンは痛みのあまり動くことすら出来なかった。

『我々を見くびってもらっては困るな。人語を喋るアグノム君』

ヘリの外からスイクンがニヤリと笑う。

『・・・僕を・・・どうする・・・つも・・り』

「まあ、お前は軍に預けられるのさ。次のトレーナーが決めるまで再教育されるんだ」

リュウが銃をジュンに向けながら言う。

『あっちのハンターと闇のバイヤーは当然逮捕されるがな』

バシャーモがリュウの横に並ぶ。

「さてと・・・後は護送車が来るのを待つだけだな」

リュウ達が任務の成功を確信したそのときだった。

突然、数メートル先の地面がえぐれ、爆発が起こる。

「な・・・」

リュウ達は声も出ない。

「あーはっはっは!ずいぶん情けねえ姿だなぁ、ＮＯ．１!」

突然空から軽快な笑い声が響いた。

「誰だ!」

リュウの問いにフワライドに乗った少年はニヤリと笑う。

「聞いて驚け!俺はポケモンハンターＮＯ．２の片腕、シンだ・・・って・・・うわっあああああ!」

自己紹介に力を入れすぎたのだろう、シンはフワライドから落っこちてしまった。

『何してるんだ、あいつ?』

バシャーモは呆れている。

「シン・・・仮にもＮＯ．２の片割れだろ。僕の足を引っ張る行為は慎めよ」

森の中から出てきたのは、シンにそっくりだが少し大人びてる少年ーコウだった。

「痛てて・・・兄ちゃん！俺の心配はしないのかよ！」

「ふん、馬鹿はそう簡単にくたばるものか」

「馬鹿って言うほうが馬鹿なんだぞ！」

「優秀なトレーナーであるこの僕を馬鹿呼ばわりするのは止めろよ・・・怒るぞ？」

「ＮＯ．２やん！何でこんなとこに・・・・」

アキラが思わず声を上げるとシンが笑い出した。

「そりゃ、ＮＯ．１。テメエが失敗するのを見越した某幹部さまが俺たちを派遣したんだよ」

「ＮＯ．１ともあろうものが失敗するなんて信じられなかったけどな・・・そう言えば、ＮＯ．４はどこだ？」

コウが不思議そうな顔をする。

「あ・・・あーあいつは用事があってかえったんや。捕まる前に、な」

「けっ、いつもは真面目君のくせにいざという時にいないなんて・・・」

シンが舌打ちする。

「なるほど・・・お前達もポケモンハンターか」

今まで黙って会話を聞いていたリュウが静かに口を開く。

「なら、容赦はしない！」

リュウが素早くホルスターからデザートイーグルを取り出し、構える。

「おっと、フーディン、リフレクターだ」

コウがフーディンを繰り出した。

フーディンのリフレクターがゴム弾を防ぐ。

「く、これならどうだ！」

リュウはグレネードランチャーを発射する。

「フワライド、シャドーボール！」

今度はシンがフワライドに指示する。

シャドーボールとグレネード弾はぶつかり合い、爆発を起こした。

「兄ちゃん、テレポートで遠くにいておいてくれ・・・あれをやる。そんで時期を見て、ＮＯ．１とリーフの救出に向かってくれ。もちろんレジギガスの回収も頼む」

「・・・無理はするなよ。フーディン、テレポート」

コウとフーディンはテレポートでその場から立ち去った。

「さてと・・・爆弾ショーの始まりだぁ！」

シンはニヤリと笑うと、フワライドをつれて逃げる。

「逃がすか！」

リュウ達が追いかけるがバシャーモはジュンたちのところに止まった。

どうやら逃げないように監視するつもりらしい。

その頃、ボーマンダに乗り、逃げるシンを追いかけるリュウとルカリオとシェイミ（スカイフォルム）。

突然シンが逃げるのをやめる。

「観念する気になったか？」

「そんなわけねえだろ・・・出て来いドーブル！」

シンがドーブルを繰り出す。

「ドーブル・・・確か特殊技スケッチでどんな技も使用することが出来るポケモン・・・・」

「その通りさ・・・フワライド、黒い霧！」

フワライドが黒い霧を使う。

視界が奪われ、動くことが出来ないリュウたち。

「ルカリオ、探査を頼む」

『はい・・・これは!?』

「どうした?」

リュウの問いにルカリオが驚きの感情を交えながら答える。

『フワライドとドーブル、シンとかいうハンターの周りに何か球体のようなものが多数浮かんでいます』

「ルカリオ、そこで待機していてくれ。俺が行く」

リュウはボーマンダに乗り、黒い霧の中を進んでいく。

突如リュウの腕に何かが当たる。

「これは・・・ルカリオが言っていた奴か」

その茶色い球体はリュウが不思議に思っていると突如爆発した!

「ぐっ・・・」

爆発により地上に叩き落とされてしまうリュウ。

『リュウ!大丈夫か?』

ボーマンダは地上に降り、リュウを助けようとするが・・・。

どうやら別の球体に翼がぶつかってしまったらしい。爆音と共にリュウのそばに落ちてきた。

「ボーマンダ！」

『はは・・・翼がやられた。もう飛べねえ・・』

ボーマンダが力なくその場に倒れる。

『どうしました！』

「ルカリオ・・・どうやら空中に浮遊している球体は爆弾らしい・・」

『なんですって・・・』

そうしているうちに黒い霧が晴れていく。

そこに広がっていた光景は驚くべきものだった。

空中には大量の球体が浮いており、その中をフワライドがシン乗せて飛んでおり、横ではドーブルが宙に浮いている。

「どうやらあのドーブル、空を飛ぶを覚えているようだな」

「ふ・・・どうだ?俺の空中機雷は。サイコキネシスと泥爆弾のコンボだぜ」

シンの言葉にリュウは痛み我慢しながら冷静に分析する。

（さっき奴が言った爆弾ショーとはこのことだったのか・・・それに、確かフワライドは泥爆弾を覚えられないはず・・・ということは泥爆弾を使用するのはドーブルの方か）

「よし、ドーブル重爆撃開始！」

ヒュウウウンという音と共に新たに生成された泥爆弾が落下する。

「く・・・ルカリオ、波動弾で迎撃だ」

リュウは指示を出しつつ自分もデザートイーグルで泥爆弾を撃ち抜く。

しかし・・・波動弾や弾丸により空中で泥爆弾が爆発した後妙なものが多数落下する。

リュウの前にも落下したものは・・・大きな種子のようなものだった。

「・・・まさか、これは・・・ルカリオ！早くここを離れるんだ！」

「もう遅いぜ」

空中から高みの見物をしていたシンが楽しそうに笑い、言葉を続ける。

「ドーブル、種爆弾起爆！」

リュウ達のそばで種爆弾が次々と起爆する。

「はは・・・どうだ、泥爆弾の中にはなぁ種爆弾を仕込んであるんだよ。泥爆弾が爆発した後任意のタイミングで起爆可能な種爆弾を撒き散らし、さらに広範囲を攻撃する・・・これが俺の爆弾コンボ第二段だ！」

「確かにきついな・・・」

「・・・・ドーブルは泥爆弾、フワライドは鬼火だ」

ドーブルの泥爆弾とフワライドの鬼火が合体し、一つの燃え盛る球体になった。

「シードクラスター焼夷弾投下！」

シンの合図と共に燃え盛る球体がリュウ達目掛けて落ちてくる。

それらの球体は落ちている途中で破裂し、中から火を纏った種爆弾が当たり一面に降りそそぐ。

「ドーブル、種爆弾起爆！」

そこに種爆弾の爆破も相まって、周りが火の海と化した。

『どうやら・・・間に合ったようですね』

ルカリオが守るを使い、保護してくれたお陰でリュウ達は無事だった。

「おいおい・・・・守ってばっかじゃ勝負にならねえぞ」

シンの言葉にリュウが不敵に笑う。

その様子を見て、シンが怪訝そうな顔をする。

「なんだ・・・あんたらヤケになったか？何を笑ってやがる」

「いや・・・どうやら俺たちの狙いに最後まで気づいていないな、と思ってね」

「なんだと？」

「俺たちの任務は・・・ハンターの手からレジギガスを守ることだ。お前達を捕まえることじゃねえ。それは国際警察の仕事だからな」

リュウは言葉を続ける。

「裏を返せば、お前達にどれだけ俺らが追い詰められてもレジギガスが無事ならば・・・・・任務成功ってワケだ」

「だから？」

「気づいてないのか？だいぶ前にチルタリスがレジギガスの入ったボールをもって空を飛んでいたということを！」

リュウの言葉にしばらく呆然としていたシンだったが、顔がだんだん青ざめてくる。

「まさか・・・アンタたちがロクに攻撃せずにただ耐えていたのは・

・・」

「ああ、アンタの頭上を飛ぶチルタリスの存在を気づかれないためさ・・・どうやらアンタの爆弾系攻撃は投下する、という動作で破壊力を増している。と、言うことは必然的に相手より空間的に上にいないと戦術の威力は半減するということだ。さっきの空中機雷は相手の制空権を制限するためのものだろうしな。俺たちが機雷を避けつつ上に行けば、アンタは更に上に行こうとする。そうなれば飛んでいるチルタリスが見つかってしまうからな」

「いつ・・一体いつレジギガスが・・・」

「ふ・・・ヘリが落ち、アンタ達兄弟ハンターが登場した直後、チルタリスにボールを持たせて森に隠れさせていた。時期を見て、最寄の警察に届けさせるために」

「くそ!!」

シンはフワライドに乗ろうとする。

「おっと・・・追いかけても無駄だぜ。あいつはかなり早いんだ。今頃レジギガスは警察が保護してるはずだ」

「く・・」

シンはポケットから青い筒を取り出し、ついていた紐を引く。

ドンと音がし、青い煙が直線状に空に舞い上がる。

その瞬間、コウがフーディンをつれてテレポートしてきた。

どうやら緊急の合図だったらしい。

「兄ちゃん。俺たちはＮＯ．１ともどもどうやら任務に失敗したらしい・・・」

「そうか・・・査定に絶対響くな」

「ああ・・・ＮＯ．１とバイヤー達の救出はどうだった？」

「それなら僕が敵を片付けておいた。もうヘリで飛び立っているはず・・・あ、あれだ」

コウが指差す先にはヘリコプターが空高く飛んでいた。

「僕たちも逃げようか。・・・今日は疲れた。予想以上に相手が予想以上に手ごわかった。特にあのスイクン・・・捕まえてやろうと思ったが・・・まあいい。僕たちの任務は終わったんだ。半失敗という形でね。もう帰ろう」

「兄ちゃんに同意」

リュウが震える手で銃を撃とうとするが、二人はテレポートしてしまった。

コウとシンが立ち去った後、リュウ達はバシャーモの元にかけつける。

その場にはバシャーモ達が倒れていた。

「大丈夫か？」

リュウの言葉に付していたスイクンが薄く笑う。

『何とかな・・・あの少年、かなりのやり手だ。だが・・・私たちが戦っている隙を突いて、ハンターたちがヘリに乗って逃げてしまった・・・戦っていた相手も急にテレポートしてしまったし・・すまない』

「いいんだ。俺たちの最優先事項のレジギガスの保護は完了した・・・」

リュウ達は各々傷を負っていたが、何とかコウキを待たせている場所まで歩いた。

しかしそこにイプシロンは居らず、コウキと仲間のポケモンが傷つき倒れていた。

「これは・・・一体？」

「く・・・」

コウキが呻く。

「おい・・・イプシロンがやったのか？」

「ああ・・・すまねえ。逃げられた。突然、ナイフで切り付けれて・・バトルでも負けちまった・・野郎、非情な程徹底的に相手を叩き潰しやがる・・・」

「・・・・お前はよくやった。今は休んでおけ」

心身ともに打ちのめされたコウキにはリュウの優しさがありがたかった。

第三十一話　レジギガス争奪戦、終結（後書き）

ジュン「僕、ココまで任務をしくじったのは初めてだよ」

作者「ま、気を落とさずに。次回はもっと困難な任務が君を待ってる・・・かも」

ジュン「ちょ・・・僕疲れてるんだけど」

作者「任務は君を待ってはくれないのだ！」

ジュン「なんかムカつく・・・」

第三十二話　二人の科学者の商談（前書き）

ジュン「ねえ、今回新たな任務が始まるんだって？」

作者「う～ん。ちょっと違うな。任務が始まる前の導入話だよ」

ジュン「へえ・・・」

第三十二話　二人の科学者の商談

ここはＰ・Ｈ・Ｃのとある部屋。

大きなモニターが備え付けられていて、ハンターや幹部が交渉のときに使うことが出来る。

そこの椅子には白い白衣に身を包んだ少女が座っていた。

美しい顔立ちと色肌。しかし何より際立っていたのはその氷の眼差しだった。

「エリカ様」

後ろから声がする。若い男だ。

「これが先方の組織の資料です」

差し出された資料には「ディストローブ」と記されている。

「分かったわ・・・あなたは下がってて」

若い男は一礼すると部屋から出て行った。

エリカが座っていると、大きなモニターがブウンと音を立てて映像を映し出す。

画面の眼鏡を掛けた男がエリカと対峙する。両者とも白衣を着て科学者であり何より非情な悪人であるという点で一致している。

「あなたがディストローブ最高幹部のナトロンかしら?」

「そうだ・・・しかし驚いたな。君のような少女が交渉相手だとは・・・」

ナトロンが指で眼鏡をつつく。

「ボスは今不在なのよ。・・・自己紹介が遅れたわね。私はP・H・C幹部エリカ」

極悪非道なナトロンと冷酷非道なエリカはお互いに相手を値踏みする。

「では君はハンターではないのだな?」

「ええ・・・まあ今回の私の役目はあなたの依頼の内容をハンターに伝えるだけ・・・」

「そうか。まあいい。ディストローブがP・H・Cと交渉に乗り出した理由は・・・」

ナトロンが一息おく。

「ポケモンレンジャーケントの抹消及び彼のポケモンの強奪だ」

「ケント・・・聞いたことがある名ね」

どうやら十年に一人の天才と謳われるケントの名に聞き覚えがあるらしい。

「あの少年は私たちディストローブにとっては将来的に邪魔になる存在・・・」

「なるほど。今のうちに芽を摘んでおくわけね」

「ああ。我々ディストローブが数年前に殺し損ねた伝説のトレーナー、シュウヘイの息子」

「シュウヘイ。なるほど、あの伝説のトレーナーの息子君ね。なら・・・殺すか無力化しておかないと厄介な存在になるわ・・・私たちにとっても」

エリカは既にこの交渉でナトロンの依頼がほぼ通るであろうことを理解していた。

ポケモンレンジャーはディストローブだけでなくP・H・Cにとっても厄介な存在。

ましてや駆け出しとはいえ将来的に確実に優秀なレンジャーに成長することが予想されるケントときては・・・P・H・Cやハンターにとっても疎ましい存在になることは確実。

ナトロンのケント抹殺の依頼はP・H・Cにとっても吉となる・・・このことを見越してナトロンは交渉に及んだのだ。

納得顔のエリカを見てナトロンがニヤリと笑う。

「では報酬の話に移行しようか」

エリカが黙ってメモ用紙を取り出すのを見て、ナトロンが続ける。

「任務成功時の報酬は基本６０００万。捕まえたマニューラ達はハンター達の好きなように扱ってくれて構わない。また任務成功の暁には必要とあらば我々が現在捜索中のシュウヘイの元手持ちのポケモン達の強奪を手伝う。失敗したときもディストローブが逃走の手助けをする、というのはどうだ？」

「甘い条件ね・・・あなたたちがどれだけケントを警戒してるかがよく分かるわ。それで場所は？」

「ストリーゼ地方の西に位置する田舎町アルトピアタウンだ」

「分かったわ。その旨をハンターに伝えておきましょう」

「出来るだけ早急な返事を待っているぞ」

そう言うとナトロンは画面上から消えた。

エリカは机の上のコップに入った水を一口飲む。

「抹消となれば・・・アキラは断るわね。抹消はイプシロンに任せて、ケントのポケモン強奪の任務とでも伝えておくのが得策・・・」

暗い部屋の中、エリカの呟きが誰に聞かれるとも無く消えていった。

第三十二話　二人の科学者の商談（後書き）

作者「ということでプラネットさんの作品「ポケモンレンジャー・マインド」からナトロンに出てきてもらいました」

ジュン「なるほどねぇ」

作者「というかこのコラボの話はプラネットさんがわざわざ誘ってくれたんだ」

ジュン「二人の非道で残酷な悪の科学者かぁ・・・」

作者「まあ、この話と平行してポケモンレンジャー・マインドを読んだほうがいいかも知れません」

ジュン「それにしても・・・今回短くない？」

作者「いろいろ都合があるの！」

ジュン「そう（汗）」

第三十三話　誤算から生まれし作戦

僕とアキラさんをポケモンレンジャーのケントが睨んでいる。

僕は内心、この心理作戦がうまく行ったことに喜んでいた。

このミッションは絶対に成功させなきゃね・・・・どんな手段を使っても。

この状況を話すためには数時間さかのぼらなければならないだろう。

数時間前ー

ジュンはベッドの上で目が覚めた。

もう昼近くになっている。

「ここは・・・・？」

ジュンが頭の整理がつかないでいると、ゼロがいきなりベッドの上に乗ってきた。

『ジュンさん！』

ゼロがうれしそうな顔をする。

「ゼロ・・・ここはどこ？」

『ここはリーフさんの家です。ジュンさんは痛みに堪えながらヘリ

を運転して、到着した瞬間気を失ったんです・・・』

ああ、そうだった。痛む体を無理して動かして、ヘリを運転したんだった・・・。

「ジュン・・・起きたか」

部屋にリーフが入ってくる。

実はジュンとリーフはある出会いをきっかけにハンターとバイヤー以上の、信頼で結ばれいているのだが・・・この話はまた今度にしよう。

「聞いたぞ。ポケモンになっちまったんだってな・・・まあ理由は聞かされなかったが」

リーフがお粥をテーブルの上に置く。

「ありがとう・・・リーフ」

人前ではリーフのことをさん付けで呼び、ジュンのことをコードネームで呼ぶリーフだが、今は友達関係に戻っている。

「ジュン、本部には作戦失敗は黙ってようか？」

「いや・・・もうＮＯ．２達が報告してるよ。僕の・・いや、上級ハンター達の評価が危うくなってるだろうね。何せ、ＮＯ．１とＮＯ．４であるこの僕に加え、ＮＯ．２達までも投入したレジギガス捕獲作戦が失敗に終わったんだから」

ジュンがシーツをギュッと掴む。相当今回の作戦の失敗を悔しく思ってるようだ。

「気にするな・・・って安い言葉じゃ慰めにもならねえか」

二人が黙っているとアキラが入ってきた。

何故か神妙な顔をしている。

「アキラさん・・・どうしました?」

「新しい任務の話が入ってきたわ」

「本当ですか!?」

「ああ。でもな、これまでやってきた任務とはまた異質のものや・・・俺は乗り気じゃないねんけど」

「内容は?」

アキラがフウとため息をつく。

「ストリアーゼ地方の西に位置するアルトピアタウンにいるケントっていうポケモンレンジャーの手持ちポケモンを全て強奪すること、や」

「ポケモンレンジャーのポケモンを・・・奪う任務ですか・・」

ジュンが少しの間考え込むが、リーフのほうを向いていった。

「調べ物をしたいんだけど・・ネットを使わせてくれるかな?」

「え・・・ああ、いいぞ。隣の部屋にコンピューター室がある。使用人もいない無人状態だから使えると思うぞ」

「ありがとう」

リーフとアキラを後にして隣の部屋にこっそりと入る。

コンピューターの電源をオンにする。

すぐさまインターネットを立ち上げると、ジュンは「ポケモンレンジャー」「ケント」というキーワードを打ち込んだ。

ネット上から読み取れる情報とジュンの記憶を照合する。

「やっぱり・・・レンジャーと敵対するハンター達の噂どおりだ。非常に優秀なレンジャーの卵がいるというのは本当だったのか・・・」

ジュンがしばらく調べていると、ある興味深い事実が見つかった。

ケントの父親、シュウヘイのことだ。

「伝説のトレーナー、シュウヘイ。育成したポケモンは数知れず、同時にポケモンバトルにおいて多大な業績を残した人物。・・・しかしある史上最悪の大惨事の混乱の渦の中、謎の死を遂げる・・か」

ジュンが考えているとアキラが部屋に入ってきた。

「これ・・本部からのケントとその手持ちポケモンに関する資料や・・・経歴読んでるとな、悲惨すぎて最後までまでよめへん」

アキラが手渡した資料にはケントの顔写真と経歴、ポケモンに関する様々なデータが載ってきた。

当然ジュンが調べた内容とほぼ一致している。

過去同時に父と母を失った記憶を持ち、手持ちポケモンには両親の形見ともいえるポケモンも所持しているレンジャー、ケント。

彼の現在の仲間。彼のスクールでの成績や性格にいたるまで事細かに資料には記されていた。

・・・・となれば。

「この任務・・・一気に攻めたほうが良さそうですよ」

「なんでや？」

「彼にようなポケモンや仲間との絆が深そうなタイプは正面から攻撃するより、隙を突いて一気に奇襲を決めたほうがいいんです」

「なるほどなぁ。任務を受けることを報告しとくわ」

アキラがそういって部屋から出ていく。

ジュンは部屋の中で任務で生じるであろう多種多様なパターンを想像していた。

・・・・それから数時間後。

ジュンとアキラはそれぞれボーマンダとルギアに乗り、目的地であるアルトピアタウンにきていた。

空は曇っており、ジュンは何ともいえないプレッシャーを感じていた。

もしかしたら・・・。

「アキラさん・・・」

「何や？」

「あの・・・空からすごい威圧感のようなものを感じます」

「俺はなにもかんじへんけど・・・ポケモンの姿の自分がそう感じるんやったら・・何かいるのかもしれへん」

アキラとジュンがしばらく歩いていると一人の老人と少年と少女の三人が話しているのが見えた。

というか・・・・。

「アキラさん！あの制服・・」

「ああ、間違いなくポケモンレンジャーやな。しかも今回のターゲットのケントとやらもいるみたいやし・・・」

「どうします？」

「まあ、今は無害な一般人の振りをするのが得策やろな」

ケント達はアキラとジュンに気づかず、岸へと向かって去ってしまう。

アキラが残ってケント達を見ていた老人に声を掛ける。

「あの、ちょっとええか？」

「何じゃ」

老人が振り向く。

「この空、一体何があったんや？」

「何でも、伝説のポケモンサンダーが来ているらしいんじゃ。あ、行ってはならんぞ。危ないからな。今、レンジャーが動いとる」

「おおきに、よう分かったわ」

アキラとジュンはそのやり取りの後、ケント達をこっそり尾行する。

「アキラさん・・・サンダーって・・」

「ああ。伝説のポケモンやな・・ビックリやで」

「ついでに捕まえましょうか？」

「ん～暇が出来たらでええんちゃう？」

アキラがいきなり止まる。

どうやらケントたちは岸で会話をしているらしく、ジュン達には気づいていない。

「どうするんや・・・」

「僕に考えがあります」

ジュンは石化ビーム装置を取り出すと、照準をケントに合わせる。

そう・・彼みたいなタイプはいきなりの奇襲以外の戦術を使うと厄介だからね。

ジュンがトリガーを引こうとしたその瞬間、喋っていた少女が気配に気づいたのか、ケントを突き飛ばす。

放たれたビームはその少女に当たり、石化させてしまう。

「ちょ・・・どないするんや！関係ない少女を撃っちゃったで！」

しかし、その時ジュンの頭にはこの誤算を利用する手が思い浮かんでいた。

とても残酷で狡猾な手段ー

「アキラさん・・・交渉に行ってもらえませんか？」

「交渉？」

「ええ。書類を読んだ限り、彼を正面から打ち崩すのは困難です。しかし・・・彼の大事な二つのもの・・・自分のポケモンと自分の仲間。その彼にとっての弱点をつくことが出来れば」

「まさか・・自分・・・」

「ええ。この誤算は利用できます。あの少女の石化を解く代わりに・・」

ジュンは少し微笑む。

「彼のポケモンを全てこちら側に渡せ、と脅せばいいんです。そうすれば・・・彼の弱点をつくことが出来ます」

ジュンの提案にアキラは少し嫌そうな表情で頷いた。

第三十四話　直接対決（前書き）

ジュン「大切な任務・・・失敗するわけにはいかない」

第三十四話　直接対決

僕は内心この作戦の成功を感じていた。

この取引は成功だ！

彼にとってサティアと呼ばれた少女の存在は何者にも変え難いはず・・・。

しばらくケントは背を向けしばらく黙っていたが、やがて予想外のことを口にした。

「俺はお前らなんかに屈しない！サティアを元に戻す方法はお前たちを捕まえてからだ！！」

・・・・血迷ったか。君が上級ハンター・・しかも一人は最上級の実力を持つ僕たちハンターに囲まれている状況で勝てると思っているのか！！

しかし・・面倒なことになったな。

ジュンが舌打ちをする。

しかし・・・僕たちの有利には変わりない。

「しゃあないな、力づくでいくで！行くんや、エアームド！！」

アキラがポケモンを繰り出す。

ジュンもモンスターボールからシャワーズを出す。

「ポケモンがポケモンを使う！？……変なアグノムだな……」

ケントが驚いた口調で呟くが、直ぐにボールを二つ取り出し投げる。

「思いっきし、暴れるか！行ってくれ、ムクバード！リザードン！！」

ムクバードにリザードンね。・・・ならばセオリー通りシャワーズでリザードンを攻めるのが確実。

「マニューラ、アブソル。サティアを頼む」

ケントの指示に従い、マニューラとアブソルが石化したサティアをもって後方に下がる。

ジュンはサティアの手持ちのアブソルをチラリと見る。

あのアブソル・・色違い、しかも通常の色違いとは一線を画す黄色か。

今までいろいろな希少度の高いポケモンを見てきたけど・・・あんなのは見たことが無い！！

オークションにかければ天井知らずの高値がつくことは間違いないレベルだ。

まあいいや。隙が出来たらにしよう。

ジュンはバッグに隠してある石化ビーム装置のメーターをこっそり見る。

あと・・・一、二発が限界だな。誤射は許されない。

なら・・・ポケモンバトルで疲弊したところを狙うしかないな。

「レンジャーはポケモンバトル出来るんか？」

ジュンの横でアキラが挑発するようにケントに言う。

・・・実はこれもジュンの作戦の一つなのだ。

茂みから出る前、ジュンがアキラに精神的動揺を狙うような発言をしてくれ、と頼んでいたのだった。

（俺、マジで悪者やん・・・ああ、そんなに睨まんとって・・・・・それにしてもジュンの奴、よくもこういう腹黒い作戦ばっか思いつけるもんやな。ある意味尊敬するわ）

アキラが内心ジュンの作戦になんともいえない感情を抱いていると、ケントも挑発してきた。

「今回は特例さ。お前らみたいな腐った連中が俺目当てで来るんじゃねぇかって推測した人がいてよ。特別に実家から引き取ったのさ。お前らのポケモンじゃ、親父のポケモンには程遠いがな」

「舐めてくれるやんけ……」

これにはアキラも少しムカついたようだったが、直ぐに落ち着きを

取り戻す。

「いくぞ！ムクバード、シャワーズに突進！リザードンはエアームドに火炎放射だ！！」

「エアームド、ラスターカノンで迎撃や！」

『シャワーズ、ムクバードの攻撃を無視してリザードンにハイドロポンプ』

エアームドのラスターカノン、リザードンの火炎放射は共に相殺され消える。

そこにハイドロポンプがリザードンを襲う。効果は抜群だ。

『ぐ・・結構効くな。それにしてもあのアグノムは一体・・・？』

『ボクの攻撃を無視してもらったら困るよ！』

ムクバードが攻撃をし終わったシャワーズに襲い掛かる。

『シャワーズ、溶ける』

しかし、突進が当たる直前でシャワーズの姿が消えてしまった。

「な・・どこに行った！？」

『簡単なことさ。僕のシャワーズは一定量の水蒸気化していないまとまった水分があればそこに溶け込み融合することができる・・・・』

『そうか！ボクの攻撃が当たる直前にどこかの水溜りに消えたのか・・・』

ムクバードがきょろきょろする。

「どうやら・・水に溶けちまったらしいな。厄介な技を使いやがって」

ケントが舌打ちする。

「隙ありやで・・・エアームド、ラスターカノン！」

ムクバードに銀色のエネルギーがまともに当たる。

『シャワーズ、ハイドロポンプ』

シャワーズが岸の近くの水溜りから溶けたままハイドロポンプを放つ。

「く、リザードン火炎放射」

何とかハイドロポンプの直撃を避けたリザードン。

シャワーズの攻撃を防いだか・・・ま、水に溶けている限りシャワーズに物理攻撃は無効。

もう一回攻撃が通れば確実にリザードンは倒れる。

そうなれば・・・。

「リザードン、あの水溜りに向かって炎の渦」

ジュンが考えているといきなりケントが指示をだした。

シャワーズが溶け込んでいる水溜りは炎に囲まれてしまった。

これではシャワーズは逃げることが出来ない。

徐々に水溜りの水分が熱気で飛んでいく。

『シャワーズ、ハイドロポンプを使うんだ・・・・』

『ジュン・・無理・・・熱くてそれどころじゃないよ』

水溜りが完全に消え、そこにはすでに相当のダメージを喰らっているシャワーズが倒れていた。

もはやバトル不可能である。

『く、戻れ』

ジュンがボールに戻すと、ムクバードが不思議そうにする。

『ねえ・・リザードン。あのアグノム・・・ジュンって呼ばれてたよね』

『ああ・・・不思議だな。ま、それもハンターを捕まえれば分かることだろうがな』

『へぇ・・君は僕たちハンターを捕まえるつもりかい?ポケモン捕獲のプロを?』

ジュンが少し微笑む。

『たち!?それじゃ・・・まさかポケモンであるお前も・・・』

リザードンの言葉にジュンがニヤリと笑い、言う。

『その通りさ!僕は元人間のポケモンハンター・・・・今はアグノムの姿になってるけどね。サティアを石化したのも、この取引を僕の横にいるハンターに頼んだのも全て僕の作戦・・・ま、誤算はあったけど』

ジュンの言葉にリザードンが怒る。

『よくもオレの仲間を・・許さねえ・・・』

その瞬間、リザードンのオーラが一気に変わる。

怒りで一時的にパワーアップしたな・・・・まあいい。シャワーズのハイドロポンプでダメージは負ってるはず。

『アブソル、出番だ』

ジュンはアブソルを繰り出す。

「今度はアブソルか・・・リザードン、エアームドに火炎放射、ムクバードはアブソルに鋼の翼」

『アブソル、見切り』

「エアームド、ラスターカノンや」

再びぶつかり合う技。ラスターカノンと火炎放射はお互いに消滅してしまった。

一方、ムクバードが飛ばした鋼の翼を難なく避けるアブソル。

『アブソル、影分身』

アブソルの姿が何十にも増える。

「く・・どれが本物だ」

ケントが迷う。

『一気に行くんだ。アブソル、全方位辻斬り』

ムクバードに一気に大量のアブソルが襲い掛かる。

鋼の翼で応戦するも、辻斬りがヒットし地面に落ちてしまうムクバード。

完全に気を失っている。

「よくやってくれた・・・ゆっくり休んでてくれ」

ケントがムクバードをボールに戻す。

これで・・お互いの戦力の損失は一対一。しかし・・彼の手持ちはマニューラも含めて後五体。

まあ、サティアのアブソルもいるがトレーナーがああなってる以上まともには戦えないはず。

対してこちらの現存戦力は六体。しかもその内アキラさんの手持ち三体はかつてのフロンティアブレーンを支えたポケモン達。この勝負、勝てる！

そこまで考えてジュンは何気なくマニューラ達を見た。

何をやってるんだ・・・？

黄色のアブソルが目覚めるパワーを石化したサティアに放っている。するとサティアを覆っていた石化コーディングが少しづつ溶けてきているではないか！

そんな・・・Ｐ・Ｈ・Ｃの最先端科学技術の石化が解除薬を使ってもいないのに！

ここで人質を失うわけにはいかない！僕の奇襲の意味がなくなってしまう。

『大文字！！』

『させねぇよ、冷凍ビーム！！』

ジュンがアブソル（サティアの）に目掛けて放った灼熱の炎はマニ

ユーラのれ冷凍ビームと相殺されてしまう。

そして・・サティアが復活してしまった。

・・・・まずい。

ケントとサティアがジュン達と向き合う。

まったく。石化を解除するなんて・・・信じられない。

だが。

ジュンはケントたちを見返す。

この任務いかなる手段を使っても失敗するわけにはいかないんだよね。

それぞれの思惑と感情が錯誤する中バトルが始まろうとしていた。

第三十四話　直接対決（後書き）

作者「悪役度が増してるね、君」

ジュン「僕は元々こんな感じだよ」

作者「なんか・・主人公がこんなに真っ黒でいいのかな」

ジュン「いいんじゃない？僕、ハンターってことで目立ってるし」

ま、悪目立ちといいますか・・・。

ジュン「うるさい！大文字！」

ぎゃあああ・・・・。

第三十五話　ハンター四天王集合！

アルトピアタウン近くの岸。そこではレンジャーとハンターのバトルが激しく行われていた。

そして、ポケモンレンジャーとハンターのバトルの成り行きを観察している一人の少年がいた。

そう、イプシロンである。

ＣＩＣ（中央情報局）のエージェントである彼はある任務を背負っていた。

それは、ポケモンレンジャーケントの抹殺、というものだった。

ハンターがポケモンを奪取した後、狙撃するようにとの命令だ。

しかし・・・リザードンがエアームドをハッサムがアブソルを倒した時点でかすかにレンジャーの側に分があるようにイプシロンは感じていた。

「まあ、奪取が成功してもしなくても俺に課せられた任務には変わりないが・・・出来ることならポケモンを奪えよ、ハンターさん。・・・そっちのほうが俺の任務の成功率も上がる」

イプシロンはサイレンサー付の拳銃を握り締めた。

スナイパーライフルはアルトピアタウンのようなほのぼのしたところではバッグに入れていても目立つので持ってきていない。

そしてイプシロンが観察していると・・・。

上空にいたサンダーの放った落雷がハンターの横にいたアグノムージュンのバッグに直撃する。

ジュンがダメージを受け、ポケモンに指示が出来ない状態になってしまう。

それを見たハンターは「くっ、引き上げるしかないやんけ……」と呟く。

レンジャーがハンターを逃がすまいとするがボーマンダが放った流星群で視界を遮られてしまう。

その隙にハンター達は逃げてしまった。

そしてイプシロンの存在にも気づかず、レンジャー達が喜んでいる。

「さて・・・俺の出番だな」

イプシロンは拳銃をしっかりと構え、ターゲットの少年レンジャーに向かって発砲する。

バスッと消音された銃声が聞こえる。

弾丸はレンジャーの腹部を貫いた。

鮮血がもう一人のレンジャーの少女の顔にすこしかかる。

「ついでに足も撃っておくか・・・念のため」

イプシロンは容赦なく引き金を引き、レンジャーの両足を打ち抜く。

「ギャァァァァ！！！！！」

怒り狂ったレンジャーの手持ちと思われるギャラドスがイプシロン目掛けて破壊光線を放つ。

素早く避けるイプシロン。

彼の横で大きな爆発が起こる。

「これで任務完了・・・本当はもう一発ほど撃っておきたいが、見つかると困るからな」

イプシロンはそう言うと茂みのなかに消えていった。

その頃、ジュンは・・・。

「大丈夫か？」

「う・・・まだ痺れがのこりますね」

アキラはルギアに乗りながら、ボーマンダに乗っているジュンを心配そうに見ている。

「サンダーが怒って攻撃するとは思わんかった・・・想定外や」

「そう・・・ですね。それにターゲットのポケモン達・・・正直あ

そこまでやるとは」

ジュンが腕を組んで考え込む。

「どうするんや・・・」

「・・・彼らも第二の襲撃を当然予想してるでしょうし・・・そのための準備も事前にするハズ。ならば、応援を呼ぶしかありませんね」

「自分はどうするんや?アグノムの体で他のハンターと接触するんか?」

アキラの問いにジュンは少し苦笑いする。

「任務のためです。危険を冒す必要があると思いますよ」

「そやな・・俺たちを含めるハンター四天王がそろうことになるな。確か自分は俺以外の上級ハンターとは面識があるはずやろ?信用できる奴のほうがええからな」

「賛成です」

アキラは鞄からハンター用の盗聴防止機能の付いた携帯電話を取り出す。

しばらく話していたが、やがて電話を切った。

「ＮＯ．３もＮＯ．２もこれるらしいで。ボスに確認したから間違いなしや」

「コウ&シン・・・そしてハルさん。これでハンター四天王がそろいましたね」

「ああ。どうやら、ターゲットのポケモンはレイル島ちゅうところに集まっとるらしい・・・ま、応援が来るまで待機やな。それに依頼してきた奴らに仲間が俺たちにあるものを渡しに接触してくるらしいしな。」

待ちの姿勢はあまり好きじゃないけど・・・仕方ない。

「そうですか・・・では、今のうちにポケモン達を休めておきましょう・・・忙しくなりそうですしね」

ジュンが二回目の襲撃に備えて、準備をしている丁度その頃。

イプシロンは森の中でエリカと電話で通信していた。

「なんだと・・・生きてる・・アイツが？」

「そうよ。仕留め損ねたわね、イプシロン」

エリカは非難するというよりはむしろ楽しんでいるような口調で喋っている。

「今、ターゲットはどこにいるんだ？」

「アルトピアタウンの病院よ・・・他のレンジャーに見守られながらベッドで安静にしているわよ」

「じゃ・・・今のうちにもう一回さっさと狙撃する必要があるな」

「今はまずいわよ。レンジャー達が必死にあなたを探してるわ」

「それもそうだな・・・次の機会まで待機するか」

イプシロンはその時、足音が近づいてくるのに気づいた。

そっと茂みから見ると、背の高いオレンジがかった髪をした一人のレンジャーが歩いてくる。誰かを探しているようにあたりを見回している。

「ポケモンレンジャーが接近している。切るぞ」

そういってイプシロンは電話を切った。

（なるほど・・・レンジャーがもう捜索しにきたな。ここは・・・接触を避けるべきだ）

イプシロンはさっさとレンジャーから隠れつつ足早に去っていった。

そして・・・その頃。ジュンとアキラはＮＯ．２とＮＯ．３の到着を待っていた。

全員がそろったら本部から連絡があるはずなのだが。

そこに遠くからフワライドとネイティオに乗った少年達がやってくる。

そうＮＯ．２の兄弟ポケモンハンター、コウとシンだ。

二人は地面に降りると、ポケモンをボールに戻す。

「わざわざ、すまんな」

アキラが軽く挨拶すると、シンがニヤリと笑う。

「聞いたぜ、アンタの上司から。また失敗したんだってなぁ」

シンの嫌味にアキラの笑みが少し消えかける。

「まあ、ＮＯ．１。あなたもこのところ失敗続きだし、ここらで挽回したんじゃないのかな？」

「もちろんや・・・コウ。あ、そうそう、紹介したい奴が居るねんけどな・・・」

アキラの言葉にジュンがアキラの後ろから出てくる。

「へえ・・・また珍しいポケモンだな・・・アグノムって言ったっけ？」

「ああ。僕も始めて見たよ。それで・・・紹介したい奴っていうのはどこだい？」

「・・・久しぶりだね。コウ、シン」

ジュンが人間語で唐突に口を開く。

しばらくの間、二人の兄弟はポカンとしていたが、やがて驚きに声

を震わせて言った。

「嘘だろ・・・いや、間違いなくジュンの声だ・・・兄ちゃん、俺間違ってないよな?」

「ああ・・・NO．1・・・いやアキラ、これは手品なのか?」

コウの言葉にアキラは首を横に振る。

「手品なんかやあらへん。こいつはジュンや」

「だが・・・」

「コウ、シン。君たちは僕の同期のハンターとしてP・H・Cに入ったよね。その時僕と君たちの最初の会話は、“後でポケモンバトルしないか?”だったよね?覚えてる?」

ジュンの言葉にコウとシンは顔を見合わせる。

「ああ・・・この話を知ってるってことは・・・やっぱりジュンか。でもなんでアグノムの姿に?」

ジュンはシンの問いにスラスラと答えた。

ミュウを捕獲しにいったあのときのことを。

「そうだったのか・・・」

話を聞いた後、コウとシンがしばらく驚いていると、そこに一人の女性が歩いてきた。

そうＮＯ．３のポケモンハンター、ハルである。

「あら・・ＮＯ．２の二人組みはもう到着していたのね。・・・そのポケモンは？」

「お久しぶりです。ＮＯ．３・・いえ、ハルさん」

ハルの目が丸くなる。

「あら・・・私疲れてるのかしら・・いまジュン君の声がこのポケモンからしたような・・」

「幻聴ではありません。実はですね・・」

ジュンはさっきコウ＆シンに話した内容をもう一度繰り返す。

「そう・・そんなことがあったのね」

アキラ、コウ、シン、ハルそしてジュン。Ｐ・Ｈ・Ｃ屈指の実力を持つ上級ハンターの五人が集まった。

五人集合したため、アキラが本部に電話をする。

しばらく話していたがアキラがやがて電話を切る。

「今回二回目の襲撃をかける場所がわかったで。アルミア地方の外れにある小さな孤島、『レイル島』や」

「レイル島というと・・・ボイルランドの近くにある孤島ですよね」

ジュンの言葉にアキラが頷く。

「そうや。そして三日後、今回依頼をしてきたある組織の奴らと落ち合うらしい。どうやら、俺たちハンターに渡すもんがあるようやで」

「何だよ～直ぐに襲撃かけたかったのにィ」

シンが口を尖らせる。

「まあ、三日間の準備期間があってよかったじゃないの。どうやら今回のターゲットはアキラ君とジュン君の二人が組んでもキツイ相手だったらしいしね」

ハルの言葉にその場の全員が頷く。

襲撃まで後三日。カウントダウンが始まろうとしていた。

第三十五話　ハンター四天王集合！（後書き）

これと平行してポケモンレンジャーマインドを詠んでない方は分かりにくかったかもしれません（汗）

第三十六話　襲撃開始（前書き）

ジュン「今回から急展開！」

第三十六話　襲撃開始

「さて・・全員そろったことやし」

僕たちは攻撃開始の予定日の朝に集合した。

アキラさんが切り出す。

「作戦会議や」

ジュンたちは今、アルトピアタウンの喫茶店にいる。仕切りが付いている個別の場なので会話を聞かれる心配はない。

それぞれ手に持ったポケモンレンジャーケントと彼に関する資料を に目を通している。

やはりポケモンハンターだけあって、皆プロ特有の冷静で落ち着いた目だ。

しばらくしてハルが切り出した。

「なるほど・・・ボイルランドの近くのレイル島にターゲットが集まってるわけね」

「小さな孤島なら追い詰めるのが楽だが・・・ターゲットやトレーナーはその場所を知り尽くしている。向こうさんに地の利があるのは厄介だな」

シンが資料の写真をトントンと叩く。

「まあ、僕たちには石化ビームがあるが・・・予備のバッテリーも持っていったほうがいいな。万が一ということがある」

コウの言葉にジュンが頷く。

「そう・・それにこの二回目の強襲が失敗したら三度目のチャンスはない。・・・レンジャーユニオンがケント及びポケモン達を今度こそ保護してしまう」

そうなったら・・・僕たちが襲うにはあまりにも危険な状態になる。

そうなれば・・・もう終わりだ。

「裏を返せば、や」

アキラの言葉に皆の注目が集まる。

「レンジャーユニオンの連中は俺たちが二度目の攻撃を仕掛けるかまだ半信半疑なんや・・だからこそケントが無防備にレイル島まで行くのを許した・・」

「本当はそこを攻撃するべきだったのよね」

「しかたないやん。依頼してきたディストローブとかいう組織が三日間の期間を要求したんやから」

そう・・・僕たちハンターに下された指令は大方前回のと一致していたけど・・一つだけ違うところがあった。

三日間・・・本当はハルさんの言うとおり直ぐに行動すべきだった。
何故なら僕たちがケントを狙っていることは当の本人達には分かっているからだ。
彼らが休む暇を与えると僕たちハンターにとって不利になる―
しかし・・・今回依頼してきた組織、ディストローブにはある狙いがあったらしい。
僕は手元の資料を見ながら、水を一口飲む。
そう・・ある『新兵器』の実験をディストローブ側は望んでいる。
そしてその実験は僕たちに有利な事態を引き起こす。レンジャーに三日間に及ぶ猶予を与えてしまった穴を埋めるほどの事態を・・・。
そんなことが可能なのか？
「実験のために俺たちの任務に不確実性が生まれるのはどうも気に食わねぇな」
シンは面白くなさそうにサンドイッチを食べる。
「まあ・・・取引先の都合が優先だからね」
ジュンの言葉にコウが迷惑そうに呟く。
「僕たちの捕獲の弊害になる要求ははっきりいって呑みたくはないけどね」

「クライアントもいろいろいるからね・・・私たちの都合を考えないで依頼してくることも多いし。まあ、そこで依頼人の希望にそったポケモンを捕獲するのがプロなんだけど」

ハルがパフェのクリームをスプーンですくい、食べる。

「まあええやん・・終わったことは。それより、自分らもうホテル出る準備は出来とるか？」

「当然」

皆の言葉を聞き、アキラが頷く。

「ホテルには俺たちの足がつくような物品はおいとらんよな」

アキラが皆を見る。

「そんなことするわけねぇよ」

シンが欠伸をしながら言った。

「よし。じゃあ直ぐに出発や。集合場所は船場や。作戦内容はディストローブ側が現地で提示するようやし・・解散！」

その後僕たちは直ぐにホテルを出て、船着場に到着した。

既にコウ、シンそしてハルさんがついていた。全員（ジュンを除いて）グレーの制服にハンター専用特殊ゴーグルと腕には石化ビーム装置をつけている。

「おせえぞ・・・32秒遅れだ」

シン・・・細かいよ（汗）

「よっしゃ・・全員そろったし・・ああ、自分は飛行できるポケモン持ってなかったやんな？」

アキラがハルに質問する。

「ええ」

「じゃ・・こいつに乗って行き。出て来いフライゴン」

アキラが妖精ポケモンのフライゴンを繰り出す。

「ありがとう・・・じゃ遠慮なく」

ハルがフライゴンにまたがる。

「僕たちも行こうか・・出てくるんだ、ネイティオ」

「出番だぜ、フワライド！」

コウとシンがネイティオとフワライドを出し、乗ってそらに浮かぶ。

さて・・僕も行こうか。

「ボーマンダ」

ジュンもボーマンダを繰り出す。

ジュン達はしばらく飛行を続けていたが、まもなく陸が見えてきた。
火山の麓町、ボイルランドだ。

「あれがボイルランド・・・」

眼下に広がる活気ある町、ボイルランド。

ジュンはただただ感心するしかなかった。

やがてボイルランドを過ぎると、小さな孤島に近づいてきた。

レイル島である。

「ターゲットがおるトコに近づいてきたで・・・」

ジュン達は見つからないようにそっと着陸した。

「ここがレイル島・・・結構いいところじゃない」

ハルが辺りを見渡す。

人に見つかるといけないのでジュンが黙っていると、向こうから男達が十人ほど歩いてきた。

大きな機械を大事そうに抱えて。

そしてその中で白衣を着た研究者スタイルの男がジュン達に近寄ってきた。

ジュンはこのとき直感した。

彼らがジュン達ハンターの取引先、ディストローブだと。

「P・H・Cの方ですか」

白衣の男が質問する。

「ああ・・そうや」

アキラの応答に白衣の男が満足そうに頷く。

「予定時間通りの到着ですね・・ああ、自己紹介が遅れました。私はナトロン。ディストローブの幹部です」

ナトロンの言葉にジュンが驚く。

確かP・H・C側の資料にはディストローブが今回のターゲットのポケモンレンジャーケントの両親も含めて多くの民間人を殺害した組織という記載があったけど・・・まさかその幹部が直接会いに来るとは。

この人、こんなところに来て大丈夫なんだろうか・・・・。

「さて、仕事をしてもらう前に・・」

ナトロンの言葉を察して一人の男がアタッシュケースを開く。

その中には小さなサイズの耳栓や補聴器を連想させる物体がケース

に収まって並べられていた。

「これをあなたたちのポケモンにつけてもらいます。耳栓をする要領でつけるだけですよ」

「実験って俺らのポケモンを使うんかいな・・・・」

「いいえ。これはこちらの機械の効果を無効化するためのものです」

そういってナトロンは大きな機械を指差す。

「この機械は起動させると広範囲のポケモンの意識を混濁、朦朧とさせる装置です。そしてその症状を防ぐためにはその耳栓型の小型メカが必要になってくるのです」

「つーことは、俺たちのポケモンにこれをつけさせとけば・・・意識を乱されることなく、朦朧としてるポケモン達を攻撃できるってことか」

シンの言葉にナトロンが頷く。

「これで捕獲も断然楽に楽になるでしょう・・・ではお願いしますよ」

僕は耳栓をつけた。

目の前には平和な町が広がっている。

「全員の手持ちにつけたな・・・・じゃあ行くで。作戦開始や！」

ジュン達はそれぞれ腕につけている石化ビーム装置のスイッチをオンにすると、ポケモンに乗って飛び出した。

ターゲットのポケモンレンジャーケントのポケモン達は直ぐそこにいる。

襲撃は開始された―

第三十六話　襲撃開始（後書き）

アキラ「なんやすごいメカやな～」

ジュン「さすがディストローブ」

作者「続きはポケモンレンジャー・マインドで！」

第三十七話　捕獲開始（前書き）

ジュン「さて・・・任務の始まりだよ」

第三十七話　捕獲開始

「はは・・・すげえ・・・今までででこんなに捕獲が楽だったことなんて一度もねえぜ」

シンがやや興奮気味に石化ビームを連射する。

僕たちはいまレイル島でポケモン達を狩っているところなんだけど・・・。

やはりディストローブの言うとおり・・・補聴器に似た機械をつけていない僕たち以外の島のポケモン達は混乱している。

それも混乱し、暴れているのである。木々をなぎ倒し、中にはお互いに攻撃しあっているのもいる。

すごい技術だね。

「なあ・・・ターゲット外のポケモンも捕獲していいんだよな?」

シンが腕時計型の通信機から立体映像をだして言った。

その立体映像にはケントの仲間のポケモン・・つまりはシュウヘイが育てた二十四種ものポケモンの映像があった。

そう・・これら全匹が今回のターゲットである。

「駄目や・・・欲張りは身の破滅やで」

アキラが混乱しいろいろなところにアクアジェットで突進しているフローゼルを石化しながら言う。

「ちぇ・・ケチ。おっ・・あれはターゲットリストに乗ってた奴」

シンが指差す先にはフラフラと混乱して様子で森をさまよっているガバイトがいた。

シンが捕まえようとするが、ジュンが先に石化ビームを放つ。

普段ならこの素早いガバイトは攻撃を避けれたはずだが・・・今は抵抗すら出来ず、石になってしまう。

ジュンは無表情にハンターボールを固まったガバイトに投げる。

ボールはガバイトを吸い込み、その場に静止した。

「・・・ジュン、君は昔からポケモンを捕獲するのに容赦がないね」

コウが意味深げに頷く。

「個人的感情は任務の邪魔ですから」

「ふーん。じゃあちょっとは捕獲するのにためらいがあったりするワケね」

ハルの言葉にジュンはガバイトが入ったボールをアタッシュケースにしまいながら考える。

まあ、確かに最初のころはためらいがあったけど。

慣れって恐ろしいよね・・・今じゃあんまり罪悪感とか抵抗感がなくなってきた。

だってポケモンを商品として扱えないと・・・ハンターは務まらない。

そしてＪ師匠のように強くもなれない。

まあ時々自分のやってることが非道な道だと自覚するときもあるけどね。

「お、あっちにもターゲットがいるようや・・それも一気に五体発見」

アキラが前方５００メートル先を指差す。

そこにはライチュウ、ヘルガー、リングマ、ボスゴドラ、そしてゴウカザルがいた。

やはり混乱中のようだ。

「これで一気にノルマ達成に近づくね」

ジュン達がそれぞれ石化ビームを構えたその時だった。

『う・・俺たちはいったい何を』

ボスゴドラが頭を抱え、酔いがさめた様に呟く。

『私たちさっきまでケントの家の一階で寝てたわよね・・・ここは何処かしら』

ライチュウの言葉に、少しふらつきながらもゴウカザルが頷く。

『オレ、トレーニングやってる最中に急に意識が遠のいてさ・・・』

『同感だ・・おい、こいつらは!!』

ヘルガーがジュン達の存在に気づき、身構える。

ライチュウが驚き半分、怒り半分で頬から電撃をうならせる。

『アンタ達・・・ポケモンハンターね・・それにそこのアグノム!ケントが言ってたわ・・・ハンターが連れていたアグノムが変な様子だったって』

『ふーん。どうやらディストローブの実験が失敗したようだね・・・・こんなに早くポケモン達の錯乱が解けるなんて』

『ディストローブだと・・・ハンターとディストローブ・・・手を組んだってとこか』

ゴウカザルが舌打ちをする。

「おいおい・・・混乱が解けるの早すぎねえか?もうちょっと長い時間かと思ってたが」

「確かにシン君の言うとおりだわ・・・まだナッシーとメタモン、フローゼルそれにガバイトしか捕獲してないのに」

ハルの言葉にボスゴドラが怒りをあらわにする。

『俺たちの仲間をよくも・・・』

「あちゃ～やる気やであいつら・・・しゃあない・・出てくるんや！エアームド」

「俺も行っちゃうぜ。行け、フワライドにドーブル！」

「ネイティオ・・バトルスタンバイ！」

「ビークイン、ハッサム出てきなさい」

「君も出番だよ・・・シャワーズ」

ジュン達の側にはエアームド、フワライド、ドーブル、ネイティオ、ビークイン、ハッサムそしてシャワーズの合計七体が並んだ。

どうやら発射できる回数に限界がある石化ビームをより効果的に使うために、バトルで弱らせてから石化するつもりらしい。

『消えな！火炎放射！』

『おらっシャドークロー！』

ヘルガーが業火を放ちリングマが暗黒のパワーを爪に宿し、突進してきた。

「シャワーズ、ヘルガーにハイドロポンプ」

「ネイティオ、熱風」

ジュンとコウがそれぞれ指示を出す。

『ぐ・・・効くぜ』

ネイティオの熱風をモロに受け、膝を突くリングマ。

一方でヘルガーの火炎放射はハイドロポンプに押されていた。

最終的にはハイドロポンプは火炎放射を押し切っていたが、ライチュウの十万ボルトの補助で相殺された。

『ヘルガー、私はあのシャワーズを狙うからあんたはハッサムを攻撃して！』

ライチュウは雷をシャワーズに落とす。

「ビークイン、攻撃指令で雷を相殺して」

ハルのとっさの機転で雷はシャワーズに落ちずにすんだ。

『俺のことも忘れてもらっちゃ困るぜ！ブラストバーン！』

『火炎放射！』

『アクアテール！』

ゴウカザルが火の玉をエアームドに、ヘルガーの炎がハッサムを襲

う。

それに続く形でボスゴドラのアクアテールがビークインを攻撃する。

「エアームド、ラスターカノンで迎撃や！」

エアームドのラスターカノンはブラストバーンに押される形で相殺された。

そしてヘルガーの炎がハッサムを襲う。

「ハッサム、バトンタッチ。ビークインは攻撃指令でアクアテールを相殺しなさい」

ハッサムは素早くボールに戻り、炎を避ける。

そして代わりにアリアドスが現れた。

ビークインはブンブンと羽音を立てる大量の蜂を自らの体内から放出する。

アクアテールでの攻撃中だったボスゴドラは不意をつかれ、攻撃指令をモロに受ける。

効果はいまひとつだったが、ハルの狙いは視界を一瞬でも邪魔することだった。

『ボスゴドラ、危ない！』

ライチュウの叫びも虚しく、ハルの放った石化ビームは一瞬でボス

ゴドラを石に変えてしまう。

『く・・・よくもオレの仲間を』

『許さんぞ・・・』

今ボスゴドラが石化されたことで、彼らの戦線に狂いが生じた。

そして長らくポケモンハンターをやってきたジュンにはこの瞬間が絶好のチャンスであることを手に取るように分かる。

『この・・絶対潰してやる!ギガインパクト!』

『ブラストバーン!』

『悪の波動!』

『雷!』

リングマ、ゴウカザル、ヘルガー。ライチュウがそれぞれ技を繰り出す。

仲間を石化された怒りのパワーで威力が明らかに上昇しているが、隙の多い大味な技になってしまっていた。

「ネイティオ、ゴウカザルにサイコキネシスだ」

「エアームドはリングマにゴッドバードや」

「シャワーズ、ハイドロポンプをヘルガーに」

「アリアドス、トラップ・ウェブは仲間にまで影響が出る・・どくどくをライチュウに使いなさい。ビークインは攻撃指令でアリアドスの援護を」

お互いの本気の技がぶつかり合う。

そんな中、ハイドロポンプがヘルガーに当たった。

ヘルガーは悔しそうにジュン達を一睨みするとその場に倒れる。

ゴウカザルもヘルガー同様ふらつくが何とか持ちこたえた。

そして、どくどくを受けたライチュウの放った雷がシャワーズに直撃。戦闘不能の状態にしてしまった。

コウは無表情に石化ビーム発射口を倒れているヘルガーに向ける。

『させねえ・・・これ以上は・・アームハンマー！』

リングマが腕にエネルギーをため、コウを襲おうとする。

しかし既にネイティオの熱風とエアームドのゴッドバードをまともに受け、彼の体力は限界に達していた。

そこにシンが一言指示する。

「ドーブル・・・泥爆弾」

ドーブルが放った爆弾はリングマの目の前で炸裂する。

その爆風に吹き飛ばされたリングマは力尽きるようにヘルガーの横に倒れる。

そして・・・コウとシンの石化ビームがヘルガーとリングマを石に変えた。

『この・・・いい加減にしなさいよ!!絶対倒してやる・・・ボルテッカー!!』

石に変えられていく仲間を前についにライチュウが切れる。

ライチュウは電気の鎧を身に纏い、ハルのビークインに突撃する。

突然のことにジュン達が反応できないまま、ビークインに攻撃が直撃する。

「ビークイン!」

どくどくのダメージが効いているのかボルテッカーの威力が弱まっていたのだろう、ビークインは何とかギリギリで耐えた。

「少し休んでおいて・・」

ハルは素早くビークインを戻す。

『今度はお前だ・・・ボルテッ・・』

『ライチュウ・・今は引くときだ』

ゴウカザルは荒ぶるライチュウを抱え、炎の渦を使いジュン達の視界を遮り森の奥に逃げていった。

「逃げられたね・・・」

ジュンの言葉にシンがニヤリと笑う。

「シン？どうしたんや」

「何・・奴らが逃げた方向にはドーブルの泥爆弾が大量に地面に埋めてあるんだよ・・・もうそろそろ爆発音がするはずだ」

そして次の瞬間、ドン！と大きな爆発音が響く。

ジュン達が駆けつけてみると、ライチュウとゴウカザルが倒れていた。

どうやら埋められている泥爆弾を踏んでしまったらしい。

ジンが倒れている二体を石化し、ボールに入れる。

これで合計九体の捕獲に成功したことになる。

任務はまだまだ序盤に入ったばかりだ―。

第三十八話　ジュンの切り札“メデューサ”（前書き）

ジュン「今回僕の持ってるある道具が新しくなる、かも」

作者「これを読む前にコラボ相手のプラネットさんのポケモンレンジャーフィーリンターを読んでおかないと展開があまり分かりません。ぜひお読みください」

第三十八話　ジュンの切り札“メデューサ”

「なんや、面倒なことになりよったわ」

アキラさんが舌打ちをする。

そう・・今僕たちはポケモンレンジャーケントの仲間の伝説者守護獣と呼ばれているポケモンに囲まれているんだ。

「なるほど・・・彼ら強いわね・・・どうする?」

ハルの質問にアキラが頭を掻く。

「そうやなぁ・・・ま、どうにかなるんちゃうん?」

アキラがいつものポジィティブな返答をする。

能天気ともいえるけど・・・それに答えになってないよそれ（汗）

「僕の考えでは」

ジュンが小声で切り出す。

「彼らの目的はこのアタッシュケースを取り戻すことです」

ジュンが捕獲したポケモン達の入ったケースをトントンと叩く。

「そんなことは分かってるんだよ。前置きはいいからさっさと言え」

シンが苛立たしげに言う。彼が苛立つ時は、ピンチの時。シンはケントの仲間のポケモン実力に少し畏れのようなものを感じているのだ。

「それで・・考えたんですが。僕がこれを森の中を移動します。時間稼ぎにはなるんでしょう」

「でも・・・こちらの戦力が減るのはいただけないな、ＮＯ．４」

「つーかテメエもあいつ等にビビッてるんじゃねえのか？」

二人の兄弟が一気に物を言う。

ジュンはそれに静かに答えた。

「ビビッるのなら君達から離れて一人でアタッシュケースを守るなんていわないよ・・・それにこの策は確かにこちらの戦力を減少させるけど・・同時に捕獲したポケモン達を取り戻されるというリスクは少なくなる。ここで固まってたら彼らはアタッシュケースを狙い放題だ」

「確かにそうや・・そのアタッシュケースに気を配りながら、奴らとの戦闘行為をすることは俺らにとってマイナス・・・でも自分が捕まる可能性も跳ね上がるで」

「大丈夫です。僕にはこれがありますから。ホテルにいる時、本部から送られてきた新型の捕獲装置がね」

ジュンがバッグからある装置を出す。今つけている装置とは違い、色はブラックで全体的になだらかなフォルムの側面には０９と銘打

ってある。

石化ビーム装置。正式名称、瞬間硬化光線照射式ポケモン捕獲装置タイプ０９。開発コードネーム、メデューサ。六年前に開発された従来の石化装置と比べ、照射速度、命中精度が格段に上昇している、と説明書には記されていた。

また石化ビームの連射も可能にしており、捕獲性能が改良されているようだ。

「いいな～俺も欲しい。メデューサ・・・」

シンが羨ましそうに見る。

ジュンだけにこの新型捕獲装置“メデューサ”が送られたのには理由がある。

実はジュンはハンターの仲で最も石化装置を使っている経験が長いのだ。

Ｊの部下として働いていたころも彼女が使っていたのと同じ装置を使用していたのだ。

と、いうのもＰ・Ｈ・Ｃがハンターに汎用石化装置を支給しだしたのはつい最近。

実験的に開発された石化装置は汎用性に優れるものの、コストが高くＪのようなフリーのハンターとその側近の極少数の部下のみが使っていただけだった。

石化装置自体は開発と研究が進み、バージョンアップされ続けていたものの組織がまとめて購入し支給

するには捕獲したポケモンの売買で得られる利益では釣り合わなかったのだ。Ｐ・Ｈ・Ｃのような大量

にハンターを抱えている組織にいたってはなお更である。

そして今回ジュンは組織内で最もＪの部下時代から石化装置を長い間扱っているハンターとして、新開発された“メデューサ”を実験的な使用も含めて渡されたのだ。

「さて・・・彼ら今にも襲いそうな顔をで睨んいますし・・・そろそろ行動を起こすべきですね」

「そやな・・それに自分がここから離れるんやったら俺らもばらばらに行動したほうがええやろな」

「何故です？」

コウが不思議そうな顔をする。

「だって俺らがここにいて、ジュンだけいなくなって同時にアタッシュケースも無くなってたら明らかに向こうさんはジュンを総攻撃するやろ」

「それもそうね」

「そやから・・フワライドの黒い霧で視界を遮断して、その隙に俺らは別々に森の仲に行くんや。奴ら伝説者守護獣はシュウヘイの元

で育てられたごっつい強いポケモン。そやけどあいつらの強さは何と言っても長い間に培ってきたコンビネーションや。奴らは仲間同士でお互いに補い合う戦い方が得意と見た・・・・だったらこっちはバラバラに行動すればええ」

「なるほど・・私たちが別行動することで相手の仲間の数を分散させてコンビネーションをさせにくくするってワケね」

「そういうこっちゃ。俺らが固まってバトルしても、たとえ実力的には同じやとしても、俺らの生半可なコンビネーションや結束ではやつらの鍛え上げられた絆には勝てへん。ここはなるべく個人戦にもちこむのがベストや」

「よっしゃ、そういうことなら俺は兄ちゃんと一緒に行動するぜ」

「私はじゃあアキラ・・あなたと」

「僕はこのアグノムの体の小ささを生かして見つからないように潜んどくよ・・・本当は他の人と行動したけど・・二人だと見つかる確立が上がるからね」

「シン、頼むで」

アキラがシンに言う。

「任せろ・・フワライド、黒い霧！」

フワライドが真っ黒の霧をあたりに吐き出す。

コウとシン、アキラとハル・・そしてジュンはそれぞれ森の中に別

の方面に入っていった。

ジュンは森の中を低空で飛行しながらすこし考え事をしていた。アタッシュケースは意外と軽い、飛行の邪魔にはならなかった。

彼ら・・伝説者守護獣の誰が僕を追うだろう・・・まあアタッシュケースは誰が持ってるかはレンジャー側からは分からないわけだし・・・。

僕のポケモンは多分、伝説者守護獣には勝てない。ボーマンダさえも。

シュウヘイという伝説のトレーナーが育てたポケモンらしいけど・・・。

あの強さはどこから来るんだろう？

まあいいや・・僕はミッションをこなすだけだ.

ジュンは浮遊しながら、前の石化装置を取り外し、新たに新型石化装置、“メデューサ”を腕に付ける。

漆黒のボディがアグノムの薄い灰色の腕と結構マッチする。

この新しい石化装置、メデューサ・・・。

君の威力、ぜひ拝見させてもらうよ。

ジュンはメデューサを撫でると、Ｐ－ゴーグルをかける。

さて・・ここからが正念場だ。

第三十九話　戦いの始まり（前書き）

ジュン「今回僕のメデューサの新機能も明らかに！」

第三十九話　戦いの始まり

さて・・・こうも早く見つかるとは。

でも、僕の狙い通り追っ手は少数。

マニューラとリザードンのみ。いくら彼らが強いといっても僕の手持ちの数でなんとか押し切れる。

このバトル僕が圧倒的に有利だ。

ジュンは内心喜んでいた。

今ジュンは追ってきたケントに見つかり彼と対峙しているところなのだが・・・。

大丈夫。僕の予想以上の少数で来たし・・・僕には新型石化装置メデューサがある。

だがしかし・・リザードンの空中からの火炎放射を防ぐためとは言え、サイコキネシスをフルパワーで使ってしまったのは痛かった。

短期決戦・・・それは彼も望んでいることだろう。

まずは・・小手調べ。

「僕は無駄な戦いをしたくないんだ・・・その二体をこちらに渡してくれるのなら、もう僕は引くけど?」

「・・・えらい虫のいいこと言ってくれるじゃねえか。俺の仲間を石化して、故郷に攻め込み、ディストローブと手を組んだお前達ハンターが言えるセリフかよ!?」

「・・・やはりこの手は通じないね。仕方が無い・・・」

ジュンはモンスターボールを取り出す。

それに応えるようにリザードンが前に出る。

「行け・・シャワーズ」

「リザードン、火炎放射」

ケントの前に出たリザードンが燃え盛る炎を放つ。

「シャワーズ、ハイドロポンプ」

二つの技はぶつかり合う。炎が水を水蒸気に変えジュンの視界を遮る。

「シャワーズ、もう一回ハイドロポンプ」

シャワーズが再び技を出す。

その技で水蒸気が飛び、視界が広がるが・・・。

そこにはリザードンはいなかった。

「・・・あの一瞬で一体どこに・・」

その時、ジュンのＰ－ゴーグルの感知器が上空に反応する。
そしてケントの口元に少し笑みが浮かんだのをジュンは見逃さなかった。

「シャワーズ、上だっ。ハイドロ・・」

『遅い！エアスラッシュ』

リザードンの空気の刃がシャワーズを襲う。
土ぼこりがはれたときにはシャワーズはバトル不可能な状態だった。
そんな・・・馬鹿な。
ジュンは内なる同様を隠しながら、シャワーズをボールに戻す。
僕の手持ちのポケモンを一瞬で・・・。

「さあ、次のポケモンを出せよ」

ケントの挑発にジュンは考え込む。
あのリザードン・・強いな。それにあのマニューラも相当な実力の持ち主みたいだし・・・。
グレイシアで行くか？いや、タイプ的に相性が不利なグレイシアであのリザードンを相手にするのは無謀だ。

アブソルも多分勝てない。

ボーマンダなら倒せるかもしれないけど・・・その後にはマニューラが控えてる。

氷タイプを相手にするのは得策じゃないし。何よりボーマンダは任務終了後引き上げるときとか非常事態とかの時にとっておくべき。

バトルではレンジャー側が有利。

・・今こそ新型のメデューサを使うべきだ。

ジュンはメデューサの銃口をリザードンに向ける。

アタッシュケースは僕の木の後ろに隠してあるから見つかる心配は無い。

それにさっき説明書で読んだメデューサの特殊機能を使ってみたいと思っていたところだしね。

ジュンはメデューサの側面にある、小さなボタンを押す。

突然メデューサの両側から三角の小さな鏡が六枚飛び出し、周囲に展開する。

『ケント・・・あれは一体?』

マニューラがあからさまに怪訝そうな顔をする。

「俺にもわからねえ。だが、気を抜くなマニューラ、リザードン」

「リフレクターミラー、相手周囲に展開」

六枚の三角形の鏡はケントの周りを円を描くように回る。

マニューラたちが身構える。

そして、ジュンはトリガーを引いた。

突如、通常の発射口とは別の場所から斜めに六発の石化ビームが発射される。

六発の石化ビームはケント達の周りに浮遊している六個の鏡に反射し―

ケント達を収束するように襲う。

「マニューラ、冷凍ビーム。リザードン、火炎放射で防げ！！」

ケントが直ぐに指示をする。

六発の石化ビームを防ぎきるケント達。

・・なるほど、運動能力が高いね。

でも・・。

このリフレクターミラーは超小型高性能コンピューターで制御されたハイテクマシン。

そしてこれの最大の特徴は僕の脳波を読み取り、僕の思ったとおりの場所に移動できる点。

さらにはメデューサ本体ともリンクしていて、放たれた六発の石化ビームは石化ビームは正確に六発とも相手に反射される。

リフレクターミラー内三枚がマニューラ側、残りがリザードンの周りに展開、浮遊する。

放たれる六発のビーム。

三発はマニューラに、残りはリザードン側のミラーに反射される。

『喰らうかよ。冷凍ビーム』

『火炎放射！』

再び防ごうとする二体。しかし、真後ろからの３６０度からの反射攻撃。避けきれるはずが無い。

「危ない！リザードン」

リザードンの真後ろに展開していたリフレクターミラーに反射された石化ビームがリザードンを襲う！

『危ないッス！！』

リザードンの前に突如デリバードが空から立ちふさがる。

石化ビームはリザードンを身を挺して守ったデリバードを非情にも

石化してしまった。

「・・・驚いたね。身を挺して石化ビームから仲間を救ったか」

ジュンがハンターボールを投げる。

ボールに吸い込まれたデリバードは出てくることはなかった。

『デリバード・・・少し辛抱していてくれ。俺がこいつを倒すまで』

リザードンが決意を胸にジュンを睨む。

さて・・この任務もいよいよ佳境だね。

コウとシンは追ってきたメタグロス、ハッサム、ギャラドスと対峙していた。

「また・・強そうなのが出てきたね」

「ま、俺たちの敵じゃねえがな。行くぞ兄ちゃん！」

「ああ」

コウとシンの掛け合いに三匹が身構える。

「フワライド、俺を乗せて上昇だ。ドーブルは空を飛ぶ」

「フーディンはサイコキネシスで自身を浮かせるんだ。ネイティオは僕を乗せて」

コウとシンは二人とも空中に上る。

それを見た三匹は彼らが逃げると思ったのだろう。

『させるか、アクアテール』

ギャラドスが尾に水を纏い、フワライドに攻撃を仕掛ける・・・が。

「残念だったな。ドーブル、泥爆弾」

前の前に飛んできた泥爆弾をギャラドスは反射的に打ち返す。

別方向に飛んでいった泥爆弾は爆発を起こす。

『危なかったね・・ギャラドス』

『ああ・・何だこれ』

ギャラドスが周囲に散らばった無数の種子の様な物を見る。

『ギャラドス、逃げて!!』

ハッサムがギャラドスを引っ張るのと、ドーブルが種爆弾を起爆させるのとはほぼ同時だった。

ドン！と周囲に響き渡る爆発音。

守るを使っていたメタグロスとギャラドスと共に回避に成功したハッサムを見て、シンは舌打ちをする。

「くそ、・・フワライド、ドーブル、シードクラスター焼夷弾をやるぞ」

ドーブルが種爆弾を仕込んだ泥爆弾を生成し、フワライドがそれに鬼火を点火させる。

燃え盛る炎の塊と化した大量の泥爆弾をドーブルをポイと放り投げる。

『ワタシの芸術を喰らうがいい』

『僕たちのコラボ技だよ～』

『『シードクラスター焼夷弾起爆！！』』

その瞬間ドンドンと大きな音がして燃えさかる爆弾が空中で爆破する。

雨のように降り注ぐ炎。

無数の炎はメタグロス、ギャラドス、ハッサムを襲う。

水タイプのギャラドスにはどうってことないが、メタグロスとハッサムには大ダメージだ。

『今のは効いたよ』

ハッサムが苦しそうに呻く。

『ふむ・・どうやら彼らの戦術、ドーブルとフワライドがタッグを組んでこそ、のようですね。特にコンボのメインはあのドーブル・・・ハッサム、ギャラドスあのドーブルを狙いなさい』

『ならワタシがアイアンヘッドをぶち込んでやるよ』

ハッサムが驚くべきスピードでドーブルに向かう。

「ケッ、それぐらいの攻撃でドーブルをやらせるかよ。ドーブルは泥爆弾、フワライドはサイコキネシスだ。空中機雷で防御を固めろ」

ドーブルが大量の泥爆弾を作り、フワライドのサイコキネシスがそれらを浮遊させる。

ドーブルは直接攻撃に弱い。手持ちのポケモンの弱点を知りぬいたシンの対策法だ。

『危なくて近づけないよ』

『面倒な・・俺のアクアテールで振り払うこともできん』

『ふ・・そんなことだろうと思いましたよ・・こちらもサイコキネシス!!』

メタグロスが念動力を空中機雷に向ける。

突如、空中に浮いていた機雷が地面のほうに落ちはじめる。

「フワライド！やつのサイコキネシスに負けるな」

『シン・・僕も頑張ってるんだけど・・く、・・なんて強さ・・ああっ』

メタグロスのサイコキネシスがフワライドのそれを上回ったのだろう、機雷は地面に叩きつけられそのまま爆発した。

そしてハッサムが爆風を利用し超スピードで上昇しアイアンヘッドをドーブルにきめる。

ドーブルは一撃で倒され、地面に落下する。

「戻れ。ドーブル」

シンが悔しそうにドーブルを戻す。

「奴ら・・・強いな。まさかシンの爆弾コンボを破るとは」

それまで黙って見ていたコウが静かに呟く。

「ああ・・石化ビームで攻めても防御されるだけだし・・どうする兄ちゃん？」

「安心しろ、シン。僕のフーディンの能力を知ってるだろ？ネイティオは戻しとくよ、いざという時のために・・それにフーディンの力をもってすれば三匹とも一瞬で倒せるしな」

コウの不敵な笑みにシンも心当たりがあったのだろう、ニヤリとする。

双子だけあってそっくりだ。

「さてターゲット諸君、ここからは僕が相手だ・・今のうちに外の景色を楽しんでおくことだ」

コウがついにバトルをするときが来た―

そしてその頃。

アキラとハルはカメックス、ヌケニン、チャーレムの三匹と対峙していた。

「俺、自分の戦い方知らんから楽しみやわ～」

呑気なアキラの言葉にハルがきつく言う。

「あなたも本気を出してよね！」

「俺はいっつも本気でやで～」

「・・・まあいいです。ＮＯ．１、私の戦術を避けながら戦ってね。アリアドス、トラップ・ウェブ」

アリアドスが回りに大量の糸を付着させる。

まるでレーザー網である。

『こいつは一体・・・』

『・・・見たことが無い技・・・・糸を吐くの応用と思われる』

『カメックス、ヌケニン、気をつけて。糸から多量のエネルギーを感じるわ』

チャーレムが目を瞑り、まるで瞑想するように全身でエネルギーを感知する。

「へえ・・すごいやん。でもエアームドとかフライゴンのスピードが削がれるし俺はここで見物させてもらうで」

アキラは完全に観戦モードだ。

「まあいいです・・・アリアドス、相手全体にミサイル針！」

襲い掛かる無数の針。

『しゃらくせえ！ハイドロポンプ』

ミサイル針は激流で防がれてしまう。

「エアームド、ラスターカノン」

突然銀色のエネルギー弾がカメックスを襲う。

すっと前に出、カメックスを守るヌケニン。不思議な守りにより苦手分野攻撃以外のダメージを受け付けないその体はまさに鉄壁。

「あら・・・さっきは観戦するとかいってたわよね？」

「血が騒ぐんや・・・ハル、トラップ・ウェブに何仕込んどるんや？俺のエアームドのラスターカノンが掠ったのに切れへんあの糸・・何かあるやろ？」

「・・サイコキネシスとどくどくを仕込んであるわ」

「豪勢やないか・・・サイコキネシスで糸の保護&ダメージ源としてSらにどくどくで追撃・・ならまずはあのヌケニンから倒すべきやな。不思議な守りを突破できるポケモンは俺の手持ちにはおらん」

「分かったわ・・・トラップ・ウェブに引っかからずに、ね」

「分かっとる」

アキラとハルが身構える。

ついに激闘の火蓋が切って落とされた。

第三十九話　戦いの始まり（後書き）

ジュン「ねえ、そう言えばさ・・・・」

作者「何？」

ジュン「キャラ人気投票どうなったの？来てる？」

作者「ああそれなんだけど・・・・」

ジュン「どうしたの、暗いね」

作者「投票が一つも来てないんだ・・・」

ジュン「・・・そう（汗）」

作者「皆さん、人気投票是非投票してください」

ジュン「哀れっぽい声を出さないでよ（汗）」

第四十話　コウの実力～ファントムエフェクトの脅威～（前書き）

ジュン「あれ、なんかタイトルが・・・」

作者「はは・・・」

ジュン「これって・・？」

作者「いやコウのフーディンの能力を強調したタイトルにしただけ」

ジュン「まあいいけど」

第四十話　コウの実力～ファントムエフェクトの脅威～

ジュンは目の前に砕かれたリフレクターミラーの残骸を呆然として見ていた。

メデューサ最強の特殊機能と言っても過言ではない全方位石化ビームがこうも簡単に・・・。

もはや六発同時発射の石化ビームはただの弾の無駄遣い。

「・・・ゼロ、マニューラに火炎放射！」

「リザードン、火炎放射でマニューラを守れ」

リザードンの横からの援護攻撃がゼロの火炎放射を防ぐ。

「・・・ゼロ、ボディチェンジ、タイプサンダース」

『はい』

ゼロがブースターからサンダースの姿に変化する。

『また変わったぞ・・・』

『ああ。油断するなよ、リザードン』

「今だ、十万ボルトをリザードンに」

『させるか！冷凍ビーム！』

十万ボルトを撃たせまいとするマニューラの攻撃。

「サイコキネシス！」

ジュンは念動力で冷凍ビームを防ぐ。

ゼロの放った電撃はリザードンに直撃する。

「電撃系の苦手なリザードンには効くよね」

「残念だな・・リザードンはこんな攻撃でやられるほど柔じゃないぜ」

リザードンは苦手なタイプの攻撃を受けたにも関わらず、平気な顔をしている。

『ケント・・・どうやらあのゼロとかいうイーブイ。色々なタイプに変身できるのは厄介だが・・・技の威力はたいしたことは無い。一気に押し切るぞ！』

「ああ、そのようだな」

なるほど・・・さすが優秀なポケモンレンジャーとその仲間。

ゼロの弱点を的確に見抜いてきたか。

だけど・・。

こっちにはメデューサもあるのさ

ジュンはすばやくメデューサを構え、トリガーを引く。
不意打ちでかたをつけるつもりだ。
メデューサ、連射モード。
刹那、メデューサの銃口から光が放たれる。
ケント達に襲い掛かる無数の石化ビーム。
「リザードン、マニューラ回避だ！」
二匹は森の中に逃げる。
「させない！」
ジュンは石化ビームを森に向かって弾幕を張るように連射する。
カチッという音がメデューサから聞こえる。
ジュンがメデューサの残弾数表示を見ると、エネルギー切れになっていた。
しまった。弾切れだ。早くエネルギー充填しないと・・・。
ジュンは急いで、充填装置をメデューサに取り付ける。
「どうやら、その機械エネルギー切れのようだな。今だ！マニューラ、リザードン！」

『喰らえ！火炎放射フルパワー！』

『冷凍ビーム』

「ゼロ、ボディチェンジタイプ、ブースター」

ゼロの体が再びブースターに戻る。

特性貰い火により、火炎放射は無効化されるはず。そして強化された炎技でマニューラを攻撃できれば・・・。

しかし・・・。

『ジュンさん・・・く・・』

リザードンの炎に耐えているゼロが苦しそうに呻く。

「忘れたか？俺のポケモン達の攻撃は特性さえも凌駕する！」

そうだった。何故忘れていたんだろう？シャワーズの貯水も無効化されたんじゃないか！

まずい。ゼロのキメラ能力、ボディチェンジの強みは何と言っても技を無効化または半減できる点。

それを上回る攻撃を受けては・・・キメラ能力を除くとただのイーブイのゼロは耐えられるわけがない。

ましてゼロの戦法はボディチェンジ軸・・・これを突破されては・・

・確実に負ける！

「ゼロ・・・戻るんだ」

ジュンはボールにゼロを戻す。これ以上の戦いはゼロを傷つけるだけと判断したからだ。

「どうした？もうお終いかよ」

挑発的なケントの言葉。

ジュンはサイコキネシスで木の影に隠してあったアタッシュケースを引き寄せる。

その瞬間ケントの雰囲気が険しくなった。

「俺たちの仲間が入ったアタッシュケース・・・」

『降参して返す気になったか？』

マニューラの言葉にジュンは首を横に振る。

「・・・せっかく捕まえたターゲットを逃がすと思ってるの？」

そしてバッグから煙玉を取り出し、ケントたちに投げつける。

ドンという音と共に辺りに広がる黒煙。

Ｐ－ゴーグルのおかげでジュンは視界を遮れられずに森の中に逃げれることができた。

しばらく低空飛行をしていると、P-ゴーグルのレーダーが反応した。

「・・これは?」

ジュンの目の前に広がっていたのは氷の壁。

そっと手で触れてみる。

相当厚そうだ。

「彼らの意図が掴めない・・・」

「マニューラ、冷凍ビーム!」

刹那、ジュンの後ろから攻撃が放たれる。

「サイコキネシス!」

ジュンはとっさにサイコキネシスで冷凍ビームの軌道をずらす。

「・・・逃げようしても無駄だ」

「・・仕方ない。ここは出し惜しみしてる場合じゃなさそうだ。行けっ、ボーマンダ、グレイシア」

ジュンはグレイシアとボーマンダを繰り出す。

二匹ともジュンの手持ちの仲ではトップの強さを誇る。

「リザードンはグレイシアに火炎放射！マニューラはボーマンダに冷凍ビーム！」

「グレイシア、吹雪。ボーマンダは空に飛ぶで回避だ」

ボーマンダは冷凍ビームを空に飛んで回避した。

そしてグレイシアとリザードンの技同士がぶつかり合う。

炎が吹雪を一瞬で水蒸気にする。

視界が遮られる

「今だ！グレイシア、水の波動！」

グレイシアが水の波動を勢いよく撃つ。

しかし、次の瞬間信じられないことが起こった。

白い水蒸気が裂け、業火がグレイシア目掛けて襲ってきたのだ。

『きゃあああっ』

炎に飲まれるグレイシア。

「グレイシアっ！？」

ジュンは倒れてしまったグレイシアをボールに戻す。

「何故・・・水の波動は直撃したはず」

「ああ・・だが俺のリザードンには効かないぜ。あの程度の攻撃では、な。さて・・残るはボーマンダだけだが。まあ、見たところお前の切り札のようだが」

「・・・・こうなれば、ボーマンダあれをやるよ」

『あの技を使うのか?オレは自身を制御できなくなるぞ!?いいのかよ・・』

「まあ・・このまま出し惜しみをして負けるよりはマシだよ。なんせ君のあの技は・・ドラゴンタイプの技で最も危険な代物だけど・・。使うしかないでしょ、逆鱗を」

逆鱗・・それはドラゴンタイプ最強の物理攻撃。そしてジュンのボーマンダの使う逆鱗は通常のそれより遥かに強力である。

しかし逆鱗発動中は敵味方構わず攻撃してしまい、しかもしばらくたつと混乱状態になるためデメリットもまた激しいのである。

「ボーマンダ、バーサーカーモードに移行。逆鱗発動!!」

ジュンがそう言った瞬間、ボーマンダの目から理性が消え、ただ目の前に存在するもの全てを蹴散らす、凶暴な光が宿った。

まさにバーサーカーである。

コウのフーディィンがギャラドス達を追い詰めていた。

そこに舞い降りるボーマンダ。

その姿を見て、シンが舌打ちをする。

「ったく・・・兄ちゃん、俺も手を貸そうか？」

「心配ない。シン。むしろターゲットがあちらからやってきてくれたんだ。探す手間が省ける」

「ああ・・そうだな」

「フーディン、気合玉」

フーディンが手のひらからエネルギー弾を作り、メタグロス達に攻撃する。

メタグロス達は回避しようとするが・・。

どうしたことだろう?わざわざ気合玉に向かってきた。

そして。

『ぐ・・馬鹿な避けたはずだ』

気合玉が直撃したギャラドスが呻く。

『舐めんな!シャドークロー!』

ボーマンダが爪に黒いオーラを纏って、メタグロスを攻撃した。

仲間のメタグロスを、である。

『く・・この技はシャドークローですか・・何をやってるんです、馬鹿!』

『そんな・・フーディンに当てたはず・・何故だっ！？』

混乱するメタグロス達。

それを見たコウは内心笑みを浮かべる。

そう、メタグロス達の不可解な行動の原因はフーディンにあった。

このフーディンには“ファントムエフェクト”という技を使えるのだ。

ファントムエフェクト・・・それはサイコキネシスで光の屈折率を自在に操る力。

通常、物体を目で認識するということは物体に反射された光を目で捉え、脳がその映像を処理するということである。

ボーマンダがメタグロスを見れるのも、メタグロスに反射された光を目で認識するから。

・・・ということは反射された光を一度別の場所で屈折させてから目で認識した場合、その物体は、最後に屈折した場所にあるように見えるのである。

これは茶碗に水を張り、コインを底に置いた場合を想像すると分かりやすい。

コインは実際にあるはずの無い場所に浮いて見えるのである。

フーディンはこれを利用し、メタグロスから実際に反射された光を、別の場所に屈折させ、自身が反射した光をメタグロスが実際にいる場所に屈折させてからボーマンダの目に光を届けているのである。

結果、ボーマンダの目にはメタグロスがいる場所にはフーディンがいるように見えるのである。

「さあ・・・フーディン、気合玉を放て！ギャラドスをしとめるぞ」

フーディンが再度エネルギー弾を放つ。

ギャラドスが避けようとするが・・。光の屈折操作により、ギャラドスの目には正面から飛んできている気合玉が見えず、横から飛んできているように見えてしまう。

そんな状態で攻撃を避けられるはずも無く、ギャラドスに二発目の気合玉が命中した。

『く・・・』

地面に伏せるギャラドス。コウの石化ビームがギャラドスを襲う。

「ふ・・僕のフーディンに勝てるハズが無い。一気にかたをつけるぞ、フーディン」

『私もそのつもりだ』

「ファントムエフェクト、レベルマックス！」

刹那、フーディンの体が消えていく。

真空を１．０とすると、空気　は　１．００３、水　は１．３３３。固形物では炭素　は２．０、鉄　は２．３６、ダイヤモンドは２．４１７……と屈折率は自然界で決まっている。

光は異なる媒質を通過することで、屈折する。

屈折するからこそ物体を見ることが出来る。

つまり空気と同じ屈折率に自身の屈折率を変化できれば、目には見えなくなるのだ。

パラフィン油（屈折率１．４８）にガラス（屈折率１．４３）を入れると中のガラスがほぼ見えなくなるのと同じだ。

完全に消えたフーディンを見て、コウがニヤリと笑う。

「さて・・ファントムエフェクトの餌食になってもらうよ」

静かにそう言った。

コウのファントムエフェクトが猛威を振るっている丁度その頃。

アキラは一人で戦っていた。

ハルはアキラの戦いを静かに傍観している。いや、そうするしかなかったのだ。

エースポケモンが敗れた時点で、アキラともに戦うことは彼を足を引っ張る・・・そう考えてのことだった。

「・・エアームドはラスターカノン！フライゴンは大文字！」

銀色の球体と燃えさかる炎はカメックス達を襲う。

『竜の波動！』

『ブレイブバード』

ムクホークとカイリューが上空から攻撃を仕掛ける。

お互いの技は相殺された。

「このままやったら・・・進展なしやな。フライゴン、エアームド一気に決めるで！流星群とゴッドバード！」

『分かったよ・・輝け、星たちの大群よ！流星群！』

『さっさとケリをつけてやるわ・・・・ゴッドバード！』

フライゴンが大量のエネルギー弾を放ち、その横ではエアームドが金色のオーラに身を包み、突撃してくる。

ヌケニンがカメックス達を庇うように前に出る。

「今や、フライゴン、大文字を流星群と絡ませて攻撃や！」

大量のエネルギー弾は燃え盛る火の玉となって、ヌケニンを襲い、ゴッドバードはチャーレムを直撃する。

『無念・・・』

消えるような声で、ヌケニンが地に倒れる。

そして・・・

『く・・・』

『どうだい？ワタシのゴッドバード・・・効くだろ？もうアンタはお終いさ』

エアームドがチャーレムの肩越しに言う。

『なるほど・・しかしこちらの技の威力も上がるというもの！！』

「まずい。エアームド、早くチャーレムから離れ・・・・」

『起死回生！』

チャーレムの拳がエアームドに直撃する。

自分がピンチであればあるほど威力が上がる起死回生・・・チャーレムはワザと攻撃を避けずに受けたのだ。

エアームドが倒れるのを見て、チャーレムの力尽きるように倒れる。

ハルが放った石化ビームはヌケニンとチャーレムを石化する。

「・・・・フライゴン、戻るんや」

アキラがフライゴンをボールに戻す。流星群の特攻がかなり下がるデメリットを考慮してのことだろう。

「やっぱり自分ら強いわ・・・久しぶりやで、ここまでの実力の奴と戦うのは。でも、こっちの任務なんや・・・本気で生かせてもらとするわ。出番や、ルギア！！」

アキラがボールを投げる。

お互いに戦力を削りあうこの戦いもいよいよ中盤。

戦いはこの先どうなるのか！？

第四十話　コウの実力～ファントムエフェクトの脅威～（後書き）

ジュン「ねえ作者。僕のボーマンダのバーサーカーモードがファントムエフェクトの影に隠れてるような」

作者「気にするな」

ジュン「でも・・・」

作者「光の屈折率を操る力をプッシュしたかったんだよ」

ジュン「どうやって攻略するのさ？」

作者「分からん」

ジュン「汗」

第四十二話　ノヴァフェニックス（前書き）

ジュン「いよいよ・・僕たちの任務にも決着が」

そして・・・タイトルの理由も分かります

第四十二話　ノヴァフェニックス

後ずさるケントとマニューラ。

追い詰める僕たちハンター。ジュン達を追撃していた他のケントたちの仲間は全員捕まえた。

この状況は一体どんな風にして生まれたのか。

時間は数十分前にさかのぼる

コウとシンは内心面白くなかった。

ボーマンダが怪しい風を使ってきたからだ。

「兄ちゃん・・・どうするんだ？」

「大丈夫だ。フーディンがどこにいるか、なんて彼らにはわかるわけがない。その証拠にほら、攻撃範囲の広い怪しい風でそのあたりに満遍なく攻撃してるだけだろ」

「そっか・・・じゃあ一気に押し切れるな」

「ああ・・フーディン、気合玉を当ててやれ。このバトル・・僕はもう飽きた。終わらせよう」

『舐めた発言してくれるじゃねえか・・ハンターさんよぉ』

ボーマンダが吼える。シンがふと見ると、驚いたことにボーマンダは目を瞑っている。

『ファントムエフェクト・・・確かにすげえ技だ。だが、目に頼って戦うから幻影なんかに騙されるんだ・・・なら目を使わずに戦えばいい』

『なるほど・・その手がありましたが・・・馬鹿と鋏は使いようですね』

『誰が馬鹿だ！・・・だがメタグロス、今回のオレの案はいけるだろ？』

「なにを考えてるのかしらないけど・・・・フーディン、気合玉連発！」

フーディンがエネルギー弾を連射する。

しかし、メタグロスとボーマンダは目を瞑って、それを避けた。

目に頼るのではなく、体全体で感じ、戦う。

伝説のトレーナー、シュウヘイとの長い付き合い。これこそが、視覚に頼らず戦うという離れ技を可能にしているのだ。

「目を使わずに、僕のフーディンに勝てると思うな・・・・フーディン、ファントムエフェクト解除だ。サイコキネシスを攻撃用に切り替えろ」

そう・・ファントムエフェクトを使用している間、サイコキネシスは使えないのだ。

『今だ・・怪しい風！』

『バレットパンチです』

フーディンがファントムエフェクトを解除した一瞬を狙って、ボーマンダたちが攻撃を仕掛ける。

目を開けて。

（しまった・・ファントムエフェクト解除の隙を狙ってワザと目を瞑って攻撃を避けたのか）

「フーディン、気合玉で迎撃だ」

『コウ、技が出ない・・・』

『やはり私の計算どおりですね・・・ファントムエフェクト発動中はサイコキネシスが使えないのは予想済み。そしてあれだけ気合玉を連発していれば・・・・技の残量は尽きる！』

ボーマンダの怪しい風がフーディンを吹き飛ばし、バレットパンチが叩き込まれる。

「フーディン、自己再生で・・」

『回復なんてさせるかよ！シャドークロー！』

ボーマンダが爪に黒いエネルギーを纏わせ、急接近。

フーディンにとどめの一発をぶち込む。

「フーディン、戻れ」

コウが倒れたフーディンをボールに戻す。

「兄ちゃん・・・・」

「ああ、どうやら久々に僕たちの本気を見せる時が来たようだ」

『本気・・じゃあいままでのは一体・・・』

ボーマンダがうろたえる。

「腕は訛ってねえよな、兄ちゃん」

「弟・・お前こそ、だ。まあいい、今度こそ決めるぞ」

「ああ」

二人は黒いボディに赤いラインが入ったボール―ハンター・ボールを取り出す。

「行け・・・プラスル」

「出番だぜ、マイナン」

『久々に俺たちの出番かぁ・・・くーッ、興奮するぜ!』

『プラスルったら・・・はしゃぎすぎですよ』

出てきたのは予想を反して、可愛いポケモン。

プラスルとマイナンだった。

『こいつらが・・・オレたちの相手か』

拍子抜けしたような声を出すボーマンダ。

しかし、メタグロスはプラスルを見て、緊張する。

『ボーマンダ、気をつけなさい・・・彼ら、先ほどのフーディンやドーブルとは比べ物にならないぐらいのレベルです。これは直感ですが』

『へえ、お前勘がいいんだな』

プラスルが腕を組んで、ニヤリと笑う。

『しかし彼らと同じレベルとして扱われるのは心外ですわ』

マイナンが乾いた笑い声を上げる。

その一見ほのぼのとするような光景の中に、メタグロスは鳥肌が立った。

「プラスル、手助け」

プラスルがマイナンと手をつなぐ。

『気をつけなさい！ボーマンダ、来ますよ―』

「マイナン、雷！」

刹那、辺りに一瞬で衝撃波が生じる。

ボーマンダとメタグロスはなんとか雷を避けることに成功したが、雷が直撃した場所には大きな穴が開いており、周りの木がなぎ倒されていた。

『オイオイ・・・マジかよ』

『だから言ったでしょ・・・一緒にされては困りますの』

『俺の手助けで、マイナンの技がパワーアップ・・・特性プラスとマイナンのマイナスでさらに強化されたマイナンの技は強烈だぜ・・

・』

『私たちはポケモンハンターＮＯ．２の真のエース、マイナンと―』

『プラスル兄弟だぜ』

『・・・っボーマンダ、ここは一旦退きますよ！彼らと私たちではレベルが違いすぎます！』

メタグロスがサイコキネシスでプラスルたちを牽制しながら、ボーマンダと共に逃げようとする。

『馬鹿が・・・逃がすと思ってんのか？』

『あなたたちのような雑魚でも全力でお相手をする・・・・それが私たちのやり方、プラスル！』

『ああ・・・電磁波』

『悪巧み！』

プラスルが放った、電磁波はメタグロスのサイコキネシスを突き破る。

『馬鹿な・・・く』

電磁波の影響で体が麻痺してしまったメタグロス。

『メタグロス！』

ボーマンダの悲痛な叫びと共にマイナンの体にエネルギーがたまる。

『とどめですわ・・・雷！』

プラスルによる手助け、特性、そして悪巧みによるパワーアップ・・・これらが融合した雷に耐えられるはずも無く、メタグロスが地に伏せる。

しかも途中からコウとシンは指示を出していなかった。

出す必要もないぐらい実力差がハッキリしている・・そう暗示していた。

「さて・・残るはボーマンダのみ」

『くそ・・ここまでか』

その時である。ボーマンダの体がふわりと浮いたのは。

『ボーマンダ・・あなただけでも・・』

『メタグロス、お前・・・』

メタグロスがサイコキネシスでボーマンダを宙に浮かせ、一気に遠くへ投げる。

メタグロスは残る全ての力を振り絞り、ボーマンダをコウ達から逃がそうとしたのだ。

「逃がすな！追うんだ・・・どうせあのボーマンダはボロボロだ」

「合点承知だ、兄ちゃん」

シンとコウはメタグロスを石化したあと、ボーマンダを追撃するために森へ向かった。

そしてその頃・・。

アキラとハルはカメックス達と対峙していた。

すると突然、カメックスがハイドロポンプで攻撃してきたのだ。

「ハイドロポンプや」

ルギアも同じくハイドロポンプで応戦する。

ぶつかり会う二つの技。

そしてその隙に、ムクホークとカイリューが森へ逃げた。

「ルギア、追いかけるん・・・」

アキラがそう言い切らないうちにカメックスのハイドロポンプが足元を襲う。

宣戦布告・・・まさにそれだった。

「ＮＯ．１・・私のアリアドスを行かせるわ」

突然ハルがアキラの肩越しに小さな声で囁いた。

「・・・トレーナーの指示なしで、あのカイリューとムクホークを倒せるんかいな?それにアリアドスはかなりのダメージを受けてるはずや」

「倒す必要はないわ・・・ただダメージを与え、足どめ出来ればいい・・・そうすれば」

「カメックスを倒した後、追撃できる・・・と、了解や」

「決まりね」

ハルは背中の後ろに手を回し、カメックスに見つからないようにアリアドスを出す。

「アリアドス・・今のは聞いてたわね?頼むわ」

アリアドスはこっくりと頷くと、カメックスに見つからずに森に入っていった。

そして・・。

『う・・カメックスさん・・』

涙ぐむムクホークをそっと見守るカイリュー。

『大丈夫・・・ケントたちと合流して絶対取り返すんだ・・・ボク達の仲間を』

そのときだった。

『な・・何っこれ』

『一体これは・・』

二匹の体に絡みつく糸。

ふと周りを見るとそこには巨大な蜘蛛の巣が。

カイリューたちは糸に絡め取られて身動きが取れない。

『どうだ・・俺のトラップ・ウェブは』

木の上から糸を使ってカイリュー達に近づいたのは・・・アリアドス。

『君はボク達が倒したはず・・なぜここに』

『残念だったな。俺の体力はまだ残ってたんだよ、ボールの中で休んで回復するほどにな』

カイリューたちがもがこうとするが、アリアドスがサイコキネシスを糸に流す。

『く・・・ぐあああ』

『よくもっ・・・』

『存分に糸のなかで暴れてくれて構わないぜ・・俺の紡ぐ糸はもが

けば、もがくほどきつく締めつけていく・・・そらっおまけだ！』

アリアドスが紫色の液体を糸にたらす。

どくどくである。

どくどくの液体は糸を伝って巣全体に広がっていった。

『・・・意識が・・持たない』

ムクホークとカイリューはサイコキネシスとどくどくのダメージで意識が朦朧としている。

しかし

『カイリュー・・さん・・あなただけでも・・・ブレイブバード！』

ムクホークは最後の力を振り絞って、糸を体に纏ったままアリアドスに突進する。

『まだそんな体力がのこってたか・・・サイコキネシス！』

アリアドスがサイコキネシスで応戦する。そしてその隙にカイリューは糸から抜け出した。

『ムクホーク、ボクも応戦するよ』

『駄目です！！カイリューさんはどくどくに汚染されてます！い・・今のうちに・・逃げて・・・』

『ムクホーク・・すまない』

カイリューは森の中へ入っていった。ケントたちとの約束の場所へ。

そしてカメックスは・・・

『ハァハァ・・こりゃキツイかもな』

ルギアは無傷なのに対して、カメックスはふらついていた。

「もうそろそろ終わりにしようや・・ルギア、エアロブラスト」

『守る！』

無数の大気の刃を防ぎきるカメックス。

「なるほどな・・さすが伝説のトレーナーが育てたポケモン。技のキレ、発生スピード、威力、そして自身の体力・・それをとっても一級品や・・そやけど、俺も元フロンティアブレーンとして、ポケモンハンターの頂点ＮＯ．１として負けるわけにはいかんのや・・・悪く思わんといてな」

刹那、ルギアの体が光始める。

『何なんだよ・・このプレッシャーは・・しかも、こんな時に』

ワクワクする、その心がどこかにあることにカメックス自身驚いていた。

そう・・かつてシュウヘイと過ごした日々、強い奴と対峙した時感

じるあの感覚。

あのハンターはなんと言った?フロンティアブレーン・・・。ポケモンリーグのチャンピオンの上を行く、トレーナーの夢。

「俺の本気を見せたるわ・・・」

光り輝くルギアの体・・・。

『あれはゴッドバード・・いや、ギガインパクトか・・違う、どっちでもねえ・・見たことのない技』

「どうやら気づいたようやな・・俺のルギアの大技はギガインパクトとゴッドバードを融合させた技。発動中はまるで光り輝く不死鳥《フェニックス》のようになり、いかなる攻撃も金色のオーラが防ぐ。そこからつけられた技のあだ名は・・・ノヴァフェニックス・・一撃で痛みさえ感じさせず相手を倒す。相手は意識が飛ぶ前に神々しさに涙を流すこともある・・・」

『見せてやろう。俺の全力を』

ルギアが完全にノヴァフェニックスを発動させる。

その姿はまさに新星の輝きを讃える不死鳥。

ああ・・そうか。

カメックスはこの戦いがハンターとの戦いであることを心の底から残念に思った。

そして・・・不死鳥の姿のまま、カメックスに突撃した。

カメックスは意識を失う前、美しい光景を見た。

金色の麦畑に、シュウヘイと仲間が立っている光景を。

痛みも無く、苦しみも無い。

せめてもの救いだったのだ。

第四十二話　ノヴァフェニックス（後書き）

ジュン「アキラさん・・すごい。ノヴァフェニックスって・・」

それにコウ&シンのプラスルとマイナンやばいね～

あ、ここでジュン達の切り札&大技の名前リストを作ってみました。

アキラ：ルギア（ノヴァフェニックス）

コウ：　フーディン（ファントムエフェクト）

シン：ドーブル&フワライド（シードクラスター焼夷弾他）

ハル：アリアドス（トラップ・ウェブ）

ジュン：ボーマンダ（バーサーカーモード）

尚、コウ&シンについては表向きの切り札です

第四十二話　任務完了、そして動き出す運命（前書き）

作者「今回のラストはかなり壮絶です！」

ジュン「確かプラネット先生の要望だよね」

作者「ま、読んでみれば分かるよ・・・」

ジュン「では、どうぞ」

第四十二話　任務完了、そして動き出す運命

キャプチャスタイラー・・・確かポケモンと心を通わせることで、一時だけ自身の手持ちのように野生ポケモンを操れる装置のはず。

それをポケモンレンジャーケントが手に入れてしまったか。

それにしても、先ほどのルカリオとエルレイドの猛攻は不意をつかれた。

まさか、波動弾で砂煙を発生させて、その隙に僕の手のアタッシュケースと皆の石化ビーム装置を破壊するとは。

それに・・・石化解除薬まで奪って、仲間の石化を解いてしまうなんて。

まあ、全員の石化を解除するには薬の量が足りなかったらしいかったけど。

でも・・そんなことはどうでもいい。

何故なら、急に出てきたディストローブの幹部、ガゼラとかいう男がナイフを島の住民に突きつけて、

ケントとターゲット達の動きを封じてくれたおかげで、僕は無事だったエルレイドとルカリオそして、石化を一旦解除されたポケモン達を再び固まらせることが出来たのだから。

メデューサを破壊されたのは痛手だったけど、鞄の中にしまってい

た前の石化装置に彼らは気づかなかったのが幸いした。
ま、その石化装置も応援に来たレンジャーのポケモンの攻撃で破壊されちゃったけど。

「ジュン・・どうするんだ?マニューラを取り逃がしちゃったぜ?」

「どうしようもないよ、シン。石化装置は全部破壊されちゃったし、レンジャー応援部隊も到着してしまった。・・・・ということはレンジャーユニオンに僕たちハンターの居場所がばれているということだ。もうここは引き上げるのが妥当だと思うよ」

「ジュン君に同意ね。あのマニューラは諦めましょう。どうかしら、ガゼラさん」

ハルが髪をかきあげながらガゼラに聞く

「別に構わないぜ。アンタらはいい働きをしくてれた。とっととずらかってくれ」

「よっしゃ・・・フライゴン、出てくるんや」

アキラはボールからフライゴンを出す。

フライゴンにハルが乗り、ルギアの背中にアキラが飛び乗る。

そして、シンとコウはそれぞれフワライドとネイティオに乗る。

ジュンも地に降りてきたボーマンダの背中に乗る。

「逃がさないべさ！キャプチャオン！バトナージ！」

アビルが近くにいたウィンディをキャプチャする。

「おっと！島民がどうなっても―」

「人質でもとってるつもりか？」

デッドの声にガゼルが振り向くと、人質は全員解放されていた。

「チッ・・まあいい。俺たちも引き上げるぞ！」

ガゼルは周りのディストローブのメンバーとともに森へと消えていった。

「リーダー！ディストローブの奴らを逃がしていいのかよ！！」

「デッド・・・いま俺たちの最優先課題は、ケントの仲間の救出べさ」

「リーダーの言うとおり・・・・・」

「・・・・・分かったよ」

憮然と応えるデッド。

「すまない、皆」

ケントは涙を拭って、うな垂れる。

「謝ることなんてないわ、ケントは仲間を守ろうとした・・・・それで十分よ」

「そうべさ。絶対にハンターの魔の手から救出してみせるべさよ」

「ポケモンレンジャーとしての誇りを賭けた戦いでもあるしな」

デッドがキャプチャスタイラーさする。

「ありがとう・・・俺、なんと言っていいか」

「謝礼は必要ない。仲間を助ける・・・当たり前」

アリサの言葉に皆が頷く。

「さ・・・行くべさよ」

アビルがそう行って、ジュン達を追おうとしたその瞬間。

ドン！と響き渡る一発の銃声。

周囲の空気が一瞬にして凍りつく。

キャプチャしたウィンディが後ろ足を鮮血に染めて、その場に倒れた。

「一体何が・・・」

ケント達が振り向くと、一人の少年が銃を片手に無表情に立っていた。

年はケントより少し上ぐらいだ。

「何をするべさ！！」

「・・・・ハンター達を追跡するのは止めろ」

「一体何言ってるのよ！アンタ！」

サティアが倒れたウィンディに駆け寄り、顔だけを少年に向けながら叫ぶ。

「お前・・・アルトピアタウンの近くで石化された奴だな」

少年の言葉に、サティアが驚く。

何故、自分が石化されたことをしっているのか？

それは同時にケントも感じていた。

あの場にいたのは、ケント、サティアとハンター達そして・・・・・。

「もしかして、アンタ、ケントを狙撃した奴！？」

「正解と言っておこう」

「お前！！！ハンターの仲間べさ！！」

怒りに満ちた目で、少年を睨み今にも飛び掛りそうなアビル。

「俺はハンター側の人間であるが、ハンターではない。この島でずっと戦いを観察していただけだ。・・・お前達にもう一度だけ忠告してやる。ハンターを追跡するのは止めろ。じゃないと・・誰かが死ぬことになるぞ？」

「お前の狙いはなんだ！俺の命じゃなかったのか！」

「お前らの活動のおかけで、当初の目的が変化した、とだけ言っておく。さて、どうする？」

少年は銃の照準をケントの頭に当てながら、言う

「ここで死ぬか？」

「アンタ、最低よ！」

サティアの罵倒も無視し、少年はケント達を見つめる。

一時の静寂。ただ時間だけが流れていた。

「いい判断だ」

少年は腕時計を見ると、丸いボールような物を投げつける。

周囲に広がる煙幕。

視界が戻ったときには少年はもういなかった。

「ハンター達を追うぞ」

「でもケント・・・今からじゃ間に合わないわ」

そう言ったサティア自身も気づいていた。ケントは誰にも止められないと。

一方、イプシロンは停泊させていた小型のモーターボートに飛び乗ると、エンジンを始動させた。

爆音と共に、ボートは島からみるみるうちに遠ざかっていく。

「もうそろそろかな」

そう呟くと、イプシロンは小型の装置を取り出した。

そしてボタンを押すと・・。

ズズーン!!

辺りに響き渡る、爆発音。

レンジャー達が乗ってきた船も民間の漁船も果ては小さな手漕ぎのボートに至る全ての船が炎上し、海に沈んでいった。

「これで奴らは迎えの船が来るまであの島から出られない。あの島には人を乗せることが出来る飛行ポケモンもいない。悪く思うな、ポケモンレンジャー・・・これは任務なんだ」

そして、その頃。ジュン達はガゼルと共にいた。

「ご苦労さん、ハンターの方々。金は各口座に送金しておいた」

ガゼルが満足そうに言う。

「このポケモン達は俺たちの好きにしてもええんやな」

「ああ」

ガゼルたちはそう言う去っていった。

「やっと終わった～」

ガゼル達が去った直後、シンが地面にへたり込む。

緊張の糸が切れたのだろう。各自が安堵の息を漏らす。

「任務も終わったことやし、何か食べにいこうや。ここいから少し離れた町に美味しいレストランがあるんや・・・・そこなら見つかれへんやろ」

「賛成」

茂みでハンターの制服から私服へ着替えると、ジュン達は転送装置で本部にケントのポケモン達の入ったボールを送ると、町へ向かった。

皆が沸き立つ中、ジュンはふと島の方を見る。

「任務完了」

自然と口から漏れた一言だった。

そしてジュン達の任務が成功した丁度その頃。

イプシロンはＰ・Ｈ・Ｃの支部研究所にいた。

山の中の研究所である。

「任務ご苦労様」

イプシロンが窓から外を眺めていると後ろから声がした。

白衣に白い肌、美しい顔立ちの少女・・・エリカである。

「ハンター達が捕獲したポケモンが本部から送られてきたわ」

「・・・そうか」

イプシロンは振り返らずに無愛想に応える。

「プロジェクト・キメラもプロトタイプの開発を経て、いよいよ完全なキメラの開発をする時に送られてきたのよ・・・・ナイスタイミングだわ」

「完全なキメラねぇ。精神崩壊現象は誘発しないのか？」

「その問題は解決済みよ」

「・・・キメラ化するのか？奴らを」

「全員を短時間でキメラ化するのは無理でしょうけど・・・・一部ならするつもりよ」

エリカは捉えられたポケモン達の入ったボールを少し口づけをすると、アタッシュケースに入れて部屋から出て行った。

「・・・悪趣味なやつめ」

エリカがいなくなった後、イプシロンはボソッと呟く。

一方研究室では・・・。

「さて・・どの子からキメラ化しようかしら。楽しみだわ・・」

エリカの狂気じみた目がアタッシュケースを眺める。

運命が動き出した瞬間でもあった―

第四十二話　任務完了、そして動き出す運命（後書き）

イプシロン「コラボ相手のポケモンをキメラ化していいのか？」

作者「大丈夫。プラネット先生が出した案だし」

イプシロン「そうか（汗）」

第四十三話　動機（前書き）

作者「久々の更新です」

第四十三話　動機

「お～結構いろんなモンが売ってるやん♪」

アキラははしゃぎながら、店を見て回る。

「アキラさん、何か買いたいものでもあるんですか？」

アキラの肩の上には、ジュンがちょこんと乗っている。

彼らは今、任務が終わったついでとしてこの地方のお土産屋さんを見て回っているのだ。

「うん・・・そうやなぁ。あいつへのプレゼントでも買いたいわぁ」

「あいつ・・もしかして」

ジュンは少し声を落とす。ポケモンハンターと言ってもジュンは１６歳。恋愛などの話にも一応興味を持っているのだ。

「彼女ですか？」

「まあ・・・あいつは俺のことそう思ってないやろけど」

「へえ・・・どんな子ですか？」

「う～ん・・・そうやなぁ」

アキラが答えに詰まる。しかしジュンはアキラの答えを聞くことは

出来なかった。

突然後ろから黄色い声が聞こえたからだ。

「きゃ～可愛い～」

アキラとジュンが驚いて振り向くと、可愛い女の子達が数人騒いでいた。

「それあなたのポケモン？」

女の子の一人がアキラに聞いた。

「え・・ああ、そうやけど」

「目がクリクリしてる～っ！！抱っこしていい？」

抱っこしていい？と聞いてはいるが既に髪が黄色い女の子がジュンの体に触っていた。

「もちろん抱っこしていいで」

アキラはニッコリするとあっさり承諾した。

（ちょっとアキラさん！？）

ジュンは次の瞬間、ムギュと抱かれる。

ジュンが恥ずかしさで赤くなっている中、ジュンを抱きながら撫でている少女がアキラに尋ねた。

「あなた珍しいポケモン持ってるわね？なんて名前？種族は？」

「こいつはな幻のポケモンでアグノムのジュンっちゅーんや。どうや、可愛いやろ？特に曲線を描いた丸いお腹なんかめっちゃキュートやん」

「分かる分かる！」

しばらくアキラは数人の少女達と楽しく喋っていたが（ジュンはその間赤くなりながら撫でたり抱かれたりしていた）

「そうや、自分らここの娘やろ？じゃ、クールな感じのアクセサリー売ってる店知ってたら教えて欲しいんやけど？」

「知ってる！ブリザードって店にはいいのがいっぱい置いてあるよ！」

「ブリザード・・なんや寒そうな名前やなぁ」

「クールなアクセサリーが中心のお店なの！！結構な人気よ。この道を真っ直ぐ行くと、大きな看板があるから分かるはず」

少女達の言葉にアキラは気さくな笑みを浮かべる。

「ありがとさん」

「ねえお兄さん・・・もしかして彼女へのプレゼント？」

処女の一人の問いにアキラは返答に迷っていたが、しばらくすると

言った。

「う～ん・・・彼女やなけど。俺が狙ってる感じ？」

「お兄さんなら大丈夫！ハンサムだし、軽い喋り方もソフトな印象でいい感じだし！」

「そうよね。なんか爽やかなスポーツ青年って感じ！」

少女達がうれしそうにケタケタ笑う。

「じゃあね！お兄さん、頑張ってね！」

「いろいろありがとなぁ！」

しばらく喋ってから少女達と別れたジュン達はブリザードという店に入る。

中には水晶のアクセサリーや青い宝石の指輪などが飾られており、なるほどクールである。

しばらく店の中を見て回っていたアキラにジュンが小さな声でささやく。

「アキラさん、あれなんてどうですか？」

ジュンが指差した先には、水晶で出来たモンスターボールのトップがついたネックレスが。

「おお自分ええ趣味しとるやん♪」

アキラはしばらくそのネックレスを手にとって眺めていたが、満足したようにそれを買った。

「アキラさん」

ジュンが買ったネックレスのが入っている包装された箱を持ち、ニコニコしながら歩いているアキラに声をかける。

ジュンのほんの思いつきからでた質問であった。

「なんや?」

「・・・・その誰かさんへのプレゼント、もしかしてアキラさんがフロンティアブレーンを辞めてハンターになったのと関係があるのですか?」

それを聞いたアキラの顔から笑顔が拭い去られる。

ジュンはまずいことを聞いたかなと後悔し始めた。

しばらく黙っていたがアキラはボソリと応える。

「そうや。俺はあいつのためにハンターになった。フロンティアブレーンの座を捨てて、犯罪者になってまでな。せやけど後悔はしとらん。あいつが望むように俺は動き、働く。あいつが望むなら地獄の底にまで行ったるわ」

先ほどの軽いノリとは打って変わって、真剣な表情のアキラにジュンは軽く気圧される。

「・・・・なぜそこまで?」

一体誰の為に?この問いはこの話の本質であったが、さすがに聞くのが憚られたジュンは変わりに聞く。

「俺があいつに惚れたからや」

アキラは逆光の中、薄っすらと微笑む。

ジュンはなぜかその笑みに一抹の悲しさを感じたのであった。

第四十三話　動機（後書き）

ジュン「アキラさんの謎が明らかになるばかりかますます深まった（汗）」

作者「大丈夫・・・必ず、判明する日が来るから」

ジュン「ホント？」

第四十四話　キメラ化

森の中、ザクザクと音を立てながら一人の青年が歩いていた。

色黒で背の高い青年・・・・アキラだ。

「えっと第三研究所は・・・と。あれ、ここらへんやと思ったんやけど」

どうやら迷っていてるらしく、辺りをキョロキョロと見回す。

彼はアグノム（ジュン）と分かれてから、とある所を目指しているのだ。

「まったくこんな暑苦しい時期に山なんて歩きとうないわ」

下着が汗でグッショリと濡れており、気持ち悪いことこの上ない。

「おっと・・・あったやん♪」

アキラが森を抜けると、そこには白い研究所があった。

「早く冷房の効いた研究所に入りたいわ」

そう呟くと、研究所の扉を開ける。

その瞬間・・・・。

アキラの目の前には・・・銃口が。

「へ・・・ちょ・・・」

銃をアキラに向けているのは・・・一人の少年だった。

「誰だ。レンジャーの仲間か？」

「いや・・・俺は」

「早くこちらの質問に答えろ」

（ヤバイ・・・足がすくむ。ちゅーか・・・チビリそう）

「お・・・俺はポケモンハンターＮＯ．１や！」

何とか声を上げることが出来たアキラ。

「・・・すまなかった。」

アキラの返答を聞いた瞬間、少年が銃をおろす。

ここで補足説明しておくと、この少年、読者はお分かりかと思うがイプシロンである。

そしてＰ・Ｈ・Ｃの地位の順列としては

ボス＞幹部≧ポケモンハンターＮＯ．１＞上級ポケモンハンター（ＮＯ．２～ＮＯ．４）及びＣＩＣエージェント＞中級ポケモンハンター（ＮＯ．５～ＮＯ．１０）＞下級ポケモンハンター（ＮＯ．１１以降）

となっている。

「ええねんて・・・間違いは誰にでもあるんやから。と、いうか自分は？」

「ＣＩＣから派遣されたエージェント。コードネーム、イプシロン」

「なるほどな・・・ところで、何かあったんかいな？」

アキラの問いに、イプシロンが答える。

「ポケモンレンジャー達が我々から奪われたポケモン達を奪還しようとここに向かってきている」

「奪還・・・！」

（そりゃ仲間奪われたら取り返しにくるわな。だから俺嫌やねん。ポケモン強奪任務は）

と、そこでアキラがふと思い出したように尋ねる

「なあ、ここの研究所になんで奴らが？」

「俺が彼らにここに彼らのポケモンが転送された、という情報を流しておいた。彼らをこの研究所におびき寄せて、マニューラとケントが所持している未確認ポケモンＸの捕獲、及びポケモンレンジャー（ポケモンレンジャー）への攻撃がこちら側の作戦だ」

「来たわね、アキラ」

後ろから声がする。白衣を纏い、氷のような微笑を浮かべている少女・・・エリカである。

手にはアタッシュケースを持っている。

「アキラ、丁度いいところに帰ってきたわね。ポケモンレンジャー達の撃退を手伝いなさい」

「・・・・・あんまいい気分ちゃうな、その任務」

彼らのポケモンを奪った上に、キメラ化しておいてさらにここに来たケントから最後に残っている仲間まで奪い取る。まさに非道、残酷にして効率的な作戦だ。

（俺は・・・・何をやっとるんやろ。もう・・・・こんなこと・・・・止めたい。でもあいつのためやもんな。胸くそ悪い任務やけど・・・・やったるわ）

「ああ、それから」

エリカはアタッシュケースの留め金をパチンと開ける。

黒いボールには赤いラインあり、いかにも悪役感が漂っている（汗）

「これは・・・・？」

「キメラ化したリザードンが入っているわ。出てきなさい、C（キメラテック）・リザードン」

ボールから出てきたのはリザードンだった。

しかし通常のリザードンとは明らかに違うオーラが出ている。

「俺たちが捕獲したときとはだいぶ・・・様変わりしよったな」

「当然よ。このリザードンにはエスパータイプのポケモンの遺伝子が組み込んであるの。それに自我と感情を奪って、私たちの指令しか聞かないように薬品投与してあるから感情という余計なものが無い分戦闘能力が上昇しているわ」

「悪趣味やな・・・でも何故エスパータイプを追加したんや?弱点が多くなるんやないのか?」

アキラの、ポケモンバトルの達人としての意見にエリカはサラッと応える。

「見れば分かるわ」

エリカはそう言うと、研究所内にあるバトルフィールドにアキラを連れて行く。

「イプシロン、お願い」

エリカの言葉にイプシロンは頷き、フィールド内にある無数の機械の制御装置を操作する。

すると、バトルフィールドの底から、バトルマシーンが数台せり上がってきた。

「見てなさい。リザードン、火炎放射」

リザードンが虚ろな目で、口から火炎を放つ。
機械は素早く避けるが・・・・。
なんと火炎放射は進路を変更し、バトルマシーンを追撃する。
そして逃げ切れなくなったマシーンは炎に飲まれ破壊されてしまった。

「一体なんやの・・・？」

「サイコフィールド全面展開。このリザードンは外に出ている間常にサイコフィールドを展開し、そのフィールド内の全ての特殊攻撃を偏向、操作することが出来るのよ。サイコフィールドの半径は最小１０メートル。最大で２０メートルに達するわ。まあこれは私がこれから作っていくキメラポケモンの全てが持つことになる能力でしょうけど」

（そんな能力があったらポケモンバトルが成り立たへんやん！特殊攻撃を偏向、操作できるやと・・・エリカの奴なんて悪質な能力をポケモンに持たせ取るねん！しかも・・・・）

アキラはリザードンをチラリと見る。

「サイコフィールドはキメラポケモン自身にも影響が出るんちゃうか？」

「そうね。元々エスパータイプを持っているポケモン以外にはかなり負担がかかるわよ。さてと」

エリカはアキラの疑問にあっさりと答え、リザードンに指示を出す。

「リザードン、ソーラービーム」

リザードンが口からソーラービームを放つ。

破壊され燃え盛るバトルマシンの横で出方を伺っている別のマシンにソーラービームが襲い掛かる。

バトルマシンは素早く回避行動を取るが・・・ソーラービームは軌道を変え、マシンに直撃する。

たった４０秒ほどでバトルマシンを破壊しつくしたＣ・リザードンをボールに戻すとアキラに手渡す。

「これを使ってレンジャー達を迎撃するのよ。他のケントのポケモン達もじきにキメラ化が完了するわ」

「・・・・こんなん使わんとも俺はあいつらに勝てる。だからお断りや」

「分かってないわね」

エリカはアキラの頬にそっと撫でる。

そして顔を近づけ、耳打ちした。

「ポケモンレンジャー、ケントにかつての仲間の変わりようを見せ付けてあげるのよ。だってそのほうが・・・」

エリカとアキラの目があう。

「彼らの心をズタズタに出来て面白いじゃない」

エリカの微笑にただアキラは手の中の黒いボールに目を落とすのだった。

第四十五話　新しい仕事～ターゲットは秘蔵のポケモン～

朝。

カーテンが開く音と共にベッドでまどろむ僕の顔を眩しい日光が照らす。

「ジュン起きろ～。朝だぜ～」

ボフッという音と共に布団が剥ぎ取られる。

「う・・ん」

心地よい感覚が消えうせ、眩しい光が差し込み、ジュンは目を開けた。

「さっさと起きろ！朝飯が冷えるだろうが！」

「・・・リーフ・・・まだ6時だよ」

「早起きは三文の得！」

まったく・・・モットーはいいけどね

「分かったよ」

ジュンは眠い目を擦りながらふわりと浮いた。

ジュンは机の上に置いてあるバッグから目薬を取り出し、点す。

こうすると目が覚めるからだ。

「なあ・・・」

リーフが突如ジュンを抱きしめる。

「な・・・なな」

突然の行動に言葉も出ないジュン。

「やっぱアグノムは可愛いな～！こう丸いラインが、癒やし系だぜ♪」

「ちょ・・離してよ！」

もがくがリーフは優しくもガッチリと抱きしめているため逃れられない。

「おお・・・怒って頬がぷっくりしてるのもまたいいなぁ」

「・・・サイコキネシス！」

ジュンを離さないリーフを念力を使いベッドに叩きつける。

「ちぇ、つれない奴。『きゅう～ん』とか言ってくれてもいいのによぉ」

「お断りするよ」

ジュンはさっさと広間に向かう。

広間にはモーニングランチがすでに出来上がっていた。

「今日の目玉メニューはミルタンクの乳から作ったヨーグルトとバターだ。乳製品で体内調整だぜ」

リーフが席について、ヨーグルトを食べ始める。

ジュンもいただきますと言ってトーストにバターを塗る。

「ホームメイドなのに美味しいね、このバター」

「当たり前だぜ。ホームメイドだからこそ、さ。既製品は買う気がしなくてな」

「君みたいなリッチボーイならそうだろうね」

リーフがスプーンをジュンに向ける。

「お前もだろうがよ。お前みたいな優秀なハンターなら相当稼いでんだろ？大体お前の契約金と報奨金がどんだけ高いか・・・」

「僕はお金が欲しいんじゃないよ」

ジュンはトーストの耳にバターをたっぷり塗ってそれを口に放り込む。

「狙った獲物をこの手に収めるあの快感を得たいだけだよ」

「ま、ハンターやってる奴の大半はそうだな」

しばしの静寂。二人とも黙ってモソモソと食べ続ける。

そして

「ジュン、お前に仕事を頼みたい」

「仕事？」

ジュンはサイコキネシスでモモンジュースを注ぎながら顔を上げる。

「そうだ。今回俺が狙ってる獲物（ポケモン）はかなり珍しいんだ」

「・・・話を聞こうか」

リーフはポケットから一枚の写真を取り出しジュンに見せる。

「これは・・・珍しいね！」

写真にはキュウコンが写っていた。

ただのキュウコンではなく、銀色の毛並みを持っている。

それだけではない。右目が赤で左目が青といういわゆるオッドアイである。

色違いに加えオッドアイのポケモン。

ハンター心をくすぐる獲物。

「でもよくそんなポケモンの写真を持ってるね・・・普通この手のポケモンは警戒心が強くて近寄るのはおろか見ることさえ難しいのに・・・」

「こいつは野生じゃねえんだ」

リーフは写真をヒラヒラと振る。

「とある王国の財宝さ」

「どういうこと？」

「こいつはアルカディア王国の秘蔵のポケモンだ」

アルカディア王国って言えば確か・・・ポケモンの一大コレクションがあったような・・。

「これを捕獲して欲しい」

「断るよ」

あっさりしたジュンの返事にリーフが鼻白む。

「なんでだよ。報酬は弾むぜ？」

「アルカディア王国のコレクションに手を出すほど僕は無謀じゃないよ。野生のポケモンを捕獲するのとはワケが違うんだ。王国の警備を潜って、多分あるであろう金庫を破り、キュウコンを捕獲するなんてことは不可能だ。資料も無いのに」

「資料ならあるぜ」

リーフは我が意を得たりとばかりにポケットから数枚の紙を取り出す。

「これは・・・アルカディア王国のコレクションルームへのルートか・・」

一体どうやってこんなものを・・・？

「俺は欲しいものは絶対手に入れる主義だ。ちょいと裏ルート情報でな」

なるほど見取り図があるのか。

なら・・・

「まあそれなら受けてもいいよ。この仕事」

「ホントか！」

僕は基本ポケモン捕獲なら何でも受けることにしてるけど・・・。

王国秘蔵のポケモンを盗む・・・なんてロマン溢れる仕事だろう！

トレーナーからポケモンを奪うのとは違って気が楽だし（僕だって恨まれるのが好きなわけじゃない）

夜、アルカディア王国に忍び込み、硬いガードを抜け、秘蔵のポケ

モンを捕獲する・・・・最高じゃないか！

今からワクワクしてきた。

普通にポケモンを捕獲するのとはワケが違う高揚感。

「よ～しそうと決まれば、早速ヘリの手配をするぜ。王国まで送ってやるよ。結構遠いからな」

「ありがとう。でも、その前にもう一度地図を見返しおくよ。・・・・どうやらコレクションルームの扉は金庫のような構造になってるらしいね。・・・それにコンピュータ仕掛けの防護システムか。ハッキングシステムも持っていくよ」

「・・・・そんなに必要か？」

リーフの言葉にジュンがジュースを飲みながら言う。

「完全犯罪は面倒なものだよ」

ま、だからこそ楽しいんだけどね。

ジュンはもう一度写真を見る。

銀の毛並みを持つオッドアイのキュウコン・・・次の獲物は君だよ。

ジュンは写真をバッグにしまった―

第四十六話　暴かれた真実～師弟の戦いの幕開け～

「これがアルカディア王国・・」

僕が搭乗しているヘリの真下には美しい町並みが広がっていた。

今は夜。町の光がまるで宝石のように輝いている。

「そうだ。商業と伝統の国。かなり古い国だからな、それだけお宝もいっぱいある。戦争が奇跡的に少なかったのもその一つだ」

「・・・アルカディアコレクション。あの王国の秘蔵のポケモンコレクションは世界屈指さ。まあ一般にはあまり知られて無いけど」

「当たり前だ。あそこのポケモンコレクションは門外不出なんだぜ？正直俺もこのコレクションルームの見取り図を手に入れるのにかなり苦労したからな」

「さて・・・もうそろそろ王都かな」

ジュンとリーフの眼下にはまるで中世から時が止まったような城がそびえたっていた。

「あの古色蒼然な外見にだまされるなよ、ジュン。城内は最新鋭の電子制御システムで保護されてるからな」

「分かってるよ、リーフ」

「さて・・・もうそろそろだ。頑張っていけよ」

「了解」

ジュンは鞄を背負いヘリの扉を開けると、空中へ飛び降りた。

遠ざかるヘリを後ろにジュンはそのままフワフワと飛行する。

・・・こういう時ポケモンでと楽だね。パラシュート使わなくてもいいんだもん。

さてこれからは僕の時間だ。

ジュンがアルカディア王国のコレクションの捕獲に望んでいる丁度その頃―

「なあエリカ。俺シャワー浴びてくるわ」

P・H・C本部の共同スペース。

ここではP・H・C公認ハンターやCICから派遣されたエージェントの体を癒やすためにシャワー等が設けられている。

「私にそんなことを宣言しなくてもいいわ。アキラ」

そして今その共同スペースでアキラとエリカが喋っているところだ。

「それもそやな・・じゃ・・お、何するんエリカ？」

「肩にゴミがついているわ」

エリカはアキラの襟元にそっと手を寄せる。

もちろんゴミなどついていない。

エリカはゴミを取るふりをして、アキラの首元のピンバッジを回収したのだ―

それに気づかないアキラはそのままシャワー室に言ってしまった。

「全ハンターの動向を観察するのも幹部の勤めよ」

実はハンターの大部分の制服の襟元にはＰ・Ｈ・Ｃのマークが入っているバッジがつけられている。

そのバッジは実は・・・超小型カメラと盗聴器。

ハンターに裏切り者がいないかどうかを調べるための手段である。

Ｐ・Ｈ・Ｃの幹部はこれを用いてほぼ全ハンターの秘密や動きを把握しているのだ。

エリカは自分の部屋に戻ると、そのバッジをパソコンのアダプターに接続させる。

カタカタとキーボードを打つ音が部屋に響く。

画面に映し出されていたのは・・・。

アキラが部屋で寛ぐシーン。

それはどうでもいい。

しかし問題は・・・。

「ポケモンハンターＮＯ．４がアグノムに・・・？」

エリカは何度もジュンが自分のことを語っているシーンを再生する。

「・・・人間がポケモンに変化するなんて・・」

エリカはそう呟きつつ、もう一つのウィンドウを立ち上げるとＰ・Ｈ・Ｃのハンターリストを呼び出す。

そこにはＰ・Ｈ・Ｃの公認ハンターの素顔とデータがリストアップされているのだ。

エリカが画面をスクロールしていく。

そして。

画面にはジュンの顔の写真と詳細なデータが載っていた。

「１ヶ月前から長期休暇を取っており、依頼は受けているがやり取りは全て電話対応。本部には１ヶ月間姿を見せていない・・・ね」

エリカにとってはハンターがポケモンに変化しようがどうでもいいことである。

しかし今回は別だ。

「もし本当に彼がアグノムに変化していたのなら・・・」

そう研究所でエリカはシャワーズ、グレイシア、アブソル、ボーマンダを引き連れたアグノムと接触しえいるのである。

あの時は野生のポケモンと思ったし、仮にあの日記―キメラ研究の日記が見られていたとしてもポケモンに文字は読めるはずはないから問題は無い、そう判断していた。

「彼の手持ちポケモンリストも研究所で見た仲間たちと一致している。それに・・」

キメライーブイのプロトOも彼らと共に行動している可能性がある。

そして何より、このアグノムに変化したジュンがあの日記を読んだ可能性も・・・いや彼らはあの日記が置いてあった部屋から出てきた。

・・・ということは彼らがキメラの秘密を知ってしまった可能性は高い。

「今知られては私の研究に支障を来たすわ」

何とかしなければ。

エリカはしばらくジュンの人間関係を調べていた。

すると興味深い資料に行き当たった。

「ポケモンコレクターにして闇のバイヤー、通称“リーフ”と友人関係・・・ね」

さらにリーフについて調べると彼がアルカディア王国のコレクションルームについて調べていることが分かった。

「アルカディア王国といえばポケモンの秘蔵コレクションで有名ね。リーフ程のポケモンコレクターなら欲しがるはず・・・でも」

このところリーフはポケモンハンターと契約していない。

普通この手の裏社会に通じている大金持ちのコレクターは珍しいポケモンを手に入れるときハンターを雇うものである。

「リーフは明らかにアルカディア王国のコレクションを狙っている。でも彼はハンターとの契約をこのところしていない。つまり・・・」

リーフは正式な契約をするのではなく、友人に頼んでいるのだ！

だから正式な資料も残らなかった。友達同士の取引だから。それにそういう契約のしかたは口約束であるがゆえに足がつかないメリットもある。信頼関係があるのならそちらのほうが得策だろう。

「アグノムになったポケモンハンター、NO．４ことジュンはアルカディア王国の秘蔵ポケモンを捕獲しにいっている・・・か」

エリカはしばらく椅子に深々と座り目を瞑っていたが、やがてパソコンにあるキーワードを打ち込む。

画面に現れたのはとあるポケモンハンターのサイト。

「依頼だな？」

画面に現れたのは女性。

イヤホンマイク付きのバイザーで目元が隠れているが、美人であることが伺える。

しかしその整った顔立ちを覆い隠すかのような冷徹でドライなオーラを発している。

「そうよ。あなたの腕を信用してこの仕事を頼むのよ」

「要件を話せ」

エリカは薄く微笑む。

「ターゲットはアグノム」

「ほう・・・」

幻のポケモンの名を聞き、少し彼女の表情が変化する。

「こちらのデータによれば現在アルカディア王国周辺に出没しているわ。ただしそのアグノムは特殊な機器を使うから気をつけてね」

「了解した。報酬のデータは後ほどそちらへ送信する。捕獲後の合流ポイントは任務成功後、そちらへ提示する」

「ふふ・・・信用しているわ。ポケモンハンターＪ」

ブツンと音を立て消える画面。

「師弟勝負。・・・・楽しみね」

Ｊとその弟子のジュン。

その二人の戦いはどちらが勝つか・・・。

エリカの呟きは誰にも聞かれることなく消えていった―

第四十六話　暴かれた真実～師弟の戦いの幕開け～（後書き）

ずいぶんＪを登場させるのが遅くなってしまった（汗）

もうとっくにアニメからは消えているけど、インパクト大ですしね彼女。

アニメ見ていない方には少し分かりづらいかも（汗）

第四十七話　潜入！コレクション・ルームを目指せ

アルカディア王国の第三塔。ここの四階にアルカディア王国のコレクション・ルームが存在する。

塔の門には門番が４人程度か・・・。

ジュンは茂みの中から、第三塔を観察する。

「警備室は二階か・・・」

手には第三塔の各階の見取り図。

「なら・・・出てきて、アブソル」

ジュンがモンスターボールから出したのはアブソル。

『俺に何か用か？』

「あの見張りの気を逸らして欲しい」

ジュンは鞄から出したガスマスクを自分に装着しながら言う。

『・・・かなり不気味なその仮面は何だ？』

アブソルが怪訝そうにする。

確かに両側に吸収缶（キャニスター）がついたガスマスクは不気味だ。

「これは自分がこいつのガスを吸わないようにするためアイテムさ」

ジュンは鞄から銃を取り出す。

小さなタンクのついた銃である。

ポケモンのアグノムの手にすっぽり収まるガス銃。

ジュンはガスマスクをもう一つ取り出すと、アブソルに近寄り顔につける。

アブソルの顔にぴったりだった。

「さあ、期待しているよ」

『スパイみたいだな、これ』

若干の含み笑いをガスマスク内で称え、飛び出していくアブソル。

すると・・・。

「おい、何だこいつは!?」

「ガスマスクなんかつけて・・・怪しいアブソルだな!」

「捕まえろ!」

見張りたちがアブソルを追いかけ始めた。

どうやらガスマスク付きのアブソルを怪しく思ったらしい。

（今だ！）

ジュンはこっそりと見張りの背後に近寄る。

アブソルに気を取られ見張りたちはジュンの存在に気づいていない。

ジュンはそっとガス銃の引き金を引く。

ブシュゥゥゥゥ・・・。

辺りに無色無臭の催眠ガスが蔓延し、バタリと倒れる見張りたち。

「さてと」

倒れている見張りの腰にある鍵を取り、扉を開ける。

ガスマスクを外し、外の空気を一度大きく吸う。

「さ、行こうか」

アブソルをボールに戻すと、ジュンは塔の中に入っていった。

特性“浮遊”は便利だね・・・足音がしないから気づかれない。

ジュンは暗視ゴーグルを顔につけながら進んでいく。

（おっと）

ジュンが物陰にスッと隠れるのと、巡回中の見張りが廊下を歩いて

いくのとは同時だった。

（危なかった・・・。さすが暗視ゴーグル。暗闇でもばっちりだ）

実は先ほどのガスマスクや暗視ゴーグル等は全てリーフの特注。

アグノムの体や顔にフィットする作りになっており、かなり使いやすい。

（さてと・・・ここがコレクション・ルームへの入り口か）

ギイィィと扉を開ける。

そこには何も無い部屋が広がっていた。

真っ白の大きな部屋の向こう側に金属製の重々しい―まるで大金庫のような―扉があるのが見える。

ジュンは暗視ゴーグルを外し、バッグに戻すと今度は赤外線ゴーグルを取り出し顔に付け替える。

ゴーグル越しに見える幾重の赤いレーザー。

それは部屋中にまるで蜘蛛の巣のように張り巡らされていた。

（ミッションイ●ポッシブルみたい・・・。まあ、アグノムの姿で助かったな。人間の大きさならおそらくこのレーザー網を掻い潜るのは無理だし・・・）

（長年ハンターをやってきたけど、ここまで厳重な警備は初めてだ

ね。それだけコレクションに価値があるということか・・・）

「おっと！」

考え事をしながら進んでいたため、危うく尻尾がレーザーに触れそうになった。

「アグノムの長い二つの尻尾は不便だな。まあいいや・・・ついたことだし」

ジュンは何とかレーザー網を潜り抜け、大きな円形の金属の扉が目の前にそびえる。

「これがコレクション・ルームに通ずる扉か・・・」

円形の扉には数個のダイヤルがついている。どうやらあのダイヤルを回して数字を合わせると開くようだ。

「まるで銀行の大金庫だね。さて、ここからは古典的金庫破りを始めるか」

ジュンは赤外線ゴーグルをバッグにしまうと、バッグのポケットからポケモン用のゴム手袋と聴診器と取り出す。

聴診器をダイヤル付近にあて、ダイヤルを回していく。

（小さいときはポケモンのお医者さんになりたかったから、よくごっこ遊びをしたな・・・聴診器を持つと楽しくなるね・・・）

少し笑いながらダイヤルを回すジュン。

カチカチカチカチ・・・カチッ

ダイヤルを４で止める。

ジュンは一つ目を４で止めると次々にダイヤルを回していく。

そして最後のダイヤルに来た。

カチカチカチカチカチ・・カチッ

「これでＯＫかな」

ジュンはサイコキネシスでそっと扉を押す。

軽い金属音と共に開く大きな円形の扉。

「これは・・・！！！」

ジュンは内部の光景にアッと息を呑む。

そこには数多くの透明なケースがあり、中にはポケモン達が眠っている。

そのポケモン達は皆色違いや珍しいモノばかりだった。

「素晴らしいな・・・さすがアルカディア王国秘蔵のコレクション達。ここまでとは・・！」

興奮で息が荒くなる。

さらにコレクション・ルームを進んでいくと、一番奥に一際大きなケースがあった。

その中で丸くなって寝息を立てていたのは銀色の毛並みが美しいキュウコン。

「見つけたよ・・・」

獲物を見つけたハンターの目。それとも美術品を愛好する美術品愛好家の目か・・・。

自然と出た呟きは誰にも聞かれることなく消えていった。

時を同じくして、アルカディア王国上空。

大きな黒い飛行艇が飛んでいた。

その飛行艇の巨大な操縦室には多数の部下と一人の女性が話していた。

「J様、アルカディア王国上空に到達しました」

「よし、準備を始めろ」

ブルーの髪に整った顔立ち。

そしてそれを覆い隠すバイザー。

冷徹でドライなオーラを醸し出すＪの追跡をジュンはまだ知らない―

第四十八話　報い

見間違えるはずも無い。

流れるような美しい銀糸の毛並み。長く整った九本の尾。

完璧な曲線美を描く顔。

間違い無い、このキュウコンこそ今回のターゲット。

アルカディア王国秘蔵コレクション最高峰の一つ。

ジュンはバッグからノートパソコンを取り出しケースの下の電子ロックに接続する。

しばらくの間、無人の部屋にキーボードを打つ音が響く。

しばらくして、システム内への侵入へ成功したジュンはどんどんとハッキングを進めていく。

そして、最後の関門にたどり着いた。

【パースワードを入力してください】

ハッキングで得たパスワードを打ち込んでいく。

【＊＊＊＊＊＊＊】

【アクセス完了。ロックを解除します】

カシュゥゥとケースが開いていく。

「いい毛並みだ・・・」

ジュンは眠っているキュウコンを少し撫でる。サラサラとした毛並みが心地いい。

石化するのがもったいないね・・・。

すると。

『あら貴方は・・・』

どうやら起きてしまったらしく、キュウコンがスッと目を開ける。

右目が赤、左目は青。宝石のようなオッドアイにしばし見惚れる。

が、一応自己紹介だけでもしておくことにする。

『君を捕まえにきたものですよ。ポケモンハンターのジュンです』

その言葉を聞き、すこし悲しそうに俯くキュウコン。

『そうですか・・・私はオパールです』

しばしの静寂。

二人とも黙っている。

『反抗したりしたいんですか、オパール？』

堪りかねてジュンが口を開く。

何故か石化する気になれなかった。

キュウコンのオパールは嫌気が差した顔で天井を見上げる。

『私はこの外見のせいで、今まで何度も捕まっては売買されたり、盗まれたりしてきました。もう疲れたのです。１００年まえアルカディア王８世に捕まってからは城から外に出ていませんから』

コレクション・ルームは豪華な装飾の施された牢獄。

ポケモン達はこの賑やかで豪華絢爛な部屋や城から出ることは叶わない。

現にオパールは１００年もの間城から出ることは出来なかった。

ある意味での幽閉。生きたまま人間の嗜好品として一生飼い殺しにされる。

ポケモン達を城外に出さないのは、“秘蔵”という価値が失われてしまうから。

一部の“選ばれた”人間だけが見ることを許されているお宝。

外に出すとお宝はお宝では無くなってしまう。秘匿されることで価値が出ているのだから。

オパールの立っている床にポトポトと雫が落ちる。
目の周りの銀糸の毛皮が少し濡れているような気がする。
『１００年ですか・・・・』
実質１００年間の幽閉。
『・・・私をお捕まえなさい、小さなハンターさん。外に出られるだけでもありがたいことですわ』
『オパール・・・』
何だこの感情は・・・？
まさか僕はこのキュウコンを哀れに思っているのか？
同情しているとでも？
馬鹿な、何を考えているんだ！
僕は「ポケモンハンター」だ！
今まで数え切れないほどのポケモンを売りさばいてきたこのＮＯ．４が・・・憐れに思っているのか？
『大丈夫です。貴女を連れて行く先は１００年も幽閉したりしない奴のところですから』
ジュンはそっとオパールの目元を拭う。

『・・・優しいハンターさんね』

オパールの九本の尻尾がジュンの頬をくすぐる。

ジュンがすっと微笑んだ、その瞬間！

ゴォォォォという音が辺りを包み込む。

『これは！？』

オパールとジュンが窓の外を除くと、第三塔の周りの庭が業火に包まれていた。

火はアルカディア王国の本城にまで至っており、この塔にも燃え移っていた。

『これは火の不始末にしては規模が大きすぎる！』

この炎はおそらく放火・・しかもポケモンの技によるもの・・・。

『コレクション・ルームのポケモン達を避難させないと！』

『手伝いますわ！』

ジュンとオパールは次々とケースを外して行き、ポケモン達を起こしていく。

ポケモン達が慌てて避難し終えると、ジュンとオパールも塔の外に向かう。

（しかし・・・誰が一体・・）

ただの放火ではない。あそこまでのスピードで燃え移っていくということは『火炎放射』系の技。

（まあいい・・・僕の仕事は終わった。この騒ぎで城外に避難したオパールが逃げたと関係者は思うだろうし。ある意味ではラッキーだ）

ジュン達が塔の外に出ると、そこには信じられない光景が広がっていた。

空中に浮かぶ黒い飛行艇。

そして・・・ボーマンダに乗っている一人の女性。

見覚えがある・・・あの飛行艇にもあの女性にも！！

僕にハンター技術の全てを教えてくれた師匠、ポケモンハンターＪ！

馬鹿な・・・何故師匠がここに！？

ジュンは突然のことで回らない頭を必死にフル回転させる。

師匠はオパールや他のポケモン達を狙っているのか？

いやポケモン達はコレクション・ルームから外には出られないようになっていた。師匠は冷静な人。下調べはしてあるはずだから、外に出られないと知っていたら放火なんて手は使わないはず。

「ターゲット発見」

Jは腕につけている石化装置（キャプチャー）をジュンのほうに向ける。

「・・・サイコキネシス！」

ジュンは飛んできたレーザーの軌道をずらすと、ボールからボーマンダを繰り出しその上に飛び乗る。

『おいおい・・・アイツは！？』

『僕の師匠さ・・・どうやら捕獲対象になってしまったようだね』

オパールはジュンと一緒にボーマンダの背中に乗っている。

ジュンは鞄からトランシーバーを取り出し操作する。

「・・・ジュン、こちらリーフ。捕獲に成功したんだな！？」

「リーフ・・・実は」

ジュンは飛んでくる石化レーザーをサイコキネシスで防ぎながら事のあらましを説明する。

「そうか・・よし、今助けてやる！」

「いや、僕の任務はターゲットを君に届けることだ。今から君のヘリにオパールを届けるよ」

ジュンは言うや否やボーマンダから飛び降りる。
リーフの搭乗しているヘリにオパールを乗せたボーマンダが向かう。
「馬鹿！お前もヘリに乗れ！」
「残念だけど、師匠は冷徹で冷酷な方だ。ターゲット捕獲のためにはどんなことでもする。僕と一緒にいたらリーフ、君が危険だ。分かってくれ、僕はハンターとして依頼人を危険な目に合わせる訳にはいかない！」
「待て・・・ジュ―」
プツンとジュンはトランシーバーの音源を切る。
ゴメンね、リーフ。
でも僕はポケモンハンター。依頼人の安全を犯すわけには行かない。
任務において重要なのはターゲットの確保と依頼人の安全。
僕はプロのハンターだ。絶対に譲れない。
ヘリがボーマンダ達を乗せ、空中停止していたがやがて去っていく。
Ｊはカチャリとキャプチャーをジュンに向ける。
それにね、リーフ。師匠は非常に優秀な方なんだ。狙われたら最後なんだよ。

ジュンは今までＪの部下として数年過ごしてきたが、捕獲に抗うポケモンやトレーナー達を何人も見てきた。

でも最後は捕まった。トレーナーやポケモンの家や故郷や森は火の海になったし、捕獲対象のポケモン達の家族は抗った見せしめとして処理された。

・・・分かってくれ、終わりなんだ、もう。

Ｊの冷酷さと優秀さを部下として、一番弟子として誰よりも身近で見てきたからこそ分ける。

逃げられない。

それに僕は報いを受けるべきなのかもね。ハンターとして幾多のポケモン達を狩ってきた報いを。

フッと自嘲の笑いも漏れる。

ふと気づくと体が震えていた。

ああ、そうか。

ジュンに放たれる一筋のレーザー。

捕獲されるポケモンの気持ちとは、こういうことだったのか―

次の瞬間、ジュンは石化され飛んできたカプセルに収納された―

第四十八話　報い（後書き）

次からは急展開です。

Ｐ・Ｈ・Ｃと国家情報機関ＣＩＣの陰謀が明らかになるかも・・・・。

第四十九話　明かされる真実～『プロジェクト・キメラ』の全容（前書き）

今回はかなり重要な話です

第四十九話　明かされる真実～『プロジェクト・キメラ』の全容

意識が戻ると清潔な部屋が広がっていた。

薬品のツンとしたにおいが鼻につく。

（そうか僕は・・・師匠に捕まって・・・）

浮こうとすると拘束具が体を締め付けていて動けない。

「石化を解除してからの意識覚醒までおよそ１０秒」

透き通った声がする。

声のしたほうにジュンが首をひねると、そこにはエリカが立っていた。

「おはよう、アグノム・・・・いやポケモンハンタージュン。研究所で会ったわね？」

アッと声が出そうになる。

ば・・馬鹿な、何故彼女が僕の正体を!?

Ｊに狙われた時の何倍もの衝撃を受けるジュン。

まさか誰かが僕のことを・・・？

いやそれは無い。ハンター四天王の結束は折り紙つきだ。

何故、何故、何故！！！

「驚いているようね。無理も無いわ、私達Ｐ・Ｈ・Ｃ幹部がハンターの襟元にエンブレムを模した超小型監視カメラをつけているなんて思いもしないでしょうから」

ハンターを・・・監視！？

Ｐ・Ｈ・Ｃはそんなことまでしていたのか・・・

茫然自失なジュンにエリカがクスクス笑う。

顔に少しかかった髪をスッと掻き揚げるとエリカがジュンを束縛している装置を少し弄る。

すると、カプセルはジュンを束縛したまま宙に浮く。

「いいものを見せてあげるわ」

エリカが歩くのにあわせて、ジュンを入れたカプセルもエリカに続く。

カッカッカッカッ

廊下に響く足音。

しばらくするとエリカがピタリと止まる。

そこには大きな扉があり、横には電子ロックがかかっていた。

エリカが暗証番号を入力すると、扉が横開きする。

扉の先にあったモノは階段。

照明は無く、階段の両側に不気味な緑色の光を発している非常灯があるのみ。

（どこまで連れて行くつもりだ・・・？）

「ここは国家機密の中枢」

エリカが歌うように言う。

「そして人間の欲望の渦中」

目の前に広がる扉には大きなマークがあった。

（あれはバイオハザードのマーク）

プシュウウウと開く扉。

「！・・・馬鹿な・・・こんなことが！！！」

ジュンの目の前に広がっていたのは、赤い液体の入った大きなカプセル群。

そして液体の中に浸かっているのはポケモン達。

液体が充填されたカプセル内にポケモン達は目を瞑って入っており、

カプセルを支える上下の装置とコードで直接接続されている。

「私達Ｐ・Ｈ・Ｃはこの国―正確には中央情報機関ＣＩＣと連携しこのキメラポケモン達を製造していたのよ。生きた生体兵器、ＣＰ（Ｃｈｉｍｅｒａｔｅｃｈ　Ｐｏｋｅｍｏｎ）兵器をね」

ＣＰ兵器。

こんなことが・・・・。

しかも国家が絡んでいたなんて・・・いや絡んでるどころじゃない！キメラポケモンの研究開発をずっと裏で支えていたのが、まさかこの国だったとは・・・！

「ＣＰ兵器は文字通り生きた兵器。ポケモン達から薬品で自我と理性を消失させ、人間の命令に反応し対象物を攻撃するように改造したものよ。そしてポケモンの肉体はキメラ技術でかなり強化されているわ」

「僕達の国が・・・でも解せないね・・・」

ジュンの声が強張る。この非道な行為にジュンは初めて怒りを覚えた。

ポケモンハンターであるという負い目から封じていた感情である。

こんなことがあっていいはずがない！・・・・ポケモンを兵器化する！？そんなことがっ・・！！

「このポケモン兵器が完成してとして、どこの国が買うんだい！？

こんなものを取引しようとすればたちまち露見して終わりだというのに・・・」

ジュンの問いにエリカが薄っすらと笑う。

「売る？最先端の科学技術が作り出したこの芸術品を売るとでも？ＣＩＣとＰ・Ｈ・Ｃはそこまで馬鹿じゃないわ」

「まさか・・・世界征服でもするつもりかい？」

せいぜい嘲ったつもりだったがエリカは冷徹な笑みを浮かべたままである。

「そうね、教えてあげましょう。私達Ｐ・Ｈ・ＣとＣＩＣの目的、それは―」

ゴクリと生唾を飲むジュン。

エリカがいつになく興奮したようすで喋る

「手始めにこの国のポケモンへＣＰ兵器を使用・攻撃し制圧する。その後全てのポケモン人間の管理下におき、ポケモン達を一元的に資源物として管轄する。そして最終的には全世界のポケモンを人類の監視下に置き、ポケモンの体も、能力も、命までも、そう・・すべてを人間の所有物とし、ポケモンのすべてを人類が掌握する」

エリカは二コリと笑う。

「ＣＰ兵器を用いての対ポケモン支配計画、これがＣＩＣとＰ・Ｈ・Ｃの『プロジェクト・キメラ』の内容よ」

「馬鹿な・・・」

言葉も出ないジュンを面白そうに見るエリカ

「あら、あなただってポケモン売買を仕事とするハンターなら、私たちとあなたは同じ穴の狢よ」

鋭い指摘に反論できないジュン。

「まあ、この『プロジェクト・キメラ』の発案者は私なんだけどね」

「何!?」

(信じられない・・・僕と同じ年の少女が・・・こんな計画を・・・!!)

「キメラ技術はこのために・・・ポケモンを兵器化するために開発された技術だったのか・・・」

「あなた達ハンターの活躍も『プロジェクト・キメラ』に多大な貢献をしてくれたわ」

エリカはそういいながら、ジュンの入ったカプセルを装置に填める。

「何をする気・・・」

装置から出てきた呼吸器がジュンの口を覆う。

「感謝しなさい、あなたには貴重な遺伝子を組み込んで強いキメラ

にしてあげる」

カプセル内に充填される液体。

同時にジュンの意識も薄れていく。

「神と呼ばれしポケモンの遺伝子を、ね」

意識が完全に飛ぶ前にジュンの脳裏に浮かんだのはシャワーズ達の顔。

（シャワーズ・・・アブソル・・・グレイシア・・・ボーマンダ・・・ゼロ・・・）

そしてジュンは闇へと沈んでいった―

第四十九話　明かされる真実～『プロジェクト・キメラ』の全容（後書き）

ついに明かされた『プロジェクト・キメラ』の全容！

そしてジュンはどうなってしまうのか・・・？

第五十話　リーフの思い

『ジュ・・・ジュン！！！』

ヘリの窓から外を見ていたシャワーズが叫ぶ。グレイシアは口に手をあて、アブソルとゼロとボーマンダは少し顔を俯けている。

石化され、カプセルに閉じこめられるジュン。

今すぐにでも飛び出してジュンを助けたい。

しかしヘリは無情にもジュンとＪから遠ざかる。

ジュンを助けられなかった悲しみに皆が俯き・・・泣いているものもいた。

グレイシアの涙がポトポトと零れ落ち、アブソルが前足で拭ってやる。

『ねえ・・・ぼくをここから出してよ・・・出してってば！！！・・ジュンを・・・助けに行かなくちゃ・・・』

シャワーズは目に涙を浮かべながらリーフの足を叩く。

「すまない。ジュンきっての頼みだ」

リーフはポケモンの言っている内容は理解できない。しかし言語が違っても伝わるものはある。

“心”は持ったもの同士なら伝わるものだ・・・。

「リーフさん・・・ですね」

ヘリ内に悲しみが蔓延するなかオパールが口を開く。

ポケモン語ではなく人間の言葉で喋りだしたオパールに少し驚くリーフ。

「お前は・・・ジュンに依頼したアルカディア秘蔵のキュウコンか」

「私の名はオパール」

「そうか・・・」

リーフが黙りこくる。どうやら彼もショックだったらしい。

「・・・ジュンさんを助けることはできませんか？」

「出来ないことも無い。つーか俺も今そのことを考えてた」

リーフはそっとオパールを撫でながら、考え込む。

「・・・ポケモンハンターJと取引をした奴のことをこっちで調べる。辛いかも知れないが少しだけ待っていて欲しい。俺の屋敷で待機していてくれ」

リーフはスッとヘリの外の景色に目をやる。

「ジュンは俺の親友であり、大切なビジネスパートナーだ。アイツ

は俺が知ってる中で最も信用できるハンターだ。あいつを失うわけにはいかねぇ。絶対助け出す。だから待っていてくれ・・・情報が集まるまで」

ポケモンハンターと契約者は普通、もっとドライな関係である。

ハンターは自分に危険が及ぶようであれば、真っ先に契約先を切り捨てる。それが、裏社会で生き残っていくコツだ。

守る優先順位は常に“自分”。そんな自己中心主義な人間で無ければ、闇の世界を渡っていくことなど不可能だから。

（だけど・・アイツは違う。アイツは本当の意味で“ハンター”だ。任務の遂行と依頼人の安全の確保がジュンの優先課題だ。自分の身を犠牲にしてもそれは守りぬく。ったく・・・だからとっ捕まるんだ・・・・馬鹿野郎！！）

だからこそ、リーフはジュンと共にいる。

ジュンはリーフの期待に応え、リーフはジュンを守る。

その関係はハンターと契約者の関係でありながら、同時にそれを越えた関係でもあった。

それを思うと無意識にリーフの目元が熱くなる。

オパールはリーフが泣きかけているのに気づくが、あえて気づかない振りをして言った。

「分かりました」

オパールはシャワーズ達のほうを向くと『それでいいですか?』と言う。

もちろん皆頷いた。

その後、リーフ邸に到着したシャワーズ達だがその足取りは重々しかった。

『・・・ジュン大丈夫かな・・』

リーフ邸の一室で外を眺めながらポツリとシャワーズが呟く。

『ったくもう!』

バチンと言う音が部屋に響く。

シャワーズは呆然と平手（前足）で張り飛ばされた頬を押さえ、グレイシアを見る。

『信じなさいよ!ジュンはすっごく優秀なポケモンハンターよ!きっと・・・大丈夫・・・』

グレイシアがそのまま泣き始める。

『言った傍から泣いてどうする?』

アブソルがそっとグレイシアの背中をさすってやる。

『・・そうだよ、グレイシア。ぼくを張り飛ばした元気で信じていようよ』

シャワーズがニコリと笑う。

『ジュンは優秀なポケモンハンターだ。きっと大丈夫さ』

ボーマンダの言葉にグレイシアこ落ち着いてくる。

「待たせたな」

リーフが部屋に入ってくる。

「調べがついた。ジュンはP・H・Cの研究所に送られたらしい・・・」

その言葉にオパール以外のポケモン達が固まる。

P・H・Cの研究所ってことは・・・。

“キメラ化”

その言葉がシャワーズ達の脳裏に焼きついて離れ無い。

そして何よりゼロがぶるぶると震えていることが全てを物語っていた。

『でも・・・行かなきゃ行けない』

ジュンを助けるために・・・絶対に！

ジュンはポケモンハンターだ。そしてジュンはハンターであることを誇りに思っているし、反対に心のどこかで後ろめたさも感じている。

ジュンは優しいし、冷たくもある。

でも・・・たとえハンターでもぼくはジュンのことが好きなんだ！

ぼくだけじゃない、グレイシアもアブソルもボーマンダもゼロも・・・オパールだって！

『そう言えば・・・前々から質問したいことがあったんですけど・・・』

ゼロがおずおずと口を開く。

『何？』

『ジュンさんは・・・何故ポケモンハンターに？』

その質問に答えたのは、ボーマンダだった。

『そうだな・・・話してなかったか』

ボーマンダはふうと一息をつく。

『話してやるよ、何故アイツがハンターになったかを』

第五十話　リーフの思い（後書き）

ポケモンハンターにも色々いるんですよ・・・。

特にジュンはポケモンで利益を得るというよりはむしろ、自分の強さや力の証明、そして任務を遂行するときに“緊張感”を求めているんですね。

特にリーフの期待には絶対に応えたい、と思っています。

次回はジュンが何故ハンターになったかが明らかになります

第五十一話　誕生の瞬間

ジュンは昔からポケモンを捕まえるのが得意だった。

そう・・・昔から。

森の中一人の少年が木の影に隠れていた。

その少年の視線の先にあるものは・・・針ねずみのような体型の可愛らしいポケモン、シェイミだった。

「いた・・・名前が分からないポケモン君」

その少年－ジュンはこの時十歳である。

シェイミは木の実を食べ、ジュンがいることにまったく気づいていない。

ジュンはポケモンを持っていないため、手にした網で捕まえる気だ。

「えいっ」

ジュンがシェイミに飛びかかる。

『シェイミ！』

シェイミがエアスラッシュを放ち、網を切断する。

「あ・・・」

シェイミはフォルムチェンジでスカイフォルムになり空に逃げようとした・・・が。

突然レーザーがシェイミを襲う。

シェイミは石になり、地面に落ちてしまった。

「ジュン、こんなところで何をしている?」

冷たくドライな声。軍人のような口調。顔の半分を覆う特殊ゴーグルもあいまってなんともいえない威圧感がある女性がそこには立っていた。

「師匠・・・僕がずっと目をつけていたポケモンをあっさり捕まえないでくださいよ」

師匠と呼ばれた女性ーJはジュンの言葉を無視し石化したシェイミを特殊な半透明の容器に入れた。

「いくぞ」

「あ、待ってください」

ジュンとJは森の中に隠してある大きな飛行艇に入っていった。

飛行艇内には大量の部屋があり、その中の一つにジュンたちは入室した。

「ジュン、この書類を整理しておけ。私はこれから仕事があるんで

な」

「はい」

Ｊは机の上に大量の書類を置くとさっさと出て行ってしまった。

手際よく書類整理の仕事をしながらジュンはあることを考えていた。

「師匠はいつになったら僕にポケモンをくれるんだろ・・・」

ジュンはこのとき表向きはトレーナースクールに通っている子供であり・・・裏の姿はポケモンハンターＪの下でハンターになるための勉強をしているいわばハンターの卵、だった。

ジュンは手早く整理をし終えると、机からポケモン学のテキストを取り出す。

「えっと・・・たしか明日のスクールでのテストは・・・ポケモンの系統分類とポケモン学の歴史だったな」

ジュンは教科書をめくりマーカーで線をいれノートに書き込み勉強していく。

そして・・・テスト当日。

「おい、ジュン」

ジュンが教室で教科書をめくっていると、後ろから大きな少年が声をかけてきた。

「何？」

「お勉強かよ・・・真面目くん」

「ヒサシ・・・嫌味を言うぐらいなら勉強でもすれば」

ジュンがそういった瞬間、頬に衝撃が走る。

「ポケモン持ってない奴が何言ってるんだ。俺に口答えするなてーの」

黙り込むジュンを尻目にヒサシがニヤリと笑い、ジュンの机を蹴飛ばす。

「テメエは親もポケモンもいねえ癖に生意気なんだよ！」

ヒサシがボールからサワムラーを繰り出す。

「飛び膝蹴り！」

その瞬間、サワムラーの蹴りにジュンの体が教室の後ろに吹き飛ぶ。

それ見て、ヒサシとサワムラーが嘲ったように笑う。

口の端を拭って俯くジュン。

ヒサシは取り巻きたちと一緒に教室から出て行った。

「大丈夫？」

真っ青な顔をしたクラスメートが駆け寄ってくる。

「大丈夫・・・慣れっこだから」

はれる頬に手をあて、ジュンが弱弱しく言う。

「でも・・・」

「いいんだ。それよりもうテストが始まるよ」

ジュンの言葉にクラスメートは席に着いた。

他のクラスメート達は皆気まずい雰囲気になりながらも、ジュンに声をかけることは無かった。

いじめは連鎖する。ひとたびいじめっ子に狙われれば終わりである。

クラスメート達は自分の身を守ることで精一杯なのである。

ここで・・何故ジュンが酷い目に会っているかを話さなければならないだろう。

ジュンはスクールでは常に成績優秀だったが・・・一人だけポケモンを持っていなかったのだ。

ポケモンスクールでポケモンを持っていない・・・この事実は彼の成績優秀さと交わっていじめっ子達の格好の標的となった。

特にいじめっ子グループのリーダー格であるヒサシはスクールでのバトルの成績が非常に良かった。

ポケモンを持っているならバトルで白黒つけれようが、そもそもバトルが出来ないとあっては。

ポケモンを持っていないジュンはヒサシ達に勝てるはずが無く、ただ苦痛の日々を耐えるしかなかったのだ。

ヒサシ達のいじめはポケモンを使用するところまでエスカレートしていた。

またヒサシの父親はこの地域では有名な政治家で、県議員も務めたことがあり、現在はこの町の町長である。

いじめ問題程度のことなどもみ消すのは造作も無い。

ヒサシはスクール入学時から父の威光と金力、そして自身のポケモンバトルの強さをフルに活用し一気に全校生徒に恐れられる存在となったのだ。教員でさえヒサシを下手に扱えずにいるのである。

ジュンは成績こそよかったが、そこまでの力を持つヒサシには無力だった。

ただ苦痛の日々を送るしかなかったのだ。

ヒサシ達に対する怨念と黒い気持ちを抱きながら。

そんな彼がポケモンハンターＪに弟子入りしたのはつい一ヶ月前。

ジュンは元々身寄りの無い子供だったが偶然引き取ってくれた人がいたのだ。

ジュンとその人の関係は決して悪くなく、むしろ良いほうだった。その人は素直で真面目なジュンのことを気に入っていたし、ジュンも頭が切れて、優しいその人を信用していた。

それだけならば問題はなかったのだが・・・。

その人は幸か不幸かポケモンハンターであり・・・・Ｊの側近でもあった。

その人はジュンにハンターとしての必要な冷静さと行動力があることを見抜き、Ｊに弟子入りしハンターになることを進めた。ある意味の善意だ。

ジュンはそれ以来Ｊの横で彼女の雑務を手伝うようになり・・・同時に飛行艇内にあるハンターの教科書とも言うべき本でいろいろなことを自主的に学んでいくことになった。

毎日いじめっ子達に苦痛を与えられる日々を耐えることが出来たのはひとえに将来ハンターという名の力を手に入れられる、Ｊ師匠のように強くなるという野心にも似た夢があったからだ。

力さえあれば・・・このような屈辱と苦痛の日々から逃れられる。

力があれば、目の前に立ちはだかるものを打ち倒せる。

ジュンはいじめっ子達を憎んでいた。憎しみの炎。

その炎はジュンの力への欲求を増大し、ハンターになりたいという心を生み出した。

そして・・・ジュンはいじめと苦痛そして・・・ハンターの技術を学ぶ日々が続き。

ある日のこと。

「ジュン」

雑務をこなしているジュンにＪが話しかける。

「何でしょう・・・」

「お前に渡したいものがある」

Ｊはそう言うと、廊下を歩いていく。

ジュンも急いでその後に続く。

「ここだ」

Ｊがタッチパネルを操作すると、扉が開き・・・中には大量のモンスターボールが並んでいた。

ジュンが驚いていると、Ｊがボールの一つを手に持ちジュンに渡す。

「ボーマンダだ。今日からそいつはジュン・・・お前のポケモンだ。気に入らないのならここで他のポケモンと取り替えることを許可する」

「・・・ありがとうございます」

ジュンがそう言うとＪは何も言わず、その場から立ち去った。

そして月日は過ぎ一。

相変わらず、ジュンはいじめの暴力にさらされる生活は続いたが、なんとか卒業式の日になった。

ヒサシや他のクラスメートが卒業証書をもって、喜び勇む中ジュンは一人Ｊの母艦へと向かった。

今日はジュンにとって大事な日だったからだ。

これまでＪの部下として、ハンターを学業と平行してやってきたジュンだったが、今回から一人で任務につくことになるのだ（Ｊの部下であることに代わりは無いが）

「ジュン・・・お前に一つ任務を与える」

飛行艇のコックピットに座ったＪが言った。

「ポケモンを大量に捕獲しろ。種類性別は問わない。最低１０体以上だ」

「・・・了解しました」

Ｊの指示を受けた後、ジュンは自室に戻りハンターの制服に着替える。

任務内容を聞いた時点で、ジュンのターゲットはもう決まっていた。

ヒサシたちのポケモンを強奪しよう・・・・彼らのポケモンは強いし。

そして僕に苦しみと屈辱を与え続けた彼らのポケモンを・・・奪う。

ヒサシのポケモン達も同罪だ。僕に技を繰り出すことをためらったことはなかった。

今、ボーマンダが覚えているのは・・・逆鱗、空を飛ぶ、流星群・・・のみ

そして、この任務どうこなそうか・・・。

・・・ターゲット達を追い詰める最善の手段。

あれを使うか。

ジュンは引き出しから、技マシンを一つ取り出す。

火炎放射・・・その技マシンにはそう刻まれていた。

ボーマンダに技マシンを使うと、ジュンは母船から出て、ボーマンダに乗る。

「サワムラー、ブレイズキック！」

「エレブー、十万ボルト！」

森の中ではヒサシとその仲間がポケモンバトルをしていた。

ヒサシのサワムラーのブレイズキックが、エレブーに直撃し倒す。

少しでもバトルをやったことがあるものなら、ヒサシがいかにバトルが強いかが分かるだろう。

「やっぱ兄貴はつよいな！」

ヒサシの相手は倒れたエレブーをボールに戻しながら尊敬を込めた目でヒサシを見る。

「まあな！」

ヒサシは自分を尊敬の目で見る連れ達を見渡す。

まるで数多くの家来を周りにつけ、自分の権力基盤を再確認する王のように。

「よし、じゃあ今から俺のうちでゲームだ」

「「賛成！」」

「楽しそうだね・・僕も混ぜてよ」

森から聞こえる声。

「誰だ・・・？」

ヒサシ達は辺りを見回す。

上を見る。

「お前は・・・ジュン!?」

ヒサシがあんぐりと口をあける。

それもそのはず、ボーマンダに乗ったジュンは“ポケモンハンター”の姿だったのだから。

特殊バイザーで目の辺りが隠れているため、表情が判定できない。

ヒサシは我に変えると嘲るような表情になった。

「お勉強君がなんだよ、その格好!?ついに頭までおかしくなったんじゃねえの!?」

ヒサシがすっと手を上げる。

「俺に歯向かおうってんなら・・・やれ!」

取り巻きたちがモンスターボールを次々と投げる。

出てくるポケモン達。その数は何と２０匹超。

ヒサシもサワムラーとブーバーを繰り出す。

「火炎放射!」

ヒサシの攻撃を皮切りに、取り巻きたちが攻撃に指示を出す。
次々と襲う攻撃にジュンはただ一言。
「流星群」
とだけ指示した。
舞い上がる土煙。
そして・・・。
「うそ・・・だろ？」
ヒサシ達が唖然とする。
何とボーマンダの流星群によって、取り巻き達のポケモンが全滅していたのだ。
ジュンは黙って石化装置を使って倒れたポケモン達を次々と固めていく。
「俺達のポケモンが・・・！？」
「ぼ・・ボールに戻せ！！」
取り巻き達はあわてて無事なポケモン達のボールへと戻していく。
ヒサシもポケモンをボールに戻すと、怯えた顔でジュンを見上げる。

「何でこんな・・・」

「それが僕の任務だから」

ジュンの無情な声に、ヒサシ達は一目散に森に逃げていく。

「ターゲット捕獲を遂行しなきゃね」

(僕は優しいから任務遂行に強硬手段は普通は取らない。でも、彼らには・・・)

「ボーマンダ、もう少し上昇だ」

ボーマンダが上昇する。

「よし・・・この森を火で囲うんだ」

その言葉にボーマンダが首を曲げて、ジュンを見る。

その表情は戸惑っているようだ。

「彼らには苦痛を味わってもらわなきゃ。この森は開発で殆どポケモンはいない。しかも森はこの地域だけ、大火事になる心配もない。・・・ボーマンダ、火炎放射!」

ボーマンダが業火を放つ。

火は、森をまるで籠のように囲んでしまった。

ジュンはボーマンダにたち乗りしながら、上空からヒサシ達を探す。

「・・・・くそ」

同じ頃ヒサシは森の中を逃げ回っていた。

「こっちにも火が・・・」

熱風の苦痛がヒサシをくらくらさせる。

「くそ・・ジュンの奴、絶対に潰す・・・」

「ボーマンダ、火炎放射！」

突如上から放たれる炎にヒサシは行く手を阻まれる。

「さて、ヒサシ君のポケモンを渡してくれるかい？」

「・・・畜生・・・ブーバー、サワムラー出て来い！」

追い詰められたヒサシは二匹のポケモンを再度繰り出す。

「ブーバー、火炎放射！サワムラー、インファイト！」

「ボーマンダ、流星群」

ぶつかり合う技。しかし、流星群の威力は二発目ダウンしていたが、

ヒサシのポケモンをなぎ払うのには十分だった。

カチャリ

ジュンが石化装置を倒れた二匹に向ける。

「ま・・待ってくれ！」

ヒサシが必死の形相でポケモン達の前に立ちはだかる。

「こ・・こいつは俺の大切な・・・！」

ジュンはしばし無言でヒサシを見る。

何時も自分を嘲っていた時とは違い、今は本気の・・・本当に懇願している目。

今まで憎しみで動いてきたジュンだったが、自分は“ポケモンハンター”になりたいのであって、本当の“悪”にはなりたいとは思っていないことに今気づいた。

「・・・・君達とはお別れだ」

ジュンはそう言うと取り巻きたちのポケモンが入ったボールを地面に投げ捨てる。

「・・・ジュン・・・」

ジュンの行動にヒサシの緊張が少し緩む。

「ボーマンダ」

ジュンの呼びかけにボーマンダは応え、上空に羽ばたく。

（ここともお別れだな）

ジュンは自分が育った町を見返した。

既に鎮火している森。ポケモンスクールに商店街。

（だけど、僕は“裏”の世界に入った）

もう戻れない。

裏社会（アンダー・ワールド）を見てしまったからには。

世間的に目を細められる社会。犯罪、悪事、賭博、脅迫、強請、窃盗、そして欲。

それらはジュンにとっても不快なものだったが・・・しかし！

それを超えた魅力を知ってしまった！

何か悪事を働く人間は、一見利益のためにやっているように見える。

だが、子供が親や学校のルールを破って遊ぶのと同じように、法や社会的な基準を“破る”ことはまさにそのことにおいて快楽でもあるのだ！

犯罪はまさに賭けだ。利益を掴むか、自分の人生を棒に振るか。

ヒサシ達への報復からハンターになろうとしていたジュンだったが、彼らへの憎しみを超えた何かを得た。

利益が問題なのではない、その過程が・・・・犯罪を犯すその過程に発生する“スリル”それはジュンの心を掴み離さなかった。

（森のポケモン達を捕まえておかないと・・・・）

もう一度町を振り返るジュン。

「さようなら、僕の“過去”」

もう戻ってくることは無いであろう町をバイザーを通してみた後、ジュンはボーマンダに乗って飛んでいった。

「ポケモンハンター」ジュンの誕生の瞬間を味わいながら。

さらなる“禁忌”を求めて・・・。

第五十一話　誕生の瞬間（後書き）

今回の話はどうでしたか？

善が人を強くするように悪もまた人を引きつけます。

今回の話は分かりにくかったかと思います。

両親を殺された恨みからとか仲間を傷つけられた悲しみから・・・

ハンターになったわけでは無いからです。

多くの人が求めでいる“力”をジュンも求めているだけです。

法律などを犯すことはそのルールの中で自分なりの手ごたえを掴むこと。

善が力であり、悪もまた力です。

ポケモンアニメで出てくるロケット団なども世界征服の目的のため破壊活動をしているわけですが、僕にしてみればその過程・・・・“悪”を為すそのことに快感やスリルを感じているのではないかなとも思いますね

第五十二話　潜入！P・H・C

・・・・そんなことが。

シャワーズ達は不思議な思いに浸っていた。

そうか、ジュンは確かにいじめを受けていたけど・・・だからハンターになったわけじゃなかったんだ。

単に「スリル」を追い求めていたんだね・・・。普通のポケモントレーナーと同じように。

知らなかった・・・。

『オレがジュンと一緒にずっとやってきた理由を教えてやるよ』

ボーマンダが窓の外を見ながら呟く。

『オレもジュンと一緒に任務をこなす事が楽しかった。ポケモンが目の前で捕まえられるのは、同じポケモンとして嫌だったが・・・』

ポケモントレーナー同様、ハンターもまたポケモンとの連帯が必須。

トレーナーもハンターも、ポケモンバトルが必要な点は同じ。必要性のベクトルはだいぶ違うが。

だからこそポケモンとの意思相通はいい意味でも悪い意味でも必要なのだ。

ポケモンは人間に逆らうことも出来る。だが、多くのポケモンがそうしないのは・・・やはりどんな人間であっても“愛着”が沸くのだろう。

「お待たせ、だな」

リーフが部屋に入ってくる。

「ジュンが連れて行かれた場所が分かった。P・H・C本部に隣接するポケモン理工学研究所だ」

リーフがドサリとソファの座る。

「調べてみたが、やっぱり怪しい場所みたいだぜ。ポケモン用の新薬開発をしているらしいが・・・まあ、P・H・Cは世界に名だたる大企業。だれもその研究所が怪しいなんて思わないよな」

P・H・Cの研究所・・・と来れば。

シャワーズの横でゼロがプルプルと震えている。

彼にとっては、「研究所」と言う語だけでおぞましいものなのだろう。

シャワーズはそっと前足でゼロを擦ってやる。

「輸送機を用意しておいた。お前達が直接乗り込むのは危険だからな」

リーフがドアを開け廊下を歩いていく。シャワーズ達もリーフの後

に続く。

「手短に話すぞ。まず輸送機で研究所上空まで飛ぶ。その後、俺のモンスターボールにお前達を入れて俺がパラシュートをつけて飛び降りる」

『なんでそんな回りくどいことすんだ?オレがひとっ飛びしてやるのによ?』

ボーマンダがぼやく。

オパールがリーフにボーマンダの言葉を訳す。

「それは危険だ。お前のデカさじゃ一発でばれる。・・・実はな、パラシュートの色は黒にしてあるんだよ」

なるほど・・闇夜に黒色はまぎれる。

それに研究所の護衛もまさか空から侵入してくるとは思いもよらないだろうし・・すごいや。

シャワーズは純粋にすごいと思った。

リーフ達は屋敷の屋上に出る。

そこには黒い輸送機が待機していた。どうやら垂直離陸が可能な機種らしい。

輸送機に乗り込む。

エンジン音を立て、飛び立つ輸送機。

シャワーズは椅子に飛び乗ると、窓の外の風景を見る。

今は夜。下の町は光り輝いている。

（待っていてね、ジュン。今助けるから・・・）

「そろそろだな」

しばらく経ってからリーフが呟く。

リーフはパラシュートのバッグを背負うと、シャワーズ達をボールに戻す。

「ジュン、待っていろ」

輸送機から飛び降りるリーフ。

バサリ

黒いパラシュートが開き、リーフが浮遊する。

しばらくすると、研究所の敷地内にふわりと着地する。

「さてと」

リーフは素早くパラシュートを回収し、茂みに隠すと研究所の窓ガラスの一部をダイヤモンドカッターで切る専用道具で切り取った後、

鍵を外して侵入した。

（ジュンに技術を教わっておいて正解だったな）

リーフはそっと廊下の隅に隠れる。

（俺のデータでは、そろそろ職員の服を着た見回りが来るはずだ。お、来た）

コッ　コッ　コッ

照明の明かりが照らす廊下を見回りが歩いている。

リーフは見回りの背後に回り、口元に手を回し薬を嗅がせる。

トロンとした目になった見回りは次の瞬間には眠っていた。

リーフは見回りをトイレに引きずって行き、個室の中に押し込んだ後見回りの服を貰い自分の服をバッグに押し込む。

職員の服に着替えたリーフはポケモン理工学研究所の奥へと入って行く。

居残りの研究員にあったが、別段怪しまれずに進めた。バッグを持っていても、どこかの修理点検作業の為と思われたのだろう。

途中で「見回りご苦労さん」と呼ばれはしたが、難なく奥へ奥へと入って行く。

しばらく進んだ後、リーフは廊下に座り込みバッグからノートパソ

コンを取り出す。

「これから侵入する場所には見回り程度は普通入れないトコだ。・・・・セキュリティシステムをハッキングして、俺が侵入している間監視カメラの動きを止めてやる」

リーフは監視カメラの作動を止め、監視モニターの方にあらかじめ作成しておいた合成映像を流す。

その作業を終えるとノートパソコンをバッグにしまい、さらに廊下を歩いていく。

しばらく歩くと大きな扉が目の前に現れた。

横に設置されている電子ロックのカバーを外し、カード型の装置を差し込むリーフ。

この装置は自動ハッキングできるカードで、リーフが特別に作らせていたのだ。

「ここまで厳重なロックとは・・・ますます怪しいぜ」

扉が開き、下には階段が続いていた。

暗い階段を両側の非常用ランプのみが照らしている。

しばらく階段を下りていくと、大きな扉が目に入る。

バイオハザードマークが扉の中央に描かれており、リーフは驚愕で唖然とする。

「こいつは・・・」

扉がプシュウウウと音と立て開く。

「!?」

そこには大量のカプセルが等間隔に装置に設置されていた。

そしてその中に入っていたのは・・・ポケモン。

液体が充填されたカプセルの中で多数のコードによって接続されているポケモン達は皆目を瞑っている。

（驚いたな・・・大方、ポケモンの悪用工場ってか）

ここにジュンは捕らえられている・・・この情報の恐ろしさがこみ上げてきたリーフ。

（ジュン、まさか改造されたりしてないだろうな・・・）

「来たわね」

突如後ろから声がする。

そこに立っていたのは白衣の少女。

薄茶色の髪が肩までかかり、肌は陶磁器のように白い。

しかしその美しい顔立ちとは裏腹に、目は氷のようだった。

「・・・お前は」

「私はエリカ。・・・リーフ、【フォレスト】グループの御曹司。弱冠１６歳で数々の業績を、特にポケモンバイヤーとしてその才能を発揮している。現在は親と離れリーフ邸で３１人の使用人と共に暮らしている。ポケモンに対する目の高さと、愛情が交わってポケモンコレクターとしても有名」

「よく調べたな」

エリカは薄く笑う。

「当然よ。だってあなたに情報を流したのは私なんだから」

「俺に・・・まさか！ジュンの居場所の正確な情報・・・そうか、お前が！！」

「その通り」

エリカはカプセルの間を手を後ろで組みながら歩く。

「あなたがあのポケモン化したハンターを助けに来るのは分かっていたわ。だから、ここに来てもらったのよ」

「そいつは話が早い」

リーフはモンスターボールから、シャワーズ達、そして自分の手持ちのメタグロスを繰り出す。

「さっさと返してもらおうか。俺のダチを」

「ええ、いいわよ」

エリカがあるカプセルの前で立ち止まる。

「ジュン！！！」

液体の充填されたカプセルの中には目を瞑ったアグノム―ジュンがいた。

振り向きざまにゼロとエリカの目が合う。

エリカはゼロを一瞥すると、そのままカプセルの下の装置を作動させる。

それと同時に充填されていた液体がカプセル内から消え、ジュンから多数のコードが外れる。

ジュンは目を開けた。

「ジュン・・・？」

リーフは一瞬嬉しそうな表情になったが、直ぐに戸惑った表情になる。

ジュンの目に生気がない。虚ろな目であたりを見回す。

「キメラポケモンＭｋ－？（ナイン）、完成したキメラ技術によって生み出された生体兵器」

「テメエ・・・ジュンに何をしやがった！！」

リーフが激昂する。ここまで怒っているリーフはシャワーズ達も始めてみた。

「ふふ、ただ神と呼ばれしポケモンの遺伝子を・・パルキアの遺伝子を組み込んだだけ。薬品と一緒にね・・。あなた達にここに来てもらったのは他でもない」

エリカは冷徹な笑みで言う。その笑みにリーフは少し後ずさる。

本来美しい顔立ちのはずだが・・・そこにあったのは冷徹な知性と狂気のみ。

「あなた達に消えてもらうため。・・・大切に思っていた存在に今日、あなた達は消されるのよ。やれ、Ｍｋ‐？」

パルキアの力を手にしたジュンがリーフ達に襲い掛かる。

第五十二話　潜入！P・H・C（後書き）

次回はキメラ化したジュンとの戦いです

第五十三話　ＶＳジュン　空間支配を攻略せよ！

うそ・・でしょ。

虚ろな目のジュンがぼく達を見る。

何の感情も沸いていない。まるで人形のような・・。

ジュンの顔の左目の下から頬そして首を伝い胸の中部にかけて、パルキアの特徴である紫色のラインが走っている。

「アレハテキ？」

ジュンがエリカに尋ねる。

シャワーズは最初、発せられた言葉があまりに機械的過ぎてジュンが言ったのだということに気づかなかった。

「そうよ、Ｍｋ－？。彼らは排除すべき存在」

「ハイジョスベキ・・・・」

小首を傾げながらジュンがシャワーズ達の前に出る。

まるで操り人形のようなカクカクした動きだ。

「亜空切断」

ジュンが手から巨大なエネルギーの刃を放つ。

『波乗り！』

シャワーズが波乗りを放つが・・・あっさりと突き破られてしまう。

とっさに回避したが、掠っただけで吹き飛ばされてしまった。

「ヤバイな・・あれの直撃を喰らったら・・・メタグロス、アームハンマー！」

「空間断絶」

虚ろな呟きと共にジュンの周り空間とシャワーズ達の周囲の空間に“溝”が出来る。

メタグロスの拳は見えない障壁に弾かれてしまった。

“空間断絶”が発動している限りジュンには攻撃はとどかない。

「亜空切断」

再びエネルギーの刃を放つジュン。

どうやキメラ化しているポケモンが入っているカプセルとその下の装置は特殊なエネルギー防御壁で保護されているらしく、まったく壊れていない。

しかし地下の研究所の扉は壊れ、周りには薬品が飛び散っていた。

『ドラゴンにはドラゴンだ！竜の波動！』

ボーマンだがジュンに竜の波動を浴びせかける。

「空間断絶」

囁くような声と共に又してもジュンの周りの空間が歪み、シャワーズ達の空間との間に溝が出来る。

『くそ・・・あの防御技強すぎだぜ！』

『さすが神の力、と言うべきね』

「ワームホール」

呟きと共にジュンの姿が消える。

『な・・・消えた？』

アブソルがキョロキョロする。

刹那、ブウンと言う音と共に背後にジュンが現れる。

「亜空切断」

背後からの突然の攻撃を避けられるはずも無く、リーフとシャワーズ達が吹き飛ばされる。

補足説明をしておくとワームホールとは、時空構造の位相幾何学として考えうる構造の一つで、時空のある一点から別の離れた一点へと直結する空間領域でトンネルのような抜け道のことである。

ワームホールを通ると光より早く時空を移動できるのである。

「コウゲキガアタラナイ。・・・・・空間歪曲」

『こんどは何が起きるのよ・・・』

ジュンの周りの風景が歪む。そう・・まるで蜃気楼のように。

「気をつけろ、皆！」

リーフの言葉に皆が身構える。

（ここは長期戦はやばい・・・ハイドロポンプで一気に決める！）

シャワーズはハイドロポンプをジュンに向かって放つ。

しかし、激流はジュンに当たらず風景に溶け込んでしまった。

そして直ぐに自分の放ったハイドロポンプが跳ね返ってくる。

『くそ・・・』

自分の特性“貯水”でダメージは無かったが・・・・どうやら“空間歪曲”は相手が放った技の周囲の空間を歪ませ、跳ね返すカウンター技らしい。

『強すぎるよ・・・・』

（マズイ・・・このままじゃ・・・）

シャワーズ達の士気が下がる中、ゼロがジュンと対峙する。

『ジュンさん、目を覚ましてください！・・・キメラの力に飲まれちゃだめです！』

「アレモテキ？」

ジュンは横で腕を組んで傍観しているエリカに尋ねる。

エリカはゼロをチラリと見る。

普通、かつてのパートナーを敵とは応えないだろう。

しかし、エリカは違う。

自分の手で手持ちのパートナーをキメラ化するほどの心の持ち主なのだ。

もはやエリカには自分の元のパートナーに対する愛着的なものは微塵もなかった。

「ふふ、この子のキメラ能力は空間支配。神の力のまえに消え去りなさい」

『エリカ・・・やっぱり貴女は・・・』

「亜空切断」

『サイコキネシス！』

ゼロがボディチェンジをして、エーフィとなる。

ジュンの亜空切断とサイコキネシスはぶつかり合い、ジュンに跳ね返った。

しかしなぜかジュンは防御技を使わず、跳ね返った亜空切断の直撃を受ける。

（ん？おかしいですね・・・攻撃がぶつかる直前に“空間断絶”“空間歪曲”のいずれかを使えば、直撃は避けられたのに・・・）

『火炎の薔薇』

ゼロの横からオパールが飛び出し、ジュンに攻撃を仕掛ける。

オパールが口から放った赤き薔薇はジュンの近くで多数の燃え盛る花弁となった。

「空間断絶」

その炎の花弁がジュンに届くことはなかったが、オパールはニコリと笑う。

『なるほど・・・ゼロさん、シャワーズさん。今から私の指示通りに動いてください。試したいことがあるんです』

オパールの口調からはっきりとした確信が読み取れたゼロとシャワーズはコクリと頷く。

『ゼロさん、サイケ光線を!』

ゼロがサイケ光線を放つ。

又してもジュンは防御技を使わず、サイケ光線の直撃を受けてしまう。

『私が技を放って“空間断絶”を使ってから約１０秒間にゼロさんの攻撃。今です、シャワーズさん、ハイドロポンプを!』

今度シャワーズが放ったハイドロポンプは“空間断絶”によって防がれてしまった。

『やはり・・・』

『ねえ、オパール何が分かったの?』

グレイシアの問いにオパールが前を向いたまま答える。

『ジュンさんの空間断絶、空間歪曲、ワームホール。確かに強力です。でも・・どうやらそれらの技を使ってから約１０秒間は技を連続して出せないみたいですわ』

『しかし、ワームホールから亜空切断につなげていたぞ?』

アブソルが訝しげな顔になる。

『おそらく亜空切断はパルキアが元々持っていた技ですので、連続して使用できるのでしょう。普通の技のように。しかし、空間断絶、空間歪曲等はジュンさんが神の遺伝子を利用して“キメラ能力”と

して身につけた特殊な技。それらの技は連続して使用できない、のだと思います」

このことはシャワーズ達にも思い当たる節があった。

同じキメラ能力を持っているゼロも連続してボディチェンジは出来ない。

ポケモンの技は組み込まれた遺伝子によって決定されるが、それらの技は連続で使用できる。

何故なら、いくら後付だとしても元々自然界にあった技だからである。

しかし――ボディチェンジや空間支配は人工的に作られた技

キメラ化しているといえども生身のポケモンの体には負担が大きいのである。

『すると、我々は技と技のインターバルを攻めればいいわけだな？』

メタグロスの問いにオパールは静かに頷く。

『ただインターバルが１０秒とはきついな。しかも亜空切断は普通に連射可能。かなり厄介だぞ』

アブソルが薄っすらと焦りの感情のこもった声で呟く。

確かにその１０秒しか攻撃は届かない。つまり半無敵と言うわけだ。

『でも決して無敵ではない・・・・大丈夫、きっと』

今、救うから待っててね・・・・ジュン。

シャワーズは虚ろなジュンをきっと見つめるのであった。

第五十三話　ＶＳジュン　空間支配を攻略せよ！（後書き）

他作品のほうで「前・後書きで軽いネタバレをするのは醒めます」と言う指摘を頂いたので、これからは自重し、前・後書きはあまり書かないことにします。

第五十四話　ＶＳジュン！　ゴッドアイの恐怖

『インターバルっても１０秒だけじゃなぁ』

ボーマンダが冷や汗をかきつつ言う。

『でもそれしか無いわよ。その１０秒の間のみ、ジュンに攻撃を当てられるんだから』

そうだ、とシャワーズは心の中で呟く。

ジュンはその１０秒を除けば、あらゆる攻撃を防ぎ、跳ね返すことが出来る無敵の存在。

それしか手は無い・・・。

「ワームホール」

ジュンがまたしても時空間移動を行う。

『来るぞ！』

ボーマンダが身構えるが・・・ジュンの姿が見えない。

『どこに行った？』

「上だ！」

リーフの叫びと共にシャワーズ達が上を見る。

映ったのはジュンが手にエネルギーを溜めている姿。

「亜空切断」

放たれるエネルギーの刃。

『させないぜ！竜の息吹』

『冷凍ビーム！』

ボーマンダとグレイシアが亜空切断を相殺する。

『今だ、アブソル！ワームホール発動から１０秒は経ってねぇ！』

『任せろ！辻斬り』

アブソルがジュンに急接近し、辻斬りをヒットさせる。

さすがに効いたらしく、ジュンが少しふらりとする。

『とにかく押しまくれ！技を使わせてインターバルを増やさせるんだ！』

ボーマンダの言葉と共にシャワーズ達も動く。

『冷凍ビーム！』

「空間歪曲」

ジュンの周りの空間が歪み、冷凍ビームをグレイシアに跳ね返した。
自分の技に当たってしまったグレイシアだが、ニヤリと笑う。
『私は氷タイプ！跳ね返った自分の技ではやられないわ！シャワーズ、今よ！』
『ハイドロポンプ！』
「亜空切断」
ジュンは亜空切断で迎撃しようとするが、ゼロのサイコキネシスとオパールの火炎放射によってそれは叶わなかった。
「何をしているの？Ｍｋ－？。何故そんなにてこずっているのかしら？」
シャワーズ達の抵抗が予想外だったのだろう、エリカも少し驚いた表情となる。
「カレラハテキ・・・・デモミオボエガアル」
どうやらジュンは薬品の呪縛から解き放たれようとしているらしく、戸惑った表情でシャワーズ達を見つめる。
『そうだよ、思い出して！』
「アタマガイタイ・・・・・」
「記憶が戻りかけている・・・・なるほどそれほどまでに繋がりが

深いのね。なら、Ｍｋ－？。あれを使いなさい」

エリカの指令にジュンがピクリと反応する。

「ワカッタ」

「Ｍｋ－？。神の力を存分に見せてあげなさい」

コクリと小首を傾げ、まるで人形のような表情のジュンにシャワーズは鳥肌が立つ。

そして・・・。

ジュンがスッと右目を瞑る。まるで何か力を溜めているようだ・・・。

「ゴッドアイ」

響き渡る爆発。

一瞬シャワーズは自分の身に何が起きたのか分からなかった。

次に来るのは、壮絶な痛みと苦痛。

『ぐ・・・』

何が起こったんだ・・・？何でぼくは吹き飛ばされたんだろう・・・？ジュンは何も・・・していないのに・・・？

『一体何が・・・？』

ボーマンダ達も当惑しているようだ。

「驚いたかしら。これこそＭｋ－？の真の力。目視した対象物の空間の周囲を起爆させる能力。目視できる範囲なら全てが攻撃圏内よ。それに物陰に隠れても無駄。Ｍｋ－？はターゲットがいるおおよその位置が分かればそこを指定し爆破することが出来る。ただし、生物や建築物自体の内部は爆破できないけど」

なるほど、とシャワーズはよろめきながら考える。

“ゴッドアイ”とはよく言ったものだ。右眼で目視したターゲットの周りを起爆させる・・・絶対に防げない攻撃。おそらく“守る”も“見切り”も効果が無い。回避不可能か・・・。ぼく達の内側から爆発させれないのが唯一の救いかな・・・。

『大丈夫か、シャワーズ』

『なんとかね・・』

アブソルに答えはしたけど、もう一発喰らったらやばい・・・。特殊防御に特化したぼくでもこのダメージ。アブソル先輩やグレイシアなら、おそらく一発でダウンだろう・・。

でもエリカの説明で分かったこともあった。

目視して、念じることで起爆するということは・・・ジュンの目が追いつけないスピードで移動すれば・・。

ジュンが再び右目を瞑る。どうやらゴッドアイは一発放つごとに眼

を瞑ってエネルギーを補充する必要があるようだ。

左目で僕達の行動をずっと見ている。

おそらく、あれのインターバルも１０秒・・・なら！

『皆、出来るだけ早く移動するんだ。ジュンの右目に追いつかれたらアウトだ！』

『分かったわ！』

シャワーズ達はジュンの周りを精一杯走り出す。

次の攻撃を避ければ１０秒間のインターバルが出来る！ジュンは人工的に作られた技を複数同時に使うことは出来ない・・・この弱点を突くしかない！

「ゴッドアイ」

ブウン

機械音のような音と共にボーマンダの尻尾の近くが爆発を起こす。どうやら指定した爆破ポイントからボーマンダは辛くも逃れたらしい。

今だ！

『ハイドロポンプ！』

『冷凍ビーム！』

『竜の息吹！』

『火炎放射！』

『サイケ光線！』

特殊技が得意な、ぼく、グレイシア、ボーマンダ先輩、オパールさん、そしてゼロが次々にジュンに攻撃を放つ。

「亜空切断」

ジュンはこれに亜空切断で応戦するが・・・これだけの攻撃を受けきれるはずも無く全て直撃する。

『よし、今だ！』

アブソル先輩が辻斬りを決めようとするが・・・・。

「ゴッドアイ」

開かれる右目。

アブソル先輩の腹部の近くで大きな爆発が起こる。

『しまった・・・！』

そのまま吹き飛ばされる先輩。

ぼくが叫ぶ暇もなく、ジュンは何と目を瞑らず開けたままグレイシ

アとボーマンダとゼロを目視する。

ブウン

ズガァァァン。

響き渡る大音響。

グレイシアとゼロとボーマンダ先輩は回避する暇も無く、爆風に吹き飛ばされてダウンしてしまう。

なんで・・・。１度“ゴッドアイ”を使ったら、１０秒のインターバルがあるんじゃ・・・。

「残念ね。ゴッドアイは連続して使えるのよ。普通は１０秒の充填時間を置かなければいけないけど、そのインターバルを前倒しに出来るのよ。最もこの無茶な使用方法は体にかなりの負担をかけるけど」

そうか・・・そうだったのか。

ジュンが再び右目を瞑る。右目の端からは血が涙のように流れている。

インターバルを前倒しに・・・・と言うことはアブソル先輩にボーマンダ先輩、グレイシア先輩そしてゼロに合計４回“ゴッドアイ”を使用したのなら、次の発動までには４０秒のインターバルが必要のはず！

それにジュンが一々目を瞑る必要性も分かった。あの技は１度使用

するたびに目を休ませなければいけないからだ。相手に行動は左目で観察し、右目で“ゴッドアイ”を起動させる・・・。

『一気に畳み掛けましょう！オパールさん、メタグロスさん』

『ええ！』

『ああ・・！』

ぼく達は一斉に走り出す。それぞれが自分の持てる最高威力の技を繰り出す。

「亜空切断」

ジュンは亜空切断を連射していくる。でも、これまでの蓄積ダメージからか威力は弱まっていた。

「守る」

『！？』

ジュンの周りにエネルギーの膜が発生する。どうやら次のゴッドアイ発動まで自分の身を守る算段をしたらしい。

ぼく達の攻撃がことごとく弾かれてしまう。

ジュンが右目を瞑りつつ、左目でぼく達をじっと見ている。

まずい、後１０秒しか・・。

『シャワーズさん、よく聞いて下さい』

その時ぼくの横で戦っていたオパールが耳元で囁く。

『私が彼の攻撃の囮になります。その間に貴方はとにかく素早く動いて次のインターバルを待ってください。ジュンさんはインターバル前倒しのゴッドアイ使用で疲弊しています。もう連続で使うことは出来ないでしょう』

『でも・・そんな！』

『頼みますよ』

オパールは薄っすらと笑うとジュンの目の前に飛び出していった―

「ゴッドアイ」

開かれる右目。

ブウン。機械音と共にオパールの体が爆発に巻き込まれる。

吹き飛び、壁に体を強打してしまったオパールは呻くとそのままダウンしてしまった。

ジュンは右目を再び閉じようとするが・・・。

「Ｍｋ―？。そのままゴッドアイを続けて使用しなさい」

エリカの命令にジュンは右眼を閉じず、そのままメタグロスを目視する。

『ぐ・・・！』

吹き飛ばされるメタグロス。そしてさらにそこにジュンの亜空切断が打ち込まれる。

どうやら持ち越しのゴッドアイの連射は2発が限界だったらしく、ジュンは苦しそうに呻き右目を瞑る。

ぽたぽたと床に右眼の端から出た血が涙のように落ちる。

残る戦力はぼくだけ・・・。

残り２０秒のインターバル。この２０秒に決めなければぼく達はジュンを救えない。

ぼくは・・・負けるわけにはいけない！

『ハイドロポンプ！』

「守る」

ジュンは再び守るを起動させようとするが・・・守るは発生しなかった。どうやら技の発動を失敗したらしい。

「亜空切断」

ジュンはエネルギーの刃を連射してくる。ハイドロポンプは亜空切断と相殺してしまった・・・。

あと１０秒！

『波乗り！』

「神通力」

又しても相殺・・・！

あと・・あともう一歩なのに！

もう残り5秒しか・・。

ぼくはもう一度波乗りを放つが、今度は「守る」で防がれてしまう。

そして、開かれる右目。

「ゴッドアイ」

ぼくは覚悟してスッと目を瞑った。

ゴメンね・・・ジュン。助けられなくて・・。

しかし僕を襲ったのはドンと突き飛ばすような衝撃。

僕は横に手で突き飛ばされ、代わりにリーフさんがゴッドアイの直撃を受けてしまう。

リーフさんは壁際まで吹き飛ばされてしまった。

『―ッ！・・リーフさん』

そうか・・・リーフさんがぼくを庇って・・・！

残り１０秒のインターバルを稼いでくれたんだ・・・。

「リーフ・・・？」

その時ジュンの顔に戸惑いの表情が浮かぶ。

薬品による支配が薄れている！

『ハイドロポンプ！』

ぼくは最後の力を振り絞ってハイドロポンプを放つ。

激流に押されジュンは床に叩きつけられてしまう。

「あれ・・僕は・・」

『正気に戻ったんだね！』

シャワーズがジュンに抱きつく。

「あ・・・シャワーズ、なんで・・・」

ジュンはキョロキョロと周りを見渡し、直ぐに悟った表情になる。

『これは・・・僕がやったの？』

「・・・ジュンは薬品で操られていたんだ」

ジュンはポケモンハンターだ。だから、ポケモンに対してはそんなには優しくない。

しかし自分仲間には特別な感情を抱いていた。

その仲間を・・・自分が・・他でもない自分が傷つけた。

「シャワーズ・・・・ゴメンね・・・それに・・・ありがとう」

何故だか頬を涙が綱っていく。

嬉しかった・・・自分の仲間が絆を見せてくれたから。

今度は僕が見せる番だね・・。

『ジュンは謝らなくていいよ・・・・それよりも元に戻ってくれて・・・よかった。本当に』

「なるほど、自我が戻ったのね」

エリカは装置の上に腰かけ、面白いものを見るかのような目でジュン達を眺めている。

「エリカ・・・」

ジュンは立とうとするが、体に力が入らずそのままへたり込んでしまう。

その時、倒れていたリーフが鞄に手を突っ込み何かを投げつける。

閃光手榴弾だ。

どうやらリーフは気がついていたらしく、機会を伺っていたようだ。

辺りを包み込む閃光。それに爆音も合わさり、視覚、聴覚、平衡感覚が一瞬麻痺する。

ただリーフの手がジュンを抱き上げた感覚、そしてリーフがジュンを連れて逃げている時の感覚はわかった。

親友リーフの腕で安心したのか、極度の疲労でジュンはいつの間にか眠ってしまった。

「ジュンを逃がしてよかったんか？」

リーフがジュン達を連れて逃走した後しばらくして視覚と聴覚が回復したエリカに話しかけるアキラ。

キメラ達の入っているカプセルやそれを制御する装置は特殊な防御壁に守られ無事だったが、研究所内部は激しいバトルでめちゃめちゃになっていた。

アキラは装置の上に腰かけ、足を組みつつ組んだ足の上に肘を乗っけて頬杖をしている。

どうやら一部始終を知っているらしい。

「いいのよ」

「でも自分プロジェクト・キメラを話しやろ?・・・・・マズイんちゃうの。ジュンの奴絶対計画を阻止してくるで」

その言葉にエリカは薄っすらと笑う。

「彼に計画を話したのも、ここから逃がしたのも全て計算の内。P・H・CとCICを潰してもらうためにね。私の計画の進行上、もうP・H・CとCICの補助は不必要な段階になったから」

「そうやったな・・・」

「彼は必ずP・H・Cの陰謀を潰そうとしてくるわ。それを利用してやるのよ」

「そうや」

アキラが思い出したようにゴソゴソと鞄に手を突っ込む。

「自分今日誕生日のはずやろ。これ」

アキラが取り出したのはネックレス。ペンダントトップは水晶で出来たモンスターボールである。

エリカはこの予想外のプレゼントに珍しく驚いた表情となっていたが、ネックレスを受け取るとそれを首につけた。

「で、どうするん?早よ準備を進めんとあかんのやろ?」

「・・・そうね、P・H・Cはもう直ぐ終わる。・・・・でも、他の協力者達に連絡をしておかなければね」

エリカがネックレスを手で弄りながら呟く。

夜はもう明けようとしていた―

第五十五話　暗躍する者達

暗く、差し込むわずかな光のみが会議室を照らす。

「なあ、エリカ・・・あいつ等遅れてるんとちゃうん？」

そんな中椅子に腰掛け、手持ち無沙汰な表情で足をプラプラさせているのは色黒の青年、アキラだ。

エリカは黙って腕を組んで目を瞑っている。

「よ～遅くなったぜ」

会議室のドアを開け入ってきたのは一人の青年。年は２０代中ばほど。

身長は１８０ｃｍほど。細身だが、筋肉質な体は明らかに一般人ではない。短くカットされた金髪がかった髪の毛をしている。

特に服装は明らかに特殊部隊そのものであり、胸のロゴにはＣＩＣの文字がある。

さらに胸元のホルスターには銃が収納されている。

「レオン、遅いんちゃうん。自分軍人やろ、時間は守らなあかんで」

レオンと呼ばれた青年は少し笑みを浮かべたまま椅子に腰かける。

「どうでもいいんだよ、そんなことはな・・・」

レオンは実はＣＩＣ直轄の陸軍機動部隊「デルタチーム」の隊長である。

「デルタチーム」は少数精鋭の特殊部隊で主に対テロの作戦時に活躍し、他の部隊から賞賛と信頼を得ているいわばエリート部隊である。

「隊長さんはお忙しいのよね」

レオンに続いて入ってきたのは、２０歳ほどの女性。フレーム無しの眼鏡を掛けていて、その容姿は知的な美人といったところ。

白衣を着ているが、胸のロゴにＣＩＣの文字が入っていることから察するにＣＩＣの研究員であろう。

「ロザ、自分も遅刻やで」

アキラの言葉にロザは薄っすらと微笑みつつ、レオンの隣に腰かける。

「全員揃ったわね」

エリカがホワイトボードを引き寄せる。

「これから我々【スキエンティア】の今後の活動内容を会議するわ。まず、レオン・Ｊ・ホーガン、初めて」

「陸軍内部は何時もと変わらず、だな。皆俺達の存在には気づいていない。ただ、隊員達の中にはＰ・Ｈ・Ｃの人使いの荒さに反感を

覚えてる奴もいるがな」

「次はロザ・フォール」

「こっちも進展なしですわ。ただ、ＣＩＣの新型の輸送機「マザーステルス」がもうちょっとで大量生産レベルまで持っていける感じよ」

ロザ・フォールはＣＩＣ兵器研究開発部の研究員である。

特にレオンとの関係が深く、常に実戦の話を彼から聞いている為彼女の提案する新型兵器案はとても上層部のウケが良いらしい。

「なるほど、ではアキラこちらの報告を」

「えっとなぁ・・・手短に言うとな、計画が最終段階に入ったちゅーこっちゃ」

その言葉にレオンとロザがお互いに顔を見合わせる。

「ついに・・・Ｐ・Ｈ・Ｃが破綻する時が来たか・・・」

レオンがため息ともつかぬ息をスッと吐く。

「ＣＩＣはプロジェクト・キメラの停止のはずよね」

ロザの問いにエリカが深々と椅子に身を委ねながら言う。

「そう。そしてＣＩＣが打撃を受けている隙に我々の方に取り込むわ。・・・レオン、分かっているわね」

エリカは銃を手で弄っているレオンに言葉を向ける。

「分かってるさ。隊員達の士気の低下にあわせてキメラの力を提示するんだろ。で、こっちに取り込む」

「信用される隊長が見せる“力”は気落ちしている隊員達にはとても魅力的に見えるわ。レオン、我々【スキエンティア】の兵力の増大はあなたにかかっているのよ」

エリカの言葉にレオンは黙って銃をホルスターに収納する。

「それとロザ、あなたには【スキエンティア】の新兵器開発に携わって貰うわ」

「マザーステルスはどうするの？」

「あれは私達の役に立つわ。ぜひ利用したいわね」

ロザは眼鏡を人差し指で軽く押し上げると、そのまま持参したノートに書き取っていく。

「私達の計画もいよいよ最終段階よ。アキラ、レオン、ロザ。あなた達の働きに期待しているわ」

三人はそれぞれ頷く。

会議はその後１０分後して終わり、レオンとロザそしてアキラが会議室から出る。

彼らは今廊下を歩いているのだ。

「ったくP・H・Cの奴らもそうだがエリカもだ。軍人を駒としてしか見てないんだよな」

「実際駒でしょう、レオン。あなた達はそのための優秀な精鋭なんだから」

ロザの言葉に一瞬レオンがムッとする。

「まあまあ、レオンにロザ。仲良ぅしなあかん」

「まあ良いさ。俺達は新しいステージに行くんだからな」

「ええ」

レオンとロザは廊下の曲がりを歩いていった。

「エリカ、自分のために俺は地獄のそこまで行くと決めたんや・・・絶対にな」

アキラはそう呟くと廊下を一人で歩いていく。

意思のこもった目には迷いは無い。

彼は突き進む。その先に何が待っていようと、彼はただ歩み続けるだろう。

全ては彼女のために。

運命の歯車が動き出そうとしていた―

第五十五話　暗躍する者達（後書き）

スキエンティア（Ｓｃｉｅｎｔｉａ）はラテン語で「知識」を意味します。

ついでに軽くキャラ紹介です。

レオン・Ｊ・ホーガン。
２６歳。
ＣＩＣの陸軍特殊部隊の精鋭「デルタチーム」の隊長。
部下からの信頼も厚く上層部からのウケも良い。
エリカの協力者の一人。
階級は大尉
胸元のホルスターに入っているのはＨ＆ａｍｐ;Ｋ　ＶＰ７０。専用ストックをつけて３点バーストが出来る銃である。

・・・それとロザについては次回辺りで紹介します。

今回は新しいキャラが出てきました。

どうでした？

軍人を登場させるのは初めてなので、そちらに詳しい方に意見を頂きたいです。

第五十六話　リーフ邸で

暖かな日差しに、ジュンはスッと目を開けた。

柔らかい真っ白なベッドと掛け布団。窓の外にはポッポやスバメ達が囀っている。

「ん・・・ここは・・？」

意識が少しずつはっきりとしてくる。

そうだ、僕は師匠に捕獲されて・・・キメラ化された後。

皆に助けられたんだ。

無意識に体をよじると、静かな寝息が聞こえてきた。

背中に体温を感じる。

まだあちこちが痛むが、ゆっくりと振り返るとそこにはリーフの顔があった。

どうやらジュンが心配で枕元で見守っているうちに、眠ってしまったらしい。

次に聞こえてきたのは複数の寝息。

ジュンがそっとベッドの下を見てみると、シャワーズ達が床で丸くなって眠っていた。

「リーフ・・・皆・・・」

ジュンは眠っているリーフの髪をそっと掻き揚げる。

今回ばかりは、人間として心のそこから感謝するよ。本当に。

「う・・ああ、ジュン起きたのか」

どうやら目が覚めたらしくリーフはふあぁと欠伸をして起き上がる。

「どうだ、体の調子は？まだ無理に動いちゃダメだぞ。ポケモンの医者に見てもらったら、体に相当の負担がかかってたらしいからな」

「リーフ・・・」

今までこんなに君達の存在に感謝したことは無いよ・・・今はただ嬉しさでいっぱいだ・・。

僕はリーフの胸にダイブする。

「な・・ジュン！？」

夜にかいたであろう汗が染みこんだパジャマに僕は顔を埋める。少し臭ったけどどうでもいい。

「ありがとう・・・」

「いいんだよ、俺達は親友同士だろ」

リーフがそっと僕の頭を撫でる。

優しい感情が伝わってくるようだ。

しばらく僕はずっとリーフの胸の中に顔を埋めていた。

「他の奴らにも礼を言っとけよ？・・・体を張ってお前を救ってくれたんだ。もう二度と捕まるんじゃねえぞ・・・お前が居なくなったら・・・俺は・・・」

僕を抱いている腕にギュッと力が入る。

「大丈夫。もう僕は消えないよ。僕は常に君達と共に歩むよ、何があっても。リーフ、僕と君は一つだ」

その言葉にリーフが上で微笑むのがわかった。

「ジュン、俺もお前と一緒にいてやる。この先に何があっても、お前の傍らにずっと寄り添ってやるよ」

「永久（とわ）に？」

僕は胸から目を上げる。

目と目が合う。

薄い茶色の目が、勝気に、本気に、優しく輝いている。

「ああ」

短く応えたその言葉は強い意志が込められていた。

「それで・・・これからどうするつもりだ？」

あの後シャワーズ達に礼を言った後僕達は朝食を食べていた。

「僕に少し考えがあるよ」

短く答える。

そう、僕には分かっていた。

神の力を一部だけでも手に入れた僕には・・・僕の元々の目的を達成することが出来ると。

「んだよ・・？」

「その前に見て」

「？」

リーフが銀のスプーンで（リーフ邸の食器等は全部銀器。ゴージャスなことだよ）ヨーグルトを口に含んだまま怪訝そうな顔をする。

僕は体に力を入れる。

リーフの目の前で僕の体が光だし・・・足や手が伸び、身長も急激に伸びていく。

カラン、とリーフがスプーンを口から落とす。かなり驚いているらしい。

僕は元の姿・・・人間の姿に変身した。

「ジュン・・お前・・！」

「どうやらパルキア、神と呼ばれしポケモンとのキメラにとっては人間の姿に戻ることなんて容易だったようだね」

やっと人間に戻れた。このことだけにはエリカに感謝するよ。

それに・・。

「どうやら僕はいつでもアグノムの姿にも変身できるようだ・・・僕の体がそう言ってる」

『ジュン、元に戻ったんだね！』

『よかったわ・・・！』

突然部屋のドアを前足で開けたシャワーズ、それにグレイシア達が僕に一斉にダイブしてくる。

僕も両腕を広げて皆を抱擁する。僕は皆を抱きかかえた。

いや正確には皆の一斉ダイブに床に倒れこんだけど。そんなことはどうでもいい。

『俺も嬉しい・・・』

『ジュン、やったな！』

『人間のジュンさんの姿、初めて見ました！』

アブソル、ボーマンダ、ゼロが僕に顔をこすり付けてくる。

その後３０分ぐらいは僕達はそうやって戯れていた。

嬉しがる皆をボールに戻すと、僕はリーフと向き合う。

「それでさ・・・エリカの計画のことだが」

先ほどの笑顔とはうって変わって真剣な表情のリーフ。

「止めるのか？」

その問いに対する答えは決まっていた。

「うん。プロジェクト・キメラは潰すよ」

僕はリーフにプロジェクト・キメラのあらましを説明する。

リーフは黙って紅茶を啜りながら聞いていたが、やがて口を開いた。

「対ポケモン支配計画か・・・。ジュン、お前はそれを阻止したいのか」

「勿論。・・・人間にポケモンが資源として一元的に管理される制度が作られれば、僕が自由にポケモンを捕まえられなくなる。商売上がったりだ」

「それだけが理由かよ?・・・違うだろ」

リーフが僕を覗き込んでくる。面白がっている目だ。

「まあ・・・あれだよ・・・えっと」

ずっとポケモンハンターをしてきたせいで、こういうことを言うのはちょっと・・・あれだけど。

「ポケモンを救ってやりたいと・・・思わないでもない・・・かもしれないからさ」

その言葉にリーフがニヤリと笑う。

「正直じゃねえな・・・でもハンターのジュンがポケモンを救うか・・・面白いぜ、俺も協力する。一緒に『プロジェクト・キメラ』を阻止しようぜ」

僕はポケモンに対して優しいわけじゃない。ポケモンレンジャーでもポケモン救助部隊でも、ましてや正義の味方でもない。

でも、そんな僕にも少しは・・・ポケモン一般に対する何らかの・・愛情があるんだ。

「で、具体的にどうすんだ？Ｐ・Ｈ・Ｃだけならともかく、後ろにはＣＩＣも絡んでるんだぜ？」

「ねえ、リーフ。気がつかない？」

「？」

僕は静かに口を開く。

「エリカは僕に計画を話した上に、力を与え、君達と共に逃がした。おかしいとは思わない？」

「言われてみればそうだな」

「秘密保持のためには僕達をあそこで消しておくのが一番だ。リーフ達が助けに来るのは彼女は知っていたんだから、エージェントでも配置させておけばいつでも殺せたはずだ」

そう、僕は自分の推理に確信を持っている。

それは―

「エリカはわざと僕達を逃したんだ、おそらくね」

「っ！？馬鹿な・・・何のために！？」

「・・・Ｐ・Ｈ・Ｃを潰し、ＣＩＣに大打撃を与えるためだと思う。エリカは僕達がプロジェクト・キメラを潰すように誘導している。僕と君達が計画の全容を知ってなお知らん振りが出来ない性格

であることを計算に入れてね」

「くそ、あいつ」

リーフ顔に手を当てる。考え事をするときの癖だ。

「でも、逆に考えればさ、俺達が計画を潰そうとしても消されたりする心配はないわけだ」

「うん。だから彼女は僕達の侵入や計画が露出していることはＣＩＣやＰ・Ｈ・Ｃには話していないと思う」

しばし訪れる静寂。

「なるほどな、で具体的にどうすんだ？」

「僕に考えがあるよ」

焦らす様に言うとリーフがむっとする。

「焦らすな。さっさと言えよ」

「国際警察を利用する」

「・・・・・・・・へ？」

ポカンと口をあけるリーフ。しばらくたってその言葉の意味がようやく理解出来たのか、リーフが戸惑った表情になる。

「おい、ジュン！冗談だろ！？よりにもよって国際警察かよ！おい

おい・・よしてくれ」

「冗談だと思うかい？」

ジュンの反復にリーフが口ごもるも直ぐに反論する。

「でもさ、あの組織はデカイんだぜ！しかも俺達みたいなポケモン関連の犯罪者を必死に追ってる正義感溢れる奴らの集まりだ！そんなの・・」

「でもね、リーフ。Ｐ・Ｈ・ＣとＣＩＣの両者に対抗できるのは国境を超え、国同士の利害に囚われない機構。国際警察の権力と力が必要不可欠なんだよ」

「・・・・手があるのか。プロジェクト・キメラの情報を渡すだけじゃ、Ｐ・Ｈ・ＣとＣＩＣの陰謀を潰した後俺達がやばいぜ？」

「そのために法律も利用するんだよ」

その言葉にリーフがスッと目を細める。

「警察も法の下にいる、か。奴らを先に法で固めておく・・・・司法取引だな」

司法取引とは捜査に協力をすることで罪状の減刑又はいくらかの罪状の取り下げを行うことである。

「司法取引を国際警察に持ちかけて僕達の身の安全を確保する。国際警察もポケモンハンターの捜査より、ポケモン兵器化の捜査を優先させたいだろうし」

そこまでジュンが言うとリーフが「まて」と言う。

「ジュン、俺達は確かに安全かもしんねえ。だがよ、他のハンター達はどうすんだ？Ｐ・Ｈ・Ｃが潰れれば・・・・雇われハンター達も一緒に豚箱だ」

「大丈夫。Ｐ・Ｈ・Ｃのハンターリストにハッキングした後ウイルスを送り込んで、当該データを破壊する。それと同時に全ハンターのリストを僕のメモリーチップにコピーする。そうすればハンター全員の情報はＰ・Ｈ・Ｃのデータバンクからは消え去る、そして・・・それをプロジェクト・キメラの情報と一緒に国際警察に渡す」

「馬鹿な！仲間を売るのかよ！？」

リーフが怒鳴る。

「まあもうちょっと聞いてよ。ただしメモリーチップには情報を引き出そうとすると、チップ内の全てのデータが破壊されると同時に、差し込んだコンピューター内の近似している情報をも全て抹消するプログラムを仕込んでおくんだ」

ニコニコしながら言うジュンにリーフが呆れたような表情をする。

「国際警察にハンターの情報を渡して、奴らがその情報を喜び勇んで開けた瞬間、ハンターの情報もそして国際警察のデータバンクのハンター関連の情報も一気に破壊する作戦か・・・・ったく！腹黒い野郎だ。サイバーテロまんまじゃねえか。」

「サイバーテロねぇ・・・うん、そうだね。でもさ、僕は嘘つきで

腹黒いんだよ？知らなかった？」

ジュンがうれしそうにヨーグルトを食べるのをリーフは「こいつの敵じゃなくてよかった」と思いながら見ていたのだった―

第五十六話　リーフ邸で（後書き）

リーフ「ジュン、ハンターの次はテロリストにでもなる気か？」

ジュン「失礼だね、僕がやるのはサイバーテロだよ！」

リーフ「同じだろ（汗）。大体なんで国際警察にそこまで・・・・・利用した挙句に捨てるってか？」

ジュン「僕警察とか軍隊とか嫌いだから」

リーフ「・・・・・（汗）」

第五十七話　取引と・・・・

それは一本の電話から始まった。

ここは国際警察、ポケモン関連犯罪課、ポケモンハンター対策本部。

かかってきた電話は通報専用だった。

「はい、もしもし。国際警察、ポケモンハンター対策本部です」

俺の横でリサが電話を取る。

俺は国際警察のコウキ。そして横で電話対応をしているのが同期のリサ。

俺達はポケモン関連犯罪課で日々ポケモンを悪用する奴らを追っている。

しばらく通報者と話していたが、表情が真剣になり、メモを急いで取り出した。

「どうした？」

俺は電話を切ったリサに尋ねる。

「ポケモン関連の犯罪で最悪に近いものの情報を持っているから、この近くのジュゴンの噴水まで一人で来いって・・・」

「悪戯じゃないのか？」

「いいえ、それにしてはかなり慎重だったし・・・」

リサが首を振りふり言う。

「よし、俺が行こう」

「なら、これをつけて」

リザがコウキの内ポケットに小さな装置を滑り込ませる。

「今のは盗聴器よ。これからの情報提供者との会話は私のコンピューターに録音されるわ。もし本当に価値のある情報なら、コウキ。あなたのお父さんに直接渡すわ」

「サンキューな」

礼を言うと俺はジュゴンの泉に向かった―

「本当に来るのか？」

僕の横でリーフが腕時計をちらちら見る。

ここは国際警察本部の近くの公園。ジュゴンの石像が口から水を出している噴水があり、「ジュゴンの泉」と呼ばれている場所だ。

「彼らはポケモン関連の犯罪には躍起になってる。・・・食いついてくるよ」

僕には確信がある。

「来た」

ボソリとリーフが呟く。

僕達の視線の先には一人の少年が。

あの顔には見覚えがある・・・・!!!

確か以前僕と戦った国際警察の少年A

「お前らが情報提供者か？俺は国際警察。ポケモン関連犯罪課、ポケモンハンター対策本部のコウキだ」

国際警察の少年Aもといコウキが僕達に近づいてくるが・・一瞬にして固まった。

僕も同じようにしていたんだろう。唖然としていた。

周りの時間が止まったように思えた。

「え、どうしたんだ？」

リーフが戸惑った表情で僕達を交互に見る。

「お前！！・・・・前森で戦ったポケモンハンター！・・・・それにテメエは闇のバイヤー、リーフ！」

「君は僕とユウタが倒した国際警察の奴！」

コウキが僕達にリボルバーを突きつける。Ｓ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ３６通称「チーフ」と呼ばれている銃だ。

「おっと情報提供者に対してそれは無いんじゃない。それに自己紹介が未だだったね。僕はポケモンハンターのジュン、よろしく。さて、僕を信用してくれるなら、銃をおろしてくれないかい？」

僕の言葉にコウキがＳ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ３６を突きつけたまま怒鳴る。

「ポケモンハンターと闇のバイヤーからの情報なんて信用できるか！それにお前らの逮捕が俺達の目標だ！言っておくが、俺達国際警察のポケモン関連犯罪課はポケモン関連の犯罪に関与している疑いのある奴を逮捕できるんだよ、逮捕状が無くてもな！」

「まあまあ落ち着いて。ワームホール」

ジュンの言葉と共にコウキの手からＳ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ３６がシュン、と消え去る。

「え・・・な・・・何をした！？」

突然のことで戸惑うコウキ。

「ただ君の銃を時空間移動させただけだよ」

するとジュンの手にS&W　M36が現れる。

「さて、国際警察のコウキ君」

ジュンは微笑むと銃をコウキに突きつける。

「司法取引だ。これから僕は君達に二つのビッグな情報を提供する。その代わり僕とリーフには事件後も手を出さないと約束するかい？」

「・・・その情報が俺達にとってデカイかどうか分かるまでは取引はしねぇ」

コウキが若干震えながらも真っ直ぐに見返してくる。

「はは、そうだね。なら話してあげるよ。どうせ盗聴器か何かを仕込んでるんだろ？なら、盗聴してる人たちにも聞かせてあげるよ」

ジュンは「プロジェクト・キメラ」についてコウキに話し出した。

「馬鹿な・・・P・H・CとCICがつるんでポケモン支配の計画だと・・！」

コウキがあまりの事に絶句し、拳をギュッと握る。

「そうだよ、さあ僕とリーフの身の安全を保証してもらおうか？あ、この会話は僕のほうでも録音してるからね」

コウキはしばらく黙っていたが、やがて口を開く。

「証拠はあんのか？」

コウキの問いにジュンは笑うと、ポケットかた小さなデータチップを取り出す。

「それは強制捜査をＰ・Ｈ・Ｃのポケモン理工学研究所にすれば分かることさ・・・それからこれは君達に対するプレゼントさ。僕の情報が本物である証拠では無いけど、この情報に匹敵するものだよ」

怪訝そうにそのチップを見るコウキ。

「何だよそれ？」

ジュンはＳ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ３６を手で弄りながらなんでもないように言う。

「Ｐ・Ｈ・Ｃの雇っているポケモンハンター全員のデータ」

二度目の爆弾にコウキが驚くが、直ぐに目つきが鋭くなる。

（来た・・・）

心の中でほくそ笑みながらも、ポーカーフェイスでいるジュン。

「・・・・・そいつを俺達に？」

「ああ、Ｐ・Ｈ・Ｃの計画の阻止と司法取引での僕達の身の安全を保証するなら」

その時コウキの携帯が鳴る。

「リザか・・・ああ、そうか！親父が・・・ああ、気に食わないが、命令なんだな？よし、了解だ」

コウキはピッと携帯を切るとため息をつく。

「親父が司法取引をしろと言ってきた。国際警察長官の命令だ」

「へえ、君の父親は長官なのか・・・」

これには驚いたよ。まあ僕にとっては好都合だ。

「テメエら悪人、特にジュン！お前みたいなポケモンハンターと取引するなんて反吐が出そうだが・・・長官（おやじ）の命令だ。仕方なくやってやる」

「それは光栄だよ」

「じゃあその情報を渡せ。それから俺の大事な銃を返せ」

コウキが手を出してくるが、ジュンは動かない。

「命令口調で偉そうだな・・・。まあそれはいい。情報は全てが終わるまでお預けだよ」

コウキは舌打ちをすると、ジュンに言い返す。

「銃は返せ！それは俺の親父から貰った大切な銃だ」

「そんなにきつい口調で言わなくても返してやるよ」

ジュンが銃を放り投げ、コウキがそれを受け取りホルスターに戻す。

「今から国際警察本部に来い。・・・・作戦会議だ」

コウキの苦々しい口調にジュンはクスクス笑う。

「悔しいよねぇ・・・長年追ってきた犯人が今ここにいて、警察の捜査本部に入ってくるに逮捕できないんだから」

「テメエ・・・」

睨むコウキにジュンは笑顔で答える。

「国際警察には協力させてもらうよ。・・・・警察の皆が歓迎ムードで迎えてくれることに期待しようか」

国際警察のビルに向かう途中、リーフが僕に耳打ちをしてくる。

「大丈夫か？本当に・・・」

僕は笑って返す。

「平気さ。それに僕のキメラ能力『空間支配』のワームホールでいつでも逃げ出せる。彼らが約束を反故にしても関係ないよ。どっちにしろ、彼らも僕達を必要としてる。今は協力関係で円満に過ごせるさ」

「そうかよ」

若干ビビッているリーフとは裏腹にジュンは満面の笑みを湛え警察内に入って行く。

コウキについていくこと数分。ジュン達は国際警察、ポケモン関連犯罪課、ポケモンハンター対策本部にいた。

周りには大勢の警官がいて、皆それぞれジュンとリーフを睨んでいる。

どうやら先ほどの会話がこの場の全員の耳に入っていたらしい。

リーフはすっかり縮こまっているが真反対にジュンは嬉しそうな表情だ。

そしてそのジュンのニコニコ顔が場の（コウキを含めた）全ての警官の怒りと悔しさに油を注いでいることをジュンは知っていた。

「お初にお目にかかるよ。僕はポケモンハンターのジュン。よろしくね、国際警察の皆さん。まあこれから協力していくわけだからお互い友好的に、ね」

「えっと・・・お・・俺の名はリーフ・・え、あ～・・よろしく」

その場の怒りのオーラがジュンとリーフを直撃する中、一人の男性が進み出てきた。

年は２０代後半で髪が茶色。細身だが軍人のような立ち振る舞いだ。

「俺は国際警察、ポケモン関連犯罪課、ポケモンハンター対策本部ののシゲル警部だ。よろしく」

「こちらこそ」

シゲルとジュンはお互いに握手しあう。

「俺達国際警察に情報を提供してくれたことを感謝する・・・・一応な」

「僕もプロジェクト・キメラを止めたいと思っていますから。あなた方無能な警察も使いようによっては役に立つでしょう？」

その言葉にシゲルが乱暴に握手を止め、ジュンの手を振り払う。

「あまり調子に乗るなよ、ポケモンハンター・・・・俺達の堪忍袋が切れないうちですませたいだろ？」

その言葉にジュンは笑みを浮かべる。

「僕達の情報が無ければ、プロジェクト・キメラどころかハンターさえ止められない無能なあなた達に僕は協力してあげるんですよ？・・・・感謝して欲しいです」

「テメエ！」

遂に切れたらしくコウキがジュンの胸倉を掴む。

「おっと僕は今君たちにとって民間人だ・・・。いいのかい、警察官が暴力に走っても」

おちょくる様な言葉を投げつけるジュン。その姿にリーフは違和感を感じていた。

（おかしい・・・ここまで他人を見下した態度。何時ものジュンはそんなことをしない・・・なんでだ）

「離せよ。国家権力を笠に着た犬が」

「コウキ、静まれ」

シゲルの言葉にコウキが荒い息をしながらも手を離す。

「僕の嫌いなもの。それは警察と軍隊だからね」

「おい、ジュン」

リーフは国際警察の建物から出た後、ジュンに話しかける。

ジュンとリーフの詳しい説明により国際警察が後日Ｐ・Ｈ・Ｃに強行捜査をすることが決定したのだが・・・。

その話し合いの後の帰り道でのことだった。

「何？」

「お前なんで警察の奴らにあんなことを・・・・」

ジュンはなんでもないように言う。

「だから言ったでしょ？僕の嫌いなものだからね」

その言葉にため息をつくリーフ。

「まあ、ジュン。分かるけどよ、あそこまで言うことないだろ。育ての親が悲しむぜ・・・って育て親もハンターか」

「ハンターだったんだよ」

その言葉に違和感を覚えるリーフ。

「だった？今は現役退いてんのか？」

「リーフ、親友の君に僕の育て親が会ってないのはおかしいとは思わない？」

リーフが顔を上げる。

確かにリーフはジュンの育て親について色々と聞かされていた。

だが会ったことは無い

普通親友同士ならその親同士も知り合い同士になるはずだ。現にジュンはリーフの親とも面識がある。

（そう言えば、ジュンは何時も親の話になると口をつぐんでいた・・・なんでだ？）

「そうだな・・・なあ、教えてくれよ？」

「僕の育ての親は殺された」

その言葉にリーフが絶句する。

「一体・・・誰に？」

「国際安全保証軍（Ｕｎｉｖｅｒｓａｌ　Ｓａｆｅｔｙ　ａｓｓｕｒａｎｃｅ　ａｒｍｙ）通称ＵＳＡ２を知っているね？」

ＵＳＡ２（ユーエスエイツー）とは国際間の情勢に囚われず、各地で起こる紛争やテロに介入し、平和維持活動をする軍隊のことである。

国際警察とは兄弟組織にあたり、巨大さでは国際警察を遥かに凌駕する。

国際的な犯罪は国際警察が、そして国や地域同士の紛争やテロの制圧にはこの軍が独自に乗り出す。

一般的には両組織とも平和を守る組織として広く認知されている。

二人は近くの公園にまで来る。

ジュンはその公園の手すりに腰をかけると口を開いた。

とても悲しそうな声だった。

「育て親は・・・いや“達”と言っておこう、複数だし。・・・・・彼らはＵＳＡ２と国際警察に抹殺されたんだ」

第五十七話　取引と・・・・（後書き）

ＵＳＡ２はこれから重要な存在となりますので、覚えていてください。

物語に深く深く関わってきます。

さて、次回はジュンの忌まわしい過去が明らかになります。

第五十八話　忌まわしい過去

「あれは僕が１４歳の時だ」

静かに語りだす。

今から約二年前。ジュンが未だＰ・Ｈ・Ｃの公式ハンターになる前。

ポケモンハンターＪの付き人兼部下として日々を送っていた。

Ｊ師匠の部下として飛行艇で働いていたんだ。具体的には艇内の掃除・洗濯・家事そしてＪ師匠の補佐と僕自身の任務。

まあ飛行艇内は犯罪者達の集まりみたいな所だったけど、僕は結構気に入っていたな。

飛行艇内をモップで掃除したり、自分の部屋を飾ったり、艇内の食堂じゃ料理も作ったよ。

師匠が指揮を取る飛行艇だったけど僕の家みたいな場所だったからね。空飛ぶ家さ。

それに師匠の部下としてそれぞれ任務に出る前のハンター達を送り出したりもして、僕の帰る場所だったんだ。

そんなある日。

事件は起こった。

僕はその日、ポケモン達と一緒に森で散歩をしていた。日々のストレス解消のためにね。

「今日は暑くも無く寒くも無い、絶好の散歩日和だね、アブソル」

アブソルも嬉しそうに鳴く。

「ソルゥ」

僕はボーマンダの上に座ってアブソルを膝で抱っこしながら森林浴を楽しんでいた。

目を瞑ると聞こえてくるのはポケモン達の声と風の音。涼しい風が心地よい。

「師匠も来ればよかったのに」

J師匠は任務があるとか言って他の場所に繰り出しているし、飛行艇にいる皆は艇内で仕事しているし。だから僕だけで森林浴に行くことにしたんだ。

「僕と同年代の奴が居ないのが寂しいな・・・」

僕は空で待機している飛行艇を見上げる。

長方形の飛行艇は日の光を受けて少し輝いていた。

「さてと、じゃあお弁当を食べようか。今日は木の実サンドだよ」

パカリと軽快な音を立て、弁当箱を開ける。

中にはサンドイッチが入っていた。

ボーマンダとアブソルが僕が広げたサンドイッチを頬張る（シャワーズとグレイシアはこの時居なかった）

ジュンはふう、とため息をつく。

（普段は任務に追われてなかなかリラックスする機会が無いからな・・・今日は楽しもうか）

この頃からジュンはポケモンハンターとしての才能を開花させていた。

既にＪの部下を止めても独立してやっていけるほどには稼げるようになっていたのだ。

未だ最大の顧客であり親友でもあるリーフとは出会っていなかったが、Ｊの部下の仲でも１、２を争うほど優秀だった。

そしてだからこそ１４歳の少年が感じたり遊んだりすることからはかけ離れた生活を送っていた。

「僕も何時か人間の友達が出来るかな」

アブソルとボーマンダを交互に撫でながら少し不安そうに呟くジュン。

そんなジュンにアブソルは顔を舐めてやる。

「ありがとう。アブソル、心遣い感謝するよ。でも涎で汚れるからやめてね」

ジュンはハンカチで顔を拭きつつもう1度アブソルを撫でる。

「さて、森林浴も済んだ事だし飛行艇に帰ろうか」

ジュンがよいしょ、と腰を上げたその時だった。

轟音がジュンの耳を襲った。エンジン音のような爆音がどんどん近づいてくる。

「な、何!?」

ジュンが目を凝らすと空には5機の飛行機が。

「あれは・・・本で見たことがある。空軍のF－15とかいう・・・戦闘機だ。・・演習中かな」

でもこの辺りに基地は無いはず、と思いつつ見上げていると信じられないことが起こった。

F－15達の翼から白い円筒状の物体が放たれたのだ。

その物体―ミサイルはジュンの目の前で停止飛行をしていた飛行艇に直撃した。

それは一瞬の出来事だった。驚きのあまり声も出ない。

「一体・・・これは・・・・?」

飛行艇の機体のミサイルが直撃した右側がで爆発が起こり、激しく炎上する。

Ｆ－１５の部隊は１度旋回し、そのまま飛行艇を機銃掃射する。

強力な機関銃が飛行艇を襲い、おそらくは四つあるうちのエンジンの一つが破壊される。

飛行艇は炎上しながら高度が下がってきた。

「・・・Ｊ師匠の飛行艇が・・・そんな、中には５０名を超えるハンター達がいる・・捕獲されているポケモン達も・・・なんで・・・それに・・・僕の育ての親が、リクさんが！」

ジュンの育ての親リク。彼はこの艦の中で最も優秀なハンターで、Ｐ・Ｈ・Ｃの公式ハンターでもあった。

ポケモンハンターＮＯ．１のリクはこの世界ではＪに次いで有名だった。

それが・・・僕の育て親の乗る飛行艇が・・・今にも・・・。

ポケモンハンターＪの飛行艇はもちろん武器を、エネルギー砲やプラスチック弾を積んでいる。

ただしそれらの武器は逃走時に用いたり、巨大で強力なポケモン達を捕獲するときに使うもので戦闘用ではないのだ。

ハンターとはいっても民間の飛行艇が練習を積んだパイロットが搭

乗する第一級戦闘機に敵うはずがなかった。

「皆を助けに行かないと！」

早くしないと・・・リクさんが・・・皆が・・・家が！

ジュンはボーマンダに乗り、燃え上がる飛行艇に向かおうとした。

が、手遅れだった。

飛行艇はどんどん高度を下げつつ、ふらふらと近くの崖に接近していた。

「舵を切れ！崖にぶつかる！舵を切るんだ！」

ジュンは叫びながら飛行艇のコックピットの近くにボーマンダに乗って飛ぶ。

しかし既にコックピットは火の海と化していた。制御が出来る状態ではなかった。

容赦なく放たれるミサイルや銃弾の雨を防ぐことも回避することも出来ずに飛行艇は燃え盛り、そのまま―

「そんな・・駄目だ！リクさん、皆・・・！」

崖に激突し、大爆発を起こした。

森に降り注ぐ破片。

「何事だ！」

その時、仕事を終えたＪがボーマンダに乗って帰ってきた。

さすがに驚いている。

「師匠・・・戦闘機が・・・」

「ああ、分かっている」

旋回し遠ざかる戦闘機。どうやらジュンとＪは見つからなかったらしい。

炎上し、もはや原型をとどめてさえ居ない飛行艇を前にジュンはただ立ち尽くしていた。涙も出なかった。

この攻撃による飛行艇内の生存者は０。生き残ったのは偶然外に出ていたジュンとＪだけだった―

「そんなことが・・・」

リーフが公園のベンチに座り、顔を伏せる。

「今の師匠の飛行艇と部下達は二代目ってことになる。それと後で分かったことだけど」

ジュンがジュースを啜りながら、無表情に言う。

「国際警察はポケモンハンター達に手を焼いていたらしくてね・・・どうやらトップが軍とつるんだらしい。徹底的に潰す陰謀を企てたらしいんだよ」

国際警察とＵＳＡ２がグルになった、強攻策。ポケモンハンターの総本山であるＪを飛行艇ごと抹殺する作戦だったのだ。

「でもよ、軍はハンターといえども民間人を攻撃して良いのか！？」

軍が、しかも世界の紛争地域の停戦や打倒テロリストを掲げる、国際安全保障軍ＵＳＡ２が犯罪者とはいえ民間人の飛行艇を攻撃。

それに加え、犯罪と戦う国際警察もポケモンハンター達への攻撃に加担し、わざと真実を捻じ曲げた。

ジュンにとって一番衝撃だったのは軍と警察が民間人への本格的な攻撃・殺害を強行したことだったのだ。

「明確に禁止されてるよ。だから、ＵＳＡ２の公式発表上、誤射ってことになってる」

「馬鹿な！戦争中や紛争地域ならともかく、この国で何を誤射するんだ！？・・・仮想敵国ぐらいはあるかも知れないが、普通そこまでの攻撃では誤射なんかありえねえ！大体、大型飛行艇を採用している軍はこの国の付近では存在しないんだぞ！」

「だから言っただろ。陰謀だって」

リーフは無表情に離し続けるジュンをチラリと見る。

「でもよ、この国の警察が調べればさ・・・真実が・・・」

「ここまで大掛かりな破壊をこの国の警察が調べると思う？」

「まさか、この事件を調査したのは・・・国際警察？」

「その通り。彼らは捜査するふりをして実際は何もしなかった。一時はマスコミにも取り上げられたけど、ポケモンハンター達の集団だったこともあって事件は直ぐに風化した。この作戦によってハンター達の活動が停滞しだしたのも事実。国際警察とＵＳＡ２の陰謀は大成功さ」

皮肉たっぷりに言うと、ジュンはまたチビチビとジュースを飲む。

「しかし、世界の平和維持を唄うＵＳＡ２がそんなことを」

「軍隊は怖いんだよ、リーフ。命令に絶対だということは上手く機能しているときは機動性溢れる組織だけど、一旦ブレインが暴走するとどんなことでもしてしまう。人の命より命令が優先されるんだね」

しばらく二人は黙っていたが、やがてジュンが口を開いた。

「だから僕は軍と警察が大嫌いなんだ。僕達ハンターを追ってくるからじゃないよ、命令一つで人を殺せるその点が嫌いなだけさ」

ジュンが立ち上がる。

「でもまあ、国際警察には協力するけどね」

その言葉の裏にリーフはジュンの燃え上がるような怒りと心のそこからの悲しみを読み取った。

第五十八話　忌まわしい過去（後書き）

ＵＳＡ２はこれから益々出てきます。

第五十九話　ＣＩＣ陸軍にて～ＣＩＣとＰ・Ｈ・Ｃの関係は（前書き）

今回はＣＩＣの話です。

第五十九話　ＣＩＣ陸軍にて～ＣＩＣとＰ・Ｈ・Ｃの関係は

「隊長！報告書に目を通しておいてくださいね」

ここはＣＩＣ陸軍本部の職場。レオン・Ｊ・ホーガン大尉の率いる特殊部隊「デルタチーム」が平時に働く場所である。

「ん？ああ、そこに置いておいてくれ」

レオンの空返事に報告書を持ってきた隊員はそのまま立ち去る。

今は昼休み。隊員達が集まってなにやら世間話をしているようだ。

「こう忙しいと休めないぜ。自分なんか最近彼女と会えなくてよ」

「まったくだ。特にＰ・Ｈ・Ｃの奴らが俺達を駒のように使うのが気に食わないぜ」

「俺達は国を守ってるんで、Ｐ・Ｈ・Ｃの休日や社内イベントに駆出されるためにいるんじゃないのによ・・・」

「あいつら俺達を蟻か何かだと思ってんだろ？大企業の奴らは指令権を乱用するだけ乱用して、用が無くなったらポイだぜ！」

「この間俺が警護についていたら、あいつ等なんて言ったと思う？「君達がいると威圧感があるんだよ。もうちょっと上手く警護できないの？」だとよ！」

「うわ・・・ウゼ」

「ったく俺達軍人を何だと思ってるんだ！」

レオンは何気なく報告書に目を通しながら隊員たちの会話に聞き耳をたてる。

（まったくＰ・Ｈ・ＣとＣＩＣの協力関係が出来てないな。仕方ないか、Ｐ・Ｈ・Ｃの奴らが横暴すぎるんだ）

Ｐ・Ｈ・Ｃ幹部はＣＩＣ軍に対する出動要請権及び指揮権の一部を持っているのだ。

戦いの素人に命令されて動くのは軍人としてはあまり心地いい気持ちはしないであろう。

報告書を机に置くと席を立つレオン。

「あれ？隊長、どこに行かれるんですか？」

「ちょっと用事でな」

軽く返事をするとレオンはその場を立ち去った。

廊下を歩きながらレオンは考え事をする。

（俺が【スキエンティア】に協力してからもう3年か。・・・・・エリカの作戦が成功すればＣＩＣに大打撃を与えることになるが、Ｐ・Ｈ・Ｃと縁が切れるからあいつ等にとっては楽だろう）

エリカの計算ではもう少しすれば漏洩した「プロジェクト・キメラ」

によってＰ・Ｈ・Ｃは崩壊する。

それと同時にＣＩＣがＰ・Ｈ・Ｃに協力していたことが発覚し、ＣＩＣにとっても深刻なダメージを受ける。

それに・・・。

Ｐ・Ｈ・Ｃ崩壊後【スキエンティア】はＵＳＡ２とパートナーとなる。

（俺達【スキエンティア】はキメラ技術を使ってＵＳＡ２と商売をする・・・）

そこから得た莫大な金を使えば、エリカの最終目的を達成することも出来る。

そこまで考えて歩いていると、反対方向から一人の少年が歩いてきた。

その少年はレオンに気づくと、軽く頭を下げる。

「久しぶりだな、ユウタ。いや“イプシロン”少尉」

ＣＩＣ情報部では独自の習慣がある。

それは本名を呼ばずに、コードネームに階級名をつけて呼び合うと言うもので他の部からは特殊扱いされていた。

ここで少し補足説明をしておくと、ＣＩＣには四つの“本部”がある。

陸軍本部、空軍本部、海軍本部、そして情報作戦本部、通称「情報部」である。

また情報部は陸海空軍から実戦経験のある一部の者のみが配属されるシステムになっている。

ユウタは元々ＣＩＣ陸軍の特殊部隊「デルタチーム」の狙撃班にいたのだった。

現在は情報部でＰ・Ｈ・Ｃに対するスパイ活動をしている。パートナーを監視する役目だ。

「お久しぶりですホーガン大尉」

そのまま立ち去ろうとするのをレオンは止める。

「ちょ、上官に対してそれは無いぞ。もうちょっと愛想、と言うことを覚えたほうがいいな。情報部に配属されて暗くなったな。うちにいたころはもっと明るかったような気がするんだが」

イプシロン―ユウタはくるりと振り向く。

「大尉、お元気そうで何よりです。デルタチームに俺がいたころと変わりありませんね」

レオンは少し鼻を掻く。返答に困ったときの彼のクセだ。

「その・・なんだ・・真面目一直線な喋り方はどうにかならないのか？俺とお前の仲じゃないか」

「上官と部下の関係でしょう?まあ、大尉は俺のある意味師でしたけど」

「なら、もうちっと砕けた態度でもいいんじゃないのか?一緒に寝た思い出を忘れたか?・・・・お前の寝息は未だ覚えてるんだぜ?」

「気持ち悪いことを言わないでください。あれは野外訓練の時でしょう。・・・・・・パワハラとセクハラで訴えますよ?」

ユウタの言葉にレオンがケラケラ笑う。

「元のユウタに戻ってきたな」

「・・・それは貶してるんで?」

「いや、嬉しいだけだ」

その言葉にしばし目を丸くするユウタ。

「そう言えば大尉、どちらへ?」

「白衣の少女に用事があってな」

「『プロジェクト・キメラ』ですか」

その言葉にレオンがしばし黙る。

「そうか、お前も知っているのか・・・・」

「情報部の奴らは俺も含めて全員ですよ、大尉」

「どこまでだ・・・・どこまで知っている？」

壁に寄りかかりながら何気なく聞くレオン。

「『プロジェクト・キメラ』がポケモン同士を組み合わせ、生体兵器を作り出そうとしている点。それとこの国がポケモンの支配をしようとしている点」

「・・・そこまで知っていてお前は協力するのか？」

「正直俺個人としてはこの計画を阻止したいとも、止めさせたいとも思っています。しかし、この計画が成功すれば人間はポケモンの一元的な管理が出来る。そうなれば、この国の衰退した産業を立て直せる！諸外国を追い抜き俺達の国があらゆる産業において有利になれる・・・・いや、世界一の大国にだって・・・！」

珍しく興奮した様子で話すユウタ。

その様子を黙って見つめるレオン。その目にはなんともいえない感情があった。

「すいません。つい興奮して・・・では俺はこれで失礼します。大尉もお元気で」

「ああ・・」

逃げるように足早に去っていくユウタを見届けるとレオンは再び歩き出す。

（少尉。お前も他の奴らもエリカの真の計画を知らない。知っているのは俺達【スキエンティア】のみ。本当はお前にも話してやりたいんだぜ？・・・ユウタ。俺が目標とする理想を。だけど、万が一エリカの計画が―ありえないとは思うが―潰れた場合、悪者になるのは俺だけでいいんだ・・）

「レオン！」

後ろから声がする。レオンが振り返ろうとすると、背中から腕が回される。

「ロザか・・・」

ロザ・フォール。ＣＩＣの兵器開発部門の研究員。現在２２歳で、その容姿と才能に憧れるものも多いとか。

またＣＩＣ軍内部の隊員達と直接話をして、実戦で活用できる新兵器考案が彼女の仕事でもある。

レオンと同じく【スキエンティア】の主要メンバーの一人。・・・あの組織の科学者には女性が多い。

ずっと後ろから抱き着いているロザにレオンが少々戸惑った表情になる。

「ロザ。・・・いつまで抱きついているんだ？・・・ここは軍内部なんだが・・」

レオンとの身長差が２０センチほどあるので、ロザを上から見る形

になってしまう。視線が合わないのも考え物だ。

「あ、ごめんなさい」

ロザが慌てて離れる。少し顔が赤くなっているのが分かるがレオンは気にしない。

「ここではホーガン大尉と呼んだほうがよかったかしら？」

「いや、別に気にするな」

レオンは軽く手を上げると、そのまま廊下を歩いていく。

しばらくすると一室についた。大会議室である。

扉を開ける。

電気はついてなく、代わりに日の光がわずかに差し込んでいた。

そこには一人の少女が窓の外を眺めていた。白衣が光を受けたなびいている。

「来たわね、大尉さん」

「エリカ、話があるそうだな」

「ＵＳＡ２がキメラのサンプルを渡して欲しいと言ってきたわ」

「おいおい、まだ作戦の途中だぜ？Ｐ・Ｈ・Ｃが崩壊していない今動くのは危険だ」

「ええ、民間人である私やアキラはね」

その言葉にスッとレオンが訝しげな顔になる。

「何が言いたい？」

「あなたにはＵＳＡ２にキメラのサンプルを届けて欲しいの。・・・・ＣＩＣ陸軍のあなたなら、怪しまれずにＵＳＡ２の基地にいけるわ」

「いいのか、サンプルを渡して。こっちのキメラ技術を盗まれるかもしれないぜ？」

「大丈夫よ。キメラの体を調べただけでは技術は分からない。私のコンピューターに入ってる情報が無いとキメラは作れないわ」

エリカが一つのモンスターボールを取り出す。

「この中に試作品のキメラが入っているわ。・・・これをＵＳＡ２の空軍基地まで持っていって頂戴」

「ったく。人使いがあらいんだよ、お前は・・・昼めし食ってからでいいか？」

「今すぐ行きなさい。私はＰ・Ｈ・Ｃ幹部よ？ＣＩＣの全軍に対する出動権と指揮権の一部を持っているわけ。レオン・Ｊ・ホーガン大尉。これは命令よ」

命令ならしかたないな、そう思ってレオンはボールを持って外に出

る。

（隊員の奴らが愚痴るのも分かる。Ｐ・Ｈ・Ｃの奴らは俺達軍人をパシリに使うこともあるからな）

「大尉、お使いですか？」

振り向くとそこにはユウタが立っていた。

「ん？お前さっき反対側に・・」

「忘れ物をしたもので。それよりそのモンスターボールは？」

「ああ、エリカに頼まれた。昼めしを抜いて今すぐ行けってな」

その言葉にユウタが少し笑う。初めて見せた忍び笑いだ。

「俺も前弁当を買いに行かされました。Ｐ・Ｈ・Ｃの幹部クラスの連中がＣＩＣ陸軍に来て、会議室を貸しきった挙句に隊員たちを使って５０人分の弁当を買いに行かせたそうです。しかも基地からだいぶ離れた場所に。・・・それに加えて隊員達が買って来たら開口一番に「遅い」っ言って礼も言わずに弁当をひったくったそうです」

さすがにその横暴ぶりに呆れたのかレオンがため息をつく。どうやら彼も同じ目に何度か会っているようだ。

「世界に名だたる大企業様だからな・・・隊員達は怒っただろう」

「怒ったなんてもんじゃなりません。何せ訓練中の兵士達を召集に

かけて、パシたせたんですよ。それに海外から幹部を呼ぶのに軍用ヘリを使いました。・・・もちろんパイロットに報酬なしで。それから海軍の軍艦を使って会議後の海上パーティを開いたそうですよ。そのために海軍のほうはスケジュール調整をしなきゃいけなかったみたいです」

陸海空軍をそこまで利用しまくるとは、ある意味立派だ。

そこまで行くと苦笑しか出来ない。

「隊員達がその日散々Ｐ・Ｈ・Ｃに罵詈雑言を吐いてました。陸海空軍＋情報部でほぼ１００パーセント、階級に関係なしで皆怒りまくっていました」

「なるほどな」

レオンとユウタはしばらく話すとそのまま別れた。

（大丈夫さ。Ｐ・Ｈ・Ｃはもう少したら崩壊する。そして【スキエンティア】の目標が成功すれば・・・世界は変わるんだから。もう、いろんなことに惑わされることも無い。ただ残念なのはＣＩＣを裏切らないといけないトコかな・・・）

そんなことを考えながらレオンは歩いていく。

彼の行く先に待っているものは一体何なのだろうか―

第五十九話　ＣＩＣ陸軍にて～ＣＩＣとＰ・Ｈ・Ｃの関係は（後書き）

今回の話はこれからの展開の鍵を握ります。

それに加えてＣＩＣの内部のストーリーです。

ちょっとギャグ要素も入っていましたが、いかがでした？

Ｐ・Ｈ・Ｃの横暴ぶりは他にもちらほらと出すつもりです。

第六十話　疑惑（前書き）

これを読む前に「イプシロンの任務遂行記」をお読みください

第六十話　疑惑

ユウタ達と接触した後、ジュンはリーフ邸に戻っていた。
そこにかかってきた一本の電話。ユウタからだった。

「なあ、ジュン。誰からなんだ？」

リーフが横から聞いてくる。

「ユウタ。僕に調べてほしいものがあるって」

僕は短く答えるとベッドにドサリと身をなげうった。

（よく調べたな。ユウタ。僕がテロリスト養成施設に一年半いたことを）

そう・・・僕の育ての親のポケモンハンター「リク」さんの友人。
テロリストの知り合い。

その名をコードネーム「クロウ」

烏の名を冠するその人こそ、僕にテロ活動の技術を一から教えてくれた人だった。今は現役から引退いてるけど。

僕と彼の関係は良好で今もちょくちょく会っている。

ユウタが僕に頼んだ調べ物。それは『赤い満月』という名のテロ集団の詳細な活動記録。

何の目的かは知らないけど、彼には軍内部のエリカ一派の関係者について調べてもらっている借りがあるから僕も協力しなきゃね

『プロジェクト・キメラ』を阻止するためにも。

僕は携帯（新作のＩ－Ｐｈｏｎｅ）にある番号を打ち込む。

「もしもし。こちらムーンネットワーク受付係でございます」

ちなみにムーンネットワークとはクロウおじさんが作ったダミー会社。

テロリスト達の養成施設とテロ事件関連の資料を多く保持する彼の組織を守り、敵の目を欺くために作られた。

「漆黒の烏はいますか？」

その言葉―「クロウ」に合うための合言葉を言うと電話係が別回線につないでくれた。

しばらくすると・・・。

「もしもし？」

電話から深い声が聞こえてくる。

「クロウおじさん。お元気でしたか？」

「おお、ジュン君か！どうしたのだね？」

「実は少し調べたいものがありまして・・・そちらに伺いたいのですが」

遠慮がちに言う。

「調べたいもの？」

「はい。『赤い満月』のことについて」

その言葉にクロウが反応する。

「そうか。あの組織についてか・・・わかった。では今からうちにいらっしゃい。資料室を自由に使ってくれ」

「ありがとうございます」

僕は携帯を切る。

「じゃあ僕行って来るね」

「俺も行こうか？」

「いや、一人で行くよ。クロウおじさんはあまり本部をいろんな人に知られたくないだろうし」

僕はそういってリーフ邸を出る。

「ボーマンダ」

ボールからボーマンダを出すとその上に飛び乗る。

『クロウのとっつあんのトコか？』

「ああ。頼むよ」

ボーマンダがバサリと飛び出す。

（彼の家に行くのも久しぶりだな）

ポケモンハンターになってからというもの毎日が忙しく、なかなか行けないでいたのだ。

（それにしてもユウタが僕に頼むとはよっぽどだ。ＣＩＣにも無い資料が在るかどうか・・・）

ボーマンダに乗って数十分。

ジュンは大きなビルの前にいた。

ジュンが建物に入ると一人の男性が出迎えてくれた。

年は三十代後半ぐらい。首に烏のトップのついたネックレスをつけていて、なかなかおしゃれなおじさんといったところ。

「待っていたよ。ジュン君」

「お久しぶりです。クロウおじさん」

「これが資料室の鍵だ。自由に調べてくれて結構」

ジュンは鍵を受け取る。金属製の鍵には烏の掘り込みがなされていた。

「ありがとうございます」

軽く会釈をすると廊下を歩き出す。

しばらく歩くと大きな一室にたどり着く。

ここはこの施設でもっとも大きい資料室。

僕は鍵を開けて部屋に入り、壁のスイッチを押す。

灯りが点くと、大量のファイルが綺麗に並べられていた。

「『赤い満月』・・・・と」

ア段の途中で資料を発見する。

「これか」

ファイルを開けるとそこには『赤い満月』の詳細な活動期録があった。

さすがクロウおじさん。極意資料もここではあっさり見つかるんだよね・・。

それもそのはず。この資料室には限られた人間しか入れない。それも彼とかなり親しくないと。

パラリと資料を開く。

「なるほど・・・『赤い満月』は各地でテロ事件を起こしているんだね」

『二十年前に一度D国でハイジャックと同時に都市占拠を実行。

その際USA2がこれを鎮圧。その後D国USA2に批判的立場をとるのを止め、は武装強化政策を推し進め、USA2の武器を多数輸入。

十三年前にわが国の隣に位置するC国で大規模な爆弾テロが発生。毒ガスも用いたテロであったため死傷者多数。

USA2がこれを鎮圧する。C国はUSA2には否定的な立場だったが、この事件を期にこの軍の必要性を改めて痛感。

その後USA2がC国で活動する際に優遇する方策を展開。

同じ年の9月。同じくUSA2に批判的立場をとっていたK国でテロ事件を発生させる。マシンガンを多数所持するテロリストに苦戦。

しかしUSA2出動により三日で鎮圧。C国と同じくUSA2に対してその有用性を大きく讃えた。

五年前に同テロ組織がG国の首都の武器製造会社を占拠。屋上からの無差別攻撃により、都市機能が麻痺。

しかしUSA2空軍のF-15部隊によりこれを制圧。

だがテロ組織が会社のメインコンピューターに破壊プログラムを流したため、会社のほぼすべてのシステムが消える。

また近辺の同会社の工場を爆破していた。

このテロ事件によりG国の武器製造産業が低迷。その窮地を救ったのがＵＳＡ２。軍の支援の下、G国の産業は回復。

結果的にＵＳＡ２がその会社の武器製造技術を傘下に入れることとなった。

二年前にＬ国で同テロ組織が武装ヘリで無差別攻撃を行う。

ＵＳＡ２空軍と空中戦を行い、撃墜された武装ヘリがたまたまＬ国の兵器開発工場とその本部のビルに落下。

自国の兵器開発能力が低下した仕方なくＬ国はＵＳＡ２資本の武器を多数購入。

その性能が評判となり、現在Ｌ国で使用されている武器のほとんどがＵＳＡ２製』

その後パラパラと資料を見ていたがどれも『赤い満月』のテロ事件といっても小物ばかり。

これらが『赤い満月』が引き起こした大規模なテロ事件なのだが・・

・。

これを読んだジュンの頭で何かが引っかかる。

そう、ここまでの大規模なテロ事件をずっと起こし続けておきながら『赤い満月』のボスや構成員が不明なのだ。

「何故だ。ここまでのテロ事件を起こして・・・組織内部が不透明すぎる」

それにＣＩＣの情報にこの活動期録が無いと言うのも変な話だ。

まるで誰かが詳しい記録を隠蔽したような。

今ジュンが見たのは概要的な記録であり、詳細な記録はそれぞれの事件のファイルに入っていた。

「ＣＩＣに無くてこの組織には記録がある。・・・・・そうか・・クロウおじさんが『赤い満月』の分派組織のリーダーだからだ」

敵には記録が渡らないよう必死で隠蔽したが、仲間内ということで気が緩んだか。

だが・・・・。

「おかしい。『赤い満月』は何故ここまで詳細な記録を隠す必要がある？いや・・・・まてよ」

ジュンはもう一度資料を読み返してみる。

D国は結果的にUSA2を支持した上に武器を多数購入した。

C国はUSA2に否定的だったが、この軍に助けられてからUSA2賛成派になりC国内で優遇している。

K国もUSA2に対する否定的姿勢を変えた。

G国は自前の兵器開発産業を失ったが、USA2の傘下に入ることで助かった。

L国では現在USA2製の武器を使用している。

「何故だ・・・常にUSA2が最終的に大量の利益を得ている。それも皆が納得行く形で」

なぜか結果的にUSA2が認められ、讃えられ、権力を得、利益を得ている。

誰も疑うものはいない。

できすぎている。

まるで―

「USA2がテロリストと自作自演の演劇をやっているようじゃないか」

それにここまで連続して大規模なテロ活動をするには相当の資金と準備が必要だ。

特に武装ヘリなんかそうそう用意できるものじゃない。
いったい『赤い満月』の資金源はどこから?
「だけど証拠は無い。たまたまそうなっただけかも知れないし」
僕は資料を持って資料室から出る。
部屋から出たところでクロウおじさんとばったり出会う。
「おお、ジュン君。どうだね、いい資料は見つかったかい?」
「ええ、このとおり」
資料をちらりと見せるとクロウの顔が曇る。
「その資料は・・・そうか『赤い満月』か」
「・・・おじさんもこの資料を読んだことがあるのでしょう?おそらく今の僕と同じ考えを、ね」
その言葉にクロウが首を横に振る。
「『赤い満月』には手を出さないほうがいい。だが、ジュン・・・君は止めても聞かない子だ。来なさい」
クロウとジュンが向かった先は施設の一番奥にある倉庫。
「ここから好きな銃を持っていくといい。君は射撃が下手だが護身用だ」

クロウが扉を開けるとそこには大量の銃器類が所狭しと並べられていた。

「この銃は全部おじさんが？」

「ああ。闇市やダーティな将校からの横流しで集めた。私自身はもう大規模なテロは行わないから、使い道が無くてな」

さすが『赤い満月』の分派組織のトップ。

それにこういう場所でも平然としている自分が怖い。

ジュンは倉庫内を歩き回る。

「おじさん。僕が練習でよく使っていたやつはまだ残っていますか？」

ジュンは１４才から１５才の夏の一年半近くこの「クロウ」のテロリスト養成施設で暮らしていたのだ。

一番の得意分野は「ハッキング」「爆弾作り」だったが体力が無く、射撃が下手な上に本人の性格と希望でポケモンハンターとして活動することとなった。

ヘリが自由に操れたり、ハッキング技術が高かったりしたのは全てここで訓練を受けたから。

テロリストの技術を注ぐポケモンハンターとして裏社会では結構しられている。

「もちろん」

クロウが小さなサブマシンガンを出す。

大型拳銃に匹敵する薄さと小ささを持つサブマシンガン―Ｖｚ６１
別名「スコーピオン」

旧東側が開発したサブマシンガンで小型なボディが特徴。
反動も少なく扱いやすい。

ジュンが訓練の時好んで使っていた銃である。

「君が愛用していたからな。ちゃんと残してある。これが予備の弾丸だ」

「ありがとう。おじさん」

ジュンは「スコーピオン」を資料をしまったバッグにしまう。

「ボーマンダ！」

ジュンは倉庫から出るとボーマンダを呼び出す。

「ユウタのホテルの場所までお願い」

『おっしゃ！落ちるなよ！』

ボーマンダは大空へと駆け上がる。

クロウが地上から見上げているがその姿もだんだん小さくなっていった。

『スコーピオンか・・・ジュンが使ってた銃だな』

「まあね。僕はこいつぐらいしか使う気はしないから。・・・・大丈夫、人を殺したりはしないよ」

ボーマンダに座るとすっと目を閉じる。

（ユウタ。君のお望みの資料を今届けるよ。君のほうの情報と僕の資料を付き合わせれば、何かが見えてくるはずだ）

そのときジュンの頭の中で何かが光った。

予感。

真実に隠された更なる陰謀。

ＵＳＡ２とテロリスト。

そして・・・。

白衣を羽織り、この二者をも手玉に取る・・・・少女の姿が。

白衣の悪魔。

「エリカ・・・・」

誰にも聞かれないその言葉は空気とともに消えていった―

第六十話　疑惑（後書き）

Ｖｚ６１「スコーピオン」は共産系テロリストがよく使用するサブマシンガンです。

「クロウ」はテロリストなのでこの銃を登場させました。

第六十一話　始動（前書き）

今回は新キャラが出てきます。

第六十一話　始動

「ユウタ」

ＣＩＣ情報部内で一人窓の外を眺めるユウタにジュンは後ろから声をかける。

「何だ？」

「僕も君たちＣＩＣに協力するよ」

その言葉にユウタが短く答える。

「駄目だ。これはもはや一個人の問題じゃねえ。軍を巻き込んだ大陰謀・・・俺たちの問題だ。民間人の感知するところではないぜ」

「違う。僕も当初から関っていたんだ・・・今更引けないさ」

「・・・・・」

ユウタは黙っている。

「それに君達ＣＩＣはＵＳＡ２の陰謀証拠を掴んだとしてどう立ち向かうんだい？まさか両軍が正面衝突するとでも？」

「・・・・ＣＩＣはそんなことはしない。おそらく何らかの破壊工作を仕掛ける。エリカの計画が関っていた場合はそれごとぶっ潰す」

「じゃあなおのことさ。君達の空軍や陸軍は今回の戦いでは出てこれない・・・正面衝突の戦いではないからね。つまり君たち情報部だけでＵＳＡ２の強大な力と戦わないといけない・・・それは些か戦力不足ではないかな？」

ジュンが近くにある椅子に腰掛け、足を組む。

「何が言いたい？」

「僕を使えば戦力を拡大できるよ？」

その言葉にユウタが目をむく。

「ポケモンハンターとテロリストとＣＩＣが手を組めと・・・・？」

「どう？君達軍人はスタンドプレーは許されていない。でも、僕なら・・・作戦に自由度を与えられる。どうだい？」

「・・・少しここで待ってろ。大佐と今の話を検討してくる」

ユウタが情報部の部屋を出る。

一人になったジュンは机に両肘を置き手を顔の前で組む。

（ユウタには悪いけど、僕は君達を利用させてもらう。エリカの計画を潰すのためもあるけど・・・これはＵＳＡ２に仕返しできるチャンスなんだ。軍のバックアップがあれば、ね・・・）

しばらくするとユウタが戻ってくる。

重々しい口調で話し出す。

「上層部からは大佐にこう伝えられていたそうだ『もしＵＳＡ２に関する情報が正確だった場合いかなる手段を用いてもそれを阻止せよ』とな・・・だから俺達は・・・ＣＩＣはハンターとテロリストの合作と手を組むこともやぶさかでは無い」

「そう来ると思ったよ」

ジュンが薄っすらと微笑む。

＊＊＊＊＊＊

ジュンの資料とユウタの情報から分かったこと。

それはＵＳＡ２がテロリストと組んで自身の権力保持と利益のために自作自演の戦いをしていたということだった。

そして今回の大陰謀の裏にはおそらく・・・エリカ一派が絡んでる。

エリカが作り出したキメラポケモンをＵＳＡ２は品定めのために実戦投入するつもりだろう・・・。

「なんかすごいことになったな」

ジュンはＣＩＣ情報部から出た後、本部内をプラプラと散歩していたのだった。

やはりＣＩＣ軍の本部だけあって軍人が行き来している。

（軍人さんが一杯だなぁ）

ジュンは隊員達の休憩場所であろう広場に出る。

ひとつのベンチに座ると観察を始める

どうやら職員の数と隊員の数は半々らしい。

またポケモンも軍服を着て歩いている（人型じゃないポケモンは代わりの階級の印のついたメダルをぶら下げていた）

（何か飲みたい・・けど財布忘れた・・・キメラ能力を使うのも気が引けるし）

のどか乾いてきたジュン。

とそこに先ほど風呂場であった陸軍サイドの隊員達が歩いてきた。

談笑して笑いあっている隊員達はジュンの姿を見るとピタリととまった。

「先ほどはどうも」

ジュンが笑いかける。

が、隊員達は憮然とした表情だ。

「君、何でここにいるわけ？」

「民間人がいること自体おかしいんだが・・・」

「俺達の本部を荒らすなよな」

口々にボソボソと文句を言う隊員達にジュンが再度笑いかける。

で、言った。

「ジュース買ってきてくれませんか？」

「は！？何で俺たちが・・・！？」

「ざけんじゃねえぞ！ガキ！」

「この場で叩きのめしてやろうか！あぁ！？」

「僕はか弱い民間人なんですよ？民間人のために尽くすのが軍人の勤めでしょ？」

「俺達は国を守るためにいるんで、パシられるためにいるんじゃねえよ！」

隊員の一人が言った言葉に他の隊員達も頷く。

「・・・あなた方シビリアン・コントロールって言葉ご存知で？」

「ふざけんな！」

腹に据えかねた先ほどの隊員がジュンに掴みかかる。

「おや・・いいんですか？軍人が民間人に暴力を振るって？」

カシャリと音がする。

ジュンがバッグからデジカメで今の光景を撮影したのだ。

「暴力罪で訴えますよ?」

「・・・・・くそ!」

隊員はジュンを乱暴に放すと、自動販売機に向かう。

しばらくしてジュンの目の前に近寄ると、オレンジジュースをドン、と置いた。

「これでいいんだろ!」

「・・・・ちょっといいですか」

ジュンが隊員の手を引っ張り顔を近づける。

「・・・・な・・・なんだよ・・」

近づくジュンの顔に隊員が身を引く。

何しろジュンは中性的な顔立ちで、長い髪のかつらを被れば少女に見えるほどなのだ。

しなやかな（男としては）髪の毛が隊員の首筋にかかり、吐息が耳に触れる。

そんな少女のような顔に迫ってこられたら・・・誰だって赤くなるだろう。

現にその隊員は突き放すこともできず、まるで女性に近寄られているかのように赤くなっていた。

ジュンは耳元でそっと囁く。

「ありがとう」

そういい残すと赤くなってその場に突っ立っている隊員を残して、ジュンはオレンジジュースを手に立ち去ったのだった。

（上手くいった。彼みたいな屈強なんだけど純情そうな男にはこの手が効くんだ）

その後ジュンはＣＩＣ内部を散策した。

訓練場で訓練中の兵士をからかったり（その兵士は真っ赤になっていた）、事務員にわざとぶつかって財布を掏り取ったり（１０００円だけ抜いて、その後返してあげた）して楽しい時間を満喫した後再び広場に戻った。

ベンチに腰掛けるとジュンは一息つく。

（エリカが今回の件に関っているとして一体何が目的なんだ・・・・）

ＣＩＣとＰ・Ｈ・Ｃの元にいればただで最先端の研究施設が与えられていたのに。

Ｐ・Ｈ・ＣとＣＩＣからＵＳＡ２に乗り換えるにはかなりのリスクが伴うはずだ。

そこまでしてエリカは金が欲しいのか。

私利私欲のために・・・？

（いやエリカはそういうタイプじゃない。何かある・・・Ｐ・Ｈ・Ｃの元ではできなくてＵＳＡ２の元ではできる何かが）

「具体的な情報をＣＩＣ情報部がキャッチできれば分かるんだろうけど」

ジュンは隊員に奢って貰った（パシらせたとも言う）オレンジジュースをちびちびと啜る。

「君・・・そこの君」

するとどこからか声がした。

「ん？誰？」

ジュンは辺りを見回してみたが誰もいない。

「イプシロン少尉の協力者と言うのは君かね？」

なんだか偉そうな口調の声がするのだが・・・誰もいない。

「下だ！下を見たまえ！」

その声のとおりに下を見ると・・・そこには一匹のイーブイがいた。

「おお～君かわいいね」

ジュンがイーブイを抱き上げると、頬擦りをする。

フワフワした毛並みで育ちがいいのが分かる。

「無礼な！私と君は初対面のはずだ！早く手をどけたまえ！」

「え・・・」

まさか、と思いつつジュンはそのイーブイの前足の後ろを持ったまま視線を合わせる。

「君がさっきから・・・？」

「何度も言わせないでくれたまえ！それと“君”呼ばわりは無礼ではないかね！？私はフリードリヒ・フォン・ブラウンだ！階級は少将。イプシロン少尉の協力者は君かという質問に早く答えたらどうかね！？」

「えっとイーブイが・・・少将・・・」

頭の処理が追いつけないジュンにイーブイのフリードリヒ・フォン・ブラウンことブラウン少将がふん、と鼻を鳴らす。

「ポケモンが出世してはおかしいかね？少年」

「あなた何歳ですか？」

やっと出てきた言葉。はっきり言って論点がずれているがブラウン少将は得意そうに背筋を伸ばす。

「私か？今３９歳だ。異例の出世スピードなのだぞ！」

「そんなおっさんなのか・・・外見はかわいいイーブイなのに」

ジュンが抱きかかえたままボソリと呟く。

その言葉に耳をピクリと反応させる少将。

「おっさんだと！失礼な！俺はまだ若いぞ！」

「・・・・・主語変わってますよ」

ジュンの指摘にブラウン少将の顔が真っ赤になる。

「とにかくだ！君は協力者なのかと聞いている！」

「もちろんです、ふわもこ少将」

「ふ・・・ふわもこ・・だと・・・・」

固まるブラウン少将だが直ぐに立ち直るとジュンの手からするりと抜ける。

「情報部までついてきたまえ」

そう言うとトコトコと歩き出す少将。

が、直ぐに抱きかかられた。

「君！離したまえ！」

「あなたが床を歩くより、こっちのほうが早いですよ」

ジュンがブラウン少将を抱いたままＣＩＣの廊下を歩く。

途中でジュンとブラウン少尉に会った隊員達が緊張したようにビシッと敬礼する。

「ふわもこさんはやっぱり知名度あるんですね」

「ふわもこではない！ブラウンだ！・・・まあ、ポケモンでここまで這い上がったのは私が始めてだからな」

ブラウン少将が一瞬悲しそうな表情を浮かべる。

「未だにあるのだよ。同じ功績を上げても人間のほうが優先される・・・もっともそこまで激しく差別されるわけではないし世の中は人とポケモンは平等だ、という風潮になりつつあるが。・・・まだ人間にとっては薄っすらとだがポケモンにとっては時折突き刺さるような・・・差別がある」

「そうなんですか」

何とって言いか分からない。

ただ僕が抱いている小さなイーブイが悲しんでいるのは分かった。

「君が私が軍の少将であると聞いたときの反応がそれの表れだ」

ブラウン少将はふうとため息をつく。

ジュンは黙って小さな頭を撫でる。

茶色のフカフカの毛皮は滑らかで気持ちよかった。

「き・・・君！私を馬鹿にしているのかね！」

「すっごくフワフワですね！」

「そ・・そうか？ああ、そこは・・・耳の後ろが感じるんだが・・・あ、そこそこ」

耳の後ろを掻いてやるとブラウン少将が気持ちよさそうに喉を鳴らす。

が、廊下を歩く隊員達と職員たちが驚いたような笑いを堪えているような視線を投げかけているのに気づくとコホン、と一咳きつく。

ついつい普通のイーブイの姿を見せてしまったのが恥ずかしいらしく顔が赤くなる。

「そういえば僕に何の用件で？」

ジュンの問いにブラウン少将が抱かれ前を見たまま言う。

「『赤い満月』を匿っているＵＳＡ２の基地を発見した」

「・・・・ずいぶん早いですね」

「『赤い満月』の下っ端テロリストの「アル」をホテル・アレキサンドリアで捕まえた。今情報部で尋問中だ。彼から得た情報とこちらの資料を合わせたら浮上してきたのだ」

ブラウン少将は体を捻ってジュンを見る。

「それに加えてＰ・Ｈ・Ｃの科学者であるエリカがその基地の地下の大研究所にいることも判明したがな」

その言葉にジュンが固まる。

「そうですか・・・」

「どうやらイプシロン少尉とクー准尉はそのことを秘匿していたようだったが。特にイプシロン君にはエリカの護衛兼監視を勤めてもらっていた。・・・エリカの不穏な行動を見抜けんはずは無い。問い詰めたら素直に吐いてくれたよ」

「・・・ふわもこさんはなんで『プロジェクト・キメラ』なんて計画に加担したりしたんです?・・・・あなたはポケモンでしょう?」

「私は『プロジェクト・キメラ』には絶対反対だったのだ。だが言っただろう?・・・・いくら少将といえどもポケモンである私の発言力は・・・比較的弱いのだと」

ブラウン少将がため息混じりに呟く。

「エリカが我々を陥れてＵＳＡ２と組み、何かおぞましい研究をしようとしていることは分かった。それに私個人としては同族のポケモンを道具のように扱う奴が許せん・・・！！」
ジュンの腕の中でブラウン少将がワナワナと震える。
本気で怒っている証拠だ。

「それでエリカとＵＳＡ２をどう処理するおつもりなのです？ふわもこ閣下は」

「この件は上層部の他のあほうどもに内密で私自身で処理するつもりだ。・・・エリカの計画を潰し、ＵＳＡ２とテロリストの陰謀を叩き壊す。その為に君に協力して欲しい」

“ふわもこ”と呼ばれるのに慣れたのかブラウンが大きな目を瞑りながら静かに言う。

「君はテロリスト養成施設でハッキングの天才だったらしいな？」

「エリカとテロリストを匿っているＵＳＡ２基地に対して破壊工作を仕掛けるわけですか？」

その問いにブラウン少将は大きく頷く。

「正確にはテロリストへの武器・兵器横流し兼、エリカの研究施設も兼ねているわけだが・・・。その通りだ、詳しいことは情報部で話す。それとこの件は内密にしておくのだぞ。ＣＩＣでも私と情報部の部員とその司令官ぐらいしかこの作戦は知らんからな」

「了解です、閣下」

ジュンはブラウン少将を抱いたまま情報部の扉を開け、扉の後ろにそっと下ろしてやる。
そしてジュンが部屋に入ろうとするが・・・。

ガッ

何かが引っかかったような鈍い音と

「痛い！」

という叫びが聞こえた。

どうやらブラウン少将が扉に胴体をはさんでしまったらしい。

「あ、ごめんなさい」

「・・・・次からは気をつけたまえ」

怒りを抑え静かに呟くブラウン。

「ジュン・・・来たな」

すでに情報部にはユウタを始めとする部員達それにロス大佐もいた。

「今からこいつから得た情報を元にＵＳＡ２基地に破壊工作をする作戦を立てる」

ユウタは椅子に縛り付けられ、涙目になっているテロリスト「アル」

を親指で指差す。

「イプシロン少尉から話は聞いた。・・・・君の力が必要だポケモンハンタージュン君」

ロス大佐の言葉に情報部の皆が頷く。

「作戦会議を始めようか・・・まずは我々の代表として・・・ブラウン少将・・・あれ、ブラウン少将は・・・・？」

「ここだ、ロス！早く私を上に上げろ！」

机の下にロス大佐が目をやると前足で何とか机の上に上ろうとするブラウン少将の姿があった。

「しょ・・・少将殿！これは失礼しました！」

ロス大佐が慌ててブラウンを抱きかかえ机の上にそっと置く。

情報部員全員が笑いを堪える中、コホン、コホンと二回空咳をして仕切りなおすブラウン少将。

「では、作戦会議を始める」

ＣＩＣ情報部とジュンの戦いの始まりの合図が今ここに幕を開けたのだった。

第六十二話　アルと一緒！～謎の兆候～（前書き）

タイトルがカオスなのは今回色んな要素が含まれているからです（汗）

第六十二話　アルと一緒！～謎の兆候～

では作戦会議を始める。

ブラウン少将が深い声で語る。

「まずは現状からだ。テロリスト「アル」からの情報とこちらの資料により、ＵＳＡ２基地内部の大まかな見取り図ができた」

ブラウン少将が一枚の大きな地図をデスクに広げる。

「この基地の地下一階が全てエリカ達の研究施設に割り当てられている」

ブラウン少将が茶色の前足で地下一階の見取り図を示す。

「またこの基地の武器庫にはテロリストへの横流し用の武器も多数存在しているらしい」

「と、言うことはこの基地に決定的な証拠があるわけですか」

ロス大佐の呟きに少将が大きく頷く。

「どの通りだ。それで今回の作戦の概要を説明すると・・・・・なんだね、君は？」

ジュンがブラウン少将の両前足の脇の下に手を入れ、そのままクルリと抱っこしたのだ。

猫を抱いている姿に酷似している。

「いえ、続けてください」

ジュンはブラウン少将の耳の後ろを掻きつつ言う。

「まずＣＩＣ情報部から選抜チームを組みＵＳＡ２基地に潜入させる」

少将は抱っこされながら深い声で続けてしゃべる。

「あのどうやって・・・？」

ロス大佐が話を割って尋ねるとブラウン少将がチラリと椅子に縛られているテロリストを見る。

「彼によるとＵＳＡ２基地には週に一回軍用トラックが基地に入る。基地の生活必需品を積んだトラックであり、警護も手薄だ。そのトラックを襲い奪取した後選抜チーム及びジュン君を基地に潜入させる」

「待ってください少将！民間人であるジュン君を作戦に参加させるのは危険です！」

ロス大佐の真っ当な抗議の声にブラウン少将が答える。

「では聞くが、ジュン君ほどのハッキング能力を持った工作員がＣＩＣにいるのかね？」

「それは・・・」

「今回の作戦には彼のハッキング技術が必要だ。・・・・まず基

地内に潜入させた後ジュン君には基地のコンピューター室に行ってもらい、そこでハッキングを行ってもらう。そして選抜チームには基地や戦闘機等に爆弾を仕掛けてもらいたい」

「爆弾、ですか」

ユウタの言葉にブラウン少将が軽く頷く。

「ああ。今回の作戦の狙いは二つある。ひとつはジュン君による基地内からのハッキングを用いたＵＳＡ２とテロリストの関係の証拠の入手。そしてもう一つはエリカ達の計画の阻止。基地内に仕掛けた爆弾を起爆させ、基地で爆弾テロが起こったように見せかける。そうすればエリカ達はキメラのデータを持って基地からの脱出を図る。そこでわざと我々が逃走ルートを確保しておいてやり、エリカ達が来たところで彼女らを確保、キメラのデータを破壊する」

ブラウン少将の流れるような作戦に皆が感心する。

流石はＣＩＣ軍情報作戦本部のトップといったところだ。

「さてトラックに乗った後の行動だが・・・どのように基地に入るかはこのテロリスト君に聞かなければいけないな」

ジュンから離れたブラウン少将がデスクの上をゆっくりと歩き、前足でアルの猿轡を外してやる。

「ぷはぁ・・・やっとまともに息が出来るっす」

「アル君、先ほどの話は聞いていただろう？我々に協力してくれるね？」

「嫌っす」

プイッとそっぽを向くアル。へそを曲げているらしい。まるで子供だ。

「そうか・・・なら強硬手段を採るしかないようだ」

ブラウン少将の静かな言葉にアルが一瞬固まる。が、直ぐに強気の表情に戻る。

「あんた達は俺を下手に扱えないハズっす。俺は情報源なんすから」

「その通りだ。だから殺しはしない。ただ・・・」

少将はアルの耳元で囁く。

「君の大切な部位に電流を流し痛めつけるかもしれん」

ビクリ、とするアル。

「そんな・・・拷問みたいなこと・・・出来るわけないっす」

「“みたい”？それは違うな。拷問そのものだ」

薄い笑みを湛えながら語る少将。

「ご・・・拷問なんて違法っす！」

語尾が荒くなっている。怯えている証拠だ。

「君が言うかね？テロリストの君が。・・・君今何歳だね？」

「・・・・２５っす」

「なら少しは痛めつけがいがあるな。二度と子作り出来なくなるかもしれんが・・・」

アルの足がカタカタと震えている。心底ビビっているようで顔は真っ青だ。

「では今から―」

「わ・・・分かったす！協力するっす！は・・話す・・・話すから・・・」

「そう。それでいいんだよ」

少将は微笑むと先を促した。

＊＊＊＊＊

「ＵＳＡ２基地に入るにはまず検問所をクリアする必要があるっす。それにＵＳＡ２の関係者にのみ配布されてるＩＤカードを使うことでのみ施設に入れるんす。無理に入ろうとしたら直ぐに警備員が駆けつける仕組みっす」

アルがペラペラと情報を吐く。

どうやら開き直ったらしい。

「なるほどな。検問所の件は奪取した軍用トラックで通過できるとして、問題はＩＤカードだな」

ブラウン少将が考え込む。

「少将、ではこいつのＩＤカードを参考にして偽造カードを作ればよいのでは？」

ロス大佐の提案に少将も頷く。

「なるほど。その手があったな。アル君、ＩＤカードは持っているかね？」

「財布の中にあるっす」

ユウタがアルの鞄から財布を取り出し、その中から一枚のカードを出して机に置く。

英数字と顔写真の入ったテレフォンカードと同程度の大きさのカードだった。

「よし、直ぐにこのカードの偽造を作れ」

ロス大佐の命令で情報部員の一人がＩＤカードを持って部屋から出て行った。

「さてと、これにて作戦会議は一先ず終了だ。細かい内容は後日渡す。さてと・・その前に選抜チームを決定しなければな」

ブラウン少将が部員達を見回す。

「まずはイプシロン少尉。君を作戦の現場指揮官とする。次に、クー准尉。君は少尉と組んで長い。君にはイプシロン少尉の補佐を頼む。それと、ファオ曹長。潜入が発覚した場合接近戦が予想される。君も入れておくべきだ。さて、後は・・・イクス准尉、君は自身のエスパー技で姿を隠せる。行ってくれるかね？」

「分かりましたわ」

そういって前に出てきたのは軍服に身を包んだサーナイト。

彼女の名は「X（イクス）」

CIC情報部でエージェントとしてトップクラスの実力を持ち、容姿も美しいため軍内部でも人気がある。

性格も面食いな点を除けば問題は無い。

「後基地内部の詳細な情報を持っている存在が必要だ。この作戦にテロリストを加える」

その言葉に辺りが騒然とする。

「待ってください、少将。こいつはテロリストですよ！？」

ファオがアルに指を指しながら荒っぽく言う。

「基地内部の詳細な情報を持っているのは彼だけだ。テロリストだろうが利用できるものは利用する」

「しかし・・・軍がテロリストと・・・！」

「我々の目的は更なる悪の駆逐だ。より大きな目的のためならテロリスト一人と手を組むことも当然だ。既に私達はポケモンハンターと協力しているではないか。目的を忘れるな、ファオ曹長」

「・・・はい」

苦虫を噛み潰したような表情で答えるファオ。

「よし・・・ではイプシロン少尉、クー准尉、イクス准尉、ファオ曹長に加えジュン君とアル君。この六名を“トワイライト作戦”実行部隊とする」

トワイライトとは夕暮れ時のことである。

ＵＳＡ２の権威が日と共に沈む時・・・これを比喩してブラウン少将が命名したのである。

「作戦実行は偽造ＩＤカードが出来次第こちらから連絡する。それまで各自で待機しておいてくれ」

再びジュンに抱かれ、撫で撫でされながら言う少将。

「では解散」

「あの少将・・・彼はどうしますの？」

イクス准尉が椅子に縛り付けられているアルを指差す。

「ああ、彼か・・・う～む」

少将がジュンの腕の中で悩む。

「僕が彼を引き取りましょう」

ジュンの提案にロス大佐が驚いたような声を上げる。

「しかし、彼は下っ端とはいえテロリストだ。襲われでもしたら・・・」

「大丈夫です。彼は無害そうだ」

ジュンは微笑むとアルの縄を解く。

「僕と一緒に来てくれるね？」

「ここから出られるなら何処でも行くっす！」

うんっと伸びをしながら答えるアル。捕らわれているテロリストとは思えない軽さだ。

「・・・一応警告しておくが、アル君。少しでも我々を裏切るような素振りを見せれば・・分かっているだろうね？」

少将がジュンの腕の中で冷たい声を発する。

「裏切ったりしないっすよ。俺はそこまで大胆じゃないっす」

確かに、と心の中で全員が頷く。

「では僕たちはリーフ邸で待機していようか」

ジュンは手を振ってワームホールを作ろうする。

そして黒い円形の扉が現われようとしたその時！

ズキン！

ジュンの頭に激痛が走った。今まで味わったことの無い苦痛。鋭い痛みだった。

「う・・・」

ジュンは堪らず頭を抱えてその場に座り込む。

「大丈夫っすか！？」

アルがジュンを心配そうに覗き込む。

周りの皆も何事かとざわついている。

「ああ、大丈夫・・・」

少しずつ痛みが引いていく。

ジュンは頭を抱えてゆっくりと立ち上がる。まだ少し痛むが先ほどの激しさは無くなっていた。

「行きましょうか・・・」

ジュンはアルの手を引くとワームホールに飛び込む。

「うへ・・・すごいっすね！周りが歪んで見えるっす」

アルがワームホール内を見渡して感嘆したような声を上げる。

「ここでは時間の進行もあっちとは違うんだ。僕達は今光より早い速度で進んでいるんだよ」

「でも、俺達結構な距離歩いてるっすよ？」

「ワームホール内の僕達の時間間隔とあっちの世界の時間とは違うんだよ。さ、ついたよ」

ワームホールから出るとそこには大きな屋敷があった。

「すっげえ・・・でっかいっす」

「ここはリーフ邸だよ」

ジュンはリーフのことについてアルに説明しつつ考え事をしていた。

先ほどの鋭い痛みについてである。

（さっきの痛みは何だったんだ・・・？ただの頭痛とは思えないんだけど・・？）

ジュンがインターホンを押し、暫らくするとリーフが出てきた。

どうやら先ほどまで風呂に入っていたらしくバスローブを羽織って

いる。

「ジュンじゃねえか。どうしたんだ？それに・・・こいつは？」

「やあリーフ。実はね―」

ジュンはアルのこととトワイライト作戦のことについて事細かに話す。

「・・・なるほどな。じゃ、このアルって兄ちゃんとここで待機するわけか」

リーフはアルの方に向き直る。

「お初にお目にかかるっす。俺はアルフォンス。通称「アル」っす。暫らくお世話になるっす」

「俺はリーフ。ま、適当に使ってくれ。俺の屋敷はでかいからな。寝室は有り余るほどある」

アルとリーフはお互いに握手をする。

その夜。

ジュンはシャワーズを大浴場で洗っていた。

他のポケモン達は外で遊んでいる。

『大変なことになっちゃったね』

シャワーズが背中を流されながら心配そうにつぶやく。

「そう?僕は今から楽しみだよ」

『ジュンったら・・・』

ジュンはどんなことでも楽しむんだから、とシャワーズはため息をつく。

その時。

『ねえ、ジュン。痣が出来てるよ?』

シャワーズの指摘にジュンは自分の腹部を見る。

そこには赤い痣のようなものが出来ていた。

「ん?こんなところに痣なんかあったかな・・・・」

『どこかぶつけたんじゃないの?』

「そうかなぁ」

ジュンはシャワーズの体の泡を流してやる。

ジュンは痣を少し撫でる。

火傷にしては赤みが強いような気がする。むしろ紫にも見えるが・・・。

「いつ出来たのかな」

ジュンは呟くとシャワーズと共に大浴場を出ようとするが。

「でっかい風呂っすね～」

軽い声と共に入ってきたのはアルだった。

短い髪は金髪に染めており、色黒の体はまあまあ締まっている。

「相変わらず軽いノリですね」

「そうっすか？」

アルが直接湯船に入ろうとする。

「駄目ですよ！体を洗ってからです！」

「細かいっすね、君」

ぼやきつつ、アルは洗面台で体を洗い始める。

体を洗った後、アルとジュンは一緒に湯船に浸かる。

「・・・僕テロリストと一緒にお風呂に入ったのは初めてですよ」

「俺もポケモンハンターと入るのは初めてっす」

アルが湯船に口を浸してブクブクと泡を立てる。

「そういえば、何故あなたはテロリストに？」

何気なく尋ねる。

「そうっすね・・・俺は最初武器のブローカーをやったり、改造武器を依頼人に渡したりしてたんす。で、ある日『赤い満月』のメンバーに入団を誘われたんす。ちょうど金も欲しかったところで、話を受けたんすけど・・・」

アルが一瞬身震いする。

「『赤い満月』が想像以上やばいところだったんす。何とか俺は人を殺める任務は回避し続けたんすけど・・・軍との衝突もあって・・・情けない話っすけど、何回かビビッてちびったこともあるんすよ。やっぱり俺には向いてないな、と思っても後悔先に立たずで・・」

「なるほど。じゃあアルさんはどんな活動をしていたんです？」

ジュンが浴場の外を眺めつつ聞く。

「俺は主に他のメンバーのために武器を仕入れる役っす。それと武器、銃とかの改造っすね」

「銃を改造？」

鸚鵡返しをするとアルがニッと笑った。

「俺が改造した銃はとっても好評だったんすよ。昔からそういう機械系をいじるのが好きだったすから・・・。でもいざという時に漏らしちゃうようじゃやっぱり向いて無いんすね。テロリストって職

業は」

アルがはあ、とため息をつく。

（テロリストって向き不向きの問題じゃ無いような・・・・それにあれって職業なのかな・・・）

しかし自分がポケモンハンターという職に就いているのでジュンはこのことについては触れないでおいた。

いろいろずれてはいるが要するに機械いじりが得意なビビリ屋の青年ってことか・・・。

しかしよりにもよってテロリストの仲間になるとは・・・この人に全然似合ってないんだけど。

大胆と言うかアホと言うか・・・。

「で、これからどうするつもりです。アルさんは」

「組織に見つかったら口封じに殺されるっす！だから、ＣＩＣに守ってもらうつもりっす」

再度震えるアル。

「まあ、君みたいな口が軽い奴は真っ先に消されるだろうね。組織に戻ったとしても」

「う・・」

今頃になって怖くなってきたのかアルが湯船で縮こまる。

そして

「お・・俺怖くなって来たっす」

涙目でジュンの腕を掴むアル。

「な・・・何か？」

「ちょっと一緒にいて欲しいっす。気分が落ち着くまで・・」

「分かりましたよ」

ため息をつくジュン。

その１０分後、ジュンとアルは大浴場を後にした。

「あの人どっかずれてるんだな」

ジュンはリーフ邸の寝室で一人寛いでいた。

「まあ、彼はテロリストというより雑用係だったんだろうな。おそらく彼の銃いじりの技術は買われていたんだろうけど」

（あのタイプはどっちにしたって組織に消される可能性が高いからな。よかったじゃん、早めに捕まって）

ジュンは一人で納得すると布団にダイブする。

コンコン

まさにジュンが寝ようとした時誰かが扉をノックした。
開けるとそこにはアルの姿が。
「何か御用ですか？」
「・・・・一緒に寝ていいっすか？」
しばし固まるジュン。
「何故？」
「なんか怖くなって来て・・・一人じゃ寝られないっす」
（子供か、この人は！？大体子供の僕に頼ってどうするんだ！）
ジュンはため息をつく。
「まあ良いですよ。さ、入って」
ジュンはアルを部屋に招くと、自分はベッドのふちに座った。
「ありがたいっす！」
アルが先ほどのおどおどした表情から一変して明るい笑顔になる。
が、ベッドの中に二人が入るとかなりぎゅうぎゅう詰めになった。
「やっぱり狭いな・・・仕方が無い」

ジュンは体に力を入れ、アグノムの姿に変化する。
その光景を目を皿のようにして見るアル。
「君、ポケモンに変身できるんすか・・・」
「まあ色々ありましてね。ではお休み」
アグノムの姿に変化したお陰でスペースがベッド内に出来る。
ジュンは目を閉じ、眠りについた。
＊＊＊＊＊＊
夢。
ジュンは夢の中にいた。
真っ白の光景にただ一人佇んでいた。あたり一面には何も無い。
ただ服を着ていない自分だけがそこにいた。
「ここは・・・？」
全裸の自分の体にふと目をやると、赤い痣が少しずつ広がって―
『ジュン君！起きてっす』
遠くから聞こえてくる声にジュンの意識が覚醒する。

目を開けるとアルがジュンを揺すっていた。

（・・・・夢か。変な夢だったな・・・）

ジュンが頭を抱えながら上半身を起こす。

「アルさん、何か？」

ふと時計を見ると寝てから数時間が経過していることが分かる。外は夜中だ。

眠い目を擦り、アルを見る。

何故かアルは額に汗を浮かべている。

「・・・・トイレ行きたいっす」

「じゃあ行けばいいじゃないですか」

冷たく言うと再び寝ようとするジュンを慌てて止めるアル。

「俺は君が起きないから、我慢して明日まで持ち越そうと思ってたんすけど・・・もう我慢が限界値を突破しそうなんす」

「我慢するのは体に良くないですよ」

「そんなの分かってるっす！ただ・・・一人でトイレ行けないんす」

「もしかして・・・怖いから？」

尿意と恐怖でプルプルと震えているアルを呆然と眺めるジュン。

「トイレまでついて来て欲しいんす」

「ハァ、分かりましたよ」

その後ジュンはアルを連れてトイレまで向かうはめになったのだが・・。

しかし大きなリーフ邸内でトイレを、しかも真っ暗な中で探すのは至難のわざだった。

めんどくさくなったジュンはトイレを必死に探すアルを置いてさっさと寝室に戻った。

アルが必死にジュンを呼ぶ声が聞こえたが、どうでもよくなっていたジュンはそれを完全に無視。

あの様子ではトイレに行きつけたかどうかはフィフティフィフティだが、その後彼が間に合ったかどうかはジュンの知るところではない。

（ったく。トイレぐらい一人で行ってよね。・・・彼の心の平安のためにもＵＳＡ２と『赤い満月』の陰謀は潰さないと。トイレに行くたびに起こされたんじゃこっちの身が持たないよ。それより気になるのはさっきの夢だ。昼間の頭痛と関係があるのかな・・・・？）

思考をめぐらせつつジュンは再び眠りつく。

夜はもう直ぐ明けようとしていた―

第六十二話　アルと一緒！～謎の兆候～（後書き）

次回はイプシロンの方で更新する予定です。

第六十三話　「悪」の思いと「友」の憂慮

「ジュン、結構似合ってるぜ」

僕の横でリーフが笑いながら言う。

僕は今「トワイライト作戦」の為に下準備をしているところなんだけど。

青いワンピースと麦藁帽。鏡に映っているのは麗しい少女、にしか見えない自分自身。

「いやぁしかしそこまで似合うってすごいっすね」

アルが横から覗き込む。

「まあこんなものさ」

「だけどよ、なんでわざわざ女装なんだ？」

リーフの問いに笑いながら答える。

「色仕掛けさ。ＵＳＡ２の物資輸送トラックを強奪しなきゃいけないんだよ？ここは相手の隙を突くやり方じゃないとね」

そういいつつバッグにサブマシンガン、Ｖｚ６１を入れる。

「アルさん、爆弾は用意できてます？」

「完璧っすよ。俺の特性超高性能プラスチック爆弾っす」

『赤い満月』の元（今もかな）テロリストであるアルさんは主に組織の為に武器ブローカーとして活動していたんだ。

それに元々の機械いじりが好きな性格も合わさって爆弾作りの名人でもある、というわけさ。

アルは何がうれしいのかニコニコしながらアタッシュケースを机に置き留め金を外す。

中には中程度の小型装置が十個以上入っていた。

「俺の作った爆弾っす。と言ってもＣＩＣからもらった爆弾を改造したものっすけど。でも威力の向上に加えて小型化も出来たんすよ！」

熱っぽく語るアルにリーフは少し苦笑する。

「おいおい、爆弾一つにそこまで興奮することねぇだろ」

しかしアルは激しく首を横に振る。

「爆弾作りは芸術っす！作るまでに時間と技術と金が必要なのに、一度起爆させてしまえばそれで消えてしまう。その儚さがいいんじゃないっすか～」

アルはそう言いながら爆弾を撫で撫でする。

「そうかぁ？」

「そうっす！それでもって起爆させた後どれだけ周囲の建物を破壊できるかで興奮度も上下するんすよ」

チャラ男だがテロリストはテロリスト。

やっぱり何だかんだ言って破壊活動が好きなんじゃないか。

嬉しそうに爆弾をアタッシュケースにしまうアルを見つつ思う。

まあ、その気持ち分からないでもないけどね。

僕も好きだから。秩序、平和、正義を「破壊」すること。

そう・・・破壊。いいねぇ・・・。

何ともいえぬ快感が全身を駆け巡るよ・・・。

あ、やばい。興奮してきた。

「ジュン君？どうしたっすか？」

黙っているジュンをアルが覗き込んでくる。

「いや・・・さあ行きましょう。ユウタ達が待ってます」

「あいあいさ～」

ジュンとアルがリーフ邸を後にする。その様子を見てリーフはただ一言。

「遠足かよ」
と呟いたのだった。

＊＊＊＊＊

「そろそろ着いてもよさそうっすね」
アルがアタッシュケースを手に見回しながら歩く。
「その通りですね・・あ・・」
ジュンが木陰から何かを見つける。
二人の人影だ。一人は人間それともう一人は・・・ポケモン、バシャーモだ。
クーとファオだ。
どうやら用を足しているらしい。
「軍人が立ちションはいけないっすねぇ」
茂みからアルが覗く。
「ちょっとからかってやろ」
僕はそう言うと茂みから出る。

声を変えてっと。

「あら、おトイレ中かしら」

可憐なる少女の声で話しかけるとクーとファオが飛び上がる。

そして恥ずかしさで顔が真っ赤になる。が、今は用足しの最中。逃げることが出来ずに居る。

ここで覗き込んだらもっと面白い反応をしてくれるんだろうなぁと思いつつ早速実践するジュン。

肩越しに覗き込むとクーが呻くように言う。

「あの・・あまり見ないでもらいたいんだけど・・・」

ジュンは笑いを必死に堪えて麦藁帽子を深々と被る。

「あはは、やっぱり恥ずかしいよねぇ。女の子に覗かれるのは」

そう言ってやるとクーとファオがお互いに顔を見合わせる。

やれやれやっと分かったか。

まあ仕方ないか。今の僕は純情可憐なお嬢様だからね。

＊＊＊＊＊

その後ユウタ達と合流したジュン達。

道路の茂みに隠れているとあちらから軍用トラックが走ってくる。

あれが・・・ＵＳＡ２に物資輸送車か、

ジュンは薄っすらと微笑むと道路の真ん中に出る。

トラックはジュンを見つけるとブレーキをかける。

車両から出てきたのは若い兵士だった。年はまだ二十代前半。

「危ないぜ。そんなところに居たら」

「あの兵隊さん。実は私困ったことがあって・・・」

上目使いで見ると兵士の顔が一気に赤くなる。

「困ったこと?」

「私の乗ってた車が動かなくなってしまって。だからヒッチハイクをしていたんです」

「へえ・・・そうなんだ」

兵士は舐めるようにジュンを見る。品定めする目だ。

（ふふ・・・僕が可愛いと思って一気に狼化したな。こうなればこっちのものだ）

「車に乗せていただけませんこと?」

「まあしょうがないな。乗っていきな」

兵士の言葉にジュンは笑顔を作る。

「あ、それとご親切な従軍関係者の方にもう一つお願いが・・・」

「俺に出来ることならなんでもするぜ」

兵士は色目を使いまくっている。

どうやら「お名前→電話番号→住所→付き合いが始まる→デート→イェーイ☆」みたいなことを妄想しているらしい。

既に表情が緩んでいる兵士に笑顔を見せる。

そして・・・。

「このトラックを貸してくださいな・・・早く・・」

ジュンはそう言って銃を突きつけたのだった―

「よくも俺を騙したな！」

トラックの中で兵士が涙声で叫ぶ。

「引っかかるほうが悪いんですよ」

ジュンはそういいつつ兵士をグルグル巻きにする。

これでＯＫと。

後はこのトラックで基地内部に侵入して、その後偽造ＩＤカードで基地内に入れば・・・。

＊＊＊＊

その後ジュンはユウタ達と共に基地内に見事潜入した。

基地内部で各自別行動を取る手はずになっていたので、ジュンは一人基地の中を歩く。

目指すはコンピュータールームだ。

ＵＳＡ２の制服を着ているため、誰にも怪しまれずに行動できた。

暫らく歩いていると・・・。

「ここか」

コンピューター室に着く。

中には誰も居ない。

好都合だ。

「さてと・・・」

ジュンはバッグからノートパソコンを取り出し、爆弾の起爆装置に接続する。

パソコンを起動させると画面にウィンドウが現われる。

そこには1番～20番までの番号とそれぞれの番号の下に「設置完了」「設置未完了」と表示されている。

このウィンドウから20個の爆弾のどれが設置が終了しているかが分かるのだ。

ジュンはノートパソコンを横に置くと、コンピューター室のパソコンから軍のデータベースへのハッキングを試みる。

暫らくキーを打つ音のみが響いていたが、一回ジュンが一息つく。

「流石に軍のデータベースはそう簡単には破れないか・・・まあゆっくり行こう」

チラリと横のノートパソコンの画面を見る。

一番から十番までの爆弾は設置し終わっているな・・・ユウタ達は首尾よく終えたようだね。

「今から楽しみだよ・・・どこから起爆させていこうかな」

ヘリポート?弾薬庫?それとも戦闘機の奴・・・?

ジュンは心のそこから湧き上る「悪」に心地よい気分になっていた。

いいよ・・・。彼らが大切に守っていた「平和」「秩序」「正義」を一瞬で叩き潰すこの快感。

これこそ「破壊」の快楽だ！

そう・・悪であることの快感だ！

ゆっくりと闇の思考を楽しみ、ジュンは再びハッキングを再会したのだった―

＊＊＊＊

「ジュン達大丈夫だろうか・・・」

ジュンとアルを見送ったリーフは一人屋敷にいた。

上等なソファに体を預けながらも心配そうな表情だ。

「トワイライト作戦とかいうのに参加しているらしいが・・・どうにも心配だ」

リーフは立ち上がると窓のカーテンを開け、外を眺める。

（ＵＳＡ２基地で何らかの情報を掴むのが仕事、とか言っていたが・・・妙な胸騒ぎがする。それに変な頭痛の話もしていたし・・・・・なんだこの感じは・・・大丈夫とは思うが一応手を打っておこう）

リーフは部屋の壁に吊るしてある呼び鈴をチリリンと鳴らす。

直ぐに誰かが部屋に入って来た。

「お呼びでしょうか？お坊ちゃま」

パリッとした執事だ。

「セバスチャン。連絡を取りたい奴がいる。ポケモンハンターJだ」

「かしこまりました」

老練なる執事、セバスチャンは部屋から出て行く。

暫らくすると再び部屋に戻ってきた。手にはノートパソコンとイヤホンマイクが。

セバスチャンは机にパソコンを置くとリーフのほうに画面を向ける形で置く。

リーフはセバスチャンからイヤホンマイクを受け取るとそれをつける。

と同時にウィンドウが立ち上がり、そこには一人の女性の姿が映っていた。

ジュンの師匠である凄腕ポケモンハンター、Jだ。

『仕事の依頼か？』

Jの問いにリーフが頷く。

「ああ」

『詳しい内容を伺おう』

「あなたに頼みたい仕事はただのポケモンの捕獲では無い」

『・・・・どういうことだ?』

リーフの言葉を不審に思ったのかＪの表情が曇る。

「ＵＳＡ2を知っているか?」

『ああ』

「ＵＳＡ2基地に俺の仲間が居る。その仲間は今現在基地内部に潜入に仕事をしている。あなたに頼みたいことはもし基地で異変が起こったならば直ちに俺の仲間たちの救出して欲しい、ということだ」

『私はポケモンハンターだ。その依頼は私の専門外だ。断る』

「金は弾む。それに基地内に珍しいポケモンが居たら捕まえてもかまわない。無論捕まえたポケモンは自由に売り払ってくれていい。・・・異変が起こらなければただ上空から監視しているだけの仕事だ・・・どうだ?」

『・・・了解した。報酬は私の指定した額にするならば受けよう』

「金は腐るほどあるんだ。今もしものことがあった場合に救って欲しい奴ら全員の画像データ及び基地の場所データを送る」

リーフがカタカタとキーを打つ。

「これで転送完了だ。では吉報を待つ」

ブウンという音と共にあちらの映像が消える。

「彼女は上手くやりますでしょうか？」

セバスチャンの問いにリーフがイヤホンマイクを取り外しながら答える。

「奴は裏世界でポケモン関連の事業をしている者なら誰もが知っている凄腕だ・・・大丈夫さ」

リーフはソファに深々と体を預ける。

「大丈夫・・・」

その呟きは誰にも聞かれることなく広い部屋に消えていった―

＊＊＊＊

一方Ｊは飛行艇の大型モニターを見ていた。

送られてきた画像データをチェックしているのだ。

と、同時に見知った顔があるのに気づく。

「ジュンか・・・」

かつて自分を師匠と仰ぎ、腹心の部下として共に活動していた少年。

二年前の春に起きたＵＳＡ２と国際警察による陰謀でＪは飛行艇と

５２名にも及ぶ部下を失った。

ただ一人ジュンだけが偶然生き残ったのだ。

その後ジュンはＪの部下の中でもっとも優秀だったポケモンハンター、リクの知り合いに引き取られていった。

ジュンがその後ポケモンハンターになり活動中であることは知っていたが、二年間まったくといっていいほど連絡を取っていなかった。

「まさかこんな所でジュンと・・・・」

Ｊは別のデータを見てみる。

そこにはジュン達が潜入しているＵＳＡ２基地の画像と場所が詳細に載っていた。

「この場所に・・。飛行艇をＢ７５地点まで移動させる」

Ｊは部下達に指令を下す。

「尚Ｂ７５地点到達後、飛行艇はステルスモードで上空待機」

Ｊの命令と共に飛行艇はＵＳＡ２基地に向かう。

黒い気体は上空で旋回すると、透明になって見えなくなった―

第六十三話　「悪」の思いと「友」の憂慮（後書き）

次回はイプシロンで

第六十四話　赤き痣の秘密（前書き）

今回は色々と衝撃情報が満載です

第六十四話　赤き痣の秘密

ＵＳＡ２基地のコンピューター室。

ジュンはここでずっとデータのハッキングを試みていた。

かなりガードが固いらしく流石のジュンも手間取っている。

「やっぱり軍の機密レベルマックスの情報は簡単には手に入らないな」

ふうと一息つく。

そしてチラリともう一つのパソコンの画面を見る。

爆弾が全部「設置完了」になっていた。

「ユウタ達は全部終わったか。僕も急がないと」

さらにハッキングを試すこと暫らく。

「これだな・・・」

ジュンの口から独り言が漏れる。

目の前にはＵＳＡ２の最高機密のデータが。

データ名には「『赤い満月』との協力関係詳細」と記してあった。

「やった・・・ついに手に入れたぞ」

ジュンは興奮を何とか抑えつつデータチップをコンピューターに挿入する。

データをコピーする。

「はあ、終わった」

ジュンがため息をつく。データチップを大切に胸ポケットに入れるとノートパソコンを自分のほうに引き寄せる。

「さて、爆弾タイムだ」

ジュンは薄っすらと微笑むと、キーボードをカタカタと打っていく。

するとパソコンの画面に「起爆しますか」という表示が現われる。

「１番から１０番までを起爆っと」

ジュンは「Ｅｎｔｅｒ」を軽やかに叩く。

すると・・・。

ズガアアアン

大きな爆発音と共に窓の外から見えている戦闘機の収納庫が大爆発を起こす。

火の柱が収納庫からメラメラと燃え上がり、機体の半分が吹き飛ん

だ戦闘機の残骸が見える。

「ははは・・・」

窓の外から見える光景にジュンが乾いた笑いを浮かべる。

楽しい・・・

そうか、これが破壊の快感。

例えるならガラスを叩き割るときの感覚だ。

素晴らしい・・・

「次は弾薬庫」

ズガアアアアン！！！

再び「Ｅｎｔｅｒ」キーを押すと、外の弾薬庫が吹き飛ぶ。

どうやら爆弾の爆発に弾薬が誘爆したらしく、先ほどとは比べ物にならないぐらいの爆発だ。

「次は会議室」

ズドン！

起爆させると隣接している施設の２階の窓ガラスが吹き飛ぶ。

「これは愉快だ」

ジュンはにっこり微笑むと最後の爆弾、ヘリポートに設置された爆弾を起爆させようと「Ｅｎｔｅｒ」キーに指を伸ばす。

が・・・。

「そこまでだ！」

鋭い声。

ジュンが振り向くと赤い光の点がジュンの背中を何個も照らしていた。

レーザーポインターである。

そこには特殊部隊の格好をした隊員がジュンにアサルトライフルの銃口を向けていた。

「そのパソコンから爆弾を起爆させていたんだな！？」

おっと見つかったか・・・。

しかしジュンは慌てずゆっくりと隊員達の方に向き直った。

「よく見つけたね。偉い偉い」

「ふざけやがって！・・・よくも俺達の基地で爆破テロを起こしてくれたな！」

「君達の管理がずさんだったからね・・・サイコキネシス！」

ジュンが手を振るうと隊員達が吹き飛ばされる。

今だ！

ジュンはすばやく最後の爆弾を起爆させる。

その爆発音に隊員達が怯んだ隙に、ジュンは出口に向かって走り出していた。

「足を撃ちぬけ！」

隊員達の銃がジュンを狙う。

「残念。そんなものじゃ僕を倒すことは不可能だ。・・・・空間断絶」

ジュンの声と共に周囲の空間に溝が出来るはずだった。

しかし・・・

「うあああああ！？」

技は発動せず、代りに襲ってきたのは鋭い痛み。

これは一体・・・？

馬鹿な。何故・・・技が発動しない！？

それにこの頭痛は一体！？

「おい、動かなくなったぞ?」

隊員達が銃口を向けつつ怪訝そうな声を出す。

「く・・・」

ズキズキと痛む頭を抱え、その場から離れようとする。

「逃がすな!」

パン!

銃声がする。

頼む・・発動してくれ

ブウンという音と共にジュンの周囲の空間の間に溝が出来る。

放たれた銃弾は空間の溝に阻まれる。

「神通力!」

空間断絶で攻撃を防いだ後、ジュンは隊員達に神通力を放つ。

エネルギー弾は隊員達に直撃、全員を気絶させたのだった。

「はぁはぁ」

肩で息をするジュン。先ほどの頭痛は引いてきている。

何だったんだ・・・さっきの頭痛は。

そういえば・・・確かリーフ邸に戻るために「ワームホール」を使ったときも同じ痛みに襲われた・・。

キメラの力を使おうとする度に頭痛が襲う・・・。

しかし今までは無かったことだ。

ジュンは試しに空間歪曲を使ってみる。

「く・・・」

またも襲う鋭い痛み。

「やっぱりだ」

どうやらキメラの力を使用しようとする度にこの痛みが僕を貫く・・・。

ジュンは何とか基地の外に出る。

あちこちで火の手が上がっている。

どうやら爆破事件の混乱で皆ジュンには気づいていない。

こっそりと基地から出たジュンは合流場所に向かう。

「来たか」

集合場所に行くとユウタが腕を組みながら言う。

「結構早かったな」

ファオも木に背をもたれさせかけつつジュンを見る。

「待ってたっすよ～」

アルは何処で買ってきたのかサンドイッチを頬張りながら手を振る。

ジュンは薄っすらと微笑むと胸ポケットからデータスティックを取り出しユウタ達に見せる。

「さすがね」

「すごいなぁ」

「まあ、こんなものさ」

イクスとクーの尊敬のまなざしに若干照れつつ何気なく言い返す。

「さてと、後はエリカ達が来るのを待つだけだな」

ユウタ、クー、ファオ、そしてイクスがそれぞれ銃を手にする。

流石に軍人だけ会って眼光が一気に鋭くなった。

「あらあら、どうやら騙されてしまったようね」

その時、不意に後ろから声がする。

ジュン達が振り返ると・・・・そこにはエリカがいた。

白衣のポケットに両手を突っ込み、冷笑を浮かべている。

ユウタ達がエリカに銃口を向ける。

それを気にも留めず、エリカは言う。

「なるほどね。イプシロン、あなたは私の護衛だったはず。なんで裏切ったのかしら？」

「テメエがＣＩＣとＰ・Ｈ・Ｃを罠にかけて、ＵＳＡ２と商売を始めてることはバレてんだ。・・・・キメラポケモンの実戦投入のためにな」

その言葉にエリカの目が少し大きくなる。どうやらユウタ達が予想外に計画を知っていることに驚いているらしい。

「ふうん・・。さすがね。そこまで分かっているのなら、ＣＩＣに私の真の協力者が居ることも予想済みね」

「もちろんだ」

ユウタの語尾が強くなる。

・・・・ユウタは今緊張している。自分が慕っていた隊長が裏切り者であるかもしれないんだから・・・・。

ジュンは生唾をゴクリと飲み込みつつも銃の構えを崩さないユウタ

とチラリと見る。

「なら・・・出てきなさい。レオン」

エリカがそう言うと、木陰から長身の青年が出てくる。ＣＩＣの特殊部隊「デルタチーム」の隊長レオン・Ｊ・ホーガンだ。

「ほ・・・ホーガン大尉！？」

ユウタが驚いた表情と悲しい表情を同時に浮かべる。

「よぉ」

レオンは手を上げて応えると、木に寄りかかる。今まさに銃口を向けられているというのに平然としている。

「嘘だろ・・・うちのエース部隊「デルタチーム」の隊長じゃねえか・・・」

ファオも目を丸くしている。イクスもクーも同じだ。

「やはり大尉が協力者だったんですね・・・」

「まあな」

ユウタの目に悲しみが映る。

さらにレオンの背後から一人の女性が姿を現す。

エリカと同じく白衣を着ていることから研究者であることが伺える。

「私達罠にはまってしまったらしいですわ」

「大丈夫だ。ロザ。ただ俺の後ろに隠れとけ」

ロザと呼ばれた女性はすっとレオンの後ろに立つ。

そして・・・。

もう一人の足音が近づいてくる。

「久しぶりやな」

茂みから出てきたのは・・・・見覚えのある青年。

色黒の肌に乱雑に切った髪。

それに加えて、特徴的な関西弁。

「・・・・・アキラさん!?」

馬鹿な・・・なぜアキラさんがエリカ達と!?

「嘘ですよね・・・アキラさんが・・・」

途切れ途切れに何とか言葉をつむぐ。

「残念ながら、俺はこっちサイドや」

なんで・・・。

アキラさんは僕とは比べ物にならないぐらい優しいし性格良いし・・・それにポケモンにだって優しいのに・・・。

どうしてまたエリカと・・・？

「・・・・弱みを握られてそっちに付いているんですよね」

確認するような口調になる。

そうだ・・・そうだよ。

アキラさんは騙されているんだ・・・そうに違いない。

しかしそんなジュンの僅かな望みはアキラの一言で絶たれた。

「それは違うわ。俺は俺の好きでこっちに居んねん」

「っ！？・・・・まさか・・・アキラさんの言ってた好きな人って・・・」

思い当たる節があった。

「そうや。俺が死ぬほど好きな奴・・・それはエリカや」

そういってチラリとアキラはエリカを見る。

「そんな・・」

頭の処理が付いていかない。

「さてと・・・あなた達が狙っているのは私が持っているキメラのデータね？」

エリカは薄い笑いを浮かべる。

「ああ」

ユウタが短く返す。

「ふふ。なら先にこっちが聞かせてもらうわ・・・。ジュン、あなたの体調最近変じゃなくて？」

なんで・・・それを！？

動揺を隠しつつジュンが応える。

「ならどうしたのさ」

「キメラの力は体を蝕む」

何だって・・・。

「何を言ってるの・・・」

「あなたの体に赤い痣が広がってるはずよ」

エリカの言葉にジュンが無意識に服を捲り、自分の体を見る。

そう、浴場でシャワーズに指摘された・・・赤い痣。

・・・・広がっている!?

ジュンの腹部にあった赤い痣はまるで血管のように横腹にまで広がっていた。

「あら“刻印”がそこまで進行しているなんてね。・・・だいぶキメラ能力を乱用したわね」

「刻印？」

鸚鵡返しの言葉にエリカの笑いが深くなる。

「そうよ・・・通常ポケモンの遺伝子を組み込んだキメラは体調に変調を来たすことはあるけど、そこまでの激しい変化は確認されない。でもね・・・」

エリカは歌うように続ける。

「“神”と呼ばれしポケモンの力を別のポケモンに組み込んだ場合は別。組み込んでから暫らくの間は強力なキメラの力を乱用することが出来る。ただし、一定の期間後、神の力を組み込まれたポケモンにはある変化が見られる。そうよ・・・“刻印”と名づけたその赤き痣はそのポケモンの全身にゆっくりとしかし確実に広がっていく。と、同時にキメラ能力を使用するたびにキメラには耐え難い苦痛が襲うようになる。もちろん、キメラ能力の使用によっても“刻印”は進行するわ」

エリカは数枚の写真をジュン達のほうに見せる。

そこにはポケモンの死体が写っていた。全身に血管のような赤い痣が広がっている遺体である。

「全身に刻印が広がった時、組み込まれたキメラは死亡するわ」

そんな・・・。

ジュンは震える手で自身の体に目をやる。

この痣が・・・刻印が全身に広がったら・・・死ぬ？

僕が・・・。この僕が・・・。

「まあ今まで１００体のポケモンで実験をしたけど、全員刻印が広がって死んだわ。神の力に耐えられなくてね」

１００体も殺したのか・・・・。

呆然とジュンはエリカを見る。

「ふふふ・・・ははははは！」

突然狂ったように笑い出すエリカ。

「何のためにあなたを捕まえたと思っているの！？そうよ、私達【スキエンティア】の目的はポケモン同士を掛け合わせたキメラなんかじゃない！ジュン、あなたこそ人間とポケモンのキメラの第一号！そして、神の力がやはり刻印を人間の体にも発生させるのかを調べるための実験材料よ！」

そうか・・！

エリカが僕にパルキアの力を与えたのは人間にも刻印が進行するのかを確かめたかったからか・・・！

「でもあなたのお陰で良いデータが取れたわ。・・・これで神の力を制御するための術の手がかりもつかめるというもの」

神の力を制御・・・。

「まさかエリカ、君は自らの身に神の力を組み込むつもり?それで、刻印の進行を止め神の力を御するための薬品の開発に必要なデータを得るために僕に・・・!?」

「まだそれにはノーコメントよ」

エリカはジュン達に背を向ける。

「おっと何処に行くつもりだ?」

ユウタが銃の照準をしっかりとエリカに定める。

「・・・アキラ」

「了解や」

アキラがすっとジュン達の前に出る。

「自分達の相手は俺や・・・」

アキラは手をすっと振る。

すると・・・。

地中からいきなり数十本もの鎖が飛び出し、ジュンたちを拘束した。

「な・・・」

ユウタも驚いている。

「次はこれや」

アキラの言葉と共にユウタ達の銃がバラバラと分解していく。

「くそ!」

ファオが引き金を引くが銃弾は発射されず、手の中で砂のように消えて行った。

馬鹿な・・。

銃がバラけるのは何らかの技を使ったと推測すれば納得できる。

でも、さっきこの土を踏んだときに地中に何か埋まっている感触は無かった。

・・・一体何をしたんだ、アキラさんは。

「さてと、行きましょう」

エリカ達が去っていこうとする。

その瞬間ジュンはあることを思いついた。

もしかしたら・・・これは・・・。

頼む。神の力よ・・・僕に真実を見せてくれ！

「空間断絶！」

ジュンがキメラ能力を発動させる。

襲う激痛に歯を食いしばりながら耐える。

ジュンの空間と周囲の空間の間に溝が出来、鎖が消滅した。

そう・・・消滅したのである。

本当なら、解けるか千切れるかするはずの鎖が・・・消えた。

つまり・・・。

「これは幻影だ！」

「正解や」

「ジュン君、一体どうなってるの！？」

イクスがわけが分からないといった表情を浮かべる。

「騙されないで！今あなた方を拘束している鎖は幻です！動けるんです！」

「そんなこと言ったって。現に動けないっすよ！」

ジュンが言うがユウタ達は幻影に捕らわれたまま動けない。

「無駄や。俺の幻影は頭で分かってても普通は逃れることは出来へん。・・・・エリカ」

アキラはエリカに向き直る。

「ジュンと二人きりでやりあいたい。ええか？」

アキラはクルリと背を向けて森の中に入っていく。ジュンも後に続く。

「ここらなら邪魔は入らへんな」

「アキラさん、あなたは一体・・・・」

アキラが振り向く。その姿にジュンは息を呑む。

目が・・・変化している！？

目の周りに赤い縁取りが現れ、青い目になっている。

「俺はな・・・」

バサバサとアキラの体を灰色の深い毛が覆う。

それと同時に耳が伸び、まるで犬か狐のような尖った耳に変化する。
短く切っていた黒髪も赤い色に変色し、肩・・・いや腰まで伸び先端が黒くなる。

「エリカが作りだした人間ベースのキメラの第二号。組み込まれたポケモンはゾロアーク。幻影の覇者の名を冠する幻の使用に長けたポケモンや」

アキラの姿が完全に変化し終わる。

その姿は“完全な”ゾロアークの姿ではなかった。

全身灰色の毛に覆われ、赤髪は腰まで伸び、耳と目もゾロアークのそれだが顔つきは人間であるし、手の形も人類族のものだった。

まるで狼人間だ。

「もう分かったやろ。プロジェクト・キメラの真の狙いが」

そう。

分かった。

分かってしまったのかもしれない。

「人間とポケモンを融合させて、新しい生命体を作ること」

「その通りや。まあ、今の俺の姿は半端やからな」

自嘲気味に語るアキラ。

確かに今の姿は人間と言うにはあまりにポケモンに近く、ポケモンと言うにはあまりに人間に近い。

人間でもポケモンでもない異形の姿だった。

「まあ、自分をずっと騙してて悪かったと思ってるんや」

キメラ形態に変化したアキラはふっと悲しそうな顔になる。

「でもな。愛って怖いもんや。俺はエリカを愛しとる。そのためにチャンピオンの座も捨てた。あいつには良い腕のポケモンハンターが必要やった。だからハンターになった。あいつには従順な部下が必要やった。だから俺はどんなことでも聞いたった。あいつには逆らわない人間の実験体が必要やった。だから、俺が試験体になったんや！！！」

アキラが今までに見せたどの表情よりも激しい激情を見せる。

これは既に愛の域を越している・・・・。

執着にも似ている・・・。

そう、アキラさんを支配しているのはエリカに対する狂気と紙一重の愛。

そのために全てを捨てたのか・・・。

「アキラさん・・・エリカは貴方を道具としか思ってません！どうしてそれが分からないのですか！貴方の痛ましいほどの愛に応えることなど一生無い奴なのに！？」

「だからどないしたんや！！」

アキラが怒鳴る。

「そんなことはなぁ・・・百も承知なんや！でも俺の思いは曲げられへん！俺はあいつを支えてみせるわ・・・例え捨てられることになっても、例え・・・あいつが一生振り向きもせぇへんでも・・・俺はあいつを愛し続ける！地獄のそこまでいったる！さあ、ジュンバトルや！エリカはお前の力を試したがっとる！」

アキラは小さな装置を地面に置く。

「この装置には今からのバトルのデータが詳細に記録される・・・エリカが欲しがっとるデータをな・・・」

「アキラさん！僕はあなたとこんな形で戦いたくない！」

「これは運命や。ナイトバースト！」

アキラが黒い衝撃波を放つ。

「守る！」

ジュンは何とかその攻撃を防ぐ。

やるしかないのか・・・。

「さあ、始めようやないか・・・人間ベースのキメラ同士の戦いっちゅうやつを」

雌雄を決するバトルが始まった―

第六十四話　赤き痣の秘密（後書き）

ついでに補足をしておくと赤き痣こと「刻印」の進行は神の力を組み込まれたキメラのみ。

アキラに組み込まれたのはゾロアーク、神では無いので彼には「刻印」は存在しません。

第六十五話　ジュンＶＳアキラ　幻影の脅威と目覚める力

「行くで」

アキラがジュンと間合いを詰める。

ゾロアークの耳と目の周りの赤い縁。しかしその顔は人間だった。

「ナイトバースト！」

アキラが手をクロスさせたかと思うと再び黒い波動を放つ。

「く・・・大文字！」

「やるやん」

大文字でナイトバーストを防ぐジュンにアキラがニヤリと笑う。

「じゃあこれならどうや！幻影よ！」

アキラが手を掲げると周囲から大量の水が押し寄せてくる。

激流はジュンを飲み込んでしまった。

く・・息が出来無い。

ブクブクと溺れかけるジュン。

これも幻影。でも頭で分かっていても体は実際に「溺れている」と

思い込んでいる。

「どうや。俺の幻影は。そう、頭で分かってても実際に幻影から抜けられるかどうかは別問題ちゅうこっちゃ」

「く・・・空間断絶！」

ジュンが襲い掛かる頭痛に耐え、空間断絶を発動させる。

その瞬間周囲の水が消え、ジュンは息が出来るようになった。

「空間断絶を使えば幻影から抜けられるようやな。でもあんまり使うと自分、命縮めんで」

「はぁはぁ」

痛みが引いてきているとは言え、まだズキズキと痛む。

神の力に体が悲鳴を上げているのだ。

「なんや。最初から息あがっとるやん」

アキラがジュンに近づいてくる。

これは凄く不利な戦いだ。

アキラさんに組み込まれたポケモンはゾロアーク。悪タイプだから僕のエスパー技は無効。

それに加えてキメラ能力を非常時以外使えないとなると・・・きつ

いぞ。

アキラの目とジュンの目が合う。

すんだ青い目に変化している。

「もうちょい頑張ったらどないやねん。仲間に頼らずにな・・・・」

「アキラさんの手持ちはどう思っているのです?」

ジュンの問いにアキラが片眉をピクリと上げる。

「あいつ等は手放したわ」

その応えに今度はジュンが驚く番だった。

「あの三体の手持ちを・・・!?」

アキラさんの手持ちはフライゴン、エアームド、そしてルギア。

苦楽を共にしてきたであろう仲間を手放しただって!?

「ああ。トレーナーの勝手でポケモン達を振り回すわけには行かんからな」

アキラはジュンに手を向ける。

来る・・・!

「ナイトバースト」

放たれる黒き波動にジュンは「守る」を発動させようとするが・・・。

いきなりジュンの周りをガラス出てきた壁が取り囲み、技の発動を阻害する。

その一瞬の出来事にジュンの注意が逸れる。

――これも幻影っ！？

気がついた時には遅かった。

ナイトバーストに吹き飛ばされるジュン。かなりのダメージだ。

「もう終わりなん？」

アキラがジュンに近寄り、すっと腰を屈めた。

長く赤い髪がバサリと地面に擦れる。

「もうちょっと頑張ってえな」

つまらなそうに言うアキラ。

今の僕には「空間断絶」「空間歪曲」「ワームホール」「ゴッドアイ」「亜空切断」のいずれかを使っただけで命を縮める。

ならば技を使わずにアキラさんを攻略すべきだ。

ボーマンダ達となら・・・・いや、駄目だ。誰が出てもどうせ幻影の餌食になるだけだ。
それに仲間が幻影の効能で同士討ちをさせられる可能性もある。
ここは僕一人で戦うのがもっとも有効だ。
何か他の・・・新しい技でも使えれば・・・。
まずはアキラさんと距離を取らなきゃ・・・・それが先決だ。
「お～い生きとるか？」
黙ったまま座り込んでいるジュンにアキラが覗き込んでくる。
今だ！！
ジュンは地面の土を掴むとアキラの目に投げつけた。
「く・・目潰しかいな！？」
アキラが両手で顔を覆う。
ごめんなさい。ホントはこういう攻撃をするのは気が引けるんだけど・・・・。
ジュンはがら空きになったアキラの急所に思いっきり蹴りを入れる。
変な感触がした。・・・・男としては味わいたくない感覚かな。
「あうっ！？」

予想外の攻撃にダメージを受けるアキラ。

ジュンはそのまま飛びのくとアキラと間を空ける。

「く・・・くぅ・・・この・・・ここは・・・反則・・・やん」

地面でのた打ち回るアキラにジュンは追撃を仕掛ける。

「大文字」

手から放たれる業火に背中から直撃するアキラ。

「熱ちちちち！」

アキラは燃え盛る業火から何とか抜け出し、ジュンと向き直る。

「ようやってくれよったな・・・・」

「アキラさん、止めましょうよ」

ジュンは悲しそうな声で語りかける。

「このバトルには何の得もありません。・・・誰も何も得ない戦いなんですよ。それに僕はこんな形でアキラさんと戦いたくないです」

アキラは胡坐をかいて黙って座っている。

「いや、得はするわ・・・エリカがな。エリカは人間ベースのキメ

ラのデータを欲しとるんや・・・だから・・・」

「アキラさん！あなたのは愛では在りません！ただの妄執です！」

悲しいまでの思い。ジュンには既に愛が妄執に変わっているのがありありと分かった。

「違う！俺はエリカを愛しとる！エリカのためなら何だってしてやるんや！・・・見せてやるわ、ゾロアークの特性イリュージョンちゅうやつをな！」

その瞬間アキラの姿が変化する。

ジュンの前に現れたのはライコウだった。

「電磁砲！」

ライコウが口から電撃を放つ。

「っ！？」

ジュンがとっさに電磁砲を避けるが、驚くべきことが起こった。

何と放たれた電撃自体が変化し、アキラの姿になったのだ。

そうか・・・本体はあのライコウではなく電磁砲のほう・・・！

放たれた電撃に化けて僕に奇襲を・・・！

「ナイトバースト！」

ゼロ距離攻撃を喰らいジュンが吹き飛ばされる。

「く・・」

「さっき股間を蹴られたお返しや」

アキラが地面に伏しているジュンの首根っこを掴み、体を上げさせる。

「アグノムに変化したらどうなん?」

「チャンピオンなら分かるでしょう・・・。アグノムに変化すれば悪タイプの技のダメージが人間状態の時以上に喰らってしまうことをね」

「それもそうやな」

アキラはジュンの顎を手で持ち、首を上に向かせる。

「・・・俺は間違っとらん。愛の為に全てを捨てただけや」

自身に言い聞かせるように呟くアキラ。

ジュンは静かにそれを否定した。

「いいえ。今のあなたは冷静な判断が出来ていない」

バキッ

その言葉を聞いた瞬間アキラの拳がジュンの頬に炸裂する。
頬が熱くなり、口の端から暖かい液体が流れる。
「自分に何が分かるんや。俺がどんな思いで・・・・」
「分かりますよ。アキラさん」
口の端から流れる血を片腕で拭いながら静かに言う。
「苦しいんですよね。真実に気づきそうなあなたがどこかに居るのを自分自身で感じているのは・・・・」
「俺は後悔なんてせぇへんのや！」
アキラがジュンを突き飛ばす。
「ワォォォォン！」
アキラが突然獣のような声で鳴く。
その声にジュンの体の特殊技に対する防御能力が低下する。
これは「嘘鳴き」と言う相手の特殊防御を下げる技だ。
そうか、ここから「ナイトバースト」につなげる気か・・・。
でも
「大文字！」

ジュンが炎を放つ。

「おっと」

アキラは軽い身のこなしでそれを回避する。

「なら・・・爪とぎ」

アキラが手をクロスさせゆっくりと気をためていく。

「ナイトバースト」

再びアキラがナイトバーストを放ってくる。

ジュンはそれを避けようとするが、何と先ほどとは比べ物にならない命中率でジュンに直撃する。

「爪とぎは命中率と攻撃能力を上げる技や。・・・嘘鳴きと爪とぎで俺と自分の相対能力値には開きが出るばかりやで」

強い・・・。

ジュンはただアキラの強さに心を奪われていた。

さすが元チャンピオン。

自身がポケモンの能力を手に入れてバトルしていても、その経験からはじき出される的確な技選びはさすがだ・・・。

無駄が無い。

それに威力も強い。今のアキラさんには最新鋭のキメラ技術によって与えられた力とチャンピオンとしての経験が備わっている。

本来ならば僕が勝てる相手ではない・・・。

でも・・・。

僕は負けるわけには行かない。

ユウタ達のため・・・何よりアキラさんのためにも。

それに決めたじゃないか・・・。

ジュンはゆっくりと立ち上がる。

「まだ立つんかいな。まあええ。その根性はさすがや。でも、終わりにしようや・・。自分は俺が回収させてもらう。悪いけどな・・・エリカが自分に役目を与えるのももう終わりや」

アキラがすっと片手を上げる。

「究極の幻影を受けてみるがいいわ。イリュージョン・ショック！」

アキラの手から白く輝く光玉が生成される。

「こいつは自分が今まで受けた「痛み」の感覚を再生させるんや！俺達のバトルで受けたダメージから、赤ん坊の時に何かにつまずいたときの感触まで・・・全ての痛みを濃縮したダメージをお前に与

える。まあ、こいつも幻影。実際には存在はせえへんが・・体と脳の誤認は幻影を現実に変えるんや！」

アキラがイリュージョン・ショックを放つ。

「これで終いや」

そうだ・・・決めたんだ！

僕は悪を極める・・・悪を為すのだと！！！

その瞬間ジュンの中で新たな変化が起こった。

ジュンの体を蝕む「神の力」とジュンに内在する「闇」が結合し、新たな力となったのである。

刹那、ジュンの体を漆黒のオーラが包む。

「んな！？」

イリュージョン・ショックは黒きオーラに阻まれ消滅する。

「なんや・・・馬鹿な、ジュンにはこんな技は・・・！？」

ジュンも今自分が発動した技のことが分からず呆然と両手を見ている。

何なんだ・・。

今、・・・黒いオーラが僕から・・・。

分からないでも、一つだけはっきりとしていることがある。

確信があった。

この能力はキメラ能力でもポケモンの技でもない。

新しい力なのだと。

ジュンはスッと手を翳す。

すると手から冷たく心地良い黒い煙のようなものがあふれ出てくる。

ひんやりしている。しかしその奥には何かの力が内在している。負の力が・・・。

この感覚にはジュンは覚えがあった。

悪事を働いたり、破壊行為をする時に感じるあの感触。

穢れていて、しかしどこか心地よく、負の香りと純粋な力の結晶。

これはまさか・・・！

僕の心の闇が・・・神の力と結合したのか！？

ジュンはアキラに手を向ける。

自然と口から技名が出てきた。まるで前から使っていたように自然に出てきた。

「剥奪する闇（ディプライヴ・ダーク）」

この力は使っても頭痛は襲わない。

ということは刻印の進行とも無関係だ。

流れ出た黒き闇は辺りを覆っていく。

「こいつは・・・」

アキラが戸惑ったようにキョロキョロと辺りを見回す。

深き闇はジュン達の周りを覆ってしまった。まるで比重の重い気体のように足元に黒い空気がたまっている。

「この闇は僕の魂から創り出されたものです。・・・この闇に触れると力が吸い取られていきますよ」

「な・・」

そうだ・・・。

ジュンは自分の体力が回復していくのが分かった。

少しづつ相手の体力を“剥奪”していく。そう精神力とともに。

「さあ、行きますよアキラさん。僕の闇であなたを目覚めさせて上げます！」

ジュンの闇とアキラの執着

ぶつかり会う二つの思い。

その行方は―

第六十五話　ジュンＶＳアキラ　幻影の脅威と目覚める力（後書き）

ジュンの新たな能力についてはもう少しあとで説明します。

第六十六話　ジュンＶＳアキラ　進化する「闇」（前書き）

連続投稿です。まあ次回からスピード落としますが

第六十六話　ジュンＶＳアキラ　進化する「闇」

「なんなんや・・・」

アキラが若干怯えたような声であたりを見回す。

周囲にはジュンの技「剥奪する闇（ディプライヴ・ダーク）」で闇に満ちている。

「闇よ・・わが元に集え！ダークボール！」

ジュンが手から黒いエネルギー弾を放つ。

「く、守るや！」

アキラはバリアを発生させてこれを阻止する。

「嘘鳴き！」

ワォォォォン

アキラの咆哮がジュンの防御能力をさらに低下させる。

しかしジュンは動じない。

確信があったから。

その様子にアキラは舌打ちをすると、手にエネルギーをため始める。

「ナイトバースト！」

「ダークボール」

ジュンの技とアキラの技がぶつかり合い対消滅をする。

「アキラさん、気がつきませんか?あなたの体力は刻一刻とこの場に充満する闇に食われていっていることを」

もちろんアキラは気がついていた。

体力が少しずつ削られていっている。

(確かに長期戦になったら厄介や。でも速攻でカタをつければ・・・)

「イリュージョン・フレア!」

アキラが手から幻影の炎を出す。

「この瞬間ディプライヴ・ダークの効果を発動させます」

その言葉と共に周囲の闇が集まり、アキラのイリュージョン・フレアを包み込む。

「な・・・」

「剥奪する闇の第二の効果。それは相手の技を吸収し、僕がそれらを使えるようになる能力です。もっとも吸収した技の威力は元々より落ちますが」

（くそ、なんちゅう能力や。それにしても・・第二？ちゅうことは第三もあるんかいな・・・）

アキラさんは動揺している。畳み掛けるなら今しかない。

「剥奪する闇（ディプライヴ・ダーク）で吸収した技を発動！『イリュージョン・フレア！』」

ジュンが手から得た技を放つ。

「くそ・・こっちもイリュージョン・フレアや！」

ぶつかり合う二つの技。

バシュウ。技がお互いを打ち消しあってしまう。

またもや相打ちである。

「なかなかやりますね。なら、ダークボール連射！」

ジュンが三連発のダークボールを放ち、それらがアキラに直撃する。

ディプライヴ・ダークによって体力を削られていたアキラはとっさに反応できなかったのだ。

「技吸収は厄介やけど、力押しでは負けへん！ナイトバースト！」

アキラがナイトバーストを放つ。

「ディプライヴ・ダーク、ナイトバーストを剥奪せよ！」

ジュンの言葉と共にまたもや闇が放たれた技を包み込んでしまった。

「これで僕もナイトバーストを使用できます」

「オリジナルは負けへんわ！ナイトバースト！」

「キメラ自体がコピーでしょうが！ナイトバースト！」

バチバチとエネルギーが周囲に走る。

「くそ・・」

「く・・・」

どうやら放たれた技同士が爆発を起こし、二人とも吹き飛ばされてしまったようだ。

しかし・・・。

「クソが・・・体力を削りやがるわ・・・」

アキラが肩で息をしながら立ち上がる。どうやら『剥奪する闇』にだいぶ体力を吸収されたらしい。

「大文字！」

「ナイトバースト」

ジュンが大文字で奇襲をかけるが、ナイトバーストで対処される。

やっぱり一筋縄じゃいかないね・・・。

でももうちょっとで闇にエネルギーが充填される。

そうなれば・・・。

が・・・。

「隙あり！」

ナイトバーストがアキラに変化する。

しまった！特性イリュージョンか・・・！

アキラはなんと大文字のエネルギーを体にまとわせ、ジュンに突撃してくる。

「ッ！？ダークオーラ！」

ジュンが慌てて闇のバリアを発生させる。

しかし大文字の攻撃力をプラスしたアキラの奇襲にダークオーラは耐えられず、ジュンはそのまま攻撃を受けてしまった。

「うあああ！」

ドサリと地面に倒れるジュン。

「はぁはぁ・・・今度こそ勝ったで」

アキラが苦しそうに息をしつつ、木に寄りかかる。

どうやら彼もかなりのダメージを受けているらしく、キメラ状態が半分解除されて髪の色と長さが元に戻っている。

「まったく手こずらせてくれるわ」

「まだ終わってませんよ？」

「自分！？」

ジュンが立ち上がったのを見てアキラが目を丸くする。

「まだ立てるんかいな・・・」

「ええ。さてと、剥奪する闇（ディプライヴ・ダーク）第三の能力を使わせていただきますね」

「三個も能力がある技やと・・・！」

ジュンの「剥奪する闇（ディプライヴ・ダーク）」には複数の能力が備わっている。

一つ目は相手の体力を吸い取る効果。

二つ目は相手の技を吸収する効果。

そして三つ目は第一、第二の効果で吸い取った体力や技の『パワー』が一定量に達したとき、闇自身がその姿を変える効果。

「さあ闇よ！今こそ漆黒の炎を纏いし不死鳥の姿になりて地上に棲む正義を嘲れ！発動せよ！黒炎の不死鳥（フェニックス・オブ・ダークフレイム）！」

刹那、ジュンとアキラの周りの闇が一箇所に集まりその姿を変えていく。

「『剥奪する闇』の体力と技の吸収効果はこの最後の能力を発動するための前座ですよ。闇は力を蓄積します。一定量のパワーが闇に溜まった時、真の姿を表すのです」

二つ目の吸収能力も第三の最終効果を発動させるための布石に過ぎない。

闇がその姿を完全に変える。

燃え盛る漆黒の炎に身を纏う不死鳥の姿に変化したのだ。

大きさは約三メートルといったところ。

「馬鹿な・・・」

「この技はこの世に存在するあらゆる技と異なります。通常技は使用者が放ついわば『道具』ですが、この『黒炎の不死鳥（フェニックス・オブ・ダークフレイム）』は僕の分身。僕の意思道理に動くもう一つの体のようなものです」

「分身やと・・・」

そう。だからこの不死鳥と僕とは視界を共有している。かなり自由度の高い技だ。

ここまでの一連の技は全てジュンも使ったことの無いものばかり。

しかし分かるのだ。ジュンの中で生まれたこれらの「闇の技」がどのような効果を持っているのかが。

それはポケモンは新しく技を覚えたとき、今まで使ったことの無い技であってもその使用方法と大方の威力が分かるのに似ている。

不死鳥はスッと木の上にとまる。

「行け！不死鳥よ！」

バサリと不死鳥が羽ばたくとそのままアキラに向かって直進する。

「守る！」

とっさにアキラが守るを発動させる。

「ぐ・・・」

不死鳥の燃え盛る体はアキラをそのまま包み込む。

闇の炎があたりを覆う。

（なんつう熱さや！こいつは直撃を喰らったらヤバイで！）

「悪意の炎はそう簡単には鎮火しませんよ」

（やばい・・・守るが・・持たへん・・・）

守るのバリアが少しずつ灼熱に押されていく。

（こうなったら・・）

「ナイトバースト！」

アキラは守るを解除、ナイトバーストで闇の炎に立ち向かう。

「・・・舞い戻れ」

ジュンの指示と共に『黒炎の不死鳥（フェニックス・オブ・ダークフレイム）』が黒い焔の羽根を地面に落としながら、ジュンの横に寄り添うように止まる。

「使用者と共に戦う『技』か・・・まるでポケモンやな」

「ええ。まあ、ポケモンよりは手がかかる子ですけど」

ジュンがつらそうな表情になりながら言う。

「黒炎の不死鳥を維持するには一定時間経過ごとに体力を半分コストとして払う必要があるんですよ・・・・」

そう・・・『剥奪する闇』の第二形態『黒炎の不死鳥』はかなり強烈な技だが、その分維持するためのコストも高いのだ。

維持コストは体力の半分。

払わなければ元の闇の姿に戻ってしまうのである。

また不死鳥の形態に戻すことは出来るが、時間がかかってしまうのだ。

「そんなこと公言してええん？」

「どっちにしてもどちらもギリギリでしょう？」

「それもそうやな・・・自分とはもっと別の形で戦いたかったわ」

「僕もです」

ジュンとアキラが間合いを詰める。

一瞬の静寂。

この一撃で勝負が決するのだ。

「ナイトバースト！」

「燃やし尽くせ！黒炎の不死鳥よ！」

アキラが特大のナイトバーストを、ジュンが不死鳥をそれぞれ放つ。

お互いの技はぶつかり合い、火花を散らす。

そして・・・。

ナイトバーストを突き破り、不死鳥がその灼熱の体でアキラを包み込んだ。

「ぐ・・ぐあああああああ！！！！」

闇の炎に全身が悲鳴を上げる。灼熱の苦痛がアキラを貫く。

（くそ・・・俺は・・・ここで・・・負ける・・・わけ・・には・・・）

文字通り焼き尽くされるアキラの精神。

漆黒の炎が全てを焼き払う。

ドサリ

アキラが倒れる。

「舞い戻れ」

その様子を見たジュンは不死鳥に指示を出す。

黒き不死鳥はすっとジュンによりそう。

燃え盛る闇の炎の体と真っ赤な目の不死鳥はジュンを覗き込む。

まるで催促するような目だ。

「分かっているよ・・・維持のための『餌』だろ・・・」

今ここで『黒炎の不死鳥』を元の闇の形態に戻してしまうと、ユウタ達を助けるときにもう一回発動させないといけなくなる・・・。

『剥奪する闇』から『黒炎の不死鳥』に変化させる手間を考えると、ここは体力の半分を支払ってでも今の形態を留めておく方が効率的だ。

「体力の半分を維持コストとして払うよ」

ジュンの体から力が抜け、不死鳥に吸収される。

「はぁ・・・流石に限界が近いかも・・・」

元々減っていた体力を維持の為に2回も半分にしたのだ。

流石に維持コストが辛いな・・・。

そう思いつつもジュンが不死鳥を引き連れて行こうとした時。

「・・・幻影よ・・・・」

ジュンの周りを煙が覆った。

「ッ!?まさか・・・」

そうそのまさかである。

アキラが最後の力を振り絞って幻影をジュンに見せているのだ。

くそ・・・なんとか幻影を振り払わなきゃ・・・。

『空間断絶』を使えばこの幻影を無効に出来る。

しかし『黒炎の不死鳥』を維持するために体力を限界まで切り詰めている状態ではもはやキメラ能力を使うことなど不可能だった。

「信じられないな・・・あの状態で技が使えるとは・・・・」

ジュンはただただ幻影が解かれるのを待つしかなかった―

＊＊＊＊

その頃。アキラはヨロヨロとエリカ達の下に向かっていた。普通の人間ならばあの攻撃で完全にダウンしていた。

しかしアキラにはポケモンの力が備わっている。

首の皮一枚で耐えたのだ。

手には録画装置が握り締められている。

「ジュンのあれ・・・なんなんや、あの闇の技は・・・・・」

ポケモンリーグのチャンピオンでも見たことが無い。

（今はまず・・・体力を回復することが先決や・・・）

足が震える。もはや歩くことすら困難だ。

すると向こうにエリカ達の姿が見えた。

どうやらアキラがユウタ達にかけた幻影は効果が持続しているらしく、動けずに居た。

「おい、どうした?ボロボロじゃねえか!?」

アキラに気がついたレオンが急いで駆け寄ってくる。

「ああ、ちょっとな」

「ジュンとかいう子とやりあったのね？」

ロザが鞄から出した救急回復スプレーをアキラに吹きかけながら言う。

「データは？」

その時エリカがアキラによって来る。

アキラがこんなにボロボロになっているのに、労わりもしない。

だがアキラはその酷い扱いを気にもせず、エリカに録画装置を渡す。

「ジュンには新たな力が備わっとる・・・・」

「なるほど。一回研究所に戻るわよ」

エリカはデータを無表情に受け取ると、さっさと歩いていってしまう。

「肩を貸せ」

レオンはアキラの腕を自分の肩に回させる。

「歩けるか？」

「ああ・・・ちょっとキツイけど歩けんことはないわ」

しかし足元がおぼつかないアキラ。

「ったく無茶しやがって」

レオンはため息をつくとアキラと共に歩き出す。

「一体何があったの？」

ロザの問い。しかしアキラは辛そうに呻く。

「・・・・研究所に戻ってから話すわ・・・」

漆黒の焔に焼かれたダメージがだいぶ効いたようで、アキラは今にも倒れそうだった。

その様子にレオンとロザは顔を見合わせたのだった―

＊＊＊＊＊

その後、ジュンが『黒炎の不死鳥』をつれてユウタ達の下に駆けつけた。

幻影が解けたらしい。

しかしそこにはアキラの姿もエリカ達の姿も無かった。

「逃げられたか」

ジュンはまだ固まっているユウタ達を見る。

さすがゾロアークのキメラだ。アキラさんがここに居ないのにまだ幻影の効果が持続しているなんて・・・・。

しかし急いでこの場を去らなければいけないのだ。

もうじきＵＳＡ２が追ってくる・・・。

手っ取り早く目覚めさせるには・・・。

「不死鳥、彼らを軽く焼いてやれ」

ジュンの言葉に答え、不死鳥がユウタ達を包む。

暫らくして・・・。

「熱っ！？」

ユウタ達の目が覚める。

「な・・俺達は・・」

「ユウタ、さっさとこの場から離れるよ」

「え・・ジュン？何だよ、それは」

ユウタが『黒炎の不死鳥』を指差す。

が、『黒炎の不死鳥』の姿が溶けるようになくなってしまう。後に

残ったのは闇だが、それもジュンの体に溶け込んでいった。
どうやら技を回収したらしい。
「話している暇は無い。さ、さっさと―」
その時上空に大きな影が見えた。
「ＵＳＡ２っすか！？」
アルが怯えたような声を上げる。
ユウタ達も身構えるが、直ぐにジュンがポツリと呟く。
「師匠の飛行艇だ・・・」
なんでここに・・・。
ポケモンハンターＪの飛行艇は着陸すると、機体の横のドアが開いた。
誰かが呼んでくれたんだ。
おそらくリーフが・・・。流石だよ・・・。
ジュン達は飛行艇に乗り込む。
飛行艇はゆっくりと上昇し、その後ステルスモードに移行し東に飛行して行った―

第六十六話　ジュンＶＳアキラ　進化する「闇」（後書き）

今回のジュンのダーク技は全て彼の中の「闇」を具現化したものです。

その理由は後ほど。

では♪

第六十七話　“真”のパートナー「Ｒｅｓｈｉｒａｍ」

「うん・・・」

フカフカとした心地よい感触。

ジュンはベッドの上で目を覚ました。

おかしいな・・・僕は確かアキラさんと戦った後、師匠の飛行艇に乗って・・。

その後の出来事が思い出せない・・。

ジュンは辺りを見回す。すると自分が見慣れた光景の中にいることに気がついた。

「ここはリーフの・・・」

「よう。気がついたか」

カチャリと扉を開けて入ってきたのはリーフ。

「僕は一体・・・」

「お前飛行艇に乗った瞬間ぶっ倒れちまったって聞いたぜ?それで直ぐに飛行艇で俺ん家まで送ってもらったって寸法だ」

「なるほどね」

リーフはジュンのベッドに腰をかける。

「あいつ等から聞いたぜ・・・刻印のこと」

「そう・・・」

神の力の代償。それはじわじわと体を蝕む“死”

「お前が寝ている間に医者に診せた」

「どうだって？」

「・・・現時点では情報が少なくて完治は難しい。開発者であるエリカしかそれを止める術を知らないだろう」

そうか・・・。

僕は別に死ぬのが嫌なわけじゃない。でも・・・。

こんな形で死ぬのは真っ平ごめんさ。

ジュンは服を脱いで、自分の肉体を見る。

色白の肌に赤い刻印が血管のように広がっている。

前よりさらに刻印の進行が進んでいる。

「もうこんなに・・・」

リーフが悲しそうに顔を伏せるが、ジュンが半裸のままその肩をた

たく。

「大丈夫、僕は死なないよ」

「ああ。死なせはしねえさ・・・」

リーフは一つの小瓶を取り出す。中には白い錠剤が入っていた。

「これは？」

「お前の症状を和らげるかも知れない薬だ。その医者はポケモン医学の世界的権威なんだが、彼が言うにはこの痣の進行はポケモンの技によって発生する症状と似ているらしい」

リーフが真顔で説明する。

「お前のその“刻印”は中に組み込まれた神の力が体を蝕んでいる証拠だが、ポケモンに人間が噛まれたりした時の症状と似ている。どちらもポケモンの力が体内を荒らすケースだ。この薬はその症状を抑えるときに使うものだ。一時しのぎだが、無いよりはましだ」

「有難うリーフ」

ジュンはベッドの横に置かれている水の入ったコップを掴むと、錠剤を流し込む。

冷たい水が喉を潤していく。

「ジュン、出来る限り神の力・・・『空間支配』系の技は使うな。この薬で抑えられるのは自然進行のみ。能力の発動による急激な進行はとめられねえ」

「うん。了解したよ」

ジュンは薄っすらと微笑む。

「お前は俺の親友だ。俺の大事なダチだ・・・先に死ぬことなんて許さねぇぞ」

リーフの目に涙が溜まっていく。ずっと抑えていたものがあふれ出してきたらしい。

ジュンは黙って嗚咽を漏らして泣いているリーフを抱く。

胸にリーフの涙が感じられる。

「大丈夫。泣かないで。悪は不滅なんだよ?」

ジュンはリーフを軽く押して離すと、顔の位置をあわせる。

合う目と目。

「ああ・・・不滅だ。例え世界が滅びようと・・・お前は悪だからな。悪は消えない・・・永遠さ」

「そうだよ。だから信じてよ。僕の「悪」を」

「信じるぞ・・・信じてやる・・・」

「そうこなくっちゃ」

ジュンはリーフの涙を拭ってやる。
暖かい日差しが二人を照らしていた―

＊＊＊＊

ところ変わってここはエリカのキメラポケモン研究所。
ＵＳＡ２の莫大な資金によって建てられた最新鋭の設備が充実した研究所である。

その施設の一室。
白く清潔なベッドに色黒の青年が寝ていた。

「う・・ん」

その青年、アキラはすっと目を開ける。

「俺は・・・」

「よう。アキラ、起きたか？」

「長時間死んだように寝たわよ」

一室に入ってきたのはレオンとロザ。
共に『スキエンティア』の幹部である。

「あれを喰らったら誰だってそうなるわ」

アキラはため息をつくと、ベッドから飛び降りようとする。

「おい！ベッドからでちゃ駄目だ。今お前は―」

レオンの制止も虚しく、アキラがベッドから降りると・・・あることに気がついた。

服を、下着さえ着ていない。全裸である。レオンが痛ましい表情で俯き、ロザがスッと目を逸らす。

「ちょ！なななな何で俺スッポンポンなん！？」

慌てて布団を被るアキラ。

「エリカと一緒に検査したからよ」

ロザが脇の椅子に座りながら何気なく言う。

「彼女、貴方の肉体がどれだけのダメージを受けているかをデータとして採りたかったらしいから。そのデータをキメラの耐久力テストに生かすらしいわ」

「いやいやいや！まさか・・・俺の全裸姿を・・・」

「もちろん全裸に決まってるじゃない。じゃないと正確なデータが採れないわ」

「うぅぅ・・・恥ずかしい・・・穴があったら入りたいわ・・・」

アキラが布団に顔を埋め呻く。

「生物学的に調査しようと思ったらそれが一番なのよ。でもまあ、結構良い体だったけど・・・・」

ロザがクスクス笑い、アキラの体温がまた上昇する。

「さてと、私はまだ仕事があるから。先にお暇させてもらうわ」

ロザが部屋から出て行く。

「まあ気を落とすな。裸を見られただけだろ？」

レオンがバンバンとアキラの肩をたたいて慰める。

「俺、１８やねんで・・・多感な青少年やねん・・・。もう駄目や。お婿にいけないやん・・・」

「ったくお前は気にしすぎなんだよ。どうせキメラ化の時に半透明のカプセルに素っ裸で入れられただろ。あれに比べればさらしものじゃ無いだけマシさ。俺もあれは恥で憤死しそうになったけどな。研究者達がジロジロ見やがるんだよ・・・。それに人生生きてたらもっと大変なことだって一杯あるんだぜ？」

レオンは今２６歳。アキラより８歳も年上なのである。

人生の先輩の言葉にすこし気が落ち着いたのかアキラが頭を上げる。

「それもそうやな」

「でもまあ、資料に写真取られてるかもしれないけどな。全裸の」

「やっぱり死にそうや～！！」

再びアキラが顔を埋める。

「ん、まあ頑張れ」

レオンは快活に笑う。

「・・・・そういえば」

アキラが布団から顔を上げ何気なく尋ねる。

「ん？」

「イプシロン達と知り合いやったようやけど・・・・何かあったん？」

「・・・まあ、俺は裏切り者だからな」

レオンは窓の外に目をやる。

「なんか悪いこと聞いたみたいやな」

アキラが気まずそうに頭を掻く。

「いや、気にするな」

レオンはそう言い残すと部屋から出て行った。

アキラは暫らくボーっとしていたが、ベッドから出る。

そして自分の裸にそっと手を触れる。

（この体にゾロアークの力があるんか・・・俺の肉体に・・・）

見慣れた色黒の自分の体。

そこに新たな力が備わっているという事実はアキラにとって未だに信じられなかった。

確かに何度かはキメラ状態になったが、それでも不思議な気分だ。

アキラはふっと体に力を入れる。

体毛が濃くなり灰色の剛毛が全身を覆う。が、顔のところには毛は生えない。

その代わり髪が一気に赤くなり、腰まで伸びる。また目の周囲に赤い縁が表れ、耳が犬のようになり、目の色が澄んだ青になる。

また顔以外を覆う灰色の深い毛がちょうど服のようになった。

レオンが置いていったであろう服を着る。

その時アキラの頭にある考えが浮かぶ。

（それに俺は今幻影が使えるんや・・・姿も隠せる）

アキラはそっと窓から施設外に出る。

幻影を使えば人間やポケモン達には見えない。

なぜ外に出ようと思ったのか、それはアキラにも分からない。

しかし突然散歩がしたくなったのである。

「自然に帰るってこんな感じやろうか」

アキラは暫らく森を歩いていった。

野生のポケモンも結構いる。だが皆アキラには気づかない。皆には幻影の力で木の葉が舞っているようにしか見えないのだから。

「森林浴ちゅうのは結構リラックスできるわ」

研究所の森を抜けようとした時、アキラの目に見慣れない光景が映った。

小さな研究施設があったのである。周りには鉄条網がしかれている。

「あんな施設あったかいな・・・」

見張りが数人、ポケモン達と共に監視していた。

「入ってみるか」

アキラは見張りをスルリと抜けると、そっとその施設に入っていく。

どうやらここもポケモンの研究施設らしい。

しかしセキュリティが非常に厳しくしかれていることにアキラは気がついていた。

「なんやもものものしい警戒態勢やな」

暫らく施設内を歩いていると目に付いたものがあった。

レベル５　【Ｒｅｓｈｉｒａｍ】

扉にはそうかかれており、でかでかと「関係者以外の立ち入りを禁ずる」と書かれている。

「俺スキエンティアの幹部やから・・・入ってええやんな・・・」

自分に言い聞かせると扉の電子ロックに手を当てる。

（それにしてもレベル５ちゅうのは機密の重要度としても・・・・あの“Ｒｅｓｈｉｒａｍ”ってのは聞いたことない単語やな）

「幻影よ」

そう呟くとロックが解除される。アキラの幻影は機械さえ欺くのである。

奥にあったのは階段。

アキラは階段をどんどん降りて行く。

そして降りきると、自動扉があった。

アキラはそっと自動ドアから部屋の最深部に入る。

「こいつは!?」

アキラがその部屋に入るや否や驚きの表情に変わる。

そこには巨大なポケモン目を閉じ鎮座していた。

純白の体に、ジェット機のような翼。

凛とした姿。白き竜。

まるで芸術だ。

「凄い・・・・」

ただそう言うしかなかったのだ。

そのポケモンは片目をすっと開く。その鋭い眼光に一瞬アキラは後ずさりする。

（いまこのポケモン俺を見たんか・・・・でも俺の姿は幻影で隠れているはず・・・）

『人の子よ。怯えるな』

深い声。

「俺の姿が見えるん・・・？」

『私には幻影など通じない。ゾロアークのキメラとはどうやらお前のことのようだな』

「・・・自分は一体・・・」

『私はレシラム。世界の変革を望むもの』

そのポケモン―レシラムはスッとアキラの方に向き直る。青い目がアキラを捉える。

純白の体に一瞬見とれてしまう。

「自分は捕らわれてるん？」

何気なく尋ねた言葉にレシラムが口の端で笑う。

『捕らわれている？私が人の手に束縛されるとでも？そう見えるか？』

些か怒っているような口調だ。

（うわ、プライド傷つけたかもしれへん・・・ここは慎重に・・・）

「自己紹介が遅れたわ。俺はアキラ。お近づきの印に自分のことはレッシーと呼ばー」

『レシラムだ』

「そうやったな」

（冗談の通じへん奴や！・・・・ん、ちょっと待て）

だが急にアキラはあることに気づく。

「自分は何で俺がゾロアークのキメラやと・・・いやまず何で“キメラ”ちゅう単語を知ってるんや・・・」

キメラはエリカとその関係者しか知りえないワード。

しかもアキラがゾロアークの力を組み込まれたキメラであることは【スキエンティア】の幹部と研究メンバーしか知らないことなのに・・・。

『それは簡単なことだ。私がエリカ・K・ホワイトの真のパートナーだからだ。私こそが『プロジェクト・キメラ』の主導を彼女と共に行ってきたからだ。そうだな、お前は【スキエンティア】の幹部。エリカはお前のことをよく話していた。・・・・ここで会ったのも何かの縁だ。少し昔話をしてやろう」

レシラムは話し出した。

【プロジェクト・キメラ】と・・・エリカの真実を。

『プロジェクト・キメラの概要が成立したのは今から4年前だ』

レシラムが顔を上げる。まるで懐かしむような表情だ。

『エリカは当時１２歳。ポケモンスクールの初等部最高学年だ。そしてエリカの家は名門「ホワイト家」でもあった。私はそのホワイト家の人間と代々パートナーとして暮らしてきた』

ホワイト家はエリカのいた地方―ここからだいぶ離れたところだが―イッシュ地方では名だたる名門の家だった。

代々ビジネスにサイエンスと多種多様な能力に秀でた人材を輩出し、資金も豊富だった。

そしてその名門の家でも異彩を放っていたのがエリカ・Ｋ・ホワイトであった。

若年で在りながら既に才能を、特にポケモン学に秀でた才能を開花させておりその能力の高さは広く知られていた。

だが、彼女が異彩を放っていた理由はそれだけではない。

エリカは異常なほどポケモンに執着した。ポケモンのことなら何でも吸収していった。異常なスピードで。

と言っても愛情を注いだとかそういう類のことではない。

ポケモンの能力や特性、技・・ポケモンの持つ「力」に魅了されていた。

『エリカには連れが結構いた。外見は良いし、賢いし、性格も明るかったからな。男にももてた』

だがその友達達もエリカの言動に戸惑うことが少なからずあった。

曰く

「何故ポケモンと人間にはこんなに力の開きがあるのか」

この問いに答えられる人物は友達でも大人でもいなかった。

何故か。

それは人間がポケモンはある種の超越的な存在であると認めていたから。

人間が決して犯してはいけない力を持った種族だと。

ポケモンは尊敬や敬意、友情、愛情を注ぐべき対象であって、それを利用しようとか、超えようなどとは考えてはいけないのだと周囲の人は考えていたし、世間でもそう思われていた。

『エリカは屋敷に帰る度に私にこう語ったよ。「人間にもああいう力があればいいのにね」と』

「そんなことを・・・」

『ああ。だがその時私はエリカが単なる思いつきで言っていると考えていた。しかしエリカは本気で考えていたんだ「人間とポケモンの間にある力の不平等を埋める方法」をな」

「それが・・・今のプロジェクト・キメラ・・」

アキラが自分の姿に目をやる。

エリカに惚れて。エリカのためならと思ってポケモンの力をもらっ

た自分。

ゾロアークの能力を引き継ぎ、ポケモンとも対等に渡り合える能力を持った存在に変わった己の姿を。

『お前のその姿こそがその思想の結晶だ。まあ、お前はエリカのためにキメラになったんだろうが』

「なら、エリカはそんな頃からプロジェクト・キメラを・・・？」

『いや。あの事件さえなければ今頃はキメラ技術を開発していなかっただろう。せいぜいポケモンとの連携を深める装置などの開発程度だ。エリカが第一線を越えたのは、あの出来事が引き金だ』

小さな少女の思いついた「人間とポケモンの力の不平等を解消する方法」

その些細な想像が狂気の計画に発展するきっかけになった事件。

『４年前の夏。事件は起こった』

第六十七話 “真”のパートナー「Ｒｅｓｈｉｒａｍ」（後書き）

エリカの本名が今回明らかになりました。

エリカの真の協力者がレシラムであることは前々から、ブラック・ホワイトの新ポケ発表をみて思いつきました。

次回はエリカとレシラムの過去の話です。

第六十八話　過去の記憶　レシラムの思い

今から４年前。

イッシュ地方。ホワイト家の屋敷。大きな庭にはポケモンが戯れており、暖かい日差しが差し込んでいた。

一人の少年が庭を駆け足で進んでいく。

茶色い髪に丸い目でまるで子リスのようだ。

「お姉ちゃん！早くぅ」

「そう急がなくてもいいわよ。ヨハン。誕生日は逃げないわ」

この少年、ヨハン・Ｋ・ホワイトは今日で１０歳の誕生日を迎えるのだ。

ヨハンは姉の言葉にニッと笑った。

「だって今日は俺が主役だもん。エリカ姉ちゃんじゃなくってね」

その少女、そうこのヨハンの姉こそがエリカである。

エリカ・Ｋ・ホワイトは弟ヨハンと同じく母の名、ケリーをミドルネームとして継いでいた。

エリカは薄っすらと微笑むと、その場に先に止めてある車のほうに向かう。

「ヨハンは未だか？」

車の中では父親と思しき人物がハンドルをトントンと指でたたいていた。

少し苛立っているらしい。

「父さん、いいじゃない。ヨハンの誕生日なんだから」

エリカの言葉に、父、アランは少し頷く。

「まあそれもそうだな」

「エリカ、レシラムは持ってきたのか？」

「ええ」

エリカはそう言うと腰のボールホルダーからモンスターボールを取ってみせる。

純白のカラーリングにスイッチの周りの縁取りは金という装飾性豊かな美しいボール。

このモンスターボールはホワイト家の人間しか持てない特殊なボールだ。

「遅くなっちゃった」

ヨハンが一人の女性と一緒に車に入ってくる。

「ケリー、遅いぞ」

ヨハンと共に車に入ってきたのはとても美しい女の人だった。

彼女はケリー・ホワイト。アラン・ホワイトの妻である。

「ごめんなさいね。どの服にしようか悩んでたのよ」

「・・・ケリー、君が着ればどんな服でも一瞬でドレスさ」

「あら、嫌だ。そんなこと言って・・・」

惚気あうアランとケリー。

その様子にヨハンはため息をつき、エリカは我関せずの表情でポケモン図鑑を読んでいた。

四人は車に乗った後、近くのビーチまでドライブする。アランとケリーが前。エリカとヨハンが後部座席である。

「うぁ～見えてきた。海だ！」

ヨハンが車のガラスにペッタリと張り付く。

「ヨハン！窓が汚れるから離れなさい！」

アランの注意にヨハンが渋々離れる。

「ねぇ、姉ちゃん。あの海にはどんなポケモンがいるの？」

「色々よ。そうね、例えばドククラゲとか」

「うへぇ俺そっち系のポケモン苦手」

ヨハンがうえっという表情をする。エリカはクスリと笑うと、ヨハンをなでる。

「ポケモン達の力は人間を超越しているのよ。彼らから学ぶべきことは多くあるわ」

「そっかぁ」

ヨハンも自分のモンスターボールを手の中で転がす。純白のボールは光を受けて輝いている。

「・・・ポケモンと人間は何時か平等になれるはずなのよ」

「今は平等じゃないの？」

ヨハンがキョトンとして尋ねる。エリカはスッと窓の外を見ながら答える。

「そうね。ポケモンと人間は不平等だわ。一方的に力を持つものと、持たざる種族が分かれているもの」

「よく分からないけど・・・。でも、お姉ちゃんの言葉がホントになれば世の中変わるんだろうなぁ・・・」

ヨハンの言葉にエリカは優しく微笑む。

「ええ。必ず変わるわ。ねえ、ヨハン。私が世界を変えるのを見てみたい？」

「見てみたい！俺、お姉ちゃんの理想の世界に興味あるもん！」

「なら頑張らないとね」

「お、着いたぞ」

アランの声にエリカとヨハンが前を向くとそこには海が広がっていた。

四人は海辺のビーチに出ると、持参したパラソルとシートを広げる。

一方ヨハンは砂辺に木の棒でバトルフィールドを描いていた。

「お姉ちゃん！ポケモンバトルだ！」

「ええ、良いわよ」

エリカとヨハンは手書きのバトルフィールドで向かい合う。

「行けっヨノワール！」

ヨハンはヨノワールを繰り出す。

「ダークライ、行きなさい」

エリカがボールを投げるとダークライが出てくる。

「ヨノワール、シャドーボール！」

「悪の波動よ」

ぶつかり合う二つの技。

「くそ、なら怪しい光！」

ヨノワールが怪しく輝く光球をダークライに投げる。

「ダークライ、ダークホールを防御に使いなさい」

エリカの指示にダークライはダークホールを発生させると、なんとそこに自ら飛び込んだ。

「うそ！そんなのあり！？」

「ダークライ、ダークホール！」

ダークライは外に飛び出すと、ヨノワールに急接近。そのままダークホールを直撃させる。

眠り込むヨノワール。

「うあぁ！お、起きろ！ヨノワール！」

「ダークライ、悪夢」

ダークライはコクリと頷くと、手を振りかざす。

「この悪夢と特性ナイトメアでロック完了ね」

「ううう・・・戻れ、ヨノワール」

ヨハンは悔しそうにヨノワールをボールに戻す。

「ああ、そうだわ。レシラムを外に出しておかないとね」

バトルにあっさりと勝利したエリカは思いついたようにレシラムの入ったボールを投げる。

ボールから出てきたのは、純白の体を持つポケモン。レシラムだった。

「レシラム、その辺りを散歩してきていいわ。食事時には帰ってくるのよ」

『分かった』

レシラムはバサリと羽ばたくと大空に駆け上がっていった。

「お姉ちゃん！もう1戦！今度は負けないよ！」

「ふふふ、何処まで頑張れるかしら」

ヨハンとエリカが再びバトルフィールドで向き合う。

＊＊＊＊

その頃大空を散歩していたレシラムは・・・。

『何時も屋敷内にいるから、久しぶりの外はやはりいい』

目を瞑ると感じられるのは風の心地よさ。心が洗われるようだ。

『あそこに離れ小島があるな。少し休むか』

レシラムはその小島に着陸する。が、あることに気づく。

『海が汚れている・・・・』

レシラムのいる小島からは大海原が見える。

が、海にはゴミが散乱しており、石油と思わしき物体も水に浮いていた。本来の海の美しさがかなり損なわれている。

『ここも自然が汚れているのか・・・・』

悲しくため息をつく。

レシラムはホワイト家の代々のパートナーとなる前からずっとこの世にいた。

炎と熱を操り、大気を司る「神」として。

そしてこの世をずっと見続けていた。

もっと前の世界は美しかったのだ。森と海が命を生み出し、ポケモンと人間が支え合っていた。

人間もポケモンも生まれ、全てを分かち合い、そして自然に還っていった。

人間が科学を発達させる前。人とポケモンは共に協力し、大いなる自然を尊敬し、畏怖し暮らしてきた。

だが、何時だっただろうか・・・。

ある日を境に全てが変わりだした。

人間達が自然を「解析」しだしたのだ。

前までは自然をただそうあるものとして見て来た人間が、今度はそれを利用して我が物にしようとしだした。

全てのポケモンは、「神」と呼ばれしポケモンでさえその急激な進化に戸惑った。人間達のかつてない暴挙と溢れる欲望に押される形となった。

人間は文明を築いた。科学と文化を発展させ、苦しみの除去に努めた。

それからだ。自然が急に崩れだしたのは。

もちろんポケモン達も抵抗した。しかし、人間の「進化」に歯止めをかけるにはあまりに非力すぎたのだ。

神と呼ばれしポケモン達はもちろん人間を攻撃することも出来た。しかしそこまでの手段を採ることは出来なかったのだ。

そうこうしているうちに人の力は増大していった。それと比例し自然も見る見るうちに汚され、破壊されていったのだ。

レシラムは自然を愛している。だから人間を快く思える気にはなれない。許せないという思いもある。

しかし・・・レシラムはこうも考えていた。

もし、人間がポケモンのように「強い」存在なら・・・自然を切り崩さずにすんだのではないかと。

人間に非があるのは確かだが、元をたどれば全て人という種族の非力が原因だ。

体は弱く、空も飛べない。すぐに傷つく。

火も水も電気も氷も自ら作り出せず、物体を宙に浮かせたり風を発生させたりする能力など皆無だ。

ポケモンはそれらを楽にこなせる。

人間は補助なしには生きられないのだ。この非力さは最初はポケモンというパートナーで満足していた。

しかし次第にもっと楽に快適に生きられる方法を模索しだした、

だから「科学」「文明」は生まれたのだ。だから・・・自然は犯された。

全て人間の物理的能力値の低さに起因する。

もしポケモンと同じだけの能力を持っていたならば人間は自然を冒涜し切り崩さなかっただろう。現にポケモンは自然を犯さずに満足して生きられているではないか。

『今からでも遅くない。いや、まだ今だからこそ間に合う。・・・・どうにかして人間にポケモンと同等の力を与えることが出来ないものか・・・』

人間達がポケモンの能力を身につければ、もはや自然を自らの為に破壊することなどしなくなるだろう。

確かにその能力を悪用する輩は出てくるに違いない。戦争も発生しよう。

だが・・・大きなスパンで考えれば、人間には物質社会は必要なくなる。

物質社会自体が人間の「非力さ」を補うためのものだからだ。

ポケモン達同様自然と調和する道を選ぶようになるだろう。

今ある住居などはそのままになるだろうが・・・例えば排気ガスを撒き散らす「車」「バイク」「飛行機」、全て必要なくなる。

エスパー技で自ら飛んでもいいし、テレポートでもすれば事足りる。

ガスに変わって炎タイプの技が使われ、冷蔵庫には氷タイプの技が

代用されるだろう。

いや、電気自体地球を削って作らずとも各自が電気タイプの技を使用すればいいことだ。

『そうだ。人間の悪行はある意味必然だ。人間達を攻めるのは酷というもの・・・・。必要なのはいかにしてポケモンの力を彼らに与えるかだな・・・』

レシラムが考え込んでいると・・・。

『よう、レッシー。相変わらずしけた面してんな』

その声にレシラムが振り返る。

そこには２０代の青年がポケットに両手を突っ込みながら立っていた。

黒髪だが何故か目の色は燃えるような赤だ。腕とズボンのポケットにシルバーアクセサリーを大量につけている。

また短髪はワックスで整えられており、軽いノリの大学生といったところ。

その青年がニヤニヤ笑いながらレシラムに歩み寄ってくる。

歩くたびにシルバーアクセサリーがジャラジャラと金属音を立てる。

『その名で呼ぶな。私のことはレシラムと呼べ』

『まあ気にすんな。それよりどうだ?俺のスタイルきまってるだろ

？』

その青年がシルバーの指輪をはめた指で自らを指し示す。

『ゼクロム、相変わらず軽い奴だな。軽蔑するぞ・・・』

その青年の姿が次第に変わっていく。

光に包まれ、そのまま体が巨大化する。

変化後の姿はまさに竜。

漆黒の体に大きな翼。目は燃え上がるような赤。

雷を司りし黒きポケモン、ゼクロムだった。

『お前は本当に人の格好に変化するのが好きだな』

レシラムがため息をつく。

『好きなんだからしょうがねえだろ』

ケケケと笑うゼクロム。

『それによぉ・・・人間の女はいいぜぇ。ポケモン達のメスよりずっと色っぽいからな』

『お前と言う奴は・・・』

本日何度目かのため息。

『お前も人間に変化できるんだろ?』

『当たり前だ。私は炎の神。それぐらい造作もない』

レシラムの体が光りだす。巨体が縮み、人間の姿を為していく。

その場に現れたのは長い髪の女性だった。

真っ白の肌に澄んだ美しい碧眼。髪は銀髪だ。

『おお!やっぱレッシーは美人だなぁ』

いつの間にか再び人間の姿に変化していたゼクロムがレシラムに近寄ってくる。

『・・・・なんだその手は?』

ゼクロムがレシラムの肩を手を回しているのである。

『いいな。その見事なツンツンぶり。後はその後に“デレ”が入れば俺の嗜好―』

ゴオオォォォォォ

ゼクロムがそこまで言った瞬間、レシラムから炎が発せられゼクロムが火達磨になる。

『んぎゃあぁぁぁぁぁ・・・』

『気安く手を触れるな。私に触れていいのはホワイト家の者だけだ』

『くそ・・レシラムてめぇ・・・』

ゼクロムがはぁはぁと肩で息をしながら何とか立つ。

『さてと、私に何の用だ?』

『ああ。それなんだがな。例の神様会議に俺とお前が召集を受けたぜ。【神々の集会】だとよ』

その言葉にレシラムが目をむく。

『・・・ディアルガ、パルキア、ギラティナ、アルセウスが3年に一度開くあれか!?だが私達は呼ばれたことは無かったではないか!?』

神々の集会。

「神」と呼ばれしポケモン達が3年に一度集まり今後の地球管理のことを話し合う会議である。

常任メンバーは時の神のディアルガ、空間の神のパルキア、反転世界の神ギラティナ。そしてこの世界全体の統括者である最高神アルセウスが議長だ。

この四体は他の伝説ポケモンとは違い、上位の存在だ。

またその時の議題に応じて大陸を司るグラードン。海の守護者であるカイオーガ。大空の王レックウザが度々召集されていた。

だが、レシラムとゼクロムは呼ばれたことが一度もないのだ。

(何故このタイミングで・・・?)

『どうやら、俺たちにご不満があるようだぜ?』

ゼクロムは腕を組みながら言う。

『・・・で何時なんだ?その会議とやらは』

『今すぐさ』

ゼクロムの言葉と共に離れ小島の上空に大きな穴が出来る。

『あれは・・・?』

『パルキア殿が創造なさった異空間への扉ってところだ。さあ早く行かないと神さんが痺れを切らしちゃうぜ?』

レシラムとゼクロムは元の巨大な姿に戻ると、その穴に入っていった―

それが全ての悲劇の始まりだとも知らずに。

第六十八話　過去の記憶　レシラムの思い（後書き）

この話とパルキアの力がジュンに与えられていた事実は・・間接的に連動してきます。

第六十九話　過去の記憶　悪魔の誕生

『ここが神の会議場か』

レシラムが辺りを見渡す。

レシラムとゼクロムは共に身長は3メートル以上ある。

だがその巨体であっても会議場は広くのびのびとした雰囲気だった。

おそらくパルキアが作り出した空間だろう。

巨大なテーブルの周りには既に四体のポケモンが鎮座していた。

上座にいるのがアルセウス。さらに右側に座っているのがパルキアとディアルガ。

左側にいるのがギラティナだ。テーブルには地球の絵が描かれている。

『よく来た。我等が仲間よ』

アルセウスがレシラムとゼクロムを見ると深い声で言う。

『遅せぇぞ。俺様を何時まで待たせてんだ！？』

パルキアが二体を睨む。

『そうカッカするな。これから重要な会議だ』

ディアルガがパルキアを収めるのと同時にギラティナも頷く。

『そうだよ。パル君。頭に血が上ったらちゃんとした会議が出来ないよ～』

『私達を呼んだ理由を教えていただきたい』

『俺達に何の用だよ?』

言いつつ、レシラムとゼクロムはそれぞれ椅子に座る。

『まあ、待て。今から議題を教える。それで分かるはずだ』

アルセウスは皆を見渡すと深い声で言った。

『【神々の集会】の今回の議題。それは・・・人間達についてだ』

その言葉にレシラムとゼクロムが顔を見合わせる。

『アルセウス・・・そんな重要な内容なら他のポケモン達も呼んで総合的に・・・』

『いや。レシラム。この議題の主題はお前たちイッシュ地方を統べる2体を対象としている』

その返答にゼクロムが手を上げて発言をする。

『どういうことだ?』

『つまり、分かりやすく言うとイッシュ地方は人間達の自然汚染が特に進んでる地域だねってことだよ～』

ギラティナがのんびりと言う。

『イッシュ地方は特に物質社会化が進んでいる。そのせいで自然の殆どは奪われ、周囲のポケモン達は皆他の地域に移っているのが現状だ』

ディアルガの発言を受け、パルキアが頬杖をつきながら補足する。

『そんで元居たポケモン達とイッシュから移り住んできたポケモン達との間にトラブル発生が多発。治安は悪化しまくりつーこった』

『つまり我々にその責任を取れと仰るわけですか？』

レシラムの言葉にアルセウスがゆっくりと首を振る。

『そうでもあるし、無いとも言える。まあ、もう少し傾聴せよ。このイッシュ地方問題は氷山の一角だ。世界各地で人の自然汚染は乱発している。その典型例がイッシュ地方ということだ』

『人間達の汚染はボクの反転世界にまで影響が出るほどなんだよ～この世界が出来てから過去にこんなことは一度も無かったことなんだ～』

『自然破壊。大気汚染。資源の浪費。ポケモン達は皆人間達の好き勝手に苦労している。我々としてももう我慢の限界だ。これ以上地球を汚させるわけにはいかんからな』

『つーことで俺様達はある計画を進めることにしたってわけだ。そんで、テメエらの力を借りたくここに呼んだって寸法さ』

アルセウス、ギラティナ、ディアルガ、パルキアの発言を総合して考えると・・・。

ある考えがレシラムの脳裏を一瞬よぎる。

が、その考えを振り払う。

『・・・一体何をする気です？』

レシラムが恐る恐る尋ねる。

アルセウスはサラリと答える。

『私たちは人間達を地球から抹消することを決定した。もうあの種族は必要ない』

（人間を・・・抹消・・・・！？）

レシラムとゼクロムはあまりのことに頭の処理がついていかなくなる。

しかし、次第にことの内容が掴めて来た。

この４体の「神」が今まさに恐ろしい計画を実行に移そうとしていることを・・・。

『そんなこと・・・許されるわけが無い！』

ゼクロムがぶるぶると震えながら何とか声を出す。

『いや。許される。私達「神」と呼ばれしポケモンの決定だからな』

ディアルガの発言にレシラムの背筋がゾッとする。

（この４体は本気で・・・馬鹿な・・・地球上にどれだけの人間が住んでいると・・・！）

『貴方達は史上最悪の罪を犯そうとしているのです！私達にそれに協力しろと！？』

レシラムの声も怒りと焦燥で震えている。

『これは神の決定だぜ？俺様達の決定は絶対だ。これまでずっとそうだったんだ・・・・テメエらは神に逆らうのかよ？俺様達上位の神によ？』

パルキアの言葉に凍りつくレシラム。

（この方達は自分達の決定が正しいと・・・・本気で思っているのか！？）

『おい、ギラティナ！お前はこんな馬鹿げた計画に賛成なのか！？』

ゼクロムが怒鳴り声に近い音量で尋ねる

『う～ん。ボクは正直地上のことはどっちでもいいよ。でも人間達が居なくなれば反転世界の汚染は止まるからね～』

これが力あるものと無いものの軋轢の結果か・・・！

レシラムは呆然と４体を見つめていた。信じられなかった。この世を治めてきた神々が今まさに暴走しようとしているのだ・・・・。

（ポケモンにだけ力が在るとこういう腐敗が生まれるのだ・・・！大体この会議の中心議題である人が呼ばれていないこと自体その証明ではないか！やはり力の再分配が必須だ・・・・）

『さてとお前達にやってもらうことだが。レシラム、お前はまずイッシュ地方の町を焼き尽くせ。ゼクロム、お前は人間達のライフラインである電力施設を破壊しろ』

アルセウスの言葉にゼクロムがテーブルをドンと叩く。

『絶対にお断りだ！俺があんた達の目を覚まさせてやる！』

『貴方達の決定には従えない！』

レシラムの口内に燃え盛る火が集まっていく。

一方ゼクロムは腕に雷を貯めていく。青色の光を発しバチバチと放電を繰り返している。

『青い炎！』

『雷撃！』

青く輝く炎と轟く雷がディアルガとパルキアを襲う。

2体は吹っ飛ばされ異空間の端にぶつかり倒れこむ。

『貴様ら！何のまねだ！？』

アルセウスから冷静さが消え、凄まじい形相で怒鳴る。

『それはこちらの台詞だぜ！あんたらこそ一体何の真似なんだよ！人間を滅ぼすだぁ！？ふざけんのも大概にー』

その瞬間ゼクロムの体に何かが命中する。パルキアの亜空切断だ。

『ぐはっ！』

そのまま吹き飛ばされるゼクロム。

『ゼクロム、大丈夫か！？』

レシラムが駆け寄る。

『よくも俺様に攻撃してくれたな！？えぇ！？ぶっ潰してやるよ・・・』

パルキアが鬼のような形相でこちらを睨む。

『私達高位の神に逆らうとというとこが如何に愚かしいか・・・教えてやらねばならんな』

立ち上がったディアルガの口元にエネルギーが充填され、パルキアの肩の宝玉が光り輝く。

『亜空切断！』

『時の咆哮！』

『火炎放射！』

『雷！』

レシラムとゼクロムが2体からの攻撃に応戦する。

すると・・・・。

『シャドーダイブ～』

のんびりした声と共にギラティナがレシラムの下から奇襲を仕掛ける。

『く・・・。姿を消してからの奇襲攻撃か・・・！』

『ボクはねぇホントはどっちでもいいんだけど、アルセウスのやることのほうが面白そうだしさ～』

ギラティナの言葉にレシラムが食い付く。

『お前は命を何だと思っているんだ！ギラティナ！』

『命は我々のものだ』

突如後ろから声がする。

アルセウスの声だ。

『すべての命は最高神たる私、空間を司どるパルキア、時を司るディアルガ、そしてこの世界を裏から支える反転世界の神、ギラティナの支配下にある。私達が下した決定は絶対だ』

『もう一度だけチャンスをやろう。私達に協力するなら今の行動は見逃してやる』

『俺様達がくれてやる最後のチャンスだぜ』

『でもそれを反故にするようなら、容赦はしないよ～』

４体はスッと横一列に並ぶ。

（どうすれば・・・私達も曲がりなりにも「神」。しかし・・・２対４では分が悪すぎる・・・）

だがレシラムには守るべきものがある。

確かに人間は自然にとって害だ。それは否定しがたい真実だ・・・・。

しかし・・・自然と歩み寄ろうとする人が居ることもまた事実。

イッシュ地方の歴史をずっと見てきたレシラムはここで引くわけにはいかないのだ。

『お断りする。腐敗した力に屈するほど私達は臆病者ではない』

『俺達は絶対あんたらには従わない・・・止めてみせる、この命に

変えてもな！』

その言葉を聞き、アルセウスがため息をつく。

アルセウスの真上に大量のエネルギー弾が発生する。

『神に背きし愚か者よ。その身をもって知るがいい・・・裁きの礫（つぶて）』

その瞬間、会議場にエネルギー弾が降り注ぐ。アルセウスの必殺技だ。

『く・・』

レシラムとゼクロムは攻撃を直に受けてしまう。

『時の咆哮！』

『亜空切断！』

『波動弾～』

他の3体もアルセウスの背後から援護攻撃を仕掛ける。

『守る！』

レシラムとゼクロムの周りに防壁が発生し、3体の攻撃を防ぐ。

『守るかぁ～なら・・シャドーダイブ』

刹那、ギラティナの姿が消え・・・・

『守る』の防壁が砕かれ、ゼクロムが吹き飛んでいた。

『ゼクロム！？』

レシラムの注意が一瞬逸れたその時・・・。

『水の波動』

パルキアの放った水の波動がレシラムに直撃する。

『くそ・・・・・』

レシラムはその場に倒れこんでしまう。

普通のポケモン達と違い相手は神と呼ばれし存在。

一発一発の攻撃の威力の桁が違うのだ。

（どうすれば・・・何とかこの状況を打開できる手立ては・・・）

『諦めろ。私達には勝てん』

アルセウスがゆっくりと近寄ってくる。

が、あることが起こった。

『クロスサンダー！』

何とレシラムに向けてゼクロムがクロスサンダーを放ったのである。

レシラムが一寸よろめく。

（そうか・・・これだ！）

レシラムの内にパワーが溜まっていく。

『はは、仲間割れかよ！？俺様達に追い詰められすぎて気でも狂ったか？』

パルキアが勝利を確信した目で笑う。

他の3体もすっかり油断している。

だが・・・アルセウス達は知らないのだ。

レシラムとゼクロムに隠された相互補完能力いや、反発する二つの力が生み出す脅威の増幅効果とでも言おうか・・・。

『笑ってられるのも今のうちだ』

レシラムはゆっくりと立ち上がる。

頭上には燃え上がる火の玉が生成されていく・・・・。

『な・・・これは！』

ディアルガが驚きの表情で半歩退く。

巨大な火の光球はどんどん大きさを増していく。

『この技は単発でも強力だが・・・クロスサンダーを受けた後に発動すると威力が飛躍的に上昇する・・・・輝ける太陽よ、その光で全てを照らせ・・・クロスフレイム！！』

まるで小さな太陽が爆発したようだった。

波状に広がる業火の波

パルキアの生み出した異空間そのものがその威力に揺れる。

辺りの景色が焔の熱で歪んで見える。

レシラムの目の前にはパルキアとディアルガそしてギラティナが倒れていた。

『よくも・・やってくれたな』

ただ一体

アルセウスだけが立っていた。いや、正確に言うと辛うじてだが。

『今のに耐えたのかよ・・・・・』

ゼクロムが肩で息をしながらレシラムの横に立つ。

『さすが最高神と言ったところか・・・・』

『許さんぞ・・・』

アルセウスの全身から力がみなぎっていく。

『馬鹿な・・・威力が増加したクロスフレイムを受けてまだ技が出せるのか・・・！？

『流星の裁き！』

その瞬間アルセウスの上空に『流星群』と『裁きの礫』が同時発動する。

二つの技は融合しあい、輝ける無数の光となった。

まるで光が降って来るようだった。

降り注ぐ光にレシラムとゼクロムは直撃を受けてしまう。

それだけではない。

この空間の下に亀裂が入り、そこに大きな穴が大量に開いていく。

振り荒れる流星の一部はその穴に吸い込まれていった。

どうやらパルキアがダウンして空間保持能力が弱まっていたことと、アルセウスの技の威力が非常に強かったことが相まって異空間が耐えられなくなったらしい。

異空間から元の空間へまっ逆さまに落ちていくレシラムとゼクロム。

『どうやら・・・力を使いすぎたようだ・・・少し体を・・・休めねば・・・』

その呟きと共に異空間に開いた穴は閉じて行ったのだった―

一方

砂浜に落ちた2体は・・・。

『く・・・』

レシラムが力なく立ち上がる。

辺りを見回すとそこはエリカ達と共に来たビーチだった。

『どうやら、異空間から抜けたようだな・・・パルキアの異空間があの攻撃に耐えられず、壊れ、その穴から元の空間に戻った、というところか・・・』

チラリと横を見るとゼクロムが完全に気を失っている。

（アルセウス達があのようなことを考えていたとは・・・あれだけのダメージを受けたんだ。暫らくは動けないはずだが・・・早急に手を打たなければ・・・）

レシラムが砂浜の向こうの方を何気なく見る。

するとあちこち火の手が上がっていた。どうやらアルセウスの『流星の裁き』が異空間を破壊した際、こちらの世界に一部が降り注いだらしい。

その時アル異変に気づく。

『あれは・・・』

レシラムが急いでその場所に飛んでいくと、驚くべき光景が目に飛び込んできた。

炎上していたのは車・・・エリカ達が乗ってきた車だ・・。

（まさか・・・！）

その時

「レシラム・・・」

下から声がする。

すっと下を見るとそこにはエリカが居た。少し火傷を負っているようだが大丈夫そうだ

『エリカ！無事だったのか！よかった』

胸をなでおろすレシラム。

だが何故かエリカは黙っている。

『どうした？アランやケリー達はどこだ？』

レシラムは辺りを見渡す。

が、何も言わずエリカは震えながら指を指す。

指し示した先には炎上している車が。

「・・・ヨハンは見たこと無いポケモンを記録するためにポケモン図鑑取りに、父さんと母さんはテントの用意を取りに・・・・車の中に居たの・・・・」

一瞬エリカの言っている内容が理解できなかった。

そして次第に心に絶望と悲哀が染み込んで来る。

『馬鹿な・・・そんな・・・』

私の愛する者たちが・・・

私の家族が！

私が守るべき宝物が・・・。

こんな形で・・・死ぬわけが・・・。

エリカは砂浜に座り込む。

「今日は・・・ヨハンの誕生日なのよ・・・こんなのって・・・」

レシラムは呆然と炎上する車に近寄る。

と、車の外にあるものが落ちていた。小さな装置だ。

それは・・・焼け焦げたポケモン図鑑。

レシラムがそっと拾い裏を返すとそこには「ヨハン・K・ホワイト」

の名が記されていた。

『アラン・・・ケリー・・・ヨハン・・・そんな・・』

ポケモン図鑑にポタポタと涙が落ちる。

レシラムは生まれて初めて泣いた。大粒の涙が青い目から零れ落ちていった―

「・・・・ポケモン達は無事だったの・・・」

エリカが魂が抜かれたような表情で呟く。

「・・・レシラム、父さん達は何故死ななければならなかったの・・・？」

『エリカ・・・』

レシラムは無意識に全てを話していた。

【神々の集会】であったことを。

話をしていたほうが悲哀が薄れるような気がしたから。

「そんなの・・・そんなの不平等よ！！」

頬を涙が伝う。

「そうよ・・・全部悪いのは力の不均衡・・・・ヨハン達をこんな形の死に追いやったのは全部パワーバランスのせい・・・」

もし人間達がポケモンと同等の力を持っていたら。

ヨハンは死ななかった。

もし人間達とポケモン達が「平等」なら。

母さんは死ななかった。

もし一方の種族が力を持ちすぎていなかったら・・・神と呼ばれしポケモン達が存在しなければ。

父さんは死ななかった!!

「そうだわ・・そうよ・・ふふふ・・ハハハハハ!」

急に笑い出すエリカ。

その目には涙と狂気の色が浮かんでいた。

「分かったわ・・・レシラム、分かったのよ・・・。私がこれから為すべき事が・・・!くくく・・・ハハハハハ!」

『エリカ?』

レシラムが驚いたような表情で下のエリカを見る。

「父さん達はポケモンの技を使えれば死ななかったのよ。人間という脆弱な種族で無ければ死ななかったわ・・・ポケモンならばこんな形で死にはしなかったのに!」

エリカはフラフラと炎上する車の方に近寄る。

「ああ・・そうよ。私は人間とポケモンの【力の再分配】をしなければいけない。あはは・・聞こえるわ・・ヨハンが願う声が・・・」

最早原形すら留めていない車の前に立つとスッと空を見上げる。

「そう・・まずは・・ポケモン同士の人工融合を実験して・・ふふふ・・次の段階で人間とポケモンの融合・・さらにその技術が出来上がれば、「神」と呼ばれしポケモン達を私の中に取り込む・・・出来る！出来るわ・・・全部可能よ！」

エリカは黙って立っているレシラムからヨハンのポケモン図鑑を受け取る。

「もうこの世界に神はいらない。家族を奪った神など必要ない・・・私がこの世界の新しき神になって世の中を変革するのだから！」

エリカはヨハンの図鑑を掲げる。

「ヨハン、見ていてね・・・お姉ちゃん、世界を変えてみせる。ふふふ・・・アハハハハハ！！」

深き悲哀がもたらした狂気。

ここに小さな少女の残酷な計画が動き出した。

そしてこれは・・・。

『白衣の悪魔』の誕生でもあった―

第六十九話　過去の記憶　悪魔の誕生（後書き）

ポケモン達と人間達の力って非常に開いていますよね？

今回のアルセウス達の思想もそのパワーバランスの不均衡に起因します。

生まれたときから強力な力を持っていれば、それ基準でしか物事を考えられなくなることもあります。

それはポケモンであっても例外ではありません。

人間とポケモンの「不平等」

本質的であるが故にそれは人間を苦しめるのだと思います。

第七十話　最終段階突入　キメラウィルス

「そんなことが・・・」

アキラはただ呆然としていた。

エリカにそんな過去があったなど、知りもしなかった。

『その後エリカは自身が作り出したキメラ技術の基礎理論を用いＰ・Ｈ・Ｃと取引をした。元々ホワイト家とはコネクションのあった企業だからな』

【プロジェクト・キメラ】が真に成果を結ぶためには多額の、エリカに遺された遺産を上回る資金が必要だった。

取引成立後、エリカはＰ・Ｈ・Ｃの欲望を突く形で研究を進めることが出来るようになった。

『だがＰ・Ｈ・ＣとＣＩＣの協力下ではポケモン同士のかけ合わせは出来ても人体実験までは許されないことはエリカは想定済みだった』

だからＵＳＡ２に援助元を変更した。Ｐ・Ｈ・Ｃに居たのでは人間を用いれないからだ。

だが・・・ＵＳＡ２なら捕縛したテロリストや犯罪者達で生体実験が可能だった・・・。

『ＵＳＡ２の協力があれば捕縛したテロリスト等で人体実験が出来

る』

エリカの計画のためには人体実験が必須なのだ。

最終的に人間とポケモンの“キメラ”を作る計画なのだから。

『今私達【スキエンティア】はパルキアとアルセウスの捕獲に成功している。もう少しだ・・・神が我々のものとなるのは・・・』

レシラムが少し遠い目になる。

その時・・・。

「懐かしい話ね」

後ろから声がした。

振り返ると、そこに居たのは・・・エリカ。壁に背中を預け、腕を組んでいる。

『ああ、来ていたか』

「あ・・エリカ」

「レシラム、過去の話はそこまでよ。アキラ、ちょっと来なさい」

エリカはそう言うと出て行ってしまう。

アキラも急いで後に続く。

「アキラ、ジュンの力の謎が少し解明できたわ」

エリカは廊下を歩きながら説明する。

「彼の中に存在している神の力。彼の闇は神の力の結合したのよ」

「そんなことがありえるんやろうか・・・・」

「ポケモンの技は使用者の精神状態に非常に影響される。それは元チャンピオンだから分かると思うけどね。とにかく、ジュンに組み込まれ、ただいま彼の体を蝕んでいる“力”は一方で心の闇に具現化をさせているのよ」

アキラは腕を頭の後ろで組む。1

「心の闇なぁ・・・」

「彼の使うエスパー技もすべて闇の影響を受け強化されるはずよ。アキラ、あなたも自分の力を強化しておきなさい。彼は私の予想以上に我々の障害となるかもしれないわ」

「ああ・・・」

アキラは短く応える。

「それから」

エリカが思いついたようにアキラに振り返る。

「計画が最終段階に差し掛かったわ。例のウィルス開発に成功した

のよ」

その言葉を聞きアキラがため息をつく。

「キメラウィルスやろ」

「その通り。そうよ・・・やっとここまで来たの」

「自分は最終的に神の力を手に入れるんやったら、ウィルスで他の奴らをキメラ化する必要無いんちゃうん？」

「いいえ！それはありえないわ」

珍しく強い口調になるエリカ。

「全人類がポケモンの力を手に入れるには、ちまちまと個人にポケモンの力を組み込むだけでは絶対的に遅いのよ。この計画は一部の人類だけが力を持っても仕方ないの。全人類がキメラになって初めて人間とポケモンは平等になるのよ」

ここで【キメラウィルス】について補足説明しておこう。

エリカが開発したキメラ技術を組み込んだウィルスであり、人類にのみ感染。

感染者の遺伝子の半分をポケモンの遺伝子に変換する能力を持っている。

これまでのキメラ技術では少数の人間しかキメラ化出来なかった。

ＵＳＡ2もそのことを前提で研究に協力していたのであるが・・・。

その欠点を克服するために密かにエリカ達【スキエンティア】はキメラウィルスの開発を行っていたのである。

一度ウィルスをばら撒けば、感染者が続々とキメラ化していく。

だが、このウィルスにはデメリットがある。

一つはキメラウィルス感染によりキメラ化する際に、体の中で起こる異常ともいえる反応―それはキメラ化が進行しているからなのだが―に感染者は高熱等の症状を表すのだ。

この症状によりおそらく死者が出ることが予想される。それも結構な数の。

またキメラ化完了後にどんなポケモンの特徴が出るかはウィルスがそのときに出す遺伝子変換命令による。ウィルス感染では好みのポケモンのキメラになれないのだ。

またウィルスによるキメラ化では幻や伝説のポケモン達の力は得られないようにしてある。

このことから人間のキメラ化には2ルートあることが分かる。

一つは研究所で組み込み、キメラ化する方法。

二つ目がウィルス感染。

前者のメリットはより強力なポケモンの遺伝子を組み込むことで強

いキメラになれる点。選択的で手間が掛かるが故に、より強力な存在となれる。

後者のメリットは大量にキメラを作れる点。しかしこの手法でなれるキメラの力は必然的に前者の方式でなったものに劣る。

エリカ及び【スキエンティア】メンバーは前者で強力なポケモンの力を手に入れ、後者の方式でキメラ化したもの達の先導者となろうとしているのである。

「今こそ全人間がその手にポケモン達の力を収めるとき。そして私は作り出した新世界の指導者となるのよ」

「全人類がポケモンとの融合体になってこそ・・・なぁ」

「そう。ポケモンと人間の間の不平等なパワーバランスを打ち崩すには、全人類が力を持たなければいけないわ。それにはキメラウィルス散布による大量の人間ベースのキメラ増産しかありえない」

「レシラムはどう思うとるん？」

「・・・元々このキメラウィルス散布案はレシラムが考え出したものよ」

「そうなんか・・・」

アキラはため息をつく。

（なんやどんどん事が大事になってきよる・・・。俺はこのままエリカ達について行っていいんか・・・？）

一瞬よぎる疑問と不安。

しかし、アキラはそれを振り払うかのように首を振る。

（俺は・・・間違っとらん！間違うはずがないんや・・・！）

「今歴史が変わる。古来より続いてきたポケモン達の優位性が今、変わろうとしている。変革の時よ」

「そういや、レシラムも言っとったな」

『世界の変革を望むもの』とかなんとか・・・。

（そうや・・俺は今世界のこれまでのヒエラルキーが変わろうとしているのを見ようとしているんや。これまではポケモン達が一方的に力を持ってきた。人間もポケモンとは平等とか対等とか言っておきながら、どこかでポケモン達を特別扱いしてきたんや）

そう・・人間とポケモンの両種族はお互いに対等な仲間として見なし合ってきた。

だが・・・。

考えてみれば妙である。

「神」と呼ばれしポケモンは存在するのに、「神」と呼ばれし人間は存在しない。

ポケモン達はよくこう言う

「自分はこの森の守護者」「私は海の神」「ここは太古から私が司ってきた場所」

だが、自ら支配する側を自認するポケモン達は何の権利があってその場所を「支配」しているのだろう。

人間達と話し合ったのだろうか？

人間達の了解も得た上でその場所の守護者と名乗っているのだろうか？

ルギア、ホウオウ、グラードン、カイオーガ・・・自ら「守護者」「王」を名乗るポケモン達は少なくは無い。

彼らは自分達がこの場所を守るという固い意志を持ち、その場所を奪おうとする者には容赦はしない。

・・・が彼らは何の権利があってその場所を「守って」いるのだろう？

森や海がポケモン達の住処なのは事実だ。

だがそれらの場所はポケモン達のものであると同時に人間達のものでもあるはずだ。

人間達が森や海を開発するのは、やりすぎなければ当然のこと。

しかしポケモン達はそれを断固と拒むのである。

彼らが勝手に自然を我が物にしているが故に。

では何故、ポケモン達は自然の支配者として人間の行動にまで干渉してくるのか？

それは・・・彼らが“力”を持っているからだ。

力を持った種族ゆえに生まれたときから自らを支配する側、優位な存在と心のどこかで思っている。

自ら「神」「王」「守護者」を名乗ることさえ憚らない。

このポケモン達の心に深く根付いた、そして無意識の「傲慢」。

それは人間にも当事者であるポケモンに普段感知されることは無い。

無意識下の「傲慢」さは普通「プライド」「自信」「神秘性」としてポケモン達、とりわけ「神」や「守護者」と呼ばれるポケモン達から出るオーラとして変化する。

この力を持った種族、ポケモンの度し難い「傲慢さ」と立ち向かうためにエリカは【プロジェクト・キメラ】を立ち上げた。

口で言うほど人間を対等な存在と見なしていないポケモン達。

その証拠に世の中の悪いことはすべて人間のせいにする。そういう発言がポケモン達からは目立つ。

今世界は変わろうとしている。

ポケモンと人間の間にあった力のヒエラルキーが崩れようとしているのだ。

ポケモンと人間を真に平等にするために・・・。

＊＊＊＊＊

一方。

リーフの親が経営する【フォレスト・エンタープライズ】社のポケモン訓練所では・・・。

ジュンがアグノムの姿で訓練を行っていた。

相手は機械仕掛けのポケモンだ。

「ダークボール」

ジュンが手から放った黒いエネルギー弾はメカに直撃する。

『威力１０２ポイント。平均より１２ポイント高いです』

訓練所からアナウンスが聞こえる。

その時

「ジュン、他の技でも試してみろ」

リーフの声が聞こえる。

彼は訓練所の上部からジュンの訓練を見ているのだ。

「分かった」

僕はそう返事をすると、手にエネルギーをためる。

エスパータイプの定番にして強力な技。

“サイコキネシス”

これに僕の“闇”を入れ込んで・・・と。

「ダークキネシス！」

ジュンが手をかざすと、黒いオーラがメカを浮かせ地面にたたきつける。

『威力９８ポイント。サイコキネシスより８ポイント高いです』

よし。次は技マシンで得とくした十万ボルトの改造版だ・・・。

新たなメカが投入される。

ジュンはスッと狙いをつける。

「ダークボルト！」

ジュンの手から漆黒の電撃がほとばしり、メカを貫く。

『威力９９ポイント。平均値より４ポイント上です』

「よし、測定終了」

そのアナウンスと共にリーフが訓練施設の扉を開け、中に入ってくる。

「お疲れさん。ほれ、レモネードだ」

「有難う」

僕はレモネードを受け取ると、訓練で渇いた喉を潤す。

今僕は新たな力を手に入れたということでそれを使いこなすための特訓を受けている。

まだ慣れない能力だけど、どうやらこの「闇」の力には一つの特性があることが分かって来たんだ。

それは今僕が持っているポケモンの技に闇の力を注入することが出来る能力。

おそらくは神の力と心の闇が結合して作り出された力なんだろうけど、とにかく応用が利く。

この闇自体には威力もタイプも存在しない。

僕の想像力やポケモンの技に関する知識が闇に形を持たせている。

僕の新たな力・・・それは闇を具現化することが出来る力。

「それでよ・・・」

僕がレモネードを飲み干すのを見ていたリーフがポツリと呟く。

「刻印は何処まで進行しているんだ?」

「あまり聞かれたくない質問だね」

そう言うと人間の姿に戻る。

服を脱いで見せると、血管のような赤い痣が腹部と胸の辺りまで広がっていた。

「君の進めてくれた薬でだいぶ抑えられてるよ」

「だが、止まらないな・・・進行」

リーフは悲しそうに痣を見つめる。

「大丈夫だよ」

ジュンは落ち込むリーフの肩を優しく叩くと訓練所を後にした。

訓練後、ジュンは施設内のレストランに居た。

流石は【フォレスト・エンタープライズ】

施設内のレストランもおいしいね

という旨をリーフに言うと少し彼の顔が曇った。

「どうしたのさ?」

「いやな・・・俺はあまり親の会社のことは言われたくないんだ」

「何故?」

僕が聞くとリーフは苦々しい表情になった。

「俺は両親と仲はいい。だけど、嫌なんだよ。親の七光りを連想させる話題は」

ああ・・・そうか。

ジュンはその手の話題を振ったことをすこし反省する。

二人はお互いに黙ってしまう。

しばしの沈黙。

先に口を開いたのはリーフだった。

「そういえばイプシロンとかいう奴からメッセージがあるらしいぜ?午後1時にこの施設の外で待ってるとか言ってたな」

「・・・分かったよ」

僕はそう言うと席を立つ。

ユウタが僕を呼んだということは、USA2かエリカ関連かな。

そう思いつつ僕は施設の外のベンチに腰をかける。

数分後・・・。

「よう」

一人の青年が声をかけてきた。

ＣＩＣ情報部の中尉。僕と一緒に前回破壊活動を行った奴だ。

「やあ、ユウタ」

軽く手を上げるとイプシロン中尉ことユウタは僕の横に座る。

しかし・・・どうでもいいけど、こんな所にまで軍服を着てくるのはどうかと思うんだけど・・・。

目立つし。

やっぱり言ったほうが良いのかな。

「ねえ、ここは基地外だよ？なんで軍服着てるのさ？」

「俺はこの格好のほうが気分が落ち着くんだ」

あ、そう・・・。

何だ軍服好きなだけね・・・。

まあそれはともかく。

「僕に伝えたいことって？」

「ＵＳＡ２とテロリストの証拠入手はお前の功績が大きい。まずは祝辞を述べておく。・・・・感謝するぜ」

「え、うん。素直に受け取っておくよ」

「それで分かった事実がある」

「何？」

ユウタの声が少し重くなる。

「エリカ達がＵＳＡ２からミサイルを大量に調達していた」

ミサイル

その聞きなれない単語にジュンは戸惑うばかりだった―

第七十話　最終段階突入　キメラウィルス（後書き）

ポケモン達の傲慢さは確かに存在します。

僕個人としては今回の話での論の展開には些か論理の飛躍をさせています。

しかし、ポケモン達が力を持っている存在であり、そのことに優越感と傲慢さを覚えているのもまた事実です。

ポケモン達は口で言うほど、人間を対等な存在とはみなしていないそう思えてなりません。

まあ、ポケモン個人によりますが。

次回からは遂にエリカ達との決戦の導火線に火がつきます

第七十一話　ある協力者

こはイッシュ地方のとある沿岸部。

夜。一人の青年が浜辺に立ってた。

短髪はワックスで固められ、腕と指と腰のベルトにはシルバーアクセサリーがジャラジャラと付いている。

目は燃えるような赤だ。

「遅せぇ」

誰かを待っているように腕を組み、いらいらとしている。

すると・・・。

「お待たせしましたね。ゼクロム」

一匹のポケモンが急に姿を現した。

ピンクの小さな体に長い尾そして青く澄んだ目。

幻のポケモン。ミュウである。

この青年―雷の神ゼクロムが人に化けている姿なのだが―はクルリと振り向く。

「遅いぜ、ミュウ！俺は待たされるのが大嫌いなんだよ！」

「黙りなさい。低脳が。こちらにも用事というものがあったのです」
間髪居れず嫌味で返してくるミュウにゼクロムがウッと詰まる。
「まあいい。それより俺の探してる奴・・レシラムの居場所が分かったっていう情報はマジなんだろうな？」
「確かですよ。私の古くからの友人による情報ですから」
ミュウはそう言うと指をパチンと鳴らす。
すると宙から急に紅茶が入ったマグカップが出現した。
「あぁお前のダチは確か情報機関の・・・」
「その通りです。彼はポケモンですが、相当中枢まで上り詰めています。信用できる男ですよ」
紅茶を優雅にすすりながら答えるミュウ。
「で、レシラム達が何企んでいるのか分かったのか？」
ゼクロムの言葉にミュウも頷く。
「彼らは【プロジェクト・キメラ】なる計画を立ち上げています。先ほどの情報に補足説明をしておくと「レシラムの居場所が分かった」のでは無く「レシラムのパートナー達の居場所が分かった」ということになりますが」

その言葉を聞きゼクロムがため息をつく。

「ホワイト家の生き残り・・・エリカだな？」

紅茶を啜り、黙って頷くミュウ。

「【プロジェクト・キメラ】の最終的な目的までは分かりません。しかし、ポケモン達を実験材料に用い何かヤバイことを目論んでいるようです」

最後まで紅茶を飲み干すと、ミュウは再度指を鳴らしマグカップをどこかに消した。

「・・・俺としては今すぐにでも行きたいんだが」

「私達単独で動いては駄目です。人と共に行動しなければ」

「そうだな・・・」

暫らく二匹は黙って海を見ていた。

その沈黙を破ったのはゼクロム。

「レシラムを止めるのは俺の義務だ」

「・・・確か君の友でしたよね？」

「・・そうだ。あいつは何時からかポケモンと人は平等でなければいけないという思想を持って、例の事件の後エリカと共に俺の前から姿を消した」

「『ポケモンと人が平等でなければいけない』・・・既に二者は平等ではないのですか？」

「レシラムは人間が俺達ポケモンと同じ、そう・・・全く同じ力を手にする必要があると考えている」

ゼクロムがふうとため息をつく。

「なるほど。しかし一見正論そうですが・・・何かが絶対的に違うような気がする意見ですね」

「俺もそう思う。だからこそ！」

ゼクロムの口調が激しさを帯びる。

「俺は絶対あいつを止める！絶対だ！」

バチバチと人間の姿のゼクロムから放電現象が起きる。、

「全く貴方という方は・・・」

ミュウは放電現象に巻き込まれないようにゼクロムと距離を取る。

「これだから野蛮な方は」と小さい声で呟いていた。

暫らくバチバチと放電が続いていたが、急に収まる。どうやら気持ちの高ぶりが冷めてきたらしい。

「で、具体的に俺達は何をすんだよ？」

「はぁ・・・お馬鹿さん。よく傾聴してくださいね。まず私の友からのメッセージを待ちます。彼が私達に言ってくればすぐさま彼の仲間と合流。共にレシラム達の居る場所に向かい、彼らの陰謀を阻止します。お分かりですか？」

「馬鹿にすんな！俺だってそれぐらい理解できるぜ」

「おお。それだけ頭が空っぽのウドの大木でも流石に分かりますか。私の華麗で知的で洗練された説明方法のお陰ですね。感謝なさい」

ミュウの流れるような自画自賛にゼクロムが絶句する。

「ちょ・・・ミュウ。テメエそろそろナルシストから卒業したらどうなんだ？」

「それは誤解ですね。私はナルシストなのではありません。事実私は美しく、可愛い外見を併せ持つ究極のポケモン―」

「でも全種族値１００でどっちつかずだよな」

ボソリとゼクロムが呟く。

「な・・な・・何を仰るのです。お馬鹿さん。確かにそういう面は否めませんが・・・いや、断じてそんなことは・・・そうですよ。『どっちつかず』では無く『オールマイティ』と言って頂きたい！」

「器用貧乏」

ゼクロムがジト目で言う。

「く・・無限の知性たる私に・・・」

「どっかのニャースかよ」

先ほどの切れは何処へやら完全にゼクロムに押されているミュウ。

が直ぐに自信満々の表情に戻る。

「ふ・・まあいいでしょう。私の至高性は君のような低俗な存在には決して理解できないでしょうからね」

「はあ」

ため息しか出ないゼクロムであった。

（こいつとは長い付き合いだが・・このナルシストぶりには疲弊するぜ・・・）

「――これから激しい戦いになりそうですね」

ミュウが先ほどとは打って変って冷静な表情になる。

海をスッと目を細めてみている。

「なに。レシラムをぶっ飛ばしてでも目を覚まさせてやるさ。あいつがあっちに居る限りエリカ達に勝つのは難しいからな」

「それはその通りです」

ミュウが再び指をパチンと鳴らす。すると空中からクッキーが数枚

出現する。

それを口にしつつミュウが呟く。

「正直私は不安です・・・・」

「ん？」

あのミュウが・・・いつも何処から沸くのか無限の自信を抱いているあのミュウが・・・。

「彼らは既にアルセウスとパルキアを手に入れています」

「・・・だけどまだディアルガが―」

「おっと説明不足でしたね・・・ディアルガは今彼の支配領域に逃げ込んでいます」

その言葉にゼクロムが目を向く。

「っ！？馬鹿な・・・時を司るディアルガが自信の領域に『逃げ込んで』いる・・・だと」

「その通りです。私はこの数年アルセウス、ディアルガ、パルキア達の力が弱っている事を察知し、独自に調査していました。その結果私が掴んでいた情報はある謎の団体が最高神アルセウスと空間の神パルキアを捕獲した、と言うことです」

「あの2体を・・・」

「恐らく貴方達との戦闘後、傷を癒しているときに襲われたのでしょう。そのお陰でディアルガはこの世界を実質一体で支える破目に陥りました。その結果彼の力はこれでもか、というほど弱っています。・・・・彼がその集団に捕まるのも時間の問題です。まあ、私もこの事実を知ったのはつい５ヶ月ほど前。満月島で調査で判明しました」

「満月島ってことは・・・クレセリアのいる・・」

「満月島は三位一体の神の力が集まる空間です。そこにいれば、アルセウス、ディアルガ、パルキアの力の何れかが欠けると察知する事が出来るのですよ」

ミュウはそういいながらクッキーの最後の一枚を口に放り込む。

「馬鹿な・・いくら弱っているとは言え、神々をそう簡単に・・・」

ゼクロムが考え込む。

そして、ある事を思いつく。

「そうか！レシラムか・・・！」

「その通り。恐らくエリカ達はレシラムの協力により神を2体も手中に収めたのでしょう」

ミュウは静かに同意する。

「しかしそこまで神の入手にこだわる理由が分からないな。まさかエリカの奴神にでもなるつもりか」

精々冗談めかして言ったつもりだったが、ミュウの表情は暗いままだ。

「ゼクロム。貴方の言う通りかも知れません。私達ポケモンの知らぬところで始まっているのかも、ですね・・・」

「始まってるって・・・何が始まるんだよ?ええ、これ以上よぉ・・・」

軽く流したつもりだったが、ゼクロムの頬を嫌な汗が流れた。

「人の起こす『革命』が」

ミュウの言葉にゼクロムは息を呑む。

人間が・・・革命を・・・

俺達ポケモンはそこまで追い詰めていたと・・・?

「今回のエリカとレシラムが中心となっている一連の事件。しかしそれは氷山の一角かもしれません。確かにここまで徹底的にやるのはおそらく彼女が最初で最後でしょう。しかし・・・人間達は内心ポケモン達を憎む・・というか羨むというか・・・そういう気持ちがあるのではないでしょうか」

俺達ポケモンが憎まれる・・・?

馬鹿な・・・

俺は人間を尊敬しているし、すごいとも思ってる。

人が生み出す文化や文字、科学技術・・・。

正直俺にはチンプンカンプンだ。

だからこそ、俺は人間をずっと対等の相手だと・・・。

確かにあいつ等弱いし、すぐ傷つくし、守ってやらないととは思ったことは何度ある。それは否定しない。

そして俺達ポケモンは確かに『力』を持っている。

だが、二つの種族がいればそれぞれ得意分野が異なるのは当然のことじゃないか！

少なくとも俺は人間達に敬意を払っているつもりだ・・・。

だが・・・。

「俺達ポケモンの気持ちは人間には伝わってなかったってことかよ・・・。俺は人間ってすごいと思うんだ・・・敬意を払う相手だとな・・・だが・・・」

「・・・人間、ポケモンに限らず自分の持っていないものを見ると、それが羨ましくなるものなのですよ。私達の『力』はある意味持っていない者には努力などの手段では手に入れられないものですから・・・エリカにはそれが許せないのでしょう」

「ポケモンばかり力を持っていて許せないってことかよ！そんな理

由で・・・ここまでの・・」

「ことが出来るのが人の恐ろしさです。しかし今回のこの事件のきっかけを作ったのも元をたどれば、我々にも非はあるのでしょう・・・。私達ポケモンは人間達の気持ちに対してあまりにも鈍感だったのかもしれませんね・・・」

ミュウのつぶやきは海の波の音に消されていった―

第七十二話　【スキエンティア】の魔の手！ディアルガＶＳレオン＆ロザ（前書

今回はちょっと短いです

第七十二話　【スキエンティア】の魔の手！ディアルガＶＳレオン＆ロザ

イッシュ地方から遠く離れた大空。

一機の大型輸送機が空を切って飛んでいた。

その名は「マザーステルス」。ほぼ完全なステルス性能を持ち、大量の物資や兵員の輸送が可能で、ＣＩＣが秘密裏に開発していた機体である。

【スキエンティア】幹部の一人、ロザ・フォールがＣＩＣのデータベースから機体データを盗み出し、ＵＳＡ２協力の下完成させたのである。

「Ｂ－２３地点に突入」

コックピット内では同じく幹部の一人、レオン・Ｊ・ホーガンが座っていた。

レオンは操縦席の装置の画面を見る。

「ロザ。そろそろ『時の断裂』に付くんじゃないか？」

「ええ。ディアルガの出現ポイントに近づいているから、確実よ」

『時の断裂』とはディアルガが自身の支配領域に出入りする際に出来る、一種の次元の歪みである。

その歪みに入る事でのみ、ディアルガの支配領域にディアルガ以外

の存在が出入りできるということになる。

「既にアルセウスとパルキアは私達の手中に存在する。ディアルガ自身、この世界のバランスを保つために殆どの力を使い果たしているはず」

ロザが眼鏡を拭きながら何気なく言う。

「でも、ディアルガを捕まえて世界が崩壊したりしないのか？」

「当然バランスは崩れるわね。でも、旧世界の秩序なんてどうでもいい。私達が新世界の秩序を決定するのだから」

「それもそうだな」

レオンがチラリと画面に目をやる。

「そろそろ着くぜ・・・」

「ええ。そしてこの捕獲が成功すれば、三位一体の神が私達の手に・・・」

「でも、エリカと・・・・特にレシラムは人間とポケモンの平等を説いてるけどな」

レオンが少々寂しそうな表情を見せる。

「そうね・・・。でもエリカ自身三体の神の力を体に吸収するつもりよ」

ロザは眼鏡をかけるとため息をついた。

「始まるんだな。新しい歴史が・・・・今まで世界の管理者はポケモン達だったが、主役交代の時だ。新たな歴史の道標。エリカの時代が・・・」

「そして私達の時代がね。さて、そろそろ着くわよ」

ロザとレオンの目の前には歪んだ光景が広がっていた。

『時の断裂』である。

マザーステルスはその歪みに飛び込んでいった―

＊＊＊＊

『アルセウス・・・パルキア・・・何処にいる？』

ここはディアルガの支配領域内。

その中でただ一人、ディアルガが疲れ切った表情で佇んでいた。

この数年彼は各地を飛び回り、アルセウスとパルキアの行方を追った。

しかし誰もそれを知らない。

もちろん彼は神。『気』を探索もしてみた。しかし、駄目だった。

恐らくかなり巧妙に、そして厳重に守られている場所に捕まっているのだ。

時渡りをして、過去に遡ってもみた。

だが、最後にアルセウスとパルキアを過去で見る事が出てきたのは、例の事件のときのみ。

レシラムとゼクロムとの戦いのときを境に、アルセウスとパルキアは忽然と姿を消した。

『誰かが・・・捕獲したのか・・・いや、しかし・・・モンスターボールに入っているのなら、私に分かるはずだ』

ディアルガはすっとその場に座る。

『それに私を執拗に追う者もいる。一体誰なんだ・・・』

何時からか、そうだ・・・アルセウスとパルキアが消えてからだ。

恐らく捕獲されたのだろう。

『神が人間などに捕まるなどありえるのか・・・。いや、あの非力な存在に捕まるなど・・・』

しかし今ディアルガ自身追い込まれ、自身の支配領域に逃げ込んでいる始末だ。

ディアルガがその場で思考を巡らせていると・・・。

突然自身の空間に「歪み」が生じた。

『侵入者か・・・。一体誰が!?』

ディアルガの支配領域に踏み込んできたものはこれまでで皆無だった。

と、そこに一機の輸送機のようなものが歪んだ空間から入り込んできた。

真っ黒の大きな機体だ。

『一体何者だ』

飛行機はディアルガの近くに着陸した。

中から人間の男女が二名降りてくる。

『お前たちは何者だ・・・答えてもらおうか』

「俺はレオン・J・ホーガンだ。ま、お見知りおきを」

「私はロザ・フォール。よろしくおねがいしますわ」

『・・・目的は？』

「ディアルガ、アンタの捕獲だ」

レオンと名乗った男は腕を組みながら答える。

『なるほど。パルキアとアルセウスを捕まえたのもお前たちなのだな・・・？』

静かに問うとロザと名乗ったほうの女性が頷く。

『なら、お前たちを返り討ちにして吐かせればすべて解決する！波動弾！』

ディアルガが口から波動弾を放つが・・・。

何とロザがレオンの前に出て、波動弾を受け止めてしまった。

『何！？』

「私には効かないわ。ムウマージの力を持った私には」

ディアルガの目の前でロザの体が変化していく。

何も被っていない頭には紫色の帽子、そう丁度魔女が被るようなつば広の帽子が現れる。

目は赤くなり、白衣を纏った体に紫色のベール上のマントが発生する。

明らかにマジカルポケモンムウマージの特徴が随所に出ていた。

『一体何が・・・』

ディアルガはただ呆然としている。

ロザは紫の深いつば広の帽子を目元まで被ると、ふわりと浮いた。

「シャドーボール」

ロザが黒いエネルギーボールを放ってくる。

『守る！』

「ふふ、なかなかやるわね。なら、サイコウェーブ」

今度は七色に輝く波状のエネルギーを放ってきた。

『舐めるな！ラスカーカノン！』

ディアルガがラスターカノンでこれを相殺する。

「おい、ロザぼっかりに気をとられていていいのかよ」

下からの声にディアルガが視線を下げると、そこにはまたもや驚きの光景が広がっていた。

レオンの体にも変化があったのだ。

着ている軍服の背中が裂け、二枚の大きな翼が生えている。

その翼には燃え盛る炎。そしてレオンの頭部とズボンの後ろからも滑らかなベールのような炎が揺らめいている。

バサリと空を舞うレオン。その姿はそう・・・炎タイプトップクラスの強さを誇る伝説のポケモン、ファイヤーそのものだ。

『その姿は・・・・』

「俺には伝説のポケモンファイヤーの遺伝子が組み込まれていてね。・・・俺達【スキエンティア】に捕まってもらうぜ、ディアルガさ

んよ！！」

第七十三話　【スキエンティア】の魔の手！　異次元からの旅人

『これは驚いたな。人の姿とポケモンの特徴が融合しているとは・・・』

今ディアルガの目の前にいる二人の男女。

レオンというほうは背中から大きな炎の羽を持つ翼を生やし、頭部とズボンからも滑らかな炎が揺らめいている。

そしてロザは頭にムウマージ最大の特徴であるつば広の魔女の紫帽子を被り、同色のエネルギーベールを全身に纏っている。

「サイコウェーブ」

ロザが浮遊しながらエネルギー波を放つ。

『く・・・』

ドラゴン・鋼タイプであるディアルガにはエスパー技は普段ならあまり効かない。

しかし今は彼の力はアルセウス・パルキアの欠如によって絶対的に弱まっている。

防御能力も格段に落ちているのだ。

「ほらよ！大文字！」

レオンも続けてディアルガに炎を放つ。

『舐めるな！原始の力！』

ディアルガはレオンに鋭い岩の塊を放つ。

「おっと！守る！」

レオンの周りに出来たエネルギーが原始の力を防ぐが・・・。

『ドラゴンクロー！』

防御を見越していたディアルガはレオンに近づき、守るが解除されたと同時にドラゴンクローを決める。

「っ痛てェ・・・」

地面に叩きつけられたレオンが頭を摩りながら、呻く。

普通の人間ならよくて気絶、悪くて死亡するほどの衝撃だがさすがファイヤーとのキメラといったところだろう。

まるで転んだだけのようなノリで跳ね起きるレオン。

「さすが神様ってとこだな・・・」

レオンが再び空に駆け上がりながら言う。

『今なら貴様らをゆるしてやらないこともないぞ』

ディアルガの言葉にレオンが不敵な笑みを浮かべる。

「いつまで支配者サイドでいるつもりだよ・・・あんた」

その言葉にディアルガがスッと目を瞑る。

『そうか・・・なら仕方が無いな。あまり使いたくはないが・・・』

刹那、ディアルガの口内にエネルギーが溜まっていく。

「くるぜ」

「分かっているわ」

レオンとロザが身構える。

『時の咆哮！』

ディアルガの口から莫大なエネルギー光線が一気に放たれる。

その光線はレオンとロザを直撃し、背後の領域の壁にぶつかり空間を歪ませる。

『終わったか・・・』

ディアルガが勝利を確信したその時！

「馬鹿ね」

舞い上がる煙の中からロザとレオンが姿を現す。

服が破れてはいるが、殆ど無傷なその姿にディアルガが目をむく。

『ば・・・馬鹿な!?時の咆哮の直撃を受けて・・・あ、ありえん・・・!』

ディアルガの力はかなり弱まっているとは言え、彼は時を司る神。

その攻撃を受けてものともしないとは・・・流石のディアルガも予想できなかった。

『時の逆流!』

追い詰められかけているディアルガは奥義である『時の逆流』を使おうとする。

しかし、彼は今たった一匹で世界のバランスを保っているのだ。

そんな状態で時の咆哮を上回る技を使えるわけがなかった・・・。

「計算通りだな」

レオンは満足げに頷く。

『どういうことだ・・・』

「ディアルガ、何故貴方が最後に狙われるのか分かりませんの?」

ロザが笑いながら言う。いや、嘲笑と言ったほうがいいか・・・。

「三位一体の神は3体で世界のバランスを支えている。そのうち1体か2体を取り除けば、必然的に残った『神』はいなくなった神の分も世界を支えるためにエネルギーを使わなければならず、その分その残された神の力は弱くなるわ」

「ま、あんたを最後に回したのは別に特別な理由は無いさ。ただ、神を捕まえる時は別々に分けて捕まえるのが効率的ってこった」

二人はまるで夕食の話題でもするかのような気楽さで話している。

『私を捕まえれば世界は崩壊するぞ。分かっているのか・・・』

ディアルガが弱弱しく言う。

今この時も彼はこの支配領域から世界のバランスを保つために、力を流し続けているのだ。

「だって俺達にとってこんな不平等な世界は要らねーからな」

「こんな世界はもう必要ないのよ。だから壊しちゃう。お分かり？」

『・・・馬鹿な。世界はお前たちの玩具ではない！！』

ディアルガが叫ぶ。

「でもあんた等ポケモンのモンでもねぇよな？あんたらさ・・・人間滅ぼそうとしたろ？もう要らないんだよなぁ・・・もうポケモンの時代は終わりなんだよ」

「何時までも神様気取りしてるからこんなことになるのよ。愚かな

奴ね」

突如、ロザの眼が赤く光る。

「怪しい光」

ディアルガの目から力が消える。

怪しい光は相手を混乱状態にする技である。

ディアルガの動きがピタリと止まり、何と自らを攻撃しだした。

混乱してしまい、幻覚を見ているのだ。

「今のうちよ」

「ああ」

二人は頷くと行動を起こす。

レオン達はマザーステルスに戻ると、大きな装置を機体の収納庫から取り出してきた。

混乱状態で動けないディアルガの近くに装置をセットする。

「捕獲装置作動」

レオンが装置のスイッチをカチリと押すと、装置から飛び出た四６つのユニットがディアルガを囲み、宙に浮かせる。

6つのユニットから出た赤いレーザーが互いのユニット同士を結び、正六面体となる。

「捕獲終了だな」

レオンとロザの体が元の状態に戻る。

「ええ。さぁ、本部に戻りましょう。エリカ達が待っているわ」

レオンとロザがまさにマザーステルスに乗り込もうとしたその時。ことは起こった。

『時の断裂』から誰かが入ってくる。

「なんか変な場所に迷い込んじまったなぁ」

一人の青年が入ってくる。

赤髪とつり目に加え、首にはスカーフ頭にはゴーグルをつけている。腰には剣がさしてある。

「ん？」

その青年はレオンとロザに気づく。

「お前は・・・？」

レオンが身構えつつ尋ねると、その青年は何気なく答える。

「俺はフォック。空間を渡る旅人と言っておく・・・こっちこそ尋

ねていいか？」

赤髪つり目の青年、フォックは捕らわれたディアルガを指差す。

「何やってんだ？」

「・・・その問いに半分だけ答えてやるよ。俺達【スキエンティア】は新世界を創造する。ポケモンの支配から外れた世界を・・・そのための布石だ」

「へぇ～なるほどなぁ」

フォックはうんうんと頷く。

そして。

「な・・・」

レオンの体が吹き飛ぶ。

「レオン！？」

フォックが目にも留まらぬスピードでレオンに一発ぶち込んだのだ。

「く・・そ・・」

レオンは腹部を摩りながら何とか立ち上がる。

「どんな理由があるのかは知らねぇが、お前らのやってることは許せないことだけは確かだ」

フォックの姿がどんどんと変わっていく。

オレンジ色の体に大きなドラゴンの翼。

飛行・炎タイプの竜。リザードンである。

「どうやら私達の邪魔をする気のようね」

ロザがレオンの横まで後退する。

「ったくウザいぜ。せっかくディアルガ捕獲に成功したっつーのに。よりにもよってこんな意味不明な奴が来るとは完全に予想外だ」

レオンとロザの姿が再び変化する。

ファイヤーの炎の翼を生やしたレオンとムウマージの紫の帽子とマントを発生させたロザが宙に浮かぶ。

その姿にフォックが目をむく。が、色々と経験しているらしくそこまでは驚かない。

「・・・人間とポケモンの姿が融合している。ポケモンに完全に変身するわけでもねぇ・・・相当ヤバイことやってないと出来ない芸当だな。こりゃお前達をとっ捕まえて何やってたかを吐かせる必要がありそうだ」

今戦いが始まろうとしていた―

第七十三話　【スキエンティア】の魔の手！　異次元からの旅人（後書き）

はい、ということでフォックさんとのコラボに入りました

第七十四話　生まれし闇「マリス」（前書き）

今回はフォックスＶＳレオン・ロザ戦ではありません。

第七十四話　生まれし闇「マリス」

「ダークボルト」

僕は手から漆黒の雷を放つ。

放たれた電撃は野生のムクバードに直撃、一発で倒す。

今僕は野生のポケモンを相手に訓練中。もちろんアグノムの姿で。

エリカとの決戦に向けて、ね。

ブラウン少将も「古い友人、というか協力者の準備が出来次第【スキエンティア】の海上研究所に向かう。それまで鍛錬を重ねておいてくれ」と頼まれたし。

「えっと次はダークキネシス」

今度は闇の念導力でこちらに向かってきたポケモン達をなぎ払う。

「あれ、もう全滅か」

辺りを見渡すと周囲には倒れているポケモン達しかいなかった。

「・・・引き上げるか」

僕はふわりと浮遊するとその場を離れる。

そのまま飛び続けながら僕は考える。

僕の心の闇によって強化されたり、新しく創り出された「ダーク」技の数々。

でも不思議だ。

何故かずっと前から使ってきたような気がするんだ・・・。

まあポケモンは進化して習得する技も楽々使いこなせるワケだから、そんなに不思議なことじゃないとも思うけど・・・。

そんな感じじゃない。

この「ダーク」技は自然に得る力では無く、エリカによって組み込まれた『神』の力と僕の闇が結びついて出来たいわば人工物。

普通はもっと使いこなすまで時間が掛かるはずなんだ・・・。

そうだ・・・まるで闇の力自身が僕に囁いているような。

まさかね・・。

「そろそろ着くかな」

リーフ邸が見えてきた。

僕は扉の前で静止すると、インターホンを鳴らす。

暫らくすると・・。

「おお～お帰りっす～」

アルさんが出てきた。

エプロンを着用して、お玉を片手に持っている。金髪と全く合っていない。

テロリスト集団【赤い満月】のメンバー（したっぱだけど）だったアルさんは、今リーフ邸で居候をしている。

といっても違法の武器ブローカーと技術屋としての活動だけだったらしいけど。

「訓練っすか。お疲れさまっす～」

「や、ジュンお疲れ」

アルさんの後ろからひょっこり顔を出したのはリーフ。

「メシ食うか？」

「いや、まずお風呂にするよ」

汗掻いちゃったし。

僕はリーフ邸の大浴場に移動し、浴槽に浸かる。

（エリカは何を考えているんだ・・・・）

浴場の縁に膝を付きながら思考を巡らせる。

（ユウタから聞いたあの事実。ミサイルを用意していると・・・エリカはキメラ技術を開発していたはず。何故ミサイルなんだ？一体何を企んでいる・・・？）

ジュンはバシャリと水音を立て、立ち上がると自分の体を見る。

赤い痣は既に胸から腰にまで移動していた。

広がっている。

「死」を呼ぶ刻印は日々僕の体を蝕んでいる。

リーフの薬で抑えられてはいるようだけど。

「・・・僕には時間が無いんだ」

このまま甘んじて痣の進行を受け入れれば、後1年も持たないだろう。

「手を打たなければ」

唯一の望みはエリカが開発している薬。

『怖いか？』

「うん・・・」

そうだよ・・ああ、怖いさ。

ん・・？

今のは？

僕は辺りを見渡す。

今声がしたような・・・。

「気のせいか」

『そう思うか？』

「な・・・な・・」

気のせいではない！

僕は浴場から急いで上がると、更衣室に飛び込んで部屋を見回す。

が、更衣室にも誰もいない・・・。

「君は誰なんだ・・・何処にいる！？」

『ボクはお前だ』

その言葉は脳に響くように聞こえる。

つまり・・・。

「精神的におかしくなったのか、それとも―」

僕はふらふらになりながら体を拭き、着替えを済ませる。

『流石はポケモンハンター。冷静だな』

「病院に行こう」

頭のおくから聞こえてくる声を無視し、携帯のネットから近くの病院を探す僕。

『病院など行っても無駄だ。ボクはお前の闇の心が、エリカのよって組み込まれた神の一部と融合し誕生したもう一つの人格なのだからな』

何だと・・。

僕の闇と神の力が・・・。

「ちょっと待ってよ。じゃあ僕がすんなり『ダーク』技を使えたのは・・・いや、そもそも君がそれで誕生したのなら何故今までコンタクトを取らなかったのさ!?」

僕は半分パニックになりつつも、僅かに残っている冷静さで自分を落ち着ける。

『ボクはお前の無意識に闇の力の制御法を刷り込んでいた。そしてコンタクトを取らなかったのは、赤き痣の進行が進んでいなかったからだ。ボクの力の源泉は赤き痣、つまり神の力だ』

なるほど・・・。

「・・・で、君は僕の体を乗っ取る気かい？」

些か警戒して尋ねると、声は笑った。

『そんなことはしない。ただボクはお前の破壊や名誉、力への欲求。そして正義を掲げる者への悪意と憎しみから生まれた・・・お前はボクの生みの親だが、完全な支配下に敷けるわけではないと言っておこう』

「まるで君が僕の体から出たり入ったり出来るような口ぶりだね」

『勘がいいな。まさしくその通りだ』

くっくっくとくぐもった笑いが聞こえる。

『ふふ・・・ボクとお前は元々一つ。お前に一つ提案がある』

「何？」

『ボクと協力する気は無いか？ボクはお前の中の神を吸収し、体外に出る力を得ている。・・・だが元の親はお前。ボクにとってお前の指示は強力な拘束力を持つ・・ボクが体外に出れば、お前からは赤き痣が消える。どうだ？』

「何故僕にそれを問う？勝手に出れば？僕もそのほうがありがたいし」

その言葉に『声』は機嫌を悪くしたらしい。

若干口調がきつくなった。

『言ったはずだ。ボクは元々お前の闇から生まれた存在だと。お前の同意が無ければボクは外には出られない』

「なるほどねぇ」

この『声』が神の力と闇の心によって生み出された純粋な「悪」や「闇」の結晶であることは理解できる。

こっちに負の感情がひしひしと伝わってくるんだよねぇ・・・。

普通なら、普通のヒーローならこの手の存在は外には出さず、闇と戦って消し去るんだろうけど・・・。

僕は違う。

闇を消すなんて勿体無いじゃないか。

面白そうだ。

この『声』はどうせとんでもない事を考えているんだろうけど・・・悪魔のようなものだろう。

いいじゃないか。彼が何を考えているのかは知らないけど、闇と付き合うのも面白い。

「いいよ。出ておいで」

その言葉に『声』が笑ったような気がした。

刹那、僕の体から漆黒の闇が抜け、ガス状の球体となって浮遊する。

暫らくするとその『闇』の姿が変化していく・・・。

長い二つの尾に兜のような頭。

意思の神といわれるポケモン、アグノムだ。

ただ体全体は全てを吸い込むような黒であり、大きな目は血のような真紅。

そして同時に僕の体から赤い痣が全て消えた。

『くっくっく。やっと出られたぞ。ジュン、お前が神の力を手に入れた瞬間からボクは誕生していた。だが、言語を発し、物理的な体を手に入れるには神の力に増えてもらう必要があった・・・』

「だから赤き刻印が進行するのを待っていたわけか」

『そうだ！だが、今ボクは物理的な体と、己が肉体に取り込んだパルキアの力を手に入れた！！くくく、感謝するぞ。これで殺戮と破壊をこの世にもたらすことが出来―』

「ねえ、そんなことはどうでもいいんだけど。一つ質問していいかな？」

その問いに真っ黒のアグノムが赤い目を剥く。

『な・・どうでもいいだと！今ボク世界に混沌をもたらす存在として―』

「いやね。君が世界に混乱をもたらそうが、破壊の限りを尽くそうが僕にはどうでもいいことなんだよ」

『信じられないほど非常識な奴だ・・・』

「君に言われたくないさ。で、教えて欲しい。君の名前をね」

『名前・・・だと』

僕はドライヤーで頭を乾かしながら続ける。

「そうだよ。呼ぶとき不便でしょ。名前がないと」

『名などボクには無い。純粋な闇なのだからな！』

「じゃ僕が名づけるね」

曇った鏡にアルファベットを書いていく。

M・・A・・L・・I・・C・・E

「Ｍａｌｉｃｅ。英語で「悪意」「敵意」「恨み」の意味の名詞さ。君は今日からマリスだ！」

『マリス・・・くくく良い名だ。的を射ている』

僕から生まれたもう純粋なる闇は僕の命名が気に入ったようだ。

「ねえ、マリス。僕に協力してくれないか？ある計画を阻止したいと思っていてね。力はあればあるほどいい状況なんだ」

『【プロジェクト・キメラ】か・・・。ふふ、知っているぞ。エリカ達が行っている計画だろう?何、そう驚いた顔をするな。ボクとお前は一つだったと言っただろう?記憶も共有していただけのことだ』

「で、答えは?」

腕を組んで尋ねるとマリスはくぐもった独特の笑い声を出した。

『いいだろう。世界を破壊し、混沌に導くよりお前といる方が楽しそうだ・・・だが、ボクは何時でもお前を裏切るぞ?ボクはお前に飽きれば何時でも離れ、世界を破壊すべく飛び立つだろう』

「それは予想済みだよ。君は純粋な闇の存在。・・・用は君を楽しませ続ければいいわけだ」

『たいした自信だな。・・・お前に力を貸してやる。ボクの闇の力をな。ポケモンの力と人の闇が生み出した存在を見るがいい・・・・』

その瞬間マリスの体が急激に変化する。

漆黒のアグノムの体が溶け、闇の靄に変化する。

さらに変化が進んでいく・・・。

すると・・。

『一つ教えてやろう。ボクはお前の闇だけで生まれたのではない』

闇から声がする。

『エリカがお前に神の力を組み込んだとき、レシラムもそれを傍観していた。お前は知らず知らずの内にエリカの輝く狂気とレシラムの白き理想をも体内に取り込んでた・・・。お前の中の神の力が、黒と白。二つの心を得る事を望んだからだ！』

そして闇がその姿を変えていく・・・。

『ボクが己が存在を感じた時、初めて見たポケモンはなんだったと思う？そうだ、アグノムの姿のお前ではない。・・・その時お前の中に居たのだからな』

「レシラムだね・・・」

エリカがレシラムを手持ちにしていたとは意外だね・・・。

いや、僕はイッシュ地方には行った事が無いけど、ポケモンハンターとして炎を司るレシラムと雷を統べるゼクロムの伝説ぐらいは知っている。

しかし、まさかの炎の神と呼ばれしレシラムが手持ち、或いは・・・協力者だとするとかなり厄介だな・・。

僕が考えていると黒い光と共にマリスが姿が完全に変形する。

ジェット機のような翼を持ち、ブースターのような尾を持つポケモン。

ああ、これがレシラムの姿か。

イッシュの神話書の挿絵でしか見た事が無いけど・・・まさかこんな形で見る事が出来るとは。

いくら闇が変化した偽者とは言え、原寸大だし。

が、マリスが変化したその姿の色合いは漆黒。

目は燃えるような赤。

普通レシラムは純白に澄んだ青い目のはず。少なくとも挿絵にはそう描かれていた。

漆黒のレシラム・・・か。

「それが君の姿なんだね」

静かに語る。今目の前には炎を司る神、黒きレシラムが鎮座していたのだから・・・。

『神の力は純粋なものだ。元々の持ち主がパルキアであっても、お前の中に入れ込まれた瞬間それは誰それの力ではなく、純粋な『神』の力に変化する』

「漆黒のレシラム、マリスよ・・闇から生まれし存在よ・・・君は何を望むの?」

マリスは僕を上から覗き込む。

真っ赤な目には野心と悪意が渦巻いていた。

『ボクは破壊を望む。ボクは欲する。全てをだ！』

その瞬間マリスの体から燃え盛る黒き炎が噴出する。

その炎は空中で闇の不死鳥に変わり、窓を突き破って外に舞っていった・・・・。

「君は僕から生まれた存在だ。破壊への衝動、か。その気持ちよく分かるよ。でも、エリカの計画を潰すまでの間だけ、大人しくしていてくれないか？」

僕はそっとマリスに近寄る。

『ジュン、お前は何を望む？』

「きまってるじゃないか。平和だよ。世界が平和であること・・・・」

『本当か？』

マリスの目とジュンの目が合う。

「本心だよ。だって世界が平和だからこそ、悪事を働ける。世界が秩序立っているからこそ、そのルールを破る甲斐もある。世界に正義の光が満ち溢れていてこそ、闇はその光をいっそう禍々しく、そして力強く光り輝くんだから」

ジュンが触れると、マリスはジュンの中に溶けて行った。

「黒きレシラム、具現化した闇。君の力を貸してくれ」

『ボクが飽きるまでの間だけなら、な』

「大丈夫だよ」

にっこりと笑う。

「だって僕といるほうが世界を壊すより面白いにきまってるからね」

＊＊＊＊

そしてその頃。

【スキエンティア】海上研究所の最深部の一室。

そこのテーブルには大きな地球の絵が描かれている。

その部屋にエリカは一人たたずんで居た。

「もう直ぐよ・・・」

エリカはそっと地球の絵に手を触れる。

「私の計画完成も直ぐそこ。【プロジェクト・キメラ】が真の成功を収めたとき・・・全ては私のものになる」

エリカの【プロジェクト・キメラ】のもう一つの目的。

パートナーであり、【スキエンティア】の大幹部であるレシラムに

さえ打ち明けていない目論見。

「人間ベースのキメラは【スキエンティア】の幹部等一部を除き、ある音波に反応する性質を持つ・・・この音波で人間ベースのキメラを自由に支配できる」

人間ベースのキメラ・・・人間とポケモンの平等化以外にもう一つ用途がある。

「特殊音波を各地の【スキエンティア】支部から流し、一糸乱れぬ軍団を作り上げる。そしてポケモン達の数の調整を行う・・・！」

人間とポケモンの平等化のためには、人間が力を持つだけでは足りない。

ポケモン達の数を減らし、人間達の力とつりあうようにしなければいけない。エリカはそう考えていた。

「そうよ・・・世界は私の下完全な平等を実現し、黄金の理想郷となる！【プロジェクト・キメラ】はポケモンと人間を完全な支配化におく事を目的とするのよ・・・」

「ふふふ・・・ポケモンも人間も自由なんか持つから不平等になるのよ。私の下で機械のように制御されていればいい・・・感情も要らない。自由、感情、命。これらの要素が世界の不平等を招くのよ。私が全てを支配すれば完全な平等は実現する！！！」

エリカがテーブルのボタンをカチリと押すと、中央から機械がせり上がってくる。

その機械からは地球の立体映像が映し出されている。

「もう直ぐよ・・・私の計画が完成する。私が権力を握り、全てが思いのままになる。究極の平等と理想郷が創り出される。そして―」

エリカはスッと両手を広げ立体映像の地球を手で覆う。

まるでその手に地球を収めているようだ・・・・。

「世界が私のものに！」

その一室では何処までも透き通った、それでいて狂気の高笑いが響いていたのだった―

第七十四話　生まれし闇「マリス」（後書き）

次回、レオン・ロザＶＳフォックのバトルが始まります。

第七十五話　レオン&ロザＶＳフォック　無限の業火

「光の剣雨」

フォックが手をかざすと、神々しい光の剣がレオンとロザに降り注ぐ。

「マジカルオーラ！」

ロザがレオンと自分を薄いエネルギー膜で包み、防御する。

「業火の弾丸（フレイム・バレット）！」

レオンが指先から炎の弾丸を連射する。

放たれた弾丸は爆発を起こし、辺りが煙で覆われる。

「・・・ヌルイな。聖霊の剣舞」

フォックは煙から突っ切ると、そのままレオンに切りかかってきた。

「っ！空撃（エアー・バレット）の弾丸！」

レオンはとっさに空気を圧縮した弾丸を数発、フォックにぶち込む。

空撃の弾丸はフォックの腹部で一気に破裂した。

「ぐ・・・」

そのまま後方へと吹き飛ばされるフォック。

「今よ。シャドーボール！」

ロザが追撃をしてくる。

「プロミネンスブレード！」

フォックはドラゴニックセイバーでシャドーボールをはじき返す。

「くそ・・・俺達の任務は完了済みって時に！業火（フレイム）の弾丸（バレット）、連射！」

レオンは両腕をクロスさせ、空中に無数の燃え盛る弾丸を発生させる。

「俺はファイヤーとのキメラ！炎・飛行タイプポケモンとのキメラ故に、操れる特殊技タイプも炎と大気！一気に潰してやるよ！」

燃え盛る弾丸はフォックに向かって、猛スピードで放たれた。

「甘い！」

ドラゴニックセイバーで、何と全弾をはじいてしまった。

「甘いのはそちらよ。マジカルボール！」

ロザは右手からエネルギー弾を放つ。

透明なマジカルボールはフォックの近くまで接近すると、急に色が変化し青い透き通った球になった。

「ほう・・・こいつは・・・」

フォックはマジカルボールの直撃を受けながらも、構えを崩さずそのまま後退する。

実はロザのマジカルボールは相手の直撃する瞬間に、相手の一番苦手なタイプに変化するのである。

今マジカルボールは水タイプに変化したのだった。

（水タイプ・・・ということはあのフォックとか言う奴は・・炎タイプあたりかしら・・）

ロザが現状を分析する。

攻撃型のレオンに対し、ロザは補助技やトリッキーな技で攻めるタイプ。

この二人のコンビは、【スキエンティア】でも最強に近い実力を持っている。

レオンはバサリと背中から生えた両翼で羽ばたくと、大空に舞う。

ロザもムウマージの特性浮遊を使い、宙に浮く。

「一気に決めるぜ。超圧の弾丸（プレッシャー・バレット）」

レオンが右手の人差し指をフォックに向ける。

そこから放たれた透明な弾丸はフォック付近で急激に体積を膨張。
周囲に大きな衝撃波が走ったのだった。

先ほどの「空撃の弾丸」の数倍から数十倍の威力を持ち、超圧で圧縮した空気を一気に元の体積に戻し爆発的な破壊力を与えるのだ。
ただ連射は出来ず、技の発生も遅いため接近戦や混戦の時には向かない。

「これで終了」

レオンはふうとため息をつく。が・・・。

「藍の流星！」

突如ディアルガの支配領域の上から、青い隕石が落ちてきた。

「倒れてなかったのね・・・シャドーボール！」

ロザは何とか青い隕石を迎撃した。

「今のは効いたぜ」

宙に舞うフォック。

その姿を見て、思わずレオンとロザは息を呑む。

「リザードンだと・・・」

先ほどまでの青年はリザードンに姿を変えていた。

頭のゴーグルと首のスカーフで同一人物であることが分かる。

（そうか・・・こいつも俺達と同じくキメラか何か・・・このディアルガの支配領域に入り込んでくる程だ・・普通の人間じゃねえと思っていたが・・・）

レオンの眼光が鋭くなる。軍人として培ってきた経験が、警告音を鳴らしている。

「ロザ」

レオンは何気なくロザの前に立つと、肩越しに話しかける。彼女にしか聞こえない程度の音量でだ。

「捕獲装置に捕まってるディアルガのところに行ってくれるか？」

「え・・それはいいけど。アイツはどうするのよ？」

「・・・俺が食い止める。お前にやって欲しい事がある」

「何？」

「ディアルガの宝玉を砕いて、その欠片を回収してマザーステルスを何時でも飛び立てるようにしておいてくれ。ディアルガの身体の一部さえあれば、十分に人間をキメラ化できる試料が得られる」

その言葉にロザの目が丸くなる。

「待って・・・ディアルガはどうするのよ！時の断裂からディアルガの支配領の道筋を割り出すのに私がどれだけ苦労したと―」

「分かってる！科学者のお前がどんな苦労でこの領域までのルートを割り出したかも、知っている！だが、あの赤髪リザードン野朗はディアルガを連れたまま逃げられるようなタマじゃねえ！お願いだ・・・ロザ・・従ってくれ」

「・・・分かったわ」

ロザは頷くと、一人捕らえているディアルガの元に向かったのだった―

「あの女、何をするつもりだ・・・」

フォックは疑わし気に一人戦線を離れたロザを見る。

「さてと、フォックって言ったな。・・・忠告しておく。俺達【スキエンティア】に逆らうのなら、容赦はしねぇ。今すぐ退きな」

が、剣をスッとレオンに向けるフォックを見るとため息をつく。

「退く気無しか。なら、全力で行かせて貰う。空撃の弾丸！」

「プロミネンスブレード」

フォックが剣を振るうと、発生した衝撃波がエアーバレットを全て打ち消してしまう。

「クソ・・・うざい技使いやがって」

「今度は俺の番だな」

フォックは呟くと、その姿を一瞬にして消した。

「ば・・馬鹿な。何処に行きやがった!?」

「聖霊の剣舞」

「っ!守る!」

レオンが咄嗟に防御するも、何とフォックは守るごとレオンを切り裂いてしまった。

「危ねぇ。防弾チョッキ中に着てなかったらヤバかったな」

レオンの戦闘服は胸からざっくりと裂けているが、中に着こんでいた防弾チョッキが刃から肉体を守ったらしい。

（こいつ・・・レベルが違う。一体何者だよ・・）

生唾を飲み込むレオン。今まで戦ったことのない強敵に、冷や汗が頬を伝う。

と同時にレオンは自らの足が竦んでいるのに気がついた。

（ビビッているのか・・・俺が・・・）

これまでＣＩＣの対テロ特殊部隊の隊長として幾多の死線を潜って来た。

だが・・・今回自らが戦っている相手は・・・これまでの相手とは格が違う。

（くそ！・・・俺は負けるわけにはいかねぇ。俺が負ければ、戦闘能力で俺より劣るロザも確実にやられる・・・俺は二度と愛する者を失いたくない・・・！）

飛び交う銃弾

目の前で途切れる命。

叫び、銃を撃った相手を憎み・・そして・・・大切な者を失い、自らが取り返しのつかない事をやってしまった事実。

・・・その家族に注がれた視線、憎しみと侮蔑のこもった感情の目・・・何時までも消えることのない二つの傷。

（もう少しなんだ！もう少しで・・エリカは約束してくれた！俺を苦しみから救ってくれると！）

レオンはチラリと下でディアルガの宝玉の一部の回収作業をやっているロザに目をやる。

（ロザ・フォール。俺の愛する女。俺はお前を守ってみせる！）

スッとレオンはフォックに向き直る。

その目にフォックは些か驚いた。

（固い意志が宿っているな・・・悪というよりは、強い信念か思いで動いているタイプか・・）

「俺の本当の力を見せてやる！」

レオンの頭上に光り輝くエネルギーが球体となって収束していく。

「ファイヤーは特殊攻撃能力に特化したポケモン。その力を得た俺の攻撃を受けてもらおう！！」

「無限の業火（インフィニティ・フレイム）！！」

突如、輝く球体は燃え盛る炎の獅子に姿を変え、フォックに突撃してくる。

「何度やっても同じだ！」

ドラゴニックセイバーで応戦するフォック。

が、剣で炎の竜を引き裂くと、業火は分裂し新たな二匹の炎の獅子となった。

しかも同じ大きさである。

「・・・分裂しやがった」

「残念だな。無限の業火はどれだけ防いだり、迎撃したりしても数を増やしていく。元の威力を保ったままな・・・無限に増加していく炎の獅子にその身を焼かれろ！」

二匹の炎のライオンがフォックに飛び掛る。

「光の剣雨！」

空から神々しい光の剣を降り注がせ、業火の獅子を串刺しにするフォック。

しかし、貫かれた獅子の燃える体がまた分裂し新たな業火のライオンが生まれた。

1体から2体。そして2体から4体に、まさに「無限」に増加していく炎の獅子。

（流石のリザードン野朗もこの技には苦戦しているようだな・・・）

レオンは下に眼をやる。

作業は佳境に入っているようだった。

「もう直ぐだな・・・」

そう呟くレオン。

＊＊＊＊

その頃、ロザはディアルガの胸の宝玉の一部の回収を急いでいた。

（キメラ技術はポケモンの身体の一部さえあればキメラ化することが出来る・・・この宝玉の一部を砕いてっと・・）

小型のハンマーで叩いていくとパキンという音と共に、ディアルガの胸の宝玉にひびが入り、欠片がロザの手のひらに落ちる。

小指の先より少し大きい程度の欠片だが・・・人間を一人か二人キメラ化するには十分な量だ。

ロザはその青く澄んだ宝玉の欠片を小瓶に容れ、しっかりとふたをするとマザーステルス内に入る。

連絡室のモニターをつけると、直ぐにエリカが映し出された。

足を組んで、怪訝そうな表情だ。

『ロザ、私に連絡してくるとはよほどの自体なのね?』

「ええ・・フォックとかいう意味不明なリザードン青年が私達の邪魔を・・・」

その言葉にエリカの眼光がスッと細くなる。

『邪魔?そちらにはレオンも居るはず。彼とあなたの力でも応戦しきれないとでも?』

「ええ・・・彼と戦いながらディアルガ本体を回収するのは不可能よ・・・でも、ディアルガの宝玉の欠片なら回収したわ」

ロザは小瓶に入れた青い宝石の欠片を見せる。

『なるほど。それだけあれば十分よ。ディアルガが私達の手に収まらないのは残念だけど、いいわ。帰還しなさい』

「了解」

ロザはそう言うと連絡を切る。

直ぐにマザーステルスのコックピットに上がると機体を操作し始めたのだった―

その頃。

フォックはレオンの「無限の業火（インフィニティ・フレイム）」に苦戦していた。

既に業火の獅子の数は１６体を超えている。

「どれだけ防いでも無駄だ！無限の増殖機能を持つ炎の獅子には勝てないぜ」

「ふう・・」

フォックがドラゴニックセイバーを構えなおすとため息をつく。

「どうした？もうお終いかよ」

「いや・・まさか時の力を使うことになるとは思わなかったからな」

（ん・・今時の力って・・だが、そんな力があるなら何故俺との戦闘で使わなかったんだ・・・・・ふん、ハッタリに決まってる！）

だがレオンの予想に反して、フォックは手をかざす。

「・・・業火の獅子よ！一気に燃やし尽くせ！」

16体の獅子、無限の業火がフォックに襲い掛かる！

「無効の時」

その瞬間、獅子達の動きがピタリと止まる。

そう・・・まるで「時が止まった」ように。

「馬鹿な・・・時を操るだと・・エリカが手に入れようとしている力を・・・安々と・・・マジかよ・・・」

「さてと、ここからが本番だ」

フォックはドラゴニックセイバーをスッとレオンに向けたのだった―

第七十五話　レオン&ロザＶＳフォック　無限の業火（後書き）

次回、フォックさんとレオン&ロザ戦に決着・・かも

第七十六話　出会う二人　闇ＶＳ光（前書き）

連続投稿です！

第七十六話　出会う二人　闇ＶＳ光

「時の力か・・・」

レオンが身構える。

「時の回復」

フォックの周りに柔らかなオーラが発生する。

「体力回復技か・・・だが、一気に押しつぶしてやるよ！無限の業火！」

レオンの雄たけびと共に業火の獅子が再びフォックに踊りかかる。

「甘い！無効の時！」

再び、無限の獅子の動きが止まってしまう。

（くそ・・・やっぱり無理か・・・）

レオンが内心焦りを感じていたとき・・・

マザーステルスが離陸をし始めた。

（ロザか・・よし！）

レオンは翼を広げると一気に加速しその場を離れる。

「あ、逃げるな！」

フォックが追撃しようとするが、マザーステルスから放たれたミサイルを防御している間にレオンは機体内に乗り込み、そのままマザーステルスは『時の断裂』を潜って逃げていってしまった・・・・。

「逃がしたか・・」

フォックは舌打ちをすると、ディアルガの元に駆け寄る。

ドラゴニックセイバーでディアルガを捕捉している装置を破壊すると、回復技「ホーリーヒール」を使いディアルガを回復してやる。

『・・貴公が私を助けたのか・・・』

ディアルガが弱弱しく言う。どうやら装置に捕まっているとき意識はあったらしい。

「あいつ等はアンタを狙っていた・・・ディアルガ、アンタの力を単に欲していたのか・・・それとも・・心当たりはあるのか？」

フォックの問いにディアルガが目をそむける。

『彼ら我々『神』と呼ばれしポケモンの力を使って何かをしようとしている・・・だが、その種をまいたのは私達かもしれぬ・・・』

ディアルガは思い返していた。

奴らは自分たちのことを知っているようだった。

あの事件以来、ディアルガは自分達に背いたレシラムとゼクロムの行方も気にしていた。
だが・・ゼクロムの気を感知することは出来ても、何故かレシラムの行方だけは不明のままだった。

・・・それと時を同じくして、パルキア、アルセウスが何者かの手のよって捕まった・・・。

もしかしたら気がついていたのかも知れない。

レシラムが今回の一連の事件に関与している可能性が高い事実に。

「話してくれるか？」

フォックが静かに言うと、ディアルガは頷き口を開いた。

自分達が人間達をこの世から消し去ろうとしていたことを―

＊＊＊＊

「ここで合っているの？」

同じ頃、一人の少年がイッシュ地方の海岸沿いを歩いていた。

色白の中性的な顔立ちのハンサムな少年、ジュンである。

『ああ・・ここから非常に強力な力を感じた。ボクの感知能力は神のポケモンにも匹敵する。間違いはない』

ジュンは自分の内側から聞こえてくる声の答えを聞き、空を見上げ

る。

ジュンと、マリスは今ブラウン少将の作戦のためにイッシュ地方に来ているのだ。

ユウタ達はイッシュ地方のＣＩＣ陸軍基地に居て、ジュンは海岸沿いを散歩しているところなのだが・・・。

マリスが『大きなエネルギーを感じた』と言うので、その場所まで来たのである。

「僕には何も感じないけどねぇ・・・」

『お前はアグノムに変身できるとは言っても普通の人間。感じなくて当然だ』

そうマリスは言うとスルリとジュンの体ら液体状の『闇』として抜け出る。

そして、姿を漆黒のレシラムに変えた。

「その姿好きだね・・・」

マリスはよくレシラムの姿に為る。

やっぱり外見は気になるよね・・・。

『ジュン、見ろ』

マリスが見つめている先の空には、何と大きな“穴”が出来ていた。

「あれは・・・！」

『あそこから巨大なエネルギーを感じる！・・・くっくっく、面白いことが起こりそうだ！』

驚いて見ていると、そこから大きな飛行機―恐らくは軍用機が大空に飛び出し彼方へと飛んでいった。

そして暫らくすると、その穴から一匹のリザードンが飛び出してくる。

頭にはゴーグル、そして首にはスカーフが巻かれている。さらには背中には大きな剣も背負っているようだ。

『くっくっく。ボクの感知は当たったな。奴だ・・・空間が揺れるほどのパワーを放っている。面白い・・面白いぞ！くくく』

マリスがくぐもった笑い声を立てる。

さらに驚くべきことに、そのリザードンは後方にディアルガを連れていたのだ。

ジュンは急いでマリスを体内に戻すと、茂みに隠れる。

ディアルガは相当弱っているらしく、地面に座り込み疲れた表情を見せている。

「ディアルガ、アンタ今の話を聞く限り相当調子に乗っていたようだな？・・・アンタだけじゃない。アルセウスもパルキアも。人間

をこの世から滅ぼすだぁ!?命は自分達のもの!?・・・そんなこと言ってるから今こんなことに為ったってことを自覚したほうがいいぜ」

そのリザードンは赤髪、つり目の青年に姿を変えながら説教をするように言う。

かなり怒っているようだ。

『・・・私も色々考えていた。私を捕らえようとしていた者達、そして貴公・・・過去にはゼクロムとレシラムの言葉に至るまで思い返していた。私は間違っていたのか・・・と』

ディアルガが搾り出す様に言う。

その言葉にジュンは驚きを隠せなかった。

(レシラム・・・確か、僕が研究所でキメラ化された時、中にいたマリスが始めて見たポケモン。どういうことだ・・・ディアルガと知り合いか何かなのか?)

『恐らく今回の一連の騒動にはレシラムが関っている・・・神と呼ばれしポケモンが居なければ同じ『神』を2体も捕まえることなど不可能だ・・』

「それは恐らくアンタの言う通りだろうな。で、三位一体の神を2体を捕獲することで、弱ったアンタを【スキエンティア】とか言う集団が捕まえに来たってわけだ」

(何だか話が複雑になってきたな。でも、今あの赤髪さんの言うこ

とから分かった事がある。それは【スキエンティア】が2体の神を手に入れていた、ということだ・・・）

ジュンの持っている情報そして赤髪つり目な青年とディアルガの会話でかなり事実が見えてきた。

エリカ達【スキエンティア】は既にアルセウスとパルキアを手に入れていること。

そしてマリスの記憶とディアルガの言動から、レシラムがエリカの協力者であることが確定した。

アルセウス、パルキアの次は時の神ディアルガを手に入れようとしていたことも。

（・・・3体の神を手に入れてエリカは何をしようとしているんだ・・？あ・・そう言えば・・・）

思い当たる節があった。

そう、かつてＵＳＡ2基地でエリカに言われたこと。

赤き痣の秘密と、人体実験を通してエリカは神の力がベースの人の体を蝕まないための・・刻印の進行による死を防ぐための薬品を開発している事を。

（まさかエリカは・・・アルセウス・パルキア・ディアルガの・・3体の神の力を己が見に取り込むつもりかも・・・）

僕と年の変わらない少女がそのような事を考えているとは・・・普

通なら信じられない。

しかし、エリカならば・・・あり得ることだ。

あの狂気の科学者ならば・・・。

ジュンがそこまで考えていると・・・。

「何時まで隠れているんだ?」

その青年が此方を見ながら腕を組んで問うてくる。

「ふぅん・・・凄いね。この距離から僕を見つけるなんて」

そう言いながらジュンは茂みから出る。

「・・・お前、その格好・・・」

フォックが目を細める。少し嫌悪感の混じった眼差しだ。

今のジュンの格好は師匠であるJと同じポケモンハンターの制服だ。

「・・・自己紹介をしておくよ。僕は氷室準。その反応からして分かると思うけど、ポケモンハンターさ」

「俺はフォックだ・・・お前さっきの奴らの仲間か?」

赤髪の青年、フォックの問いにジュンは笑顔で首を横に振る。

「いや。・・・恐らくは僕と君の敵は共通だと思うけど?」

「お前、色々知ってそうだな。なら、【スキエンティア】っつうのは―」

「知っているよ。もちろん。だって僕はそれとずっとっずっと戦ってきたからね」

ジュンは自分が経験してきた、エリカ達のことを全て包み隠さず話す。

その話を聞くと、フォックが暫らく黙った後口を開く。

「―お前と俺、手を組まないか？俺もディアルガやお前の言った事実、そして神々を捕まえ世界のバランスを崩すような行為をしている奴らを放っておくわけには行かないんでな。何より放置するには俺の正義が許さない」

「そうだね。でも、まずは・・・」

突如、ジュンの体から闇のオーラが抜けていく。

周囲に広がった『闇』は姿を、漆黒のレシラムに変えていく。

「そいつは・・・！？」

流石のフォックも驚いたのだろう。驚愕の表情でジュンを見ている。

「ああ、彼の紹介がまだだったね。この黒いレシラムは悪意（マリス）って言うんだ。僕の第二の人格にして、独立した存在」

フォックは恐らく無意識にだろうがドラゴニック・セイバーを構える。

「その闇・・・俺が払ってやろうか？」

『ハハハハ！お前にボクが切れるわけが無いだろう！？』

ジュンの横に鎮座している漆黒のレシラム、マリスがくぐもった笑い声を立てる。

「残念ながらこの闇はもう一人の僕。払ってもらう必要は無いよ。さて、フォックさん・・・君が僕と協力したいのなら、君の実力を見せて欲しい。それによって判断させてもらう。言い方は悪いけど、足手まといになるようなら要らないし」

まあ、【スキエンティア】からディアルガを守るほどの腕だ・・・足手まといになどなるはずは無い。

でも、見てみたい！

彼の実力を・・・『正義』とやらをね！！！

「いいだろう」

お互い、ジリジリと間合いを取る。

「行くよ！マリス、黒き疾風にその姿を変えよ！『マリシャス・ストーム』」

その瞬間、マリスの体が一瞬にしてレシラムから漆黒の竜巻となり

フォックを襲う！

「プロミネンス・ブレード！」

フォックが『マリシャス・ストーム』に変化したマリスを剣で払うように切る。

『へえ・・・その剣技・・闇を打ち消す力を持っているのか・・・くっくっく面白い。ならこれはどうだ！『マリシャス・ウェーブ』』

漆黒の竜巻から笑いのこもった声がする。

すると竜巻から、闇の波動がフォックを貫く。

「ぐ・・・」

聖なる剣技をもってしても、打ち消しきれない闇にフォックはダメージを受けてしまう。

「マリスは多種多様な技や形態に変化する事が出来る・・・そして、それらを使った攻撃は『普通の』攻撃ではない。自ら思考し、意思を持つ言わば『生きた』攻撃となる・・どうしましたフォックさん！僕は自分の信ずる『悪』を見せています！貴方の正義はこんなものではないはずだ！さあ、僕に見せてください！貴方の正義を！」

先ほどの戦い。マリスが反応するほどのエネルギーが放出されていたということは・・・フォックさんはかなりの強者・・・。

【スキエンティア】からディアルガを守ってしまうほどの・・

ジュンが念じると、マリスは竜巻から再び漆黒のレシラムへとその姿を変えた。

『くっくっく・・・喰らえ！クロスダークネス！』

マリスが黒き闇の塊を上空から発射する。

クロスダークネスはフォックの居た場所に命中、黒いエネルギーが辺りの木々をなぎ倒す。

『なんだ、あっけない。ボクはまだまだ壊したりない』

こんなものではないはず・・・。

ジュンは地上から冷静に観察する。

すると・・・

煙を突っ切り、何と一匹のリザードンが飛び出してきた。

頭にはゴーグル。そして首にはスカーフを巻いている。

フォックは空中のマリスにドラゴニック・セイバーの一撃を加えようと、剣を振り上げる。

「おっと・・・マリス、僕の元に戻れ」

ジュンがそう言って、自身の体内にマリスを戻したのとフォックがドラゴニック・セイバーで切り倒そうとしたのは同時だった。

「ち・・上手く回避したな・・」

フォックはリザードンの姿のまま地上に降りる。

「流石ですね・・・あの一撃を回避してカウンター攻撃をするとは」

ジュンはニッコリと笑いながらパチパチと拍手をする。

「楽しいです。ええ、非常に楽しいバトルです・・・」

「俺もだ」

お互いに互いの力を認め合うジュンとフォック。

「しかし、僕は負けず嫌いでね・・・貴方の正義が強ければ強いほど倒しがいがあります」

「俺も負けるのは嫌いだ・・・だが、お前にはいつも以上に勝ちたいと思うぜ」

間合いをつめていく二人。

「マリス、黒炎の不死鳥だ」

『OK・・だが、お前の体力もいただくぞ?』

「いいよ。悪魔と付き合うには代償が必要・・そしてだからこそ面白いんじゃないか」

『くっくっく・・・ジュン、お前は何処までもボクを飽きさせない

！！いいだろう、ボクの力を存分に使うがいい！』

マリスはジュンの体から出ると、その姿を変化させていく・・・。

黒き焔の・・・神鳥。

そう、ジュンの必殺技『黒炎の不死鳥（フェニックス・オブ・ダークフレイム）』だ。

以前、マリスとコミュニケーションを取る前は『剥奪する闇』から“進化”させる必要があった。

しかし、今覚醒したジュンにはその前段階を踏む必要は無い。

何故なら、ジュンとマリスはお互いに魂のレベルで通じ合っているから。

ジュンはマリスに“快楽”と“心の闇”を与え、マリスはジュンに“力”を与える。

「なるほど・・・黒い焔の不死鳥か・・・なら俺も全力で相手になるぜ！」

「『さあ、僕（ボク）を楽しませてくれ！』」

ジュンとマリス、二人の声が重なったのだった―

第七十六話　出会う二人　闇ＶＳ光（後書き）

主人公同士が夢の（？）対決です！

第七十七話　ジュンVSフォック　ディアルガの思い

「黒炎の不死鳥だと・・」

フォックが唖然として見つめる。

それもそのはず。僕の頭上には漆黒の業火の体を持つ不死鳥が羽ばたいているのだから。

『くっくっく・・・ジュンの想像力が生み出した、ボクのもっとも強力な形態。それが『黒炎の不死鳥（フェニックス・オブ・ダークフレイム）』だ。この姿はジュンの燃えるような悪がボクに与えたもの・・・さぁ、その身に受けるがいい！』

神鳥は羽ばたくと、フォックに突進してきた。

「く・・・」

フォックはドラゴニック・セイバーで応戦するが、剣は不死鳥を切ることは出来なかった。

そのまま漆黒の炎に焼かれるフォック。

「ぐ・・・う・・・」

かなり苦しそうだ。だが、その目には強敵と戦っている時の・・光が宿っていた。

『ハハハハハ！この形態のボクに物理攻撃は通用しない！』

「貴方の剣技も効きません」

「なら・・」

一気にフォックは空へと駆け上がる。

「不死鳥よ」

ジュンが手をかざすと、『黒炎の不死鳥』形態のマリスは一旦ジュンの傍に寄り添う。

「僕の体力をさらに君に与える。一気に攻めるよ」

『いいだろう・・・お前もフォックもボクを飽きさせない・・・お前の力を糧に、闇を存分に味わうがいい！』

ジュンから体力を吸収し、肥大する不死鳥。羽ばたき、フォックと対峙する。

流石に・・・この体力を削られる感覚は慣れないな・・・。

ジュンもアグノムに変身すると、マリスの横に浮遊する。

今更アグノムに変身したところで驚かないのか、フォックは頭をポリポリと掻くとため息をついた。

「俺も、ちょっと本気を出すか」

フォックが手をかざす。

『どんな小細工もボクには無意味だ！』

不死鳥形態のマリスは甲高い笑い声を立てながら、再びフォックに襲い掛かる。

「無効の時」

刹那、マリスの体がピタリと止まる。

「・・・・マリス、どうした？早く―」

『体が・・動かない・・』

マリスが珍しく戸惑った声を出す。

「無駄だ。マリスの周囲の時を停止させた。もう動けないぜ」

「そうか・・これだマリスの言っていたパワー。ふふ・・・」

心のそこから笑いがこみ上げてくる。

そうだ・・・いいよ、素晴らしい！

「何年ぶりかな・・ポケモンハンターとしての感覚をここまで研ぎ澄まされたのは！！」

ジュンはモンスタボールを投げ、ボーマンダを繰り出す。

そして人間の姿へと戻ると、鞄からハンター専用の特殊バイザーを掛ける。

「ほう・・・確かお前はポケモンハンターだったな。原点回帰ってところか？」

「まさにその通りですよ！マリス、ちょっとそこで固まっててね・・・フォックさんは僕の獲物だ！」

ジュンはボーマンダに飛び乗ると、利き手の右手の手首辺りに石化装置（キャプチャー）を装着する。

『ジュンのその姿見るの暫らくぶりだな』

ボーマンダが首を捻って此方を見てくる。

そうだ、ここ暫らくはハンターとしての活動をしていなかったからね。

キュウコンのオパールを捕獲してからか・・・。

「ボーマンダ、頼むよ」

『おう！』

ボーマンダは一気に旋回する。

僕は右手のキャプチャーの照準をフォックさんに合わせる。

キュイン

一筋の石化レーザーがフォックを襲う。

「無効の時」

「ボーマンダ！回避だ」

フォックが手をかざし、レーザーと僕達の両方の時間を止めてこようとするが・・・。

どうやらジュン達は無効の時を回避したらしい。

「やっぱり近距離戦でいくか！」

フォックが急激に空中を舞い、此方に接近してくる。

カチリ

再び照準を合わせる。

キュイン

石化レーザーを放つが、またしても防がれてしまう。

『すばしっこいな・・・』

ボーマンダも驚愕している。

ふぅん・・・なるほど。この程度の攻撃は見切ってるわけね・・・。

でも、僕はプロのポケモンハンター！

獲物（ポケモン）が強ければ、強いほど狩る意味があるってものさ！

石化装置（キャプチャー）の側面のメモリを回し、連射モードにする。

キュイン　キュイン　キュイン

放たれる石化レーザー

が、フォックは技も使わずその全てを回避する。脅威の飛行テクニックだ。そして一気に此方に詰め寄ってくる。

そうだ・・・もっと近寄っておいで。

僕は手の中の煙球をギュッと握る。

君が接近戦を仕掛けるタイプであることは、計算済みさ。

フォックがドラゴニック・セイバーを振り上げる。

今だ！

僕は一気に煙球を投げ、辺りに煙幕を張る。

そして、ボーマンダから飛び降りるとアグノムの姿に変身しバイザーのスイッチをオンにする。

このバイザーはサーモグラフィ機能も装備している・・・つまり煙の中でも相手の輪郭をその体温から知る事が出来るのさ！

バイザーにリザードンの輪郭が、はっきりと写る。

カチリ

キャプチャーを構え、照準を合わせる。

キュイン！

一筋の石化レーザーが煙の中に入り・・・。

リザードンの石像が地面に落下、ゴロンと転がる。

僕は地面に降り立つと、人間の姿に戻る。

「ははは・・・やったぞ。勝った」

ジュンは石化したフォックの近くにより、満足げに頷く。

「僕の勝ちですね。フォックさん」

「それはどうかな」

突然、声がする。

驚いて石像の方を見ると、石像はザラザラと崩れてなくなってしまった。

「馬鹿な・・・」

「俺の―」

そして上空から煙を突っ切り一気に接近してくるリザードン、フォックの姿が！

「く・・」

慌ててキャプチャーを構えるも・・・

「勝ちだ！」

ジュンが気がついた時にはフォックはドラゴニックセイバーを自分の喉下に当てていた・・・。

「忠告しておく。接近戦ではその手の武器より、刃物のほうが確実だぜ？」

「・・・影分身ですか」

フォックがこっくりと頷く。

「お前が煙球を投げてきたとき、キャプチャーでの石化を狙ってくるのは読めていた。だから、石化レーザーが当たる前に影分身を作っておき、そいつを身代わりにしてお前を油断させたのさ」

「流石です。フォックさん」

フォックは快活に笑うと、人間の状態に戻った。

そして・・。

ディアルガの方を振り向く。

『貴公は強いな・・・さてと、私は少し疲れた。・・・支配領域に戻ると―』

「待てよ。アンタの説教は終わってないぜ？」

『私に？しかし先ほど過ちを認めたでは―』

「アンタ、自分がどれだけの災いの種を蒔いたか分かってないようだな。アンタ等神々が人間滅ぼす計画を立てたせいで、レシラムは危険思想を抱き、結果的にこの世界のバランスは崩れようとしている・・・」

と、言いつつフォックはドラゴニックセイバーを構える。

その燃え立つ怒りに気おされ後退するディアルガ。

すでに神の威厳など消えうせている

『ま・・・待て！私ばかり悪者にしてもらっては困る！アルセウスが元々立てた計画なんだ・・おい、何故剣を構え続ける・・・アルセウスが主導でやっていたことなんだ！私はそれに少し協力していただけでだな。全部悪いのはアルセウスってことで手を打つのはどうだ・・・なんだその目は・・おい、近寄らないでくれ・・』

ディアルガの言い訳がましい発言がフォックの怒りにさらに油を注いだことに、ディアルガ自身が気がついたがあとの祭りだった。

「言い訳をするなぁぁぁぁ！！！」

『待ってくれ！悪いのは私じゃなくてだな・・・分かった！私にも責任があるのは認める！だから許し・・・待て待て待て！話せば分か―』

その後、ディアルガはフォックに叩きのめされたのだった・・・・。

＊＊＊＊

「大丈夫ですか」

ジュンは海岸に打ち上げられた鯨のようになっているディアルガに声を掛ける。

フォックお得意の炎技で焼かれ、既に焼きディアルガになっている・・・・。

『う・・・なんとか・・・・』

「人間を滅ぼそうとか考えるからこんなことになるんですよ。少しは懲りましたか？」

『懲りた・・・本当に懲りた。・・・すまんな、少年』

ディアルガが涙目に為りながらジュンを見る。

『私は間違っていた。あの青年に言われる前からうすうす気がついていた。しかし、自分に言い訳をしていたのだ・・・私の周りには付き添いのポケモン達が大勢いた』

ディアルガはスッと空を見上げる。

『しかしその全員が私に取り入ろうとする者達だった。私がどんな考えを述べても、絶対に否定しない者達ばかりだったのだ。私は何時しか、その者達が本心を隠して取り入ろうとしているだけなのだという事実を忘れ、傲慢になっていった・・・・』

「ずっと自分の考えを否定された事が無かったのですね・・・」

『そうだ。私は自分の考えが絶対的に正しいと思い込むようになって言った。周囲は賛成するばかりだからな。・・・私は何と言う愚か者だったのだろう!!今、心底気づかされた・・あの青年と君によって』

砂にポトリと涙が落ちる。

『噂によれば、ポケモンの研究をしている謎の集団のボスは一人の少女であると・・・そして、レシラムは数世紀に渡りホワイト家の人間と関係を築いてきたと聞く。ホワイト家は、数年前に謎の落下物によって一人の少女を残して家族全員が死亡したという事を耳にした事がある。それが、ジュン、君が語ってくれたエリカならば・・・符号は一致する』

ディアルガは大きなため息をつくと再び話始める。

『私達とゼクロム、レシラムの戦闘によって・・・恐らくその力によって空間に穴が開き、私達のうちの誰かの技が地上に被害を与えていたとしたら・・・そしてその一番の被害者がホワイト家最後の生き残り、エリカであったとすればすべて説明がつく。お前の中のマリスが語ったエリカと並ぶレシラムの話を聞いて、確信が出来た。恐らく、レシラムとエリカが今回の事件の首謀者。そして、その災

いの種を蒔いたのは私達なのだとしたら・・・・恐ろしいことだ・・・本当に・・・恐ろしい・・・・』

ディアルガの大きな体が震えている。

ジュンはただ静かに黙ってその場に立っていた。

『・・・私は全地球の管理者の一人だった。それゆえ、この地球上の全ての生命は私達の管理下にあると・・・考えていた。だが、一人の少女の計略で・・この様だ。まさに身から出た錆だ！馬鹿なことだ・・・何が管理者だ！何が支配者だ！何が“神”だ！私は生まれてからの長い年月、何も学んでいなかった！本当に何も！・・・挙句の果てに、神々は捕らえられ、私の力も絶対的に弱くなってしまった・・・私は自分が恥ずかしい』

悲痛な表情で、語るディアルガ。言葉の端々に悲哀が感じられる。

「自分が恥ずかしいなら、変わればいい」

フォックが地平線を見ながら振り向かずに言う。

「世の中に変われない奴なんて居ない。どんな救いようの無い悪党でも、変われる。俺は異世界の旅人として色んな奴と会ってきた。変われない奴は居ない・・ああ、絶対にな。ま、その前に悪い奴にはお仕置きはしておくけどな」

『貴公のような青年に教えられるとは何たる皮肉か・・・』

ディアルガはスッと目を閉じる。

『・・・私の体力ももう持たない。【スキエンティア】とやらが来ても来なくても、一度スリープ状態に入らなければならない状態だったのだからな』

「ディアルガ、貴方が眠りにつけば・・・世界のバランスは崩れるのですか？」

ジュンの問いに、ディアルガは静かに否定する・

『いいや。私はこの世界の各地に、私自身の力の一部を浸透させてある。私が眠りについてもその残存した力が暫らくは支えてくれる・・・。今の私にはそれぐらいしかできることは無い。だが、それはもって1ヶ月程度。それを過ぎれば、『神』の支えを完全に無くした世界は揺らぐ。天変地異に大災害が起こるはずだ・・・』

「手は無いのか？」

フォックの問いにディアルガは首をゆっくりと横に振る。

『アルセウスとパルキアを開放すれば、私が居なくともあの2体が世界を支えてくれるだろう・・・私が次に目覚めるまでの間ぐらいは優に保てるはずだ・・・』

ディアルガの体が光を帯びてくる。

『フォック、ジュンよ・・・お前達とはもう少し早く会いたかった・・・次に目覚めるのは数年後か、数百年後、それとも数ヵ月後・・・それは分からない。だが、しばしの間お別れだ。・・・目覚めたら、私も責任を取らなければな・・・どのような形で取るかは・・分からないが・・・』

ディアルガの姿が光の粒子となり、消えた。

そして宙にディアルガのコアである金剛玉が浮かび、そのまま空間に溶け込んでいったのだった―

「時の神か・・・ディアルガは変われたのかな」

「変われたさ。さぁ、ジュン。お前の仲間の元に案内してくれるか？顔合わせをしておきたい」

「分かりました」

ジュンとフォックは歩き出した。

ん？でも何か忘れているような・・・

『ボクを置いていかないでくれるか？』

ひんやりとした言葉の方向に振り返ると、マリスが『無効の時』で固まったまま不機嫌そうにしていたのだった―

＊＊＊＊

同時刻。【スキエンティア】海上研究所では・・・。

「痛っ！ロザ、もっと優しく塗ってくれ！痛ってぇぇ・・・」

レオンがロザに治療を受けていた。上半身裸で、筋肉質な体のあちこちに傷が出来ている。

「何言ってるの！骨が折れてないだけ奇跡よ・・・それにしても」

ロザがレオンに包帯を巻きながら、ため息をつく。

「ディアルガ捕獲にまさかの邪魔が入るとはね」

「俺達を圧倒するあの力・・・フォックとか言ってたな。あのタイプはまた必ずせめて来るぜ・・・対策が必要だ」

「大丈夫よ。私に考えがあるわ。エリカと共に開発していたある装置を使えば、対策出来ないこともないわよ」

「さすが、ロザ。科学者様は賢いな」

レオンが茶化すとロザは顔を赤らめる。

「・・・私もレオンが居てこそ頑張れるのよ」

「俺も、愛する女の為に生きているんだぜ？」

そして、レオンとロザはお互いに見つめあう。ロザはレオンの体に手を回し、レオンもまたそうしてロザを抱き寄せる。

「レオン・・・」

「ロザ・・・」

互いの唇がゆっくりと近づき、重ねあおうとしたまさにその時―

「お～熱々やなぁ」

ニヤけながら入ってきたのは、色黒の青年アキラ。

ロザとレオンはその姿を見た瞬間、磁石の同極のように離れた。一気に水を注されたことで二人はアキラを睨んでいる。

「愛し合っているところ悪いけど、自分らが退却しなきゃならん程の実力を持った奴のこと、俺も聞かなあかんねん。レオン、それにしてもボロボロやなぁ・・・どんだけ手ひどくやられたん？」

ニヤニヤしながら近づいてくるアキラ。レオンは鼻を鳴らすと忌々しげに言う。

「笑い事じゃねぇよ！俺達の邪魔をしてくる奴が現れたんだ！」

「自分をそこまで追い詰める相手なんか？」

アキラの問いにロザも深刻な表情で頷く。

「ええ。時の力を保持しているわ。時間を操れるのよ」

「ほぇ～随分とまたヤバイやっちゃなぁ・・・」

アキラが驚いていると、部屋にアナウンスが流れた。

『火野輝（ひのあきら）様、レオン・Ｊ・ホーガン様、ロザ・フォール様。至急会議室にお越しください』

「召集かよ」

「そうみたいね」

「なんか久々に本名呼ばれたわ・・・」

そう、アキラの本名は「火野輝」なのだ。

三人は各々部屋を出て行く。

そして・・・。

「来たわね」

会議室には白衣の少女にして【スキエンティア】ボス、エリカが足を組んで座っていた。

「俺達に用か？」

レオンの問いに薄っすらと微笑むエリカ。

「ええ。ロザが回収してくれたディアルガの宝玉の破片は今、培養液に入れているわ。そして・・・」

エリカが大きな丸いテーブルに世界地図を広げる。

「ついにウィルスのエアロゾル化に成功したわ。今ミサイルの弾頭にウィルスを積み込んでいるところよ。・・・数日後にはミサイルの発射準備が整う手はずよ」

「いよいよだな」

レオンが腕を組みながら感慨深げに言う。

「世界は変革のときを迎えるのね」

ロザは世界地図を指でなぞる。

「一発の弾頭には、中に12発の子弾頭が詰まっている。そしてその子弾頭には人間をポケモンのキメラ化する、キメラウィルスが注入されている・・・ミサイルは全部で8発。つまり世界の主要都市96箇所にウィルスをばら撒けるわけか」

「それだけ撒けば世界の殆どの人間をキメラ化できるやろうな」

「ええ・・・そして異変に気づくまでに保菌者(キャリア)となった人々は各地に動きさらに感染者を増やしていくわ・・・そうすれば、人間とポケモンの関係は新たな局面を迎える。人間とポケモンは究極の平等を手に入れるのよ!さぁ・・・今こそ世界変革の最終章の幕開けとなる!世界は生まれ変わるのよ!」

アキラ、レオン、ロザ・・・そしてエリカ。

今、この四人は世界の命運を握っているのだ。

レオンは救いの為に

ロザは追随のために

アキラは愛のために

エリカは支配と再構築のために

動き出そうとしていた―

第七十七話　ジュンＶＳフォック　ディアルガの思い（後書き）

いよいよ最終章の幕開け・・かも

第七十八話　予想外の離脱

「・・・・で、君が連れてきたその青年が我々に協力してくれると？」

ここはイッシュのとあるホテル。

そのロビーで、イーブイのブラウン少将がジュンの連れてきた青年、フォックと対面していた。

非常に疑わしげな目で品定めするようにフォックを見ている。

「俺の名前はフォック。異世界の旅人だ」

「・・・ほう・・・旅人な・・・」

ブラウン少将は『異世界の旅人』というワードにさらに疑惑の念を深めたようだ。

揺れ動く尻尾のリズムが遅くなっている。色々と思考している時の証拠だ。

「一応、君の身分を証明する何かを見せてくれたまえ」

といって前足を催促するように差し出す少将。

「そんなものはねぇよ」

「は？」

フォックがケラケラと笑い、ブラウンの目が点になる。

「だって俺旅人だからな。次元を渡り歩くのに、身分なんか必要ねぇし」

「・・・いいだろう。この作戦には出来るだけ多くの戦力が必要だ。君の力量を見せてくれたまえ。それによって判断させてもらう」

少将の言葉にフォックはニヤリと笑う。

「いいぜ。で、誰と戦えばいいんだ？」

「我々ＣＩＣ情報部きってのエースと戦ってもらう。クー准尉」

ブラウンは横に控えていたクーに声をかける。

「はい」

「・・・ファオ曹長をこのホテルに隣接しているバトルフィールドに呼べ」

「了解しました」

その後、ジュンとフォックはバトルフィールドで待機していた。

（ファオさんか・・あの男色家でちょっと暑苦しいバシャーモがどれだけの実力を持っているか・・楽しみだ）

ジュンは腕を組みながらファオの到着を待つ。

「ちわっす！」

軽いノリで入ってきたのは・・Ｃバシャーモのファオ曹長。

軍服姿である。

（というか、クーさんもそうだけどホテルで軍服はどうかと思うんだけどね・・・）

ユウタの件も考えると、軍人にとって一番落ち着くの服装なのかもしれない・・・。

Ｔ・Ｐ・Ｏを心得て欲しいものだ。

情報部なのに目立ちまくりである。

「少将直々の召喚ですっげぇ緊張しますねぇ！」

とまるで緊張していない口調で、軍帽を脱ぐとファオはフィールドに立つ。

「で、アンタが俺の相手かい？」

ファオは何気なくフォックを見る。

何時ものようにナンパしないところを見ると、タイプではなかったのだろう。

「俺はバシャーモのファオ。階級は曹長だ、よろしくな」

ファオはフォックに近づき、握手を求める。

「こちらこそ」

「アンタが俺達と協力してプロジェクト・キメラを叩き潰そうとしている意気込みは嬉しい。だが、これは危険な戦いだ・・・実力が無ければ退いてもらう。それがアンタのためでもあるからな」

ファオが何時に無く真剣な表情で言う。

「ああ・・・」

ファオとフォックは互いにフィールドに立つ。

「先手必勝！ブレイズキック！」

ファオが一気にフォックに飛び掛る。

「早いな・・・」

フォックは冷静に背中のドラゴニックセイバーでファオの蹴りを受け止める。

「なら」

が、そのままファオは開いている右足で、フォックに一発ぶち込む。

そして一瞬フォックが怯んだ隙に、スカイアッパーを決めた。

「くそ・・・」

「長い剣はこういうとき不利だぜ?」

ファオが軍服の胸ポケットからナイフを取り出し、構える。小型のダガーナイフだ。

(あれ、ファオさんってあんなに強かったっけ?というかカッコいいかも・・・ちょっと見直したよ。単なる軽いノリのホモじゃなかったんだねぇ)

ジュンは一人で納得する。

バトル時のファオの姿は勇ましく、いきいきとしていた。

「なら、こちらも本気を出させてもらう!」

フォックがリザードンに変身する。そのまま空中に駆け上がる。

その光景に一瞬ファオが唖然とするが、面白そうな表情を浮かべる。

「空中戦か・・・ならブレイブバード!」

何とファオは一気に跳躍し、フォックと同じ高さまで飛んだ。

「マジかよ!?」

ファオはナイフの柄の部分でフォックの腹に一発、そして頭に踵落としを一発ぶち込んだ。

「ぐう・・・」

だが、それでフォックは地面に叩きつけられたが、そのまま飛び起きる。

「光の剣雨！」

フォックが神々しい光の剣を雨を降らす。

「甘い！」

ファオは光の剣を次々を回避し、フォックに近づく。

「聖霊の剣舞」

フォックは剣で接近するファオに応戦しようと構える。

カキン

響く金属音。

ファオのナイフとフォックのドラゴニックセイバーがぶつかり合う。

「やるな・・・フォックとか言ったか？正直俺についてこれるとは思わなかったよ」

「アンタもさすが軍人ってところかな」

ジリジリと鍔迫り合いが始まったところに

「そこまでだ」

ブラウン少将の一声がかかり、ファオとフォックが離れる。

「ファオ曹長、わざわざすまんな」

「いいんすよ」

ファオはナイフを胸ポケットしまうと、軍帽を被った。

「さて・・フォック君。君の実力を見せてもらった。ん、まあここまでとは思っていなかった。我々との協力を願いたい」

「もちろん」

ブラウン少将の言葉にフォックは笑って答える。

「盛り上がってるな」

と、そこにユウタとイクスが入ってきた。彼らも軍服である。

「あ、中尉～♪」

ファオはユウタを見るなり、ダッシュで近寄っていく。顔をしかめるユウタにファオはオーバーな身振りで喋る。

「俺の戦い見ててくれました?」

「ああ、上のガラス張りの観客席から見えていた」

ユウタは素っ気無く言う。

「褒めてくださいよ～俺、頑張ったんですから」

ファオはニコニコしながらユウタの体に手を回す。

「ファオ、お前は上官に対する猥褻行為で軍法会議に掛けられたいのか？」

「猥褻行為なんかじゃないですよぉ。心温まるコミュニケーションじゃないですか」

先ほどの戦士の表情から打って変ってユウタにベタベタと懐くファオをフォックはただただ呆然と眺めていた。

「黙れ万年発情期！お前はいかん。年中それだ！引っ付くな暑苦しい！」

ユウタがファオをうざそうに振り払うが、ファオはそれで傷つく様子は無く逆に喜んでいるようだ。

「ファオさんは男色家で・・変態チックな所があるんです」

ジュンはフォックに囁く。

「なるほど・・・」

フォックも納得したように頷いていた。

「あっと自己紹介が遅れたわね。私はサーナイトのイクス准尉。よ

ろしくね」

イクスが手がフォックと握手をする。

「俺も自己紹介をしなきゃならんな。俺は川神雄太。イプシロンと呼んでくれ。階級は中尉。よろしく」

ファオを振り払ったユウタはイクスに続きフォックと握手を交わす。

とそこまで互いに顔合わせが終わるとフォックは腰のボールに手を伸ばした。

「出て来い、ウィア」

モンスターボールから出てきたのは、ロイヤルポケモンのジャローダだった。

「こんにちは、皆さん。僕はジャローダのウィアです」

「イッシュ地方のポケモンか・・・始めてみたな・・」

ユウタは驚いた表情でウィアを見る。

「で、そろそろ他の仲間も来る頃だ」

フォックが言ったのと同時に、ホテルのバトルフィールド施設に二人の人物が入ってきた。

一人の青年は白いローブと白髪で、手には杖腰には剣をぶら下げている。

もう一人の青年のほうは黒服に赤い目のヤンキーのような外見で、背中には斧と槍を背負っている。

そのホテルの雰囲気とあまりに場違いな二人組みに従業員や客が如何わしげな視線を投げかけている。

「・・・・これが君の仲間・・かね？」

ブラウン少将が言葉に詰まりながらフォックに尋ねる。

「そうさ」

「お初にお目にかかります。私はフォックの仲間で、レシラムのハクラン。今は人間形態をとっています。よろしく」

「同じく俺はゼクロムゼサロの。ま、よろしくな」

で、とザセロが後ろを向く。

どうやらバトルフィールドにゼサロとハクランの後ろからついて来ていたようだ。

一匹はモグラ系ポケモン、ドリュウズ。そして化け狐のポケモン、ゾロアーク。最後尾は二足歩行のドラゴンポケモン、オノノクスだ。

「君達もフォック君の仲間かね？」

少将の問いにドリュウズが頷く。

「俺はドリュウズのドリュ。で、後ろに居るのがゾロアークの姉さん。それで一番後ろのがオノノクスのアック」

ドリュウズのドリュが爪でメンバーを指し示す。

「なかなか豪勢な軍勢が集まりましたね・・・」

クーが目を丸くしながらフォック達に目をやる。

「まあ、全員なかなかの強者揃いのようだ。よし、では一同私の部屋に集合してくれ」

ブラウン少将の部屋にジュン達が向かう。

『面白い面子が揃ったな』

途中僕の中でマリスがくぐもった笑い声を立てる。

「ああ・・・ドリュウズにジャローダにゾロアークにオノノクス。イッシュ地方でも珍しいポケモンばかりだ」

『どうする？捕獲するのか？』

「・・・いいや。まずはエリカとの戦いが優先だからね」

まあ、終わってから・・・みたいなことは考えてなかったわけじゃないけどね。

フォックさんを敵に回すのは大変よろしくなさそうだ。

ジュン達はブラウン少将の宿泊している部屋に入る。

ホテルの最上級のスイートルームだ。

「さて・・」

ブラウン少将はベッドの上に飛び乗ると、脇においてあった鞄から一枚の地図を取り出して上に広げる。

「ここに【スキエンティア】の本部と推測できる海上研究所の地図がある。地図の中央の大きな孤島が海上研究所の場所だ」

少将が前足でポンポンと孤島の場所を叩く。

「そして、この周囲には常にＵＳＡ２の海上警備艇が巡回しており、内部にも警備兵が配備されている」

前足の爪で孤島の周りに円を書くように示す少将。

「侵入はかなり難しいですね。外には警備艇、中には兵員ですか・・・」

ユウタが重い表情で地図を睨む。

「しかも相手はエリカ達。一体どんな罠があるかを考えると・・・」

クーもため息混じりに呟く。

「だが、海上からの侵入の目処は立っている。私の古い友人達が海のポケモン達と連携してくれる手はずだ。問題は内部のＵＳＡ２警

備兵だが・・私に考えがある」

ブラウン少将は静かに言う。

「中の警備兵達にＵＳＡ２がこれまで行ってきた数々の真実。テロリスト達との自作自演の戦い。軍が捕縛したテロリストや他軍の人間そして幾多のポケモン達をキメラ研究の生体実験に使用し、殺してきた事実。そしてエリカ達と協力してポケモンから作られるキメラの兵器利用を目論んでいる事を話、此方が入手した資料と証拠を彼らに提示し、こちら側に協力させる」

その発言にしばし、その場が静まり返る。

真っ先に口を開いたのはユウタだった。

「待ってください！我々が入手した証拠と事実をＵＳＡ２警備兵に見せれば、証拠隠滅の為に襲って―」

「では聞くが、イプシロン中尉。君が彼らの立場だったとして自分が信用していた軍が自分たちを利用し利益を得るためだけに戦争をやっていたと知ったらどう思うかね？」

「それは・・・非常にショックです・・」

「そうだ！腐りきった上層部はともかく現場は各々正義と信念を持って戦っている。私達もそしてＵＳＡ２も。しかし、それらが全て嘘と虚構で塗り固められたお芝居だとしたらどうだ！？自分たちが命を賭けた戦いは実は軍の利益誘導と権力保持のためでしかなかったとしたら・・・現場の兵士は動揺し、ショックを受ける。そう・・・自らの保身など二の次になる。まあ元々保身を考えるような奴は

軍にはあまり居ないがな」

「なるほど彼らに事実を提示し、動揺しているところに我々の側につくように説得する・・・」

クーの言葉に少将も頷く。

「ああ。彼らは自らの信じていた全てを一瞬で失い、動揺と悲哀に心が満ちている。そこに我々の言葉が効果を発揮する。『プロジェクト・キメラ』を打ち倒し、軍の陰謀を白昼の下にさらすことでしか軍を真の意味で救うことは出来ない、と言ってな」

その説明に皆が感心の声を上げる。

約一名を除いて。

「さて、そろそろ友人の準備も済んでいるだろう」

ブラウン少将は壁にかけられた時計に目をやる。

「では出発の準備を―」

「嫌だよ」

ファオの言葉を遮り、震える声がする。

その声の主は・・・ジュンだった。

「僕はＵＳＡ２と協力するなんて絶対に嫌だ」

「・・・ジュン、過去にあの軍と色々あったのは知っている。だがあれは空軍だ。それに警備兵には何の関係も―」

「僕は彼らが嫌いなんだ・・・正義を振りかざして人を殺すような奴らと協力は出来ない！もし、君達がその案を進めるのなら・・・」

ジュンは一息ついて言い放つ。

「僕は降りるよ」

「っ！ジュン！お前何言って・・・」

ジュンは黙ってそのまま部屋から出て行ってしまった・・・。

（ＵＳＡ２と協力？僕はゴメンだね・・・元々軍人は嫌いだけど、彼らは僕にとって最も忌むべき存在・・。僕は彼らによって全てを壊された・・・。でも彼らは自分たちが正義と平和を守ったと思って意気揚々としているんだ！！）

「僕の全てを奪ったのは・・“正義”。そうだ・・僕はあの事件から正義が嫌いになった。正義、秩序、平和！下らない！実に下らない！・・・そんな下らないものの為にリクさん達は殺されたのかと思うと・・・」

ジュンはホテルの非常階段を下りていく。

流れた一滴の涙は誰に気づかれることも無くコンクリートの上に落ちたのだった・・・

第七十九話　久々の出会い、そして決戦の予兆

ザッザッザと海岸沿いをジュンは歩く。

涙は既に乾いていた。

（僕はどうすればいいのだろうか・・・）

ジュンの中の憎しみ。ＵＳＡ２と国際警察の陰謀によって育て親と家と仲間、全てを失ったのだ。

その張本人と協力しろと！？

ジュンにとってそんなことは不可能だ。

「おい、ジュン」

後ろから声がした。振り返るとユウタが背中の後ろで手を組んで直立していた。

軍服と直立姿がとてもマッチしている。

「僕を連れ戻しに来たのならそれは不可能だよ。悪いけどＵＳＡ２とは協力できない」

「・・・今世界のバランスは崩れようとしている。ジュン、少しだけ我慢してくれ。この戦いが終わるまでの間だけでいい・・・」

「嫌だね」

そういい捨ててそのまま去っていこうとするジュンの肩をユウタは掴んだ。

「ジュン、一回だけでいい。正義の為に戦ってくれないか？」

「正義？正義・・そんなくだらないもののために僕は戦う気は無い！！」

ジュンが叫ぶ。その気迫に一瞬、ユウタが怯む。

「正義が僕に何をしてくれた！？僕をいじめから救ってくれたか！？僕の孤独を癒してくれたか！？・・・何もしてくれなかったじゃないか！僕が苦しんでいるとき、寂しかった時、悲しかったとき、“正義”は僕を一度たりとも救済したことなんて無かったんだよ！」

「ジュン・・・」

「軍は一度僕から全てを奪った！正義は僕の家族を粛清した！正義にとって僕の仲間の命なんてクズみたいなものだったからだ！勝手に正義を御旗に人の命を奪い去る・・・なんでそんな奴らと協力しなきゃいけなのさ・・・」

涙がジュンの頬を伝う。今まで抑えてきたものが一気に溢れかえってきた。

ユウタは言うべき言葉を捜すように、目を泳がせる。

暫らくして静かに口を開いた。

「俺達はエリカを止めなければならん。・・・今は軍もポケモンハンターも、正義も悪も無い。エリカの計画がどのようなものかは知らんが、安全保障に関る問題だ」

ユウタがゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ジュン、お前も分かっているはずだ。・・・俺はお前のハンターとしての腕を買っている。正義・・いや、一つの目的の為に戦ってくれ」

「正義・・ね。僕は正義なんて信じない。歴史を見てごらん」

ジュンは海を見る。後ろで手を組み、ユウタに今まで見せた事の無い表情を浮かべる。

とても悲しそうな目をしている。

（何時もは自信満々な・・・ジュンが・・・）

「ねえ、勝ったら正義なのかい？負けたほうは悪だから敗北したのかい？君達軍が歴史上何度も繰り返してきた“戦争”。兵士が心に大義を秘め、人を殺していく・・・“正義”のためにね。正義も悪も無いのさ！歴史は塗り替えられる」

ジュンは一息おく。砂浜を足で弄る。掘られた砂は打ち寄せた波に流されていった。

「歴史は常に勝者が塗り替えられてきた。虐殺が許容され、殺戮が英雄化される。軍という組織はその性格上、多くの犠牲者を生み出してきた。ねえ・・そんな組織が本当に平和をもたらすと思うのか

い？」

ユウタは黙っている。ジュンはユウタの目を覗き込む。透き通った目だ。

「軍人としての君に問う。軍が除けるのは表面化されたものだけだ。何故その事件が起こったのか。何故テロが起こったのか。何故民間人を殺したのか・・・そこには深い闇が横たわっているはずなんだ。でも君達軍にその闇を取り除くことは出来ない。平和なんてものは、君達には決して作り出せない」

「・・・」

腕を組み、ただ黙っているユウタ。ジュンは続ける。

「君達に出来るのは表面化した問題を処理することだけだ。武力では決して解決できないものがその中に眠っていたとしても君達はそれを解決は出来ないよ。闇を理解し、癒すことが出来るのは闇だけだからね・・・それでも戦うのかい？」

「ああ」

短い答え。ユウタは口を開く。

「それでも行動しなければ何も代わりはしない」

「武力による平和、粛清による秩序。それを君は望むと？」

ジュンの目に一瞬深い失望の色が浮かぶ。

「・・・俺が戦って一瞬でも世界が平和になるのならな」

「君達軍が戦っても本質的な解決にはならない。武力とは別次元の話だから。平和なんてものも儚く、相対的なものだ」

ユウタとジュンの目と目が合う。

「本質的な解決は他の奴らの仕事だ。俺達の役割は、本質的な解決が見つかるまでの時間稼ぎだ。だが、時間を稼がなきゃ、解決される問題も解決できないだろ？」

「軍が作り出した平和が、脆く軟い偽物だったとしても？」

「その脆く軟い虚像の平和でも、その間人は考える。考えて本質を見出す。だが偽りの平和も無いようなら、考え出されも見出されもしない」

「ふう・・」

ジュンはスッと息を吐き出す。

「やっぱり僕は君達軍が嫌いだ」

「そりゃどうも」

「だけど・・・ユウタ、僕は個人的に君に好意を抱いている。ファオさんもイクスさんもロス大佐もふわもこ少将も嫌いではない。・・・軍という一括りの組織を見るのじゃなく、個人個人を見ていけばいいのかな」

空を見上げる。雲が青いキャンバスに浮かんでいた。

「ＵＳＡ２は嫌いだけど、その中に居るのはやっぱり人間なんだよね。それを括って軍と見て嫌悪したら、それこそ正義を御旗に掲げて僕から全てを奪った軍と同じになっちゃう。いいよ、協力するよ。離脱は止めだ」

「よく言ってくれた」

後ろから声がする。ジュンとユウタが振り返るとイーブイのブラウン少将が砂浜に立っていた。

「君はポケモンハンター。私達は軍。だが今は同じ目的を共有する同士だ」

「ふわもこさん・・・」

ジュンはブラウン少将を抱き上げる。ふわふわとした毛皮の下には熱い意思が流れていた。

「・・・行こう。皆が待っている。準備は万端だ」

「一ついいですか。ユウタにもだけど」

「何だよ？」

「・・・僕は今は軍の味方サイドにいる。でも、この件が終われば君達軍とは敵対する存在となる。そんな僕を信じていいの？」

「少なくとも今、お前は協力者。それで十分だ」

「それは中尉の言うとおりだ。君は現時点で我々とは同盟関係にある。今の同盟を大切にしないものに勝機は無い」

そうだねぇ・・エリカ達が居る限り僕は君達の味方だ。

ユウタと共に歩きながら思考を巡らせる。

でも、何時までもそうではない。いつか僕は師匠の名を継ぐつもりだからね。

ジュンは薄っすらと微笑む。

何時の日か師匠みたいな超凄腕のハンターになる。あの名にふさわしいハンターにね・・・。

そして継ぐんだ。

“J”の名を。

「ジュン何を笑っている?」

ユウタの問いにジュンは「別に」とだけ答える。

「こっちだ」

少将が指を指した先にはホテルがあった。

「ホテルの中にもう一回入るんですか?」

「いや・・ホテルの屋上のヘリポート・・そこにヘリが一機止まっている。私達はそのヘリに乗り、【スキエンティア】海上研究所に向かう」

ジュンたちがホテルの最上階の扉を開けると、風が一気に吹き抜ける。

「お、ジュン君。戻ってきたか」

ファオが歩み寄ってくる。

「待ってたぜ。一人でも抜けると戦力が落ちるからどうしようかな～って思ってたんだけどな」

「・・先ほどはどうも」

ジュンの言葉にファオが微笑む。

「いいんだ。それにしてもあれだなぁ～何時見ても・・・」

といいつつジュンの頬にファオは手を当てる。

「可愛い顔してんな～・・食っちゃいたい・・・」

「ファオ曹長、彼はあなたに食われるようなタイプではないわよ」

イクスが腕を組んで言う。

「分かってますよ。でも、この中世的な顔立ちといい、Sな気質といい・・俺の男心が刺激されるんだよなぁ・・」

「ファオ、ナンパはそこまでだ」

「へ～い」

ユウタの一声に気の抜けた返事をしつつ、ファオは離れる。

「何時まで私を待たせるのです？」

その時、ヘリから一匹のポケモンが降りてきた。

ピンク色の体に長い尻尾、青い目が特徴のポケモン。

「このスーパーウルトラブリーな伝説のポケモンである私を待たせるなど・・」

ジュンにとって非常に因縁の深いポケモン、ミュウだ。

「あ・・・」

「なんと・・・！」

互いに目が合う。

固まる一人と一匹。その何ともいえない空気にユウタ達がジュンとミュウの顔を交互に見る。

「久しぶりだね・・・」

「ええ・・何故人間に戻っているのかは分かりませんが」

「とある科学者に神と呼ばれしポケモンの力を入れられてね。それで人間とアグノムの両者に自由に変身できるようになったなんだ・・・」

「そうですか・・・」

気まずい空気が流れる。それもそのはず。かつてジュンはミュウを捕獲しようとし、ミュウはそんなジュンをアグノムに変えた。

そんな数奇な関係なのだから。

「まさかこんなところで君に会うとはね。でも今は協力者同士。仲良くしよう」

「ええ・・それがいいでしょう」

ジュンとミュウはお互いに距離を取りながらヘリに乗り込む。その後をユウタ達も続いていったのだった。

＊＊＊＊

ババババババ

ヘリのローターの回転音がする機内ではやはりある種の緊張感が生まれていた。

「・・・ブラウン」

そんな中、ミュウが少将に声をかける。

「なんだ?」

「・・・もしや貴方が言っていた情報提供者とは彼のことでしたか?」

と言ってミュウはチラッとジュンを一瞥する。

「まあ・・そうだな」

「ふぅ・・全く。運命というか縁とは不思議なものです」

ミュウは首をふりふりため息をつく。

「まさかここで彼に会うとは」

「それは僕の台詞だよ。まさかふわもこさんの古い友人がミュウだったとはね」

ジュンとミュウの目と目が合う。

(そしてまさかコイツにここで会うとは・・・)

同時に同じ事を考えていたのだった。

＊＊＊＊

ここは【スキエンティア】海上研究所内部。

白く清潔な廊下を一人の青年が歩いていた。

色黒の青年、アキラである。

アキラは研究所の階段を下りると、地下室に向かった。

「まったくエリカの奴・・・キメラポケモンの入ったカプセルに栄養剤注入しておいてねやと・・面倒やわぁ」

【スキエンティア】の活動場所を海上研究所に移し、レオンとロザがディアルガの宝玉の一部を回収してからというもの全然エリカの姿を見ていない。

研究室に閉じこもったきり出てこないのだ。

（なんや不自然やと思ってた矢先、俺の部屋に電話で指示があったんやけど・・・なにゃ、実験室から出れん理由でもあるんやろか・・）

思考を巡らせつつ、アキラは地下室の扉の前に立つ。自動ドアが開いた先には広い研究室が広がっていた。

大きな試験管のようなカプセルが等間隔で設置され、中にはポケモン達がプカプカと浮いている。

「何時来ても不気味やな・・」

アキラは気味悪そうに呟くと、制御装置のキーボードを叩く。

「なんや栄養剤の成分の配分よう分からん・・・ま適当でええやろ」

『駄目よ』

その時、実験室にアナウンスが流れる。エリカの声だ。

「うおっ！？エリカ、居ったんか・・・」

アキラがキョロキョロと周囲を見渡すが、何処にもエリカは居ない。

『一番奥の部屋に入りなさい・・・その前に安定剤をＣＺ－００カプセルに４Ｌ注入して・・・口答で栄養剤の配分を伝えるから』

電話の時もそうだが、今はっきりとアキラは確信を持った。

（・・・エリカの声が・・今まで聞いた事が無いほど弱弱しいわ！）

急いで言われた通りに操作すると、急いで一番奥の部屋に駆け込む。

そこには液体の充填されたカプセルがあった。

「エリカ・・・」

そしてその中に入っていたのは、裸体のエリカ。頭や腰にコードが繋がれている。

普通なら見とれてしまうところだが、今回は違った。

何故なら・・エリカの姿が変わっていたから。

肌の色は人間のそれではなく、無機質なほど真っ白。

両目の下から頬にかけて黄色のラインが走っている。まるで黄の涙を流しているようだ。

両肩には白い翼が生えている。羽毛は無く、皮膚の一部が翼の形状をとっている。

右の掌にはパール色の宝玉が、左の掌には青い宝玉が埋まっている。

「エリカ・・エリカなんか？・・・」

（信じられへん。既に人間ちゃう・・・まるで・・）

天使。その言葉がアキラの脳裏を過ぎった。

『三体の神の力を取り込むのは流石に体に負担をかけるわね・・・』

エリカがスッと目を開ける。赤く透き通った目だ。

「エリカ・・・」

『しかし【刻印】は発生しなかった。薬品のお陰ね』

「でも・・エリカ・・その体・・・」

アキラは言葉を続けられなかった。

エリカは捨てたのだ。人間である事を捨てて、別の存在・・そうもっと高次元の存在になったのだ。

『この姿は人間であり人間でない存在に私がなった証。・・・でも

まだコンディションが完全ではないわ・・アキラ、あなたが必要よ・・』

その時の言葉。アキラが今まで聞いたことのない台詞だった。そしてエリカの本心でもあった。

「俺が必要・・・」

これまでずっとエリカに尽くしてきたがそんな台詞は一度も聞いたことが無かった。

アキラは別に構わなかった。エリカを心のそこから愛していたから。

しかし・・いざ言われてみると・・・

「必要なんやな・・俺が・・・ずっと居たるからな・・必要な限り・・・俺はお前と・・・・」

その時アキラの頬を涙が流れた。

やはり、言われてみたかったのだ。振り返って欲しかったのだ。必要とされたかったのだ。

愛に少しでも報いられて欲しかったのだ・・・！

（俺はエリカがどんな姿になっても・・・ずっとずっと・・）

アキラの拳が握られた。決心と共に。

第七十九話　久々の出会い、そして決戦の予兆（後書き）

次回はついに最終決戦の始まり・・かも

第八十話　最終決戦突入　レオンの真実

「見えてきました」

ヘリを運転しているパイロットの言葉に皆が窓に目を向ける。

窓から広がる光景がジュンの目に映る。

孤島。比較的大きい孤島で、中心部には研究施設らしき建物が建っている。

「【スキエンティア】の研究施設か・・・」

ユウタが呟く。

「そろそろ・・だな」

ジュンたちはヘリコプターのイスの下から、パラシュートを取り出すと各自着ていく。

「御武運をお祈りします」

パイロットがぐっと親指を立てる。ジュン達はコクリと頷くと、ヘリから降下していったのだった―

「結構広いね」

無事孤島に降下できたジュンはパラシュートを回収しつつ、辺りを見渡す。

「ここは元々ＵＳＡ２の軍事施設になる予定だった場所だからな。軽く軍事演習できる程の規模はある」

ユウタが双眼鏡を使い辺りを確認しつつ説明する。

「しかし、思ったよりも大規模ですね」

バシャーモのファオがアサルトライフルのＡＫ－４７を構えつつ感心する。

「あの・・ファオさん。何ですかそれ」

「ん？何ってアサルトライフルだよ。ＡＫ－４７だ。俺の愛銃でな、陸軍の特殊部隊に居たときから愛用していて―」

「そんな物騒なもの持って来てたんですか！？」

ジュンは相当引いているようで、ススとファオから離れる。

流石にその反応にファオは気を悪くしたようだ。

「ちょ、それはないんじゃないか。お前だって軍の風呂場でサブマシンガン使っただろ」

「まあ・・それはそうだけど・・。大体、ファオさん何歳なんですか？前に陸軍の特殊部隊にいたとかなんとか・・・」

咄嗟に話題を変えたジュンに、ファオは笑顔で答える。

「ん～俺か?俺は今年で２６歳かな」

「２６!?曹長なのに・・・」

「痛たた・・気にしてるんだから言わないでくれよ。俺頭の方は良くないから・・士官学校出じゃねえしな・・出世遅いんだよ・・まあ軍は結構学歴社会だったりするからさ」

ファオは苦笑しながら頭を掻く。

「へぇ～２６歳ですか。何時も（アホみたいに）明るいからもっと若いかと思ってましたよ」

「おい、今言外で馬鹿にしただろ」

「してませんよ」

「・・・少しは緊張感を持て、ファオ」

「了解です」

と言いつつ、ファオはＡＫ－４７を構える。

「しかし、どうするんですか。僕達がずかずか入っていったら警備兵にとっ捕まりますよ。真実を伝える前に・・・」

クーの言葉にブラウン少将がジュンを見る。

「僕に行かせたいんですね、ふわもこさんは」

目が合ったジュンは少将の考えを察して言うと、深く頷いた。

「ああ・・君のような子供なら逆に安全だからな」

「分かりました」

ジュンは少し微笑むと、ＵＳＡ２の真実が記された資料と証拠のデータチップを片手に【スキエンティア】の研究施設に乗り込んでいった。

『なるほど一人で行って兵を警戒させない策か・・』

「ふわもこさんらしい作戦だよ」

『だが、お前に奴らに対する憎しみを抑えきれるかな?』

マリスが意地悪く尋ねる。

「さあ、どうだろうね・・・」

茂みからは【スキエンティア】本部の入り口が見える。そこには数人の警備兵が警護をしていた。

力を抜き、ジュンは茂みから出る。

「何者だ!?」

カチャリと銃が構えられるが、出てきたのが少年だったため少し警備兵の緊張度が緩む。

「君は誰だ?どうしてこの孤島に居る?」

銃口は下げられているが、警備兵の目には不審感が表れている。

「僕は氷室準。・・・そうですね。これをあなた達ＵＳＡ２の皆さんにお見せしようと、ね」

ジュンは資料を掲げる。爆弾を取り出すように見えたのか、再び銃口がジュンの方を向くが直ぐに下げられる。

「それは・・大体何故君のような子供が、俺達がＵＳＡ２兵士だと・・」

「まあまずはお読みください。僕はそれをお渡しするために来たんですよ」

ジュンは微笑むと、資料を地面に投げる。

「そこには真実が書かれています」

「何だよ、これ」

警備兵の数人がジュンに警戒しつつ、資料に目を通す。

目を通していくうちに、警備兵達の顔色が変わっていくのが分かる。

「これは一体・・・」

「あなた方軍がこれまでやってきたことの裏・・・奥に隠れた真実ですよ」

「っ！ふざけるな！」

バシンッと資料を一人の兵士が叩きつける。

「こんな事が・・・」

「残念ながら真実なのだよ」

茂みからブラウン少将を筆頭にフォック、ユウタ、ミュウが出てくる。

「お前達は！」

カシャンと警備兵の銃口がブラウン少将達に向けられる。

「おっと私達は戦いに来たのではない。先ほどの少年の資料、読んだだろう？あれは本当の事なのだ・・・証拠を見せても良いが、私達も無駄な時間は取りたくない」

「くそ・・くそくそ！」

頭に血の上った兵の一人が引き金に指をかけ掛けるが・・・。

「おっと、撃っちゃ駄目だぜ？俺のライフルの火力を味わいたくはないだろ？」

「銃を捨てて下さい。すいませんね、手荒な手段に出て」

「私達の話を最後まで聞いてくれるとありがたいわ」

警備兵の背後に回っていた、Ｖ（ファオ）、Ｑ（クー）、Ｘ（イクス）がそれぞれ銃を突きつける。

警備兵が此方を睨みつつ、銃を地面に捨てたのを見てブラウン少将が口を開く。

「自己紹介が遅れたな。私はフリードリヒ・フォン・ブラウンだ。ＣＩＣ情報部代表と言っておこう」

「ＣＩＣ！・・軍の情報機関が何故・・」

「私達は君達ＵＳＡ２が警護しているこの島で秘密裏に行われている計画・・・【プロジェクト・キメラ】を阻止に来た。君達は利用されている。私達に反抗せず、即刻投降することを進言する」

「待て！あんた達、いきなりズカズカ入り込んできて・・・・さっきの資料・・・あんなの信じられるか！ＵＳＡ２がテロリストと組んで、権力保持と世論誘導と利益のために各地で自作自演の戦いをしてただぁ！？そんなこと・・・」

「ありえちゃうんだよね。これが」

ジュンがかつてユウタとクーが【ホテル・アレキサンドリア】で盗聴した、ＵＳＡ２のジャック・ハワード大将とアルとの会話の記録を流す。

「馬鹿な・・・ありえない・・・」

「だけど、この声は間違いなくハワード大将の・・」

警備兵達が混乱したように互いに顔を見合わせる。

「ＵＳＡ２はテロリストと自作自演の戦いをするだけでは飽き足らず、この島で活動中の科学者集団【スキエンティア】のキメラ技術で作り出されたキメラポケモンを用い、兵器として実用化を目指している。・・・君達の良心の判断に期待する。私も無駄な戦いはこの好まん」

ブラウン少将の目が鋭い光を帯びる。

「しかし・・・命令が・・・」

躊躇している様子のＵＳＡ２兵士を見かねたのか、ジュンが冷ややかな視線を投げかける。

「馬鹿だね。自分の頭で考えなよ。それとも駒として動くことに慣れすぎて、頭のほうはスッカラカンなのかい？」

「何を・・俺達を侮辱する気か！？」

「別に、呆れてるだけさ」

「この・・言わせておけば・・・」

今にもジュンに飛び掛りそうな兵士にファオはライフルを突きつけながらも小声で弁解する。

「アイツ・・ジュンはお前達ＵＳＡ２に仲間と育て親を殺されているんだ。・・・お前達には直接関係ないだろうが我慢してやってくれ」

その言葉に兵士の目が丸くなる。

「そうなのか・・・」

「そうなんだよ。残念ながらね」

ジュンが岩に腰をかけ、足を組む。

「君達が命令を受け、この島の警護に当たっているのは分かる。そして軍人にとって命令とは絶対ということも理解している。しかし、この島で行われている陰謀を阻止しなければ世界の秩序とバランスは大きく狂う。それこそ取り返しの付かない事態になりかね無い・・・」

「ようは自分の頭で考えろってことだよ」

ジュンが不機嫌そうに言う。

「・・・分かった。では、内部の警備に当たってる奴らに召集をかける」

「ありがとう」

ブラウン少将は薄っすらと微笑んだのだった。

＊＊＊＊

その後、ジュン達の待つ場所にはＵＳＡ２の警備兵や海兵達が集まっていた。

「――ということだ。君達は簡単に言えば利用されていたに過ぎない」

事のあらましを改めて説明する少将。

辺りが騒然とする。

「俺達は軍に忠誠を尽くしてきた・・・のに、こんなのってありかよ！」

兵員達は皆、沈痛な面持ちで座り込んでいる。

その悲痛な表情にユウタやフォック達はかける言葉が見つからなかったが、ジュンは薄っすらと微笑み言う。

「まああれだね。君達は利用しやすい駒だったわけだ。実に愉快だね」

兵員達の視線が一斉にジュンに注がれる。面白いものを見物しているような表情のジュンに。

「お前・・・確か育て親をＵＳＡ２に・・・お前が俺達に恨みを持っているのは分かった。なら一つ聞きたい」

ＵＳＡ２隊員の一人がジュンに歩み寄る。さきほどファオと話していた青年だ。

「何故俺達に真実を伝えに来た？」

「決まってるでしょ」

ジュンは笑う。

「真実を知ることが君達にとって最も耐え難い苦痛になるからさ。忠誠を尽くしていた軍に利用され、秩序と平和のための戦いは利益誘導のためだった・・・そういう事実を知るのは辛いでしょ？」

「おい、ジュン・・・」

ユウタが少し注意するが、ジュンは気にしない。

「君達が受けるべき罰はまさにこれさ！信じていたものに裏切られ、掲げた正義が崩れる！その苦痛を僕はその手を汚さす君達に与えられるんだからね。馬鹿め・・・利用されてることも知らずに、粛清を繰り返してきたんだろうさ！」

「・・・すまなかった・・・」

その隊員の呟いた言葉に嘲る表情のジュンの顔が一変する。

「すまなかったな・・・」

「一体何を・・・」

「俺達はお前に苦痛を与えてしまった。そりゃ恨むよなぁ・・怒るよな・・・本当にすまなかった」

「僕の育て親達を殺したのは空軍だよ・・・言い訳すればいいじゃないか・・関係ないって」

隊員の目には悲哀が浮かんでいた。そして心からの謝罪の意も。

「関係あるさ。俺はＵＳＡ２の隊員だ。軍がやったことはどんな結果であれ俺達にも責任がある・・・この制服を着ている限りな。本当にすまなかった！このとおりだ・・・」

ジュンが気が付くと周りの隊員達が一斉に頭を下げている。

「僕は許さないよ・・・許すことは君達の心を楽にする・・僕は君達を楽にする気は無い！」

吐き捨てるとジュンは立ち上がる。

が、隊員達の方を少し見返る。

「でも、今は協力してあげる」

「・・・ありがとう。あぁ・・・協力するのなら、名乗っておいたほうがいいか・・・？」

まだジュンの怒りと恨みを少し恐れているのか、恐る恐るその隊員が尋ねる。

「――好きにすれば」

「俺はマーク・ファルコン。階級は中尉。まぁ・・なんだ、よろしく」

「・・・・」

無視するジュン。

「あのさ・・」

するとファルコンがジュンを覗き込んでくる。

「何？」

「どこか出会わなかったか？」

顎に出をあて悩むファルコン。が、思い出せないらしく悩んでいる。

「で、私達に協力してくれると・・そう思っていいのかね？」

ブラウン少将がファルコン達に歩み寄る。

「ええ・・えっとブラウンさん・・・」

改めてみるとイーブイが軍服を着ているのに驚くファルコン

「ああ階級か？少将だ。よろしく」

「しょ・・・少将！？」

ブラウン少将の一言にファルコン達が焦ったように敬礼する。その姿を見て、ジュンの表情が少し緩む。

「さてと、これで警備兵達は我々の側に付いたわけだが・・・ＵＳＡ２諸君」

少将が岩の上に座る。自然と集まる視線を受け止めつつ、重々しく言う。

「この島の【スキエンティア】のメンバーが我々共通の敵だ。ファルコン中尉、この研究施設には君達意外に戦闘員はいるかね？」

「いえ・・他の奴らは殆どが科学者達です。戦闘員は俺達だけと見ていいかと」

「よし、なら」

ブラウン少将が地図を広げる。この島の研究所の見取り図だ。

「この研究所の正面から乗り込むチーム、裏口から突入するチームの二手に分けることにする。ファルコン中尉、君は他のＵＳＡ２隊員の一部を率いてイプシロン中尉、ファオ曹長、ジュン君達と共に正面から、残りのＵＳＡ２の諸君はクー准尉、イクス准尉、フォック君達と共に裏口から突入だ。私とミュウはクー達と共に裏口に回る。それから相手は科学者達だ。極力武力行動は控えたまえ」

「了解しました！」

ユウタが敬礼する。

「では・・・幸運を祈る」

両者は別れ、研究所に向かっていった―

＊＊＊＊

「本当にどっかで君にはあった記憶があるんだが・・・」

途中ファルコンがジュンの横でポツリと呟く。

「えっと何処だったか・・・」

呻くファルコンに、ジュンは見覚えがあった。

（まさか・・ミュウと会った同じ日にこの人と会うことになるとはね）

そう、かつてトワイライト作戦で基地内部に潜入するためにジュンが女装をして、利用した（いろんな意味で）ＵＳＡ２の兵士。

それが誰あろう、このマーク・ファルコンその人なのだ。

「・・・ファルコンさん」

「ん？」

「僕の目を見て下さい」

ジュンがファルコンの目を覗き込む。黒い澄んだ目・・・

「あー！お・・・お前は！俺を女装で騙した奴！ということは・・・」

ファウコンはユウタとファオの顔も見る。軍用物資輸送トラックの中は暗かったためか、はたまたジュンに惑わされていたためか・・・今の今まで思い出せなかったようだ。

「お前達か、基地に忍び込んだネズミは！」

ユウタとファオは気まずそうに顔を見合わせる。

「お前らのせいでなぁ！俺、あの後大変だったんだぞ！責任問われて・・・この島の警備に左遷されたんだ！くそ、それというのも―」

「中尉！落ち着いてください！」

今にも飛び掛りそうなファルコンをＵＳＡ２隊員達がなだめる。

「見えてきましたね」

そんな中、ジュンの言葉に一同が研究所の建物を見る。

「・・・シャワーズ、グレイシア、ボーマンダ、アブソル、ゼロ・・出てくるんだ」

ジュンはボールを投げ、シャワーズ達を出す。

『ジュン、あの研究所からは凄まじいエネルギーが感じられる。【スキエンティア】の研究はまともなものじゃないな』

中でマリスが独特のくぐもった笑い声を立てる。

「それは初めからわかっていることだよ」

『軍が絡み、エリカ達と戦う・・・面白くなしろうだ。そう思わないか、ジュン？』

「そうだね。面白い・・その通りだよ」

ボソリと呟く。

「さあて、最後の戦いだ」

ユウタとファオ、そしてファルコンが各々銃を構える。

「ボーマンダ、破壊光線」

ジュンの指示にボーマンダが口からエネルギー光線を放ち、研究所の表を破壊する。

バァン

音を立てて崩れる表入り口。

「今爆発音がしたわ！」

「な・・何だ！」

【スキエンティア】の科学者達が驚いた様子で飛び出してくる。

「捕縛しろ！」

ファルコンの一声にＵＳＡ２の隊員達が一斉に銃を手に出てきた科学者達を捕まえていく。

「さすが腐っても鯛ですね。手際がいい」

白衣の科学者達が悲鳴を上げながら逃げるが、軍人達に敵うはずも

無く次々に捕まっていく。

「おい、それは貶しているのか？」

ファルコンがムッとするが、ジュンは気にしない。

「褒めているんですよ」

「隊長、このブロックの全員を捕縛しました」

「よし、では研究所内に入っていくぞ」

ファルコン達に続き、ジュン達も【スキエンティア】の研究所内に入っていったのだった―

＊＊＊＊

「ロンバート・・・」

その頃、【スキエンティア】幹部の一人、レオン・Ｊ・ホーガンは一人自室で写真を眺めていた。

そこに写っているのはレオンと・・・同年齢か年下の青年だ。黒髪の笑顔が似合う奴だった。

確か彼女も居たはずだ。

アイツは俺の隊で一番の戦友だった・・・

ロンバート。俺の親友・・・同じ志を持った存在。

レオンは目を閉じる。そうだ、あの時。忘れもしない2年前・・・
テロ事件の制圧の時。

油断したんだ。俺とした事が・・・

カッカッカッカと足音を立ててレオンは自室を出て、白く清潔な廊下を歩く。

向かう先は・・地下のキメラの生成・培養所。

軽い機械音を立てて扉が開く。

中には巨大な試験管のようなカプセルが一定列ごとに設置されていた。

ポケモン達が皆目を瞑り、液体の中をプカプカと浮かんでいる。

「お、レオンやん」

そこを歩いていると近寄ってきたのは色黒の青年、アキラ。

「ここに何しにきたんや?」

「・・・何時ものあれだ」

レオンが素っ気無く答えると、アキラは「ああ」と思い出したように気まずそうな反応をする。

エリカのキメラ技術は今の医学では救えない者さえ生かせる。

ポケモンの力を組み込むことで・・・ポケモンの生命力は瀕死の者を死の淵から救う。

レオンがＣＲ－０７と下に表記されているカプセルの前で立ち止まる。

そこには一人の青年が目を瞑り静かに浮かんでいた。

黒髪の青年・・・口には呼吸器が取り付けられている。

こうするしかなかったのだ。こうするしか・・エリカの技術でしかロンバートは救えないいのだから・・・。

「ロンバート・・・」

カプセルのケースの上に掌を重ねる。ひんやりした感触が伝わってきた。

「また来たのね」

振り返るとそこにはエリカが立っていた。

何時もの通り白い白衣を身に纏っている。だが、少し痩せただろうか・・・若干弱っていて、病人のようにも見える。

「彼は一度死んだことになっているわ。そう、世間的には彼は戦死した。ロンバート少尉はね。死亡届も２年前に提出されているわ・・・表面上は」

「エリカ、お前の計画が完成したあかつきにはロンバートを蘇らせる。その約束は忘れていないだろうな？」

レオンの詰問にエリカは薄っすらと微笑む。

「ええ・・・」

「今すぐは出来ないのか？俺は待った。ずっとお前に尽くしてきた・・・」

「・・・出来るわよ。この試験体の体にはあるポケモンの力を組み込んであるわ。それを活性化させれば今すぐにでも」

レオンの目が丸くなる。どうやら初耳だったらしい。

「じゃあ―」

「まだ駄目よ。レオン、まだあなたには働いてもらわないといけないわ」

エリカが冷たい笑みを浮かべる。レオンはぐっと言葉を飲み込むと、ロンバートの方に目をやった。

「お前がＣＩＣとＰ・Ｈ・Ｃの援助を受けていた時期、軍内部で協力者を探していたが・・・俺は絶好のカモだったわけか」

レオンが自嘲的に笑う。渇いた笑いがキメラの生成所に響く。

「そうね。・・今も昔も“軍”という場所は私の計画に最も適した所よ。戦いで傷つき、助からないと思われる兵士を表上「死亡」扱

いしに、キメラ研究の材料に使う。それだけじゃない。軍が捕縛したテロリストや犯罪者、表面上「銃殺刑」等に処せられた者達もポケモンとの合成実験に使うのに適した実験体だったしね」

満足そうに恐ろしい事を言うエリカ。まるで素晴らしい作品を創造した芸術家のような口調だ。

実験材料になった人間達が今ここに居ないということは・・・

身震いをするレオン。

ここに経つ白衣の少女はポケモンだけでは無い、人間をもその手にかけてきたのだ。

（狂ってる・・・狂ってるぜ。でもその狂気が美しさを際立たせているんだな・・アキラがぞっこんするのも分かる気がしないでもないが・・・）

エリカは白衣のポケットに手を突っ込むと冷ややかな笑みを浮かべる。

「・・・レオン、あなたはロンバートを失いたくない。あなたを救う事ができるのは私だけよ。ロンバート元少尉が再びその目を開ける日が来るかどうかはあなたの働きぶりしだいと言う事を忘れないようにね」

そう言うとエリカは去っていった。

そうだ、ロンバートは今の医学ではどうしても救えない重症だった。

だが、エリカなら・・・エリカならロンバートの命を救ってくれる。
いやエリカしか救えない。エリカのキメラ技術しか。

「分かっているさ。分かっている・・・分かっている・・」

レオンは何度も同じセリフを呟くと、そのまま培養所を後にしようとした。

その時。

ウーー！　ウーー！

研究所内に警報音が鳴り響く。

「何や・・！？」

アキラがレオンの傍によって困惑する。

「どうやらネズミが入り込んだらしいな。駆除するか」

「まさか、前に自分らが話していた奴・・・もうここを嗅ぎ付けてきたんか！？」

「どうだろうな。まあ、奴らへの対策はしてある。ロザが開発したあれがあれば・・・」

レオンがアキラと共に研究室を出る。地下から直接2、3階に通じるエレベーターに乗り込む。

二人は3階に着き、窓の外から下の様子を見る。

「おうおう、コイツは・・・」

軽く口笛を吹くレオン。下にはＵＳＡ２隊員が【スキエンティア】科学者達を次々と捕縛し、建物に乗り込んでいく光景が広がっていた。

「あいつらここを警備しているＵＳＡ２の隊員やん・・・反乱起こしよったか」

「或いは、真実を知らされたか口車に乗せられたかして・・・。まあどちらにせよ、戦いは避けられそうに無いな」

レオンとアキラはそれぞれ自室に戻り、準備を始めたのだった―

第八十一話　それぞれの戦い

「ここが研究所内か・・・」

ユウタとファオ、そしてファルコンが銃を構えつつ研究所内を歩く。

ジュンもその後ろに続く。

「清潔な場所・・・でもなんか寒々しいな」

ファオがぶるっと震える。

「住めば都ってことさ」

後ろから声がする。

ガガガン

そして響く銃声。

「危なかったね・・・」

ジュンの目の前でカランと三発の弾丸が床に落ちる。咄嗟に『守る』を発動させたのだ。

「その三連発の銃声・・間違いない、ＶＰ－７０Ｍ。レオン隊長ですね！」

ファオが鋭い声を上げる。三人が振り向くとそこには長身の青年、レオン・Ｊ・ホーガンが

「よう」

「隊長・・・イプシロン中尉から聞きましたよ。・・・軍を裏切ってエリカに付いたと・・」

カチャリとＡＫ－４７を構えるファオ。

「ああ、そうだ。さすが耳が早いな、フレイム」

「フレイム・・・」

ジュンの疑問に答えるようにファオが言う。

「俺の本名はフレイムなんだよ。Ｖ（ファオ）はコードネームだ・・・俺は前特殊部隊に居たって言ったよな？」

ファオ－フレイムがライフルを構えながら肩越しに話す。

「俺が居たのは対テロ特殊部隊デルタチーム・・・。そしてその時その部隊の隊長が・・・レオン大尉だったんだよ」

「久しぶりだな。フレ・・いや今はＶ（ファオ）か。まあいい。俺も昔の仲間とはやりあいたくないんでね、このまま退くなら見逃してやる」

レオンが独特の形状のＶＰ－７０Ｍを構える。

「それは出来ませんよ。・・・ロンバート少尉の事を引きずっている大尉をお救いしなければいけませんから」

「・・・」

無言のレオン。先に引き金を引いたのはレオンだった。

ガガガン

ＶＰ－７０Ｍの三点バーストが火を噴く。

が、又してもジュンの障壁が銃弾を防いだ。

「なるほど・・・なかなか厄介だ。だが・・」

突如レオンの背中から大きな二枚の翼が生える。

炎を纏った翼だ。

「それは・・・」

「一体なんだよ」

ユウタとファルコンが驚きの声をあげる中、レオンは羽ばたき宙に舞った。

「これならどうだ?」

レオンが銃から未だ弾丸が残っているマガジンを抜き取り、腰のホルダーにある別のマガジンを装填する。

「俺特性の弾丸だ・・・伝説のポケモンファイヤーとのキメラの力を使ったオリジナルだぜ」

バン！

一発の弾丸が撃たれ、ジュンの防壁に直撃する。

そして着弾した瞬間、爆発炎上した。

「これは・・普通の弾丸じゃない！」

ユウタの言葉に空中でバサバサと翼を羽ばたいているレオンが薄っすらと笑う。

「炎タイプのポケモンの力を銃弾に込めてあってな。小型爆弾並みの威力はあるぜ」

バン　バン

レオンが空中から連射する。着弾した弾丸は次々と炎上し、ジュン達を追い詰めていく。

「これじゃ反撃できないね・・」

ジュン達が追い詰められかけている一方、ブラウン少将達は研究所内部に進入していた。

特に罠も無く、邪魔もされていない。

「おい、ミュウ・・・易々と進めすぎてないか？」

そんな中、人間状態のゼクロムがミュウに声をかける。

「そうですね。嫌な予感がします」

ミュウの青く美しい目の眼光が鋭くなる。

「相手は神と呼ばれしポケモンをその手中に収め、軍と世界的企業を手玉に取っている少女です。優しいお出迎えをしてくれるとは思えませんね」

「ミュウ、どうやら手厚いお出迎えならしてくれそうだぞ」

ブラウン少将の皮肉った言葉。廊下の向こうから何かが歩いてくる足音が聞こえる。しかも大勢。

「クー准尉、イクス准尉銃を構えておきたまえ。くるぞ」

ザッザッザ

廊下の端から姿を現したのは大量のポケモン達。多種多様な姿をしている。共通しているのは体のどこかに番号が刻印されている点だ。

そしてもうひとつの共通点は全てのポケモン達の目の焦点が定まっていないところか。

「どうやら言葉が通じそうに無いな」

ゼクロムが手のひらに放電させながら言う。

「ふむ・・・1、2、3、4・・・20体程度か」

ブラウン少将が前足で数える。

「一気に倒して前に進もうぜ」

フォックがドラゴニックセイバーを構える。

「・・・この程度ならば私一人で十分だ」

そう言って前に出たのはブラウン少将。

「少将！危険です、ここは私達に―」

「いや、久々の実戦だ。少しウォーミングアップをしたいのでな。私一人でやる」

少将が右前足をキメラ達を向ける。

ピピピピピ・・・

爪に光が溜まっていく・・・。

ブウン

一閃が走った。一筋の光が前列のキメラ達をなぎ払ったのだ。

「嘘・・・」

イクスが口に手をあて驚いている。

「ソーラービームにも似ているな・・だけど、ブラウン少将はイーブイ。その手の技は使えないはずだが・・・」

フォックも腕を組み、少将に驚愕の眼差しを向けている。

「ふむ・・・レーザー一発で殲滅は不可能か」

ブラウン少将がゆっくりと前足を手に当てる。

「抹殺スル」

そんな中カイロスが少将に飛び掛る。どうやら電気系ポケモンとのキメラであるらしく、頭の角にも似たハサミに放電現象が起こっている。

「ほう、誰をかね？」

シュン

その場から少将が消える。一歩も動かずに“消えた”のだ。

ピピピピピ・・

上からあの独特の音がする。クー達が上を見上げるとそこには少将が宙を舞っていた。

右手に輝く光が充填されている。光り輝く十字架を持っているようだ。

「遅い」

ブウン

宙から降り注ぐレーザーがキメラポケモン達を貫いていく。まるで光の雨だ。

たった３０秒。この短時間に２０体のキメラポケモン全員が全滅した。

「少将、強すぎ・・」

クーがポツリと呟く。

「ブラウン、お見事です。腕は落ちていないですね」

キメラポケモン達をあっさり全滅させた少将にミュウは笑顔を向ける。

「他愛無い」

ブラウン少将はそう言うと、肩の階級章をパンパンと払う。

「さあ先に進もう」

「・・・何か音がしませんか？」

クーの片眉がピクリと動く。何かが高速で回転している音だ。

「あれは・・・」

ミュウが指差した先には壁の一部が変形し、回転するカッターが此方に迫ってくる光景が・・・

「イクス！撃ち落とすよ！」

「分かっているわ！」

バン　バン　バン

クーとイクスが拳銃を抜いて回転カッターを撃ち落そうとするが、何故か全く効かない。

「切り刻まれてミンチになる前に逃げるぞ！」

ブラウン少将を先頭に、クー達は全速力で逃げる。

「っ！少将、道が分かれています」

イクスが指差す先には二手に分かれた廊下があった。

「止む終えん。ミュウとゼクロムはフォック君達と右側へ、私はクー准尉とＵＳＡ２隊員と左側に移動する」

キュイーン

ブラウン少将が廊下の左へ移動し、ミュウ達が右側へ入った瞬間・・・回転カッターがシュンと消えた。

と、同時に廊下の分岐点に黒い壁が上から凄い勢いで降りてくる。

ガシャーン

黒い壁によってブラウン少将達とミュウ達は隔てられてしまった・・・。

「しまった。私とした事が迂闊だった・・・まんまと敵の術中に嵌ってしまうとは・・・」

少将が壁に指からレーザーを放ち、破壊しようとするがどうやらただの壁ではないらしく効果が無い。

「フォックさん達と分ける事が敵の目的・・・」

「恐らくな」

不安そうに呟くイクスに少将は憮然と答える。ＵＳＡ２の隊員達も不安な表情だ。

「仕方ない。私達単独で進んでいこう」

ブラウン少将は壁を再度一瞥すると、イクス達を引き連れて進んでいった―

＊＊＊＊

「罠に嵌っちまったみたいだな」

ゼクロムの顔が歪む。

フォックがドラゴニックセイバーで壁を切ろうとするが、全く効いていない。

「この壁は特殊素材で作られているらしいですね。さすがエリカが率いる科学者集団といったところでしょうか」

ミュウが半ば感心したように壁に触れる。

「どうやらさっきの回転カッターは幻影みたいだねぇ・・・すまない、幻影使いのアタイが付いていながら見抜けなかった」

ゾロアークの通称「姉さん」が悔しそうな表情をするのを、仲間達がなだめている。

「それだけ今回の敵が強大だと言うことです。もうここは進むしかないでしょう。それがエリカ達の思う壺だとしても」

ため息をつきながら前に進むミュウ。その後をゼクロム達は付いていった・・・

そして今の全ての光景を天井の隠し監視カメラが見ていたのだった。

＊＊＊＊

「作戦通りよ」

モニター室で今の画像をチェックしているのはロザ。

「アキラ、彼らは作戦道理二手に分かれたわ。貴方にはゾロアークの居ないほう・・・ブラウン少将サイドを任せるわよ。幻影使いさえ居なければ、貴方の幻影に対処できる者など存在しないから」

『それにしても見事にこっちの予想通りに動いてくれよったな・・・』

モニター室の無線からアキラの感心したような声が聞こえる。

ロザは少し微笑むとマイクに向かって口を開いた。

「あのフォック達・・・彼らは非常事態において、ずっとあのチームで切り抜けてきたに違いないわ。追い込めば、彼らは必ずあの集団で動く。【スキンエンティア】の目的の達成のためにはまずは軍サイドからの彼らの分離が必要だったのよ」

『なるほど・・で、自分はこれからどうするん?まさか一人でフォック他倒す気じゃないやろうな?』

「大丈夫よ。【ダーククリスタル】システムがあるし・・・それに私には強力な味方が居るしね」

ロザの言葉にアキラが少しの間黙る。

「もしかして・・・」

「そうよ。エリカの手持ち、ダークライ、ヨノワール、ジュペッタ。この3体が私には居る」

ロザはスッと部屋の後ろに目を向ける。

三体のポケモンがそこに佇んでいた。

『そうなんか、なら・・いけない事もないかもしれん。それでエリカのほうはどないやねん?・・・まだキメラ化が完全に完了しとらんやろ?』

「心配ないわ。レシラムが付いているから」

『そうかぁ・・・なあロザ』

アキラが一息つく。

『俺、時々思うねん。俺達間違っとるんちゃうかってな』

「そうね。でも正直私は世界がどうなろうともどうでもいいのよ。私はレオンを支えなきゃいけないの。ロンバートを失ったレオンを・・・ロンバートがキメラ技術で復活する日までね」

『・・・そうか』

アキラは短く答える。

無線が切れた。

「さて、忙しくなりそうね」

ロザはため息をつくとダークライ達を引き連れて部屋から出て行った。

＊＊＊＊

「あそこに部屋がありますね」

一方ミュウ達は廊下の突き当たりに部屋を見つけていた。

「進むしかなさそうだな」

ゼクロムがドアを押し開ける。

そこには大きな空間が広がっていた。中には何も無く・・いや部屋の一番の奥にドアがあるのと・・・部屋の中央に巨大な黒い結晶が設置されていた。

床の装置の上の４本の支えが漆黒の結晶を固定している。

「これはいったい・・？」

ハクランがスッと目を細める。

「ようこそ、私の部屋へ」

カチャリと部屋の奥のドアを開け、入ってきたのは一人の女性。

「アンタは・・・」

「あら、あの時はどうも」

ロザ。【スキエンティア】幹部の一人であり、ついこの間フォック達とディアルガをめぐって戦ったばかりだ。

「・・・それにしても豪華な面子ですわね」

「アンタ、俺一人にもう一人の奴と協力してても苦戦してたろ？戦う気なら止めときな」

「そうですわね・・・でも、私には今回この子達が協力してくれていますの」

ロザの言葉と共に、ダークライ、ヨノワール、ジュペッタの3体が出てくる。

「・・・お前達は・・！」

『久しぶりだな、ゼクロム』

『お久しぶりですね』

『数年来かぁ。ケケッ』

どうやらエリカの手持ち達とゼクロムは面識があるらしい。ホワイト家に仕えていたレシラムの友人なのだから当然か。

「ダークライ、ヨノワール、ジュペッタ・・・まさかお前達も協力していたとはな」

『私はエリカの目的に興味はありません。しかし、私の元々の主（あるじ）であるヨハンを殺した神々への復讐心は燃え尽きてもいないのです』

ヨノワールが静かに言う。そう、彼は元々4年前に神々の抗争に巻き込まれ、非業の死を遂げたエリカの弟、ヨハン・K・ホワイトの手持ちだったのだ。

『残念だよ、ゼクロム。お前がエリカの理想を解せぬとはな』

ダークライの突き刺すような視線を受け止めるゼクロム。

『俺のご主人様はエリカだしなぁ・・・そんで、こっちに居る方が楽しそうだってことだ。ケケケッ』

ジュペッタが不気味な笑いを漏らす。

「なるほど。しかし、私達を二手に分けた手際のよさは賞賛に値しますが、それでもこの戦力差。覆せなどしませんよ」

ミュウが両手にエネルギーを溜めていく。

「あら、それはどうかしらね」

ロザがポケットから小型の装置を取り出す。スイッチが中央に備え付けられている。

「【ダーククリスタル】起動！」

スイッチを押すと、部屋の中央に設置されている黒い結晶体が漆黒の輝きを放ち始める。

「なんだ・・・この感覚」

フォックが両手を見つめる。

「何をしようと無駄です！波動弾！」

ミュウが波動弾を放とうとするが、両手の中で霧散してしまった・・・。

「馬鹿な・・・！？」

「グラスミキサー！」

ウィアの技もシュウウウと言う音を立てて消えてしまう。

「【ダーククリスタル】は周囲のエネルギーを吸収し蓄積する特殊な結晶なのよ。あなた達が技を使おうとしても、エネルギーが収束する前にクリスタルがそれを吸収してしまうというわけ」

「まあ、私達はクリスタルの影響を受けませんがね」

ヨノワール達が戦闘態勢に入る。

「さあ、【スキエンティア】の科学力を見せてあげるわ」

ロザの全身からオーラが溢れ出し、彼女を包む。

大きなつば広の紫色の帽子、そしてマント。赤い目・・・

「あれは・・・ムウマージの特徴・・ということは、彼女は人間ベースのキメラ・・・ですかね」

ミュウの目が驚きで見開かれる。

「これがエリカの研究成果かよ・・・人間とポケモンの合成体（キメラ）とは・・・！！」

ゼクロムも言葉が続かないようだ。

「始めましょうか」

ムウマージの特性「浮遊」を得たロザがふわりと浮かぶ。

戦いが始まろうとしていた。圧倒的に不利な戦いが・・

そして丁度その頃、ブラウン少将達も廊下の突き当たりから大部屋に入っていた。

「大きな部屋ですね」

クーが銃を構えながらも感心する。

敵は居ない。部屋は無人で、奥に扉があるのみだ。

「このまま進めそうね」

イクスや他のＵＳＡ２隊員が突入しようとするが・・・

「待て」

ブラウン少将の一声で全員の歩みがピタリと止まる。

「・・・そこか」

ピピピピピ・・・

少将は素早く右斜めを振り向く。既に左足には光が収束している。

ブウン

一閃のレーザーが何も無いハズの所を貫く。

「ぐぅ・・・」

呻き声が聞こえる。ポタ・・・ポタ・・・と空中から血が滴る.

すると、何も無かったまさにその場所に一人の青年の姿が現れる。

色黒の青年、アキラはレーザーで貫かれた右足の太ももを押さえ膝を付き、痛そうな表情で喘ぐ。

「なんや、幻影で姿隠してたんやけど・・・先手取られるとは予想外やで・・・」

といいつつもアキラの太ももの傷が急速に治癒していく。

どうやら前にジュンと戦ったときよりパワーアップしているらしい。

「しかしおかしいやん・・・自分は前俺の幻影に囚われたはず。なんでや・・・」

そう言いつつ、アキラの容姿が変化していく。

黒く首までかかっていた髪が赤くなり、腰まで伸びる。

両耳がまるで狼のような形に変化し、目元に赤い縁取りが発生し、黒目は澄んだ青に変わった。

アキラの体に組み込まれているポケモン、ゾロアークの特徴が随所に現れている。

「私は今少し真の力を解放しているのでな」

「ふぅん。まぁええ・・・」

アキラが両腕をクロスさせると木の根が生え、少将達に襲い掛かってくる。

バンバンバンバン

クーやイクス、ＵＳＡ２隊員達が迫り来る木の根に発砲するが全く効果が無い。

「落ち着きたまえ！あれは幻影だ！」

少将の言葉も虚しく、クー達は幻影に絡め取られてしまった。

「少将！頭では分かっているのですが・・・体が動きません！」

「・・・クー准尉。離したまえ。他の皆もだ」

「し・・しかし・・」

「幻影によって同士討ちされられたらどうする？幻影で操られて、銃で仲間を撃ち殺したいのかね！？早く手から離せ！これは命令だ！」

ブラウン少将の鋭い一声にクー達は圧倒されつつも、銃を手から離す。

カシャン

銃が床に落ちるのを見てから、少将はアキラに向き直る。

「さて、青年。私がお相手をしよう。私ならば幻影の効果を半減できる」

「少将！そんな―」

「イクス准尉、他の皆も私が守ろう。今幻影に囚われず戦えるのは私だけだからな」

「へぇ・・・イーブイの自分がなぁ。でも完全に幻影の力を受けへんわけでもなさそうや。さっきの俺の幻影に惑わされてたところをみるとな。まぁええ・・・少将さんとお手合わせできる機会もそうなさそうやしな」

「私はフリードリヒ・フォン・ブラウン。陸軍情報部のトップ、少将の名にかけて部下に手を出させはしない！」

ここでもまた今激戦が始まろうとしていた―

第八十一話　それぞれの戦い　（後書き）

次回からジュン達、ミュウ達、少将達の別々の視点で進んでいくよていです。

番外編　各々のクリスマス（前書き）

今回はエリカの元に乗り込む前の話です。

重要な情報も含まれていますので、短編にせずにこっちに掲載しました。

長いです（汗）

時間軸がずれてしまいますが、ご了承ください。

番外編　各々のクリスマス

「ジングルベ～ジングルベ～鈴がぁ鳴る～今日は楽しいクリスマス、イェイ♪」

「・・・何やってんだファオ」

歌いながら陸軍情報部に入ってきたのはバシャーモのファオ曹長だった。

無駄なハイテンションで扉を開けると、ピースをして足取りも軽く自分の席に座る。

そんな部下の能天気な姿にユウタはため息をつきながら突っ込む。

「え～だって今日はクリスマスですよ♪」

ファオは机の上の散らかった書類をザザザと端に寄せる。

それが隣で仕事をしていたK(カー)軍曹の書類を押し倒す結果になり、カーが嫌そうにファオ睨むが、本人はまったく気にしていない。

「俺達軍人にクリスマスなど無い！」

そう断言するとユウタは書類整理を始めた。

そう、ここは陸軍本部。そして世界一個性的な軍でもあるだろう（いろんな意味で）

よくポケモンハンターの少年がふらりと入ってきては、食堂（もちろん軍関係者用である）で、味に文句をつけながら食事をし帰って行ったりするが、そんなことは序の口である。

「あ、そういえば大佐に書類取りに来いって言われたな」

面倒だが、さっさと取りに行った方が気が楽だ。

ユウタは必要なことはさっさと終えたいタイプである。

トントンと書類をまとめ机に置くと、ユウタは司令官室に向かう。

少し立腹らしく、足音が荒い。

階段を上がり、廊下を歩いていく。

（まったくクリスマスなどと浮かれやがって。常に気を張って平和のため、国益のために尽くしていかなきゃならん軍人がそんなことで・・・ん、これは・・・）

そしてユウタは司令官室の前でピタリと立ち止まる。

なにやら楽しげな音が聞こえてくる。鼻歌・・とでも言うのか・・・。

「まさか・・」

嫌な予感がしたが、意を決してユウタは扉を開けた。

「真っ赤なお鼻の～トナカイさんは、いっつも皆の笑いも・・おお、

イプシロン中尉。何か用かね？」

そこには上官であるロス大佐がモミの木に飾り付けをしている光景が広がっていた・・・。

既に金銀のモールと雪モールが彩っている・・・。

言葉を失いかけたユウタだが、直ぐに気を切り替える。

で、質問してみた。

「・・・何してるんですか、大佐」

「うん？何って見れば分かるだろう？クリスマスツリーを飾っているんだよ」

そう言って上機嫌で雪だるまの人形をツリーに吊るす大佐を見て、ユウタは眉根を抑え呻く。

「アンタ何歳ですか・・・それと自分の立場をわきまえた行動をなさって下さいよ・・・大佐なんですよ、大佐！！」

「まあ固いことを言うな中尉。あ、そうだった書類だったな。ほい」

と、重要書類を投げてよこすロス大佐。急に疲労感がこみ上げてきたのは気のせいではないだろう。

「・・・では、俺はこれで―」

「あぁ待ちたまえ、中尉。君も飾り付けを手伝ってくれ」

「・・・何故」

「今日はクリスマスだからだ」

チッチッチと指をワイパーのように振るロス大佐にユウタは深いため息をつく。

「了解しました、大佐」

「では、ツリーの反対側にクッキー・マンを吊り下げてくれ」

ロス大佐がユウタに人形を渡す。茶色いマスコットだ。

「はぁ・・」

上官の命令（と言っていいのかどうか・・・）には逆らえず、ユウタはツリーをデコレーションしていく。

３０分後・・・

立派に彩られたツリーが出来上がった。

（結構綺麗なもんだな・・・）

思わず顔を綻ばせるユウタ。が、直ぐに気を引き締める。

「では失礼します」

ペコリと一礼すると、司令官室を後にする。

（まったくこの軍は・・・もうちょっとなんかこう・・・ならんもんかな・・）

ロス大佐から受け取った書類を脇に抱え、ユウタは廊下を歩いていく。

そういえば、やはり年末でクリスマスだけあって軍内部も何時もより賑やかだ。

廊下の壁の上部両サイドに金銀のモールが飾られているが、気に留めずに進んでいく。

カチャリ

情報部の扉を開け、憮然とした表情で椅子に座る。

「どうしたんですか～中尉」

ファオが軽いステップを踏みつつユウタの椅子の背もたれに手を置く。

いつもにも増してうざいが気にしないことにした。

そんな事を気にしていたらこの軍では働けなどしない。

「ん、ちょっとな。この軍の行く末を案じていたところだ」

「陸軍のですかぁ～大丈夫ですよ、絶対」

ニコニコと根拠の無い事を言うファオ。疲労感がさらに３０パーセント増加した。

「はぁ・・」

ユウタは本日何度目かのため息をつくと、手持ち無沙汰に手帳をパラパラとめくる。

「今日は特に会議とかの予定無しだな」

その時。

カチャリ

一人の人物が情報部に入ってきた。

「すまんが、イプシロン中尉に用がある」

「俺に何・・・か・・・」

入ってきたのは田辺智（たなべ さとる）。３１歳。

強面の陸軍少佐であり、優れた指揮官として戦場も経験している人物だ。

が、何時もと様子が違う。

きっちりと着込んだ軍服の脇にはトナカイの着ぐるみを挟んでいる。

（あ・・悪夢だ・・これは何かの悪夢に違いない・・・！）

ユウタの疲労度がさらに上昇する。もう帰りたくなってきたユウタに田辺少佐は近寄ってくる。

「イプシロン中尉、大佐から受け取った書類を渡してくれ。こちらの書類が混じってしまっていたんでな」

トナカイの着ぐるみを片手に、至極真面目な声を発する田辺少佐。

「あの少佐・・・その・・着ぐるみは・・」

ユウタは辛うじて平常心を保ちつつ、田辺少佐に先ほどの書類を渡す。

「ああこれか。実はな直ぐ後に小学校でイベントに出なくちゃいけないんだ。で、今日はクリスマスだし、トナカイの着ぐるみを着て出席することになってな。ま、これも任務だよ。軍のイメージ改善のための広報活動みたいなもんだ」

「しかし、何故本部で持ち歩いていらっしゃるのですか・・・」

「この着ぐるみは持参しなきゃいけないんだ。で、俺もわざわざ買ったわけだが、この後直ぐにイベントに出なきゃ行かんのでな。袋に詰める暇が無かったんだ・・っと、いかん・・・小便を我慢しているんだった」

田辺少佐はユウタから受け取った資料から数枚を抜き取ると、バタバタと走っていった。トナカイの着ぐるみを脇に抱えたまま。

（終わりだな・・陸軍（うち）も・・・）

返してもらった資料を整理しながら、はぁとため息が漏れる。何度目のため息だろう。

「どうしたんですか?ため息なんかついて」

横で仕事をしていたクーが小首を傾ける。クーもクーで、トナカイの着ぐるみを片手に持った田辺少佐に何の感情も抱いてないようだ。

（まともな良識を持っているとこの軍では疲れるな・・・）

トナカイ着ぐるみを持ち歩く少佐に司令官室内にクリスマスツリーを飾る大佐。

ホモでアホな曹長を筆頭とした変り種の部下達。

これもこの陸軍の特色なのだろうか・・・。多様性では片付かない気もするが・・・。

「いや・・いろいろと疲れがこみ上げてきただけだ」

「年末ですからね。まぁ今日は手早く仕事を片付けて、家に帰りたいですよ」

「え、じゃあ・・・クリスマスパーティでもしませんか?」

と、クーの言葉を受けて反応したのはファオの横で仕事をしていたK軍曹(カー)だ。

K軍曹は新入りの情報部員で、元々は海軍出身だ。本名は霧谷淳(きりたにあつし)。

２３歳で女性と付き合ったことは無しの奥手な青年である。
低い背たけで、まるで少年のような面持ちである。
補足しておくと、ファオのお気に入りの一人だ。少年らしい童顔とトーンの高い声がたまらないらしい。

「お、ナイスアイデアだぜ、カー！」

ファオがカーの小柄な肩に手を回し、頭をなでなでする。
身長が１６５?しかないカー軍曹にとって、身長１８７ｃｍなファオはまさに天から見下ろされる感じだろう。

「や・・止めてくださいよ!曹長!」

「その少年のような声のトーンもいい感じだぜ」

ファオはニヤニヤしながらカーを離す。カーは肩で息をしながら、乱れた軍服の襟を直し、仕事に戻った。

「クリスマスパーティね・・なかなか面白そうですね。ぜひやりたいわ～」

サーナイトのイクス准尉もこのアイデアが気に入ったようだ。
が、ユウタは苦い顔をしている。

「クリスマスパーティだと・・・めんどくせぇ」

チッと舌打ちするユウタにファオはえー！と不満の声を上げる。

「ほう、面白そうではないか。ぜひやりたまえ」

そんな中入ってきたのは、イーブイのブラウン少将だ。

「私の邸に来ればいい。広いだけが取り柄の家だ」

そんな少将の提案にユウタ達は顔を見合わせる。

「しかし、お邪魔では・・・」

ユウタの言葉に薄っすらと微笑むブラウン少将。

「家には私と、執事とコックしかおらん。遠慮はするな。私も寂しさが晴れてそちらのほうが嬉しい」

「じゃあお言葉に甘え・・ちゃっていいんだよな・・・」

流石に少将宅に招かれるのは緊張するらしく、ファオの語尾にも力が無い。

「では、これが私の家までの地図だ。待っているぞ」

ブラウン少将は机に飛び乗ると地図をユウタに押し付け、情報部から出て行った。

「これはお招きに預かったほうがよさそうですね」

イクスが腕を組みながら言う。他の部員も同意見のようだった。

「まぁ・・な。仕事が終わった後に行かせてもらうとするか」

ユウタも少将の好意を断るのはまずいと思い、頷く。

「じゃ、ちゃっちゃと仕事を片付けちゃいましょうよ！」

「俺もファオ曹長に賛成です。クリスマスパーティには仕事を全部終わらせてから出席したいですし」

カーもファオに同意する。

（ま、気を抜くのも大事だよな）

そう思い直すと、ユウタ達は仕事を再開したのだった。

が、数分もしない内に・・・なにやら外が騒がしくなってきた。

「何の騒ぎですかね？」

イクスがサイコキネシスでカーテンを開け、外を覗き込む。

音が近づいてくる。鈴のような音だ。

（何の音だ・・？）

気になったユウタは席を立つと、窓から外を見る。

シャンシャンシャン

何かが陸軍本部に来る。赤と白を基調とした誰でも一度は見覚えがあるであろう衣装を身に纏っている。

「あれ・・・サンタさんじゃないすか？」

ファオがポカンとする。

サンタさんである。見まごう事なきサンタクロースだ。

子供達の夢。クリスマスの親のもう一つの顔。家宅侵入罪もなんのそのな赤白老人、サンタ・クロース。

それが陸軍本部に向かってソリを引いて飛んできているのだ。

ただし、ソリを引くのはトナカイが定番だが・・・引いているのはトナカイの被り物をしているボーマンダだ。

シャンシャンシャンシャン

鈴の音が近くなってくる。下を見ると陸軍本部入り口付近に大勢の軍関係者が集まっている。

「・・・下に行くぞ」

ユウタもファオ達を引き連れて、一階を目指し情報部を跡にした。

陸軍本部の入り口付近には多くの制服を着た隊員達がごった返しして、空を指差して騒然としている。

「おい、あれ・・・サンタじゃねぇか？」

「信じられないな・・・」

「しかもなんで軍に近づいてんだよ!?」

そうこうしている間に、トナカイの被り物をしているボーマンダに引かれたソリは陸軍本部の広場に静かに着地した。

白ひげを蓄えた、サンタ・クロースは袋を背負うとこっちに歩いてきた。

「銃を構えておいたほうがいいんじゃ・・・」

そんな中一人の隊員がベレッタを構えようとするが・・・

「おまっ相手はサンタさんだぞ!そんな物騒なもんみせんじゃねぇ!」

「サンタに銃なんか向けんな!」

他の隊員によってねじ伏せられてしまった。

「痛ってぇ・・何すんだよ!あのサンタが武器を所持していることも考えられ―」

「ふぉっふぉっふぉ。メリークリスマス」

その隊員が涙目で怒鳴り返していると、サンタはその隊員の近くに立つ。

「お名前は？」

「え・・えっと・・自分は・・鈴木・・修一で、階級は伍長です」

急にサンタさんに名を聞かれしどろもどろになりながら答える鈴木伍長。

「ほう、ではメリークリスマス」

微笑むと、鈴木伍長に白い袋から包装された箱を取り出すと手渡す。

「はぁ・・ありがとうございます・・・」

「ふぉっふぉっふぉ、君達にもプレゼントだよ」

サンタは足取りも軽やかに周囲の軍関係者に次々と白い袋からプレゼントを渡していく。

一同は呆然としつつも、プレゼントを受け取っている。

不審者なのだから取り押さえるべきなのだが・・・相手は見た限りサンタであるため、驚きも交わってその場に凍り付いていた。

そして、サンタはユウタの目の前まで来た。

「ふぉっふぉっふぉ、メリークリスマス」

「そうですね・・」

「はい、プレゼントだよ。ユウタ」

適当に合わせていたユウタだが、その一言で驚きの眼差しでその人物を見る。

（今の言葉遣い・・・それに俺の下の名を迷いもせず呼んだ・・・こいつは・・）

「ジュンか！？」

プレゼントを受け取りつつ、ユウタは小声でサンタクロースに尋ねる。

「ふふ、そうだよ。青いカラーコンタクトを入れてこの服を着るとサンタさんでしょ？この顔の皺とかは特殊メイクだよ。丹念に調べないと本物のおじいちゃんに見えるでしょ」

小声で返すジュン。確かによく見れば・・・特殊メイクに見えなくも無い。

「なんで・・これは一体・・？」

「今日はクリスマスだからね」

サンタクロースこと、ジュンタクロースは少しつけ髭奥で微笑むと、ファオ達のほうに向かう。

（この人達にもプレゼントを上げなきゃね）

「おお～俺にもプレゼントくれるのか！？」

ファオはサンタがジュンであることに気づいていないらしく、わくわくしながらこっちを見ている。

（ファオさんには決めてあるんだよね・・・）

ジュンタクロースは白い袋から一冊の包装されている本を取り出す。

「ふぉっふぉっふぉ、メリークリスマス♪」

ファオの軍服の胸あたりにその本を押し付けるように渡す。

「おお～なんだろなぁ～」

その場でガサガサと梱包を破っていくファオ。中の本を見た瞬間、かなり興奮したようだ。

「お～俺好みの男の写真集だ。すっげ～さすがサンタだぜ！俺の趣味をよく分かってるなぁ♪」

ファオは本に頬擦りをして喜んでいる。

（ま、ファオさんの場合プレゼントすべきものがハッキリしているからね）

「ふぉっふぉっふぉ、メリークリスマス」

イクス、クー達にもプレゼントを渡していく。

「あら、いい感じのネックレス。１８金ね。ありがとう、綺麗だわ」

イクスもプレゼントの金のネックレスを首にかけ満面の笑みを浮かべている。

「ふぉっふぉっふぉっふぉ」

サンタになりきっているジュンはそのまま、陸軍本部内に入っていく。

「ちょ・・サンタが本部内に入ったよな・・・今」

顔を見合わせる隊員達。直ぐに後を追って行ったのだった。

「メリ～～クリスマァス！」

サンタクロースに扮したジュンは陸軍の廊下を歩いていく。

すれ違う軍の関係者達は驚きで目が皿のようになっているが、気にせずクリスマスプレゼントを渡していく。

プレゼントを渡され、呼び止めることも出来ずポカンとそのままその場に直立不動になっている隊員達を見るのはジュンにとって結構面白かった。

（さてと、ロス大佐やブラウン少将にも渡さないとね）

“ジュンタクロース”の仕事はこの本部の全員にクリスマスプレゼントを配ることなのだ。

それに宣伝もしなきゃいけないし。いや、予告状に近いかな・・・。

「クリスマスだからねぇ」

独り言を呟くと、ジュンはロス大佐の部屋の前に立つ。

カチャリ

「メリークリスマス♪」

ドアを開けて中に入ると、驚いた表情のロス大佐がクリスマスツリーの横で紅茶を飲んでいるところだった。

「・・・君は・・あの有名なご老人・・サンタクロースかね・・？」

「ふぉっふぉっふぉ、メリークリスマス」

ジュンは答えずに代わりにプレゼントをロス大佐の机の上に置く。

手を振ると、プレゼントとジュンを交互に見返すロス大佐を置いてジュンは部屋から出て行った。

「さてと、後は・・・」

ブラウン少将の部屋だな。

陸軍本部の最上階、ブラウン少将の司令室を目指す。

階段を上がり、着いた先には司令官室が。

扉を開けると、中でブラウン少将が仕事をしているところだった。

パソコンの前に座り、前足で器用にキーボードを打っている。

サンタに扮したジュンを見るなり、少将の目が少し驚きで開くが直ぐに口を開いた。

「ジュン君、そんな奇抜な格好で何の用かね？」

「やはり分かりましたか」

「私の嗅覚を侮ってもらっては困る。人間の比ではない」

フンと鼻を鳴らすと少将はマウスをクリックして書類を保存し、ジュンと向き合う。

ジュンはサンタの付け髭を取り、特殊メイクのマスクを引っぺがすと袋からガサガサと用意いていたプレゼントを差し出す。

「メリークリスマスです、ブラウン少将」

「貰っておこう」

少将はプレゼントを憮然とした態度で受け取る。

「で、君はわざわざ陸軍本部の皆にプレゼントを届けるために来たのかね？それとも何か別の目的があるのか・・・言いたまえ」

ブラウン少将のイーブイ特有の丸い目が光を帯びる。疑っているようだ。

「嫌ですね、深読みのしすぎですよ。まぁちょっとしたサプライズは用意していますけどね」

「・・・サプライズだと？」

「まぁそれは後で。その前に用意したプレゼントを開けてくださいよ」

ジュンの言葉にブラウン少将は視線をプレゼントにやると、前足の爪で包装を切り裂いていく。

「何だね、これは」

右前足でプレゼントの中身を掴み出す少将。そこには小さなサンタの衣装が入っていた。

「特注のサンタさんの衣装ですよ」

イーブイの体に合うように作られたサンタクロースの衣装。

「・・・私にこれを着ろと？」

「ええ、ほら軍服脱いで着てくださいよ」

ジュンはブラウン少将の両前足の脇に手を突っ込むと、無理やり脱がせる。

ブラウン少将の頬がカッと赤くなり、ジュンの腕の中でバタつく。

「な・・何をする！？止めたまえ！私は３６歳の大の男なのだぞ！？こんな格好が出来るわけがなかろう！！」

「いいじゃないですか。少将の魅力は可愛いイーブイなのに声は経

験をつんだおじさんなところなんですからね」

ブラウン少将から軍服を剥ぎ取ると、特注の小さなサンタ服を着せる。

「それで上にボンボンのついた帽子を被せると・・ほら」

ブラウン少将は部屋にある鏡で自分の姿を見る。サンタ服を着たイーブイの姿が映っていた。

「可愛いですよ、少将。ブラウン少将クリスマスカラーＶｅｒとして陸軍に末永く語り継がれることでしょう」

「・・・似合っているのか・・私に・・この格好が？」

右前足で帽子の角度を直してみるブラウン少将。決して口にこそ出さないが気に入っていたようだ。

「似合ってますよ。落ち着いて知性溢れる中年男性の声と外見とのギャップが素晴らしいです」

「そう・・なのかね。まあ、それはいいとして。で、ジュン君」

少将はサンタ服を着用したまま、真面目な顔に戻る。

「君はつまるところ何のためにここに来たのかね？先ほどの言動から察するにプレゼント提供以外の目的があるのだろう？」

「・・・エリカの海上研究所への乗り込みが目前に迫っていますね？その件についてお話が」

「わざわざサンタの格好で来たのには・・・まぁ君のことだ。単にからかいのためだろうが・・・で、話とは？」

ジュンは少し微笑むと口を開く。

「エリカを倒した後、国際安全保障軍ＵＳＡ２のことについてです。率直は話、あの軍は世間に広まるであろう大スキャンダルでどうなると思いますか？」

その問いにブラウン少将はしばしの間を置いてから答える。

「恐らく解体されるだろうな。テロリストとの自作自演の戦いをさせてきたトップは逮捕され、残った兵員達は他の軍に入隊しなおすことになるだろう・・・だが、再就職できぬ隊員も多く出てしまうはずだ。・・・心苦しいことだが・・・」

ふうとため息をつくと、ブラウン少将は窓の外に目をやる。悲しい表情をしている・・・少なくともジュンにはそう見えた。

「世間からは白い目で見られるだろうしな。何も知らぬ隊員達にとってはこれ以上の苦痛はなかろうな・・・信じていた軍には駒として利用され、世間からは犯罪者扱いされるだろう・・・私も陸軍枠で出来るだけ多くを受け入れる準備をしているところだ」

外には雪が降り出していた。陸軍本部の外からは街から溢れ出す光が美しいイルミネーションとなり輝いているのが見える。

「心に闇を抱えて・・ですね」

「・・何のことかね？」

ポツリともらす独り言。ブラウン少将が怪訝そうな顔をする。

「いえいえ、まぁそこまで聞ければ十分です。僕の推測に裏打ちが出来ました」

「推測・・ジュン、君は―」

呼び止めようとする少将に微笑んで、ジュンは司令官室の扉に手をかける。

「ブラウン少将。目の前の敵はエリカです。しかし、将来の敵は誰なのか・・・それは分かりませんね」

そういい残すとジュンは司令官室を後にした。陸軍の廊下の窓を開けると既に待機していたボーマンダに乗ると、空の向こうに飛んでいったのだった―

＊＊＊＊

「一体なんだったのだ・・・」

ブラウン少将は窓からボーマンダに乗り飛んで行くジュンを見ながら一人呟く。

「うむ・・これは・・」

と、ブラウン少将はプレゼントの箱に小さなカードが入っているのに気がついた。

拾い、カードの裏を見てみるとそこには文字が刻まれていた。
Sの文字の下にZの文字が重ねられている・・紋章か何かか・・
「ジュン君の秘めたるメッセージか何かか・・？」
カードを横に置くとブラウン少将は仕事を再開したのだった・・・。
そして暫らく後、仕事が終わってからユウタ達はブラウン少将によって渡された地図を片手に歩き回っていたのだった。
「そろそろ着くはずだがな」
クリスマスパーティには情報部の殆ど全員とロス大佐も参加することになった。
ユウタは地図と町の様子を見比べる。
「あれではないのか？」
ロス大佐が指差した先には大きな豪邸が建っていた。
「うへぇ・・デカイですね」
見上げるカー軍曹。
「ようこそお待ちしておりました」
一人のエルレイドが邸の庭から出てくる。

門をキィィィと静かに開けるエルレイド。

執事の服を着ていることからブラウン少将に仕えているバトラーだろう。

「私(わたくし)はこの家に仕えております執事のレイドでございます」

ぺこりとお辞儀をするエルレイドのレイド。

「ご主人様がお待ちです。皆様どうぞ中にお入りください」

美しい庭に見とれつつ、執事のエルレイドについて行くユウタ達。

「しかし立派な御邸宅ですね・・・庭も手入れが大変でしょう?」

ロス大佐の言葉にレイドは品のいい笑みを浮かべる。

「ご主人様は庭で食事を取るのがご趣味ですので、花々の手入れを怠らぬよう心がけております。確かに大変といえば大変ですが非常にやりがいを感じておりますよ」

「ブラウン少将は独身で?・・・ご家族はいらっしゃらないのですか?」

大佐の問いにレイドは少し間を置いてから答える。

「私は16年前からご主人様に使えておりますが未だに独身でいらっしゃいます。ご主人様はご家族の・・自身の過去の話を滅多にお話になりません。が、どうやらご両親のことはお知りではないご様子です」

「つまり・・天涯孤独ということ・・ですか」

ファオが気品溢れるレイドになれない敬語口調で言う。

「ええ。そのようでございます。この土地と邸宅も私が仕え始めたころには既に所有なさっていましたし・・・」

「え、では親から土地を継いだわけではないのですか?」

横からイクスが口を挟む。

「そのようでございます」

とそこまで話しているとレイドがピタリと歩みを止める。

そして大きな扉を開ける。

レイドに続きユウタ達も入っていく。

邸の中はまさに城のような様子だった。

「すっげぇ・・・城かよ・・」

ファオが感心したようにキョロキョロと周りを見回す。

「この壺とか高そうだなぁ」

カーが飾ってある壺を眺め、つついたりしている。その姿を見て、イクスが少し注意をしたのだった。

「カー・・・その壺割らないようにね。５００年ぐらい前の美術品よ。軽く１０００万はするわ」

「うへぇぇぇ!?」

驚いて飛び退るカー軍曹。

「な・・なんで分かるですか?」

「その壺の絵柄・・・金箔でカイリューの絵が描かれているわ。その絵柄と壺の形から大体の年代ぐらい分かるわよ」

「なかなかの目利きだな。イクス准尉」

そんな中歩いてきたのはブラウン少将だった。

サンタさんの服装で歩いてい来る少将の姿にユウタ達の目が釘付けになる。

「ようこそ、私の邸へ」

笑顔で出迎えてくれる少将だが・・・

（に・・似合い過ぎる・・・）

一同の心にはそんな思いが浮かんでいた。

白いボンボンのついたサンタの帽子に、赤と白のサンタ服。ジュンから貰ったイーブイ用のサンタ服一式を着ているのだ。

似合いすぎるのも困りものだ。

どう反応していいか分からないユウタ達をフォローするようにレイドが前に出る。

「ご主人様は奥の大広間でお待ちくださいませ。私が邸の案内を・・・」

「いや、レイド。俺がしておこう。お前は休んでいてくれ」

主語の一人称が私から俺になっているところを見ると、家で寛いでいることが分かる。

そう言ってブラウン少将は歩き出す。ユウタ達もその後を追っていく。

「この廊下の突き当たりにトイレがある。覚えておきたまえ」

ブラウン少将は右前足でスッと廊下の突き当りを指す。

「そしてこの階段から2階・・・右から二番目の間は絵画が展示してある。興味があれば見ていくといいぞ」

「しかし大きいお宅ですねぇ」

ファオの言葉にブラウン少将が快活に笑う。

「まあ・・大きいだけが取り柄だよ」

「ブラウン少将・・・廊下に飾ってある絵も全て本物ですわね」

イクスが感心したように言う。

「その通りだ。ここに展示してある絵は全て本物だよ」

「全部購入なさったんですか？それとも親から継ぎなさったとか・・・」

そんなイクスの問いを聞いた瞬間、少将の顔が曇る。

「うん・・まぁそんな所だな。さ、皆そろそろ食事が出来上がっているころだ」

踵を返し、歩いていく。

（なんか急に歯切れが悪くなったな・・・）

が、個人的な理由を詮索するのは失礼な気がした一同は黙って少将の後をついて行ったのだった。

「うほぉ～美味そう」

ファオが並べられた豪勢な食事に涎を流す。

「確かに豪勢ですね・・・というかいいんですか、このような食事を振舞ってもらって・・」

ユウタは些か引け目を感じているようだ。

それもそのはず。映画に出てくるような長いテーブルには白いテーブルクロスがかけられ、豪華絢爛な食事が用意されていた。

ユウタ達情報部の皆でも食べきれるかどうかのギリギリの量だ・・・。

全員が着席した頃合を見計らいブラウン少将が口を開く。

「さて、諸君。私の邸に集まってくれて例を言う。今日はクリスマスパーティだ。楽しくやろう」

といってグラスを掲げる。

「メリークリスマス」

「「メリークリスマス！」」

その言葉に大勢が一斉にグラスを掲げたのだった。

まさに至福のひと時だった。皆が楽しく笑いながら食事を楽しんでいた。

ユウタは未成年なので飲酒こそ出来ないが、美味な食事に舌鼓を打っていると・・・ブラウン少将が近づいて来る。

「どうだ?楽しんでいるかね?」

「ええ・・・有難うございます、少将。こんな楽しいひと時を・・・」

「私も嬉しいよ。こうやって大勢が集まることは滅多に無い・・・

そういえば君達のプレゼントにもこれが入っていたかね？」

少将が懐から一枚のカードを取り出す。

ジュンのプレゼントの箱に入っていたSとZを重ね合わせた紋章が刻まれているカードだ。

「それは・・俺のプレゼントに入っていたのと同じものですね」

そう、ユウタへのプレゼントにも同じものが同封されていたのだ。

「あ、それ私のプレゼントの包装の中にも入ってましたよ」

「俺の本にも挟んであったです」

イクスやファオがポケットから取り出したカードにもSとZを重ねた紋章が刻まれていた。

「ジュンの奴何を考えているんだ」

ユウタも首をかしげる。見たことの無いマークだ・・・。

「まぁジュンのことだし何か考えがあるんだろ。俺には分かんねぇけど」

ファオが頭をボリボリと掻きながら首を傾げる。

「今は食事を楽しむことに専念すべきかもしれんな。この謎はまた後日ということにしておこう」

ブラウン少将の一言にユウタ達は頷き、食事に戻ったのだった。

＊＊＊＊

「う～ん・・・もう食べられない・・・」

机に突っ伏して寝ているのはファオ。どうやら酒が回って寝てしまったらしい。

「今日は楽しかったですね」

クーもほんのり頬を赤らめている。ほろ酔いしているようだ。

イクスやカーもほろ酔いで気分よくしている中、ユウタだけは酒を飲まずちびちびとウーロン茶を啜っていた。

（酒が飲めないとつまらんな・・・）

「そろそろお開きにしたほうがいいんじゃないかしら・・・遅くなってきたし」

チラリと時計を見るイクス。

「帰るのかね？」

ブラウン少将も頬を赤らめながら歩いてい来る。相変わらずのサンタファッションだ。

「ええ・・今日は有難うございました。楽しい一時を過ごさせていただいて・・・」

ユウタの礼に少将は微笑む。

「構わんよ。私もクリスマスぐらい大勢で過ごしたいと思っていたからな」

ぞろぞろと集まった情報部員達が口々に礼を言いながら帰っていく。

「じゃ、私もこれで」

「僕もです。お先に失礼します」

「私もお暇しよう」

イクス、クー、ロス大佐が部屋から出て行く。ファオを置いたまま。

「ちょ・・待て！俺にファオ押し付ける気か！？」

見事によって寝ているファオを押し付けられたユウタはがっくりとうな垂れる。

「好きなときに帰ればいい。後酔って寝ているファオ曹長を頼むぞ」

ハハハと笑いながら少将が大広間から出て行く。レイドも笑みを浮かべつつ奥の部屋に引っ込む。

「はぁ・・おい、起きろ」

「う～ん」

ゆさゆさとファオを揺するが反応が無い。

「起きろ！ファオ！おい、エロバシャーモ！アホ！とっとと起きろ！殺すぞ！」

「・・・ぐぅ～～」

（ムカつくぜ・・・こうなったら）

「おい、飯だぞ」

「飯！？」

ガバッと起きるファオ。キョロキョロと周囲を見渡す。情けなさの極みである。

「起きたか」

腕を組んで不機嫌そうなユウタを見る。

「あれぇ～中尉。何で皆居ないんですか？」

「寝ぼけるな、馬鹿。皆もう帰ったよ。お開きだ」

そう言ってユウタもバッグを背負う。

「お前もさっさと帰れよ」

「は～い」

が、かなり酔いが回っているらしく足取りがかなりおぼつかない。

ふらふらと歩いて物に足をぶつけて転びそうに為っている。

（こりゃこのまま帰したら確実に事故るな）

はぁとため息をつくと、ファオに近づく。

「肩を貸せ。酔いがさめるまで一緒に帰ってやる」

「すいませんねぇ～」

寄りかかってくるファオ。正直身長差がありすぎてしんどいがぐっと堪えてユウタは歩き出した。

邸の庭をファオと共に歩く。

滅多に無い機会だ。部下と共に綺麗な庭を歩くなど。空には雲ひとつ無い。星が宝石箱をひっくり返したように夜空に散りばめられ、闇の中で輝きを放っている。

「中尉と一緒に庭園を歩くなんて最高のプレゼントですよ・・・・俺、今すっごく幸せです」

そんな中ファオが先ほどの酔った目ではなく、しっかりとした目になって言う。

その言葉からは真剣なオーラが漂っていたため、ユウタは何も言わなかった。

「酔いが冷めてきたようだな。なら、一人で帰れるな？」

「この庭歩いているうちに覚めちゃいましたよ。外の冷たい風も酔いを醒ましてくれました」

「じゃ、俺はこれで」

ユウタは背を向けて帰る。

「メリクリです、中尉！」

ファオの嬉しそうな声にユウタは一瞬振り向きかけたがそのまま歩いていった。

（メリークリスマス、ファオ。こんなクリスマスもいいもんだ）

ほのかな幸福感を胸にユウタは歩いていったのだった―

番外編　各々のクリスマス（後書き）

と、いうことでクリスマス企画・・・です、はいｗｗ

第八十二話　ブラウン少将ＶＳアキラ！　予想外の結末

「少将なぁ・・・えらい珍しいな、イーブイが軍の中枢とは」

「若造が」

ピピピピピ・・・

少将の前足に光が溜まっていく。

「おっと」

アキラがゾロアークの俊足を生かして駆ける。

ブウン

「痛っ！」

が、少将の放ったレーザーは的確にアキラの足を貫く。瞬時に回復するが、痛みがアキラの体に走る。

ブウン

さらにレーザーで追い討ちをかけるブラウン少将。閃光がアキラの足を再び貫いていく

「くそ・・やっぱ、何度も貫かれるのはキツイわ」

アキラの傷が急速に塞がっていく。超再生能力だ。

「幻影火葬！」

ゴオオオォォォ

アキラの手から業火が放たれる。

「ほう・・」

ブラウン少将は避けれたが、その炎はＵＳＡ２隊員の一人を包み込んだ。

「うわぁぁぁ！」

「落ち着きたまえ！これも幻だ！」

ブラウン少将の言葉も虚しく、その隊員はドサリと地面に崩れ落ちる。

「俺の幻影火葬はどうや？実際に火達磨になったのと同じ痛みを味わってもらうで・・」

「させん！」

ピピピピピ・・・

ブウン

ブラウン少将のレーザーが横腹を掠める。

「うぐ・・・痛いやん・・これはお返しや！幻影火葬！」

ゴオオオ

業火がブラウン少将を直撃する。

（何だこの感覚は・・・先ほどの幻影とは違う・・・実際の痛みに酷似しておる・・・！）

黙って“幻影火葬”に耐えるブラウン少将。

「どうや？さっきの幻影とは違うでぇ・・・自分が実際炎や熱いもんに触れた時の痛みを幻影火葬は再生させるんや・・・さっきのと違ってこの攻撃は実際に感じた痛みの経験を利用する技。効くやろ？」

「ぐぅぅ・・小賢しい！シャドーボール」

ブラウン少将が口元から黒いエネルギー弾を放つ。

「なんや普通の技も使えるんかい・・・守る」

アキラがそれを防ぐ

「幻影水波！」

今度は水流が押し寄せてくる。

（まずいな・・・今度は溺れかけた時の記憶を再生させる気か・・これを受けたら後ろの隊員達の呼吸が困難になる・・・防がなけれ

ば・・！）

ピピピピピ

ブラウン少将の右前足に光り輝く十字架が現れた。

ブウウン

レーザーの雨がアキラを襲う。先ほどの単発のレーザーと違い、威力こそ低いが流石に数十発の光の槍が肩・足・横腹を貫く

「ぐぅ・・」

幻影水波がシュンという音を立て消える。アキラがダメージを負ったことで幻影が解けたらしい。

「うう・・くそが・・・」

喉の奥から大量の血があふれ出る。

喀血するアキラ。ボタボタとTシャツに血が滴る。

血の何とも言えない・・・鉄分を含んだ気持ちの悪い味にアキラは吐き気を催す。

（超再生能力を使い倒してもやっぱ何度も何度もレーザーに貫かれるのはキツイわ・・・あかん、意識が朦朧としてきよった・・・）

血が混じった唾をペッと吐き出すと、アキラは口を服の端で拭う。

「なかなかやるやないか・・・俺ちょっとチビッたで・・・」

「ではもっと喰らうか？」

ブウン

「く・・」

何とかレーザーを回避するアキラ。

「幻影雷撃」

今度はアキラの手からほとばしる電撃が周囲に走る。どうやらこれも幻影のようだ。

「この幻影雷撃もさっきのと同じや。さぁ痺れてもらおうやないの！」

バチバチバチ

ブラウン少将の体を電撃が包む。体を襲う苦痛に少将の目がスッと細くなる。

（流石にゾロアークの力を仕込んでいるだけあるな・・・まるで本物の電撃だ。体が完璧に騙されている・・・）

「だが、所詮幻は幻。解除すればどうと言うことは無い」

バチチッ

刹那、ブラウン少将の体から放電現象にも似た青い光が走る。
幻影雷撃が霧散してしまった。ブラウン少将は自力で幻影を解除したのだ。

「やるやないか・・・俺しか解除できへん幻影を解きおったわ。幻影はかけた本人は容易に解けるけど、他人が解除するには相当なエネルギーが必要なんや・・・どっからそんな力が・・・」

と言いつつもアキラは悪の波動を連射する。黒いエネルギー弾が少将に迫る。

が、少しも慌てる素振りを見せない。

「既に君の攻撃は見切っている」

ポツリと漏らす。

ブラウン少将の目の前に青いエネルギーの盾が発生し、悪の波動を全て防ぐ。

「自分不思議な奴やな・・・『守る』の技にも似てるけど、全くの別モンや。ホント何者なん」

驚きの表情のアキラ

彼はエリカの切り札の駒として、第一級のポケモンハンターとして活動してきた。

が、この様なポケモンは初めてだ。合成(キメラ)ポケモンなら似た能力を持

った存在を見た記憶がある。

しかし、このブラウン少将とかいうイーブイの・・・この力・・アキラでさえも見た事が無い力だった。

手から放つレーザーも確かに普通のポケモンの『破壊光線』や『ソーラービーム』に似ているが・・・。

あれらはポケモンの体内のエネルギーや外界から得たエネルギーを利用して放つ技であり、その点ではこの少将のレーザーも同じだ。

しかし、あれだけ連発してまったく使用者が疲れてもおらず、息さえ上がっていないというのは・・・・。

ありえないことだ。

（くそ、どっからエネルギー得てるんや・・・それか体内に膨大なエネルギー源でもあるんやろか・・・）

戸惑うアキラ

その姿を見てブラウン少将は不敵に笑う。

「何者?そうだな・・陸軍少将と言っておこう」

ピピピピピ・・

ブウウン。

またもやレーザーが放たれる。間一髪でそれを避けるアキラ。頬に

冷や汗が流れる。

（次から次へと・・・つーか変やな。あれだけ技を連発してれば息ぐらい上がってもよさそうやのに。めっちゃ涼しい顔しとるやん・・・さっきの青い放電現象なにか関係あるんやろうか・・・）

「幻影槍破！」

アキラは手を掲げ、数本の長い槍を生成するとそれを一気に飛ばす。幻影で作りだされた槍だ。

が、ブラウン少将は冷静に動向を把握していた。

「無駄なことを」

バチチチ

またも青い放電現象が発生し、幻影の長槍を消し去ってしまった。またもや幻を解除したのだ。

「幻影を相殺したやと・・・」

アキラの目が驚きに見開かれる。

「そろそろ終わりにしよう」

ブラウン少将の気迫にアキラがぐっと押される。

何ともいえないオーラが出ている。

「く・・ナイトバースト！」

アキラがナイトバーストで波状攻撃を仕掛ける。

「無駄だ」

バチチチチチ

放電音と共にブラウン少将が青いエネルギー弾を作り出し、ナイトバーストを相殺する。

「やっぱ自分、変や！そんだけエネルギー使っても息も上がらんやと！まるで・・・自分の内部に膨大なエネルギーがあるようやないか！？」

「・・・・」

ブラウン少将は黙っている。イーブイ特有の丸みを帯びた目に鋭い光が灯る。

アキラはふぅとため息をつくと腰まで伸びるゾロアークの特徴の一つ、赤い長髪を指で絡めつつ言う。

「自分には普通の幻影は効かんようやし。・・・これしかあらへんな。あんま使いたくはあらへんけど。幻影空間、イリュージョン・スペース！」

アキラがスッと手を掲げる。

周囲に眩い光が走り、部屋を包む。

「これは・・」

アキラと少将のほかに、誰も居ない空間が出現した。

まるでパールのような七色の光が渦巻く空間だ・・・・。七色がマーブルのように刻一刻と変化している。

アキラは片腕を腰にあて、ニヤリと笑う。

「この世界は俺の力の結晶や。幻惑の世界やで」

「小賢しい」

ブウン

少将が手からレーザーを放つ。

そのレーザーはアキラの腹部を貫通した・・・かに見えたが、光が貫いた瞬間アキラの体がパリンというガラスのような音を立てて砕け散った。

さすがに驚いたのか少将がピクリと反応する。

「幻影だと・・」

「そうやで、言ったやろ?俺の最強の部類の幻影空間やって」

アキラがスッと少将の後ろに立つ。

ピピピピピ・・・

少将が素早くレーザーを放つ準備をする。

「ええんか?自分、仲間殺すことになるで?」

が、アキラのその一言でブラウン少将の動きがピクリと止まる。

「自分が放ったレーザーが仲間を貫くかも知れへんで?」

「下らぬ。幻影を解除してやればすむ事」

バチチチチ

青いエネルギーが少将の体から放出され、幻影を打ち消そうとするが・・・。

『幻影空間(イリュージョンスペース)』は相殺されること無く、その場を支配し続けている。

先ほどまでの幻影とは異なるレベルであることをこの時少将は悟った。

そして徐々に感覚を蝕む力の存在も・・・。

(意識が・・視覚・・聴覚・・触覚・・味覚までも・・消えていく・・)

「俺の最強の幻影はどないや?視覚や聴覚、感覚を欺くわけやない。ただ、全ての感覚が幻影空間の囚人になるだけや。ま、幻影空間の感覚支配力は俺の他の幻影の数十倍やし二度とこの世界からは抜け

出せへんわ。全ての感覚と意識を引きずり込んで、自分の“時”を停止させる。思考と感覚と意識を止めるんや。シンプルで残酷な技やでぇ・・・自分で言うのも何やけどな」

少しずつ少将の思考が止まっていく・・・意識の『時』が停止し始めているのだ。

レーザーの光が消えたのを見て、アキラが薄っすらと笑う。

「そうそう、それでええ・・・ナイトバースト！」

アキラが容赦なく至近距離で、ナイトバーストをブラウン少将に放つ。

吹き飛ばされる少将。そのまま地面に叩きつけられる。

「く・・」

呻く姿を尻目に、アキラは畳み掛ける。

「悪の波動や！」」

エネルギー弾が螺旋を描きブラウン少将に直撃する。

ドサッ

再び宙を舞う少将の体。

「少将っつってもただのイーブイやな。やっぱ攻撃できへんとちょろいわ。体力もなさそうやし」

ブラウン少将に近寄るアキラ。が、あることに気づく。

アキラが与えたダメージでブラウン少将が負った傷が、青いエネルギーのバチバチと鳴る音と共に自動で治癒していくのだ。

（この能力は・・・俺達キメラの超再生能力にも似とる。でも、まったくの別モンや・・・一体このイーブイは何やねん・・・明らかに普通のポケモンちゃうわ・・・）

アキラは幻影空間に囚われている少将に近づく。

（自動再生できる体や・・・幻影空間に囚われて動けない相手を倒すには普通は体に一定以上のダメージ与えて戦闘不能にするところやけど、このイーブイの場合治癒しちゃうんやなぁ・・・なら、俺はあんまり好まんやり方やけど・・やるしかあらへんな）

幻影空間の維持にはアキラも相当な体力を必要とする。早急に勝負をつけなければいけないのだ。

時間も体力にも余裕が無い今の状況で、自動的に再生するような体を持つ相手に効果的な手段とは・・・最もアキラが忌む手段しかない。

が、その忌む手段をアキラはエリカの『プロジェクト・キメラ』を成功させるためにやらなければならないのだ。

「これで終いにしようやないか」

一方、幻影によって縛られているイクス達は絶望的な光景を見てい

た。

色黒の青年が手から放った光が周囲を包んだかと思うと、少将の動きがピタリと止まったのだ。

一度はレーザーを放ったが、それもあらぬ方向にだった。

どうやらアキラという青年の術中に囚われているらしい・・・。

（何で動かないのよ！私の体・・・！）

イクスが拳をぎゅっと握る。悔しかった。自分の無力さが・・・。

彼（アキラ）の幻影は非常に強く、技を使うことさえ出来ない。

アキラは動けないクー達の足元に落ちている銃・・そう、クーの拳銃シグを拾う。

（何をする気・・・。まさか・・・・）

拳銃を手にアキラはブラウン少将に近寄る。

「何をする気！止めて！」

「このイーブイの少将は俺達にとって脅威なんや。消さんとな」

シグの銃口を少将に向ける。狙いは心臓だ。

「この・・・！止めてよ！私達の大事な上官なのよ！」

イクスが必死に叫ぶ。体が動かないことがこんなに苦痛だったことは無い・・・。

「悪いな。これも俺の役目やねん。恨んでもええ・・・許してくれとは言わん」

イクス達の方を振り向いたアキラの表情には心のそこからの謝罪の意があった。

本当に悪いと思っている。出来ることならこんな手段は採りたくない。

しかし、アキラはエリカへの忠誠と愛の方を選んだ。エリカはこの結末を望んでいるだろう・・・。

計画遂行のためのこの結末を。

そう、この状況下で最も効果的な手段とは・・・再生能力を発動できないほどの攻撃をすること。

そう、相手を葬ることである。

アキラは一瞬躊躇ったが、指に力を入れ引き金を引く。

照準をブラウン少将の体、心臓の位置に合わせる。

パァァン

一発の銃声がした。

吹き飛ぶ少将の体。鉛の弾丸が小さなイーブイの胸の左側を貫く。

血が地面に溜まっていく・・・。硝煙の臭いが立ち込める。

「あ・・・ぁ・・そんな・・」

絶望と悲哀がイクス達を襲う。

弾丸は心臓を貫いていた。誰にも明確なこの事実。

残酷な事実でもあった。

ブラウン少将は心臓を撃ち抜かれ、床に横たわっている。

揺るがぬ事実なのだ―

第八十三話　不死の力（前書き）

今年度最後の更新です

第八十三話　不死の力

鉛の弾丸がブラウン少将の近くの床にめり込んでいる。

少将の小さな体を弾は貫きその心臓を引き裂いていた。動脈を切断しその命を完全に消し去っている。

鮮血が床を染める。

アキラはそんな少将の姿を一瞥する。が、直ぐに背を向けた。

イクス達に向き直り、冷たく言い放つ。

「自分らのトップは俺が殺した。退くんなら自分らは見逃したる」

イクスの頬に涙が伝う。

ＵＳＡ２隊員達も少将の死に戸惑い、悲しみ、怒りを覚えていた。

アキラに対する怒りだけではない。そう、幻影で動けない自らに対する怒りが湧き上がっていた。

「上官がやられたって言うのに退けるとでも！？」

叫ぶイクス。アキラの目がスッと細まる。そして深いため息をつくと言う。

「そうか・・なら自分らもここで終いにしたるわ」

イクス達はこの研究所の奥深くまで入りすぎた。エリカの計画を知ってしまったかも知れない。

【プロジェクト・キメラ】の真相を・・・。

どちらにせよ、放って置いていいことなど一つも無い。計画に支障を来たす可能性がある存在なのだから。

（しゃあない。こいつ等も始末しなきゃいかんわ。・・・せめて銃で殺したる。奴ら軍人に対する精一杯の配慮はしておいたほうがええやろ）

銃を向けようとした・・その瞬間。

「私の部下に手を出さないでくれたまえ」

後ろで声がする。

（ま・・まさか・・ありえへん!?）

振り向いたアキラの目には立ち上がるブラウン少将の姿が映った。

心臓の近くで青いエネルギーがバチチッと走り、貫かれた心臓を再生させた。

傷が塞がり、動脈が再生し、失った大量の血液が新たに生成されていく。

「嘘・・やろ・・だって俺は自分の心臓を撃ち抜いてんで!?何で死なないん!?」

「いや、君は確かに私を殺した。お陰で一回死んでしまったぞ」

平然と立ち上がる少将にアキラだけではなく、イクス達も驚愕の表情を浮かべる。

「くそ・・ありえへん！」

バン　バン　バン　バン

アキラが銃を乱射する。

至近距離で放たれた弾丸はブラウン少将の肺と脳と腹部を貫き破壊した。

頭蓋骨は砕かれ内臓が甚大なダメージを受ける。周囲に血が飛び散る。

撃ち切ったアキラは拳銃を捨てる。息が上がっている。それだけ驚愕したということだ

「今度こそ・・・」

「酷いではないか。四回は死んだぞ」

バチチチチッ

ブラウン少将の肺と脳に空いた穴にエネルギーが走り、急速に再生する。

パキパキという音と共に骨が回復し弾丸で切断された神経が繋がる。
頭から垂れた血を舐め、アキラに目をやる少将。
その驚くべき光景にアキラは完全に気おされている。
「なんで・・・なんで死なないねん！？」
「死んだよ。君はもう五回私を殺した。君はよくやった。唯一の誤算は私がほぼ『不死』の存在だと知らなかったことだが、それはいたし方あるまい」
と言いつつブラウン少将は穴だらけになった軍服に目をやる。
（血まみれだ・・血糊は洗っても中々落ちんし、第一こんなにボロボロになってしまっては・・また特注せねばな・・）
そんな少将とは裏腹にアキラはあるワードに心を奪われていた。
『不死』。ブラウン少将が自らを表した言葉。
キメラポケモンの超再生能力でさえ、その生体が死んだら発動しない能力だ。
しかし、このイーブイは・・・殺しても殺しても再生し復活する。
「不死やて・・そんな・・エリカでさえ実現してないのに・・・」
「彼女は天才だが、神ではない。さて、青年。選択するがいい。ここで降伏するか、それとも戦い続けるか」

アキラは生唾を飲む。どうやって勝てと言うのだ・・・心臓を肺を脳を撃ち抜いても・・何度殺しても再生する『不死』の存在に・・・。

「ふむ・・・どうやら一回死んだことで幻影空間の力の拘束を抜けたようだな。それに、君自身もう一度幻影空間を掛け直す体力も残っていないだろう？」

その通りだった。ブラウン少将は一度『死んだ』ことで、幻影空間の支配下から抜け出していた。

そしてアキラにはもう幻影空間（イリュージョンスペース）を再使用する体力が残っていないことも。

（どうする・・・あの『不死』の力・・無限のものなんか有限のものなんか・・どちらにせよ、今の俺の体力では勝てへん）

「幻影空間が使えんでも、他の幻影技なら使えるんや！幻影火葬！」

（あのイーブイは何回も『死んだ』。なら幻影技を解除する体力も残ってとらんはずや）

そう計算し、アキラは技を放ったのだ。

が・・・。

「なるほど。私が五回死んだことで私の体力が削れて幻影技を解除できなくなっている、と計算したのかね？賢い。さすが元ポケモンリーグチャンピオンだ。しかし、その計算は少々甘いな」

バチチチチチ

ブラウン少将の体から青いエネルギーが走り幻影を解除してしまう。

「私は五回『死んだ』程度では体力が切れたりはせんのだよ」

ピピピピピピピ・・・

ブウン

レーザーがアキラの左右足を貫く。

「うぐぅ・・・」

「跪け」

アキラは膝をつき、肩で息をしている。超再生能力は発動していない。もう、アキラの体力は限界なのだ。

そんなアキラの姿をブラウン少将の冷静な眼差しが捉える。

「・・・部下達を幻影から解放したまえ。私には勝てん。それとも私の手にかかって死ぬか?」

「嫌や・・・俺は負けへん。・・・こんなところで・・」

そんな二人の会話をイクス達は呆然と見ていた。

(あのアキラと言う青年の放った弾丸は確実に少将を殺した。でも、何度死んでも蘇ったですって!?一体何者なの、ブラウン少将って・

・・）

イクスの目の前に居て自分達を守っている上官が自分達の全く知らない存在に見えてくる。

イクスやＵＳＡ２隊員達の何度殺されても再生する少将に対する困惑をよそに、ブラウン少将はアキラと話を続けている。

「俺は元チャンピオンや・・・そしてＰ・Ｈ・Ｃではトップハンターやった。エリカに最も信用されてるのは俺や・・・その信頼を裏切るわけにはいかへんねん」

「火野輝」

突如本名を呼ばれたアキラは驚いてブラウン少将の方を見る。

その丸い目には哀れみの感情が浮かんでいる。

驚きだった。自分に害を与えた相手にそのような感情を抱ける事が出来るなど・・・アキラにとって完全に想定外だ。

「己の敗北を認めたまえ」

「まだ・・戦えるわ・・・まだ・・・」

「やせ我慢をするな。もう君の体力はゼロだ。投降したまえ。私達は捕虜となった君に危害を加えないことを約束しよう」

アキラは立ち上がろうとするが・・・体が言う事を聞かない。

（やっぱ駄目やわ・・・もう膝立ちしてるだけで一杯一杯やもん・・）

蓄積したダメージがアキラの心の灯が消えかけているのと比例して重く圧し掛かる。

（投降するしかないわ・・・）

そう思い幻影を解除しようとした・・・その時。

『その必要は無いわ』

突然部屋にアナウンスが流れる。

冷たい美声、エリカの声だ。

『アキラ、あなたは私を失望させるつもり？』

「そ・・そやかて、このイーブイめっちゃ強いねん！不死やねんで！不死！」

アキラの必死の言葉にもエリカは何も感じないらしく、冷たく言い放つ。

『あれを渡したでしょう？』

その言葉にアキラが凍りつく。

『アキラ、あなたは私が作り出したキメラの中でも最高部類に入る傑作。失敗するような作品に存在価値は見出せはしないわ』

ブツンと放送が切れる。そのあまりの言葉にＵＳＡ２の隊員達の表情が歪む。

今まで自分たちはこんな奴を体を張って守っていたのか・・・こんな奴の計画を警備するために働いていたのかと、隊員達の心中でそのやりきれない悔しさが渦を巻く。

「俺は捨てられたく無い・・・これまで全てを捨てて尽くしてきたんや」

アキラがふらふらとポケットに手を突っ込み、小さな錠剤を取り出す。

この戦いの前エリカから渡された薬品。

かつてジュンが始めてエリカとであった研究所で・・・エリカがキメラポケモンのバクフーンに投与した薬品の数十倍の効力を持つ薬。

ＰＸ－００９。対人間・ポケモン用運動能力増幅剤。

この薬の開発には実験で作り出され、不要になったキメラポケモン達が実験体として使用された。

ＰＸ－００９は投与した生命体の運動能力と回復能力を飛躍的に上昇させるが、一定量摂取すると確実に死に至る薬だ。

エリカがその『一定量』を知るためにキメラポケモンが死ぬまで薬を与え続け、致死量を測定した結果。

１０００匹を対象に測定したところ、１０％が一錠目で死亡。８５％が二錠目で、後の５％が三錠目で死んだのだった。

つまる所、エリカは１０００体のポケモンの命を犠牲に致死量のデータを得たのだった。

そのようなポケモン達の犠牲など、エリカには何の興味も無いのだが。

つまり、アキラがこれを飲んだ瞬間１０％の確率で死が確定するのだ・・。

（怖い・・１０％で俺が死ぬ・・・やばいわ・・・俺はこんなところで死にたくない・・・）

掌に乗っている小さな錠剤が邪悪なものに見えてくる。

どれだけの命がこの薬の開発の踏み台になったことだろう。

しかし、エリカが望んでいることなのだ・・・。

エリカはアキラに望んでいる。この薬を服用する事を。

その結果アキラが死のうとそれは彼女にとって意味のあることなのだろう。

意味ある結果に・・・エリカにとって意味のある結末を導き出すことを何よりも願って全てを捨ててやってきたのではなかったか。

エリカの思い通りに事を進める。そのための自分。そのための実力。そのための命。

自分の愛するエリカがそう望んだから。その言葉に従えなくては意味が無い。

躊躇う必要など無い。

後悔も反省も躊躇もいらない。全てはエリカのために。それだけでいいのだから・・・・。

拳を握るアキラ。自らを鼓舞するように叫ぶ。

「チャンピオンの地位、手持ちポケモン・・そして名誉も・・・。全ては愛を・・エリカから愛を勝ち取るために・・・ここまで来て捨てられるわけにはいかんのや!!俺の行為を、努力を全て無に帰するワケにはいかへんのやぁぁ!!」

アキラが錠剤を口に放り込んで噛み砕く。

刹那、アキラの体に変化が起こる。

「あ・・うぅ・・・ぐう・・」

苦しそうに呻き、喉を両手で押さえる。

「何を飲んだんだ・・・」

ブラウン少将の目が驚きで丸くなる。イクス達も同じだ。

「・・・へへ・・これでええんやろ、エリカ・・・」

焦点の定まらない目で虚ろな笑いを浮かべる・・・涎が垂れ、狂犬のような表情に変化している・・・正気とは言いがたい。

「自分の思い通りにさせたる・・・エリカ・・お前の望んだ結果に・・・！」

その瞬間、アキラの体が変化していく。

筋肉が盛り上がり、強度を増す。

爪が刃のような鋭さを帯びる。

目からは知性が消え、獣の本能だけが残った。

アキラは長く伸びた犬歯を剥き出しにして唸り、Tシャツを破り捨てる。

ゾロアークの特徴の一つである毛皮の下には、先ほどの錠剤によって異様なまでに強化された筋肉が鎧の様に覆っている。

「・・・幻影は解除されたようです」

イクスが自身の拳銃、コルトガバメントを構える。

「気をつけたまえ。あれは既に人間ではなくなっているぞ」

ピピピピピ・・・

少将の右前足に光が収束していく。

シュン

その瞬間、アキラの姿が消えた。

「ぐあぁぁぁ！？」

そして、鮮血が床を侵した。

ＵＳＡ２の隊員の一人が胸を切り裂かれ、その場に崩れ落ちたのだ。

「・・・そんな・・」

「嘘だろ・・」

ガガガガガ

焦ったＵＳＡ２隊員がライフルを乱射するが、異様なスピードで移動するアキラを捕捉出来ず銃弾が虚しく壁を削る。

「ぐぅ・・」

また一人が呻き、倒れた。床に血溜まりが広がっていく・・・。

「グルルル・・・」

獣の唸り声だけが部屋に反響する。

「足を狙え！動きを止めるのだ！」

ブラウン少将の命令に隊員達も正式採用のコルトＭ７３３を構え、何とかアキラに当てようとする。

ガガガガガ

銃弾が壁を削るが、アキラには全く当たらない。

「ＵＳＡ２諸君、少しの間時間を稼いでくれ。私は負傷した兵士の手当てに当たる。イクス准尉、サーナイトの君ならエスパー技で傷口を癒す事が出来るはずだ。手伝ってくれ」

「了解です！」

ブラウン少将が最初に切り裂かれた隊員に歩み寄る。

「傷が深い・・・今すぐ手当てしないとまずいな。イクス准尉、そちらの兵士の様態は？」

「こちらのほうは傷を塞げば何とか・・・」

「うぅ・・」

ブラウン少将の傍でＵＳＡ２隊員が苦しそうに呻く。息が荒い・・。

「少し痛むが我慢したまえ」

少将は胸を深く抉った傷に手を当てる。バチバチという青いエネルギー反応が掌で起こっていく・・・・。

「少し私の命の源を使うが・・・まあいい。君の命が優先だ」

バチバチバチバチ

血まみれの胸にエネルギーが走り、傷を癒していく・・・。

相当痛いらしく兵士の顔が苦悶に歪む。

「ぐ・・痛ってぇ・・・」

「もう少しだ。耐えたまえ」

そして、少将がスッと手を離すと傷が完全に塞がっていた。その隊員が薄目を開けて治癒された胸の傷を見る。

「・・・あ・・りがとう・・ございます・・」

「喋るな。体力を削る」

何とか礼を言う隊員の額に右前足を少し当てると、少将はアキラと戦っている隊員達のところまで歩いていく。

「グルルル・・・」

アキラの両足の太ももから血が流れている。どうやら撃ち抜くことには成功しているらしい。

「ぐがぁぁぁ！」

「撃て！とにかく撃て！超再生能力も無限の力ではない！体力を削

るのだ！」

ババババババ

ＵＳＡ２隊員のコルトＭ７３３が火を噴く。

凄まじいスピードで移動するアキラの肩や足を弾丸が貫いていく。

「うぐうう・・ぐがぁぁ！」

「うわぁ！？」

が、傷は直ぐに癒えアキラの爪が隊員達を薙ぎ払っていく。

倒れる隊員達。

「イクス准尉は回復に徹せよ！戦えるものは一発でも多く彼に命中させるのだ！」

ピピピピピピ

ブラウン少将の右前足に光が溜まっていく。

ブウン

レーザーがアキラの横腹を貫く。

「ぐうぅ・・」

普通なら致命傷にもなりかねない傷だが、超再生能力が発動し傷を

癒す。

どうやら先ほどの薬品で再生が出来るようになったらしい。

「グルルル・・・ガァァァァ！！」

アキラがナイトバーストを使い、周囲に波状攻撃を仕掛ける。

ＵＳＡ２隊員達がその攻撃に吹き飛ばされ、壁に打ち付けられて気絶してしまった。

「ふん、知性を失っても技は使えるわけか・・・それにしても哀れだな」

ブラウン少将の目が目の前で唸っているアキラ・・・獣の姿を捉える。

プロの軍人であるＵＳＡ２隊員を全員戦闘不能に追い込んだアキラの力。先ほどのそれとは桁違いに強化されている。

（これがエリカの科学力か・・・胸糞悪い薬品を作ったものだな・・）

少将はチラリとエリカの事を考える。

今もどこかでこの光景を・・アキラと自分たちが戦っている光景を見ているのだろう。

そして今ここでアキラが倒れたとしても・・・データ蓄積以外の結果にはならないのだろう。

エリカにとってはアキラが勝とうが負けようがどうでもいいのだ。

だって彼(アキラ)もまた『実験体』でしかないのだから。

「全てを捨て愛だけに生きた結果がこれか・・・愛するものから一欠片の愛さえ受け取れずに獣に堕ちてしまったのか・・・哀れなものよ」

「グルルルル・・・」

倒れている隊員達を踏み越え、アキラが迫ってくる。

血に濡れた爪が鈍く光っている。

「イクスは傷の手当てを続行したまえ。クー准尉、今戦えるのは君と私だけだ」

「そのようですね」

クーが床に落ちているコルトＭ７３３を拾う。先ほどの戦闘でＵＳＡ２隊員が気絶した時に落としたものだ。

「君は足を狙え。私は両腕を貫く」

「了解しました」

「グルルルル・・・グァァァ！」

アキラの姿が消え、悪の波動が数発飛んでくる。

「ほう・・・どうやら近づき過ぎると撃たれると学習したようだな。スピードで撹乱しつつ、遠距離攻撃を仕掛ける気か」

ピピピピピ・・・

ブウン

ブラウン少将が素早く放つレーザーが悪の波動を全て防いでいく。

「クー、私が奴の遠距離攻撃を防ぐ。彼は焦れて接近戦に持ち込もうとするだろう。その時がチャンスだ」

「了解」

クーがコルトM733を構え、照準を合わせる。

「グルァァァア！」

その時、突然アキラがクーの目の前に現れる。長く刃のような爪が今にも襲い掛かろうとしたその瞬間

（今だ！）

ガァン　ガァン

二発の銃弾がアキラの両足を貫いた。

「グルァァ！？」

フラリとよろめくアキラ。傷は直ぐに癒え・・・無かった。
緩やかに再生したものの、先ほどのような急激な治癒ではない。
どうやら薬品によって強化された超再生能力もまた限界値に達していたらしい。薬品を使う前から激戦を繰り広げていたアキラの体は既にボロボロだったのだ。
この絶好のチャンスを少将が逃すはずが無かった。スッと右前足をアキラの方に向ける
ピピピピピ・・
ブウン
ブラウン少将のレーザーがアキラの両腕を貫通した。
『アキラ、もう一錠飲みなさい。まだ薬はあるはずよ』
と、そこに再びアナウンスが流れる。エリカの声は何処までも冷たい。
もう一錠飲めと言うのだ。今のアキラの姿を見ても何とも思っていないのがありありと分かる。
「グルルル・・・」
アキラがポケットを探り例の薬を取り出す。
エリカの命令を理解は出来るらしい。

「まずいな・・あの青年が後一錠飲んだら、確実に死ぬぞ」

「どうします」

横に居るクーの問いに、ブラウン少将が静かに言う。

「あの薬を口に放り込む前に戦闘不能にする。クー准尉、薬を持っている右手を撃ち抜け」

「Ｙｅｓ、ｓｉｒ」

ＰＸ－００９を口に近づける。

照準をアキラを右手首にあわせる。

まさに、薬が放り込まれようとした時。

ガァン

一発の弾丸がアキラの手首を貫通する。

吹き飛ぶ薬。

「うぐぅ・・」

ドサリ

呻くとアキラは床に倒れた。と同時に、アキラのキメラ化がどんどん解除していく・・・。

ブラウン少将達の目の前には、最終的に半裸の色黒の青年が気絶している光景が広がっていた。

「・・・倒れている隊員達を回復次第、奥の部屋に向かう」

「あの、少将。先ほどのあれは一体・・・」

「私の能力だ。『不死』の力・・・まぁ、この戦いが終わったら話してやる。今は隊員達の回復及びエリカの計画阻止が優先だ・・イクス、君はそちらの隊員を治療したまえ」

「了解しました」

少将の指令でイクスは沸き起こる疑問を秘め、隊員達の治癒に専念したのだった―

＊＊＊＊

一方エリカはモニター室で一部始終を観察していた。

「役立たず」

倒れたアキラの姿を映し出しているモニターにエリカはそう呟く。

「まぁいいわ。アキラのお陰で面白いものが観察できたし」

心臓、肺、脳を撃たれても直ぐに再生し死なないイーブイ。

情報部トップ、フリードリヒ・フォン・ブラウン陸軍少将。『不死』の力を持つ者。

この存在はエリカにとっても予想外だった。

エリカは今の映像をデータ解析し、エネルギーの温度表示と重ね合わせる。

その結果分かった事があった。

あのイーブイが致死的なダメージを負った時、胸にある物体が急速にエネルギー反応を起こし体を再生させていることに。

「あのイーブイの胸に莫大な量のエネルギー集合体が存在している。そこから得たエネルギーで体を再生させているのね・・・それだけじゃないわ。手から放っていたレーザーも負傷した兵士を治癒させたのも全て元は胸にあるエネルギー集合体に理由を還元できるわね」

面白い。

科学者として純粋にエリカは興味を引かれていた。

「一体あのイーブイの胸には何が埋まっているのかしら・・・データからは石のような物体だと推測できるけど・・・エネルギーが収束し凝固した結晶体かしら。ふふふ、『不死』なる存在ね。もっと調査する必要がありそうだわ」

倒れたアキラの事など気にも止めずエリカはまるで新しい玩具を見つけた子供のように、データ解析を進めていくのだった。

＊＊＊＊

「う・・うう・・」

頭が痛い。体全体が限界値を突破している。

ガバッと身を起こすと、血に染まった床以外は何も無かった。

アキラは半裸の自分の体と誰もいなくなった部屋を交互に見る。

ブラウン少将達は既にこの部屋を出て、エリカの方に向かっていることは容易に想像がついた。

「俺は・・負けたんか・・・」

また倒れる。

もう動くことも出来ない・・。呼吸さえも苦しい。

「エリカ・・・」

そう呟くとアキラの意識は身体のダメージの大きさから再び飛んだ。

（俺が動けるようになったら・・・あいつ等からエリカを守らないかんわ・・・エリカのキメラ化の調整はまだ不完全や・・俺がアイツを守らんといかんわ・・・）

薬品の二度目の使用を促された後でも、エリカが自分の命など気にも留めていなかった事が分かった後でも・・・

（周りの誰にも理解されんでもええ・・・俺はただ・・・エリカのことが・・・）

アキラの瞼はゆっくりと閉じていったのだった・・。

第八十四話　ＶＳロザ&ａｍｐ;ＶＳレオン。新たな“計画”の芽

アキラを倒した後、ブラウン少将一向は研究所内を突き進んでいた。

（そろそろ研究所の中心部に到達するか・・・）

少将がそんな事を考えていたその時。

『不死の力を皆に知られましたね？反魂石のエネルギー反応を感知しましたが』

突如ブラウン少将の耳の奥から声が聞こえる。

実は“代行者”は全員耳の奥に小さな装置を仕込んでおり自由に意思疎通が出来るのだ。

反魂石のエネルギー反応は“代行者”同士通じ合える仕組みだ。

どうやら少将が『不死』の力を使用した事が、別の“代行者”の気がかりとなったらしい。

「仕方なかろう。あの場合は不可抗力だ」

その“声”にブラウン少将は小声で苦言を呈する。

先頭を歩いているため、小声は誰にも聞こえていないらしく皆気づいていない。

『しかし知られてはならない情報です。詮索好きな者が貴方の能力について嗅ぎ回るかもしれません。ゴスペルの計画に支障が出る可

能性があります。どう対処するつもりですか？』

丁寧なようで何処と無く慇懃無礼さが伝わってくる口調に少将の目がスッと細くなる。

「対処するも何もそういう能力があるイーブイ。それで皆納得すると思うがね」

『・・・まあいいでしょう。が、反魂石をご自身の再生以外で使用したのは頂けませんね。力を分割して治療するなど・・あれは無限の力ではないのですよ』

見せ掛けの丁寧さが剥がれ、ハッキリと非難の色を強めた“声”に少将は臆せず言い返す。

「今の最優先事項はエリカを潰すことだ。その為には救える兵力は救っておくのが効率的だろう？ゴスペルの脅威に為りかねない存在、エリカを排除する事が一番の良策と思うが？」

『・・・・』

ブツン

装置からの声が途切れた。向こうが交信を切ったらしい。

「まったく」

そうため息をつくとブラウン少将は皆を引き連れてエリカの元を目指して歩き続けたのだった。

＊＊＊＊

「【ダーククリスタル】ね・・・一体どんな力を持っているのか・・・」

フォックが少々警戒しつつもドラゴニックセイバーをロザに向ける。

「直ぐに分かるわ・・・マジカルショック」

ロザは空中から攻撃を仕掛けてくる。紫色の波がフォック達に押し寄せる。

「守る！」

ミュウが守るを使おうとするが、またもや霧散してしまう。

「駄目です。技が発動しません」

「悪の波動！」

横に居たゾロアーク通称「姉さん」が悪の波動を放ってマジカルショックを相殺する。

「どうやら、悪タイプの技は使えるようだねぇ」

「ほほう、ご名答です」

エリカの手持ち・・元々は故弟のヨハンのポケモンであるヨノワールが渇いた拍手をする。

「貴女（ゾロアーク）の攻撃に敬意を表して・・・金縛り！」

ヨノワールの目が赤く光る。

「ぐ・・・悪の波動を封じたかい・・」

苦しそうに呻くゾロアーク。

「でも、アタイにはまだ別の技があるのさ！ナイトバー」

「待ってください」

ミュウが突然待ったをかける。両腕を組んでロザ達を見つつ言った。

「彼女らの戦術に嵌まってはいけません。ロザというムウマージとのキメラの女性及びエリカの手持ち達が【ダーククリスタル】の影響を受けないと明言していたのは、恐らくあの漆黒の結晶体が悪・ゴーストタイプ以外の全ての技のエネルギーを霧散・吸収しているからでしょう」

「なら、とっとと畳み掛けようぜ。俺は全属性の技が使えるんでね」

フォックが技を使おうとした瞬間、ミュウが指を鳴らす。

すると・・

ヒュルルルルル

ゴチン！ゴォォォン

「痛ッ！？」

何処からとも無くタライが落ちてきてフォックの頭部を直撃する。

「な・・何すんだ!?」

怒鳴るフォック。

「よく考えなさい。相手側には『金縛り』が使えるヨノワールがいるのです。彼女らの作戦の根幹が分かるでしょう?【ダーククリスタル】で悪・ゴーストタイプ以外の技を無力化し、相手がクリスタルで無効化できない技を使ったら『金縛り』でそれを封じる・・・使用できる技を使えば、それだけ此方側の戦術の幅を大幅に削る戦略ですよ」

ミュウの青い目がロザ達に向けられる。

「ふふ・・分かったのと攻略できるのはまた別よ。シャドーボール!」

ロザが黒いエネルギー弾を数発放ってくる。

「く・・ナイトバースト!」

苦肉の策でゾロアークがナイトバーストでシャドーボールを防ぐ。

「金縛り!」

それを見越していたのか、ヨノワールが『金縛り』でナイトバーストを封じた。

「うざい戦術使うねぇ」

かなり苛ついて来たのか姉さんのこめかみがピクピク痙攣する。

この手のバトルスタイルは彼女は嫌いなのだろう。

「なら、俺のドリルバスターを受けてみろ！」

ドリュウズのドリュが両手からドリルを発射・・・出来ない。

「馬鹿ですね、ドリルモグラ。悪・ゴースト技は使えないと言ったではないですか」

「ちょ・・誰がドリルモグラだ！」

ミュウの小馬鹿にしたような言葉にドリュが噛み付く。

「君以外に誰がいるのです。・・ちょっとそこの蛇」

「・・・ジャローダのウィアです」

「蛇で十分です。君、ゴースト・悪系の技は使えないのですか？」

横のジャローダのウィアもかなりムカついた表情になるがグッと我慢する。

「使えないです。草・毒系しか」

「なるほど。ならば・・・そこのコスプレーズの黒いの」

「ゼクロムのザサロだ！」

人間状態で後ろに控えていたゼクロムのゼサロとレシラムのハクランの方を見るミュウ。

「君は悪・ゴースト技は使えますか？」

「いいや・・俺が使えるのは電―」

「じゃ、そっちの白いの」

「話を遮るな！」

ゼサロが怒鳴るがミュウは一向に気にせずレシラムのハクランに声をかける。

「いや、私も―」

「では、ゴースト・悪技が使えるのはフォックさんとゾロアークさんだけですね」

発言を打ち消されたハクランは思いっきり嫌な顔をするが、ミュウは気にも留めない。

ミュウはふわりと浮くと、両手を組んで思案を巡らせる。

（あれを使うしかないですね・・・）

「技が封じられているならば、それ以外の方法を使うまでです」

パチン

ミュウが指を鳴らすと何処からとも無く先端の尖った道具が出てくる。

「それは・・・？」

「魔法陣を描くための道具です。フォックさん達は私が術式を書いている間、時間を稼いでください」

「小細工はさせん！悪の波動！」

「ケケッ、どんな事をしても無駄だぜ！シャドークロー！」

ダークライとジュペッタが攻撃を仕掛けてくる。

ドラゴニックセイバーでシャドークローを防ぐフォック。

が、悪の波動がミュウに迫る。

ミュウは地面に円を書きながら横に居たドリュウズのドリュを引っつかむと、何と盾にしたのだった。

「ちょ・・うわぁ！？」

悪の波動をもろに受けたドリュが吹き飛ばされる。

「な・・何すんだ！」

「黙りなさい、ドリルモグラ。私は今魔法陣を作成しているのです。君達は盾になりなさい」

その横暴な態度にドリュやウィアが抗議の声を上げようとするが・・・ミュウが地面に書いているものを見て黙ってしまった。

地面には円の中には六芒星と中央には目と炎の記号が描かれている。

「炎獄龍の術」

ミュウの言葉と共に魔法陣から炎の龍が飛び出す。大きな炎のドラゴンだ。

「大地の脈動の流れを汲み、力に変える。魔法陣は言わば変換装置なのです」

ゴォォォ

炎獄龍がロザ達に襲い掛かる。大口を開けたドラゴンにしかし臆することなく対抗するロザ達。

「守る！」

ロザが手をかざすとバリアが発生し、炎獄龍を防ぐ。

が、ミュウは新たな魔法陣を描いていた。今度は円と五芒星を組み合わせた術式で、雷の記号が記されている。

「雷神龍の術」

バチチチチチッ

魔法陣から生成されたのは・・・雷の龍だ。体全体から放電させロザ達に踊りかかる。

「マジカルボール！」

雷神龍の術とマジカルボールはぶつかり合いお互いに消えてしまった。

「面倒な・・・眠らせるか。ダークホール」

ダークライがダークホールを使用しようとする。

「させません！」

その姿を見て、ミュウが新たな術式を地面に描いていく。円の中に三角形、中央には丸い点だ。

「魔結界の術」

放たれたダークホールは結界によって阻まれる。

「自らの力を受けるのですね！術返し！」

ミュウは結界の魔法陣にさらに逆三角形を書き加える。

攻撃を跳ね返すための術式だ。

ダークホールは術式結界に反射され、ダークライの元に向かう。

「悪の波動！」

それを相殺するダークライ。

「ふむ・・流石にそう簡単にはいきませんねぇ。ならば・・・」

ミュウが指を再び鳴らす。何処からとも無く油性マジックが現れミュウの手に収まる。

「ドリルモグラ。それと蛇、こっちに来なさい」

その超上から目線にドリュとウィアは互いに顔を見合わせるが・・・渋々ミュウに近寄る。

パキンとキャップを外すとミュウはドリュの背中に円を描いていく。

「何をするつもりか知らないけど無駄よ！シャドーボール！」

警戒したロザがシャドーボールを放つが、先ほど地面に描いた『魔結界の術』の陣が光を発し攻撃を防ぐ。

どうやら一度描いた魔法陣はオートで効力を発揮するらしい。

ドリュの背中には円、そして逆五芒星（リバースペンタグラム）を書き込み、中央に目を描く。

同様にウィアの背中にも同じものを描くとミュウはスッと目を閉じる。

「傀儡の術！」

トロンとドリュとウィアの目が半開きになる。

「おい、ミュウ・・・俺の仲間に何したんだ!?」

フォックが心配そうにドリュ達を覗き込む。

「いえ、少々操り人形になってもらっただけですよ。魔法陣作成速度を向上させるために。ドリルモグラは『雨乞いの術』を蛇は『水惑の術』の陣を描きなさい!」

ドリュとウィアが結界外に出て魔法陣を描いていく。

「させるかよ!シャドークロー!」

「シャドーボール!」

ヨノワールとジュペッタが攻撃を仕掛けてくる。

「傀儡よ、魔法陣を守りなさい」

ミュウの目が光る。何とドリュとウィアが描いている魔法陣を身を挺して守ったのだ。

ドリュの足元には円に四角形が重ねられた魔法陣が、ウィアの下には円に逆三角形に水の記号が描かれた陣が描かれている。

ザザザザザ・・・

突如部屋全体に雨が降り出す。

「『水惑の術』は水が周囲に一定量以上ある時に発動できる術なの

です！」

その言葉と共にドリュの両手が『水惑の術』の陣に触れる。

バシャ　バシャ

床に溜まった水が立体を成し、ミュウの分身が現れる。

「どうやら、金縛りは効かなさそうですね」

ヨノワールが静かに呟く。

バシャ・・

水の分身はゆっくりとロザ達に近づく。

「水の分身で何が出来る？」

「確かに。『水惑の術』は普通相手をただ惑わすだけの低レベルな術です。・・・魔法を使うポケモンはそれなりに居ますし、この魔法陣も効果も単純なこの術は誰でもマスターできます。しかし、私には特殊な技が使えるのですよ・・・術同士は本来その魔力の流れが反発する故合体が中々出来ない・・・が、私のこの術を使えば術同士を合成できる」

ミュウが両手を広げる。すると両方の掌に魔法陣が浮かび上がっていく。

左手には円の中に三角形中央には太陽の刻印が、右手には円の中に逆三角形、中央には月のマークが描かれている。

「異種術合成！」

パン！

ミュウが掌を合わせる。するとミュウが地面に描いていた魔法陣が光を発し、移動する。

フォック達の目の前で先ほどまでにミュウが作った『炎獄龍の術』『雷神龍の術』『水惑の術』の魔法陣が一つに合成された。

「水の分身の中に電気が通じ分身内に水素と酸素が充満する。そしてそれを炎が喰らう！」

水の分身が膨れ上がっていく。

「まずいわね・・・マジカルオーラ！」

ロザがオーラを展開したのと、大爆発が周囲を襲ったのは同時だった。

「やってくれたわね・・・」

爆風による煙が晴れた頃、ロザはただ一人地面に着地していた。

ヨノワール・ジュペッタ・ダークライは気絶している。

「ロザ・フォール。元軍の技術者兼科学者である貴女なら分かるでしょう?私には勝てない事が。それにヨノワールが倒れたことでフォックさんとゾロアークさんが自由に悪・ゴースト技を使えるようになった・・・投降をお勧めします」

「ふふ・・ヨノワールが倒れるのも予想内よ」

「何を・・・」

「あら、気づいていないのかしら?ダーククリスタルはただ技を打ち消すための装置じゃないって事に」

クスクスと笑うロザ。科学者として、自分の発明品の効果を説明するのが楽しくで仕方ない様子だ。

「このクリスタルは言わばエネルギー貯蓄器。私達の戦闘中も少しずつ結晶内にエネルギーを貯め続けていたわ・・・今こそ、ダーククリスタルの真の力を見せるとき!」

クリスタルからエネルギーが流れ出しロザの中に吸収されていく。

「ミュウ、貴方が特殊能力を保有していたように私も持っているのよ・・・」

ロザの影が伸び、気絶している三体のポケモンを包み込む。

「何をするつもりだ・・」

フォックの目が細くなる。仲間たちにも動揺が走る。

「この技を使うには大量のエネルギーが必要になるわ。その為の【ダーククリスタル】でもあったのよね。・・・ロサ・ネグラ!」

ズズズ・・

ダークライ・ジュペッタ・ヨノワールの三体はロザの影に包み込まれ吸収されてしまった。

と同時に影がロザ自身をも包み漆黒の物体が現れた。

まるで巨大な花の蕾（つぼみ）だ・・・。

「おいおい、仲間を吸収しやがったぜ。あの女・・」

ゼサロの頬に冷や汗が流れる。ハクランも生唾を飲む。

闇の蕾が少しずつ開いていく。花弁が一枚一枚開き、漆黒の薔薇が開花する。薔薇の中央には半身の人の姿が・・・ロザだ。

「私のキメラ能力はいかがかしら・・・本来ならば【ダーククリスタル】の補助なしにこの技を使いたいんだけど、まだ慣れてないのよね」

薔薇の中央に半身状態でいるロザ。手を振るうと蕾の下の影から棘のある蔓が大量に生え、ロザと薔薇は茎によって空中に持ち上げられる。

「シェイドウィップ！」

ヒュン

闇の蔓がフォック達に向かって槍のように迫る。

「させません！」

ミュウが手をかざすと『魔結界の術』の魔法陣が光り、蔓の攻撃を防ぐ。

「無駄よ！その蔓は触れたもののエネルギーを吸収する！」

ピシ・・・

結界にひびが入っていく。

と同時に魔法陣にも亀裂が走る。

「まずいですね・・・【ダーククリスタル】はエネルギーを彼女に供給したとはいってもまだ機能し続けていますし・・・」

「シャドーボール」

【ロサ・ネグラ】で薔薇の中央に半身存在しているロザは手からシャドーボールを放つ。

パキィン

ガラスが砕けるような音を立て結界が崩壊した。と同時に【魔結界の術】の陣が地面から消える。

「私は負けない！レオンが望みを叶えるその時まで、私は彼を守る！レオンの心の深い傷を癒す手段は一つしかない！・・・・戦友をエリカに蘇らせてもらう・・・それしかないのよ！」

ヒュン　ヒュン

影の蔓が風を切り周囲をなぎ払う。

「私はレオンを包み、守る薔薇となったのよ！」

ロザの決意と覚悟に比例するように【ロサ・ネグラ】の大きさが肥大していくのだった・・・

＊＊＊＊

そしてその頃、ジュン・ユウタ・ファオ・ファルコン及びＵＳＡ２隊員達はレオンと対峙していた。

準伝説のポケモンであるファイヤーとのキメラのレオンは、キメラ能力を生かし特別仕様の弾丸を使い圧倒的な火力で攻めてくる。

彼の持っている拳銃は普通のものだが、レオンはファイヤーの火の力を弾丸に込め小型爆弾並みの威力を持たせているのだ。

ガン　ガン　ガン

空中から放たれた弾丸は地面に着弾した瞬間、爆発する。

爆風に吹き飛ばされ、既にファルコンを除くＵＳＡ２隊員達は気絶している。

「くそ・・・なんだよ。あの反則的な威力は」

ファルコンがアサルトライフルＭ１６を構え引き金を引く。

しかしレオンの周囲に展開されている防護フィールドによって弾丸は虚しくも地面に落ちていくだけだ。

「ファルコンさん、撃っても無駄です」

ジュンはファルコンの肩を掴むと、物陰に引っ張る。

「一体あのレオンとか言うキメラ野朗の周囲はどうなってんだ！？弾が全部防がれちまう」

「レオンさんの周囲にエネルギー膜が存在しています。レオンさんは防御フィールドの球体内にいるって事ですよ。恐らくエリカが強化したんでしょう」

目を細めてレオンを見る。

マリスが感知した防御フィールドの存在。これを打ち破らない限り勝てはしない。

「しかし、どうするんだ。ジュン、レオン隊長はずっと防御フィールドを展開し続けてんのか？」

ファオがＡＫ－４７を肩にかけ小声で囁く。

『攻撃の瞬間だけフィールドは解除されているみたいだ。まぁ・・・それ以外はずっと展開しているみたいだが』

マリスの呟きをジュンはユウタ達に伝える。

「じゃ、攻撃した瞬間にこっちが撃てば―」

「そんな事したら俺たちが小型爆弾並みの威力の弾丸の餌食だぜ」

閃いたという表情で言おうとするファオにユウタが水を注す。

ガン　ガン　ガン

ズガァァァァン

「く・・この物陰も何時崩れるか分からないよ」

空からのレオンの攻撃によって発生した爆風が頬を掠める。

『ジュン、ボクに案がある』

「何、マリス」

『奴は高度からの射撃で此方を翻弄している。建物の外部では奴が圧倒的に有利だ・・・一度研究所内に入って体勢を立て直すんだ』

「そうか・・・狭い空間内では飛行タイプのファイヤーの力を存分に発揮できない、か」

『その通りだ。ボクが引きつける。その間にお前達は研究所内へ』

的確なマリスの指示をユウタ達に告げると彼らも納得した。

ゴオォォォ

ジュンの中から闇（マリス）が抜け、外に飛び出す。

「何だ・・あれ・・」

上空から銃を連射していたレオンは見慣れない物体に目を細める。

「一応撃っておくか」

カチッ

トリガーを引くが弾丸は発射されない。弾切れのようだ・・・

「クソ、少々弾を使いすぎたか」

カチン　カシャ

空になったマガジンを地上に投げ捨てると腰のホルダーから新たなマガジンを取り出し装填する。

地上では溢れ出た闇が形を取っていく

まさに・・・漆黒の怪鳥だ。

元陸軍精鋭対テロ特殊部隊【デルタチーム】の隊長のレオンは無論、テロリスト側のポケモンとも戦ったこともある。

しかし、こんな技は初めてだ。

純粋な闇に近い。闇への好奇と畏れ。そんな感覚が全身を走る。

ガン　ガン　ガン

三発特別仕様の弾丸を黒い鳥に撃ち込むが全く効果がない。

それどころか此方に向かって突撃してくる。

拳銃が効果無しと見たレオンは背中に背負っているＭ１６を素早く構えると引き鉄を引く。

ガガガガガガガ

Ｍ１６から空の薬莢が次々と出て地面に落ちていく。

弾丸が連射され地上にばら撒かれる。

しかも一発一発は自身のキメラ能力で小型爆弾並みの威力を持たせてある弾丸だ。

が、マリスにとっては全て無意味だ。

ジュンの心から生まれた純粋闇であるマリスには弾丸など何の役にも立たない。物理的な攻撃が全く効かない存在だからだ。

（おいおい、まさか物理攻撃無効みたいなノリかよ・・・・）

レオンは背中の翼を羽ばたかせ一気に空に駆け上がる。

（火炎放射かソーラービームで一気に焼くか・・・ん?）

あることに気づく。地上にユウタ達の姿が見えないのだ。

黒い怪鳥も姿が元の不定形の闇に戻ると研究所内にスルスルと入っていった。

「嵌めやがったな、あいつ等」

地上に降り立つレオン。その顔には悔しさと手ごたえのある敵を相手にしていることへの興奮とが混ざった・・戦士の表情が浮かんでいる。

「研究所内に誘い込んで俺の機動力を削ぐ作戦か。なるほど考えたな」

Ｍ１６を肩にかけキメラ状態を解除する。

倒れて気絶している隊員達を跨ぎレオンは一人研究所に歩いていったのだった。

「で、ジュン君。俺達はこれからどう行動するんだ?」

研究所内でファルコンは周囲を警戒しつつ肩越しにジュンに尋ねる。

「そうですね。ここはさらに複数に分かれて行動したほうがいいでしょう」

「待て、ジュン。そんな事したら戦力が分断されるぜ!?」

ユウタの言葉に静かに答える。

「僕達の目的は【プロジェクト・キメラ】を潰すこと。正確に言えばエリカが用意しているミサイルの破壊及びキメラ技術の断絶だよ」

「そんなことは分かっている！しかしだな―」

「僕にはマリスがいる。そして他のポケモン達もね。レオンさんの射撃が酷くなってきていたから再度ボールに戻してはいるけど。・・・集まってたら一網打尽にされる可能性があるよ？」

「いいだろう・・・だがどう戦力を分けるのがベストか・・」

「僕は一人で行くよ。君達軍人は団体行動に慣れている。でも僕はずっと一人でポケモンハンターをやってきたからね」

この提案にユウタ、ファオ、ファルコンが顔を見合わせる。

特にファルコンの顔には今の発言に対する驚きが表れていた。

「おい・・ジュン君。もしや君はポケモンハンターだったのか！？」

「ええ。ああ、言ってませんでしたね。僕はポケモンハンターなんですよ」

そう言って微笑む。

「只者じゃ無いとは思っていたとはまさか犯罪者だったとは・・・しかも国際的な犯罪職業じゃねぇかよ・・・」

ＵＳＡ２（国際安全保障軍）が“敵”と見なしている人間達の中に

ポケモンハンターも含まれているのである。

作戦成功のためならあらゆる手段を講じる情報部と違いファルコンは“純粋な”陸軍。

やはり敵と見なしていた犯罪者と手を組んで共闘しているという事実は少しファルコンには受け入れがたいことなのだ。

一気に険悪な表情になるファルコンを見てジュンは逆に喜びを見出していた。

（これだ・・・僕がポケモンハンターだと分かった瞬間の人の表情。これを見るのがたまらなく快感なんだよねぇ）

普通、人は他人から悪人と見られるのを恐れる。そう見られないために必死に取り繕うのである。

しかしジュンは違う。他人から悪と見られれば見られるほど自分の中に何とも言えない快感が走るのだ。

（ふふ・・・ポケモンを捕獲するときのあの高揚感とレンジャーや警官と対峙して犯罪者として見られる時の感覚・・いいよ。素晴らしい！これだから止められないんだよね、ポケモンハンターは）

「で、どうするの？僕はハンターだと知ってなお僕と協力するのかい？」

「・・・今はエリカ達を攻略する事が先決だ。不本意だがな・・・それにお前は一応信用の置ける奴と見なせもする」

ファルコンがＭ１６の銃身を撫でながら目を合わせないように言う。
些か怒っているようだ。

「やっぱ正義の軍人さんはポケモンハンターと協力するのなんて嫌だよねぇ・・・でもファルコンさんは結構我慢強いね。僕みたいな犯罪者と一緒に入れるんだもの」

「おい・・俺をあまり怒らせるなよ」

「君のような軍人さんとハンターである僕が共に戦う。少しは軍人の誇りが地に堕ちかけているのかな？もっと堕としてあげようか？」

キッと睨むファルコン。

がその怒りを笑顔で受け流したジュンは二手に分かれた廊下に入る

「ファルコンさん、武運をお祈りしますよ」

そう言って片手を上げると険悪なオーラを放つファルコンに背中を向け廊下を歩いていくのだった。

（さて計算通り研究所内で一人になれた。ファルコンさんみたいなタイプは怒らせるのが一番だよ）

ジュンはポケットから一枚の用紙を取り出す。

『それは？』

「この海上研究所内部の見取り図」

マリスの問いに簡潔に答える。

『・・・それを何故皆が集合しているときに出さなかった?』

疑問の声。

彼(マリス)が疑問に思うのも無理はない。ブラウン少将やフォック達と別れずに一緒に居たときに出しておけば地理の利が共有できたのだ。

「何故だと思う?」

不可解な笑みを浮かべるジュン。

『分からない。しかし、ジュン、お前の心から溢れ出る野心が感じれるぞ』

どこか嬉しそうな口調のマリス。

「そうだね・・・この地図を見せれば僕の真の目的に気づかれるかも知れないからね」

『真の目的?エリカを倒してプロジェクト・キメラとキメラ技術を断絶することじゃないのか?』

薄っすらと微笑むとジュンは地図の上に指を滑らせ・・ある部分を指し示す。

「僕がリーフから得た情報ではここにキメラ達が収容されている。まあポケモンなのか人間ベースなのかまでは分からなかったけど」

『まさか・・ジュン、お前はそのキメラ達を回収するつもりなのか？』

まさかと問うて来る。

「うん、そうだよ。どうせエリカが倒された後軍によって回収されるんだ。その前に僕が回収しておく。ま、たいした量は居ないと思うけどね」

『それがお前のここに来た真の目的か？』

かなり驚いたらしくマリスの口調が若干荒くなる。

同時に興奮しているようだ。

「そう・・・軍、ユウタ達はキメラ技術を潰すつもりだけどね。その前に取れるところは取っておくんだ。これは完成体のキメラを入手できる絶好の機会なんだよ。無論・・・キメラ技術も回収するつもりさ」

『キメラ技術まで奪うつもりか・・・欲が深いな・・強欲なことだ・・くっくっく・・面白いぞ！面白い！』

「でもキメラ&技術の入手は第一段階さ。僕の計画を進めるためのね」

そう言って静かに微笑む。その目には野心が渦巻いていた。

『くっくっく・・いいだろう！ボクは見たくなってきた！お前の計画とやらを！お前の中の野心と欲望・・悲哀と怒りと強欲の闇！愉

快だ・・やはりお前といてよかったよ。お前はボクを飽きさせない！くくく・・ハハハハハ！』

くぐもった声が狂気じみた笑い声を上げる。

ジュンはただひたすら歩いていくのだった。

第八十四話　ＶＳロザ＆ａｍｐ；ＶＳレオン。新たな〝計画〟の芽（後書き）

【ロサ・ネグラ】とはスペイン語で『黒い薔薇』という意味です

第八十五話　理想

「見取り図によるとここの研究所の地下にキメラ育成所があるらしいね」

僕は廊下を歩いていく。

『罠もなさそうだな・・・エリカの研究所だと言うのに無用心な』

「ここまで入られることまでは想定していないのさ」

ジュンは扉の前で立ち止まる。

地下に通ずる階段がある。

「ここか」

カッカッカ

自分の足音だけが響く。階段の横の非常蛍光灯だけが頼りだ。

『怪しい匂いがぷんぷんするぞ』

嬉しそうなマリスの声。最後の段を降り、バイオハザードのマークが描かれた自動ドアを潜るとそこには驚くべき光景が広がっていた。

「これは・・・」

ジュンの目の前に広がる地下空間には大きなカプセルが一定の間隔

で設置されており、液が充填されているその中にはポケモン達がプカプカと浮いている。

「キメラの培養所か」

『そのようだな・・・』

キメラポケモン達の工場。そう呼ぶのが適切だろう。

『お・・何か居るな』

突然マリスが何かを感知したらしい。

「何？ポケモン？」

『いや・・人間のオーラが漂っている・・こっちだ』

マリスに従いジュンは地下の研究所を歩いていく。

ある部屋の前に立つ。

『ここだ』

扉に手をかけジュンはその部屋に入った。

そこには信じられない光景が広がっていた。

ガラスケース張りの小部屋が部屋の中にあったのだ。

その中に一人の男がみすぼらしい服を着て座っていた。

肩幅は後ろから見ただけで広い。よく鍛えられている体だと一目で分かる。

「どうも」

声をかけるとその男が此方を向く。

まだ２０代後半、多く見積もって３０歳前半といったところだろう。短く刈り込んだ髪に・・・左目から頬にかけて古傷が走っている。

恐らく左目は潰れているのだろう。

閉じられた左目と周囲の皮膚を傷がまるで縫い合わせているようだ。

「誰だ、テメェ・・・ここのクソ研究者どもの仲間か？」

隻眼の青年が荒っぽい言葉使いでジュンを睨む。

「初対面から印象が悪いですね・・僕は氷室準といいます。残念ながら部外者ですよ」

微笑んで答えるとその青年の表情が少し変化する。

「そうか、奴らの仲間じゃねえか・・・。テメエここに一体何のようだよ？この海上研究所によ」

「その前に名乗ったらいかがです？」

「・・・草薙剣（くさなぎつるぎ）」

「なんか神話っぽい名前ですね」

含み笑いをするとツルギが鼻を鳴らす

「悪りぃかよ。ガキん時から言われ続けてるから聞き飽きたぜ」

「いいえ、中々センスのいい名前と思いますよ」

ジュンは周囲を見渡す。

「ツルギさんはどうしてここに幽閉されているんですか？」

「当ててみな」

「ん～そうですね。元軍人で戦いで負傷して気がついたらここに送られていた、とか」

その言葉にツルギの右目が驚いたように開かれる。

「お前・・・何モンだよ。どうやら・・色々な事を知ってそうだが。まあいい。そうだ、俺は元陸軍少佐。対テロ特殊部隊が中心の大隊の現場指揮官だった。『隻眼の狼』と言われていたんだぜ」

最後のセリフには少なからず自慢げな雰囲気が漂っていた。

「陸軍少佐・・・と言うことはユウタ達と同じか」

その呟きにツルギが反応する

「どういうことだ?」

「いや、僕は陸軍情報部のバックアップの元ここに潜入しているんですよ」

そう教えるとツルギの肩眉がピクリと動く。

思い当たる節があるらしい。

「・・・CICか?ならそのユウタって言うのは・・・あのガキか。確か少尉の」

「ええ。川神雄太です。僕の・・・まぁ友人です。今は中尉に昇進していますけどね」

「で、テメエの目的は?」

「・・・戦力回収ですよ」

「・・・は?」

その言葉にツルギの顔に疑問が現れる。

ジュンは壁に寄りかかり腕を組むと口を開く。

「ここに来た理由・・ここだけの話ですが。エリカという人物、知ってますね?彼女を倒すという名目で軍と同行していますが・・・僕の真の目的は違います。この研究所に送られた負傷した軍人やポケモン、キメラ化されているであろう戦力を回収するためです」

「何のために・・・」

「僕は組織を作ろうと思っています。戦闘能力や隠密技術、情報収集能力に特化した集団を。僕のある目的のために」

微笑んで言うとツルギが怪訝そうな目でジュンをじろじろ眺める。

やがて口を開いた。疑念に満ち満ちた声だ。

「お前みたいなガキがか？」

「ええ・・ツルギさん、貴方をここから助けてあげます。その代わりに僕の仲間になってください。貴方は僕の組織の第一番目の仲間になるんですよ」

「・・・ふん、最初から強制的に仲間にする事を考えていやがったな」

隻眼の鋭い視線がジュンをじっくりと観察する。

「生憎俺以外の奴らは全員この研究所から軍の研究所に運ばれていった。負傷した元軍人のキメラは俺だけだ」

「ならあなただけを連れて行きましょう」

「いいだろう。どうせ法律上は『戦死』した身だ、だが一つ条件がある」

「条件？」

頭を掻きながらツルギが口を開く。

「仲間にはなんねぇ。俺の腕が欲しけりゃ雇え。俺も元軍人だ。それ相応の報酬を約束するんなら、お前の為に体を張る」

「・・・いいでしょう。ではすこし僕と同行して下さい。腕がどれ程のものか見せてもらいます」

ジュンは携帯電話を開きメッセージをリーフに送る。

「後はキメラ技術の回収か。でもそれはエリカの研究室に行かないと入手不可能だから後回しだ・・・」

手をかざし力を入れる。

パキィィン

強化ガラスを『サイコキネシス』で破壊する。

「ツルギさん。貴方は僕の玩具の第一号ですよ」

「・・・ふん」

ジュンはツルギの横に立ち肩越しに告げる。

「仲間にヘリの用意を手配しておきました。もう一度コールすれば直ぐに駆けつけてくれるはずです。」

「テメエはどうするつもりだ?」

「僕はやるべき事がありますから」

「・・・やるべきこと？」

「ええ。エリカはミサイルを用意しているんですよ。軍から調達した大陸弾道ミサイルです。そのミサイルを何のために使うのか、それをエリカの研究室に行って調べて対策を立てなければ」

ジュンの言葉にツルギの片眉がピクリと上がる。思い当たる事があるようだ。

「・・・研究者どもが話してたんだけどな」

前を歩きながらツルギは口を開く。重々しい声だ。

「・・・ポケモンと人間のキメラの作り方には二種類あるそうだ。一つはポケモンの遺伝子を人間に直接組み込む方法。そしてもう一つはキメラウィルスと呼ばれるものに感染させること、だそうだぜ」

キメラ・・ウィルス・・・？

ジュンは以前ブラウン少将の発言を思い出す。

「エリカはウィルス株を買っていた・・・そして大陸弾道ミサイル・・・まさか・・・」

「ん・・どうした？」

ヌッと顔を覗き込んでくるツルギ。ガタイがいいため上から見下ろされる感じだ。

「エリカは・・地球全体にキメラウィルスを撒く気だ・・・」

その言葉にツルギは心底呆れたような表情になる。

「はぁ!?そんな事して何の得になるんだっつーの!」

「ツルギさん。エリカには損得勘定はありません。全ては彼女の、言わば思想というか欲望のために動いているんです。エリカならやりかねません。全世界の人間をポケモンとのキメラにする・・・これ以外に考えられません」

「全人類キメラ化するだぁ!?そんな馬鹿なこと・・」

「するんですよ、エリカなら」

そう。ジュンは自分の推理に確信があった。

エリカならやる。

世界的な大企業を操り軍に取り入りミサイルとウィルスを手に入れた彼女なら・・・。

(ということは全人類をポケモンとのキメラ化するためにキメラ技術を開発していたのか・・・随分と用意周到なことだ

「ほお、真実を見つけたか」

後ろから声がする。ジュンとツルギが振り返るとそこには・・レオン・J・ホーガンがM16の銃口を向け立っていた。

「・・・クサナギ少佐・・・」

ツルギの顔を見た瞬間レオンの表情が変わる。

かなり驚いているようだ。

「レオンか・・・どうして此処いる？えぇホーガン大尉よ？」

知り合いのようでツルギが腕を組んでレオンと対峙する。

「・・・」

「此処にいるってことはエリカ達を潰しに来たか、その協力者だったかのどちらかだな」

レオンは黙っている。

「・・・負傷した部下のことまだ引きずってんのか？」

「クサナギ少佐。俺はロンバートを助けなければいけない。その為に全てを捨てて来た。邪魔はしないでくれ・・・どうせアンタも表面上は死んでいることになっているはずだ」

「どうすんだ？ジュン？」

肩越しにツルギが尋ねてくる。

「・・・何故僕に判断を仰ぐんです？」

「今はお前が俺の雇い主だからだ。ガキにされる使役たぁ情けないが一応雇われてる身だからな」

ツルギさんにここは任せようか・・・僕はやるべき事があるし。

「いいでしょう。彼を押さえ込んで下さい。ただ銃なしで戦えるんですか？」

「心配ねぇよ・・・俺のキメラ能力ならな」

ミシ・・ミシ

突如ツルギの右腕が銀色に変化していく。

皮膚がメタル化したのだ。

（これは・・金属！？）

「十万ボルト」

銀色に輝く“金属”の腕から激しい電撃が放たれる。

すると機械がショートし、バチバチと音を立てた後発火した。

火の気を感じ、天井のスプリンクラーが一気にシャワーを降らす。

ザザザザザ・・・

「いまだガキ！ずらかるぞ」

ジュンはツルギに腕を掴まれるがままに一緒に部屋から脱出した。

「ツルギさん、なんか戦いなれてますね」

走りながら前を行くツルギに声をかける。

「当たり前だ。俺は元陸軍特殊部隊。これぐらい大したことねぇ。ま、レオンもそうだろうが」

「で、ツルギさん。この後何処に行くつもりですか？」

「・・・くどいようだがこの研究所は軍と提携して、負傷した軍人達を実験に使用していた。回収された軍服をまとめて置いておく部屋がこの先にあんだよ。ちっと着替えさせてもらうぜ。この服は少し汗っぽいからな」

後ろを確認し、レオンが追いかけてこないことを確かめるとツルギは走りから早歩きになる。

「着替えって・・・レオンさんが追跡してきてるのに・・」

「奴は俺達を攻撃しない。本気ならあの場所でさっさと撃ってるさ。奴は利用されてるだけだからな・・・まぁそれはレオンが一番知ってるだろうが・・」

（ん・・なんか歯切れが悪くなったな・・・。まあいいや。この方向はエリカのメイン研究室と同じだし）

前を行く大きな背中を眺めながらジュンはそんな事を考えていた。

『ジュン。あのレオンとか言う奴は追ってこない。どうやら追ってくる気がないようだな』

マリスが囁いてくる。

確かに本気ならばあの時あの場でＭ１６が火を噴いていただろう。

（レオンはエリカに操られているのか・・・きっと弱みでも握られているんだろうけど）

「ここだ」

研究所の一室の前で立ち止まりドアを開けるツルギ。

中には迷彩服や軍服がずらりと畳まれていた。

「やっぱここに保管してやがったか。お、銃も一緒か」

服を脱ぎ半裸になるとツルギはダンボールに入れられた大量の拳銃の山から一丁をを取り出す。

ジュンも見覚えのある銃だ。映画でよく登場する・・。

（えっと確か・・・ああ、そうだ）

「４４オートマグですか？それ」

「ん？あぁそうだ。俺の相棒さ。つーか、クソ研究者ども。銃をこんなに乱雑に積み上げやがって！埃がつもってるじゃねえか！」

脱いだ服の端で４４オートマグを磨く。

上半身にも多数の傷跡が伺える。

かなりの激戦を潜り抜けてきた戦士であることが分かる。

「ツルギさん、銃磨いてないで服着たらどうですか？見事な肉体を晒したいのは分かりますけど」

皮肉を込めて手近にある迷彩服を渡す。

礼も言わずツルギは服を受け取るとそれを着る。

「さてと着替え終了」

迷彩服を着ると一気に軍人らしさが増大したツルギ。

恐持てがますます際立つ。

服と一緒にしまわれていたホルスターにオートマグを収納しアサルトライフルＭ１６を手にする。

「で、どうすんだ？」

「エリカの研究室に向かいます」

「データ回収か？」

「ええ」

ツルギはジュンを見下ろすと、「ふん」と荒い鼻息をついて口を開く。

「まあいい。俺はお前に助けられたし、今はお前が俺の雇い主だ。

ついていくぜ」

「では少し作戦・・みたいなものをお話します」

ジュンは鞄から一枚の紙を取り出す。

「これはこの研究所の見取り図です。研究所は三館で構成されており、今僕達がいるのは第三館です。エリカの研究室は中心の第二館にあります。ただ研究室にはどうやら地下室が備わっているようですね。恐らくその下には―」

「キメラ達が保管されてるってことか」

「恐らく。あの、そういえば」

「あ？」

「ツルギさん、あなたのキメラ能力は何なんですか」

その質問にツルギはニヤッと笑う。

「俺はジバコイルとのキメラだ。だが単独タイプのポケモンのキメラとは違うんだぜ。まぁ姿形がジバコイルにならねえってところだけだ。俺は全身を金属化する事が出来る。勿論普段のように動かすことも、そして電気を放つことも可能だ」

ツルギがメタル化した手をジュンに見せる。

銀色に輝く手からはバチバチと電撃が走っている。

「凄いですね。悪用しがいがある力です」

「・・・ガキ、ちょっと聞いていいか？」

突然ツルギが真顔になる。

「お前は何のために軍を欺きここにいる？データ回収以外にもあるんじゃねえのか？」

その質問にジュンは薄っすらと微笑む。

「僕はポケモンハンターです。この研究所には多くのポケモン達が収容されていることでしょう。それを全部捕獲（キャプチャ）します」

「で？」

「僕にとって捕獲したポケモンは商品ですから。世界中にいる顧客に売りますよ」

ふんと鼻を鳴らすとツルギは腕を組む。

「ポケモンハンターか。軍や警察それにレンジャー達が目の敵にしている存在だな。なんでハンターをやっている？金が儲かるからか？」

「もちろんお金は多いに越したことはありません。が、少し違います」

「・・・」

ツルギは黙っている。

黙して、先を促しているのだ。

「僕がハンターをやっている理由・・・まぁ強いて言うなら、全ての秩序、そして全ての正義の破壊ですね♪」

ジュンが邪悪な笑みを浮かべとく上の笑みを浮かべる。

目を細くするツルギ。

悪意と邪悪さで覆われたジュンの表情がまた微笑に戻る。

「僕の中に澄む“悪意”。僕は自分の闇を満足させたいんですよ。破壊を求めるこの闇を」

ジュンの背後から黒い霧が周囲を包む。

咄嗟に身構えるツルギ。

「そんなに敏感に反応しなくてもいいです。ツルギさん、あなたにも紹介しておいた方がいいでしょう。僕の心の闇が具現化した存在であり、僕から生まれ独立した第二人格。マリスです」

闇が固まり、漆黒のアグノムの形を形成する。

目は赤く不気味な輝きを放っている。

『ボクはマリス。ジュンから生まれし闇・・・くっくっく、よろしく』

「まったく化け物を体内に飼ってる奴は始めてだぜ」

バリバリと頭を掻くツルギ。

「最近のガキはどうなってんだ。エリカといいお前といい。どっちも悪意で充填されてやがる」

「それは少し違いますね、ツルギさん。僕は確かに悪意と闇と破壊衝動が大好きですが、エリカは違います」

「・・・そうなのか」

ジュンはニッコリと微笑む。そして手が髪を弄りながら口を開き、言った。

「エリカのあれは悪意でも闇でもありません。あれは狂気です。鬼才と狂気が入り混じった人間ですよ、彼女は」

あの白衣に身を包んだ美少女。

薄茶色の長い髪と透明感のある肌。

全てにおいて非の打ち所の無い容姿の中には燃え盛る“狂気”がはっきりと見える。

「一つ聞いていいか?・・・そんなに破壊が大好きなら、なんでエリカを止める?放っておけば世界は破壊と混乱の渦に飲み込まれるのによ?」

ツルギの質問に微笑を浮かべたままはっきりと答える。

「エリカがこの世界の秩序を壊してしまったら僕が壊せなくなるでしょう?僕は、この世のバランスを崩す行為をする犯罪者を認めません。壊れてしまった秩序を壊しても何にも面白くないですから」

後ろを歩くツルギは何も言わずに黙っている。

ジュンは鞄からポケモンハンターのアイテムの一つ、特殊なバイザーを取り出す。

それをかけながら再び続ける。

「エリカ達が開発した技術はキメラだけとは思えません。この研究所の設備を見れば分かります。最新鋭のバイオ技術・・・全部僕が回収しますよ」

歩みを止めるジュン。

「どうした?」

怪訝そうな顔で覗き込んでくるツルギにジュンは答えない。

暫らく黙っていたが・・・ようやく口を開いた。

「この先の第二館から凄まじいエネルギーが感じられます。僕の中の闇がそれを感じ取っているようです」

『ジュン、この先の研究所の地下から膨大な量のエネルギーが放出されている。純粋な闇であるボクが一瞬圧倒されるほどのな』

エリカか・・。

人間とポケモンの融合体を作ることに心血を注いでいた。

恐らくエリカは既に自らの肉体もキメラ化している。

僕の中の闇とエリカの狂気。

どちらが勝つのか・・楽しみだ。

「行きましょうか。ツルギさん」

M16を持っていない方の手を握ると引っ張るようにジュンはツルギを引き連れて歩き出した。

＊＊＊＊

ディアルガ、パルキア、アルセウスは三位一体の神。

『時』を生み出したディアルガ

『空間』を生み出したパルキア

そして無から生まれ、ディアルガとパルキアを生み出したアルセウス。

ザッ

第二号館地下。

パルキアとアルセウスが8面体のエネルギーネットで出来た檻に封じられている。

そしてそんな二匹を冷ややかに見る一匹のポケモン。

白き竜・・レシラムだ。

「いい様ですね、神と呼ばれしポケモン」

皮肉たっぷりの言葉にアルセウスが弱弱しく睨みつける。

「レシラム・・貴様、何故奴に加担する・・・」

「こっから出たらボコボコにしてやるぜ・・・」

パルキアの脅しもレシラムは全く動じない。

「何故？なるほど、覚えていないと・・まあそれも仕方ないか。だが、私は忘れない。エリカの身に振りかかった悲劇を。その直接の原因が貴方達だと言うことも」

レシラムの言葉にアルセウスの目がスッと細くなる。

「・・・私達への報復というのは分かった。しかし一つ解せない。何故、私とパルキアを捕まえられたのだ・・・ディアルガは一匹で世界のバランスを支えていたからまだ分かる。しかし私達は回復途上にあったのだ。人間や並みのポケモンの力では、捕まえることなど不可能だ。だが、お前達は化け物じみた力でもって私を捕縛した。神に対抗できるのは同ランクの神だけだ」

アルセウスは言葉をいったん切ってから、重々しく言う。

「初めはレシラム、貴様が奴らに力を与えているのだろうと思った。しかし、お前がたとえフルパワーを授けていたとしても不可能だった」

「すっご～い。さすが、アルセウス。よく気がついたね♪」

突然後ろから声がする。

一人の少年がニコニコしながら扉を潜りレシラムのほうに歩いてくる。

「・・・誰だよ、テメェ」

パルキアの睨みも全く気にせずその少年は「おいしょ」と装置の上に座る。

身長は１６５センチ程。

黒い髪には赤いメッシュが入っており、可愛らしい顔は常に笑みを浮かべいる。

その姿にアルセウスの目が驚きで見開かれる。

「・・・お前・・・ギラティナか・・・」

「ふふふ、さすが～」

「おい、マジかよ・・なんで、こんなところに居るんだよ!?ギラティナ!?」

パルキアの言葉に赤いメッシュの少年、ギラティナは冷ややかな笑みのまま口を開く。

「エリカがね～レシラムと一緒にボクに取引を持ちかけてきたんだ♪アルセウスとパルキア、ディアルガを捕まえるのを手伝って計画が成功したあかつきには、三位一体の神の力をおすそ分けしてくれるってね」

「馬鹿な・・・では、私とパルキアが襲われたとき奴等に“力”を与えていたのは・・レシラムでは無く・・貴様だったというのか!?ギラティナ!?」

「正確にはパルキアが作り出した空間への入り口を開けたのもボクさ」

「何でだ・・なんでオレ達を裏切った!」

怒りの咆哮を上げるパルキア。

ギラティナは笑みをにまぁと張り付かせると、ケラケラと笑う。

「ボクは君達とは違って反転世界の王。こっちの世界に対する影響力は君達より遥かに劣る。だから、この機会にボクがディアルガ、パルキア、アルセウスの力の一部を吸収してボクの干渉力を高めておくのが得策かなってね～」

「そういうことだ。エリカは大陸弾道ミサイルを使い、世界中にキ

メラウィルスを撒く。感染者の１００％がポケモンの遺伝子を組み込まれたキメラとなる。世の中から大きな力の格差は無くなり、皆平等になる」

「馬鹿な・・理想論だ・・」

「いや、違う！これは真実だ！」

レシラムの声が一段と大きくなる。

「人間とポケモンは平等でなければならない！人間が全員ポケモンとのキメラになれば、その格差は無くなる・・・加えて、人間達がポケモンの技使えるようになれば、環境破壊も止まる。自前で賄える様になるからだ！私はエリカと共に『プロジェクト・キメラ』を推進してきた！もう誰にも私達を止めることは出来ない！！もう直ぐだ・・・もう直ぐ新たな世界の幕開けとなる！」

理想を『真実』にする。

新世界誕生に燃えるレシラム。

自らの欲望のために動くギラティナ。

戦況は刻一刻と変化していた―

第八十六話　レオンの悲願～過去の清算～

「はぁ・・・はぁ」

ブラウン少将一向に敗れ、体がボロボロになったアキラは一人【スキエンティア】の研究所内をふらふらと歩いていた。

「あかん・・・歩くのだけでもしんどいわ・・・」

半裸の体にはあちこちに傷が出来ている。

ゾロアークとのキメラであり、超再生能力を有しているのにここまでの傷を負っていることから相当なダメージを受けていると分かる。

「あれ～アキラ、どうしたのさ?」

後ろから声がする振り向くと、黒髪に赤いメッシュの少年が立っていた。

「ギラティナ・・・見て分からんか?」‥

その少年、ギナティナはにまっと笑う。

「ゾロアークとのキメラなのに、そんなにボロボロにされちゃうんだね～」

「・・・少し俺達は甘かったようや。奴ら本気や・・・エリカの元に早く行かへんとあかん・・」

「そのエリカから伝言だよ～」

ギラティナの言葉にアキラの目がスッと開く。

「・・・・なんやて？」

「だから、伝言。ボクが預かってる伝言言うね～。『アキラ、もういいわ』だって」

「・・・・・・・・・は？」

意味が分からなかった。

何が『もういい』のか・・・

次第にアキラの背筋が寒くなっていく。

・・真に恐れていたことが、現実になろうとしている。

「『あなたはもう用済みよ。この島から去りなさい。もう会うことも無いわ』って言ってたよ～」

「・・・そんな、アホな・・俺が・・・捨てられた・・・」

ドサッ

力が抜け膝をつく。

その姿をギラティナは面白いものを見るような目で見ている。

「俺は・・エリカのために全てを捨ててきた。地位も名誉も仲間もプライドも・・・そんな・・そんなアホなことが・・・」

「残念だったね～。あ、まだ伝言あるんだけど、どうする？聞く？」

「・・・・」

アキラは黙っている。

「・・・『験体０２。アキラ、あなたのコード名よ。あなたは初期のキメラの中では最高クラスの存在だった。でも、技術とは進化するもの。初期において全般的に優れていたあなたも最早能力不足。私のキメラ化進行の過程を守る兵は、操りやすいだけではなく有能で無くてはいけない。だから解任するわ。島にある手近なボートに乗ってここから出なさい』」

「・・・エリカ・・・そんな・・・俺を・・・」‥

ポタ　ポタ

頬を流れる涙が床に零れ落ちる。

全てを捨ててエリカに尽くしてきた。

ポケモンリーグ最年少チャンピオンとしての業績も、ポケモンバトルに対する誇りも全て。

エリカの罪を一身に背負い続けてきた。

だが、心の奥底では彼女の信頼を買っていると思っていた。

「・・・エリカ・・・俺のどこがいけなかったんや・・どこが失格やった・・・」

その姿にギラティナが再び口を開く。

「そういえば、もう一言伝言があるんだ。えっとね～」

ごそごそとポケットから一枚の紙切れを取り出す。

「・・・『最後に一言。アキラ、私はあなたの恋愛感情に気づいていないとでも思っていたのかしら?あなたは使いやすい駒だった。何でも指令を聞く優秀な兵士だったわ。でももう能力不足。アキラ、私が唯一心を許した存在。もう少ししたら最強のキメラを放つわ。悪いことは言わない。この研究所から脱出しなさい』」

信じられなかった。

例の錠剤を渡したというのに今になって助けるとは。

そして最後の言葉。

エリカがアキラに心を許していた。

この衝撃の事実は何よりアキラを動揺させた。

自らの愛がほんの少しでもエリカに届いていたこの事実は、当の本人を困惑させているのだ。

アキラのその様子にギラティナは面白い見世物でも見るかのように

にまぁと笑う。

「あ、そうそう。それとこれがカギね」

ポイッとギラティナがカギを投げてよこす。

それを受け取るとアキラは半裸のまま後ろを向く。

エリカ。自分がすべてを賭けて愛した女性。

その女性からの最後の命令。

成就されなかった愛への悔しさと、ほんの少しでも自分の気持ちが届いていた嬉しさを噛みしめ、アキラは歩み始める。

「・・・エリカ・・自分には最後まで告白出来んかったなぁ・・・」

そう呟くとアキラはふらふらと歩いていく。

孤島の研究所周辺の森を抜けると、ボートの停泊所が見える。

アキラは去る前にギラティナからもらった鍵をクルーザーに差し込むと、エンジンをかける。

「・・・財布もある、クレジットも入っとる。・・・だが俺はこのまま逃げていいんか・・まだこの島にはレオンとロザがおる。あいつらだけでも待つべきちゃうんか・・・」

このままクルーザーを使い島から出れば、仲間を見捨てたことになる。

それだけは御免だった。
人間性を失いたくはなかった。
「待たな・・・」
が、意識が遠のきそうだ。
クルーザーのハンドルに手をかけそこにもたれかかる。
「あかん・・・気絶しそうや・・・やばい・・・」
その時
バサッ
クルーザーの白い床に三体の影が映った。
アキラが朦朧しながらも上を見上げると
そこには三匹のポケモンがいた。
見覚えのある純白の体と銀色のボディと緑色の肌を持つ三体のポケモン。
見慣れたかつての相棒達。
「・・・なんで・・ここに・・」

つぶやくとアキラはふっと気を失ってしまったのだった。

＊＊＊＊＊

「ロンバート」

地下のキメラポケモン製造工場。

そこに一人の青年が立っていた。

手を大きなカプセルの強化ガラスにピタリと当て、食い入るように中身を見ている。

培養液に浸かり、呼吸器と点滴で命を繋いでいる青年ロンバート。

彼の救済こそレオンの悲願なのだ。

「・・・もうすこしだ、ロンバート。もう少しで・・・お前を・・」

ガラスのひんやりとした触感が手から伝わってくる。

レオンがエリカにつき従って来たのはロンバートを助けるため、だけではない。

自らの過去の罪を清算するためなのだ―

「俺を蝕む罪・・・俺はそれから解放されたい。そう思うことは間違いではないはずだ！」

―2年前の大規模なテロ事件。

レオンは対テロ特殊鎮圧部隊の部隊長として現場に赴いていた。

「ホーガン大尉。あのビルに犯人グループが立てこもっています。三階の中央会議室に人質3名。一階から三界までは非常階段が直通です」

黒髪の青年、ロンバートがサブマシンガンを手に現状報告を行う。

「なら・・・第一突入部隊は建物前方から。第二突入部隊は非常階段から突入！第一部隊は正面から入り犯人グループを撹乱、俺の部隊はその隙に非常階段から一気に建物内に入り、薄くなった防御を突破する」

第一突入部隊と分かれ、レオンはロンバートと共に第二突入部隊として非常階段を駆け上がっていく。

「ホーガン大尉、やはり突入時は緊張しますね・・・」

「ああ、俺もだ」

レオンはニッと長年の戦友に笑みを向ける。

チャ

銃を構えると扉に張り付く。

「・・・守備は三名。装備はマシンガンだけか・・・奴らの扉の後ろが中央会議室。あの中に人質が・・・」

「どうします？大尉？」

「・・・閃光手榴弾で目をくらまし、一気に突撃する」

「了解」

レオンは一気に先行手榴弾を投げる。

カッ

閃光が廊下を一気に包み込む。

「突撃！」

タタタタタタ

マシンガンがテロリスト達を撃ち抜いていく。

悲鳴が廊下を包み込む。

（人を撃つ感覚は慣れないもんだな・・・胸糞悪い・・）

そう思いつつも人質のいる部屋に突入するレオン達。

しかしそこはもぬけの殻だった。

「・・・くそ、奴ら人質をどこかに移動させたな」

舌打ちをしたのと同時に無線が入る。

「こちら第一突入部隊。人質を移動させたとの情報を捕縛したテロリスト一名から入手」

「こちら第二突入部隊、隊長のホーガン。今それを知ったところだ。どこに移動させたかわかるか？」

「移動場所は中央会議室から二階下の食堂」

（俺たちが突入してくるのを事前に察知してやがったな・・・にしてもそんなに遠くに、罠かもしれねぇな）

「・・了解」

ブツン

無線を切るレオン。

「皆、聞いてくれ。テロリスト達が人質を二階下の食堂に移動させた！食堂への道は階段しか無いが、そこから攻撃を受ける可能性がある！・・・しかし行くしかない。エレベーターも破壊されているからだ。・・・心してかかれ！」

ダダダダダッ

隊長であるレオンを筆頭に一気に駆け出していく。

ザッ

階段横の昇降口に張り付き敵の有無をチェックする。

テロリストと思わしき人物が三名、軽機関銃を携えている。

（やっぱり階段から狙い撃ちする気だったな・・・というか・・！？）

レオンは目を見張った。

テロリストの一人はまだ年端もいかない少女なのである。

少女は顔に黒い布をまとい口元を隠して、ＵＺＩ　を構えている。

（くそ子供がいるのかよ・・やりにくい・・・）

このテロリストの一団は極貧の出身者が多い。

居住区さえなく食べ物もろくに口にできずにいた者が大半なのだ。

正直な話レオンはそのような過去を持つ人間たちと戦いたくなかった。

彼らの味わってきた苦渋からすれば、レオンは・・・いや自分たちの軍にいる人間やポケモン達はどれほど恵まれているだろう？

大同小異ではあるが暖かな家庭もあり、食べるものに困ったことなど一度もない。

仲間もいるし治安のいいところにも住んでいる。

そんな『恵まれた』環境で育った自分達が苦労と辛酸を舐めてきた者達を責める資格があるというのか？

彼らの過去を知らないのに、テロリストとしてまとめて扱い、あまつさえ『悪』呼ばわりする権利など持っていようか？

そのような行為は『傲慢』なのではないのか？

軍に所属し、軍の正義の名のもとに自分は『傲慢』になっているのではないのか？

（だが・・・それでもやるしかないんだ・・・）

カラン

閃光手榴弾を投げる。

カッ

光がその場を包む。

「いまだ、突破開始！」

タタタタタタタ

引き金を引き、放たれた銃弾がテロリスト達を薙ぎ払っていく。

先ほどの少女がいないが、レオンはどこかに逃げたんだろうと判断し隊を先に進めた。

しばらく廊下を行くとその先には扉があった。
上には「食堂」のプレートがかかっている。
「よし、難関を突破した。このまま食堂に向かい人質確保する！」
自分の隊に号令をかけるとそのまま人質がいる場所に向かう。
すっと少し開けるとドアのふちに張り付き、中を確認する。
見張りはだれもいなかった。
そして中には三名の人質。
「人質発見！」
一足早く部屋に入ったのはロンバート。
「五体満足か？」
「ええ」
「よし。確保！」
胸ポケットからナイフを取り出し、猿轡と縄を切り落とす。
「これでひと段落ですね」
ふうとロンバートは緊張した表情から笑顔に戻る。

「まだ気を抜くなよ」

そう釘を刺しつつレオンは二カッと笑う。

「さてと撤収しよう。皆ご苦労だった」

レオン達は人質の保護を第二部隊に任せるとそのままその場所を後にした。

「隊長はさすがですよ。的確な指示と戦術。尊敬します！」

「よせって。俺なんかまだまださ。それに戦闘技能ならスカイフォード軍曹のほうが上だ」

「第二部隊にるホモなバシャーモですか？」

「ああそうだ。フレイム・スカイフォード。あいつの能力は跳びぬけている。まぁ頭は軽いがな」

そういうとロンバートも含み笑いを浮かべるが、すぐに何かを思いついたような表情になる。

「そういえば、この近くに出来たばかりの居酒屋があるんですよ。どうです？一杯・・・スカイフォード軍曹も誘って」

「ああ、そうだな。だがアイツは酔うと絡んでくるからな・・・」

「それもそうですね」

ハハハッと笑うロンバート。

その笑みにつられてレオンも笑いかけた・・その時。

タン

一発の銃声が響いた。

と同時にロンバートがその場に崩れ落ちる。

床を染め上げる血。

「・・・ロン・・バート・・？」

倒れ伏せるロンバートを驚愕の眼で呆然と見つめるレオン。

何があった・・・

突然のことで思考が停止する。

そしてこみあげてきたのは湧き上がる怒り。

「誰だ・・誰だぁぁぁ！！」

銃声がした場所に怒りに任せて銃を放つ。

ババババババ

そして

ドサリ

茂みから一人の人間が倒れ伏した。

そう先ほどの少女である。

手にＵＺＩを持ったままその場に倒れている。

鮮血がコンクリートを染める。

その光景を見たレオンは背筋が寒くなった。

「違う・・・違うんだ・・」

怒りに任せ放った銃弾は一人の少女を血で染め上げていた。

二つの絶望にレオンは何もすることはできなかった。

ただわかっているのは、正義の名のもとに戦った自分が幼い命を絶やそうとしていることだけだ。

「俺は・・・俺は・・・」

カシャン

銃が地面に落ちる。

血に汚れた自分の手をただただ見つめるのみだ。

そして

ここは陸軍病院。

清潔な廊下においてある外来用の椅子にレオンは顔を伏せて座っていた。

自分に対する嫌悪感がひしひしと体を犯す。

後悔の念がまるで心の奥底にドンと伸し掛かる。

「くそ・・・」

なぜ怒りに任せて撃ってしまったのか。

もしあの少女が死んでいたら・・一生の負い目となることは確実だ。

テロリスト達の仲間であったとしても・・・。

「あら、どうしたの？」

その時、横から声がする。

驚いて振り向くとそこには白衣の少女が座っていた。

「ずいぶんと気に病んでいるようだけど」

「アンタには関係ない」

「ふふ・・そういわないで。そうね、仲間を撃たれたのに激昂して少女を撃ってしまって嫌悪感に苛まれているとか？」

その言葉にハッとその少女に目をやるレオン。

「怒りに任せた行動は必ずその身を滅ぼす、覚えておいたほうがいいわ」

「アンタ・・なんで・・」

「貴方の友人とその少女、死ぬわよ」

その冷たい言葉にレオンが固まる。

「何を・・・」

「今の医学ではあの二人は救えない。絶対に。貴方は友人と自ら手を下した少女の死をその身に刻むことになるわ。ただし両者を救える手段が一つだけある」

「本当か・・・！」

藁にもすがるとはまさにこのことだ。

必死な形相のレオンにエリカは冷笑を浴びせる。

「ええ。しかも銃弾の跡もきれいに消せるわ。その気になれば撃たれた時の記憶も曖昧にできる。・・・レオン・Ｊ・ホーガン。私のために働きなさい。そうすれば、あなたの罪を清算してあげる」

「・・・俺は・・」

「貴方のやったことは合法よ。ええ、軍に従い『正義』のために戦ってきた貴方は英雄でしょうね。しかし、その英雄ができる影には大勢の犠牲者がいるわ。そして、貴方自身は自分を責め続けている。許せていない・・・その“罪”と一生向き合う覚悟があるのかしら？軍人さん」

「俺は・・・」

逃げ出したい。

その思いが心の底から湧き出てくる。

自分の一番の親友であり、同時に相棒でもあるロンバートが撃たれたのも油断していた自分の責任だ。

そして名も知らない少女を撃ったのは自分自身。

レオンは軍に入隊してからというもの歴戦を潜り抜けてきた猛者だ。

すべては平和を守るために。

しかし戦友を撃った相手とは言え、年端もいかない少女に銃を放ってしまった自分をレオンはとことん憎む。

そしてレオンは自責の念の中、自分の過去にも目が行く。

国のために平和のために戦ってきたが、それらは自負してきた『信念』などではなかったのではないか。

それはいうなれば言い訳ではなかったか。

平和のためなら誰かを傷つけていいのか？
国のためなら誰かに刃を向けていいのか？
そんな疑問が湧き上がってくる。
そんなエリカの横で冷たい笑みを浮かべる少女は冷ややかな意見を紡ぐ。
「軍人さん。貴方は『平和』や『国家』のために戦ってきたと言うわね。そして『自分は人を傷つけたくて戦っているんじゃない』とも。でも、それは――」
その少女の顔が一瞬真顔になる。
冷ややかな笑みも冷徹な仮面もない。
その少女が一人の人間として意見を述べようとしているのだ。
「言い訳よ。戦いで大勢の犠牲者を出してしまった軍の言い訳。それ以外の何物でもないわ」
「・・・俺達は平和を守るために戦ってきた。アンタが何者なのか知らないが、平和の中で学問することができるのも俺達がいるからだ！」
「学問を低劣な軍事行為と一緒にしないで。戦争は何も生まないわ。ただすべてを浪費するだけ。それを崇高な学問と並べないでくれるかしら」

そういうと少女は足を組み、薄い茶髪をなびかせる。

「学問は命をささげる価値のあるものよ。科学の発展こそが人類の悲願。人の命もポケモンの命も学問のためならいくらでも捧げれる。もちろん私の命も、学問の前では風に吹かれる埃・・・・この世の真理を解明することこそ最も気高い行為なのよ」

レオンは驚きの眼で横に座る少女を見る。

この少女は、おそらく科学者か何かだろう。

しかしこの学問に対する狂信的な発言の数々には思わず背筋が寒くなった。

「貴方達軍が本当に『正義』ならば、今までやってきたすべての行為が正しくないといけないわね？しかし実際は違う。戦いとは単なる殺し合いよ。貴方達軍が守ろうとしているのは『平和』でも『正義』でもない。自らの意見。自らの思想を守るために他者を傷つけ、排している。自らの意見を守らんと無駄に命を奪う」

「・・・・」

反論できなかった。

その少女は続ける。

「私は無駄な行為は嫌いなの。科学の進展のために人やポケモンが死ぬのは別にかまわないと思っているけど、“無駄な”死ほど嫌悪するものもないわ。戦いにおける死は無駄そのものよ。だから私は

戦争は基本的に反対というわけ。くだらなさの極みだから」

そこまで言い終えると無言のレオンにその少女は向き合う。

「話を元に戻すけれど、私の技術を使えば友人もその少女も助けられる。どうかしら?尤も条件があるけれど」

「・・・なんだよ」

「まず一つ、その重症者二名を人体実験に使用することを認知しておくこと。もし実験に成功すれば彼らは能力が強化された上で助かる。失敗した場合は悲惨な最期を遂げるけれど」

「・・人体実験・・だと」

信じられなかった。

目の前の少女の口からそのような言葉が飛び出てくるとは。

「そんなの許されるわけがない!」

「ええ、違法ね。ただ違法な手段を取らなければ間違いなく二人は死ぬわ。さてどうする、勇ましい軍人さん?絶対に助からない状況に二名を置くか、違法な手段で助かる確率を大幅に上げるか・・・二つに一つよ」

「・・・まだ条件はあるんだな?」

その切り返しに少女に冷たい笑みが浮かぶ。

少女の計算通りに動かされている証拠を見つけても、なおレオンは決然とした表情をしている。

「貴方が私のために働くこと。レオン・J・ホーガン大尉。貴方の軍での信頼度と評価は素晴らしいものだと聞くわ。その知名度と信頼を私のために利用してほしいの」

「・・・内通者になれってか」

「そうよ。私の計画・・・【プロジェクト・キメラ】完遂のためには軍内部に優秀な内通者がいることが必須なの」

「その条件を飲めば、ロンバート達を助けてくれるのか！？」

必死で食いつく。

恥も外聞も無い。

ただ自分が犯した罪を清算したかった。

いや、罪というかどうかは人それぞれだろう。

しかし今回の事件を発端にレオンは今まで戦ってきたあらゆる場面の記憶を思い出してしまう。

そしてそれらすべてが重い罪悪感となりレオンの精神を圧迫している。

だからこそレオンは・・・その『過去』を拭い去りたかった。

清算したかった・・・。

「ええ、約束は守るわ。名乗り忘れていたわね。私はエリカ・K・ホワイト。科学者よ。専門はポケモン工学。レオン・・・あなたの過去を清算できるのは私だけよ」

謎の少女ことエリカはすっと立つと屈み込みレオンの頬に手をやる。

日に焼けた肌にエリカの真っ白な手のひらが重なる。

「・・・助けてくれ・・・エリカ」

絞り出すような懇願の声。

エリカは何も言わず、レオンの頬を撫でる。

忌まわしい過去を清算しようともがく一人の兵士は今ある科学者の手に落ちたのだった―

第八十七話　二重の“策”

ブブブブブ

レオンの携帯がポケットでバイブする。

「・・・なんだ・・」

ガサガサとポケットから携帯を取り出し画面を確認すると「エリカ」の名が表示されていた。

「こちらレオン。エリカ、何の用だ?」

（もしやクサナギ少佐達の追撃をやめたのがバレたか・・・・）

内心ヒヤヒヤしつつ電話に出る。

「レオン。今からU－9を放つわ」

「・・は?」

声が出ない。

（まさか、エリカ・・・奴を放すのか!?）

「待て、エリカ!まだこの研究所にはアキラやロザがいるんだぞ!」

「アキラはすでに逃がしておいたわ。ロザにはレオン、貴方から言っておきなさい」

「研究者達はどうする気だ！今Ｕ－９を放てば、餌食にされるぞ！！」

「もう敵は私の研究所の最深部近くに到達している。私のキメラ化が完全に完了するまで私は戦えない。今完全に無防備な私を守るのに貴方達では力不足なのよ」

一旦気を落ち着かせるとレオンは感情を抑える。

「分かった。だが、Ｕ－９を放つ前に約束は守ってもらおう。ロンバートを覚醒させろ」

「今そのためにレシラムをそちらに行かせている。２０分もあれば意識覚醒後歩行できるはずよ。・・アキラがクルーザーで先に逃げていた場合、格納庫のティルトローター機を使いなさい。４０分後にＵ－９を放つから」

「―了解」

ブツン

電話が切れる。

「・・・説明は今すべて聞いたな？」

その時後ろから声がする。振り返るとそこには、銀髪碧眼の女性、レシラが立っていた。

「私はお前に同情しているのだぞ、レオン。だからこそ、ロンバー

ト救済のための処置は私がしてきた」

「ええ・・・レシラム、アンタが？」

その言葉にレシラムの表情が歪む。

「ほう、なるほど。私が科学的処置ができることが不思議なんだな。ポケモンにはそのようなことはできないと、そう思っていたわけか」

「いやそういう意味じゃ――」

思わぬ意味にとられ慌てて弁解しようとするレオン。

しかしレシラムは苦々しい顔でコンピューターの前に立つ。

「言い訳しなくてもいい。偏見とは無意識的な発言の時に出てくるものだ、レオン」

「・・・すまん」

一応謝るとレシラムは鼻を鳴らし、コンピューターを操作していく。

「・・・そういえば、そろそろミサイルの発射準備が整うな」

話をそらそうとレオンが思いついたように言う。

その言葉にレシラムはこっくりとうなずく。

銀髪を掻き揚げ、チラリとレオンのほうに目をやり口を開いた。

「ああ。そうだな。・・・破壊されなければ、ミサイルは発射されるだろう」

「破壊された時のことも想定済みなのか？」

何気なくと問うたその質問にふっと顔を上げ、そのまま答える。

「ああ。策は何度も張って初めて意味を成す。エリカはミサイルだけで行こうとしていたが・・・それは危険度が高い。私がエリカに用意させたものがある。・・それがウィルス散布の第二策だ」

「第二策・・？」

ふっと笑い、レオンのほうを向く。指は相変わらず細やかにキーボードを走り、レオンには難解な画面がスクロールしていく。

「ステルス機だ」

「は・・？」

カタン

レシラムが「Ｅｎｔｅｒ」キーを軽やかに叩く。

「よしこれで活性化薬投与完了だ。ロンバートとかいう男が目覚めるぞ」

疑問には答えず話をそらすレシラム。

しかしレオンの気も、ロンバート覚醒にそれていたため深く尋ねは

しなかった。

＊＊＊＊

ザッザッザッザッザ

一方ブラウン少将一向は研究所隣接の格納庫に到着していた。

「イクス准尉、クー准尉。わかっているな。私たちの仕事は、エリカのミサイル破壊だ」

「了解しています」

「エリカが大陸弾道ミサイルを何に使うのかは定かではない。だが、よからぬことに使うつもりなのは確かだ」

「・・少将。ミサイルを如何して破壊なさるおつもりですか？この装備では・・・」

クーがおずおずと質問する。

「ミサイル発見後、空軍に連絡して爆撃を要請する算段だ」

ブラウン少将はすっとクー達を振り返る。

「本来ならば我ら陸軍情報部が担当する事件だ。しかし現地に入ってみて情報部だけの手におえる懸案では無いと判断した。軍の全精力を傾けなければ、彼女には勝てん」

（そう・・・本気を出さなければいけない敵なのだ。世界屈指の大企業につけ入り、軍を動かし自らの企てを成功させてきたあの少女

はな）

白衣を纏う平均的な身長の少女。

特殊な装備も、特別な能力も無く、ただ頭一つでここまでのことを成し遂げてきた存在。

大企業を操り、軍を欺き、大勢の命を踏み台にして完成させた技術を持って今、野望を実現させようとしている。

――止めなければ。

ゴスペルの意思に関係なく、彼女は許しがたい存在だ。

実験と称して人間・ポケモン問わず大勢の命を奪ってきた行為、世界の秩序を狂わす計画。

（許せん・・・）

特注の軍服の端をギュッと握る少将。

ここまで義憤に駆られたことなど今まで一度もなかった。

常に中立の立場にいようと努力してきた。軍のトップだからこそ、軍の色に染まりきってはならないと。

それがたとえゴスペルによって敷かれたレールの上だとしても。

だからこそ、エリカは許せない。

中立的に見ても彼女の行為は残虐極まる。

ポケモンを使った違法実験、負傷した軍人や捕えられた人間達を使用した人体実験の数々。

吐き気を催す実験内容。

正直ブラウン少将もここに到着する前に内部資料に目を通したが、筆舌に尽くしがたい内容だった。

科学の進展など言い訳にすらならない。

（彼女は近来まれにみる大犯罪者だ・・・いや狂人と言うべきか）

だからこそ終わりにしなければいけないのだ。

エリカの狂気に世界が飲み込まれる前に。

あの狂気に罪もない命が消される前に。

闇を抱えたものが魅かれ道を踏み外す前に。

（なんとしてでも・・ここでけりをつける！）

その時

ブルブルブル

少将の携帯がバイブする。

「・・・私だ」

『ジュンです』

クー達にも聞こえてくる声。

「・・・いつ私の携帯の番号を教えたかね？」

『いやだなぁ、ふわもこ閣下。軍のデータバンクからいざという時のために引き出しておいたんですよ♪』

「・・・で、何用だ？」

静かな口調でジュンのからかいを相殺する少将。

ピクピクとこめかみが痙攣するのを何とか抑えつつ、出来るだけ静かに問う。

『エリカはミサイルを使って全世界にウィルスを撒く気ですよ』

その言葉に少将のイーブイ特有の丸い目が鋭さを帯びる。

「ウィルスだと・・・ミュウがそんなことを言っていたな」

『ええ。人間をポケモンとのキメラ化させるウィルス。それを撒く気です』

「・・・そんなウィルスを撒けば、世界中の経済・治安が大混乱するぞ・・・」

正体不明の現象に人々がパニックを起こすだろう。

病院は飽和状態となり、社会的大混乱は避けられない。

そうなった光景など考えたくもない。

『世界のバランスが大きく崩れる。なかなか絵になる光景ですね』

「犯罪者の君はいいかも知れんがね。あまりふざけたことを言うものではない」

少将の強い口調に電話の向こうのジュンが薄く笑う。

彼独特の笑みが、目に浮かぶ。

笑っているのだ。

楽しんでいる。

この状況を。

世界が大きく揺らごうとしているこのさ中にジュンは変動と破壊にたいする喜びを肌で感じているのだろう。

『分かってますよ、ふわもこさん』

「ブラウンだ！！」

そう怒鳴るとブツンと携帯を叩ききる。

「まったくあの少年は人を苛立たせる天才だな」

そう呟くと少将はふうとため息をつく。

「・・さて諸君。行こうか」

再び歩き出すこと数分。

研究所に隣接されている格納庫に侵入したブラウン少将達は驚くべき光景を目の当たりにした。

八発の大陸弾道ミサイルが円形に設置されてあったのだ。

「・・・やはり大陸間弾道ミサイルを・・・」

予想はしていたが、やはり目の当たりにすると驚きの声しか出てこない。

一国が保有するレベルの兵器をあの少女が手にし、使おうとしている。

その事実はまさに衝撃だった。

「よく八発も用意しましたね・・・ある意味すごいです」

イクス准尉が呆気にとられたかのように息を吐く。

「あの弾頭にウィルスが入っているわけか・・・」

そう呟きつつ、ブラウン少将は携帯を取り出す。

エーフィのストラップがぶら下がっている。

「こちらは陸軍情報部、フリードリヒ・フォン・ブラウン少将だ。情報部が現在調査中の懸案事項にて我々の手に負えない事態が発生した。至急空軍に出撃要請を願う」

しばらく少将はうなずいたり、この事態を説明したりしていたが、数分後電話を切った。

「これでミサイルの心配はしなくて済みそうですね」

そこまで言ってクーはブラウン少将の表情がさえないことに気が付いた。

「・・・・どうなされました？」

「空軍が出撃を拒否してきた」

「・・・な・・！？」

「私が要請する前に、陸軍のトップがストップをかけてきたらしい。どうやら上層部がキメラ技術の破壊活動を嗅ぎ付けたようだな・」

「しかし、我々は秘密裏に動いてきたではありませんか！！」

叫び声に近いイクスの言葉。

「・・・エリカが先手を打ったと考えられる。彼女が我々が動いていることを、軍の上層部に教えたとしか考えられん。くそっ・・馬鹿どもが！少女の手のひらで踊らされているのも気づかずに！」

忌々しげに舌打ちをする。

（さてどうする・・・今ここで破壊することもできるが、生半可な攻撃でもしウィルスが漏れたらまずい）

「・・・馬鹿どもに私が直接交渉してみる」

苛立つ心を抑えつつ、今度は別の番号をダイヤルする。

『フリードリヒか』

電話から声が聞こえてくる。

「どういうことだ。何故空軍にストップをかける？」

その問いに相手の声が少し大きくなる。

我が意を得たり、そんな感じだ。

『それはこちらのセリフだ。ブラウン少将。お前こそ何故勝手な行動を取っている？勝手に部下を動かし・・・キメラ技術の破壊を目論んでいたとは。我々も驚かされたよ』

言葉の端々に含まれる敵意。

がブラウン少将は気にせず続ける。

「・・・水面下で行わなければ、お前たちが回収しようとすることは明白だったからな、ニコル中将」

『黙れ』

電話越しのニコル中将の声に冷徹さが帯びる。

『陸軍がキメラ技術の開発にどれだけの金をつぎ込んだかわかっているのか!?例の小娘の要求にどれだけの巨額の費用を出費したか知らんわけではあるまい!!』

「・・・中将、その小娘に踊らされたのはどこのどいつだと思っている!その小娘はお前たちの欲望に付け込んだのだ!どうやらその小娘のほうが何枚も上手だったようだがな」

ニコル中将の怒りにその発言が油を注ぐ。

いやわざと怒りを煽っているのだ。

後々の交渉のための布石に。

『・・・今すぐ帰還しろ。これは命令だ!査問委員会を開いて審議を行う・・・覚悟することだ』

「ほう、そうか。命令と来たか・・私を査問員会で干す算段か。いいだろう。命令には従おう。ただし」

ブラウン少将はいったん言葉を切る。

「P・H・Cと陸軍が提携して違法なポケモン実験を繰り返していたことを世間に暴露してもいいのだな?ニコル中将、お前がキメラ開発から甘い汁を吸っていたことも実験に使用され傷ついたポケモン達の処分を行わせていたことも、全て暴露するぞ?」

『な・・なぜそれを・・』

初めて動揺した言葉。

その隙を少将は見逃さない。

言葉と言葉の間に現れた隙を。

「わが情報部を甘く見ないでいただこう。変わり種ばかりだが、優秀な奴らだ。軍内部の厳重な身辺調査などお手の物ということだ。証拠もすべて調べ上げている。今すぐマスコミにそれらの情報の一部でも開示してやろうか?特ダネ間違いなしだ・・・そしてお前は一躍新聞の一面を飾るだろう。よかったな、お茶の間のスターになれるぞ?」

『・・・・』

電話の向こうから緊張が読み取れる。

(ふん、第一に保身を考える輩にはこの手がよく効くんだ・・・さて、誘導してやるか)

ペロリと舌を出して少し口元を濡らす。

イーブイの毛皮が全てある種の緊張感で包まれている。

「・・私も陸軍のイメージダウンは避けたいところだ。いいか、中将。空軍への出撃拒絶の圧力を今すぐ解禁しろ。そしてキメラ技術はあきらめろ。あれはここで葬り去る」

そのきっぱりとした台詞にニコル中将が焦りの講義の声を上げる。

『ま・・待て、ブラウン！圧力は解除しよう。だがキメラ技術は―』

縋り付くような声に少将が怒りを露わにする。

まるで嵐のようだ。

「何を守るべきか、何のための軍なのかそろそろ分かったらどうだ！！自らの私腹を肥やすためのか！？人間のやましい欲望のためにポケモンを虐げるためなのか！？いいかげん目を覚ますことだ！」

ブツン

少将はそう怒鳴ると乱暴に電話を切る。

（馬鹿め。欲をかくからその身を追いつめられるのだ）

その直後、空軍から連絡が入った。

どうやら爆撃機が出撃準備に取り掛かっているらしい。

「・・・さすがです少将」

イクスの称賛の言葉にもブラウン少将は「ふん」と鼻を鳴らしただけだった。

「さてとミサイルの件はかたが付いた。さてともう一方の仕事をこなさなければな」

軍帽を深々とかぶり直し、もう一度ミサイルを一瞥する。

（これでいいんだ。これで・・）

そこまで考えていたブラウン少将の目にあるものが止まる。

ミサイルが収容されている格納庫の一番奥に謎の扉があるのだ。

「・・・あれは」

「どうなされました?少将」

USA2の隊員の問いに無言で視線をその扉に移す。

「格納庫に謎の扉が・・・」

「少し中を見てみることとしよう」

ブラウン少将は戸惑う隊員やイクス達を引き連れ謎の扉のほうへあるいていく。

「・・鍵がかかっているな」

少将の無言の促しに、イクスが拳銃を構え鍵に発砲する。

数発撃ちこむと、鍵が壊れ「カチャン」というおとが聞こえる。

「・・・行こうか」

ザッザッザ

地下に通ずる階段を下りていき、その下にあったものは予想外の物体だった。

真っ黒の機体。見事な平たい三角形の飛行機である。

ステルス機、Ｂ－２。通称『スピリット』

非常に高価な爆撃機であり、値段は約２，０００億円である。

そして何より軍の最高機密情報の塊であるため、ブラウン少将の陸軍本部にも配備されていない。

極めて高度な軍事兵器として扱われているＢ－２がなぜここにあるのか。

意味が分からなかった。

「・・Ｂ－２爆撃機・・そんな、こんなものがどうして・・」

クーがスッと機体に触れる。

情報部員で１、２位を争うほどの技術屋であるクーは生で見るＢ－２に興味津々といった様子だ。

「この撫で具合。いいですねぇ。ああ・・内部構造をみたいなぁ。レーダー波を吸収するハニカム構造が大量に採用されているはずなんですよね。あ、それと装備が収まっているけど、２，０００１ｂ爆弾が積まれているのかな。それとも―」

余談ではあるがクーは軍事マニアであり（軍人なのだが）、空軍・海軍への派遣任務の際には必ず戦闘機・軍艦などの見学と撮影を欠かさないのである。

特にお気に入りは戦闘機や戦車などの重兵器。

ので、変人扱いされることも多々だが彼はそんなことなど気にしない。

Ｂ－２に貼りつき、幸福の極みのような表情を浮かべているクーを無視しイクスが話し出す。

「・・・エリカが用意させたとしか思えないわね。ミサイルにステルス爆撃機。いったい何をしようというのかしら・・」

「ここまでの装備を彼らが買えるわけがないのではないですか？ということはこの組織に大分軍が犯されているのの表れでは・・」

ＵＳＡ２隊員の一人の発言にイクスもうなずく。

「そうよね。軍の最高機密であるステルス機を彼女のために用意するとは。・・・それだけ彼女の技術に魅了されていたのね」

「・・引き上げるぞ。そろそろ空軍から出撃するころだ。爆撃に巻き込まれて木端微塵では笑えん」

「了解」

少将の言葉と共に、イクスがステルス機の窓から中を覗こうとしているクーの襟元をつかむ。

「・・・引き上げるわよ」

静かに言う。が、クーは名残惜しそうに張り付いたままだ。

「ちょ・・待ってよイクス。まだコックピット内部がよく見えな―」

「引き上げるわよ！！！」

二度目の怒声。

イライラが募ったイクスは怒鳴ると『サイコキネシス』でクーを強引に引っ張る。

「暴力はダメだよ！サーシャ！・・シュナイダー准尉～いいだろ。もうちょっとだけ」

「本名で呼ばないで！この軍事オタク！ヲタマコト！」

「オ・・オタクじゃない！マニアと呼んでよ！」

「どっちでも同じでしょうが！大体そんなに戦闘機好きなら海軍か空軍のパイロットになればよかったのよ！」

「視力で駄目だったんだからしょうがないだろ！サーシャこそ、芸能界目指してたらしいけどなんで軍にいるんだよ！」

「親が許してくれなかったのよ！悪い！？」

降りてきた階段を上りながらぎゃあぎゃあと怒鳴りあう二人。

出撃中の軍人がするとは思えない低レベルな罵り合いが狭い廊下に反響する。

先頭を行くブラウン少将は耳を軍帽に押し込み、他のＵＳＡ２隊員は怒声に肩をすぼめて耐えている。

階段を上り切り、先ほどのミサイルの格納庫につく。

と同時にどうやら怒鳴り合いも「陸軍内における射撃の腕の上手い下手」の話題を最後に終息を迎えていた。

ため息をつくとブラウン少将はすっと腕時計に目をやる。

（後３０分程度で爆撃機が到着するな・・・）

肩で息をする二人をチラッと見て、またため息をつく。

（彼らをまとめるイプシロン中尉の手腕は大したものだ）

「さてと後はキメラ技術の破壊のみだ。その前に中尉やジュン君達と合流しておきたいが・・・」

――脅威の到来にこのときは少将もユウタもジュンも気が付いていなかった。

放たれようとしている、最悪の脅威の存在に――

第八十七話　二重の“策”（後書き）

次回から急展開です。

それと今回出てきたステルス機は頭の片隅にでもおいていただければありがたいかと。

第八十八話　作られた“命”

ドクン・・ドクン・・ドクン

冷たい液体の中自分の心音だけが聞こえる。

脈を打つ生命の流れの中・・・少しずつ意識が覚醒していく。

ぼくはどこから来たのだろう。

遠い昔・・もう忘れてしまった。

ぼくは誰だったかも。

いや元々ど帰る場所もいく場所もない。

薄目を開けると気泡が数個ぷかぷかと目の前を通り過ぎる。

「・・・起きなさい」

声がする。

誰だ・・ぼくを目覚めさせるのは。

「Ｕ－９。起きなさい。今こそ自由になる時よ」

ユーナイン・・

誰の名だ・・

「あなたよ」

「・・ぼくの名前？」

思い出した。・・・ぼくの名前。

「そう。完成された存在。・・・数万体のポケモンを犠牲に完成した最高傑作。Ｕ－９。今こそ目覚めるときよ」

そうだ。他のキメラと違いぼくは“完全に”人より作られた存在。

試験官と白い服をきた人間が母親。

ぼくの世界はこの培養カプセルの中。

「Ｕ－９。試験管より生まれたキメラポケモン。母体は機械、母親は人間。さぁ今こそ始動なさい」

うっすらと目を開けるＵ－９

青く澄んだ双眼が仄かに光を帯びた、次の瞬間。

パリィン

強化ガラスでできたカプセルが砕け散る。

「・・・」

ブチッ

全身のコードを引きちぎり呼吸器を片手で粉砕する。
その姿にエリカは満足そうな笑みを浮かべている。
「さぁ遊んでらっしゃい。人間に作られたポケモン・・Ｕ－９」
遊ぶ。
何をして遊ぶ？
そうだ・・原種（シード）ポケモンを・・・侵入者を排除する。
ぼくの行動原理・・・
エリカを守護する。
シュン
“テレポート”を使い、Ｕ－９は姿を消した。

＊＊＊＊

「シェイドウィップ！」
ロサ・ネグラを発動したロザとフォック達の戦いは続いていた。
触れるとエネルギーを吸引する影の触手に苦戦を強いられるフォック一向。

「逆流の術！」

ザッ

ミュウが地面に描いた魔法陣、円の中に渦巻き模様を書き込んだものなのだが―を発動させる。

漆黒の蔓を跳ね返すが、横からも追撃が襲い掛かる。

ザンッ

ドラゴニックセイバーで切り落としミュウを守るフォック。

切り落とされた“蔓”は地面に落ちると霞となって霧散した。

「・・・・一応礼をいってやりましょう」

「へいへい」

ミュウの素っ気ない言葉にフォックも流す。

どうやらミュウの扱いに慣れてきたらしい。

「一気に押し切りますよ、釣り目！」

パチン

ミュウが指を鳴らすとどこからともなく紙人形の束が現れる。

「・・・釣り目、今から式神に魔法陣を描き魔力を吹き込みます。

少しの間時間稼ぎを」

「了解！」

一気に駆け出すフォック。

他の仲間が蔓に苦戦する中一気に本体（ロザ）に急接近する。

「シャドーボール！」

ロザが黒いエネルギー弾を放つ。

「効かねェ！」

ドラゴニックセイバーでシャドーボールを防ぐフォック。

ビュン

蔓が四方八方からフォックを取り囲む。

「式神舞の術」

ザザザザザ

その瞬間大量の紙人形がまるで吹雪のようにロザを取り囲む。

蔓の追撃が緩み、なんとか抜け出したフォックにミュウが近寄る。

「爆ぜろ」

ズウウン

刹那、式神達が強烈な光を発し次々と爆発していく。

巻き上がる熱風にしかしミュウは相手から視線を逸らさない。

青い目が戦況を見据えようとしているのだ。

そして

バシュウウ・・・

なんと闇でできた蔓が次々と霧散していく。

と同時に。

「・・・よくもやったわね」

煙が晴れたミュウの目には【ロサ・ネグラ】が解除された状態のロザが立っていた。

そしてその足元にはダークライ・ヨノワール・ジュペッタが倒れている。

どうやら一定量以上のダメージを受けると技が解除されるらしい。

「よし、厄介な形態じゃなくなったな」

「しかしまだ油断できません。彼女のキメラ形態はまだ解かれていませんから」

フワリ

ムウマージとのキメラであるロザは特性“浮遊”で宙に浮く。

「・・・ここは絶対に通さないわよ。レオンは私が守る。もう失わせてはいけないのだから・・・」

キュイイイン

ロザの胸元に漆黒のエネルギーが終息していく。

「・・・来ますよ」

「分かってる」

「・・・・ルナティックシャドウ！」

その時

ロザの影が伸び、部屋全体を包み込む。

まるで闇のドームに包まれてしまった感覚だ。

「これは・・・」

「狂気の影よ。ふふ、まさかこれを使うことになるとはね」

ロザは眼鏡を外すと床に投げ捨てる。

「さて・・影よ、正気と狂気の狭間を見せてあげなさい」

影が揺らめく。

まるで水の流れを見ているようだ。

「これは一体・・・」

吸い込まれていく。心が・・魂が・・闇の中に。

世界が反転し、風景が歪む。

（これは・・まずい・・・この技は・・・おそらく・・）

フォック達も闇にとらわれているようだ。

ミュウの考えが正しければ・・・この【ルナティックシャドウ】という技は・・

相手の心を闇の中に吸い込む技。

「・・く・・体から心を引きはがすつもりですね・・」

やばい技ということを本能が囁く。

時間が・・思考が闇に吸い込まれていく・・・。

（まずいですね・・心が引き込まれればそれでアウト。ならば・・）

今にも闇に飲み込まれそうになりながらミュウは複雑な魔法陣を床に描いていく。

「私の最強の魔術で・・」

その時

突然『ルナティックシャドウ』が退いていく。

驚きのあまり声が出ないミュウ達。

そしてそんな中ロザが携帯電話を片手に青ざめた表情をしていた。

「そんな・・エリカが・・。わかったわ、レオン。今すぐ合流するから」

そして携帯電話をポケットにしまうとロザが急いで倒れているダークライ達をボールに戻し、部屋から出ていこうとする。

「待ちなさい。逃げるのですか？」

ミュウの問いにロザが振り返る。

「・・・貴方達もさっさと逃げたほうがいいわよ。もうすぐ怪物君がやってくるから」

そういうとシャドーボールを数発目くらまし程度に放ち、ロザはその場から消えたのだった。

＊＊＊＊

「・・・レオン！」

地下の工場についたロザは息も絶え絶えにレオンとレシラムの下に駆け寄る。

「間に合ったようね」

「ああ、ロザ。こっちもだ」

その言葉にロザの目が目の前の培養カプセルに向く。

見る見るうちに培養液が抜けていき、そして中の青年がばちゃという音を起て床に体を打ち付ける。

体を動かそうとしているらしいが、筋肉が萎えてしまっており思うように動かせないでいるようだ。

「ロンバートを覚醒させたのね・・！！」

「ああ。レシラムがやってくれた。感謝しなきゃな」

「お・・俺は・・・一体・・・」

突然床に横たわる青年から弱弱しい声がする。

「・・ロンバート！！」

「・・ホ・・・ホーガン・・・隊長？」

駆け寄って体を起こすレオンにその青年の瞳が姿を捉える。

レシラムが無言で手渡してくれたローブを受け取ると丁寧に青年の体を包んでいく。

「よかった・・・本当によかった」

「俺は・・確か撃たれて・・・それで・・・というかここは何処です・・？」

感極まり涙を流すレオンに朦朧としつつ戸惑った表情を浮かべるロンバート。

「説明は後だ。とにかくここから退却することを最優先だ。ロンバート、立てるか？」

気迫に押され起とうとするが・・・足は震えて歩くことどころか立つことすら難しそうだ。

「レオン。私がサイコキネシスで運んでいくわ」

「ああ、頼む」

ロンバートに手をかざしその体を浮かせるロザ。

「・・・ティルトローター機は隣接している第二格納庫にある」

「・・アンタは？」

レオンの問いにレシラムはふっと笑みを浮かべる。

「私はここに残り、エリカの計画を守護する。私はU－9の攻撃本能の対象外だからな」

それに・・とレシラムが少し遠い目をして続ける。

「レオン。お前の目的は親友の救済。そしてロザ。お前の願いはレオンを支えること。ロンバートが蘇生した今、もうここには用はないだろう」

どこか寂しそうな表情でそう告げる。

「レオン、ロザ。今までご苦労だった。お前たちと私の目指すところは最後まで違ったが・・私はお前たちのことは好きだったのだぞ？」

そういってレシラムは背を向け、歩き出す。

扉の所で少し立ち止まりレオンとロザのほうを振り向いた。

「・・・達者でな」

その別れの挨拶にレオンとロザは黙って、どこか悲しそうに頷きロンバートを連れて格納庫へと向かっていった。

二人の背中が完全に見えなくなるまで見守り続けていたレシラムはふうとため息をつきそのまま階段を上って行った。

目指すはエリカのいる場所。

ミサイルの最終調整も液体燃料の注入も終わっている。

（あとは私が発射のボタンをコントロールルームで押すだけだ。それで世界は変わる！）

長かった。

エリカと共に【プロジェクト・キメラ】を推進してきた。

正直な話彼女の実験行為の数々に心折れそうになったことが幾度となくあった。

しかし苦しき日々ももうすぐ終わる。

「ミサイルが地球上の主要都市上空で爆発し、ウィルスが散布される。そして世界は・・・」

変革の時を迎える。

「レシラム・・・」

その時後ろから声がする。

振り返るとそこには一匹のポケモンがふわふわと浮遊していた。

「Ｕ－９か」

白く小さな体に黄色い頭。短冊のような飾りと黄色い羽根が特徴的なポケモン

ジラーチだ。

といってもU－9は“本物”のジラーチではなく、エリカが一から遺伝子を合成し作り出した完全な人工ポケモンなのだ。

「ぼくはユーナイン。ユーナイン遊びたい。遊ばせて?」

ズウン!

刹那一瞬にしてレシラムの体が後方に吹き飛ばされる。

「な・・誰を攻撃している!U－9!私は攻撃対象ではない!」

「ユーナイン、そんなこと知らない」

バチッ

ジラーチの腹部の目が開眼しレシラムを見据える。

「ユーナイン遊びたいだけ。退屈だから遊びたい」

「・・・私はお前の生みの親の仲間だ。あまりふざけた行動はとらないでもらおう!」

「エリカの仲間?なら遊び相手じゃない」

壊れた人形のような表情でふわふわと浮きあがり、U－9は瞬間移動しその姿を消した。

「・・・まったく」

舌打ちをするとレシラムは腕時計に目をやる。

「そろそろだな」

そう呟くとコントロールルームをめざし歩いていくのだった。

＊＊＊＊

「ロザという女、さっさと退きやがった」

「意外ですね」

ミュウが腕を組んで考え込む。

（彼女はまだ戦闘意欲は十分にあったはず。なのになぜ・・・それに電話での言動も気になります）

「まぁこのまま前に進むしかないだろうな」

「その通りです、釣り目」

ミュウもその言葉に頷き、そしてロザが出て行った方角に歩みを進めようとしたその瞬間

「遊ぼうよ」

突然声がどこからともなく聞こえてくる。

可愛らしい子供の声でありながら、どこか無機質な・・無感情な声音だ。

「・・・誰です？」

「ぼく退屈しているの」

その言葉と共に目の前に一匹のポケモンが現れる。

願いを三度かなえてくれるという幻のポケモン・・・ジラーチだ。

「ぼくユーナイン。エリカが作った人工のキメラポケモン。ユーナイン、退屈してるの。だから――」

ズウウン

放たれた衝撃波にフォックの仲間たちが吹き飛ばされる。

それだけではないこの空間自体が衝撃波に耐えられず崩壊していく。

（馬鹿な・・・今のは・・・）

サイコキネシス。

放たれたのが“ただの”サイコキネシスであることにミュウは驚愕の色を隠せなかった。

「遊んで？ユーナイン、いっぱい遊びたい」

抑揚のまったくない口調でしゃべるＵ－９。

（このキメラポケモンが・・おそらくはエリカの切り札。しかしこ

れまでのキメラとは本質的に異なる。そう・・完全な人工ポケモン！！）

ミュウの目に鋭さが帯びる。

「感情の気配が全く感じられない。まるで金属の様な冷たいオーラ・・これが人間に造り出されたポケモンか・・・」

迫りくるＵ－９の驚異を真の意味でミュウはまだ理解していなかった――

第八十九話　迫りくるＵ－９！

「ぼくユーナイン。一緒に遊ぼ？サイコキネシス」

ズウン

ガアアン！

放たれた一発のサイコキネシスが再び衝撃波を引き起こす。

壁が音を立てて崩れ落ち、外の日の光が差し込む。

日の光の照らされたＵ－９の表情はますます仮面のように見えてしまう。

「く・・・なんて威力・・・」

サイコキネシスに翻弄されるミュウ達を余所に、フォックはドラゴニックセイバーを構え一気にＵ－９に迫る。

「一気に決める！」

なぜか避けないＵ－９に一気に剣を振り上げる。

そのままドラゴニックセイバーはＵ－９を・・切り裂いた。

手ごたえは皆無。

振り下ろされた剣はＵ－９の体を左上から右下に一直線に“通過”

したのだ。

「なんだこの感覚・・・まるで“空気”を切ったような・・・」

呆気にとられたフォックに一瞬の隙ができる。

そしてその隙を逃すU－9ではなかった。

手をすっと前に出す。

「面白いおもちゃを使うね。もっと面白いものを見せてよ。サイコキネシス」

「ぐあぁ！？」

ゼロ距離からの“サイコキネシス”をもろに受け、フォックは後方まで吹き飛ばされる。

「まったく何をしているのです！」

吹き飛ぶフォックをサイコキネシスで受け止め地面に降ろす。

そして再び前を向く。

（彼の能力が分からない以上、魔力の消費は抑えるべきですね・・）

魔術を使えばそれだけ体力を消耗する。

まだ情報が足りないのだ。

攻略するための情報を揃え万全の態勢で向かわなければ、勝てる相手ではない。

ミュウはそう直感していた。

「ぼくと遊ぼ?グラビティプレス」

ズン!!

突如一帯の重力場が強くなる。

・・・まるで頭に重石を乗せられた感覚だ。

(これは・・・そうか、“重力”の強化版・・!!)

「ユーナインは誰にも攻略されないの。サイコキネシス」

U-9が手を振るい、“グラビティプレス”で動きを封じたフォックの仲間達を蹴散らしていく。

なんとかサイコキネシスの猛攻を耐え抜き、ミュウは肩越しに先ほどの現象について問うた。

「釣り目・・・今のはなんです?剣が通過しましたが・・・」

「分からない。何か幻術でも使ったのか・・」

フォックがドラゴニックセイバーを構えつつミュウの横に立つ。

“幻術”。そのワードにミュウがピクリと反応する。

「幻術ですか。なるほど、ありえますね。なら・・」

ミュウは頷くと地面に魔法陣を素早く書く。

「『魔鏡心眼の術』」

“真実”を映し出す魔術、『魔境心眼の術』を発動させるミュウ。

魔法陣から手鏡が現れ、それでＵ－９を映し出す。

「これは・・・！！」

鏡の写った光景にミュウは絶句する。

鏡には予想外の“事実”が映し出されていた。

そこには見たこともない光景にいるＵ－９が映し出されていたのだ。

まるで夢の世界のように捻じれた光景。

この光景にミュウは見覚えがあった。

以前ある研究者がその世界に入り込むことに成功し、撮った写真と同じ。

学術書にあった光景と近似している。

そう・・ギラティナが統べる『反転世界』と同じ風景なのだ。

何故Ｕ－９が『反転世界』にいる光景が魔鏡に映し出されているのか。

訳が分からない。

「グラビティプレス」

ズン！！

重力を強めることによる攻撃だ。

思考を巡らせていたミュウの隙をついての攻撃だったが、一瞬の判断で「守る」を発動させる。

「・・波動弾！」

ミュウはその攻撃に耐え、波動弾をＵ－９に放つが・・・

Ｕ－９の体を“貫通”し、波動弾はそのまま壁にぶつかった。

（馬鹿な。貫通した・・まったく技が効かない！？）

「ぼくは遊ぶの好きなの。だってぼくに負けはありえないから」

Ｕ－９の手に光が収束していく。

「流星群」

放たれたエネルギーの集合体はミュウ達の頭上で爆発しあたり一面に流星のごときエネルギー弾が降り注ぐ。

「守る！」

流星群からの猛攻を何とか耐え抜くミュウ。

一方フォックはドラゴニックセイバーを構えると、詠唱からの秘奥義を繰り出す。

「ファイナルセイント！」

Ｕ－９の下に魔法陣が現れ、神々しい光を放つ。

彼の秘奥義の一つ。その技を見た瞬間ミュウが反応した。

「ほう・・魔術の一種か何かですかね」

魔導学者として興味が魅かれるのだろう。ミュウの目に一瞬好奇心の色が浮かび上がる。

ファイナルセイントの光がＵ－９を包みこんだ。

が

「なっ！？」

裁きの光がなんとＵ－９を“通過”したのだ。

ファイナルセイントの光は半壊状態の天井をぶち壊すと、そのまま大きな爆発を起こした。

「無駄だよ。ぼくと君たちとでは遊んでる世界が違うもん。もっと技を出して。ユーナイン楽しみたい」

ポツリとつぶやくＵ－９。

仮面のような表情からは殺気も闘志もない。

だが一つだけオーラが感じられる。

そう、ゲーム画面で遊びに興ずる子供のような気配だ。

ゲームに集中しているのに、どこか受け身で無表情なオーラ・・・

それがＵ－９から出ている。

（それにしても、今の一言はいったい・・・）

・・・“世界”が違う？

どういうことだ。意味が分からない。

「もっと技をだしてよ。ユーナインつまんない。楽しくさせて？・・・サイコキネシス」

“サイコキネシス”による衝撃波が一気にフォック達の仲間を全滅させていく。

「ありえねぇ。俺の仲間をたった一体で・・」

「弱い敵キャラはユーナイン、興味ない。流星群」

手から今度は流星群を放つ。

剣で防ぐフォックだが、その圧倒的な威力に一気に吹き飛ばされてしまう。

普通流星群は使用するたびに体力を消耗する大技だが、Ｕ－９はまったく消耗もせず放っている。

「ユーナイン、君たちが弱いとつまらない。もっと遊びたい」

無表情にＵ－９はそうつぶやく。

感情が顔に出ていない分非常に気味が悪い。

「言ってくれますね！・・いいでしょう。少し本気を出しますか。『無限に続く回廊よ。術中に迷いし者に呪いの祝福を』・・・魔鏡回廊の術！！」

ミュウは自分の手持ち魔術の中で最強クラスの術・・『魔鏡回廊の術』を発動する。

Ｕ－９の周囲を鏡の壁が覆っていく。

（私の予測が正しければ、この術でそれを証明できるはずです・・！！）

魔鏡で構成された世界にＵ－９を閉じ込め、一気にそれを「砕く」

鏡に映しだした対象に、魔鏡が受けたのと同じダメージを痛みとして与える・・・つまり『魔境回廊の術』の術中に嵌った存在は、全

身が砕かれるのと同じ痛みを与えることができる。
無論これで倒せれば問題ない。
しかし仮にこの魔術も無効ならば・・・
逆説的に私の仮定に対する決定的な証拠となる。
そしてその場合、考えられる事実はただ一つ。
パキィン！
ミュウが念じると、Ｕ－９を包んでいた鏡の世界が一気に砕け散る。
降り注ぐ魔鏡の欠片は地面に落ちるなり、灰のように消えてく。
光を反射し銀色に輝く鏡の破片は、まるで花吹雪のようだ。
「おもしろいおもちゃが使えるね」
舞い散る鏡の雨の中、Ｕ－９は平然と立っている。
（・・・やはり効きませんでしたか。少しは期待してたのですがね）
舌打ちをするミュウ。
Ｕ－９は全くの無傷だった。
痛みに震えている様子もない。

（しかし、分かったこともあります。魔力を消費した代価分は価値のある情報がね）

「まじかよ・・！？」

絶句するフォックにミュウは耳打ちをする。

「よく聞きなさい。釣り目。Ｕ－９はまさに無敵の存在です。あらゆる攻撃が、物理、特殊、補助問わず彼には効かないのです」

「そんなことありえないぜ。だって無敵だなんて・・」

「最後まで聞きなさい。いいですか、目の前にいる彼は彼の本体ではありません」

「は？一体どういう―」

ミュウは尋ねようと口を開きかけたフォックを人差し指を立てて黙らせる。

「彼の本体はおそらく、先ほど魔鏡に映し出された光景・・『反転世界』にいるのです。そして『反転世界』から私たちに攻撃を仕掛けている」

「・・じゃあ本体はこの世界からの一斉の攻撃を受け付けない場所にいるっていうのか！？反則だろ！？」

「ええ。その通りです。そして恐ろしいことに、『反転世界』からはこの時空間への“干渉”が可能ですが、“この世界から『反転世界』には干渉することができない”」

ミュウは言葉を切り続ける。

Ｕ－９はその光景に手出しもせず眺めている。

反抗してこないおもちゃと遊んでもつまらないと思っているのだろう。

腹部の目が開き、こちらを凝視している。

時々空を無表情のまま見上げたりして、まるでミュウ達など脅威でも何でもないと思っているようにも見える。

（いや・・実際彼にとっては私たちなど脅威にはなりえないのでしょう。なんせ絶対に攻撃を受け付けない、不可侵の安全地帯にいるのですから・・・・）

だが、今はその思考回路がありがたい。

もし彼の本気の追撃を受ければ間違いなく壊滅してしまうからだ。

声を小さくしてフォックに囁く。

「この究極の一方通行こそが、Ｕ－９が無敵である理由です」

「究極の一方通行・・」

これですべてつじつまが合う。

Ｕ－９が言った台詞の意味も。そしてどこか他人事のような態度も。

全て彼が自分の絶対的な“安全”をしっているから。

おそらくこの時空の彼は、『反転世界』にいる彼が作り上げた駒だろう。

そしてＵ－９は『反転世界』から駒を操り、私たちとゲームを興じているわけだ。

・・・少なくともＵ－９にとってはこの戦いはゲーム以外の何物でもない。

ましてや能力を隠す必要性など皆無だったのだ。

そして反転世界に彼の本体がいるということは・・彼は・・

「気が付いたんだね。そうだよ。ぼくはギラティナの遺伝子を多量に受け継いでいるんだ。“本当の”ユーナインは反転世界にいる。ねぇ、ぼくともっともっと遊ぼ？」

ミュウ達はＵ－９にとっては敵キャラ。

コンピューターの操る、いつか『プレイヤー』に倒される存在。

ミュウは気づいていた。これは、少なくともＵ－９にとってはゲームなのだと。

そして決して勝てないゲームボードの上で、ミュウ達は踊り続けなければいけないのだとも。

そうU（プレイヤー）一9が満足するまで―

第九十話　合流と・・・

僕の望み。

ユウタ達に同行し、この海上研究所まで赴いた理由。

その答えは・・

「キメラ技術の回収」・・これは少し違う。

確かに僕の計画のための補助的な役割として、あの技術は有効になりえる。

しかし僕の真の狙いはあるポケモンの居場所を探ること。

エリカなら探り当てている可能性がある。そう考えてここまで来た。

“ついでに”キメラポケモン達も回収しておきたいが・・・それはできなくても構わない。

キメラ技術についても同様だ。

そのポケモンを手に入れたら、その技術も生きてくるだろうが・・・なくても別に支障はきたさない。

この研究所に情報が無かったら・・・。

「期待外れだけど仕方ないかな」

「ん？なんか言ったか、ガキ？」

「いいえ、何にも」

独り言を聞きつけるツルギさん。相変わらず耳聡いおじさ・・お兄さんだ。

「ツルギさん、監視カメラとかがあったら知らせてくださいね」

笑顔で言うとツルギが「はっ」と呆れた様な表情になる。

「今更気にする必要ねーだろ」

「気になるんですよ」

といきなりジュンの表情が変わる。

「・・・この先の部屋。あれがエリカの研究室です」

「遂に来たか」

ゆっくりと歩みを進め、扉を開く。

真っ白の壁に本棚がずらりと並んでいる。

壁にはポケモン学の図表のポスターや、テーブルの上には分子模型が置かれている。

本棚にびっしりと詰まった本はざっと３００冊はあるだろうか・・・

「すげえな・・・こんなに本ばっか。頭が痛くなるぜ」

ツルギが顔をしかめる

ジュンは本棚の本を手に取って中をパラパラと見てみる。

英語で書かれた難解な文章だ。

これを資料として使っているエリカの知性の高さが伺える。

もしかしてあのポケモンのことが記載されているかも。

淡い期待を胸に英語の文章を難なく読み取っていくジュン。

「・・・気味の悪いもんをよく部屋の中に置くよなぁ」

珍しそうにツルギは研究室内を歩き回る。

瓶に入れられたポケモンのサンプルをまるで汚物でも見るような目で眺めている。

確かに奇妙な外見のポケモンのホルマリン漬けは気味が悪い。

「どうやら奇形のポケモンのサンプルらしいですね」

「それだけじゃねぇな。卵から孵化する直前のポケモンを取り出してるサンプルもあるみてぇだ。エグイことしやがる」

ツルギさんのいう通り、まだ卵内で発生中だったポケモンもホルマリン漬けにされている。

吐き気を催すサンプルの数々。

ツルギは一刻も早く立ち去りたいようでイライラと腕を組んでジュンの後ろにいる。

「確かにエグイですね。まぁこれもエリカの行為の氷山の一角でしょうけど」

そう答えつつ部屋の中に進んでいくジュン。

そして

その部屋の奥に一台のコンピューターが置いてあった。

「間違いない・・・エリカのメインコンピューターだ」

興奮した様子でジュンはコンピューターに飛びつき、ハッキング技術でロックを外す。

ツルギは黙って壁にもたれ掛ってコンピューターを操作するジュンを見ている。

しばらくコンピューターをいじっていたジュンだが突如乾いた笑い声をあげる。

「どうした?」

「ははは・・やっと見つけた。エリカのキメラ技術の神髄。これを活用すれば、僕の望みも・・・」

ジュンはコンピューターにＵＳＢメモリを差し込む。

「データ転送完了。ふふふ・・・やった！これでキメラ技術は僕のものだ！！」

ＵＳＢメモリを抜くと、ポケットに入れる。

「ガキ。お前の目的の一つがこれで完了したわけか」

「その通りです、ツルギさん。この情報の収穫は構想中の犯罪組織の大きな足がかりとなるはずです」

「犯罪組織ねぇ・・・く・・ハハハハハ！」

耐え切れなくなったように突然笑い出すツルギ。

目に涙を浮かべながらジュンと向き合う。

「いやいや、こりゃ参ったぜ！ガキ・・お前の行動力にはホント驚かされる。俺も仕事柄ポケモンレンジャーとも組むことがあるんだがな、お前の年で自らの組織を作って野心をかなえようとする奴はいねぇ。ジュン、お前は本当におもしれぇ奴だ・・・お前の野心が実るかどうか、最後まで見届けてやるぜ」

ニッと笑うとジュンの肩にポンと手を置くツルギ。

「ようやく僕のことを認めてくれましたか」

「ああ。お前は良くも悪くも腹の座った奴だ。つくづくそう思う」

「腹の座った?何言ってるんです・・・そんなこと当然ですよ」

ジュンは薄らと微笑むとエリカの研究室の資料を調べていく。

「何が当然・・っうか、何調べてるんだ?」

「いや、ポケモンの研究資料を少し。もしかしたら僕の欲するポケモンの情報があるかもしれないですから。ここでその情報が手に入れば、組織を作る必要すら無いですからね」

丹念に英語を解読していくジュン。

目が英語の海を泳いでいく。

30分ほどで一通り見終わったのだろうか、ため息をつき資料を棚に戻す。

「・・・どうだったんだ?」

「愚問ですね。めぼしい情報はありませんでした。さ、情報も回収できましたし、ラスボス戦と行きましょうか」

「おい、ジュン」

研究室から出ていこうとするジュンをツルギが呼び止める。

「さっき何を言いかけていた?」

「・・・そうですね、僕は他者に“進化”を促す存在と言いたか

ったんですよ」

「進化？」

「ふふ・・その通りです」

「そうか・・・ならもう一つ質問だ。お前はそのデータとこの研究所の情報をどうするつもりだ？」

「・・・目的のポケモンを手に入れるためにはまずそれなりの装備と組織力が必要です。キメラ技術意外にもこの研究所の高いレベルのデータの数々は高値で売れますし、第一この研究所は軍の管轄下にあります。・・・ＵＳＡ２の守備兵の武器庫もありますから、そこから武装をかっぱらいますよ」

怪しく笑い、ジュンは部屋から出る。それにツルギも続く。

ジュンはその胸に野心を秘め、エリカの研究の中枢部―地下実験室に向かったのだった。

白く清潔な研究所内をただひたすら歩いていく。

目指すは地下のキメラ製造工場。

ツルギはアサルトライフルを構えつつ猛禽類の様な鋭い目つきで周囲を確認しつつ歩みを進める。

「この廊下の右左から階段を２階降りたところにエリカのラボがあります」

研究所の見取り図を見ながらジュンが話しかける。

「・・・ガキ、本気でキメラを回収するつもりか？」

銃を構えつつ、ツルギは肩越しにジュンに尋ねる。

「そのつもりです」

「あの技術で創られた存在がどれだけ恐ろしいものか知らないわけじゃねぇよな？ただの人間を化け物クラスに変化させるこの技術・・・」

パキ・・

ツルギの手が銀色の鈍い光を放つ金属に変化していく。

「軍がなんでこの技術の開発に莫大な金をつぎ込んできたのか分かるよな？兵士をキメラ化すれば地上戦ではまず無敵の軍が出来るからだ。銃で撃たれても直ぐに回復し、強力な能力を駆使できる存在・・・エリカはこれを餌に軍を動かし、自らの計画を進めていった・・・」

「生体兵器、ですか」

「ああ。既に兵器の域だろうよ」

と、その時

「ジュン！」

後ろから声がする。振り返るとそこにはユウタとファオ曹長、そしてＵＳＡ２のファルコン中尉の姿があった。

「・・・・ユウタ、もうここに来ていたんだね」

ジュンは手に持っていたＵＳＢメモリをポケットに潜り込ませる。

（・・・ユウタ達がもう到着してしまったか。予想外だな、これじゃキメラ達の回収が出来ない・・・）

「それと、横にいるのは・・・」

「草薙少佐！？」

その時ファオが驚いた声を上げる。

「・・・少佐？」

ユウタはどうやら面識が無いらしいが、ファオは構わずツルギの元に駆け寄る。

「２年前に戦死なさったって聞いていたんですが・・・」

「おう、ホモ野郎。相変わらず暑苦しい奴だな」

ツルギは片手を挙げ答える。

「・・・もしかして草薙少佐も表上は『戦死』にされて、人体実験に・・・」

「・・・もう少佐じゃねぇよ。俺はもう軍人じゃねぇ・・・だが、まさかここで会うとは思わなかったぜ、なぁフレイム・スカイフォード准尉よ」

「・・今は曹長です」

その言葉にツルギは「おっ」と声を上げる。

「へぇ降格したのかよ。ははっそうか、まぁいつかは降ろされると思っていたがな。せっかく軍曹から准尉まで駆け上がったのに、もったいねぇことをしたもんだ」

「おい、ファオ。これは一体どういうことだ・・・降ろされたって・・」

ユウタが珍しく戸惑った表情を浮かべている。

フレイム・スカイフォードことファオは頭を掻きながら何ともいえない笑みを浮かべる。

「いやぁ、俺は元々准尉だったんですけどね。ある事件をきっかけに軍法会議にかけられまして、降格処分ですよ」

ハハハとごまかすように笑う。

「まぁ部下に手を出したんだから、一階級降格で済んだだけでよかったよな」

「つまりパワハラか？」

ユウタのその質問に、ファオのバシャーモ特有の青い目が泳ぐ。

「いやぁ・・パワハラっていうか、ついつい我慢できなくなって手を出したっていうか・・・」

ユウタとファルコンの視線が急速に冷えていくのに、ファオはあわてて弁解する。

「だって、前から気に入ってた部下に隙ができてたんですよ！最初は見てみぬふりしようと思ったんですけど、我慢できなくなって・・・」

「襲った、と」

ファルコンがジトッとした視線を投げかけている。

（ふうん。つまるところ部下を襲って不祥事起こして降格されたわけね）

ジュンの横でファオは言い訳がましく言葉を紡ぐ。

「でででも、そそられたんですよぉ！」

「このエロバシャーモがぁ！」

バチン

「イデッ」

ユウタの拳がファオの頭上に落ちる。

痛みで涙を浮かべながら頭をさするファオにユウタが怒号を浴びせかける。

「まったくお前は前からそうなのか！？すこしは進歩という言葉を覚えろ！」

「で、ツルギさん。ファオさんとはどういう関係で？」

よこでずっと黙っていたジュンが口を開く。

「まぁなんだ。実はフレイムとは―」

「恋人？」

「違う！断じてそういう関係じゃねぇ！俺が特殊部隊の指揮官で、フレイムは第一小隊の部隊長だったんだ」

ムキになって反論するツルギにジュンは思わずクスッと笑う。

「・・・何笑ってんだ、ガキ」

「いいえ、なんでも」

そう言いつつジュンはこっそりとポケットから見取り図を折り曲げ現在地を確認する。

「このまま直進しましょう、ツルギさん」

「・・ガキ、俺の前を歩くな」

歩き出そうとしたジュンにツルギが鋭い言葉を投げかける。

「何故です？」

「前を歩かれると警護しにくい。後ろに居とけ」

「僕は守られなくても大丈夫ですよ」

「ごちゃごちゃ言うな。さっさと後ろにいろ。・・・戦いのプロの言うことに従ったほうが懸命だぜ、ガキ。テメエも犯罪のプロなら俺の言わんとしてることが分かるだろ」

「ふふ、じゃお言葉に甘えて」

薄っすらと微笑むとジュンはツルギの背後に回る。

「ツルギさんは頼りがいがありますね」

そう呟くとジュンは背後からツルギに抱きつき、手を回す。

その行為に面食らったのはツルギである。

若干顔を赤らめつつ、困惑したようにジュンを見る。

「な・・なんだいきなり！？」

「・・・こうしていると彼を思い出しますね」

まるで何かに浸っているように。ジュンは微笑む。

「おい、止めろ、ガキ・・・」

力なく静止を訴えるが、ジュンは止めずに静かにツルギにひっついている。

「何故貴方を仲間にして、今こうしているか分かりますか？・・・・・重なるんですよ、僕の育ての親と」

隻眼の大柄な男を見ているとジュンはある存在を思い出す。

初めて『親』と呼べた存在を。

初めて心を許せた存在と。

孤独の辛さを癒してくれた彼と。

その時ツルギは今時分にひっついている少年に、初めて人間らしい素直な表情を見た。

会ったときから野心と闇しか見せなかった心に今、隙が出来ている。

「・・・おい、あれって」

ファルコンの視線の先にあったのは、大きな扉。

バイオハザードのマークが描かれている。

「あの下に・・・キメラが」

カシャ

ツルギとファルコンがＭ１６を、ファオがＡＫ－４７それぞれ構える。

ユウタも拳銃を取り出し、一気に扉から地下に突入する。

地下研究室に突入したジュン達の目に飛び込んできたのは信じられない光景だった。

ポケモンらしき物体が大きなカプセルの中に浮かんでいる。

「らしき」というのは、そのポケモン達の姿が奇怪だったからだ。

あるピカチュウは両目が存在していなかった。

あるサーナイトは全身に鱗があった。

あるリザードは白い皮膚をしていた。

そしてそのほとんどが死んでいた。

「コイツは一体・・・」

ツルギが驚愕の眼差しで研究所全体を見回す。

カプセルの下には電子表示があり

殆どには『死亡』と表示されていた。

「どうやらこれが管理パネルみたいだね」

中央にある一台のコンピューターを操作するジュン。

そこには験体Ｎｏ．１～験体Ｎｏ．２２０の表示がある。

験体はそれぞれ『死亡』『不適合』『適合』の三つの表示がなされており、それらはそのポケモン達の運命を無感情に現していた。

画面上の電子パルスが今は非情に見える。

「マジかよ・・・ポケモン保護法に違反ってレベルじゃねぇぜ」

吐き気を催すような光景にファオが嫌悪感を露にする。

「どうやら験体１５０までは全員『死亡』しているみたいですね」

「よくもまぁここまでしたな」

ツルギも顔をしかめている。

「・・・早く前に進もう」

ユウタが一刻もこの場を立ち去りたい気持ちを抑え、ゆっくりと警戒しつつ前に進む。

（僕も手持ちを出しておこうか・・・）

ボールを投げるとシャワーズ・グレイシア・ボーマンダ・アブソルそしてゼロが姿を現す。

『・・・ここはキメラポケモンの工場か』

アブソルの赤い目が『験体』を捉える。

キメラポケモン製造の“糧”となった犠牲者達の姿はポケモン達に衝撃を与えたようだった。

『・・・酷いってレベルじゃないわね』

辛そうに顔を伏せるグレイシア。

『イカれてやがる・・・・』

ボーマンダが舌打ちをして部屋を見回す。

『エリカ・・本当に人間なのかな。こんなことを・・・』

震えるシャワーズの横でゼロは一人恐怖と悪寒を覚えていた。

元々エリカの手持ちポケモンだったゼロにとって・・・あの日の記憶が呼びさまされるのだ。

そう信頼していたトレーナーに『改造』されたあの日の記憶が。

必死で恐怖をこらえるゼロの頭をそっと前足で撫でるボーマンダ

『大丈夫だ。オレ達がついてる。だから怖がらなくていいぜ・・・』

ペタン

シャワーズも尻尾の尾びれでゼロの頬を優しく擦る。

『誰も君を一人にしないさ。大丈夫』

（そうか。ゼロはもともとエリカの手持ち。しかも初期タイプのキメラということはまだ技術が未完成だった頃に作られた。ということはより苦痛を感じていたに違いないね・・・）

ジュンはそっとゼロを抱きかかえる。

「・・・恐怖に打ち勝てとは言わないよ。ただ、僕達がそばにいることは忘れないでね」

『ジュンさん・・・優しいんですね』

「優しい？そうだね・・・僕は仲間にはとびっきり優しいのさ。悪だっていつも闇ばっかりだったらつまんないからね」

そうさ。僕は手持ちポケモンやユウタ、アルさん。親しい人には優しくしようと心がけているんだ。

僕の攻撃性はなぜか仲間といるときは優しさに変わるんだ。

不思議とね。

それに僕の目的も“もの”も手に入ったし。キメラポケモンも回収する予定だったけれど・・・

どうやらほとんど『死んで』そうだ。この様子じゃあね。

そう、僕のポケットの中にあるＵＳＢメモリ。

この中にはエリカのキメラ技術とポケモン達の基礎データが詰まっている。

さっきエリカの研究室で探したけど、あのポケモンに関する情報は手に入らなかった・・・・。

本来ならば、あのポケモンの情報が欲しいところではあったけど。

まぁいいや。このキメラ技術の力はエリカとの戦いで存分に味わってきた。

ポケモン同士、あるいわポケモンと人間を掛け合わせてキメラを作る技術。

エリカはそれを世界変革のために使おうとしているみたいだけれど、僕は違う。

僕は僕の目的のために、これを使わせてもらうよ。

いや、使わなくても目的が達成できるのであればそれに越したことはないんだけどね。

他人の力を借りるのはあんまり好きじゃないし。

それに・・・

ジュンは顔を上げ、キメラ製造工場内を見回す。

生体実験の犠牲者達に目をやる。

僕はポケモンハンターだし、基本的に色々なことをやってきた。

仕事のためにポケモンセンターを爆破したこともあるし、森に攻め込んだこともある。

だけど、この光景はいくらなんでも・・・僕でさえ嫌悪感を覚えるよ。

初めてだった。

ジュンは生まれて初めて“悼む”感情を覚えたのだった。

これまでそんな感情からはできるだけ身を引いてきたのに。

犯罪者として多種多様な犯罪に手を染めてきたジュンだったが、一つだけ嫌悪することがあった。

それは命を奪うこと。

ジュンは自分の犯罪に絶対の自信とこだわりを持っている。

いわば、考え抜かれたゲームなのだ。

ジュンにとって犯罪とは、論理的かつスリリングなゲームと同じだ。

だが、そこに“死”が入り込むと途端にゲームから逸脱してしまう、という事実をジュンはよく知っていた。

だからこそ、他者の命を奪うことだけはジュンは避けてきたのだ。

だって死が介在したら、僕の犯罪（ゲーム）は面白くなくなる。

相手の正義を徹底的に潰すあの快感がなくなるしね。

正義とは、つまり自己の正当化。

自分の嫌悪感や偏見を正当化するための言葉。

正義とは怒りの裏返しであり、つまるところ感情だ。

感情を正当化する言葉が『正義』なのさ。

正義の名のもとに、人は驚くほど残酷になれる。

僕はそういった存在をたくさん見てきた。

だからこそ、それを踏みにじってやるのが楽しいのさ。

相手の“正義”を徹底的に否定してやることで、相手の信念を打ち砕いてやる。

“正義”を踏みにじった時のあの残酷な喜び。全身を駆け巡る邪悪な興奮。

あれこそ、僕の糧。

正義の名のもとに“悪人を懲らしめる”ことを生業としていた奴ら

に教えてやる。

『絶対に敵わぬ悪には正義など塵にも等しい』ということを。

心に刻んでやるんだ。

『自分の掲げてきた正義は結局何の役にも立たない』ということを。

それこそ僕のささやかな楽しみ・・・。

いわば趣味だ。生きがいだ。

「おや、もう来ていたのかね」

その時後ろから声がする。

イーブイのブラウン少将がイクス准尉達を率いて歩いてくる。

どうやらミュウ一行と以外は全員合流できたようだ。

「・・・ほお、懐かしい顔もいるな」

ツルギさんにチラリと目を移すと、何も言わずブラウン少将はフッと微笑んだ。

何故彼がここにいるのか、もうわかっているのだろう。

そうして改めてキメラの工場内部に目をやる。

目に映るのは実験に使用されたポケモン達のなれの果て。

生物実験の過程で不気味な肉塊と化した、かつてポケモンだった存在。

「・・これは酷いな。酷いとしかいいようがない光景だ」

「見てられないです」

「僕も」

イクスとクーが辛そうに目を伏せる。

二人だけではない、後ろに続いていたＵＳＡ２隊員も唖然としてキメラポケモン製造工場内を見回している。

軍人としてこの島の警護任務についていた彼らだが、この研究施設がどんな“研究”をしているかは全く知る由もなかったのだ。

隊員たちは衝撃を受けていた。

自分達はこんなものを守るために体を張っていたのかと。

沈黙が支配する中、ジュンだけは冷静なまなざしでキメラポケモン製造工場内を見回す。

（エリカはやることが一々酷いよね。よくもまぁここまでのポケモンを実験に使えたね）

薄らとした悲しみがジュンの胸を突き上げてくる。

ポケモンハンターとして多くのポケモンと対峙してきた。
だからこそ、ジュンはいつからかポケモンの姿が好きにもなっていた。
力強い躍動感、生命の息吹を全身から発し生きているポケモン達。
ああ、だからこそジュンはポケモンを捕まえてきたのだ。商品として。
憧れ、カッコいいとさえ思うあのポケモン達を奪い取る時の、なんとも言えない優越感を味わうために。
だから捕獲するのだ。
高揚感とほんの少しの悪意でもって。

「後１０分程度で到着するな」

チラリと腕時計をみるブラウン少将

「・・・なにがです、ふわもこ閣下？」

ジュンの問いに少将が「ブラウンだ」と小声で訂正してから口を開く。

「空軍の爆撃機だ。この研究所のミサイルを破壊するために、私が出撃を要請しておいたのだ」

その言葉にユウタ達が驚いた表情になる。

「空軍の・・爆撃機ですか・・？」

「ああ。人間をキメラ化するウィルスを弾頭に仕込んだ、ミサイルを潰すためにな。エリカは全世界にミサイルを使ってキメラウィルスを撒くつもりなのだ。・・・ジュン君の推理の賜物というわけだ」

腕を後ろで組み深い落ち着いた声で事のあらましを簡潔に説明していく。

「ＵＳＡ２の兵器開発センターから購入したウィルス株と、ＵＳＡ２から提供された大陸間弾道ミサイル８発を用い、世界の各都市にウィルスを散布することで人類全員をポケモンとのキメラとする。これこそ、エリカの計画だ」

「しかし、ミュウ達は・・？」

ユウタの問いにブラウン少将は薄い笑みを浮かべ、装置の上に腰を掛ける。

「彼らは大丈夫だ。全員実力者のポケモンばかりだからな」

だが少将の顔はやはり冴えない。

もし空軍のミサイル破壊のための爆撃にミュウ達が巻き込まれでもしたら――

大丈夫だとは思いつつ、やはり心配しているのだ。

そんな少将の横にジュンも座る。

「大丈夫ですよ。彼らは爆撃ごときでは死にません。それを一番よくわかっているのは、ふわもこ少将さんでしょう？」

「・・・ああ、そうだな」

不安をかき消すように呟くと、ブラウン少将は顔を上げたのだった。

そして同じころ・・・

レシラムは一人コントロール室の電子パネルと向き合っていた。

ミサイル発射のための最終調整を行っているのである。

「もうすぐだ・・・もうすぐ、理想が真実となる」

ポケモンと人間の格差は埋まり、真に平等な世界が実現する。

そう思うだけでレシラムは震えが止まらない。

やっとだ・・・　長かった。

もちろんレシラムにとっては数年の月日など、あっという間だ。

だが、エリカと共に【プロジェクト・キメラ】を推進してきたこの４年は非常に長く感じられた。

遂に・・・遂に理想が成就するのだ。

カタカタカタ

コンピューターを操作し、ミサイルの発射準備を行う。

『ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ　ｔｈｅ　ｆｉｎａｌ　ｃｈｅｃｋ』

機械音声がコントロール室に響く。

「よし、ミサイルに異常はないな。これで・・」

その時

ピー　ピー　ピー

警告音が鳴り響く。

「な・・何事だ」

カタカタッと慌ててキーボードを叩き、事態を確認するレシラム。

「・・・なんだ、ものすごいスピードで飛行物体が・・・４機こちらに向かっている・・？」

民間機ではありえない。何故なら隊列を組んで飛行しているからだ。

考えられるのは、軍がこの研究所のミサイルを特定したという可能性のみ。

「・・・・まさか、この研究所の存在を突き止められたのか・・・」

表情を歪ませたレシラムは、コンピューターの表示を再度確認する。

『ミサイル発射まで後１５分』との表示が目に留まる。

「後少しなんだ。邪魔はさせない」

窓を開け放ち、一気に外に身を投げ出す。

銀髪をたなびかせた女性は一気に本来の姿・・白き龍へと変貌する。

「愚か者め。理想の成就を邪魔しようというのなら、容赦はしない！」

青き瞳でまだ見えぬ阻害者が来るであろう方面を睨むと、ターボエンジンのような尻尾から炎を吹き出し一気に加速していく。

放たれる熱気が周囲の風景を歪め、炎の渦がレシラムを囲む。

イッシュ地方の守護神は今、燃え盛る炎を纏いながら突き進んでいく。

レシラムは飛び立った。

【プロジェクト・キメラ】の要の一つを守るために――

番外編　特別企画！

はい、ということで遂にポケモンハンタージュンも二周年です！

ジュン「おお・・」

アキラ「時が立つのは早いわ・・・」

思えばいろいろなことがあったよねェ

ジュン「うん。そうだね（しみじみ）」

アキラ「ほんまやなぁ・・・」

レジギガスを巡って軍のポケモン救助部隊と一戦を交えたり・・・

ジュン「そうだったね。確かアキラさんが撃たれたんだよね」

アキラ「そうやな。あの時はほんまやばかったで・・・」

ポケモンレンジャーと激闘を繰り広げたり・・・

ジュン「ああ、ポケモンハンター全員集合で戦ったやつか。懐かしいなぁ」

アキラ「ほんまやな。最近ポケモンハンター全然出てきてないから、ある意味新鮮な思いでや」

後は多作品ではリーフのわがままでポケモンを奪ったり、某ヒトカ

ゲと一戦を交えたり・・・

ジュン「出張も多いよね」

いやはやホント敵サイドばかりｗｗ

アキラ「で、今回はなにするん？」

ん、活動報告の予告通り・・・第二回、「ポケモンハンタージュンの冒険」のキャラ人気投票を行うよ！

ジュン「前回は・・・２００９年１２月にやったんだよね」

そう。

まだ３０話ほどしかいってない頃だったからね・・・

だいぶキャラも増えたし、そろそろいいかなってね。

それにユウタ＝イプシロンとかファオ曹長とかブラウン少将とか個性派キャラも大勢出てきたし。

そしてエリカの本領も発揮したしね。

ジュン「で、どうするつもり？投票のルールは？」

それはねェ・・・

●お一人さま、５票

●必ず5票入れてください。

●一人のキャラに5票入れても、別々に割り振っていただいても構いません。

●期限は今から2週間とします。

それともう一つ・・

ジュン「何する気？」

人気ワーストランキングをするよ。

アキラ「ワーストォ！？」

そう、用は読者が選ぶもっとも不人気なキャラ。

人気キャラ投票だけじゃ、最も読者から敬遠されてるキャラは分からないからねｗｗ

アキラ「陰湿なキャラ投票やな・・・（汗）」

●お一人様5票

●期間は「人気キャラ投票」と同じです。

上記二つは、メッセージ送信でお送りください。

もし、「人気キャラ投票」「人気ワーストキャラ投票」のどちらかのみ参加されたい方は、それでも構いません（笑）

もしできるならば、なぜそのキャラに投票したのかを少し教えていただけるとありがたいです。

たくさんのご投票お待ちしています。

では♪

第九十一話　正気と狂気の狭間で（前書き）

今回から遂に・・・

第九十一話　正気と狂気の狭間で

レシラムは純白の翼で大空を舞い、一気に加速する。

炎と熱を司る神（ポケモン）であるレシラムの周囲は炎で熱が生じ、歪んでいる。

まるで来るべき阻止者を拒むかのように。

そしてその跳躍は・・・

Ｕ－９と対峙していたゼクロムの目に止まる。

「あいつ・・・！？」

キッとその姿を睨むと、ゼクロムの青年の姿が一気に漆黒の龍へと変貌する。

「ゼクロム！どこに行くのです！？」

「俺はあいつを止めないといけねぇ！我が儘で悪いが、少しの間だけお前らだけで戦っていてくれ！」

文句を言おうと口を開きかけたミュウだったが、ゼクロムの眼を見て・・代わりにため息をついた。

「いいでしょう、ただし行くからには止めなさい！」

「・・・おう」

ゼクロムが一気に飛び立つ。

「どこにいくの？」

Ｕ－９が手を振るい、ゼクロムにサイコキネシスをかけ地に落とそうとするが

「やらせません！」

ブゥン

ミュウのサイコキネシスが、Ｕ－９のサイコキネシスを抑え込む。

チラリとゼクロムがミュウ達を一瞥し、そして次の瞬間決然と大空に大翼を広げ舞い上がっていった。

高く・・・高く。

「絶対止めてみせる・・・・レシラム、お前が馬鹿をやらかす前に・・！」

＊＊＊＊

大空を飛ぶレシラムの目がスッと細くなる。

「来ている・・・空軍の爆撃機だ・・・」

青い双眼が遠方から飛来する飛行隊を確認する。

「私の計画の邪魔はさせない・・・」

心の念を爆撃機の無線とリンクさせるため、いったん飛行をを停止しゆっくりと思考を集中させる・・・。

『爆撃機のパイロット諸君に告ぐ』

無線の電波をジャックし、厳かに告げる。

どうやらパイロット達は相当驚いたらしく、気配がレシラムにも伝わる。

『至急この領域より離脱せよ。爆撃を中止することだ』

「こちら空軍爆撃小隊、隊長・・・イーノック少佐だ。お前は一体何者だ!?所属する軍および階級を名乗れ」

『階級?私は人間ではない。私は・・・』

その時爆撃機のパイロット達は目の前の大きな純白のポケモンに意識を奪われる。

『レシラム。このイッシュの守り神だ』

「レシラム・・・聞いたことがあるぞ・・・イッシュ建国伝説のポケモンか・・・」

(ほう。この隊長を名乗る男は学があるらしい・・・)

「隊長、どうなされます?」

横から別の声が入ってくるどうやら部下のパイロットのようだ。

「レシラム・・・我々は今からある組織の大量破壊兵器への爆撃を行おうとしている。イッシュの守り神がなぜ、止めに入るのだ?」

『諸君らは何か誤解しているようだな?ミサイルは破壊のために使用されるのではない」

その言葉に男の息遣いが変わる。

「・・なぜ、俺達の攻撃目標を知っている?」

若干自分が喋りすぎたことに気づき、少し悔いたレシラムだったが、すぐに思い直す。

(そうだ。どうせ後15分でミサイルが発射されれば皆に知られること・・・)

『ふふ・・愚問だな。私がそのミサイルを用意させたのだ。知っていて当然だろう?』

その言葉に爆撃部隊のオーラが張りつめるのが分かる。

『ミサイルにはあるウィルスが積み込まれている。そのウィルスに感染した人間はポケモンとの狭間の生命体へと進化するのだ』

「なんだと・・そんなものをミサイルを使って・・!!」

イーノック少佐の声が震えている。

『いいか、空軍諸君。今すぐイッシュ空域を離脱することだ。それかここで私に刃向い、無駄な命を落とすか？』

ブツン

その瞬間無線が切られる。

と、同時に戦闘機が一気に旋回する。

「・・・戦闘機ごときで私を突破できると思ったか！クロスフレイム！」

ゴォォォ

レシラムが頭上に燃え盛る球体を生成する。

クロスフレイムをぎりぎり旋回しかわす戦闘機。

「・・撃ってこないか。だが、私は容赦はしない！」

隊長機の後方に一気に張り付く。

「破壊光線！」

口から放った光線はぎりぎり、戦闘機の翼をかすめる。

それでも反撃することなく、ただただ飛行部隊は飛び続けている。

火器を持っているのだから、いくらでも攻撃は出来たはずなのに。

ただ、黙ってレシラムの追撃を、見事な飛行技術で回避しつつ、目的地に向かっているのだ。

その姿に少しずつレシラムの心に戸惑いが生じてくる。

（何故だ・・なぜ反撃してこない）

『何故、私に攻撃してこないのだ？無抵抗のままみすみすやられるつもりか？』

「・・・俺達の敵はレシラム、貴方ではない。この世の秩序を崩さんとする科学者集団だ・・・」

『どうやら、私には攻撃を加えるきは無いらしいな・・だが、私はお前たちを止めなければならない！理想の成就のために！』

もう一発クロスフレイムを放つレシラム。

放たれた業火の球体は戦闘機に直撃―

しなかった。

その時黒い龍が割って入り、クロスフレイムから戦闘機をかばったからだ。

『おう、テメェら空軍だな？さっさと目的地に行け！俺がコイツを食い止める！』

「・・・驚いたな・・レシラムの次はゼクロムとは・・・！」

ゼクロムもまた戦闘機の無線に直接『声』を届けているのだ。

『俺がレシラムを止めている間に早く行け！行って・・・コイツの妄想を壊してやってくれ。あの研究所と共に・・・全て終わらせてやってくれ！』

事情を知らない空軍のパイロット達も皆、ゼクロムの心からの『声』を胸に刻んだ。

「事情は知らんが、イッシュの守り神の言葉・・受け取ったぞ」

４機の戦闘機が一気に加速し、ゼクロムを追い越す。

「させるか！」

レシラムが追いかけようとするが、ゼクロムの龍の息吹によって阻まれてしまう。

「なぜだ・・なぜ邪魔をする、ゼクロム！」

「そんなの決まってるじゃねェか。これはな、エリカが中心となって引き起こした事件だ。人間の起こした事件の後始末は人間がするのが筋ってもんだ」

そういうと、飛び去っていく戦闘機をチラリと一瞥する。

「そんなことは聞いていない！何故・・私の理想の邪魔をするのかと聞いているのだ！」

クロスフレイムをゼクロムに放つレシラム。

が、ゼクロムは黙ってその攻撃を受けるだけだ。

「何故かって・・テメェもアルセウス達と同じ穴のムジナだってことを分からせるためだ」

「私がアルセウスと同じ・・・だと!?」

怒りがふつふつと湧き上がる。

私とアルセウス達を一緒にするな・・・!

エリカの家族を巻き込み殺した奴らと・・

人間をこの地球から滅ぼそうとした存在と・・

私は人間のためにやっているのだ!!彼らと同類に扱われる道理などない!

全ては人間をさらなる進化へ導き、ポケモンと平等な関係にするためにやってきたのだ。

だが一方でレシラムの冷静な性格が怒りを鎮火させていく。

(戦闘機が研究所に到着するまでにミサイルが発射されれば問題ないのだ・・・それに仮にミサイルが破壊されたとしても、大丈夫だ・・。プランBに移行し、ステルス機を使えば・・・)

レシラムはまだ研究所内のキメラ製造プラントに「キメラウィルス」

の予備が保管されていることを思い出す。

こんな時のためにバックアップ計画を練っておいて正解だった。

（あの場所はエリカも知っている。問題ない・・・ミサイルと弾頭に積み込まれたウィルスが爆撃で使用不可となっても、手はあるのだから・・）

そうしてチラリとレシラムはゼクロムに目を向ける。

何故だ・・・何故理解しようとしない。

私達は元々一つの命だったはずだ。

何故、私の理想を否定するのだ!?

怒りよりも・・ゼクロムに対する失望がレシラムの感情を犯していく。

「ふん。爆撃機が研究所に向かったってのにずいぶんと冷静だな。いや・・まだ奥の手があるんだな?」

「ノーコメントだ」

一言答えておく。

ゼクロムは赤い双眼をレシラムに向け、だがしかし何も言わない。

「まずは・・・計画の危険因子は排除すべきだな。ゼクロム、悪く思うな!クロスフレイム!」

「・・・・」

クロスフレイムを直に受け、ゼクロムは後方に吹き飛ばされる。

が、すぐに態勢を立て直すと雷の球体に身を包みそのままレシラムに突っ込む。

「いい加減、目を覚ませ！クロスサンダー！」

「ゼクロム・・私の邪魔をするのなら、ここで倒させてもらうぞ！」

ぶつかり合う二つの龍。

そしてその頃・・・

＊＊＊＊

エリカは一人、自分の研究室に佇んでいた。

神の力を手にしてから、最近まるで世界が夢のように感じる。

「お姉ちゃん、遊ぼうよ」

声がする。

振り向くとそこにはヨハンが満面の笑みを浮かべながら立っている。

「今はだめよ、ヨハン」

そう呟くと、エリカはポケモン細胞工学の本をパタンと閉じる。

「お母さんとお父さんも待ってるんだよ」

「まだよ・・まだだめよ」

白い壁に向かって、空虚な空間に向かってエリカは呟く。

その時

ズガァァァァン！

大きな音と共に、まるで自身のように部屋が振動する。

ズガァァァァン！

数回に渡る爆発音が空気を揺らす。

学術書が棚からバサバサと床に落ち、サンプルが音を立てて割れる。

「・・・何が起こったのかしら」

ふと顔を上げるとヨハンは居なくなっていた。

いや元々いなかったのだろう。

神の力と取り込んでから、最近よく幻想と現実が入り乱れるようになってきた。

アルセウスとパルキア、そしてディアルガの宝玉から抽出した遺伝子を自身に組み込むところまでは完ぺきだった。

“刻印”の発生も薬品で防げている。

だが、一つだけ誤算があった。

時々、エリカの前にはヨハンや両親が現れるようになってきたのだ。

こうした何かの拍子に幻想や幻聴が消え、現実に引き戻される日々。

「私の精神が神の力の影響を受けて分裂し始めたのかもしれないわね」

過去の記憶が頻繁に現実を侵食しだした。

ヨハンが・・母が・・父が時々部屋の隅に現れる。

懐かしく思いしゃべりかけていて、ハッと気が付くと壁に向かっていたということがザラだ。

だが、構わない。

精神が後少しの間持てさえすれば。

世界中の人類をキメラ化する“実験”さえ出来れば。

「何が起こったのかしら。格納庫のあたりから爆発音が聞こえたけれど」

カチャリ

部屋から出て格納庫に向かうエリカ。

「エリカ、どこにいくんだい？」

父アランが腕を組みながら、廊下の隅に立っている。

「格納庫よ、父さん」

そう言って振り返ると、父親の姿は既に消えていた。

現実が狂気に犯されて行く。

「精神活動に負荷がかかりすぎたのかしら。妄想と幻聴が精神を覆って来ているわね」

エリカは冷静だった。

自分の世界が狂気に飲まれ始めているというのに、それすらも冷徹な第三者の視点から見ていた。

自分自身が壊れ始めている姿を。

格納庫についたエリカは信じられない光景を目にした。

八発のミサイルが全て粉々に破壊されていたのだ。

上空を見上げると飛び去っていく飛行機。

「軍が爆撃したのね」

舌打ちをすると。エリカはレシラムと打ち合わせしておいたプランBの存在を思い出す。

格納庫の地下には軍より譲ってもらったステルス爆撃機『B－2』があるのだ。

「まあいいわ。さて、B－2に予備ウィルスを積み込まないと」

ふと見上げると破壊されたミサイルの上にヨハンが座ってこちらに手を振っている。

「正気よ・・まだ私は正気」

ヨハンの妄想に背を向けると、エリカは一人研究所の中に入る。

予備のために保管しておいたキメラウィルスを回収し、B－2に搭載するために。

ウィルスを撒いてしまいさえすれば軍にも手が付けられない。

１００％の感染率とあらゆる感染経路を持つあのウィルスには・・・

軍が今さらどんな作戦を立てようが無駄なことだ。

ザッザッザ

研究所内を歩き、予備のウィルスの保管場所を目指すエリカ。

そうしてふとある場所で立ち止まる。

冷凍室

正しく言えば人体実験に使用した遺体を保管する場所だ。

――負傷した軍人たちが毎日のように運ばれてきた。

当初、彼らはここを病院だと勘違いしていたようだったが。

本当は人体実験による非人道的な研究をする場所であるとは思わなかっただろう。

「下らない。どうでもいいわ」

一体何名の命がこの研究所で、だれにも知られることなく消えて行っただろう。

「彼はは感謝すべきなのよ。戦いに傷つたその体を最期、科学の発展のために尽くせたのだから」

――キメラ技術を餌にすると軍は簡単に引っかかった。

兵士を半無敵化する技術。

低コストで、量産できるキメラ兵。

通常火器やＣＱＣ（軍の格闘技）と組み合わせればまさに無敵。

腕や足がもげても直ぐに再生し、痛覚さえ制御できる。

欲しがるなというほうが無理だろう。

ミサイルもすぐに用意してきた。

それにＢ－２・・ステルス爆撃機さえ。

騙されているとも知らずに。

エリカは軍に協力する気など毛頭なかった。

究極の目的は軍に教えることなどありえなかったのだから。

全ては順調に進んでいたはずだった。

そうだ・・・何故、今頃になって軍が私に牙をむく？

「誰かが攻撃の指令を・・・いったい誰が。軍の上層部は全員私の言いなりだったはず・・」

ふと立ち止まる。

自分の手をふと見ると少し震えていた。

動揺しているのだ。

ほんの少しだが、動揺している・・。

今さらながら、軍がこの研究所に対し攻撃を仕掛けてきたことに対して焦りを感じている・・そのことをエリカは気が付いた。

あの奇襲はまだの序の口だ。

もし、キメラ技術の違法研究以外の情報が・・私の計画の情報が軍に漏れ出していたとしたら・・・

軍は全精力を傾けてこの研究所に攻め込むだろう。彼らの後々の言い訳のためにもそのほうが賢い選択だ。

「・・・空軍がミサイルを破壊しにかかったということは、もう計画が漏えいしていると見ていいわね」

今まで軍を欺いてきたエリカだったが、武装面から言えば軍に勝てる可能性はゼロだ。

正面から衝突しないように細心の注意を払ってきたが・・・

計画が漏えいしているのだとしたら、急がなければいけない。

陸海空軍の矛先が【スキエンティア】海上研究所に向く前に。

ステルス爆撃機『Ｂ－２』を使い、ウィルスを撒かなければ・・・

エリカは地下のキメラ製造プラントに入る。

ここに『キメラウィルス』の予備が保管されているのだ。

「ウィルスとキメラ技術のデータを回収しなきゃね・・・」

「ほう、回収して撤退するつもりかね？」

後ろから声がする。

振り向くと・・・軍服を着たイーブイが、部下と思われる人間達を連れて後ろに立っていた。

いや青がかった制服の軍人達は・・・ＵＳＡ２隊員だろう。

それに軍服を着たサーナイトやバシャーモもいる。

そして一番後ろで黙って立っているのは・・・

ポケモンハンターの・・確か氷室準といったか。

再び視線をイーブイに戻すエリカ。

軍服の襟は銀色の星が二個。

「Ｍａｊｏｒ　Ｇｅｎｅｒａｌ・・少将ね」

「・・・よく知っているな。さすが軍を手玉に取ってきただけのことはある、ということか」

チラリとエリカは銃を構えている部下達を見回し・・・見知った顔を見つけた。

「あら、イプシロン少尉・・・いやその階級章から察するに・・Ｆｉｒｓｔ　Ｌｉｅｕｔｅｎａｎｔ・・・中尉に昇格したのかしら？」

「久しいなエリカ。言っておくが今回は護衛じゃないぜ」

「そのようね」

張りつめる空気。

そんな中ジュンは一人一番後ろから事を次第を見つめていた。

「・・・エリカ。おとなしく我々に従えば手荒な真似はしない。そもそも君はまだ子供だからな。だが、反抗するようなら・・・」

カチャ

一斉に銃口がエリカに向けられる。

「容赦はしない」

「ふふ・・少将自ら先陣をきってここまで来てくれたのだから・・無抵抗というわけにはいかないわね」

遂にとらえた・・すべての元凶。

だが軍とその協力者を前にその少女はただ冷徹な笑みを崩すことはなかった―

第九十二話　ＶＳエリカ！　少将の“力”

「私としては君の所業を鑑みると、今すぐにでも射殺したいがね。君はまだ子供だ。抵抗せずに我々と同行したまえ」

ブラウン少将の言葉にエリカが微笑む。

「嫌よ」

白衣から出たエリカの手が急激に変色していく・・・

皮膚が白い・・ペンキで塗ったかのような純白になったのだ。

「・・・撃て」

一言。少将の言葉と共にユウタ達の銃が一斉に火を噴く。

清潔な白い廊下に充満する硝煙の匂い。

「残念ね」

銃弾は一発もエリカに命中することは無かった。

彼女の周囲には空間の歪みが発生しており、銃撃からその身を遮断しているのだ。

「パルキアの空間操作能力か」

少将の呟いた言葉にエリカは薄く笑む。

「ええそうよ・・・【時の逆流】」

刹那。エリカの言葉と共に青いエネルギー弾が放たれる。

ぎりぎりで避けると、そこには信じられない光景が広がっていた。

なんとエネルギー弾が当たった壁がぽっかりと「無くなって」いるのだ。

破壊され吹き飛ばされたのとは違う・・・強いて言うなら壁が丸く切り取られている・・そんな感じだ。

「そのエネルギー弾の触れた部位の「時」を過去へと戻し、その物質が結合する前に移行させる技よ。さて、どうするかしら?」

ブウン

【時の逆流】が数発放たれる。

直撃した対象物を消滅させる・・・触れれば死亡確定だ。

ガガガガガ

ＵＳＡ２隊員とファオのアサルトライフルが弾丸をばら撒く。

だが弾丸は【時の逆流】に触れた瞬間、消えてしまう。

止めようのない攻撃に、ファオが「伏せろ!」の一言をかける。

隊員たちはなんとか攻撃を回避する。

「くそっ！空間の溝だと・・・そんなのどんな攻撃も通らねえじゃねえか！」

ファオは舌打ちをしつつ、胸ポケットからダガーナイフを取り出す。

（もしかしてあの障壁は『守る』みたいなもんかもしれなねぇな。なら・・・）

一気に駆け出すファオ。

「あら、自滅しにきたのかしら？」

エリカの放つ【時の逆流】

「当たらねぇよ！」

なんと軽やかに【時の逆流】を回避すると、そのままエリカを包む“防壁”にナイフを立てる。

「おおおお！」

一瞬だが、ファオはダガーナイフの刃先が“沈んだ”ような気がした。

（こいつは・・・）

「・・・邪魔ね。亜空切断」

エリカが空間の神パルキアの技・・・『亜空切断』を使用する。

「おっと」

なんとか真っ二つになる前に横に避け、そのまま交代するファオ。

「危ねぇ危ねぇ」

「気をつけろファオ。当たったら即あの世逝きだ」

「了解してますよ、中尉。少し気が付いたことがあるんですけれど・・・」

ファオはユウタを守るように前に立ちながら、肩ごしに話を始める。

「気が付いたこと?」

その言葉にブラウン少将の片耳がピクリと動く。

「はい。あのエリカを包む空間の断絶・・・あれはどうも高密度の障壁か何かかと思うんです。銃撃の時でも、俺がナイフを突き立てた時でも一瞬ゆがみました」

戦いに置ける冷静な観察眼。

いつもは軽いファオだが、いざ戦いが始まると持ち前の機動力を武器に非常に冷静に局面に対応していく。

「なるほどファオ曹長の言葉が本当ならば、エリカの周囲と私達の空間は完全には遮断されていないわけか」

ジュンも後ろで腕を組んでファオの言葉に耳を傾けていた。

（なるほど。考えてみれば強大な神の力を手にしたばかりのエリカが、それをそう簡単に使いこなせるわけがない。まだまだ不完全ということか・・・）

「内緒話は終わりかしら？」

「ああ・・・片が付いたところだ」

少将の一言にエリカは冷徹な笑みを浮かべる。

「なら、行くわよ？【時の咆哮】」

ブウン

刹那。

エリカの手から膨大なエネルギーがレーザーとなり放たれる。

「・・・」

ズドォォォォン！！

その瞬間、キメラポケモン製造プラントの半分が吹き飛んだ。

砕け散る培養カプセル。

周囲に轟く衝撃波はキメラポケモン達の遺体を粉々に砕いてしまっ

た。

反応できなかった隊員達も皆・・・吹き飛ばなかった。

ブラウン少将が一瞬の判断で前に出ると、青い防壁を作り出していたのだ。

六角形の青いエネルギー壁が集合し、大きな盾となっている。まるで蜂の巣のように。

「彼女の内部にある神の力・・・まだ制御しきれていない内に叩かなければな」

「しかし少将殿。至近距離からの銃撃にも耐える防壁をどう攻略すればよろしいのですか・・・」

ＵＳＡ２隊員の戸惑いの言葉。

少将は黙って腕をサッと一振りする。

すると、青い六角形の集合体が溶け込むように消滅する。

「そうだな。今から私があの防壁をこじ開ける。隙が出来た瞬間を狙い、狙撃したまえ」

鈍い音が隊員達の耳を刺激する。

青く澄んだ六角形が集まり、大きな“翼”を形成していく。

ハニカム構造の両翼をはばたかせ、ブラウン少将は舞い上がる。

「私はいかなる手段を用いても勝利を獲得しなければならないのだ。第一の騎士としても」

第一の騎士・・・？

その言葉に若干の疑問を浮かべたジュンだったが、ユウタ達はそのことにではなく・・・・ブラウン少将の変化について驚きの色を隠せなかった。

「ブラウン少将・・そのお姿は・・」

さすがにこれには驚いたようでユウタも戸惑いながら尋ねる。

「ああ、これは・・・私の本気といったところだ」

ピピピピピ・・・

舞い上がる少将の右腕に青い光が集まり、弓を形作る。

ブウン

青く輝く弓から、高エネルギーが収束した矢が放たれる。

エリカの直撃する矢。

彼女を守る空間の障壁に青い矢が触れた瞬間、まばゆいばかりの輝きを放ち爆発を起こす。

その爆発で先ほどのエリカの攻撃によりガタが来ていた地下研究所

が音を立てて崩落を始めた。

頭上から降り注ぐコンクリートの塊はしかし、ユウタ達はＵＳＡ２隊員達の頭上に出現した、ハニカム構造の青い防壁によって防がれる。

「へぇ・・・空間断絶のバリアが少し揺れたわ。なかなかの威力ね」

「さすがに一発では壊せんか」

少し息をためると、ブラウン少将は天井に目をやる。

「ここは少し狭いし息苦しいな。窓を作ってやろう」

ピピピピピ・・・

少将の頭上に高エネルギーが収束していく。

一瞬、煌めくと青い光線となって研究所の天井を薙ぎ払う。

天井はまるで発泡スチロールのようにグニャリと歪み、そのまま大爆発を起こす。

落ちてくるコンクリートや鉄筋からは先ほどの防壁が防いでくれている。

ユウタ達は差し込む光に一瞬細目になる。

どうやら少将の放った先ほどの光線は地下のキメラポケモン製造プラントの天井を崩し、上の研究所をも吹き飛ばしてしまったようだ。

暗い地下室に日の光が降り注いだのだ。

青く澄んだハニカム構造を持つ翼で一気に研究所の外に舞い上がる少将。

「さて、一気に薙ぎ払うか。撒きこまれないように奥に逃げておきたまえよ」

光が少将の両翼に溜まっていく。

六角形の一つ一つに青い光が充填されていくのである。

「身を以て知るがいい。【ディエス・イレ】」

Ｄｉｅｓ　ｉｒａｅ・・それはラテン語で『怒りの日』を意味する。

翼を構成する六角形一つ一つから青きレーザーが降り注ぐ。

少将から放たれた光の雨は、【スキエンティア】研究所に空いた地下空間への穴を薙ぎ払い、周囲の建物を悉く崩落させていく。

青い閃光が迸り、地上にレーザーが幾度も横断していく。

その両翼のハニカム構造の一つ一つがまるで夜空を彩る星のように煌めく度に、研究所に青い一筋のレーザーが放たれるのである。

まさに怒りが雨のように降り注いでいく。

「・・・・・」

そんな猛攻をエリカは黙って耐えていた。

降り注ぐレーザーはエリカの周囲の『空間断絶』によるバリアを少しずつだが、削ぎ落しているのである。

（信じられないわね。神の力によるバリアを『揺らす』なんて）

本来空間操作によるバリアはいかなる攻撃も通さない無敵の盾である。

だが、エリカは神の力をまだ使いこなせておらず、高威力による連続攻撃で少しずつだがバリアがダメージを受けてしまうのだ。

「本来の力を存分に生かすというのは気持ちがいいものだな」

ブラウン少将の戦闘能力は本当ならば部下達より遥かに上なのだ。

『不死』の体と、高エネルギーレーザーによる攻撃。

だが、その力の強大さ故ブラウン少将はめったなことでは自身の力を開放しない。

――あまりの強大過ぎる力は、自身にも他者にも不幸しかもたらさないということをブラウン少将は嫌というほど味わってきたからだ。

「だが今はそんなことを言っている場合ではないな。そもそもあの少女は殺しても死なんだろう」

目を凝らし、爆風によって発生した煙をじっと見つめる。

その時。

青いエネルギー弾が突如現れ、ブラウン少将に直撃したのだった・・・。

＊＊＊＊

ジュンは信じられない光景を目の当たりしていた。

陸軍情報部のトップであり、イーブイなブラウン少将が突然ハニカム構造の翼を生やしたかと思うと天井に穴を開け、空からレーザーを乱射しまくったのだ。

前で唖然としているユウタにも目をやる。

どうやら上官のこの常識を超えた力の数々を知らなかったらしい。

だが、そんな猛攻にエリカはこともあろうに平然と耐えた。

そして手からエネルギー弾を生成しする。

（あれは・・・【時の逆流】・・・まずい、あれを受けたら少将が・・・！）

ユウタは急いで拳銃を構え、エリカに発砲する。

が、あれだけの猛攻を受けたにも関わらずエリカを守るバリアは銃弾をいとも簡単に弾いてしまう。

「無駄よ、イプシロン中尉。あのイーブイの攻撃さえ通さない障壁を銃弾ごときが貫通できるとでも思ったのかしら?」

そういうとエリカは非情な笑みを浮かべる。

このキメラ製造プラントの保管室にあるウィルス。

それさえ回収できればいいのだ。

こっそりとエリカはメールをギラティナに持たせておいた携帯電話に転送する。

彼らの注目は今、自分に向いている。

それを逆手に取れば・・・。

とそこであることを思いついた。

世界各地にウィルスが撒かれるまでのタイムラグに対ミサイル迎撃システムを使われてはすべてが水の泡だ。

ミサイル爆撃機、Ｂ－２がその役割を終えるまでに撃墜されては元も子もない。

近くにある空軍基地はつぶしておくのが得策。

器用に携帯電話に文章を打ち込むと、キーを押す。

チラッと白衣の中の携帯電話の画面に目をやると「転送完了」の文字が表示されていた。

（ふふ。さて、少し遊びましょう・・）

「今から貴方の上官を消し去ってあげるわ。跡形も無くね。・・・【時の逆流】！」

物体を結合の前の段階に強制的に戻す【時の逆流】。

放たれる『死』

ユウタ達が反応する間もなく、上空で様子を伺っているブラウン少将に【時の逆流】が直撃する。

「少将！」

ぐらりとブラウン少将の姿が揺れ、そのまま地面に落ちる。

と同時にユウタ達を保護していたハニカム構造の防壁も消滅していく。

急いで駆け寄り、地面に横たわる少将の姿を見てユウタ達はアッと息を飲んだ。

体半分が削り取られている・・・。

地面には首から下の体左半分を失い、大量の鮮血と共に倒れているブラウン少将の姿があった。

先ほどの攻撃で消滅させられたのだ。

信じられなかった。

「少将・・・」

最も頼りにしていた上官の死。その現実が・・。

その現実にユウタは呆然と立ち尽くしていた。

「・・・まったくやってくれるな」

「!?」

その時。

体半分吹き飛んだはずの少将が声を発する。

「後数?ずれていたら、『反魂石』に当たっていた。今回は本当に危なかったな・・・」

バチバチバチッ

ブラウン少将の体を青いエネルギーが迸り、なんと消滅した左半分の体を再生させていく。

まず骨格が形成され、筋肉と神経がそれを覆い・・・最後には皮膚が再構築されていく。

驚きのあまりユウタは声が出なかった。

“普通”体が半身消滅したら即死だろう。

現に心臓や肺も消滅した部位の中に入っていた。

だが、目の前でブラウン少将の体は再生し、何事もなく立ち上がりため息をついている。

「だが、彼女の攻撃範囲は大体わかった」

「ブラウン少将・・・今のは・・」

ユウタだけではない。後ろにいるファオやファルコンも唖然としている。

「・・・陸軍本部に無事生還できてから教えてやろう」

一言告げると、再び翼を発生させ空中へと舞い戻っていった。

（へぇ・・体が吹き飛ばされても再生する能力か。しかも今少将の謎のワード・・・『反魂石』。これは何か興味深い事実がありそうだね）

数々の超絶的な力を兼ね備え、尚且つ異常ともいえる再生力。

そして陸軍情報部を統括する司令官が並みの兵器を軽く超えた火力を有している事実。

ジュンは後ろからその光景を観察しながら、興味と好奇心に心を描きたてられていた。

何か裏がある。

だが今はそれを詮索すべき時ではない。

そうだ。今はエリカのことに集中すべきだ。

正直ジュンにはエリカを許せないとか倒さないといけないなどという感情は全くなかったが、ここまで来た以上参加するほうが得策だ。

正義感を全く持ち合わせないジュンはエリカの行為についても何の感想も無いのだから。

大勢のポケモンや人間がここで死んだ事実。

だが恐ろしいことにジュンはそれらの行為や経歴には「怒り」「義憤」といった感情を抱いていない。

と同時にエリカを信奉する気にもなれない。

つまりは『興味』が無いのだ。

酷なようだが、本当にエリカのしてきた数々の行為に対して何の感情も覚えられない。

ジュンがここにいる理由はただ一つ。

エリカの計画が成功すれば、人間社会が大混乱することは目に見えている。

そうなれば「ポケモン」を商品とする職業に大きな影響を与えてしまう。

ポケモンハンターの顧客の多くがコレクターや富豪だが、実はかなりの割合で警備会社さセキュリティ関連の組織も秘密裏に購入しているのだ。

もし人間全員がキメラになれば、「ポケモン」が売れなくなるのではないか。

商売人としての危惧。

そして自らの「計画」推進のためにジュンはここにいる。

自らの利益のみを考えて今行動している。

それに、とジュンは静かに思考する。

リーフの事業の一つがセキュリティ関連なのだ。

ポケモンを裏ルートで購入し、特別な施設で訓練しセキュリティポケモンとして提供する。

彼女の計画はその事業の根本を揺るがしてしまう。

人間が強化されれば、自然とセキュリティが無くとも対処できるようになるだろう。

そうなれば事業の柱の一つが揺るぐことになる。

正直エリカが技術開発にどれだけの犠牲を払ってきたかはジュンの知ったことではなかったし、興味もない。

軍とは利害が一致したからここにいるだけだ。
そしてジュンの目的はほぼ達成された。
（後はエリカを倒すだけ・・なんだけどね）
正直ここまでエリカが強大な力を手にしているとは予想外だったが。
（・・・待てよ。アルセウス達は捕まっているんだよね。だったら今僕も神手中に収めることも可能なんじゃないのかな）
だが、その考えをジュンは頭の中で即座に否定する。
駄目だ。軍とはまだ良好な関係を保っておかないと僕にとって不利益だ。
今神達をかっさらうことは可能だろうけど、後々の利益のためにはここは自重しておこう。
実に打算的な行動だと自分でもつくづく思うが、まぁこれが一番性に合っているのだろう。
再生し、よみがえったブラウン少将に驚き同時に沸き立つ軍の後ろで静かにエリカを観察する。
真っ白に変色した皮膚。
そしてディアルガの『時間』、パルキアの『空間』の力を存分に使用しているのだ。

なかなか興味深い。

その力でエリカが破壊の限りを尽くす光景も見てみたい気もする。

特に軍の基地を抵抗をもろともせず踏み潰す景色なら１００万払ってでもぜひ見物してみたい。

そして人やポケモンが圧倒的な『力』に屈する瞬間をこの目にすることができれば・・・最高だ。

『正しい』人やポケモンが絶望し怒りをも投げ打つあの一瞬。ジュンは心からの喜びを感じる。

だが。

エリカはジュンの利益を害する存在。

だから敵対している。

それだけだ。

正義を掲げる権威ある組織や人物をいたぶって弄ぶのが大の楽しみのジュンにとってはエリカはやはり邪魔な存在なのだから。

「あら、体半分失っても即再生したわね」

興味深げにブラウン少将に目をやるエリカ。

「少将たるもの、簡単に死ぬようではいかんのだよ」

空に舞い戻ったブラウン少将の翼に再び青く澄んだ光が溜まっていく。

再び、ディエス・イレを放つつもりだ。

「・・・無駄なのによくやるわ」

「無駄かどうかは結果が出るまで分からんだろう?科学者君」

「・・・」

エリカは黙っている。

そしていつでも射撃できる態勢で、ユウタ達も静かに銃を構えている。

少将が言う“一瞬の機会”をうかがっているのだ。

そして命令が下った瞬間、すぐに行動に移せるように。

そんな中ジュンはその光景を黙って見物していた。

これから何が起きるのか・・・

極度の緊張状態。

『ジュン。戦う準備をしておかなくていいのか?』

マリスの言葉をジュンは優しく返す。

「今は様子見をさせてもらうことにするよ。なかなか楽しい光景だし」

『高みの見物を決め込むつもりか？』

「ま、そうとも言えるね」

一人ジュンだけはこの場の中で異色だった。

まるでよくできた寸劇を見る子供のように、手を出さずただ見守るのみ――

＊＊＊＊

一方ギラティナは一人人間の状態でアルセウス達が幽閉されている場所にいた。

『ギラティナ・・・お前は一体何を考えている？』

幽閉されているアルセウスの言葉に、ギラティナが顔を上げる。

「決まってるじゃないか。ボクはアルセウス・パルキア・ディアルガの力を手中に収め、二つの世界の王になるのさ」

『テメェ・・・そんな理由で俺様達を売ったのか・・・』

パルキアの双眼に怒りの焔が再燃していく。

が全くギラティナは気にせず挑発的な笑みを浮かべる。

「そうさ。反転世界とこの空間を統べる絶対の王・・・エリカはボクがその力を貸すことと引き換えに三位一体の神を拘束することを約束した」

静かにギラティナは語る。

「パルキア。君が隠れていた支配領域への扉をこじ開けたのもボクさ。エリカの計画に乗って正解だったよ。だって全てはボクの思い通りに進んでいるからね」

欲望剥き出しの表情を見せるギラティナ。

遂に手に入るのだ。

三位一体の神の力が。

その時

ブルブルブル

ズボンのポケットで携帯電話がバイブする。

「エリカからか・・・」

白い画面にはある文書が記されていた。

『ギラティナ。私は今陸軍情報部の面々と交戦中よ。この研究所のミサイルが爆撃で破壊されたのは分かっていると思うけれど、キメ

ラ製造プラントの保管内にウィルスが保管されているわ。それを回収しておきなさい。それともう一つ。この近くに空軍基地があるわ。先の戦闘機もそこから出撃したようね。当然対空迎撃システムもあるはず。まずＢ－２を“安全”に発進できるように、危険要素は排除すべきではないかしら?私が言いたいことは分かるわよね。ギラティナ』

「なるほど。そういえばさっき爆発音がしたと思ったけど。なるほどねぇ」

そう呟き、にやりと笑う。

そしてアルセウス達のいる前でギラティナの姿が一瞬で消えたのだった。

・・・ところ変わってここはキメラポケモン製造プラントの保管室。

ギラティナは反転世界を通じ、一瞬でこの場所に移動したのだ。

「あ、これだ～♪」

ウィルス保管用の冷凍庫から試験管に入ったキメラウィルスを取り出すと、専用の回収装置に入れていく。

と同時にキメラの開発データをコンピューター上からコピーしメモリに保存する。

「やっぱりデータも保存しておかないとね。ボクって気が利くなぁ～」

そしてアタッシュケースに入れ、ギラティナは冷凍室の階段を下りある場所に向かう。

その場所とは・・・ミサイル発射場所のさらに地下。

そうステルス爆撃機『Ｂ－２』がある場所である。

機体の下に置かれている“空”の爆弾の後ろを開け、中に試験管ごとウィルスを入れ込んでいく。

このウィルスが仕込まれた爆弾こそ、キメラウィルス散布のための手段。

器用にギラティナはＢ－２に飛び乗り、扉を開ける。

そしてコックピット使い終わったアタッシュケースを置くとそのまま爆撃機を後にする。

「さてと人間の姿も飽きてきたし。空軍基地をつぶしに行くのも面白そうだしね～」

突如ギラティナの体が漆黒のオーラに包まれる。

子供の姿が暗黒に包まれ、少しずつ変化していく。

灰色の巨体に大きな翼。

金色の兜のような頭に怪しく光る双眼。

その目にはむき出しの欲望と野心が露わになっている。

反転世界の神、ギラティナがその真の姿を現したのだ。

「さてと、遊びに行こっと」

シャドーダイブを使い、姿を消すギラティナ。

反転世界を媒介に短時間で望む場所に移動し、攻撃を行う技【シャドーダイブ】。

それを使うと、ギラティナは反転世界を渡り空軍基地を目指すのだった。

第九十三話　決意

軍とエリカが激戦を繰り広げる中、ジュンは黙ってその戦いを見守っていた。

どうやら・・・エリカの圧倒的な力に押されているようだ。

それもそのはず、エリカはディアルガ・パルキア・アルセウスの力をその身に取り込んでいるのだ。

体半分吹き飛ばされたブラウン少将が謎の力によって完全再生を果たし、ユウタ達が喜んだのも束の間。

エリカを守る『空間断絶』の障壁により、銃弾もレーザーも悉く無力化されている。

『ジュン。どうやらこのままだと勝ち目はないな』

マリスの囁き。

確かにそうだね。

ユウタ達が銃を乱発してるけど、そもそもパルキアの空間操作で『届かない』わけだし。

でもファオさんのあの言葉。

あれが本当なら手はあるかもね・・・

僕は横に控えているボーマンダ・シャワーズ・グレイシア・アブソルそしてゼロに声をかける。

「そろそろ見物も飽きてきた。僕達も戦いに参加しようか」

『だが、どうするつもりだ？エリカはパルキアの空間支配能力を使えるんだぞ？』

アブソルの赤い目がエリカを捉える。

「そうだね。だけどエリカはまだ完全に神の力をコントロール出来ていない」

そうだ。

勝機はある。

ただそれは軍の人達だけでは不可能。

そうだ。

パルキアとのキメラである僕の力が必要だ。

『だが、ジュン。お前はパルキアの空間操作能力をボクという形で“昇華”してしまった。もう空間を支配することは出来ないんだぞ？』

・・・確かに。

僕の体を巣食っていた神の力は、僕の中の闇を融合し・・・第二人

格マリスとなった。

つまりパルキアの力を僕は使うことは出来ない。

例え神とのキメラであっても。

実行力は既にマリスという存在の形成に消費されてしまったのだから。

いや、だからこそ。

「マリス。君がエリカ攻略のキーパーソンだ」

『・・・・何？』

「君の中には力が内在している。僕から君が独立人格として分離したとき、君に流れたパルキアの力がね・・」

僕が何の考えも無しに軍に協力するとでも思ったかい、マリス。

僕には最初から勝算があったのさ。

勝てる可能性が無いのならこんな所まで来るはずがない。

今のエリカは神とのキメラになったばかりで非常に不安定だ。

そうアキラさん達を使ってまで時間稼ぎをする程に。

現にユウタ達の銃弾や少将のレーザー攻撃を『防いで』いる。

本当の神の力を手にしていたならば、『空間断絶』による障壁は常時展開されている状態のはず。

だがエリカは“意識して”障壁を使用している。

彼女にはまだ神の力を操作できていない・・・真の意味では。

つまり、時間が経過すればするほどエリカの体力は消耗する。

軍による攻撃も無駄じゃない。

勝利のための前座としては有効だ。

それになによりエリカの真の目的は世界にキメラウィルスをばら撒くこと。

この戦いで軍を打ち負かす事ではない。

いや、寧ろエリカは一刻も早くこの研究所から何らかの手段で脱出したいはずだ。キメラウィルスの散布手段を持って。

軍がエリカの真の脅威に気づき、本当にその刃が彼女に向く前に。

エリカ自身は軍によって倒されることは無いだろうが、彼女の本当の懸案事項はウィルス。

軍が本気で計画を阻止しようとすれば、世界にウィルスを撒くことなど不可能となるだろう。

ミサイルは現に破壊されているし。

他の手段も軍が嗅ぎ付けるだろうしね。

神の力を手にすることはエリカの最終目的ではなくあくまで通過点に過ぎない。

通過点より最終目的のほうが脆弱であることを一番知っているのはおそらくエリカ。

エリカは焦っている。

最終目的が成就してこその【プロジェクト・キメラ】

世界の人間をキメラ化して力の平均化することが出来なければ彼女の敗北なのだから。

ユウタ達、そしてシャワーズ達も皆エリカの計画阻止に必死だ。

僕は・・あくまで僕個人としては、【プロジェクト・キメラ】はなかなか興味深い発想だと思う。

人間全員をキメラ化して『力』を与える。ポケモンが所有していた野生の力を人間にも付加し、新たな人類の創生を目指す。

・・・面白い。世界は大きく揺れ動くに違いない。

なるほど社会は大混乱するだろう。

だが、長い目で見れば人間はその『力』に慣れる時がきっと来る。

人間の適応能力はそれこそ計り知れないものだ。

いつの日か、キメラとしての能力が当たり前となる日が必ず来るだろう。

その時、そうなった世界の歴史にはエリカは偉人として名が載っているのかもしれない。

いや、寧ろ僕は見てみたい。

キメラウィルスによって世界が大混乱に陥る様を。

人々は困惑するだろう。戸惑い、我先にと医療機関に殺到し、前代未聞の症状に恐れ戦くだろう！

その時の社会を思い浮かべるだけで・・興奮する。

安心と安定が崩され、信頼と信用を失い、何かから追われる小動物のような姿を見るのは絶頂すら覚える！

ポケモンと人間の境界線が薄くなり、世界はその均衡を崩すだろう・・・

そして、時が経てば人々はその時の衝撃を忘れ、キメラの力が新たなパワーバランスとなるに違いない。

それはエリカの言うように『新たな』均衡の始まり・・・新時代の夜明けなのかもしれないね。

正義も悪の定義も時代と共に移り変わる。

帝国主義が正義の時代もあった。

共産主義がもてはやされた時期もあった。

自ら死を選ぶ行為が称賛された時代さえあった。

人間やポケモンの『正義』『悪』の基準なんて移ろいやすい・・霞のようなモノ。

無論、僕の『悪』や『正義』の判断基準もね。

だからこそ

僕はある意味で目の前で神の力を駆使し、世界を変えようとする少女・・エリカに感謝している。

彼女の存在は『正義』や『悪』がいかに脆いものかを教えてくれる。

事実は常に事実であり、そこに善悪の概念を付加する行為はあくまで人間やポケモンによる行為であると。

僕の抱く他者への理不尽な憎悪や悪意さえも、相対化すればただの感情の働きでしかない。

感情の動きは『事実』であり、そこに何らかの価値判断が介入することで、『善悪』が生じる。

・・・僕はいつの頃か感情をどこかに捨ててきた。

悪意はあるけれど、悲しんだり、純粋に喜んだり出来なくなった。

何時からだろう。

でもそれらを再び手に入れようとは今は思わない。

どれだけのポケモンや人間がエリカの為に犠牲になったという事実さえ、僕の心を揺らすことが出来ない。

僕はどこか狂っているのだろうか

自分の欲望と目的しか見えていない狂人、エリカと一緒で

僕もどこかネジが外れているのだろうか・・・

・・・正義が嫌いだ。

・・・常識には吐き気を覚える。

「社会のため」「平和のため」なんて言葉は自分を正当化するための言い訳だ。浅い、どこまでも浅い言葉だ・・・。

僕はずっとずっと見てきた。

人間の汚い部分を。

なんで隠そうとするの？

なんで必死で覆い隠そうとするの？

人間が穢れた存在であることはただの事実なのに。

ただ、人間は自分の快楽を追い求める欲深い生物。それだけだ。

それは単なる事実なのに。

人間という動物の本質なのに。

何故皆それを否定したがるんだ?他人の不幸は嬉だろう?他人が失敗するのを見てほくそ笑んだことがあるだろう?

羨ましいと思っていた人間がヘマをやらかした時内心嬉々としていたのは誰だい?

自分に害を与える人間が制裁を受けて、一番喜んだのは誰だい?

相手を打ち負かした時に傲慢な優越感に浸ったのは一体誰だい?

そうだ。悦びだ。何にも勝る悦びだ!

痛み、苦しみ、憎しみ。

それこそ僕の生きる糧!それが僕のものでも、他者のものでも!

僕を、乾いた心を潤してくれる。

さて・・・

再びジュンはエリカに注意を向ける。

「シャワーズ、グレイシア、ボーマンダ、アブソル・・よく聞いて。今から僕の考案した作戦でエリカの空間断絶の壁を打ち破る」

『だが、ジュン。空間を閉ざされているんだぞ?俺達の攻撃はまず当たらないと思うが・・・』

アブソルの問いにジュンは笑顔で返す。

「大丈夫。・・・一点集中攻撃で、『空間断絶』のバリアに負荷をかける。攻略はおそらくこれしか無い」

『そうか・・さっきあの軍のバシャーモさんがバリアが揺れたとか言ってたね・・』

シャワーズがのんびりと言う。

この場、この時になっても慌てていないシャワーズはやはり大物なのだろう・・・。

『確かにそう言っていたわね』

「うん、つまりまだエリカの神の力はコントロールしきれていないんだ。恐らくはね」

まぁアルセウス・パルキア・ディアルガの力をその身に宿しているわけで、完全にコントロールできていたらそれこそ詰んでいただろうけれど。

しかしエリカには驚かされる。

神の力をあそこまで制御できているとは。

三体の神・・・

・・・待てよ。なら今神は何処にいる？

もしかしてまだこの研究所内に幽閉されているか・・

人間に捕まる『神』ねぇ。

今さらながら思うけれど、やっぱりただのポケモンだったか。

「シャワーズはハイドロポンプ。グレイシアは吹雪。ボーマンダは流星群。アブソルは辻斬り。ゼロはボディチェンジでエーフィからサイコキネシス！」

ジュンの指示と共に、ボーマンダ達が一斉に技を放つ。

狙うはエリカただ一人。

「・・・無駄よ」

が一斉攻撃も空しく、見えない障壁によりあらゆる攻撃が弾かれてしまう。

やっぱりこの程度じゃね・・

ジュンはチラリとユウタ達に目をやる。

彼らは必死だった。必死で銃撃をエリカに浴びせている。

ユウタのワルサーＰＰＫが火を噴き、薬莢が地面に落ちる金属音が耳を刺激する。

だが一方のエリカも攻撃に転じれないようで、ただただ黙って立っているだけだ。

もしかして・・・

「ユウタ・・」

「なんだ！」

かなり気が立っているようで睨みつけるような表情でこちらを振り向く。

「無駄に撃ちまくっても意味ないよ。もっと効率的に行かなきゃ」

「・・・何かいい考えがあるのか？」

さすがユウタだ。

僕の遠まわしな言い方にも、真意をつかみ取ってくれる。

「ああ、あるよ。でもそれには拳銃やアサルトライフルの火力じゃ足りない。もっと強力な重火器が必要だ。僕の考えはこうさ。エリカを守るパルキアの力・・・『空間断絶』による障壁は確実に外界

よりの干渉を受けている。だが、中途半端な攻撃じゃ突破できないのは明らかだ。そこでより強力な火力を用い、徹底的に『空間断絶』の障壁にダメージを与える。障壁のダメージが蓄積してきたら、僕のマリスとエリカの力をぶつけ、パルキアの力を無効化する」

「・・そうか。確かお前の中の『闇』は元をたどればパルキアの力が人格化したものだったな」

空になった弾倉を捨て、リロードしするユウタ。

（確かにジュンの言うとおりだ。どちらにせよ、今のままじゃこちらの弾丸が尽きた瞬間猛反撃を受けることは確実。・・・そうだ！ここには確かＵＳＡ２の武器庫があるはずだ・・！そいつを使えば・・）

「目には目を。歯に歯を。神には神を。だよ」

そういうと地図をポケットから取り出し確認する。

「ユウタ。この研究所から少し離れた場所に武器庫がある」

「・・よし、退却しながら武器庫まで向かおう」

ユウタは急いで少将の下に駆け寄り、ことをあらましを説明している。

少将はあれだけの光線を放っていながら、息一つ乱れてない。

一体あの小さい体のどこにそんな体力があるんだろうねぇ・・・

「いい考えだな。イプシロン中尉。確かにここにはＵＳＡ２の武器庫もある。重火器もあるだろう・・。各員に伝達！即刻この場より撤退！防衛線は崩すな！」

ユウタ達は銃でエリカの動きを封じつつ、少しずつだが後退していく。

ジュンは少将に近寄り、黙って地図を見せる。

「この場より、北東より４００ｍか。よし、直ぐに武器庫に向かおう」

「遊撃戦ですか？」

「・・・ああ。戦ってみて確信した。エリカには一転の場所で戦うより、遊撃戦に転じた方が有利だ。彼女の力がいかに強力でも、数ではこちらが圧倒的だからな」

ファオがＡＫ－４７で弾幕を張りつつ、ユウタに近づく。

「中尉！エリカを覆うバリアが少し揺らいでいます。突破は出来てませんが、確実にダメージは蓄積しているようです！」

マガジンを地面に投げ捨て、手際よくリロードするファオ。

「・・・後どれだけ残っている？」

「・・俺の持ってる弾倉は後２つです」

ユウタは、ニッと笑った。

「それだけあれば武器庫までは行けるだろう」

ＵＳＡ２隊員達の放つ弾丸はエリカの動きを止めている。

弾丸を武器庫に着くまで切らせてはならないのだ。

少しでも攻撃の手を緩めれば、エリカによる即死攻撃の猛攻が待っているのだから。

だが逆を言えば、エリカは攻撃を行っている時は防御を、防御を行っているときは攻撃を行えない。

攻撃と防御・・神の力は二つ同時に使用することはエリカには不可能。

その情報をこの短い時間に獲れただけでも大収穫と言える。

ブラウン少将率いる臨時に組んだ小隊は人数は学校のクラス程だ。

そのほとんどがこの島を警備してたＵＳＡ２隊員。

・・・島一つの警備にここまでの人数を割くとは、やはりこの島が人体実験による生物兵器開発の凶悪な違法研究をいる場所だからだろう。

とそこまで思案を巡らせていると、ブラウン少将が無線で何かを話しているのが聞こえてくる。

「ああ・・そうだ。人間とポケモンを用いた生体違法実験だ。惨い

ものだよ・・・陸軍の上層部の馬鹿どもは私が抑えている。主犯の科学者の手がすでに回っていたからな・・

ああ、そうだ、ロス。特殊部隊【デルタチーム】の投入を決定した。・・・これは師団長命令だ！・・では頼んだぞ」

「陸軍の対テロ特殊部隊ですか」

「・・・徹底的に叩かなければならんからな」

無線を切り、一息つくブラウン少将。

「相手は神の力を不完全ながら有しています。軍の装備で大丈夫ですか・・？」

「通常火器が有効なのは証明済みだ」

なるほど確かに。

足止め程度なら拳銃さえ有効だ。

火器を一点集中で使用すれば・・・あるいは。

「武器庫が見えてきたな・・」

ファオがＡＫ－４７の弾倉を抜き、最後のリロードを行う。

「こっちはもう弾が無い！予備を持ってないか！？」

ＵＳＡ２隊員達が大声で尋ねてくる。かなり焦っているようだ。

「すまん！こっちも予備はねぇんだ！」

大声て返すファオ。

「くそッ」と舌打ちをするＵＳＡ２隊員。

ユウタもワルサーＰＰＫの予備弾倉を装填する。

「一気に武器庫まで駆け上がれ。エリカが来る前に―」

刹那

巨大なエネルギー弾がユウタ達とジュンの行く手を阻む。

「弾丸は使い果たしてしまったようね」

「おっと俺のがまだのこってるぜ！」

ガガガガガ

ＡＫ－４７が火を噴く。

だが、エリカの周囲の『空間断絶』の障壁に阻まれる。

が、足止めにはなっているようだ・・・。

「中尉！俺が引き留めている内に早く、武器庫へ！」

ユウタは黙って頷くと、皆を連れて一気に武器庫まで走っていく。

が、ジュンとユウタ達が武器庫に入る数十メートル先でファオのアサルトライフルが弾切れとなった。

「まだまだぁ！」

胸ポケットからダガーナイフを取り出し、果敢にエリカへと走り出す。

ステンレス鋼の光が、日の光を浴び鋭く光る。

ファオの突き立てたナイフが【空間断絶】の障壁に食い込む。

が、まるで硬質のゴムに阻まれるかのような感触しか無い。

「おらぁ！！」

一気にブレイズキックを放つファオ。

元々炎・格闘タイプの彼はＣＱＣ（Ｃｌｏｓｅ　Ｑｕａｒｔｅｒｓ　Ｃｏｍｂａｔ）とポケモン技を絡めた体術が十八番なのだ。

だが、陸軍トップの格闘技術も障壁を崩すことは出来なかった。

焦りがファオを追いつめていく。

（くそ・・なんなんだよ、あれだけの攻撃を受けてまだ崩れねぇのか！？）

「・・・邪魔よ」

いきなり【空間断絶】を解除するエリカ。

ファオの拳が空振りする。

「なッ・・」

そして目の前には、掌にエネルギーを貯めている少女の姿が。

「亜空連弾」

「うごぉ！？」

がら空きになっていた腹部に【亜空連弾】が直撃する。

せり上がってくる胃液。

地面に叩きつけられ、激痛がファオを襲う。

「ぐぅ・・がぁ・・くそ、畜生・・ガキがぁ」

口に溜まった血を吐き出し、それでもなお闘志を燃やし続けるファオ。

「馬鹿ね。原種のポケモンごときが、私に勝てるはずがないのに」

冷たい双眼がファオを見下ろす。

そして青いエネルギー弾・・・【時の逆流】が手の中で不気味な光を放ち、煌めいている。

（まずい・・まずい・・・まずい！！このままここにいたら死ぬ！！）

体を動かそうとするが、エリカからヒシヒシと伝わる強大な力に圧倒されて金縛りにあったように動けない。

（これが・・神の力・・！！）

戦慄

今、ファオはその言葉の意味を知った。

軍の特殊部隊のエースとして場数を踏んできたファオだったが・・・ここまでの恐怖を感じたことは今だかつてなかった。

「消えなさい。時の彼方に」

【時の逆流】が今、青い光を纏い放たれる。

避けきれない攻撃・・ファオの背筋が迫る死に凍る。

だが、

『ふふふ・・・いいねぇその表情！』

少年の声と共にファオを黒き『闇』が包み込む。

『どうした、フレイム・スカイフォード曹長。恐れで声も出ないようだな』

どうやらジュンの『マリス』が、【時の逆流】の直前寸前にファオを守ったらしい。

恐怖に歪んだファオの表情を見て、マリスはうれしそうだ。

一瞬でも他人におびえた表情を見せてしまったことがファオには悔しいらしく、微妙な表情をしている。

戦士のプライドにとって他者に弱みを見られるのは恥なのだろう・・。

「・・守ってくれて・・ありがとよ」

『くっくっく・・今の直撃が当たっていたら間違いなく、死んでいたな?さ、ボクの守りが効いているうちにさっさと戻りな』

ファオは黙って立ち上がると、マリスに守られつつユウタ達が入った武器庫まで向かうのだった。

＊＊＊＊

風が、頬をかすめていく。

「・・ここは・・・」

アキラは一人、風の中にいた。

目を開け、あちこちが痛む体を動かし、状況を確認する。

青く澄み渡る空、そして下には白い毛が・・・

『ようやく起きたか。アキラ』

そして聞きなれた声。

自分の相棒の声だ・・・。

「・・・ルギア・・」

『迎えに来てやったわよ』

ふと横を見ると、同じく古くからの仲間のエアームドとフライゴンがルギアの横に並び飛んでいる。

「なんで自分らここに・・・俺はもう縁切ったはずやで・・」

『残念ながら、そうはいかないよ。アキラ』

フライゴンの言葉にルギアも背中に乗せたアキラに首を曲げ、顔を合わせる。

「・・俺は自分らを捨てたんや。エリカと自分らを評にかけてな。もう自分らと仲間でいる資格なんかないんや・・」

『はぁ・・ホンット人間て嫌になるぜ・・・』

その時ルギアの発した言葉に、アキラの顔が一瞬キョトンとなる。

「・・自分何言ってるんや・・」

『ルギア。あの小島なんかいいんじゃないかしら』

『ボクもそう思う』

『ああ、そうだな』

エアームドとフライゴンの言葉に、ルギアは静かに頷き海上研究所から少し離れた小島に着陸する。

「・・・さっきの続きを言うで。俺は自分らを捨てたんや。助けてくれたんは感謝する。でも俺はもう仲間でいるに値しない男なんや」

アキラはルギアから降りると、地面に座り込む。

『・・・さてと、まずは私からね』

エアームドがツカツカとアキラに近づいてくる。

打ちひしがれた表情で座り込み、俯くアキラにエアームドが鋼の翼を肩に置く。

『アキラ。顔を上げて』

「慰めても無駄やで。どんなことしたって俺は――」

言葉は続かなかった。

何故なら、エアームドの鋼の翼がアキラの頬に振り下ろされ、その

体を優に２ｍは吹っ飛ばしていたから。

「が・・はっ」

樹に体を叩きつけられ、衝撃で目の前の光景が歪む。

「な・・何すんねん！」

『さてと、次はボクの番だね』

フライゴンがゆっくりと動けないアキラの下に歩いてくる。

アキラは悟った。

いつもは温厚なフライゴンが、のんびり屋のフライゴンが

本気で怒っていると。

（は・・はは・・。俺とんでもない馬鹿やったようやな・・あかん、殺される・・）

チャンピオンとして、そしてバトルフロンティアのフロンティアブレーンとして活躍してきたアキラ。

手持ちポケモンの実力も、そしてその感情による能力上昇幅も知りつくていていた。

だからこそ

いざその怒りが自分に向けられた時、アキラは今までに感じたこと

がない恐怖と、そして後悔を噛みしめていた。
自分は怒りを買ったのだ。
目的が何であれ、古くからの仲間達を一方的に切り捨てた、その報いを。
『さて、覚悟はいい？アキラ』
「ちょ・・待て。フライゴン・・自分まさか本気で俺を・・」
『本気だよ。今ボクは本気で君に怒っているんだ・・・ドラゴンスマッシュ』
腹筋に力を入れるのさえ、間に合わなかった。
フライゴンの拳が、アキラの無防備な腹部にのめり込む。
「が・・はぁ・・」
せり上がる胃液。その場に崩れ落ちるアキラ。顔には激痛の苦悶が刻まれ、体がピクピクと痙攣している。
「く・・やるやんけ・・容赦ない拳、さすが俺のポケモンや・・・」
だがその顔には同時に不敵な笑みも・・どこか懐かしむような笑みを浮かべていた。
『最後は俺だな。アキラ』

「ぐぅぅ・・ルギア。・・・・ええで。一発重たいのを来いや。俺の行為で自分らを傷つけてしまった。謝って許されることちゃうもんな・・」

『俺のは強烈だぞ』

「・・・デカいのを頼むわ」

『・・それでこそ俺のマスターだ』

そしてルギアはスッとアキラに近づき・・・

その大きな翼で、優しくアキラの体を抱きしめる。

海神と呼ばれし巨体は、一人の青年を包み込み、その目には薄らと涙が浮かんでいる。

『これが俺の、お前への罰だ・・・』

一番、心の響いた。

「ああ・・そうやな・・デカい一撃やわ・・ホント・・・」

今までために貯めていた感情が、一気に胸の奥からせり上がってくる。

若干１０歳でチャンピオンに上り詰め、１２歳の時にはフロンティアブレーンとして活躍していた。

天才トレーナーと謳われたアキラだが、それもこれも皆相棒達のお

陰・・・

いつも一緒にいた・・・

大事な、大事な相棒達。

だが同時にアキラにとってエリカも掛け替えのない存在だった。

だからこそ、彼はどちらかを捨てることなどできなかった・・・

ルギア達を、逃がしたのは彼らを傷つけないため。

エリカの計画に、無関係な彼らポケモンを撒きこまないようにとのアキラの最大限の配慮だった。

それがどれだけ彼らの心を傷つけるか、アキラも痛いほど・・分かっていたのに。

ずっとずっと心を巣食っていた罪悪感が、ここにきて溢れ出し始める。

「ルギア・・フレイゴン・・エアームド・・俺・・俺・・・」

色黒の頬を涙が伝う。

『今は何も言わなくていい・・』

ルギア達との縁を切って初めて知った。

これほどまでにポケモン達と離れるのは辛いものなのかと。

だが自分の選んだ道・・そう思い、ずっと耐えてきた。

エリカのためにすべてを捧げ、エリカのためにどんなことでもして来た。

そんな身勝手な自分に苦しむ権利など無いのだ。

そう思ってきた。

【スキエンティア】の幹部として、実験内容には全く関与していなかったとはいえ、働いてきたのは事実。

そうだ・・俺は身勝手やった。

ただひたすらエリカに振り向いて欲しかった。

でも・・ただ愛を勝ち取るためにすべてを投げ捨て、仲間を傷つけてきたが・・。

結局エリカには振り向いてもらえず、全てを失っただけだった。

そしてこの結果こそ、自分にふさわしいのだろうと・・報いなのだろうと・・

そう思っていた。

だが。

仲間達は戻ってきてくれた。自分の身勝手な理由で捨てられ、傷つ

けられたというのに・・・。

今、目の前で昔と違わぬ愛情を自分に注いでくれている・・・。

『苦しいときは支えてやる。悲しいときは慰めてやる。そうやって俺達は一緒に生きてきた・・・アキラ、約束だ。もう二度と俺達と離れないでくれ』

「俺は・・エリカのために働いてきた・・あいつに振り向いて欲しくて・・化け物にまでなった。俺はもう戻れへん・・そう思ってたんや・・」

『戻れるよ。いつでも・・ここにボク達がいる限り』

フライゴンがゆったりと笑む。

『そうよ。私達は家族よ。最後の最後まで見捨てない・・決まってるでしょ』

エアームドの言葉・・・家族。

家族・・そうやったなぁ

ルギアと出会ったのは確か8歳のころやった・・海難事故にあって溺れかけとった俺を助けてくれたんや。

10歳のトレーナーデビューの時、初めての手持ちポケモンはルギアって奴なかなか無いんとちゃうか・・

そして11歳のころは森で行き倒れとったフライゴンを助けたんや・

・。

エアームドとはバトルを通して認め合った仲・・

皆・・俺の人生の軌道・・・大切な宝なんや・・・

俺の・・人生そのもの・・。

アキラはゆっくりと立ち上がる。

気が付いた・・自分は逃げていたと。

エリカの事が好きで・・好きで堪らなかった。

だが、もう“過去”の彼女はいない・・・

あの日・・チャンピオンリーグで、新たなチャンピオンの称号を勝ち取った時、特別ＶＩＰ席にいたエリカを偶然見かけた。

エリカにとってはアキラは見知らぬ存在だっただろう。

だが、アキラには違った。

エリカは知らないが、アキラとエリカは同じポケモンスクールの同級生。

そしてアキラはずっと前からエリカに惚れていたのだ。

薄らとしたナチュラルウェーブのかかった薄茶の髪。陶磁器のような肌。聡明な眼。

しかし、アキラは気おくれから告白せずにずっと悶々としていた。
転機はチャンピオンリーグで、新生チャンピオンとなった時であった。

表彰式の後話してみると、アキラの相乗以上にその少女が聡明で知識に富んだ存在であることをすぐに気が付いた。

だが、いつのころからか・・・エリカは変わった。徐々に変わり始めていった

会った後の彼女の面影は微塵もなく、才能は鬼才へと、優しさは狂気へと変貌していた。

認めたくなかったのだ・・。

自分の愛する女性が、狂気に満ちた存在へと変わり果ててしまった事実を。

怖かった。

ただ、エリカを失うのが・・・。

だから、アキラはエリカへの愛と、そしてそれを失うことへの恐怖からすべてを投げ捨て闇の道へと進んでいった。

まるで現実から逃げるように。

「もう・・俺は逃げへん。逃げたらしまいや・・・」

だが、全てを失った今こそ決着をつける時だ。

戻ってきた仲間と共に。

「俺は自分の行為に対する責任を少しでも取らんといかん・・・俺の義務・・俺はエリカを止めるんや・・絶対に！」

固い決意と共にアキラはルギアの背中に乗る。

再び向かうは・・【スキエンティア】会場研究所――

第九十四話　渦巻く思惑

「やはり世界に名だたる多国籍軍ＵＳＡ２。こんな辺境の警備にもここまでの武器をそろえているとは」

なるほど武器庫の中には、いかにも重火器ですといった風貌の兵器が整然と並ばれれていた。

ＲＰＧ－７が山積みにされており、ファオがそのうちの一つを手に取る。

「携帯対戦車擲弾発射器・・・ＲＰＧ－７か。この火力があればいけるぜ」

肩撃ち式の兵器か。

紛争地域には必ず登場するどっかの共産主義国家が開発した武器ね・・これなら押し切れるんじゃないかな。

「撃ち切りで１０発か。よし、ファオ曹長、そしてそうだな・・君と、君・・それとそっちの・・そうだ、君だ」

ブラウン少将はファオと若いＵＳＡ２隊員を並ばせる。

「諸君らは馬力がありそうだ。第一陣としてエリカを攻撃しろ」

「イプシロン中尉他は、第一陣が攻撃している間に弾薬の補給を行い。第一陣の攻撃後直ちに一斉射撃だ！」

一斉に敬礼をすると、ファオさん達が武器庫の扉を上げＲＰＧ－７を構える。

「撃て！」

号令と共に、爆音が鳴り響く。

放たれた弾頭は、エリカに向かって一直線に向かっていった。

轟音と共にジュン達の所まで熱風が吹き荒れる。

特に氷タイプのグレイシアにはつらいようで、ボーマンダがそっと翼で彼女を守っている。

「やったか・・・」

ファオが少しの期待を込めて、爆心地に目をやる。

が、その時

青いエネルギー弾【時の逆流】が飛んでくる。

「く・・」

何とか避けるファオさん達。

僕はポケットから携帯電話を取り出す。

さっさと連絡を取っておこう。いざという時のためにね。

飛んできた【時の逆流】を身を反らし、避けつつジュンは携帯電話を操作した。

軍の救援の到達には時間がかかるだろう。

もしかしたら来ない・・来れないかもしれないし。

こっちの協力者も読んでおかないとね。

このままエリカが軍の応援がこの海上研究所に来るのを、甘んじて受け入れるとは思えない。

何か手を打っているはずだ。

ウィルスをばら撒くまで、軍を足止めする有効な手段を。

＊＊＊＊

【スキエンティア】海上研究所より数十キロ離れた空軍施設。

そこにはブラウン少将により招集された陸軍特殊部隊が集結していた。

空軍の保有する2機の輸送機Ｃ－１７の横に、制服を着こんだ隊員達が並んでいる。

「陸軍特殊部隊【デルタチーム】の諸君。よく集まってくれた」

整然と並んだ隊員達の前を、この空軍基地の司令官と思しき人物が歩く。

「これより、兵員輸送作戦を開始する。目的地は孤島の研究所だ。敵は数々の特殊な力を使いこなす存在だ。心してかかりたまえ」

ザッ

一斉の敬礼と共に、Ｃ－１７　に続々と隊員達が乗り込んでいく。

既に輸送機内には重火器が詰まれており、もう一機のＣ－１７にはＰｚＨ２０００自走榴弾砲が積まれている。

まさに空の空母だ。

Ｃ－１７二機が、飛行場から動き出そうとしたまさにその時。

空軍基地の周辺で大爆発が起こった。

「な・・なんだ!?」

驚いた隊員達は、輸送機の窓から外に広がっていた驚くべき光景を目にしたのだった。

弾薬庫で爆発が起こった。

空軍基地の司令塔が、光線を受け崩れ落ちる。

戦闘機や輸送機の格納庫が、ポケモンの技らしき謎のエネルギー弾の直撃を受け倒壊し、爆発した。

空の防衛線として、守護の役目を担ってきた強固なる基地がみるみる間に破壊されていく。

――壊滅に追い込まれた基地、そこには黒い影が映っている。

空を見上げると、上空には、見たことも無いポケモンが浮かんでいた。

「あれは・・反転世界の神・・・ギラティナ・・」

一人の隊員が、思わず口にした言葉に周囲が騒然とする。

『やっほ～。驚かせてごめんねぇ』

オリジンフォルムに変化しているギラティナが、その外見からは想像もつかないような子供っぽい声色で喋りかけてくる。

無論、隊員達の心に直接言葉を投げかけるテレパシー能力の類である。

『ボクね、この空軍基地をめちゃくちゃにするために来たんだ♪』

「馬鹿な・・・レーダーに引っかからずに、どうやって空軍基地まで・・」

『ん?そんなの簡単だよ。この空間と反転世界の空間を交互につなげば、行きたいところに行けるんだよ～ほら、こんなふうにね』

ギラティナ固有の技、シャドーダイブが発動し、その巨体が上空から消える。

そして・・・

ズゥゥン

隣のＰｚＨ２０００自走榴弾砲が積み込まれたＣ－１７が、その巨体に踏み潰されたのを、次の瞬間隊員達は目にしたのだった。

まるで紙飛行機が潰れたかのように変形し、炎上する機体。

自分の足の下の、スクラップを見てギラティナは無邪気な笑い声を立てた。

まるで、子供が作られたプラモデルを潰して遊んでいるように。

「装甲車を積んだ輸送機を踏み潰しただと・・信じられない」

「ギラティナよ、お前はなぜ我々を攻撃するんだ！？」

否定の言葉を並べ首を横に振る隊員。

その隣に座っていた、隊長と思しき男が声を荒げる。

『なんでって。そこに玩具があるからに決まってるじゃないか』

ギラティナの双眼が怪しく光る。

Ｃ－１７が滑走路を飛び出そうとエンジンを点火する。

パイロットはここで逃げても、ギラティナに殺されると直感したのだろう。

ここで、機体から出て全滅に追い込まれた基地に戻ったとして結局はギラティナに潰されるだけだ、と悟り、空へ飛び立つ選択をしたのだ。

舞い上がるＣ－１７。

だが・・

『玩具が小賢しいんだよ』

シャドーダイブを使い、ギラティナがＣ－１７に急接近。

そしてそのまま尻尾を機体に直撃させた。

大きく揺れた機体は、そのまま成す術なく燃え盛る空軍基地に激突し大炎上を起こしたのだった。

『・・・さてとこいつらで遊ぶのはもう飽きた。さっさと戻ってエリカの戦況を見守ろうかな♪』

鼻歌を歌いながら、ギラティナは空間に穴をあけ、そこに飛び込んだ。

反転世界を中継させ、破壊の限りを尽くしたギラティナは今、【スキエンティア】海上研究所へと向かったのだった。

＊＊

「大変だ！」

＊＊

バタバタと大きな屋敷の廊下を、一人の少年が走る。

「どうしたんすか？」

木製の扉を開け放ち、肩で息をするリーフに、部屋の中で寛いでいたアルが疑問の色を示す。

紅茶を飲み、優雅に時を過ごしていたアルに、些かの苛立を覚えつつ携帯を見せる。

「これは・・・」

「そうだ。ジュンからの緊急連絡だ！」

そこには、軍とエリカの交戦の写真、そして今ジュンがいる場所への大まかな地図が貼り付けられていた。

「ジュン達がついに戦闘に突入したんだ。それに地図も添付されてる。明らかに救援の要請だぜ！」

直ぐに支度だ、と慌てるリーフに、アルが少し宥める。

「そんな慌てたって良いことないっすよ。準備は確実に、これが一番す」

「でも、ジュンが―」

「まあまあ。落ち着くっす。今苛立っても現場に駆けつける時間が短くなるわけじゃないっすよ」

「・・・そうだな」

少し冷静さを取り戻したリーフはふうと大きな息をつく。

その後アルと共にリーフは二階の寝室に向かう。

リーフとアルの荷物を纏めて閉まってあるのだ。

もしジュンに何かあったら、という気の焦りを隠せないリーフとは対照的に妙に冷静なアル。

・・・こんな時こそ、コイツの性格からして慌てふためきそうなのに・・・

意外だな。

そう思いつつ、部屋に足を踏み入れる。

ベッドの脇に置いてある鞄にアルが手を伸ばす。

この部屋はリーフの寝室だ。

大きな部屋だと言う理由で居候のアルの持ってきた荷物を置いているのだ。

そして、鞄から金属のある物体を取り出したのがリーフの視界に入る。

「おい、それって・・・」

取り出したのは、機関銃と呼ばれる部類のもの。
短機関銃Ｈ＆ａｍｐ;Ｋ　ＭＰ５だ。

「後は、これっすね」

鞄から円筒状の筒を数本取り出す。

・・・軍用のプラスチック爆弾だ。

「それと、接近戦に備えてナイフと・・・侵入用のダイヤモンドカッターとロープも持っていくッす」

リーフは立ちすくんでいた。

テロ組織に入っていたとはいえ、こいつは気の弱いヘタレな青年だったはずだ・・・。

そう思っていた。

今の今まで。

だが、こいつは・・。

「お前、いったい何者だよ!」

思わず叫んでしまうリーフ。

「・・・非常時っすからね。特別っすよ。本当は教えちゃダメなんすけど。嘘つくのにも時間が無いっすから」

服を脱ぎ、鞄から映画の様なタイトなスーツを取り出す。

「俺はとある国の特務機関の情報部員っす。【赤い満月】にいたのは、この国で諜報活動とテロ工作を行うためっす・・・ま、この国の情報機関にとっ捕まった時はさすがにヒヤヒヤしたっすけどね」

ショルダーホルスターを装着し、そこに拳銃グロック17を挿入する。

「国家テロリストってことか・・！」

静かに頷くアル。

「そうっす。【赤い満月】とUSA2の関係を探る。それが俺の任務っす。俺の国はUSA2の事をかなり疎んでいるんすよ。元々会った軍事産業は全てUSA2の傘下にさせられて、あの組織のせいで弱体化下っすから」

憎々しげに語るアル。

驚きで声が出ないリーフに、アルは手際よく準備を進めながら続ける。

「俺の国は前々からUSA2がテロリスト達と組んで自作自演の戦いをしてることに、薄々気が付いていたッす。そこで俺は工作員として、【赤い満月】への潜入を命じられたってわけっす」

パチン

鞄を閉じ、完全装備したアルが扉に向かって歩き出す。

「ＵＳＡ２が【赤い満月】と密着していた決定的な証拠が入手できれば、ＵＳＡ２は終わりっす。・・・本来ならば、テロ活動を内部の俺が行ってＵＳＡ２にでっち上げの罪をなすりつけるってのも計画の一つだったんすけどね」

その必要もなくなったっすと言って、アルは扉を開け廊下を歩く。

慌ててその後を追う。

「その必要が無くなったって・・いったいどういう・・」

「【トワイライト作戦】は俺にとても有効だったってことっす。作戦に乗じて、ＵＳＡ２基地の内部に探りを入れれたんすから。ＵＳＡ２総司令官ハワード大将とは接触するのさえ大変だったっすけど、他の軍のバックアップはさすがに利用し甲斐があったッす」

外にはすでに、リーフの親の会社のヘリが鎮座していた。

リーフの呼びかけに、素早く駆けつけたのだ。

大企業【フォレスト・エンタープライズ】のロゴマークＦＥの文字がその機体に刻まれている。

「さっすが大企業の御曹司っすね。ヘリの用意もお手の物っすか」

「・・・お前は何のために来るんだ?ジュンが心配ってことじゃなさそうだな」

「失礼っすね。無論ジュン君のためっすよ。まぁ、今から行く場所はＵＳＡ２が“非道な”人体実験に関与していた他ならぬ証拠の宝庫っす。ＵＳＡ２の暗部の決定的な情報の入手。俺の任務の最優先事項っすから」

まぁどうも“ただの”人体実験施設じゃなさそうっすけどねぇ

キメラポケモンの研究開発・・・

ポケモンと人間を生体実験に使用している段階で世界各国の法律に違法しまくりっす。

でも、その危険性を犯してまでＵＳＡ２が巨費をその研究に投じているとすれば・・・まさに金の生る樹ってわけっすか。

ともかく、この目で確かめる必要がありそうっすね。

・・・着いたら本部に指令を仰いで、判断下してもらわないといけないっすねぇ・・。

安全保障上の大問題に加えて利潤を無尽蔵に生み出すキメラ技術・・。

どこまで利用価値がありそうか、情報の入手も必須っすね。

＊＊＊＊

けたたましいローターの回転音の元、リーフとアルは後部座席に黙って座っている。

アルは手持ちポケモンであろうニューラを出して、その頭を撫でつつ外を見ている。

「一つ聞いていいか？」

「何っすか？」

窓の外を見つめたままのアルに思い切って尋ねてみる。

「何故正体を明かした。黙っていてもよかったはずだ」

「ん。ああ、そのことっすか。君達には後々正体を明かすつもりだったっす。諜報活動の場としては、【赤い満月】より格段に環境がいいっすし、それに・・」

言葉を切って、リーフと向き直るアル。

「ジュン君は既に俺の事を調べているはずっす。俺の正体を知ったうえで、仲間として迎えたんす。彼の犯罪に、俺の存在がプラスになると考えている証拠っす」

黙っているリーフに、アルは続ける。

「ジュン君は非常に優秀な犯罪者であると同時に、広い情報網を持ってるっす。彼の仲間として行動していれば、自ずと機密情報が手にはいるっす。そして彼も俺も世間的には後ろ暗い存在っす。利害の一致ってやつっすよ」

アルは国家工作員だ。

指令を受ければ犯罪さえ厭わない。

そして深く幅広いネットワークを持つジュンといれば、今後の諜報活動はより迅速に行えるだろう。

加えてアルはジュンの犯罪の力も借りうけることができる。

見逃すはずはないのだ。

こんなスパイ、破壊工作に適した環境を。

「ニュラ・・」

その時、ニューラが少し窓に目を向ける。

「どうしたんす?」

「ニュラ!」

ニューラが赤く光る。特殊技、“みやぶる”を使ったのだ。

その瞬間、ヘリから見える周囲の光景が歪みだす。

「これは・・・空間に歪みが生じているッす」

鞄から小型の解析装置を取り出して、驚いたように操作を続ける。

「この現象・・俺の国でも確認されているッす・・・。空間操作・・パルキア、あるいはギラティナによる空間同士を繋いだ時に発生す

る副作用・・」

どうやらネットとも連動しているようで、素早く解析装置を通し調べていく。

その時。

影が、海面に差し込んだ。

リーフ達の横を、影が通り過ぎた。

「な・・今のは・・ポケモン？」

「そのようっすね・・」

姿が見えたわけではない。

まるで透明なトンネルの中を移動していたような、目視もほとんどできなかった。

だが確かにそこにいた。

「あのポケモンの影響っすね。恐らくは」

その影が消えたのと同時に、風景の歪みも消滅する。

アル達は知らない。

今の影の正体こそ、ギラティナであるということを。

破壊の限りを尽くした反転世界の神の姿であったということを――

第九十五話　苦心の一手

「馬鹿な・・・」

【スキエンティア】海上研究所の敷地内の武器庫で、ブラウン少将はたった今衝撃的な知らせを受け取っていた。

防戦一方のこの戦況を打開すべくロス大佐を通して、特殊部隊【デルタチーム】の投入を決定したのだった。

しかし、今し方報告された内容は驚愕の事実だった。

【デルタチーム】が、輸送機ごと全滅したというのだ。

それだけではない。

その輸送機を保有していた空軍基地も壊滅に追い込まれ、未曽有の事態となっていると。

そしてその事態を引き起こした張本人は、反転世界の神ギラティナであると、震える声で報告されたのだった。

「この時期にギラティナが基地を攻撃した・・・。よりにもよってこの時期に・・・。まさかエリカが手を打っていたというのか・・・」

「驚くようなことではないですよ」

ジュンの一言に、ブラウン少将がゆっくりと目を瞑る。

「そうだな。想定されるべき事態の一つに過ぎん。だが、応援が来れないとなると我々も長くは持たんぞ」

そう・・。

神の力に対抗できるだけの戦力はここにはない。

だが、ミュウ達が集まってくれればあるいは・・・

＊＊＊＊

「おい、あれ・・！」

孤島が見えてきた。

周囲全てが海で囲まれ、孤島には白い研究施設らしきものが建っている。

だが、そこから見えるのは黒い煙と破壊された施設の残骸。

「もう戦闘が始まってるんだ」

「そのようっすね」

さっさと鞄を背負うアル。

パラシュートが入っているバッグだ。

「予想以上に激戦区っすね。リーフ。君は来ない方が―」

「俺も行く！連れて行け！」

予想外の気迫に、アルはしばし呆然としていたが、少し真顔になってバッグを投げ渡す。

「死んでも責任取れないっすからね」

「・・・アイツより先に死ぬもんか」

ふぅん。これが友情って奴っすか。

しかしリーフ君がここまでジュン君のために動くとは・・・・友情通り越して愛さえ感じるっすね。

十代の友情は深くなればとことんっすねぇ・・・。

「おい、なんだよ。にやにやしがやって」

「いやいや、何でもないっすよ」

そういうと、ポンとリーフの頭に手を置くアル。

こういう可愛げのある子供は嫌いじゃないっす。

「覚悟は出来てるっすか？」

「勿論だ」

しばし目を覗き込むアル。

そして、リーフの髪の毛をくしゃっと掴む。

「・・・行くっすよ」

「・・ああ」

ヘリから今、二人の人間の影が飛び出した。

＊＊＊

俺は武器庫の扉に貼りつき、撃ち切ったＲＰＧ－７を床に捨てる。

ヘリも撃ち落とせる火器なんだがな・・・。

煙が晴れた先には、虫を見る様な目で立っている少女が目に入る。

白衣にさえ、まったくダメージが入っていない。

反則だろ。

じわじわと足から恐怖がせり上がってくる。

やべぇよな・・勝てるのかよ、あんな化け物に。

ハリウッドの映画とかで軍隊がモンスター相手にボコボコにされるシーンをよく見るけどよぉ・・・まさに今この状況がそれだよな。

青いエネルギー弾が、武器庫に放たれる。

「あぶねっ」

俺は咄嗟にぼさっとしてた若いＵＳＡ２団員の頭を引っ掴み、地面に叩きつけた。

頭上に穴が開き、そのまま武器庫を貫通する。

今の俺の判断がなきゃ、やばかったな。

「ぼさっとするなよ。相手は化け物なんだ。重火器も通じねえモンスターなんだよ。そこんとこもっと自覚しろ！」

若干声を荒げてしまう。

「は・・はい」

あ、今気が付いた。

そうか・・・こいつ恐怖に凍りついてたのか。

通りでぼさっとしてたはずだ。

ふと目を下にやるとそいつの足元のコンクリートの床に染みが出来ているのが分かる。

・・・仕方ねぇよな。

俺は外を警戒しながら、震える背中に手を置く。

「いいか。恐怖を感じるなとは言わねえ。だが、ただ、生き残れ。死んだら元も子もないんだからよ」

「はい・・・」

ポンッと背中を叩くと、俺は外に目をやる。

エリカは掌を見つめ、まったく戦闘中とは思えない。

しかし、これだけ撃って全くダメージを与えられないとは・・・・。

生唾を飲み込む。

これまで戦ってきたどの敵よりも異質だ。

ブラウン少将も硬い表情で戦況を見据えてるし・・・。

一個師団出しても足りねえんじゃないか。

だいたいこんな戦力で勝てるとは到底思えない。軍がミサイルぶっ放しても傷を負わせることができるかどうかって感じだな。

ため息が漏れ出る。

恐怖よりもどこか、諦めの心が芽生えていた。

何せ相手は神の力を有している。

無理だ。

「でもよぉ・・やるしかねえよなぁ。俺、愛する男の前では無様な姿は見せたくねぇし」

ファオはアサルトライフルの空になった弾倉を抜き取ると、手際よくリロードしたのだった。

＊

＊＊＊

戦況はよろしくないようだね。

ファオさん達が武器庫から全力で機関銃やら肩撃ち式ロケットやらで攻撃してるから、エリカを足止めできてはいるけど・・・。

いつまで持つか。

「ブラウン少将。ここを崩されるのも時間の問題ですよ。どうするつもりです？」

ジュンの質問に、少将は相変わらず硬い表情を保ったままだ。

「軍の応援を前提に作戦を考えていたのが裏目に出たな・・・」

まさか、先に手を打たれるとは！

焦りを隠しきれないブラウン少将。

エリカの驚異的な力、３つの『神』に対抗するには軍の応援部隊があっても足りないというのに・・・。

陸軍に要請をするか・・・

いや、空軍を経由しなければ時間がかかり過ぎる。
現に私達も空軍の協力の元、ここまで来たのだ。

「ブラウン少将。僕達が危機的な状況であるのと同じで、彼女も追いつめられています」

僕は武器庫の壁に寄りかかる。

「彼女の目的は世界中にウィルスを撒くこと。しかしミサイルが破壊された今、彼女はバックアップの手段でそれを実行しようとしている。しかしですね
エリカも人間です。バックアップの手段は、どうしても本来の手段よりどこか脆いものになりがちです。彼女は、軍の矛先が完全に自分に向く前に行動を起こしたいはず」

「成程な・・だが、それならばなおさら私たちをここで潰そうとするだろう」

「ここで僕達が耐える意味もそこにあります。エリカは予想外の抵抗にあった場合、強引にでも計画の実行を優先するでしょう」

と、僕がそこまで言った時。

武器庫の屋根が吹っ飛んだ。

と同時に武器庫の壁が崩壊していく。

その時の光景は、なかなかショッキングなものだった。

崩れゆく壁と共に、その外の様子が露わになる。

エリカの様子はたった一点を除けば、変わらなかった。

そう、薄いヴェールのような翼がその背中から生えているただ一点を除けば。

真珠色の翼。

絶えず流動し、美しいマーブルを作り出している。

「神の力が目覚めてきている・・・ああやってだんだん人間離れしていくのかな」

『怖いよ・・』

シャワーズが震える。

ボーマンダ達も何か抗えない力に怯えているようだ。

無理もない。

だって目の前にいるのは人間と神の境界線にいる存在なんだからね。

感度の高いポケモンだと、その圧力を肌で感じるんだろう・・・。

その時、赤い毛皮の生えた腕が僕の肩に回される。

「何してるんですか?ファオさん」

「いやぁ・・・ちょい緊張してな」

ナデナデと僕の背中を摩る。

体温高いね、ファオさん。バシャーモだからかな。

「ん、気力充填」

「ついでに盾になってくれると有難いですね」

「それは勘弁だ。俺だって命は惜しい」

首をふるふると振ると、アサルトライフルをリロードする。

僕は何気なく腕時計を見た。

「そろそろついていてもおかしくないけれど」

タタタタタ

機関銃が火を噴き、エリカを襲う。

だがしかし軽快な銃声も今は空しいだけだ。

「やっぱ無理か」

「流石神の力を取り込んだだけあるな」

ユウタも拳銃を片手に外を覗き込む。

本来ならば・・・3つの神は僕が欲しかったんだけれど。

携帯電話の地図の映像をチラリとみる。

神が幽閉されている部屋・・・巨体のサイズから考えてこの一室しかないだろう。

神に対抗するには神しかいない。

でもねぇ・・・軍の人達が戦ってる隙にこっそり回収して置きたかったんだよね。

だけど、エリカの力が予想以上に強いし、空軍が壊滅したし。

背に腹は変えられないか。このままだと僕も巻き添えだ。

「勝機はありますよ」

「何？」

僕の一言にブラウン少将が素早く反応する。

「何か・・策があるのか？」

「エリカはこの研究所に恐らく神を幽閉しています。かなり弱っているでしょうが、アルセウス達を仲間につければ即戦力となるはずです。どこにいるかも見当がついています」

そういって僕は携帯電話の画面を見せる。

「アルセウスとパルキアのサイズからして神を幽閉するにはこの第二館の地下のこの一室しかありえません。ここに必ずいるはずです」

「何故・・・」

静かに震えるブラウン少将。

怒りを抑えているようだ。

「何故それを先に言わない！」

「何故って。神の事は貴方達軍に知らせないで、後で回収しようと思っていたからですよ」

正直に言うと、ブラウン少将が飛びかからんばかりの怒気を発して怒鳴る。

「君は分かっているのか！？我々は今同じ戦場にいるのだ！情報の共有をせずに戦局を有利運ぶことができると思っているのかね！？個人的利益で情報を遮断するなど言語道断だ！」

「少なくとも僕はここに商売として来ています。しかし情報の開示を故意に遅らせたことは素直に謝っておきますよ」

そういうと怒りのオーラを放つブラウン少将に背を向け、エリカの様子を影から除く。

歩みを止めている・・・？

「エリカの様子がおかしい・・・」

ずっと立ち止まったままだ。いや、誰かに喋りかけているのか・・・。

誰も居ないのに。

まさか、幻覚でも見ているのか・・・。

「エリカの状態が不安定ですね」

その一言に、ブラウン少将の溜飲も下がったらしく、外を見る。

「そのようだな。今が好機かもしれん・・・彼女がまだ完全に力を御しきれていないこの時が。ファオ曹長。イクス准尉。技を放って彼女の視界を奪うことは出来るか？」

「勿論です！」

「お任せください！」

「よし・・彼女を今の戦力で倒すことは不可能だ。視界を奪い行動を制限することのみを第一目的とする。いいな！」

「よっしゃ、ポケモンとしての技見せてやるぜ！」

両手に炎タイプの補助技鬼火を作り出すと、イクスとアイコンタクトを取る。

「久しぶりだな、サーシャとタッグを組むのは」

「そうね・・ポケモンスクール以来かしら。行くわよ、フレイム。準備はいい？」

「もちだ！」

ファオが大量の鬼火を放ち、イクスがサイコキネシスでそれを包み込んでいく。

サイコキネシスに圧縮された火の玉が、エリカに向かって放たれる。

＊＊＊＊

先ほどから幻覚、幻聴が酷い。

薬品による防御を超えて神の力が精神を汚染し始めているのだ。

幸い肉体的な汚染は無いが、いつ蝕まれるかも分からない。

「これが神の力による汚染現象・・・なるほど興味深い現象ね」

自らの体も、その命さえも実験のために使い捨てることが出来る。

エリカが人間やポケモンの多大なる犠牲を出して、ここまでの事をしているのに悪意は介在していない。

復讐や破壊のためでは決してない。

ただ興味があるだけだ。

世界にウィルスを撒いて、人類が新たな力を手に入れた場合、どう人間がその現実に対処し進化していくのか。

未知なる世界への興味。

「やってみたかった」のだ。単純に。

これは世界を使った壮大で凄惨な実験だ。

他意は無い。だからこそエリカの狂気は理解されえないのだ。決して。

「・・・・」

エリカの目が、ファオとイクスの合体技に向けられる。

焔をサイコキネシスで閉じ込めた、簡易的な爆弾だ。

ボール状の炎は急激に膨れ上がり始める。

大爆発が起こったのと、エリカの背中の羽根が彼女を包み込んだのとは同時だった。

「下らない」

ロケット弾による攻撃が届かないのに、今さらこの程度の爆風でダメージを受けるとでも思っているのか。

エリカの瞳孔が縦に割れ始める。

「成程ね。私の視界を奪って、研究所に逃げ込むつもりかしら・・・。甘いわね」

私には全てを見通す眼があるというのに。

パルキアの空間把握能力を使えば、彼らがどこに行こうとしているかが分かる。

「アンニピテント・アイ」

一定空間内に存在する人間やポケモンの視界を盗み見る能力だ。

今、集団で軍が動いてるため、彼らがどこに向かっているのかを知ることができる。

軍は既に研究所内に侵入している・・・私からそう離れているわけではなさそうね。

いや・・・研究所の奥に、向かっている・・。

これは・・・

「なるほどね。少しは頭の回る仲間がいるようね。・・・・幽閉されている神を味方にして抵抗する・・・なかなかいいアイデアだわ」

U－9にもう一方の侵入者は任せておけばいいとして、アルセウス達に接触されると少し厄介ね。

エリカはちらりと腕時計を見る。

「もう少しこの力になれておく必要があるわ・・・完全に私のものになるには時間が必要だし、ちょうどいいわ」

ポケットから神の力の浸食を抑える錠剤を取り出し、飲み込むと静かにジュン達を追いかけ始めたのだった。

第九十六話　残酷な神と邪な人間

「ここがエリカの研究所か」

白い外壁は既にあちこちに穴が開いており、激しい戦闘の後が伺える。

「どうやら予想以上の激戦となってるっすね」

パラシュートを茂みに押し込むと、リーフとアルは真剣な面持ちで歩き出す。

この様子じゃ研究資料も失われているかもしれないっすねぇ

崩れ落ちた壁の間を器用に入り、内部へ侵入するアル。

リーフも後に続く。

研究所の廊下には薬品の匂いが充満していた。

歩くたびに砕け散った窓や試験管のガラス片がジャリジャリと音を立てる。

だがそうした耳障りな音さえ、彼らの注意を逸らしはしない。

鼻を突く刺激臭も気になりはしない。

二人の目は既に研究室内に釘付けとなっていたからだ。

檻の中にポケモンが閉じ込められている。

それもかなりの数が。

「実験用のポケモンっすね。いや、実験済みと言ったほうがいいっすか」

アル達が近づくと檻の中のラッタが目を剥いて鉄格子を掴みガタガタと揺らす。

それに釣られるように、部屋の中の檻のポケモン達が一斉に騒ぎ出す。

助けてやりたいが、リーフにはそれが出来ないし、解き放ってはならない事を悟っていた。

人間として、動物としてこの部屋のポケモン達が既に正気を失っている事が痛いほど分かっていたからだ。

思わず一歩後ろに下がってしまうリーフ。

「狂ってる・・・・」

「実験台のなれの果てっす」

表情を変えないアル。とその時、鉄格子の外れる音と共にコラッタが外に飛び出す。

狂気の様相で、こちらに近づいてい来るのだ。

「だ・・脱走しやがった。・・・メタグロス、出て来い」

リーフがモンスターボールを投げると、鉄足ポケモンメタグロスが現れる。

「思念の頭突き！」

指示と共に、メタグロスがコラッタに突撃する。

コラッタは壁に激突し、ずりずりと床に沈む。

だが驚いたことに、コラッタの体の傷は目に見えて回復していくのだ。

「これが噂に聞く超再生能力っすか」

「まったく厄介な時に・・・メタグロス、コメットパンチ！」

今度はコメットパンチがもろにヒットする。

が、先程と同じようにゆらゆらと立ち上がると牙を剥く。

「なんつー耐久力だよ」

どうする・・時間がねぇのに。

「このまま放置すると危険っすね」

カチャ

リーフの横で、アルは静かに拳銃を取り出すとその銃口をコラッタに向ける。

「おい、何を・・・」

パン

一発の銃声が室内に響いた。

コラッタは牙を剥いたまま、その場に崩れ落ちる。

と同時に薬莢が地面にカランと音を立てて落ちるのが分かった。

「アル・・お前・・・なんで・・・」

震える声でリーフはアルに問い尋ねる。

動かなくなったコラッタの死体に目を向ける勇気は無かった。

「任務の障害になるから排除したまでっす」

「何も殺すことはないだろ!?」

「じゃあ聞くっすけどこの哀れなコラッタを君は救えるんすか?」

「それは・・・」

リーフは顔を伏せ、目を泳がす。

そうだ。分かっていたはずだ。

実験台となったポケモン達の精神と肉体は既に破壊しつくされている。

狂気から救い出すことなど出来はなしない、いやむしろ正気に戻してやるほうがより残酷な行為だと。

もう彼らを解放するには手は一つしかない。

殺すことだ。

分かっていたはずだ・・・ジュンの報告を聞いた時から。

だが、実際に生で見ると・・・その衝撃は計り知れないものだった。

「馬鹿っ・・・誰が・・こんな事を・・・」

その場に崩れ落ちるリーフ。

そんな彼の様子をアルは静かに見守っている。

暫らく肩をすぼめ、何かに怯えるように震えていたリーフだが、少しすると静かに立ち上がった。

「行けるっすか？」

リーフは顔を伏せたまま、弱弱しく頷いた。

「ああ。行こう・・ジュンが待っている」

＊＊＊＊

ジュン達は一方、研究所へと戻っていた。

「成功したな」

「いやぁまさかサーシャとのタッグ技が役に立つとはなぁ」

「私もまさかフレイムと組むことになるとは思わなかったわ」

どうやらファオさんとイクスさんは昔からの知り合いらしい。

そして話から察するに、ファオさんは本名は「フレイム・スカイフォード」のはずだから、サーナイトのイクスさんの本名は「サーシャ」ということになる。

僕は先頭を地図を広げながら歩く。

「この方向で合っているのだな？」

「勿論ですよ」

ブラウン少将が疑わしげな視線を僕に向ける。

まだ僕が何かを隠していると思っているようだ。ま、仕方ないね。

「このエレベーターを使えば地下3階まで一気に降りられますが、些か危険でしょうね」

「そうだな。だが階段を使う時間も惜しい。リスクのある方法では

あるが、エレベーターを使おう。今は普通の戦場とは状況が異なる」

ユウタ達と共にエレベーターに乗り込むジュン。

エリカは僕達の目的に気がついているのか・・・それとも僕達が単に逃げ回っているだけだと思っているのか・・・。

どちらにせよ、時間が圧倒的に足りない。

もう既に彼女も動き出しているのだから。

エレベーターの階表示が点滅を繰り返す。

とそこで気がついたのだが、僕の真後ろに立っているファオさんが少し震えている。

「どうしました?」

小声で尋ねると、何時に無く緊張した面持ちでファオが口を開く。

「いや・・・ポケモンだとこういう時直に感じるんだよな。これが・・神のオーラか」

ファオだけでは無い。

イクスやブラウン少将も何かを感じているようで黙りこくっている。

軽い電子音と共にエレベーターの扉が開く。

そこには、驚くべき光景が広がっていた。

アルセウスとパルキアが囚われていたのだ。

レーザーネットの檻に幽閉され、拘束具を取り付けられている。

「お前達は・・」

アルセウスが目だけを動かして、僕達を確認する。

「なんだ・・ここの研究者どもじゃなさそうだな」

パルキアの荒々しい口調は、この神々がいかに疲弊しているかを感じさせるのには十分だった。

成る程ね。予想はしていたけど、流石に凄いオーラだ。

「我々は貴方達を助けに来たのだ。パルキア、そしてアルセウスよ」

ブラウン少将の一言に、先ず反応したのはパルキアだった。

首をひねり、僕達を見下ろす。

「俺様達を・・・助けに来たのか?」

「人に助けられるとは不本意だが・・」

アルセウス達の態度には些か腹が立つが、今はそのような事を言っている暇は無い。

神を此方の戦力に付けなければ勝ち目など到底無いからだ。

僕は檻を管理しているコンピューターの前に座ると操作を始める。

「先ずはレーザーネットを解除しなきゃね」

キーボードに指を走らせていく。

成る程。レーザーネットに能力を封じる特殊な拘束具を使って幽閉していたのか。

さっさと殺さなかった所を見ると、どうやらエリカは神をこの世から消してしまうと世界のバランスが崩れることも計算済みだったみたいだね。

世界の秩序が崩れてしまっては彼女の人類に対する壮大な実験も水泡に帰してしまう。

ここで神を生殺し状態にしておけば、一応はバランスは保たれるからね。

さてとここを後弄ってやればレーザーネットを解除できるな。

「あれれ～君達なんでこんな所にいるの？」

子供っぽい声がした。

振り返るとそこには黒髪に紅いエクステをしている少年が満面の笑みを浮かべながらこちらに歩いて来る。

「ギラティナ・・・貴様どの面を下げて戻ってきた！？」

アルセウスの突然の怒気に、ファオさんが飛び上がるのが分かる。
が、そんな怒りを当てられても動じる気配を微塵も見せず少年はクスクスと笑った。
「怖いね～まったくそんな弱体化してるのにエラソーな態度だけは変えないんだね」
この子は、そうか反転世界の神のギラティナが人間に変身しているのか。
なるほど。
「でもここまで玩具が侵入してくるなんて予想外だったよ。パル君達の封印を解こうとしているなんてね～」
「ギラティナ。何故君はエリカについているの？」
素直な疑問をぶつけて見ると、しげしげとギラティナは僕を凝視する。
「面白いことを聞くね。君は」
「当てて見せようか。エリカと契約でもしたんだろう？アルセウス、パルキア、ディアルガの力を分けてもらう代わりに、エリカの計画に参加した。違う？」
「ふふっ。なかなか鋭いね。でも残念。それだけじゃないよ。ボクの遊びの分も契約のうちだよ」

「ギラティナ・・・まさか海軍の基地を滅ぼしたのも遊びだとでも言うつもりか!?」

「ん～遊び以外に何か理由がある?玩具で遊んで何が悪いの?」

「貴様・・」

怒りの臨界点に達しそうなブラウン少将にジュンはアイコンタクトを取る。

今はギラティナと交渉中です。抑えてください。

言いたいことは伝わったのだろう。ブラウン少将は舌打ちをして、一歩後ろに下がった。

「で、ここに来たってことはエリカに言われたんだね」

「うん。君達で遊んで良いってね」

エリカがギラティナを差し向けてきたか。

もう少しすればエリカも到着する。

そうなればまずいな。

「ギラティナ。神の力を手にして、何がしたいのさ?」

「・・・ボクは3つの神の力を束ねて絶対の王となるんだ。反転世界で、この現実世界の尻拭いのための神様であり続けるなんて真っ平ゴメンだからね」

「ふうん。成る程ね。でもさ、ギラティナ。それって詰まらなくないかな？」

その言葉にギラティナの肩眉がピクリと上がる。

「何が言いたいの？」

「エリカの計画に乗じて神の力を奪取しようとしているわけだよね。でも、それって他人の計画のお零れに預かってるだけってことだよ。それでいいの？」

ギラティナは顔を伏せ、クスクスと笑い出した。

「面白いね～君。まさか玩具にそこまで言われるなんてね・・・まったく可愛げの無い玩具だ」

黒いエネルギー弾がその時、ジュンに向かって放たれた。

「マリス」

『分かっている』

予想の範囲内だ。こういう行動に出てくるのはね。

漆黒のオーラがジュンを包み、エネルギー弾から守る。

「へぇ。ボクのシャドーボールを防ぐなんて、君ただの人間じゃないね」

「君のようなタイプは不意打ちもしてくることぐらい予想済みだよ。ギラティナ。君はエリカの駒に過ぎない。君は人間というものを甘く見すぎている」

するとギラティナは理解できないといったふうに首を横に振った。

「甘く見てなんかいないよ。玩具がボクを駒にする?逆だ。ボクがエリカを利用してやってるんだよ。今はエリカが面白いことしてるから観察してるだけさ」

「ギラティナ。君は3つの神の力を最終的にエリカを殺して手に入れる腹積もりだね」

問うとクスクス笑いをするギラティナ。

その笑いは子供じみていて、より残虐で邪悪なオーラが漂っていた。

まあ僕と気が合いそうな奴ではあるけどね。

「君は頭が冴えるね～。その通りだよ。エリカの計画が成功したらさっさと殺して、神の力を手に入れるつもりさ。ま、その前に生意気な玩具たちを潰しておこうかな。大地の力!」

今度は地面タイプの大技、『大地の力』だ。

「守る!」

ファオさんが僕の前に出て防御技『守る』を発動した。

うん。発動タイミングといい技のキレといい流石は軍で鍛えている

だけはあるね。

良い感じだ。

「今輝いてますよ、ファオさん」

お世辞交じりで言うと、ファオさんは満面の笑みで「だろ～」と手を回してくる。

暑苦しい。

「俺に惚れたか？うん？」

「惚れません。それよりさっさと攻撃に転じてください。火炎放射！」

僕の指示にいつの間にか従い、ファオさんが火炎放射を放つ。

何故彼が手持ちポケモンのように指示を聞いているのかは謎だ。

「効かないよ～シャドーダイブ～」

影に溶け込むように、ギラティナの姿が消える。

「反転世界を通過点として、奇襲を仕掛ける技だ。気をつけろ」

ブラウン少将が後ろから声をかけてくる。

どうやら少将はアルセウス達開放するためにコンピューターと格闘中のようだ。

「アイツ何処行きやがったんだ？」

「気を抜くなよ」

銃を構えユウタ達が周囲を見回す。

「壊れちゃえ」

下から声がした。

影が盛り上がり、ギラティナの巨体が反転世界より強襲をかけてきたのだ。

「くそ、守る！」

咄嗟に『守る』を発動するファオだが、彼は忘れているようだ。

シャドーダイブには一切の防御技が無効であるということを。

ガラスが砕け散るような音と共にギラティナの翼の棘がファオに直撃した。

『守る』の発動に油断していたのか、ファオさんは避けれず『シャドーダイブ』の直撃を受けてしまった。

「うげっ」

なんか悲痛な叫びと共にその場にアルマジロのように丸まるファオさん。

どうしたんだろ。

外傷は無い見ただけど、随分痛がってる。

「大丈夫ですか、ファオさん」

ユウタ達が銃で応戦する中、僕は背中を痙攣させている彼に近づく。

「翼が・・」

「翼が？」

「俺の・・・急所を・・下から翼が・・・・つ・・潰れちゃったかも・・」

「ああ。なんだそんなことですか」

理解した。

でもなぜか同情できない。どうしてだろうね。

「腰・・・叩いて・・・と・・トントンって・・・お願い・・」

「お断りします」

そう言うと後ろから情けない声で懇願するファオさんを無視して、僕は前を向く。

さてとファオさんのが潰れようがどうでもいいんだけど、問題は彼

だ。

ギラティナ。

エリカに加えて最も要注意な存在。

だけど今の疲弊した戦力でエリカとギラティナが揃ってしまったら勝てる見込みはゼロだ。

さてどうするか。

とりあえず・・

「ファオさん。いい加減立ち直って下さい。何のために毎日鍛えてるんですか？」

「うう・・下は鍛えられねぇんだよぉ・・・」

僕は彼の肩を掴むと引っ張り上げる。

「ギラティナがいるのに戦力が一人でも欠けるとまずいんですよ。さっさと立ってください。手を下腹部から離して。痛い？我慢してください。それで・・そう銃を構えて。ほら」

ファオは目に涙を溜めて銃を構える。

まだ大分痛むようで足がガクガクと震えているのが分かる。

「面白いショーだね」

冷笑を浮かべるギラティナ。

勝利を確信しているようで、邪悪な笑みを浮かべている。

「さてとギラティナ。エリカに君は興味を持っていて、彼女がどこまで行くのか見たい。それで計画に協力しているんだね」

「まあね。だって毎日毎日平和でなにも無かったらつまらないだろ。やっぱり世界は動いていないとね」

成程。

「じゃあ僕と協力しない？」

僕の提案に、ギラティナのクスクス笑いが消える。

真顔だ。かなり驚いているようだ・・・。

「なんでそういうことになるの？」

「エリカが持っている神の力を君は束ねたい。そうだね。でも考えてみなよ。神を幽閉したエリカが易々と力を君と共有すると思う？彼女は、恐らく君と同じことを考えているよ」

「だからどうしたの？ボクが玩具ごときに嵌められるとでも言いたげだね」

ギラティナの影が禍々しいオーラを放ち始める。

だが、答えは見えている。

何故か。

分かるからだ。僕にはギラティナの考えが、手に取るように。

「僕と協力すれば心躍る楽しい世界を見せることを約束するよ」

その言葉に、ギラティナの目が光る。

興味を抱いているようだ。

「ギラティナ。エリカを君が裏切れば、面白い結末が見れるよ。それに僕と共に来てくれれば、君に悪意と欲望に満ちた闇を見せてあげられる。僕に協力してくれるだけでいいんだ。飽きたら、殺せばいい」

ギラティナは少し考えを巡らせているようで、空中に目を向ける。

誰もが黙っていた。緊張が場を包む。

だが一人、ジュンだけは違った。

移り気な神は既にジュンと共にある、と言うことを直感していたのだから。

第九十七話　神の思い

「ゼクロム・・」

レシラムは激昂していた。

私達は元々一つの存在、一つの魂、一つの肉体であったはずだ。

何故、私の理想を理解しようとしないのだ。

お前は「理想」を司る存在・・・「真実」を司る私とは対極であり同質の兄弟。

なのに、何故・・。

レシラムは青の眼を少し動かし、背後の研究所の惨状を知った。

既に戦闘が始まっているようで、あちこちが炎上し煙が立ち込めている。

「私の理想を・・夢を・・何故お前は否定するのだ！ゼクロム！」

「お前のやろうとしていることはアルセウス達と何ら変わらなねぇ。アルセウスを止めたように俺はお前を止める！」

レシラムの表情が一層険しくなる。

戦いたくはない。ゼクロムと一戦を交える事を自らの体を傷つけ、自らの魂を否定する行為に等しいからだ。

だがレシラムの心に迷いはなかった。

既に二つの存在へと分化して等しい。元々一つだったからこそ、互いに反発しあう。

今のレシラムの心はエリカにあった。

彼女の思想はレシラムの思想。彼女の夢は同時にレシラムのものでもあるのだ。

エリカが本当に世界を変えたがっているのか、それともこの世界を舞台に壮大な実験をしようとしているのか・・そんな事はレシラムにはどうでもよかった。

そうだ。レシラムこそ、この世界に・・傲慢な神々に復讐したかったのだ。

レシラムは孤独だった。

炎と大気を操る、神話に登場し、「真実」を司る偉大な神。

しかしどんなにイッシュ地方の人々から祭られ、強大な力を賞賛されても、レシラムの心は何時も虚無感に包まれていた。

レシラムもまた、神である以前にポケモンだった。

孤独感は歴史を見つめ続ける神である存在が、抱いてはいけない感情だった。

そして抱かざるを得ない感情でもあったのだ。

そんなレシラムだったが、ある日ある家族と偶然にも出会った。

ホワイト家。

別地方から家族でイッシュにやってきて、イッシュの民なら絶対に足を踏み入れない「聖域」に知らず知らずに入り込んでいたのだった。

聖域の中で鬱々としてたレシラムが迷い人達を見つけ、興味を持って接触を試みるまでそう時間がかかるわけが無い。

迷い人達は快活だった。

レシラムをイッシュの守護神とは知らずに親しく会話をし、持ち合わせの食料で宴会を開いたのだ。

心の隅まで冷え切っていたレシラムにとってこれは最高の贈り物だった。

余所から来た迷い人は、無知故に聖域に踏み入り、知らずに神と対等に付き合った。

彼らは意識していなかっただろうが、その軽率とも取れる行為が“神”を心の死から救い出し、希望と生きる糧を与えたのだ。

そしてその時レシラムはある決心をした。

「自分を救ったこの一家を、子孫代々守り抜いて行く」と。

だからこそ、レシラムはエリカに危害を加える者を決して許しはしない。

彼女の夢はレシラムにとって生きる最後の希望なのだから。

「ゼクロム・・愚か者め。クロスフレイム！」

レシラムは真紅の炎球をゼクロムに放つ。

「クロスサンダー！」

一方のゼクロムは全身に電気を纏い、青く輝く一つの光となって「クロスフレイム」に突っ込んだ。

そして、クロスフレイムを突っ切ってそのままレシラムに突進してくる。

回避する暇など無く、元よりそんな気などさらさら無い。

ゼクロムの戦い方も戦術も性格も全て知っている。だから手の内を探る必要も無く、恐れなど抱くはずも無いのだ。

「お前は何時もそうだ。力任せに物事を解決しようとする！」

ゼクロムの巨体を何と正面から受け止めた。

筋肉が盛り上がり、あちこちで放電現象が起こっている。

睨むゼクロムにレシラムは顔を近づけ、言い放つ。

「お前は私の理想を否定し、夢を打ち砕こうとしているのだ！一つ尋ねよう！お前は憎くないのか！？アルセウス達が！あの傲慢な神々が！」

「憎いさ！でもな・・復讐は復讐を呼ぶだけだ！お前も分かってるんだろ！エリカの思想が狂人の妄言だって事を！」

レシラムが一瞬怯む。

出来た隙を見逃すぜクロムでは無い。両手でレシラムの首を掴み、締め上げていく。

「お前分かってるのか！？どんだけのポケモン達や人間達が実験台にされてきたのか・・分かってるのかよ！償えない罪なんだぞ！？」

「償えるさ！私のこの力で！時の咆哮！」

驚愕と優位に立っていた事に対する油断でゼクロムは反応できず、直撃を受けてしまった。

「な・・お前・・その力・・」

「そうだ。時を操る力だ。・・エリカの計画が遂行された暁には、ディアルガの力で私は犠牲者達の時間を巻き戻すつもりだ。【時渡り】を行わない小規模な時間操作なら、私も出来るからな」

何かを言おうとしたぜクロムに対し、レシラムは言葉を続ける。

「現に私は時間操作である人間の命を救った。ロンバートという男

は本来の与えられた寿命より短く生命を終えようとしていたのだ。
だが、私が時間を巻き戻し彼を救ったのだ。・・・まあ、エリカはそんなロンバートを休眠状態にして、レオンを利用するための餌としていたがな」

「馬鹿な・・命を操るだって・・そんな・・」

「無論。この時間の操作は無制限ではない。時間を巻き戻せるのは、その時点で本来の寿命に達してなかった者達だけだ。それが病気であれ事故であれ、偶然であれ故意であれ、時間を巻き戻す事でその命を救う事が可能だ。ただし時間操作は一つの命に対し、一回しか行えないという制約があるが」

ここで明かされた一つの事実。

その命が寿命に達しておらず、一回だけであれば、時間を巻き戻す事が可能である、という事だ。

だが、この「1回だけ」という制約はゼンマイに似ているとレシラムは考える。

何度も巻くと切れてしまうゼンマイのように、時間の巻き直しは1度だけだ。

時の神であるディアルガから前もって聞き出していたから確実だ。

機会は1度だけ。だからこそレシラムは心を氷にして、エリカの非道な実験を静かに見守っていた。

後で哀れな犠牲者たちを纏めて救済するから、とずっと見てみぬ振

りをしてきた。

エリカが償わないし償うつもりも毛頭無い罪を、レシラムが代わりに償おうとしているということだ。

最もエリカにとっては罪の意識など無い。

必要だから実験を行った。

それだけのことだ。そして“それだけのこと”がレシラムにとってはこれ以上無い苦痛でもあったのだが。

「・・成る程な。エリカの凶行に対する対策はしていたというわけか。だが、お前があいつの狂気に賛同している以上、ここを通すわけには行かない！」

ゼクロムは拳に雷撃を溜め、一気にレシラムに放つ。

レシラムもまた、燃え盛る業火を放つ。

ぶつかり合う思いと悲哀そして技。

そして二つの神は今、互いの技に傷つき上空から力なく落ちてゆくのだった。

＊＊＊＊

場所はこの海上研究所の中でも秘匿されていた場所。

地下の実験施設。

周囲が固唾を呑んで見守る中ギラティナがジュンに近づいてくる。
怪しげな笑みを浮かべながら、距離を縮める。
「・・・飽きたら殺してもいいね？」
ギラティナを引き込むことに成功。
僕の計算通りだ。いや、成功してくれなければ困る。
そして、僕の考えでは、そろそろ彼女が来る。
「あら。ギラティナ。もう本性を現したのかしら」
ジュンの予想通りのタイミングで、エレベーターからご丁寧に登場したのは誰あろうエリカだ。
銃口を気にも留めず悠然と此方に近づいてくる姿はある種感慨深い。
既に彼女のランクが数段上がっている証拠だ。
エリカの神化が進んでいるようだった。
瞳孔は獣の如く縦に割れている事も異様だが、それ以上にオーラが神々しく、そして何より狂気の様相を呈していた。
既に半分人間じゃなくなっている。
そう直感したジュンは薄笑いを浮かべ、チラッとエリカを見る。

元々「見た目は子供、頭脳は化け物」だけどね。

いやはやびっくりだ。ここまでイッってる同年代と合ったのは初めてだよ。

ジュンは腕を組んでエリカとギラティナを見守る。

「なあジュン君、ギラティナって俺達の仲間になったんだよな？」

極度の緊迫感の中、ファオがジュンに近づき耳打ちする。

「今のところは、そうでしょうね」

「なら一気に仕掛けられないか？」

「エリカの力が未知数ですからね。先ずはギラティナをけし掛けて僕達との戦力差を測るべきでしょう」

エリカとギラティナが睨みあっている。

両者とも既にジュン達には興味が無いのだろう。

既に神の力を手に入れているエリカにとって軍の銃器など微塵も脅威で無い今、懸案事項はギラティナのみと言うわけだ。

そろそろかな。

リーフ達が到着するのは。

「あれれ～まるでボクが裏切るのを知っていたかのような口ぶりだ

ね？」

ギラティナは無邪気を装った笑みを浮かべるが、その表情は邪悪そのものだ。

「裏切られる事も当然想定されるべきシナリオの一つよ。・・・亜空切断」

「シャドーダイブ♪」

亜空切断に、シャドーダイブを用い緊急回避に成功するギラティナ。

そしてそのまま、その巨体がエリカの真上に現れる。

「潰れちゃえ～」

「・・甘い。亜空断絶」

だが、エリカは片腕を上げると周囲の空間が歪み、ギラティナの右足が見えない障壁に阻まれてしまう。

「時の咆哮」

そしてそのまま左手からディアルガの大技「時の咆哮」を放つ。

「シャドースプラッシュ～」

甘ったるい声と共に闇が飛び散り、エリカの白衣を汚染する。

まるで汚れがついてしまったとでも言いたげな表情のエリカに、ギ

ラティナは邪な笑みを浮かべる。

と同時に闇がエリカを一気に飲み込んでしまった。

「やったかな？」

「流石に反転世界の神の力。少し効いたわよ」

その瞬間、エリカに纏わりついていた闇が剥がれ落ちていく。

闇は地面に紙くずのように落ちると、そのまま粒子となって消滅していく。

ギラティナにとって今の技が防がれたのが以外であり、同時に不服でもあったようで声が少し曇る。

「へぇ～どうやって今の技を防いだのかな？・・・まあいいや。ボクはいろんな技を持ってるからね。例えば――」

だが、ギラティナの言葉は地下研究所の天井を突き破り、雪崩れ込んできた2体のポケモンの乱入によって阻まれる事となった。

そう、先程空で争っていたレシラムとゼクロム。

地上に落下し何と地下まで到達してしまったのだから、如何にお互い放ちあった技が協力であったかを伺うことは容易だろう。

この2体の登場にジュンは心躍る興奮を覚えると、同時にある考えが頭を過ぎった。

これは・・もしかしたらエリカの絶対的優位を崩せるきっかけになるかもね。

分散された戦力を一つに纏めた時、その力は何倍にも高まる。

1＋1は無限の可能性がある。それをジュンは知っていた。

戦いの行方は偶然に支配される事となった。

レシラム達が起こした偶然、ギラティナの心変わりという偶然。

いや元を辿ればジュンがエリカの計画を、その存在を察知したのも純然たる偶然だった。

運命、といった方が適切かも知れない。

ふふ・・面白いじゃないか。これでこそこのゲームに参加する意味があるってものさ。

エリカの鉄壁の計画もまた、偶然によって左右されえるという事だ

――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0069h/

ポケモンハンタージュンの冒険

2011年11月26日01時53分発行